
魔法少女リリカルなのは ~とある封魔の歯車破壊~

ごまだれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～とある封魔の歯車破壊～

【Nコード】

N7092M

【作者名】

ごまだれ

【あらすじ】

頭に響く不思議な声を聞き、その声を頼りに走ると一匹の動物と出会った。

その日から、彼らは魔法の世界へと巻き込まれることになる……。オリ主による、リリカルなのは再編ものです。オリ主、二次創作嫌いな方は、おやめ下さい。時々作者が暴走して、訳が分からない話があります。ご了承ください。

現在一期、後日談、二期が終了。A・Sに突入しました。

駄文ですが、この作品を呼んでいる時間が、貴方にとって苦痛ではない事を願って。

コラボ随時募集中です。

第一話 ～紙一重の日常と非日常～（前書き）

オリ主による、リリカルなのは再編ものです。よろしければどうぞ。

第一話 く紙一重の日常と非日常く

昔からずっと、俺が触って、機能してくれた機械は無い。

テレビ然り、電話然り、自動車然り。例外なんて物は無い。ついた二つ名は『ビーストレイカー歯車破壊』。命名すずか。呼ばれた事無いけどね。

まあでも。そんな事関係無かったりする現状。誰か助けて、と叫ばないのはなけなしのプライドとかではなく、妙に冷静な頭の部分が、現状で助けを求めるより逃げた方が良しとしたからだ。

俺達、高坂浩樹と高町なのはが走ってきた道を粉碎しながら、飛び跳ねて追ってくる謎の黒い影から、なのはと共に。

「あ、浩樹君。おはよ〜」

「おはよう、なのは。今日もお前のツインテールは元気な」

「なんでツインテール!？」

ピョンと跳ねるツインテール頭をなでてから、バス停に向かった。

「なあなのは。何で学校があるんだろうな」

バス停でバスを待ちながらぼやいてみる。それに対し、なのはに「
にやはは」と苦笑された。

嫌がらせとして、ツインテールを上向きになるように持ちあげてみる。手をバタバタされて、抵抗された。

「とりあえず、素手でバスに触り続けてみようかなと思う」
「駄目だよ!？」

せつかく手袋外したのに。このまま仕舞うのも勿体無いし、この際、もう少し弄る事にしよう。

「じゃあ、なのはの携帯」

「それも駄目だよ!」

「なんだ我儘だな」

「私が!？」

ああ、楽しいなあなんて思っているうちに、バスが到着。手袋をし直して、バスに乗り込む。最後尾に座るアリサ・バニングスと月村すずかに片手をあげて挨拶しつつ、すずかの隣に座る。流石に真ん中に座る度胸は無い。なのはの席だしね。

「あなたたち、何話してたのよ」

「俺が素手でなのはの携帯に触るかバスに触るかの話」

「バスにしなさい」

「どっちも触っちゃ駄目だよ!」

実際俺もアリサも当たり前だが本気じゃない。ただ純粹になのはの反応がいちいち面白いから茶化しているだけだ。その証拠にすずかも「あんまりなのはちゃんの事虐めちゃ駄目だよ」と軽くたしなめるだけで、それ以上の事は言わない。

バスの中は終始、なのはを弄って終わった。うん。これをしないと一日が始まる気がしないね。

睡魔と闘いながら黙々と続けた午前中の授業も終わり、昼休み。今朝の登校メンバーと一緒に、今回の話題は授業で言っていた将来の事。

将来の事か。考えた事もない。

なのはとアリサ、すずかはベンチ。俺は直接地面に座って、みんなの会話を聞いていた。

方や後継ぎ。方や工学系。二人ともすごいよね、というなのはの言葉は俺の気持ちでもある。

「あんたは喫茶翠屋の二代目でしょ？」

アリサの言葉は最もだ。俺もそう思うし、なのはの事を知ってれば誰でもそう思うと思う。

「うん。それも、将来のビジョンの一つだけ……」

後に続くなのはの独白。確かに気持ちは分かるけど、それを言ったらアリサが怒るってわからないのかなあ。

レモンがなのはの顔に飛んでいき、当たる。アリサが立ちあがって、なのはを見た。

「この、ばかちん！自分でそういう事、言うんじゃないの！」

おお怖。少しだけ体をずらしてアリサから離れ、アリサはなのはに掴みかかった。口を脇に伸ばしながら、色々言ってる。すずかも立ちあがって困った様子で、周囲に人が集まってきた。なんら気にせず、俺は食事をつづけてたけど、視線を感じて顔をあげると、すずかと目があつた。

アイコンタクトは一瞬。仕事は俺がやることになった。

「アリサ〜。そろそろやめようか〜」

「あんたうるさい!」

「でも、人だから出来てるし。昼休み終わるぞ?」

「ぐっ」

大人しくアリサが離れ、なのはとすずか、ついでに俺も元の場所に座った。まだ、若干不完全燃焼らしいアリサの攻撃の矛先は俺に向いた。

「浩樹は何かないの?」

「何も無いの。手袋着けて出来るか、機械類に触らなくていい仕事がいいな」

「あんたの場合、それしか出来ないけどね。ていうか、なんであんな、わざわざそこに座ってるのよ」

「ここからの眺めがいいからあ!?!」

言い終わると同時にアリサに襲いかかられ、首にアリサの腕が回る。あんないきなりだったのに完璧に首に入ってる。パンパンと腕を叩くけど外してくれない。

「あ・ん・た・は〜!!何見てるのよー!!」

「何っ、もっ、見てっ、ないですっ」

「あ、アリサちゃん、首、首!」

「……」

「浩樹君の顔が真っ青になってるから!アリサちゃん、早く離れて!」

冗談でも下手な事は言ってもんじゃない。今日俺は、少し大人になり

ました。

「今日のすずか。ドッジボール凄かったよね〜」

「うん、かつこよかったよね〜」

「そ、そんなこと無いよ」

「今日も勝てんかった……」

それなりに鍛えているんだが、どうしてもすずかに勝てない。ドッジボール、マラソン、スポーツですずかに勝てたら、多分英雄になれる。

「英雄ぼさ Be quiet!!」 「すみません!!」

「浩樹君に言ったんじゃないよ、アリサちゃん」

「え？ そうなの？」

そんなやりとりをしているうちに、曲がり角に辿り着いた。アリサ曰く、塾への近道らしいけど、道悪いな、本当に。

とりあえずその道を進むことになったけど、何やらなのは様子がおかしかった。

不安そうな顔。どうかしたのか、と話しかける前にいきなり立ち止まられ、つられて立ち止まる。

しかも、それに気づいていないのが、立ち止まったままだ。

「どうかしたのか？」

顔を覗き込んで初めて気がついたらしく、「あ」と反応した後、なんでもない、誤魔化された。

「大丈夫？」

「うん」

「じゃあ、行こう」

歩き出す二人の後ろで、まだ何かを考えていたのか、すぐに歩きださずに「まさかね」と呟いた。すずかに呼ばれ、慌てて移動するのはの背中を眺めてから、俺も後を追った。

しばらく歩く。今度はいきなり止まったりもしないで、普通に談笑しながら歩くアリサとすずかの後ろについて歩いていく。

『助けて』

「!？」

俺となのはだけが同時に立ち止まった。立ち止まった事に気付いたアリサとすずかが俺たちの方を振り返る。

「なのは？」

「今、なにか聞こえなかった？」

「何か？」

「なんか、声みたいなの」

「別に」

「聞こえなかったかな……。浩樹君は？」

「聞こえた。どこからまでは分からなかったけど」

何かを探すようにあちこちを見まわすのは同様、俺も見まわす。すずかとアリサが聞こえなかったというのは気になるけど、なにか聞こえたのは事実だ。

『助けて』

なのはと一緒に、同じ方向に向けて走り出す。「なのは！？浩樹！？」戸惑うアリサとすずかは申し訳ないけど置き去りにして、走る。

「確か、こつちの方だよな？」

「ああ。俺はそう聞こえた。てかなのは。もっと速く走れ」

「これでも頑張ってる方だよ」

走って走って。そして地面に蹲る何かが見えてきた。二人でそれに駆け寄り、なのはがしゃがみこむ。俺達に気がついたらしい何かの顔をあげた。これは……なんだろ？見たこと無いや。

「ちょっと、なのは。浩樹。どうしたのよ、いきなり走り出して」

「あ、見て。動物？けがしてるみたい」

「う、うん。ど、どうしよ」

「どうしよって……」

「連れてくなら獣医のところだけど。どっかに動物病院あったか？」

「まって。家に電話してみる」

疲れたようになのはの腕の中で眠った動物を見ながら思った。

結局、声の主は一体誰だったのか。どうして、俺となのはにしか聞こえなかったのか。

俺の疑問は置き去りにして、三人は動物病院に向かい始めて、俺も慌ててそのあとについて行った。

結論からいえば、フェレット(?)は無事だった。怪我はしていたけど、どちらかといえば衰弱の方がひどかったから、しばらく安静にしていれば大丈夫らしい。

塾で、誰があの子を引き受けるかという話になった。

『この子、どうしよつか？』

『うちには庭にも部屋にも犬がいるしな』

『うちにもネコがいるから』

最後に紙が回ってきて、『うちはじいちゃんがキライなんだ』とだけ書いて、全員が描いたイラストに矢印を伸ばした。ついでに鬼の絵。

最終的になのはが家族に尋ねる事になりました。

夜。いつものメニューをこなし、いざ寝ようとした時に、あの声が頭に響いた。

『聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？』

夕方頃のあの声と同じ声。それより前に一度聴いている気がしたけど、生憎思い出せない。言葉は続く。

『聞いてください。僕の声が聞こえる貴方。お願いです。僕に少しだけ、力を貸して下さい。お願い、僕のところへ！時間が、危険がもう！』

そこでいきなり言葉が途切れた。体の力が抜けて倒れそうになったが、なんとか耐えて携帯を手に取る。電話の先はなのは。コールの後、『もしもし』と聞こえた。

「もしもし。なのは？」

『うん』

「今の聞こえた？」

『浩樹君も、聞こえたんだね』

「ああ。行くんだろ？」

『うん』

「さっさと準備しろ。外で待ってる」

それだけ言つて電話を切る。何を着ていくか悩んだけど、危険がとか言つていた気がするから、動きやすい服に身を包んで、家から抜け出してなのはと合流。二人で動物病院を目指す。

「さて、着いた訳だけど……」

キーンという、先ほどの声の時と同じ音が聞こえ、思わず耳をふさぐ。直後、何かの音が聞こえた。先ほどまでの声とは一転して、獣の唸り声のようなもの。

なのはと顔を見合わせ、敷地内に入る。窓からフェレットと何か飛び出してきたのが見え、植えてあった木を粉碎。その余波でフェレットがこちらに飛んできてなのはが受け止めた。

「何々？ 一体何がどうなつてるの!？」

「落ち着けなのは。とりあえず逃げるぞ」

フェレットを抱いていない方の手を持って、なのはと一緒に走りだす。

後ろを見る余裕はないが、音がどんどんこっちに向かってきているから、多分迷わず追いかけてきているのだろう。

「……………」

クソッ、つと悪態をつかないのは、なのはに心配かけたくないから。本当に役立たずすぎる。こういう時、なのはを守るように鍛える筈なのに、逃げの一手。

何をやってたのだろうか、俺は。

「あの、助けに来てくれたんですか？」

「黙れ、挨拶しろ」

「浩樹君！？お、落ち着いてよ！！」

「落ち着いてる。フェレットが喋るうが、よく分からないものに追いかけれようが、俺は落ち着き放ってる」

じいちゃんとの組み手の時のような悪感に襲われ、慌ててなのはを引き寄せながら庇うようにして身を隠し、直後背中から何かの飛礫が大量に当たった。

痛みを無理矢理押し殺して、再びなのはの手を引いてしばらく走り、電柱に身を隠す。

「おい、フェレット。何か方法は無いのか」

「えっと。一つだけ」

そういつて、自分の首(?)にかかっていた石を示した。

「……なのは。頼む」

「ええええええ！？私なの！？」

「なんか俺が受け取ったらまずい気がするから。頼む。俺は時間稼ぎしてるから」

「訳分らないよ！？」

なのはの言葉を無視して、電柱から身をさらけ出す。手袋を外してポケットへ。

さて、がんばって時間稼ぎをしようか。

第一話 〈紙一重の日常と非日常〉（後書き）

ごま「という訳で第一話。文だけのあとがきは苦手なので、いつも通り、会話形式です。相方はもちろん、オリ主である高坂浩樹です」

浩樹「いや。まあいいですけど」

ごま「原作でいうところの無印第一話だね」

浩樹「そうだな」

ごま「所で原作にはなのはがユーノの夢を見ている場面があったけど、浩樹も見たの？」

浩樹「ん？ああ、見たよ。話題に上げるほどでもないから、上げなかったけど」

ごま「さいか。それで。もう一つ聞きたいのだけど」

浩樹「何？」

ごま「みんなが普通に使える電化製品が使えないって、どういう気分？」

浩樹「ずいぶんなこと聞くな。まあいいけどさ。そうはいつても、特に何も無かったぞ。生まれつきって自覚はしてたし、手袋着ければ問題なかったからな。まあ、あんまりいい気分ではなかったが」

ごま「そっかあ。おれは三年の頃は走高跳が一人だけできなくて、

泣きかけてたな」

浩樹「すげえ、どうでもいい」

ごま「ですよ。まあ今回はここまでです。続きは明日か明後日にも」

浩樹「ここまで呼んでいた間の時間が、貴方にとって至福であった事を願って」

ごま「そして、よければ続きを待っていただける事を願って」

ご・浩「では。また次回」

第二話 く噛み合わない思いと力く

と、思ってた時代が俺にもありましたと。

今や完全にKill you状態の前に立つ何か。体からわらわらと触手みたいな物を出して、完全に俺狙い。うん。もう時間稼ぎ云々じゃないね。どうしょよ。

あ、ちなみに何でこんな状況になったかと言えば、相手の攻撃を避ける。殴れるかなと思って拳を繰り出す。相手に触れなかった……ではなく当たって相手の体が吹き飛んだ。

「くくくえ?」「くく」

俺となのはとフェレットの声が被った。それほどいきなりの事だった。相手の体はすぐ復活して、今に至る。いやはや。まさか俺にこんな力があつたとわねく。あつはっはく。

『ヴアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!』

「すいません!?!」

反射的に謝りながら、今の状況を見事に作り上げた俺の右手をワキワキさせながら考える。原因の心当たりはあれしかない。でも、あれが生物に対して発動したことはないから、考えづらい。伸びた触手を後ろに跳んで避けて、叫ぶ。

「てか、まだかなのはー!!!フェレットー!!!」

「!?!?ご、ごめん!えっと、じゃあ、石を持って。目を瞑って心を澄まして。僕の言葉を繰り返して」

「う、うん！」

伸びて来た触手に対し、無造作に腕を振るう。当たった所から触手が消えるが、今度は本体が消えることはなかった。

再び伸びて来た別の触手を避け、横から伸びて来たのを消す。それに合わせるように真正面から伸びて来た触手を逆の手で消す。

「やっぱり、あの能力かな」

じゃあ、何とか時間稼ぎはとっている、なのはの方が強烈に光った。異形共々、思わずそちらを向いてしまう。

おお、眩しいな。「凄い魔力だ……」。おいフェレット。魔力って何？何のことなの？

そんな俺の中に渦巻くフェレットを締め上げて色々吐かせたい願望を抑えつつ、その内、光が収まってなのはが地面に降り立った。

「成K「フェレット」何？」

「締め上げるのは勘弁してやる」

「何するつもりだったの！？」

フェレットは完全に無視して制服もどきに身を包み、何やら杖のような物を持ったなのはを見る。うん、やっぱりなのははロングが一番だね。ミニを嫌いじゃないけど。おお、慌てる慌てる。危ないなあ。

異形の何かは俺への興味をすっかり失ったらしく、なのはの方を見ていたから、一気に近づいて拳で一撃入れようとし、避けられた。

「なっ！？」

上を見る。かなり上空まで飛びあがった何かが、なのはに向かって降った。

「なのは！上！」

「あっ」

向けた杖から『protection』の音声と同時に壁が生まれ、そこに何かが激突した。

均衡状態になり、思わず「おお！」と感心していると、勝ったのはなのはの壁。その壁が相手を粉碎して、その破片を辺り一面に撒き散らせるってえ？

「ぬおお！？」

屈んで避ける。なんかアスファルトとか普通に抉ってる。何あれ怖い。

「浩樹君、大丈夫！？」

「何とか……。さっさと逃げるぞ」

一緒に走り始める。逃げながらフェレットが何か説明してたみたいだけど、そんな事を聞く余裕は全然なくて。分かったのは、あれが思念体という事だけ。

十字路に入った辺りで走るのを止めた。

「で、どうすればいいの？」

なのははちゃんと聞いていたらしい。人の話だろうと動物の話だろうとちゃんと聞けなきゃ駄目だね。でも、そんなこと言ってる間に思念体が復活してこっち突っ込んできた。結構速いや。ぐずぐずし

ていたら、どうこうする前に追いつかれるな。

「という訳で、時間稼ぎっと。早くしてな」

「……」

コクリと頷くなのはに頷き返して一気に駆け寄る。「あ、あの！」とフェレットに呼び止められて、止まって振り返る。

「何？」

「え、あ、お願いします」

「ああ。分かっている。呼ばれて来たんだ。最後までやるよ」

言い終わると同時に走る。伸ばしてきた触手を避けられる物だけ避けて、当たりそうなものだけ消し、突撃。

「もう一回消えとけ！」

再び殴ると、そこから体が消える。それでも体が復活はするから、合わせて離れる。

距離を置き、睨みあうこと数瞬。「下がって！」とフェレットの叫びに反応して、急いでなのは達の所まで後退。追うように迫ってきた思念体に対処したのはなのは。

プロテクションで防いで、封印。俺は見ていただけ。なんて役立たずぶりだろうか。

「うわあ、へこむ」

聞こえないように呟いたから、聞こえる事はなかったみたいだけど。その内、色々な音が戻ってきた。そういえば、何で消えてたんだろうか？あれだけ派手に暴れたのに、人っ子一人出てこなかったし。

ま、とりあえず。

「さっさと逃げるか」

「私、ここにいたら、まずい事に……って浩樹君、置いてかないでよー！あと、ごめんなさーいー！」

なのはの叫びが町に響き、その日の夜は、もう少しだけ続いた。

翌日。昨晚の抜け出しの件がばれたせいで朝っぱらからじいちゃんに説教という名の組手を受けること一時間。老人の朝は早いというけど、朝の四時からぶっ通しはやり過ぎだと思う。

お陰で、朝から満身創痍のままなのはの家にお邪魔した。インターホンを鳴らして暫く。顔を覗かせたのはなのはだった。

「よっ」

「浩樹君？どうしたの？」

「ユーノと話がしたくてな」

昨日の晩。逃げた先は公園で、そこで俺となのは、それにユーノはお互いに自己紹介をしたが、それだけで終わってしまった。ユーノの元気がなかったこともあり、とりあえず今は帰宅しようということになってしまったからだ。

ちなみに、なのは帰宅後、出かけていたことが既にばれていて、おまけに俺も一緒だったということもばれていて。美由希さんが「どんな時でも付き合うなんて、流石ナイトだね」なんて変な事を言っただけで、恭也さんが怒って仕合をすることに。

一時間ぐらいで切りあがったんだけど、クールダウンなりなんなりで、全部終わった時にはもう二時。結局二時間しか寝てない。

背が伸びなかつたら恨んでやる、と呪詛を吐きつつなのはの部屋へ。ユーノはすでに起きていたから、なのはの椅子に座って腕に頭を乗せて目線の高さを合わせる。

「えつと。おはよう、浩樹」

「ああ、おはよう、ユーノ。さっそく何だが、昨日の事を聞きたい」「それについて何だけど、浩樹は僕の声が聞こえたんだよね？」

「ああ」

『じゃあ、今も聞こえる？』

ガタツと椅子を蹴って立ち上がってしまう。「聞こえたみたいだね」と冷静に対応されたのにはむっとしたけど、大人しく椅子に座り直す。

「この声は何なんだ？」

「念話なんだけど。考えただけで会話ができるよ。話すとき長いし、なのはと浩樹が学校に行っている間に話したいんだけど」

「……」

目をつむって話しかけるイメージを試してみる。うん、何となく分かった。

『こうか？』

「！？凄いな浩樹。デバイスの補佐無しに」

「デバイス？ああ、お前が持ってた宝石か」

「うん。そうなんだけどね」

「とりあえず、これで話が出る訳だな。色々聞かせてくれ」

ユーノの頭を撫でる。ああ、こうしてるとなんか和むなあ。野良猫

とか見たら無条件で愛でるんだけど、ユーノにはまた、猫と違った良さがあるな。

因みに犬も好きだけど猫派だ。すずかの家はパラダイスだね。

「……その、浩樹。巻き込んでごめん」

「ん？気にすんな。なのはもそう言ってただろ」

ユーノの頭を撫でつつ、少し考えてから尋ねてみる。内容は単純で俺の能力についてだ。じいちゃんに聞いたところ、俺の歯車破壊は先天性の物らしい。医者も原因不明ということできじを投げたとか。しょうがないと思うけど。

「何か知ってる？」

「うーん……心当たりが無い訳じゃないんだけど……」

「本当か？」

「今はまだ何とも。何か思い出したら話すよ」

「頼んだ」

ひらひらと手を振って部屋を出て、既に食事終えていたらしいなのはと合流して学校に向かう。バスの中で、何となく話す気になれず携帯を取り出し、ふと思つて手袋をはずして直接携帯に触れた。結果は今まで通り、画面が表示されなくなり、いくらボタンを押しても反応しない。

「浩樹君。何してるの？」

「ん？ああ、再確認」

動かなくなつた携帯をポケットに仕舞つて、再び手袋をつける。携帯は当分使えなくなるけど、暫くすれば使えるようになるから気にしない。

「ごめん。あんまり寝てないから、学校着いたら起こしてくれ」
「あ、うん。分かった」

答えてくれたなのはに片手を上げるだけで答えて、目をつむって約三秒。俺は夢の世界に旅立った。三十分後には起こされる運命だけどな。

『ジュエルシードは 』

授業中、唐突に始まったユーノによるジュエルシード、及びユーノの事と何でジュエルシードが此処に会って、ユーノがなぜあんなにポロポロになっていたのかの説明。
退屈な授業よりは十分興味深かったし、当事者として知っておきたかったから授業そっちのけで聞いていたけど、如何せん、むかついた。

『それって、ユーノ君のせいじゃ全然ないよね？』

おお、なのはの声も聞こえる。便利だな念話。

『でも、僕が『うつさい、ユーノ』え？』

『浩樹君？』

『発掘した。運送中の事故でそれがたまたま町に撒かれてしまった。それだけだ』

『でも……』

『はあ、あれだな。ユーノは』

『真面目、なんだね』

『堅物なだけって気がしないでもないけどな』

本当にむかつく。かつて父親が事故にあったせいで、自分が家族を守らねばと空回りして、結果的に家族を傷つけた男がいた。今のユーノはその人とかぶる。

勝手に奮起して行動して。誰かを傷つける事に気がつかないのだ。だからこそ、少し休ませてもらった、ジュエルシードを一人で探しに行く、何てほざけるのだ。知ってしまった俺達に、元通りの生活に戻れと。自分の事など忘れろと声に出さないが言っている。

『だって、もう知り合っちゃったもん。話も聞いちゃったもの。ほっとけないよ』

『危ないっていうなら、お前も一緒だろ。なのはの言う通り、知り合って、話を聞いた以上、ここでサヨナラはあり得ないぞ。ま、昨日みたいに町壊されても嫌だしな』

『ユーノ君、一人ぼっちで助けてくれる人いないんでしょ？一人ぼっちは淋しいよ。私にもお手伝いさせて？』

『訂正。私達だ』

『クスッ。そうだね』

授業も終わり、示し合わせた訳じゃないけど先ず俺がなのはのツイントールの片方を引っ張り、離してからアリサが逆サイド。アリサには他意は無いだろうけど、俺は以前のなのはを思い出してしまったから、もう一人じゃない、一人にさせないというアピールも兼ねてたりする。

気がつかないだろうけどね。

俺となのはとアリサとすずかの四人で帰りながら、俺は頭に響くなのはの言葉に耳を傾ける。生憎俺には、なのはみたいに色々言える言葉は無いから、聞き手に徹するしかない。

その内、さすがが別れ、アリサとも別れ、俺となのはは商店街をぶらつきながらなのはの家に帰る事にした。

「これかわいいよね！」

頭の中ではなのはとユーノの魔法の話。外ではなのはがウインドウショッピングでアクセサリーの話。魔法についてはあまり聞く事はないし、遮って俺の能力について話すのもどうかと思うから、とりあえずなのはには「可愛いと思うが、なのはには豚に真珠だな」と答えておいた。

「ひどい!?!」

「まだ早い。あと十年もすれば似合っくんじゃね？」

「その時はプレゼントしてね？」

「ああ……まだ売ってたらな」

忘れるという事だけは絶対にならない自信があったりする。だってなのはとの約束だし。

そして家に向かう途中。妙な気配に襲われて思わず立ち止まる。なのはも同様だった。

『ユーノ君。今のって!』

『どこかで新しいジュエルシードが発動したみたい。すぐ近く!』

『どうすれば?』

『向かうしかないだろう』

『うん!僕も行くから!手伝って!』

『うん!』

『ああ』

同時に走り始める。相変わらずなのはは遅いから、そのペースに合

わせて。

その内ユーノとも合流。目指す先は神社らしい。無駄に長い階段をのぼりながら、ユーノに「先行するか？」と尋ねる。

「あ、うん。お願い！もしかしたら、誰か巻き込まれてるかもしれないから！」

「ああ！」

速度を上げて、一気に突き放す。

階段を登りきった先には、四つ目で大きい四足歩行動物。うん。強そう。

動物の近くで気絶している女性の手にはリードがある。でも、飼いだの姿はない。何でだろうね？

「とりあえず、どうしよか」

突撃してきたのに対し、横に跳ねて避ける。とりあえず、殴ってみよう。

「しっ！ー！」

息を吐きながら右拳。もちろん手袋は外してある。

拳は相手に当たり、しかし昨日のように消える事無く、そのまま拳を振り切り、追撃の左。それは流石に避けられた。

『ユーノ。触ったけど消えなかったのは何で？』

『いや、僕は見てないから分からないけど。昨日との違いは？』

『なんか形がはつきりしてる、かな。犬みたい』

『じゃあ、多分。生物を取り込んだんだと思う。実体がある分、強

くなってるよ』

『了解。早めに合流してくれ』

『分かった』

多分、あそこで倒れてる女性の飼い犬だろう。うん、これを気に犬がトラウマになったりしなければいいけど。

触っても消えないのなら、やる事は対動物戦と大差ない。でも、あんまり殴って大丈夫なんだろうか？

「まあ、やらなきゃやられるしね」

此方に向かって走って来るのに対して、同じく突っ込みカウンター気味に眉間に拳。拳の痛みを無理矢理押し殺して、弾かれるように下がった犬に追撃で踵落とし。それをくらっても倒れず、前足の攻撃を下がって避けて、そのまま鳥居まで下がる。なのははそこで合流。

「大丈夫!？」

「何とか。早くしてくれると助かる」

「う、うん」

そう言っただけでもないのは。え？なんなの？新手のいじめ？日頃の憂さ晴らしとか。

「なのは！レイジングハートの起動を！」

ナイス、ユーノ。

「え？起動ってなんだっけ？」

後でじっくり話し合おうなのは。

とりあえず、向かって来ている犬に対し、合わせるように突撃。右腕は使えないから、合わせるようにして蹴るが、それは跳んで避けられ、そのまま俺に向かってくる。

慌てて後ろに避け、距離を開けてから着地に合わせて突撃。飛んでくる破片などはすべて無視して、着地態勢の犬の顎を蹴りあげ、体に左拳を浴びせて、無理矢理距離を開けさせる。

体勢を立て直される前に再び突撃。拳で一撃入れようとして、跳び越えられる。

「っ!?!?なのは!」

慌てて轉身。なのはに向かって走るが、相手のが速い。

迫って来る敵に、なのはが思わず目をつむり、なのはの握り拳が光った。

『Stand by・Ready・Set up。』

音声が流れ、昨日なのはが持っていた杖、ユーノ曰くデバイスが発動。

その間、わざわざ待っていたのか、それとも警戒していたのか分からない犬が再度突撃を敢行して、ユーノの言葉の後に光に包まれたなのはが吹き飛ばされる。犬は鳥居の上。ちゃっかりユーノも逃げていることも確認して、締め上げようかなんて考える。やらないけどね。

鳥居の傍まで来て、なのはの方を見下ろす。幸い、昨日のバリアジヤケット?を身に着けるのを間にあったらしく、怪我はない。

「凄いな……………」

「うん……………」

呆然とつぶやく俺とユーノ。非常に俺がいらぬ子な気がしてならない。
いやでもと内心で色々葛藤している俺を余所に、犬は鳥居の上から飛びかかり、それをなのはが防ぐ。
結果的に犬が負け、その隙になのはがジュエルシードを封印。空中から落ちて来た犬は俺が慌ててキャッチ。怪我也無いらしい。

「えっと……これで良かったのかな？」

「うん。これ以上ないくらいに」

「……」

言いたい。レイジングハートの起動パスワードを忘れてた事。最終的にどうにかなっただけで、過程は最悪だった事。ああ、言いたい……でもいいか。どうにかなったし。結果結果。ジュエルシードに取り込まれた犬も怪我無かったみたいだしね。
抱っこしている犬の頭など嫌がらない所を撫でながら、そんな事を思う。

「浩樹君。大丈夫？」

「ん？ああ、別段問題無いよ」

右手以外。腕全体としては問題ないけど、痺れてる感じはまだ残ってる。動かせないほどではないとはいえ、握り拳は作れない。撫でる分には問題ない。

「なのはは……大丈夫そうだな」

頑丈ですね。浩樹さんとは大違いですよ。
倒れていた人が気になり、近寄って診察。診察結果、気絶している

だけ。なら、病院とかに連絡しなくていいよね。事情は話ずに話せないし、という事でその人が起きるまで待つてから、帰る事になった。

夜。武術の型を道場で行いながら、ユーノに念話で話しかける。この時間だったら、既になのはは寝てるだろうから、聞かれる心配はない。

『で、俺の能力ってそれであってるのか？』

『うん。十中八九、この能力だと思う。浩樹が言った特徴とも一致するし』

『そうか……ある意味有能、ある意味無能だな、俺』

『確かに。今日みたいに実体があったりすると難しいね。そうじゃなければ、触れられるだけでいいんだけど……』

考える。実体がなければ、なんて甘い事は言ってられない。ユーノの力になると決めて、なのはを守ると誓った。だったら、この能力も含めて、俺は強くなる必要がある。

『この能力を操作できるようになれば、実体あっても大丈夫かな？』

『それは、うん。元々そういう能力だし』

『なら、制御の仕方を教えてくれ』

『分かった。僕も専門って訳じゃないから、詳しい事は教えられないけど、教えられることは教えるよ』

『助かるよ。でも、今日は遅いからな。お休み』

『おやすみ、浩樹』

……強くなる。誰にも負けないくらい。どうしようもない事をどう

にか出来るくらいに。

あいつも。あいつの周りの人達も。全部全部守れるくらいに。

「もう、あいつの泣き顔は見たくないから……」

型の最後を気合とともに終わらせ、俺は道場を後にした。

第二話 く噛み合わない思いと力く（後書き）

ごま「第二話。はたして浩樹は無能のまま終わるのか!？」

浩樹「終わるか! たつく。手伝うって決めたんだ。無能のままではいられるか。とりあえず、今は能力の制御だな」

ごま「浩樹のステータス公開は次回の次かな。区切りもいいし。本編内で、能力の説明ぐらいしたいんだけどな」

浩樹「長くなりそうだから、踏み出せないって。どんだけだよ」

ごま「じゃかしい」

浩樹「ああ、今さらですけど、今回は原作第二話」

ごま「実はいくらか書き溜めている中で、一番長いです。なんで？」

浩樹「いや、知らないし」

ごま「次回は原作第三話！浩樹の能力公開なるか!？」

浩樹「しろよ!？ たく……。えーと、ここまで呼んでいた間の時間が、貴方にとって至福であった事を願って」

ごま「そして、よければ続きを待っていただけの事を願って」

ごま「浩」では。また次回」

第三話 く変化する立場と決意く（前書き）

オリ主による、リリカルなのは再編ものです。よろしければどうぞ。

呼んでいる間が、貴方にとって苦痛で無い事を願って……。

第三話 変化する立場と決意

「ジュエルシード、シリアル???！封印！」

『Sealing』

なのはの言葉で思念体が消え、活動を止めたジュエルシードが空中からゆっくりと落ちてきて、レイジングハートに吸い込まれる。俺は邪魔にならないように後ろの方でなのはの活躍見てただけ。なのはも慣れてきてるから、手助けいらさないんだよね。

やることと言えば、単純に送迎だ。最近のなのははどうにも疲れが抜けないらしく、あまり元気がない。今ならともかく、慣れないうちから色々やってたし、ユーノ曰く魔法は精神エネルギーだから使えば使っただけ疲れる。

おまけに此処の所は夜にジュエルシード探しをして、かといって日が出てる間の行動を変化させてる訳じゃないから、純粹に睡眠時間が少なくなってる。

「お疲れなのは。大丈夫か？」

「にやはは。大J「デコピンツ！」痛っ!？」

「嘘つくな。見りゃわかる」

今までだったら、ここまで息が荒くなる事はなかった。限界、という言い方はおかしいけども、少なくとも消費過多でボロボロなのは間違いない。

「おぶってやるから。少し寝ろ」

「……うん。ありがとう、浩樹君」

「気にするな」

こんな事しか出来ないから。おぶるとすぐに寝入ったのはを感じつつ、起こさないように最善の注意を払いながらゆつくりと帰宅した。

翌日。昔から変わらず、ノックもせずいきなりドアを開けて部屋を見ると、なのははまだベッドの上。その上にさらにユーノが乗っていた。

「あ、浩樹。おはよう」

「おはよう、ユーノ。なのはは？」

「まだ寝てるよ」

近寄る。自身の枕を抱え込むようにして眠るのは、昔から変わらないなあと思いつつなのはの頭を撫でる。目の下の隈が何となく目立つ気がしてきた。

今日は日曜だし、ゆっくり寝かせておいてやりたいけど、生憎と約束もある。

「ほら。起きないと遅刻するぞ。アリサやすすかど約束あるだろう？」

うう、と少し唸ってから体を起こした。ぼんやりは寝起きと寝不足何だししょうがないだろうけど、また眠りそうな雰囲気醸し出してる以上。「ほら立って」と無理矢理手を引いてベットから引きずりおろすのもまたしょうがない事。

いざとなればおぶって行ってもいいけどな。その方がいいのか？

「……………。浩樹君、おはよう」

「Guten Morgen! なのは!」

「何で英語!？」

「否、ドイツ語」

この前読んだ本に出てたから調べた。これしか知らないけどツツクミ気質のなのはにとっては、ツツクまずにいられなかったらしい。おお、なんか嬉しい誤算。これからこうやって起こそうかな。

「さつさと準備しろよ。遅れるぞ」

「あ、うん。あ、それから浩樹君!」

「何?」

「今日頑張ってね」

「……頑張る」

部屋から出る。ああ、我ながら現金だな、とは思っけど。とりあえず、なのはと合流したらアップがてら走って行こうかな。

試合中、目立たないようにしたから、とりあえず一得点一アシストでした。

試合後。一同は翠屋に。メンバーは中で飯を食べていて、俺は生憎と持参していたおにぎりを外で食べていた。即席で作られたなのは達のいるガーデン席で。

その席でユーノはさらしもの状態にされていた。主にアリサとすずかから。

「でも、この子改めて見るとフェレットとは違くない?」

「そうだね。動物病院の院長先生もなんか違っって言ってたし」

そりゃそうだろうよ。中身魔法使いだし。

おにぎりを食べながらユーノと、苦笑してるなのはを見る。ふと目が合つて、どうしようかと相談されたけど、頑張れとだけ返しておいた。

「え、えつと。少し変わったフェレットって事で」

無理がありませんか？なのはさん。

「ほら、ユーノ君、お手」

「キユツ！」

差し出されたなのはの手に前足を置くユーノ。普通に喋ってるけど、こうして見ると本当に動物だよな。賢いや可愛いという言葉と共に、アリサとすずかから撫でまわされるユーノ。

『ご、ごめんね。ユーノ君』

『う、うん、大丈夫……』

『いいじゃないか。聖祥大附属小学校の高嶺の花から撫でまわされるなんて。FCの奴らが知ったら、怖いぞ』

『FC！？そんなのあるの！？』

『ごめんなのは。今の忘れる』

因みに、そんなFCの奴らから睨まれてたりするけど、最後の追いかけてこの時、学校でそれなりに知名度があつた先輩達を全員一蹴したあたりから、誰も俺に言ってこなくなつたし、追いかけることも無くなり、静かになった。水面下では色々してそうだけどね。追撃を防ぐため、念話を切る。まだ何か言いたそうだったが、アイコンタクトだけで気にすなと告げとく。何かしようものなら、俺が敵に回るって知ってるだろうしね、あいつら。

アリサがユーノを捕まえたりとかして、主にユーノが楽しい事になつてるのを眺めていると、店内からメンバーが出て来た。慌てて合流して、土郎さんの話を聞いて解散。アリサとすずかも午後から用事があるみたいな事言つてたし、多分俺達もこのまま解散。この後どうしようかなと考えながら振り向いて、それを一瞬見かけた。

「!?!」

リーダーが持つてたあれ、ジュエルシードか？発動していない状態ならありえないし、ユーノの言った通りなら、封印処理も出来る。でも違かつたら？

そんな事を考えている間に、マネージャーと合流して行つてしまつた。そつちや付き合つてるんだっけか？あの二人。

その後、アリサとすずかはやはり帰るらしく、なのは家でのおんびりするらしい。

しかし、どうにも頭から離れんな。

「浩樹君は？」

「ん？ああ。少し用事が出来たから、そつち片付けたら帰るかな」

確認するだけでいい。確認して違ふなら、それでいいのだ。幸い、あの二人の帰宅ルートは以前一緒に帰つた事もあつて知つてるから、問題無い。

なのはに話した方がいいかな、とも思う。でも疲れてるし、発動前に抑えられれば、問題無いから……大丈夫か。いざとなつたら念話で連絡すればいいし。

「じゃあ、また明日な」

手を振つてくれる三人に、手を振り返して駆けだす。

暫く走って、姿を見つけて。話しかけようと思い近づこうとして、止める。

そこまで空気が読めない訳じゃないし、特別会話は無いけど、なんに入り辛い雰囲気だったから。その内ポケットから取り出す事を願って、つかず離れず、何かあったらすぐに近寄れるぐらいの距離を開けて歩く。

「見間違い……だったらいいんだけどな」

ぼそりと呟く。あくまで希望。そして、昔からそんな希望が叶ったことなんて一度も無いのだ。だから、ついて来た。

大丈夫、と自分に言い聞かせて、ユーノに教わった通り、自分の力を意識する。

俺の体、俺の精神。力の源はその二つなんだから、俺に出来ないはずはない。じいちゃんに教わっている武術は己を知ることから始まるのだから。

「右手に能力を集中……」

手袋をはずす。意識すれば、自分の右手を何かが覆っている事が分かる。その覆っている物の量を増やし、見つけた瞬間に終わらせる。

リーダーとマネージャーが角を曲がる。小走りについて、角の所に身を隠しながら確認すると、ちょうど信号待ちをしていて、リーダーがポケットから石を取り出した。目で見て確認して、同時に走る為に角から出て、ドンツと社員風の人とぶつかった。

それだけ。それだけで間に合わなくなる。

「!?!?」

二人を中心に大樹が生まれ、色々な物をまきこんで成長していく。此方に向かって伸びて来た根の一本に触ると、そこで成長が止まった。

かと言って動けない。ここで手を離したら、成長が再開する可能性だってあるし、ジュエルシードを持った二人は、既に手が届きそうもないくらい高い所にいる。

ああ、本当に。本当に俺は……。

『なのは。ユーノ』

『浩樹君！？今、町でジュエルシードが！！』

『分かってる……。俺が押さえてるから、早く封印処理を頼む』

『う、うん！』

念話を切る。後十分もしないで片付くだろうから、それまでこの枝から手を離さないようにして、能力を維持するだけ。

ああ、本当に役立たずだな、俺。

日は傾いて、事件は終わる。なのはは家に帰っていたらしく、来るのが少し遅くなったから、予想よりも時間がかかった。まあ、どっかの屋上からピンク色の光線がジュエルシードのありそうな位置を突き抜けて行った時はかなりびっくりしたけどさ。

事件後。倒れていたリーダーとマネージャーをたたき起して、怪我の確認と今出来る応急処置をしてから、見送った。家まで送ると言っただけ、そこまでひどい怪我じゃないからって断られた。

「ま、不安だから、送る送らない関係無しに、途中までついてくけどな」

聞こえないように小声で呟き、互いに支えあいながら歩く二人の背中を見る。そんな俺も、実は満身創痍で半ば体を引きずるようにして帰っているのだが。うん、力の制御が甘かったのかもね。

練習しなきゃなあと思う。挟れたコンクリートなどに時々足を取られそうになるけど、なんとか歩き、ふと角から視線を感じて、そこからを見た。

「…………お疲れ様。なのは」

「うん…………」

どうにも元気がない。何となくわかるけどさ。とりあえず、俺の出来る事をしようか。

なのはに近づいて、頭に手を乗せる。そのまま撫でるけど、表情は晴れない。

「元気出せよ。頑張っただろ」

「…………あのね。私気付いてたんだ。ジュエルシードを持つてる事」
「うん」

「でも、気のせいだって思っちゃった。駄目だよね」
「そっか」

久々だなと思いつながら、なのはの事を抱きしめる。幼子をあやすように、頭を撫で続ける。

慰めの言葉とか、そんな物を求めてる訳じゃないと思うから。だからあんまり考えないで、自分の言いたい事を言う。

「凄く近くにいて。止められるはずだったのに。それでも俺は止められなかった」

少しだけ離れて、なのはの目を見ながら、ニコリと微笑む。

「なのはは今回失敗した。でも、それは俺もだよ。なのはの事、助けてやれなかった」

「でも！浩樹君は、ちゃんとジュエルシードを止めていてくれた！」

「それを言うなら、なのはも一緒だよ。俺からすれば、なのははちゃんとジュエルシードを封印して、為すべき事をした」

俺一人じゃ出来ないんだ。助けると誓ったくせに、助けたい相手の力が無いと何もできない。

「今回はなのはは自分が、俺は自分が失敗したと思ってるから、今回は二人とも失敗したんだ。だから、あんまり悩むな。今回失敗したなら、次回にいかそう？」

「……うん」

「今までユーノとなのはの手伝いのつもりだったけど、もう止める。俺は俺の為にジュエルシード集め、手伝うから」

「うん。私ももう誰かに迷惑かけたくない。だから、私も、自分の意思でジュエルシード集める。自分なりの精一杯じゃなく、本当の全力で」

「ああ」

弱いけど、やれることぐらいはあるから。俺の全力なんて微々たるものだけだ。こう決意した俺の為にものなのには、俺は俺の微力を尽くす。そう決意した。

第三話 〈変化する立場と決意〉（後書き）

ごま「第三話」。原作時間軸での無印第三話ですね。とりあえず、原作の再編&オリ主介入なんで、あまり大きな変化はないのです」

浩樹「今回も結局、なのはに助けられた・・・」

ごま「はいはい。ジュエルシードにかかわつての初めての失敗。町の被害は原作ほどじゃないです。浩樹が止めたので」

浩樹「でもなあ・・・零に出来るはずだったんだ」

ごま「・・・」

浩樹「結局なのはに助けられたし・・・」

ごま「やっぱりそこに帰結するのな。まあ、いいや。次回は番外編。浩樹のスペックの説明です。能力についても説明しようかなあと思いましたけど、やめました!」

浩樹「おい!？」

ごま「後の話で説明するにふさわしい話があるので、そこで説明します!」

浩樹「・・・なら、いい、のか?」

ごま「いいんです!今回はここまで!」

浩樹「ここまで呼んでいた間の時間が、貴方にとって至福であった事を願って」

ごま「そして、よければ続きを待っていただける事を願って」

ご・浩「では。また次回」

閑話 くなぜなに作者 その1

ごま「という訳で前回言った通り、今回は浩樹のステータス紹介なのです」

浩樹「俺のステータスなんて、面白味も無いと思うが……」

ごま「なんだと？ だったら今からでも、お前のステータスを実は小学校留年しまくってる中年オヤジにするぞ。しかも留年の理由は口リコンだから……」

浩樹「ふ・ざ・け・る・な・よ？」

ごま「冗談はさておき、ステータス紹介です」

浩樹「フリップをどうぞ」

名前：高坂 浩樹

ふりがな：こうさか ひろき

年齢：8 今年9歳

誕生日：5月10日

身長：130・0cm

体重：28・0kg

髪型：黒髪・後ろ髪は長めで、後ろ髪を若干残す形で、リボンで結つてある。

後、特徴的なのは殆どのリリなのキャラ全員に言える、特徴的な前髪。

好きな事・物：動物（特に猫）と戯れる事。鍛練

手袋とリボン（手袋はじいちゃんから。リボンはな

のはから貰った)
嫌いな事・物：なのは達や家の事で色々言われる事。今までの鍛錬の否定

しつこい人。機械類。

趣味：特になし。暇があれば鍛錬してるから。

ごま「第一話の、魔法関係無しのスペックね。まあ、何から何まで、なのはなのはなのは」

浩樹「うるさい」

ごま「いくらなんでも、依存し過ぎ」

浩樹「色々あつたんだよ。色々」

ごま「ふーん」

浩樹「殴るぞ？」

ごま「魔法・戦闘関係のステータスです。括弧の中は魔力による身体強化の時です」

能力値

筋力：A (A A) 同年代と比べて。

魔力：A + なのは達と比べれば見劣りはするけど、十分

技術：A A (体術) 伊達に物心ついた時から、じいちゃんに鍛えられてないという事

B (魔法) 三話の時点で、使えるのは無いよりマシ程度の
防御と念話

耐久：B - (B) 基本的にカウンターより、避ける専門の為、耐

久力は低い

速度：A+(A A+) 上記と同じ理由から。速いもあるが、どちらかといえば素早い

スキル：B 使用能力。最低限の出力制御なら可能。

ただし完全に抑える事は不可能。手袋もあるから、あまり気にしてない。

ごま「こうです」

浩樹「過大評価な気もする……」

ごま「作者がそんな事するかよ」

浩樹「そりゃそうか」

ごま「飛行魔法は現在練習中。デバイスも無いからなかなか難航してるけど」

浩樹「いざとなれば走ればいいし」

ごま「空を駆け上がれるのかお前は」

浩樹「……すいません、生意気言いました」

ごま「まったく。まあ、ステータス説明だし、長くする必要も無いから、今回はここまで」

浩樹「そういえば、毎回終わり方、特に後書きの終わり方が重くないか？」

「ごま」そうかなあ？」

浩樹「そうだろ。もっとフランクにいこう」

「ごま」むう……。難しいな。まあ、頑張ろう」

浩樹「フランクに頑張るも何も。また、次回程度でいいんじゃないかな
いか？この文章をくの下りはいらんんじゃないかと……」

「ごま」ふむ、なら前述のみにしようか」

浩樹「それじゃ、今回からそういう事で。今回は後書きないけどな」

「ごま」まあな。では、今回はここまでです」

「ごま」また次回」

第四話 〽巡り会う魔術師と齒車破壊〽

攻撃してきた腕をいなして、顔めがけて拳。それを弾かれたから、弾かれた腕を自分の方に曲げつつ、追撃の膝を腹に。

「がつ！？」

相手が腹部を抑えながらよろよろと後退して、さらに踏み込んで、折り曲げた腕を振るって顔を殴り、振れる所まで振りきる。それで相手が吹き飛び倒れ、痙攣はするも立ち上がらない。

ふう、と一息ついてから楽な姿勢になって首を鳴らす。

「相変わらずですね、お孫さんは」

「まだまだ子供じゃよ。最近はある年で何か生き急いでる様に見えるがな」

じいちゃんと此処の師範代が何かを話しているようだった。あまり気にせず、ストレッチをして軽く体をほぐす。

そして二、三通りの動きを確認してから「上越師範台」と声をかけた。

「なんだい？」

「次の相手をお願いします」

「まだやる気かい！？もう十人、続けてだよ！？」

「関係無いです。じいちゃんとのノルマは後十人ですから」

「……はあ、分かった。次、相手してやってくれ」

「はい！」と威勢のいい返事の後、俺より断然体格のいい上級生がいくらかからの距離を開けて、俺の前に立つ。威嚇するようにこち

らを睨む相手に対して、目は見るが感情は向けない。

「初め！」と上越師範代の合図の元、一気に近づき、顎に一撃。

「む？」

なかなか鍛えているらしく、びくともしなかった。そのまま腕を下げ相手の襟をつかみ、大外刈りの要領で相手を倒し、足を挙げて幾分か加減して、思いつきり足を下ろし腹部を踏む。

その瞬間に相手の体かくの字に折れ、そのまま先ほどの相手同様、痙攣したまま動かなくなる。

「……彼には躊躇いの文字は無いんですか？」

「加減は知っておる。ああはやったが、内臓にも骨にも異常はないよ」

「しかしですね!？」

「なら、上越師範代が相手して下さい。それだったら、練習になりそうですから」

負けても勝っても。自分より上の相手なら、技を盗める。じいちやんも止めないあたり、そう考えているのだろう。

師範代は口をパクパクさせた後、此方に向かって歩いて来た。そして、先ほどの上級生と同じ位置に立つ。

「好きに始めよ」

じいちゃんの声に合わせて、俺と師範代の試合が始まる。

フラフラと下がる師範代に再度突撃。迎え撃つ為だろう。その場

に踏み止まった師範代の拳を避けて、相手の前足を足場にしてジャンプ。勢いのまま膝で顎に一撃。その勢いで足を振り上げ、顎の一撃で上を向いた顔を踏んで跳び越える。

着地と同時に膝を蹴って体勢を崩し、此方側に倒れて来た師範代の首に腕をまわして、思いっきり絞めて落とす。

「…………ふう」

首から手を離すと、体が崩れ落ちた。その体を見下ろして、道場内の時計を確認する。そろそろ向かった方がいいだろう。

「じいちゃん。俺、この後約束あるからも行くな」

「ああ。まあ、好きにしろ」

「うん」

一礼して道場を出て、扉を閉めると向こう側から聞こえてきたのは、自分に対する罵詈雑言だった。それはじいちゃんの一喝で終わったが。

さつさと私服に着替えて、家に向かってクールダウンがてら走る。走りながら、頭の中にあるのはさつきの罵詈雑言だった。

それはそうだろう。恐らくあいつら、師範代を含めた誰もが、実戦など意識していない。だからこそわかっていない。あの師範代の首は、そのまま折ろうと思えば折れるし、俺の前に戦った奴らだつて死んでいる。

「駄目だな。大分イライラしてる。慣れた筈なんだけどな」

小さい頃からのじいちゃんから聞いた死闘の話。それと並列して始まった武術の鍛錬。鍛練の最中に見つけてしまった、自分の中に存在するある欲求。

そして少し前から始まったジュエルシード集めという非日常とそれと並列して強くなつていく守りたいと決めた幼馴染。

特に最後がきつい。俺は彼女がいなければ何も出来ず、だけど彼女は俺がいなくても何とかなる。

「役立たず。いらぬ子。なのはそんな事、思っちゃいないと思っけど」

家に着いて、来ていた服や下着は全部洗濯機に放り込んで、シャワーを浴びて汗を流す。普段だったら気にしないけど、流石に友達の家に行く時は気にした方がいいだろうし。

普段だったら三十分とかからず出来る事が、今日に限って三十分以上かかってしまった。考え事しながらやると、やっぱり動作遅くなるなど改めて実感。

「まあ、かかったものはしょうがない。さっさとバス乗って向かうか」

一応すずかには到着予定の時刻はメールしておいたから問題ないだろう。バスに乗りながら顔の前で右手を握ったり開いたりしながら、自分の体を意識して感じる。

当たり前の如く、不完全燃焼。仕合の後からずっともやもやしていたから、当然といえば当然。師範代ももう少し出来ると思っただけ、見込み違いだったらしい。もっと強い人というと、じいちゃんや恭也さんかな。

「つつても、じいちゃんも恭也さんもなかなか相手してくれないし、今回みたいな他流派との交流試合で当たりを引ける確率も低いし」

まだまだ子供だから。ある程度のレベルまでいつている人達はな

かなか俺の相手をしてくれない。明らかに同レベルの相手も俺を甘く見ている時がある。相手の力量も分からない時点で同じレベルでも格下だから、俺も相手にしないけど。

「どっかにいないかなあ。俺を満足させてくれる人」

どこぞの満足同盟のリーダーさんみたいな事を無意識で呟いて、その事に気がついて溜息をつく。

考える事が面倒臭くなって、俺はずずかの家の近くまで寝ていようと目を閉じた。

ずずかの家に着いてドアベルを鳴らすと、紫髪の長身の女性が戸を開けてくれた。

「お招きいただき、ありがとうございます、ファリンさん」

「はい。いらっしやいませ」

ぺこりと頭を下げ、顔を上げると目があった。少し不思議そうにしてから、再び元の笑顔に戻る。

「悩みごとのようですね、浩樹坊ちゃま」

「にはは。坊ちゃまって止めて下さいよ、ファリンさん。それよりずずかたちは？」

「お庭でお茶をしていますよ」

「はい。分かりました。ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げ、家を回り込むように走って移動する。とりあえず、みんなと会えば、考えなくてすむだろうし。そう思って、速度を上げようとして、立ち止まった。足元に一匹の子猫。

「おー、久しぶりー」

抱き上げて、愛でる。子猫は俺の顔を一舐めすると、別の方を向きながら、にゃーと鳴いた。「何かあるのか？」と聞くと、再び鳴いたから、そちらに足を向ける。

ガサガサと植木をかき分けて、奥に進み地面に落ちている石に気がついた。とても見慣れた青い宝石。発動前らしく、宝石のまま。

「おお、お手柄だな」

手袋をはずして、直接触って拾い上げる。封印処理が発動される。まあ、俺には変化が良く分からないけど、それなりに力は込めたから、暫くは大丈夫だろう。いざとなれば触ればいいし。

ポケットに入れてみんなの所に向かおうとして、何かが発動した。

「なんだ？」

この感じは、初めて魔法に関わった時の感じと似てるか。不安そうに鳴く子猫を宥めるように撫でつつ、周囲を警戒する。そして見つけた。

遠くでこちらを見つめる影。その影が此方に撃ってきた魔力弾を避ける。

「おいおい。危なすぎるだろう」

とは言いつつも変化無しの直進だったら問題無く避けられるが。暫く撃ち続けて、無駄だと知ったのか、それとも別の理由か影が近づいてきて、俺も前に降り立った。

その姿を見て、思わず息をのむ。金色の髪。赤き瞳。なのはやアリサ、すずか並みに整った顔立ち。マントの隙間からのぞく体。手に持ったデバイス。目を弾く要素は大量にある。

しかし、何よりも。確実に彼女は強い。俺と同じか、その上をいくくらい。

その姿にまず目を奪われ、次に何も考えられなくなって。そして最後に心を奪われた。ここでやらなきゃ、一生後悔する。寝ても覚めても、彼女の事しか考えられなくなる。

ああ、だからこそ。

「その持っているジュエルシードを、こっちへ渡して」「断る」

彼女の言葉を、俺は否定した。

威圧するような彼女の瞳に、真正面から笑って返す。深い意味はない。ただの挑発という意味合いと、彼女と戦えるかもしれない期待で、笑みが漏れるだけ。自分の体を制御できないのは久しぶりだ。笑みが止まらない。

「もう一度言うよ。ジュエルシードを渡して。そうすれば見逃してあげる」

「話だけは聞いた。ロストログアは危険な物だったのは知ってるぞ。何でこんな危険物を望むんだ？」

「君には関係ない」

予想通りの返答だった。それに対する答えは、ジュエルシードをポケットに入れて、子猫を地面に降ろし逃がすことで答える。

「戦う気？止めといた方がいい」
「ごちゃごちゃ言ってるで、さっさとやろう？目的は知れないけど、欲しいんだろ。ポケットの中身」
「……」

相手の表情は変わらない。ただ、両足に少し力を込めたのは分かった。だからこそ相手の突撃に合わせて、その場から離れ、数瞬間には今まで立っていた位置に、彼女がデバイスを振り切った状態だった。その顔が、少し驚きに満ちている事は若干嬉しい。

「速いね」

「俺より速い人に言われてもなあ……」

少なくとももう少し距離は開けられる筈だったんだけど。予想していたより全然速かったらしい。考えていた戦術を訂正しつつ、相手の次の行動を見る。

「バルディッシュ」

『scythe form』

デバイス、バルディッシュの宝石の付いている部分が動き、そこに刃が生まれる。何でもありだなと思ひ、それが原因で一瞬動きが止まって、その隙に一気に距離を詰められた。それでも強引に後ろに下がってバルディッシュによる初撃を避け、二撃目に対して一歩踏み込み棒の部分を腕で止めて、逆の手で顎狙いで一撃。

それを下がって避けられつつ、後ろから迫る刃を横に跳ぶ事で避け、此方が突撃。撃ってきた一発の魔力弾を避け、踵落とし。それはバルディッシュで防がれた。そのまま押し返され、着地と同時に後ろに跳んで距離を開ける。

「拮抗……そつちのが強いかな？」

「そうでもないよ。君も強い。でも、負けられない」

「うん。それは俺も同じ。負けられないし、負けたくない」

言葉が終わると同時に、前に走る。少女も同じように突撃。バルディッシュの一撃を蹴りで相殺して、蹴り足を下ろしてその足を軸に後ろ回し蹴り。それも避けられて、少女は枝の上に身を躍らせた。そのままバルディッシュをこちらに向けられ、杖の前に魔力球が出来た。

じいちゃん曰く、中から遠距離の攻撃の際し、有効なのは相手の目線と銃口などの武器の先を見て、攻撃先を予測しての回避、動きまくって狙いを定めさせない事、撃たれる前に距離を詰めての制圧。

「木の上じゃ手は出しにくいし、回避もどうだか怪しいから……」

呟いて、動きだそうとした直後、ガサガサと植え込みをかき分ける音が聞こえた。ちらりとそちらを見て、息をのむ。見慣れた服、杖、髪型。

ああ、そうだ。彼女がいないはずがない。完全に失念してた。だからこそ、反応が遅れて一瞬体が止まった。

「……ごめんね」

『Fire』

撃ちだされた魔力弾への反応が一瞬遅れて、それでも何とか避けようと跳べるだけ後ろに跳んで、地面に魔力弾が当たった衝撃で吹き飛ばされる。

「浩樹君!?!」

煽られて崩れた体勢のまま地面に落ち、慌てて立ち上がった所に飛び込んできた少女がバルディッシュを振った。避けようにも避け切れず、ズボンのポケットが切れてジュエルシードが宙を舞う。俺が取るより早く、それを取られ、暫く飛んだ所で再び魔力弾。

避けようとして、射線上になのはがいた。意図して撃ったのか、そうでないのかは分からないが、避ける事は諦めてそのまま当たり、再び吹き飛ばされる。

「なっ!?!」

薄れゆく意識の中で、此方を撃った少女の戸惑いの声が聞こえて、意図して撃ったわけではない事を悟った。

それからの事はよく覚えていない。その後、結界(というらしい)ユーノが言ってた(が)とけた後、なのはが助けを呼びに行ったらしく、目が覚めたら家の中で寝ていた。

何であんな所で寝ていたのかと聞かれたから、猫を追っていたら、つまり転んで頭を打つたと嘘をついて。恭也さんはきれいに切断されていたズボンが気になっていただけ、何とか誤魔化した……と思う。

結局、その日はなのはが帰宅するまで、ベッドで寝ていて家に帰ってからはずっと道場にこもりきりだった。全部思い出せる。姿も動きも何もかも。

「ジュエルシード集めしてれば、また会えるよな」

ならその時までには少しでも前進しておく事にしよう。

さしあたってはまず、飛行と防御か。

目標は見つかった。ならば、それに向けて前進するだけだ。

第四話 ～巡り会う魔術師と歯車破壊～（後書き）

ごま「第四話。とりあえず浩樹は色気よりも何よりも、戦う事が好きな戦闘狂になったな」

浩樹「そんなつもりないんだがなあ。彼女を見てたらどうも」

ごま「はあ、まだまだ餓鬼だな」

浩樹「殴るぞ?」

ごま「ごめんなさい」

浩樹「それより、今回は遅かったな」

ごま「遊戯王GX見たり、祭りに行ったりで忙しかった」

浩樹「OK・ゆっくり話し合おうか」

ごま「まにあっただから無罪放免ですよ」

浩樹「たく」

ごま「では最後に。ここまで読んで下さってありがとうございます。ごめいまして!」

浩樹「次回も待っていていただけたら嬉しいです」

ごま「浩」では次回「」

第五話 く沸き立つ湯けむりと友愛く（前書き）

オリ主による、リリカルなのは再編ものです。よろしければどうぞ。

第五話 沸き立つ湯けむりと友愛

「温泉？」

「うん」

「行か「はい参加ね」までこらアリサ」

という訳で（強制）参加確定。まあ、温泉は好きだしいつか。

温泉に向かう車内。窓に寄り掛かって外を眺めながら、ぼんやりと魔法の事を考える。

ユーノ曰く、飛行適正はあるらしいから、練習すれば飛べるようになる。防御魔法も同じ。中から遠距離の射撃はとづくに諦めてるから、この二つ。

ユーノに教えてもらって、レイジングハートにもなのはが教わる時に一緒に教わって、少し前に何とか飛べるようになった。速さとか精密制御とかはまだまだだから、実戦じゃ使えないけど。防御もぼちぼち。それに追加して、レイジングハートの提案で身体能力強化も教えてもらった。

「今なら、もう少し戦えるかな」

誰にも聞こえないようにぼそりと呟いたつもりだったが、生憎と俺の膝の上にあるバスケツトの中にいたユーノには聞こえたらしい。ふたを開けて、俺をたしなめる視線をこちらに向けた。

「駄目だよ浩樹。なのはも。旅行中くらいはゆっくりしないと駄目なんだからね」

『分かってるよ。大丈夫』

『ああ……そうだな』

『とくに浩樹。慣れない魔法の練習もしてるんだから』

『俺的にはまだまだ足りないけどな』

『浩樹！』

強制的に念話を切って、目を閉じる。ユーノの言う通り、慣れない事をし続けているせいか、疲れが抜けていないのも事実だ。ユーノの視線と後部座席からのなのはの視線を感じつつ、その二つを無視して、俺は夢の世界に旅立った。

最近、寝るのが遅かったこともあってか、それなりに深く寝入っていたらしい。硬くなっている関節をほぐしつつ、しかしまだ眠気が抜けない頭をぼりぼりと掻きながら、大きな欠伸を一つ。

「眠そうだね、浩樹君」

「んあ。ああそうだな。久しぶりだこんなに眠いの。眠気覚ましに、少し散歩してくる」

「あ、危ないから、気を付けてね！」

「ああ。大丈夫大丈夫」

パタパタと手を振って、土郎さんに「少し散歩してきます」と告げてから、獣道をフラフラと進む。

それなりに奥に来て、そろそろ戻ろうかと思った時に誰かの気配を感じた。俺を見ている訳じゃないが。その気配を追ってさらに奥へと進み、一本の巨大な木に辿り着いた。

気配はこの辺りなんだけどなあと思いつながら、辺りを見回し、上を見あげて、その姿を見つけた。この前と違い私服らしいが、持つ

ている杖には見覚えがある。

「あいつ!」

顔がゆがむ。が、向こうは俺に気が付いていないのか、微動だにしない。瞑想しているのか、眠っているのか。いずれにせよ器用なものだ。

「石でも……いや、ないな」

どうせなら、本気の彼女とやりたい。彼女が本気になるのは、ジユエルシードが関わっている時だけだと思っから、ならここで手を出す必要はない。

目も覚めたし、戻るかと思ひ、俺は元来た道に戻る事にした。

「で?何で、こんなにアリサは機嫌が悪いんだ?」

「ちよつと変な人に絡まれちゃって」

「分かった。ちよつとそいつの事、潰して来る」

「許可するわ。やってしまいなさい、浩樹!」

「駄目だよ!」?

俺が腕まくり。アリサが温泉の方を、さながら指揮官のように指さして、なのはが突っ込む。こんなよくやっていた事を久しぶりだなと思うのだから、近頃の俺はやっぱりノリが悪いというか、あまり元気がなかったらしい。

だからこそ、無理矢理温泉に引っ張ってこられたのだろう。まあ、昔から思ったら一途だったから、しょうがな……くないですね、ごめんなさい。

「……ごめん、かな。心配掛けて」

「え？あ、うん」

「何の事よ」

「最近、心配掛けてたような気がして来たから」

「別にあんたの心配なんかしてないわよ！」

「だよな〜」

思い過ぎしだったらしい。「んじゃ、風呂入って来るから」と三人に手を振りながらその場を離れる。

「もう、アリサちゃんったら」

「だ、だっていきなりだったんだもん！」

「多分浩樹君。あれ本気で受け取ったと思うよ？」

「うぐ……。も、もう知らない！」

「アリサちゃん……」

果たして何の話をしているのだろうか？

後ろから聞こえて来た、なのは達の話し声の内容の意味を考えながら、お風呂に向かう途中、かなり長身な女性が向こうから歩いて来た。

たがいに目が合って、暫く歩いてから立ち止まって、睨みあう。

多分こいつがなのはやアリサやすずかに絡んだという女なのだろう。

そして、俺を睨んできたという事は、恐らく彼女の関係者だ。

「で、何か用？」

「決まってるだろ。よい子は大人しく、お家で寝んねしてなさいね。あんまりお痛がすぎると……」

「容赦はしない？くくっ。こんな子供を脅すなんて、本当に切羽詰まってるな、この野郎」

「……あなたはあの白い服の子と違うみたいだね」

「白い服？ああ。そりゃそうだ。ジュエルシードもさることながら、俺の今の目的は、彼女と戦う事だからな。邪魔するなら潰すぞ」

更に睨まれ、同じく睨み返す。動こうと思えば、何時でも動ける中、先に一步踏み出したのは俺。その瞬間、向かってきた拳を避けて、そのまま温泉に向かう。

「逃げるのかい？」

「こんな所でやる訳無いだろ。旅館に迷惑かかるだろうし、今日は休めって言われてるしな」

温泉の入り口で思い出したように「あ、そうそう」と言いながら、振り向く。まだこちらを睨んでいたから、敵意を込められるだけ込めて、ニコリと笑いながらそちらを向いて告げる。

「木の上にいた彼女によろしく伝えておいてくれ。次は負けないって」

カツと目を見開き、突撃してきそうな女よりも先に男湯に入る。すぐに奥には行かず、気配を探っていると、暫くそこにいたけど、すぐに去って行った。はあ、と溜息をつきながら、さっさと服を脱いで汚れを落とし、湯船につかった。

「ああ、我ながら……。まあいいか。子供だし」

誰もいない事を確認してから、思いつきり息を吸い込んで湯船に潜る。

ああ、猛省。子供とはいえ、大人げない事をしてしまった。

まあ、でも。彼女がいて前回いなかったあの女がいるという事は、

この辺りで何かをするつもりなのは間違いないだろう。だったら俺がやる事は決まってる。

(なのはの手助けと彼女との戦闘かな。前は奪われたし、今回はこっちが取らないと)

現在の手持ちは六個。まだまだ此方が勝っているとはいえ、多分……いや今のなのはじゃ彼女には勝てない。

立ちあがり、顔に着いている前髪を掻きあげながら、単純なプランを考えていく。

「抑えられるだけ、抑えたいか」

向こうの目的が分からない以上はジュエルシードを「はいどーぞ」って渡す訳にもいかないしな。

とりあえず、今回彼女が出てきたら、俺が相手しつつなのはが封印かな。もう一人の方は、ユーノにでも任せよう。

だがしかし。そうは問屋……ではなくなのはとユーノが許さなかった。

「さてこら。俺も行くぞ」

「今日は休むって約束でしょ、浩樹君は」

「そつだよ。ていうか、一日平均睡眠時間が二時間って。背、伸びないよ?」

「上等だユーノ。その喧嘩買った。さしあたってはまず挨拶するぞ」

さつさと逃げて自分の方に乗ったユーノになど目もくれず、なのはは「とにかく!」と言いつつ、俺を見る。

「今日、浩樹君はお留守番。ちゃんと休むんだよ」

「でも、先週のあいつが出てきたらどうするんだよ」

「あいつ?あの子の事?」

「ああ。とにかく、どうするんだよ」

「大丈夫だよ。ユーノ君もいるし」

不安でしかないのだけど、そんな俺を置いてなのはは一人で外に出て行った。

少し経って、さて追いかけるかと俺も出ようとして何かに浴衣の裾をつかまた。見下ろしてみると、絶賛熟睡中のアリサの姿。握っていたユーノがいなくなつて、寂しくなつて彷徨つた拳句、俺の裾に辿り着いたらしい。

「まあ、脱げばいいだけだし、別にいいけどさ」

帯を解いていざ脱ごうとして「ん」とアリサが若干動いて焦る。慌ててき直して帯を結んで、今回はあきらめなきゃダメかなと思いつつながら座る。

自然とアリサの頭に手が伸びて、撫でていた。

「ひろ……き……」

「へ?」

名前を呼ばれた。起きてるのかなと思つたけど、どうやら寝言らしい。俺が夢にでも出てるのか?ぼこられてなきゃいいけど。

「あん、たねえ」

「何？」

「あんまり、あたし達に、心配、掛けるんじゃないわよ」
「……」

アリサは心配なんてしてないって言ってたんだけどなあ。
更に強く握られ、引っ張られた。若干身を寄せせる。

「あんたは、あたし達の下僕なんだから」
「下僕！？」

まさかすぎる。

「いいわね。ちゃんと、あたし達の事……」
「むう、何が望みかは分からないけどさ、アリサ」

窓の外を見る。何やら、緑色の光が空に向かって伸びて、消えた。
戦闘が始まったのだろうか。

「なのはもアリサもすずかも。みんな大切な友達だから。望まれよ
うと望まれなかるうと、俺は守るよ。みんなの事」
「ふふ。それでいいのよ」

夢の中の俺の答えに満足したのか、アリサが微笑んだ。なんだろう。
絶対の忠誠でも誓ったのだろうか？夢の中の俺、頑張れ。

窓の外では黄色の閃光とピンクの閃光がぶつかり合い、ピンクの
閃光が勝った。

とはいえ、相手が彼女なら、曲がったりしない直進の攻撃なら避けられるだろう。逆になのはは動けないのだから、恐らくそのまま、
なのはの負け。

「ま、予想通りかな。しかし……」

それは俺でも同じだろう。空戦になれば、最低限の機動は必要だろうから、まだまだそれが出来ない俺には勝ち目がない。陸戦だったら、それなりに勝負は出来るだろうけど。

「強いなあ。本当に」

感心してしまう。元々才能もあっただろうけど、鍛えてきたのだろうけど、それ以上に断固たる意志がある。だからこそその強さだ。そしてもう一つ。今日会ったあの女。あいつが何者なのかも気になる。なのはとユーノが帰ってきたら話を聞く事にしよう。

「特別大きな怪我をしたりしないで、無事に帰ってきますように」

何となくそう呟いて、俺はアリサに握られたままの裾を見た。別にいいかなと思っただけど、このままじゃ眠れないよね。

その後、帰って来たのはとユーノは疲労困憊と意気消沈だったので話を聞くのは翌日に持ち越しになってしまった。

翌日。

「何でユーノを握ってた筈なのに、あなたの浴衣になってるのよ！」

「何でって。アリサが握ったから、だけど」

「あんたが握らせたんじゃないの!？」

「そんな事するかよ。無駄な」

「う……。ね、ねえ浩樹」

「何？」

「私、何か寝言言ってなかった？」

「え？……うん。まあ、言ってたけど」

「っ……なんて言ってた？」

「『あんたは、あたし達の下僕なんだから』」

「そ、その後は？」

「『いいわね。ちゃんと、あたし達の事』まで聞き取れた。その後『ふふ。それでいいのよ』って。何で満足したの？夢の中で、俺が忠誠でも誓ったか？」

「え、あ。べ、別にあんたが気にする事じゃないわ／＼」

何故かアリサが赤くなっただけど、気にする事じゃないらしいから気にしない事にした。

そして、もう一度「心配してくれてありがとう」「って言ったら、更に赤くなって、攻撃された。

何故に？

第五話　く沸き立つ湯けむりと友愛く（後書き）

ごま「第五話。温泉編です」

浩樹「まるでしばらく温泉みたいな言い方だけど、違つからな？」

ごま「分かってるよ。さて、実は困ったことに」

浩樹「困ったことに？」

ごま「書き貯めしてあるのが次の話までだったりして」

浩樹「え？」

ごま「筋肉痛とか筋肉痛とかで書く気が失せて……」

浩樹「なんでまた……」

ごま「神輿担ぐの張り切り過ぎた」

浩樹「なれない事するから!？」

ごま「まあ、なんとかなるでしょ。書ける時は数話を一日で書けるし、構成は出来てるしね」

浩樹「ならいいが」

ごま「という訳で、今回はここまで……!」

浩樹「どういう訳!？」

ごま「ここまで読んで下さってありだとうございました!」

浩樹「次回も楽しみにしていただけると嬉しいです」

ご・浩「では次回」

浩樹「なんかテンションおかしいな？」

ごま「ガチで体中痛くて……。疲れも抜けてないし」

浩樹「なんか爺臭いな……」

第六話 く気持ちの発言と発現く（前書き）

オリ主による、リリカルなのは再編ものです。よろしければどうぞ。

呼んでいる間が、貴方にとって苦痛で無い事を願って……。

第六話 く気持ちの発言と発現く

温泉旅行から数日が経った。あれ以来、ジュエルシード関係の出来事は再び硬直状態になってしまった。だからと言って何もしないと俺が落ち着かないから、いつも通りの鍛錬をこなしてユーノに教わりながら、魔法の練習をする毎日。

そして今も、魔法の練習がてら、座禅を組んで瞑想をしていた。いつもだったら簡単に自分の中に潜れる筈なのに、ここ暫くなかなか潜れない、つまり集中できなかった。まあ、理由は分かっているのだが。

「なのは、か」

温泉に行った日からのなのは目に見えて元気がない。それはジュエルシードの事もあるし、同じくジュエルシードを狙っている彼女、フェイトの事もあるのだろう。

「……分かってても、どうしようもない事もあるけどな」

そんな事、小学生になる前から知ってる。悔しかったけど、あの時は俺にはどうする事も出来なかった。

「……はあ」

溜息をついて立ちあがる。あの日から今日までずっとこんな感じだけど、今日は目に見えてひどい。だからこそこのまま座つても鍛錬になりそうにないから、魔法の練習を止めて走る量を増やそうと思う。

「ん？携帯？」

設定を変更してマナーモードでもバイブが働かないようにしてたせいで気が付かなかったが、何回か着信とメールが来ていた。履歴には『アリサ・バニングス』の文字が羅列している。メールフォルダにもやはり『差出人 アリサ・バニングス』。

「メールの内容はっと……ですよね〜」

メールの内容は、最近のなのについて知っている事を話せ。それだけだった。そうは言っても話せる事じゃないし、どうしようかと悩んでいると、再び電話。画面には『アリサ・バニングス』。

「……はあ」

通話ボタンを押して、幾らか電話を離しながら「もしもし」と尋ねる。

『遅いわよ！私が電話したら、ワンコールで出なさいよ！！』

零距离で聞いたら暫く耳が聞こえなくなりそうなくらいの大声で、電話越しに怒られた。はあ、と三度目の溜息をついてから、「それで？どうしたの？」と再び尋ねた。

『決まってるでしょ！！最近のなのはの事よ！！』

「そうなの？残念。アリサからのラブコールだと思ってたのに」

『そんな事言っつて事はあんた、やっぱり何か知ってるわね。大人しく白状しなさい』

「……何の事？」

『あんたがそんな妙な事言う時は何か隠している時だって事ぐらい、

知ってるわよ。さつさと話しなさい』

そうなのか、なんて。知ってたけどさ。わざと明るく振る舞ってる訳ですし。こんなことなら、普段からもっと明るく？いくべきだったなあ、と若干後悔。まあ、過ぎた事はしょうがない。

「アリサ」

『……何よ』

俺の声色が変わった事が分かったからだろう。電話の向こうで、少しだけ緊張したらしい。

「すまん。今はまだ、話せない」

『何よそれ！？いいから話しなさいよ！』

「アリサ！」

『ぐっ』

興奮しているアリサに負けなくらいの大声をだして、無理矢理アリサを黙らせる。アリサもなのはも大切な友達なのに、その双方になにも出来ない自分に苛立ちながら、言葉を選んで、口にする。

「すまない。本当に話せないんだ」

『何だよ……』

「それも言えない。でも」

『でも？』

少しだけ考える。本当にこんな約束していいのかなんてわからない。分からないけど、しないといけない。それに、これを嘘にするつもりも無い。

「いつか必ず話すから。信じていてくれ」

『……分かったわ。悪かったわね。こんな遅くに電話して』

「いや。気にしなくていいよ。おやすみ、アリサ」

『おやすみ』

電話が切れる。思いつきり携帯を床に叩きつけたい衝動にかられたけど、何とか抑える。携帯を仕舞って、道場の一角にぶら下がっているサンドバックに近づいて、思うように蹴る。

一発、二発。その内、拳でも攻撃するようになり、それから、力尽きて倒れるまで攻撃を続けていた。

数日後。事件は起こった。アリサがなののはに対してキレたのだ。

「いい加減にしなさいよ!!」とアリサの怒声が教室内に響いた。

「この間から何話しても上の空で、ぼーっとして……」

「ご、ごめんね。アリサちゃん」

「ごめんじゃない! 私達と話してるのが、そんなに退屈なら、一人でいくらでもぼーっとしてればいいじゃない!! 行くよ! すずか!」

そう言っつて教室を出ていくアリサ。慌ててアリサを追いかけて、階段に入る前で捕まえた。アリサ、と声をかけると振り向きざまに胸倉を掴まれた。

「な、何故に?」

「……」

何も言わない。ただ無言で俺の胸倉を掴んでいるだけ。少ししてすずかも合流して、俺とアリサの状況に戸惑う。

暫く、気まずい空気が続きアリサが唐突に手を離して、階段を降りて行った。

「アリサちゃん！」

「アリサ！」

慌てて呼び止める。階段の下から、俺達の方を見ながら「何よ」と不機嫌そうに言ってきた。

「何で怒ってるのか、何となく分かるけど、駄目だよ。あんまり怒っちゃ」

「だってむかつくわ！悩んでるのも困ってるのも見え見えじゃない！なのに、私達には何も教えてくれない！浩樹は知ってるのに！」

「浩樹君、なのはちゃんの悩み、知ってるの？」

「……ああ、まあ」

「そっか……」

「私だって、少しは役に立ってあげたいのに！何も出来ないかもしれないけど、でも、少なくとも一緒に悩んであげられるじゃない！」

そういうアリサは本当にまっすぐだなと思う。すずかはアリサの言葉に頷き、「やっぱりアリサちゃんも、なのはちゃんの事大好きなんだよね」とそう言った。

「そんなの当たり前じゃないの！」

「おお、口に出して言えるのが凄いな」

「ていうか！あんたはなのはの悩みを知ってるんだから、ちゃんと助けてあげなさいよ！」

「そのつもりだけどな。今の俺は何も出来ないし、一緒に悩んでもあげられないんだが」

「何だよー！」

「なのはが何も話さないからな。目下、あいつの相談相手はユーノだ」

そう思うと捻り潰したくなつたな。

アリサが続けて何かを言う前に『三年、高坂浩樹君。至急、職員室まで来て下さい。繰り返しです』と放送による呼び出し。はて、何かやっただろうか？全く記憶にないな。

「あんた、何かやったの？」

「いや。全然覚えがない。とりあえず行ってくる」

「いつてらっしゃい、浩樹君」

「ああ」

すずかに答えて、アリサを追い越して階段を駆け降りる。その背中に「浩樹！！」と声をかけられた。

「何？アリサ」

「今のなのはを助けてあげられるのはあんただけなんだから、しっかりしなさいよね！」

「……ああ。アリサやすずかの分まで頑張ってみる」

「頑張らなくてもいいから、成し遂げなさい！！」

アリサの言葉に苦笑しながら片手を挙げるだけで答えて、再び走り始める。

職員室で俺を待っていたのは、担任の教師からの伝言だった。

「校長室？」

ああ、と頷いた体育担当の先生に会釈だけして退室し、校長室に入る。中にいたのは担任と校長。それに、見覚えのない生徒と女性。何となく面影があるから、恐らく生徒の母親だろう。

「俺って何かしましたか？」

「とりあえず、席に座って？高坂君」

担任の教師に促され、母子の前の席に座る。生徒の方が親の敵を見るような目で俺を見てきたけど、気が付かない振りをする。それじゃあ、と上座で親子側に立っていた担任が口を開いた。

「えつとね、高坂君。こちら、上越さんって言うんだけど、聞き覚えはあるかな？」

「はい？上越さん、上越さん……。知り合いに一人、上越さんは居ない事はないですけど」

「その人、どんな人？」

「ある道場で師範代を」

言いきる前に生徒が掴みかかってきた。アリサならともかく、こんな奴に掴まれるのはごめんだったから、手を弾いて、額に手を当て思いつきり押し返し、椅子に座り直させる。

その行動で何故呼ばれたのか納得がいき、思わず溜息をついた。その反応が許せなかったのか、母親までこちらを睨みつけて来た。

「上越君、落ち着いて！高坂君。分かっているかもしれないけど、今日呼んだのは上越君のお父さんの話なの」

「話す事なんて無いですよ」

再び生徒が身を乗り出してきた。さっきの事もあつてか、机を思いつきり叩くだけで、後は睨みつけてくるだけ。そんな中、「夫は」と母親が口火を切った。

「今、家で何もする事無く、お酒におぼれています。何故だか分りますか、高坂さん」

「師範代が弱いから」

「違う！お前が卑怯な手を使わなければ良かったんだ！そうしたら、こんな事にならなかつた！」

吠える生徒を止めようとする担任を無視して、言葉を選ぶ事無く思つた通りに告げる。

「卑怯な手？どんな手だよ。薬でも盛つたか？闇打ちしたか？複数人相手だったか？ここに來たつて事は、調べたんだろ、それ位」

「ぐ。それは……。で、でも！お前みたいな子どもが卑怯な手を使わないで勝てる訳ないだろ！それか、父さんが手加減したから勝てたんだ！」

「……校長先生。すいません」

立ちあがつて拳を振り上げて。思いつきり机に振り下ろす。ガン！と大きな音が部屋内に響き、机に俺が拳を振りおろした場所を中心に放射状の線が出來た。

それを見て、生徒だけでなく部屋にいる大人たち全員が息を飲む。押し切るチャンスとか関係なく、苛立ちから言葉を發した。

「お前が勝手に俺に濡れ衣着せようと、それはどうでもいい。だがな。俺の今までも否定したり侮辱する言葉は許さん。取り消せ、糞野郎。卑怯な手を使わないと勝てない？手加減されたから勝つた？」

ふざけるなよ。もし俺だったら、卑怯な手を使われたとしたら、気が付く。手加減が必要かどうかは相手を見れば分かる。しないけどな。そういう事だよ。卑怯な手を使われて気がつかなかつたり、相手を見誤って手加減したりした時点で、やっぱりあの男は俺より弱いんだよ。

いいか？俺があいつに挑戦して、あいつは俺の挑戦を受けた。そして俺が勝って今に至る。家に一日中いて、酒に溺れてる？だからどうした。俺には関係ない。それはあいつが弱いからだ。一度の敗北で心が折れたあいつが弱い、それだけだ。負かした俺に非は無い

そもそも。俺があいつ相手に卑怯な手なんか使う必要無いだろ。良くて五分。最悪、俺の方が上だったんだから」

椅子から立ち上がって、戸に向かう。一番に我に返った生徒が「待て！」と怒鳴ってきたから、振り返って一睨みして黙らせる。そのまま去ろうとして、再び「待ちなさい」と呼び止められた。今度は母親。怒りは残っているが、おだやかな表情だったから、睨むのは止めて言葉を待つ。

「夫に。何か伝言は？」

「無い。勝者が敗者にかける言葉なんてな」

「そうですね。なら、悔しかったら、鍛え直してかかってきやがれ、と伝えておきますね」

「……好きにしてくれ。ああ、先生。俺は校長室のテーブルを壊したので、反省の為に早退します。失礼しました」

何か言われる前に、さっさと逃げるに限る。だからこそ、今だ呆然としていた教師に一方的に告げて、部屋を出た。

教室に戻りながら、さつき自分で言った言葉を思い出す。

「俺の今までを否定することは許さん、か」

本気でキレたから、多分俺の本音なのだろう。

俺の今まで。多分、その今までは幼稚園の頃の決意からの事だろう。

「……ああ、くそ。あんな奴に気がつかされるとは」

簡単じゃないか。なのはの事を守る。その為に力をつけて来た。だからこそジュエルシード集めで、あまりにも自分が不甲斐無い事がかなりイライラしていたけど、ようは俺が自分自身でされたら嫌な事を自分にしていただけじゃないか。

「なのはを守れなきゃ、今度こそ俺は自分が大嫌いになるな」

なのはを守りたいって決意も、自分の今までを否定するという行動も。結局その二つが帰結するのは同じ所なのだから。

「ただいま」

「あ、浩樹。さつきは何で呼び出されたのよ」

「ん〜、大したことじゃないよ、アリサ。まあ、早退はするけどな」

さっさと荷物を纏めて、足早に教室を去る。

『なあ、なのは』

『？何、浩樹君』

『フェイトの事もあるけどさ。アリサとすずかの事を心配掛けたくないし、さっさと終わらせよう、ジュエルシード集め』

『……うん』

後ろからのアリスの声にヒラヒラと手を振るだけで答えて、俺はさっさと学校を後にした。

第六話 〈気持ちの発言と発現〉（後書き）

ごま「第六話。書き溜めが切れた」

浩樹「早っ!？」

ごま「遊戯王の連載SS書き始めたからなあ」

浩樹「自業自得だな」

ごま「それに自動車の教習所とかで色々時間が取れない」

浩樹「まあ、それはしゃあない……のか？」

ごま「このままだと連載が無くなるから、次回は番外編です」

浩樹「ここで逃げに!？」

ごま「原作通りに進められないから、次回は完全オリジナルの番外にするだけだよ?」

浩樹「その時間を連載に充てれば……」

ごま「遊戯王って、久々にやると面白いな!」

浩樹「誤魔化すの下手だな!？」

ごま「5d・sが予想以上に面白くなってきた」

浩樹「懐かしいカードのオンパレード。ぜひ、チーム太陽に勝ってほしいな」

ごま「俺はキーメイスがいれば満足だぜ！」

浩樹「なんでまた!？」

ごま「でも神炎皇ウリアのが好きだぜ！」

浩樹「まったくカードのベクトルとか色々なモノが違う!？」

ごま「てな訳で今回はここまで！」

浩樹「何このハイテンションすぎるあとがき!？」

ごま「また次回!！」

浩樹「え〜」

浩樹「で?なんでこんなにあとがきがハイテンションだったんだ?」

ごま「最新話をあげても評価のポイントとかに変化が無くて……」

浩樹「ああ……」

第七話 く知り得ない理由と決意く（前書き）

オリ主による、リリカルなのは再編ものです。よろしければどうぞ。

読んでいる間が、貴方にとって苦痛で無い事を願って……。

第七話 知り得ない理由と決意

あの時、会わなければ良かった。言葉を交わさなければ、俺はためらう事は無かった。でも、会ってしまったて、言葉を交わしてしまった。だからこそ……。

「持ってけ、フェイト」

腕をボロボロにしてまで、文字通りの死力を尽くして封印したジユエルシードを、俺はフェイトに渡してしまった。

〈数時間前〉

「失敗した……」

ジユエルシードを探して、あっちこっち歩き回っていて、何も考えずに交番の前を通りかかってしまった。結果は言わずもがな。呼び止められてお話しろって強要されて、拳銃にお説教コースだ。

即座に判断して、逃走を開始したものの、追って来る警官がまじめ過ぎて、かなりの時間逃げてるのに一向に引き離せない。くそ、陸上経験者でもあるのか。

「待ちなさい、その子ども！」

怒鳴る警官を無視して、走って走ってようやく撒いた。

「一度帰って、私服に着替えて正解だったな。制服のままだったら、また学校まで来られたかもしれんし」

壁に寄り掛かって、途中で買ったスポーツドリンクを飲みながら、ぼんやりと人込みを眺めながら、ユーノに教わった方法でジュエルシードを探す。

まだ慣れてないから、時間もかかるけど、闇雲に歩き回るよりは探しやすい。

「ジュエルシードは全部で21。その内、なのはが5、フェイトが俺達が関わったもの以外で見つけてなければ3。半分にも満たないのか」

スポーツドリンクの蓋を閉めてから、壁から離れて歩きだす。右も左も人やらビルやらでどうにも探しづらい。せめて発動すれば分かりやすいんだろうけど、この街中で、そんな派手な事になったらと思うと、あまりいい気はしない。

「発動前を抑えられれば、それに越したことは無いんだが」

はぁ、と溜息をつきながら横断歩道で赤信号が変わるのを待つ。ふと、視線に気が付いて顔を上げた。車道を挟んだ向こうの歩道で同じように信号待ちをしている人達の中に、彼女の姿があった。

僅かながらに浮かんでいる感情は驚きと困惑だろうか。まさかここで会う事になるとは思わなかったのだろう。俺だってそうだ。少し悩んでから、念話をつなげる。

『久しぶりだな』

ビクッ、とフェイトの肩が跳ねた。

『そう、だね』

『やっぱり、この町にいたのか。あれから、ジュエルシード探しはどうだ？』

『……君には関係は無いよ』

信号が青に変わっても、お互いにその場を動かない。通る人たちが迷惑そうな目でこちらを見てくるが、動いたら壊れてしまいそうな、そんな空気が俺とフェイトの間にはあった。

『その様子じゃ、あの温泉から見つけてないみたいだな』

『それはそっちも同じ、みたいだね。そういえば、あの温泉の日は白い女の子しか来なかったけど』

『心配してくれたのか？』

『……』

否定も肯定も無い。意外な反応だったけど、やっぱりと思う。なのはがフェイトに対して得た印象と俺がフェイトに対して得た印象は同じものだった。満場一致で彼女は優しい子。だからこそ、なのはは次に彼女と会ったら話がしたいと言っていた。

『なあ、フェイト』

『何？』

『前も聞いたが。なんでお前はジュエルシードを集めてる？俺はユニノの手伝いってのもあるし、なのはを助けたいからって言うのもある。お前はなんで？』

言葉は無い。その内、信号が赤に変わって、再び車が道を行きか
い始めた。

『関係無いは今度こそ無しにしてくれ。お互いジュエルシードを集めて
いる以上、これ以上理由も知らないでぶつかりあうのはごめん

だ

『……………母さんの為』

Sideフェイト

『母親の？』

戸惑い気味にそう尋ねてきた、私と同じ黒い服の子。初めて会った時はあからさまに悪人という感じの笑みを浮かべていた彼は、今、道路を挟んだ向こうで戸惑いの表情を浮かべていた。

『どういう意味だ？』

『意味も何もないよ。そのままの意味』

向こうにいる彼は、本当に分からないらしい。腕を組んで首を傾げていた。その様子が、どこか彼に似合わなくて、しかもどこか愛らしい気もする。

思わずクスクスと笑ってしまつて、それを彼に見咎められた。

『どうした？』

『何でも無いよ。それよりも。私の理由は、それなんだけど』

『そうか。すまん。良く分からん』

『本気……………みたいだね』

むう、とわざわざ呟いて、少し悩んでから『つまり……………』と彼は言つた。

『家族の為と、そういう意味か？』

『家族……………』

そう言われて思い出すのは、使い魔のアルフに私に色々な事を教えてくれたリニス。そして、何時の頃からか、急に変ってしまった母さん。

『……うん、そうだね』

『そうか』

私も彼も無言になる。信号は再び変わって青から赤になってしまった。

『なあ』

『何？』

『自己紹介、まだだったよな。俺はなのはから聞いてたから知ってたけどさ』

『そう、だね』

『改めてって言うとおかしいけど。高坂浩樹だ』
『フェイト・テストロツサ』

再び信号が青に変わって、浩樹はこちらに向かって歩き始めた。私も同じように歩き始める。すれ違いざまに浩樹が言った。

「俺にはよく分からないけど、無理だけはしない方がいいと思うぞ」
横断歩道を渡りきった所で振り返ってみても、浩樹の姿は見当たらなかった。

Side out

家族の為。そう言ったフエイトの言葉が良く分からず、気が付いたら家に帰ってきていた。しょうがなく、いつも通り道場で瞑想しながら考えていると、人の気配がした。

「意外と早く帰って来たな、じいちゃん」

「早く着いたからな。お前こそ、まだ学校にいる時間じゃないのか？」

「もうとっくに終わってるってば」

「そうか」

それだけ言って、家に戻ろうとしたじいちゃんを引き留めた。

「どうした？」

「えーと……」

少し、本当に少しだけ悩んでから、とりあえず思った通りに口にすることをにした。

「家族の為ってどういう事？」

「それはまた。随分と唐突な質問だな。どうした、急に？」

「ちよつとね。色々あって」

はあ、と溜息。思い出すのは、今日会った彼女の、母親の為と言った彼女の瞳。全く揺るぎ無い物で、あんな瞳を見たのは久しぶりだった。

「父親も母親もいない俺からしてみれば、じいちゃんは唯一の家族だけどさ。じいちゃんって、俺に頼まないで、大体何でも一人でやるでしょ」

「まだお前に家事以外で頼む事など無いからな」

「だから、分からなくて。あそこまでどうして強い意志が持てるのか」

幼稚園の頃、じいちゃんに聞いた事がある。何で俺には父親も母親もいないのか。その時のじいちゃんは旅行に行つてて帰っていないと、そう言っていた。

まあ、流石にこの年にもなれば物心ついた頃から家にいない親がつまりどういう事なのかは分かるけど。まだ年齢一桁だけだね。

考えてから、じいちゃんは口を開いた。

「人それぞれ、そう言ってしまうえば、それだけなのだろうが」

「なんか違うくない？それ」

「家族ではなく友人で考えてみるといい。たとえば、隣の高町の家
の娘とかな」

「なのは？美由紀さんもいるけど」

「その娘が仮にお前に何かを望んだら、お前はどつする？」

「叶える。よつぼどの事がない限り」

流石に世界征服とかは無理だしね。頼まれないだろうけど。

「お前の悩みの種はつまりそういう事なのだろう。お前が高町の家
の娘や他の友人達に向ける想いをその悩みの種は家族に向けている。
それだけのことだ」

「……」

そう言われるとしっくりくる。だからこそ、今後の事を思うと、頭
が痛くなってきた。悪い子じゃない事は分かっていたけど……。

「戦う相手にしたら最悪の部類だな」

「浩樹」

「何？じいちゃん」

「お前が何をやっているのかは知らん。お前が話さんし、隠しているようだからな」

ばれてやがる。これでも本気で隠していたつもりだったんだけど…。

「危険な事をするなど言っても無駄だろうから言わんが、一つ約束しろ」

「何を？」

「必ず帰って来い。お前の家は、此処だ」

「大げさだつて。分かつてるよ。約束は守る」

立ちあがって首を鳴らす。そのままじいちゃんの脇を抜けて、置いてあった靴をはき、家ではなく門の方に向かう。

「出かけるのか？」

「うん。夕飯までには帰って来るよ」

家を出て、ビル街の方に向かいながら、ふと気が付いて空を見た。何故か空の一部を雷雲が覆っている。

「まずい、かな」

飛ぶ事を意識して、周りに誰もいない事を確認してから、飛行魔法と防御魔法発動。出来るだけ速く、飛んだ。

「なんか、雷雲とは違う感じにまずそうだな……」

あれから、恐らくユーノが張ったであろう結界に包まれ、雷雲後に出て来た光の柱の根元まで飛んでいる最中に遠くで何かあった。二色の閃光がぶつかり合ったり、片方が何かを飛ばしたりと戦闘らしい。

恐らくなのはとフェイトがぶつかっていたんだろう。そして、その後沈静したと思った直後に謎の爆発が起こった。ビルなどは壊れていなかったけど、猛烈に煽られてバランスが崩れて、地面に落ちる。

「くそっ！」

痛みを無理矢理抑え込んで、ほとんど残っていない距離を一気に詰めて、フェイトが手に取るうとしたジュエルシードを、横から掠め取る。

その勢いのまま距離を開け、ジュエルシードを強く握ったまま、歯を食いしばった。

いつもと全然違う。封印しようにも逆にそこから流れ込んでくる力に侵されそうになる。

「ぐっ！が!？」

きていた服の袖がはじけ飛び、腕の中を何かが這いずりまわる不快感のようなものを感じる。その内、腕が耐えきれなくなり、あちこちに傷が出来始めるが、それでも耐えて、そしてジュエルシードが行動を止めた。

「はあ、はあ」

体中から汗が流れて、落ちた時を含めた様々な痛みがぶり返してき

て意識が飛びそうになるのを、顔を殴った新しい痛みで何とか耐える。
顔を上げるとフェイトと目があつた。その手には珍しく愛機は握られていない。

「数時間ぶりだな、フェイト」

「……」

何も言わない。その顔に浮かんでいるのは、敵意と困惑と……不安？

「どうした？」

「何が？」

「敵意は分かる。困惑もだ。じゃあ、何でそんなに不安そうな顔をしてる？」

「え？」

ポーカーフェイスの顔に少しだけ表情が浮かんだ。その後、若干わたわたしてる。そんなフェイトに目を向けたまま、他のみんなを意識する。

なのはとユーノは……戸惑ってるなあ。いきなり現れたからしょうがないけど。犬の方は隙あらばジュエルシードを奪わんとしてるな。と言つても、体中痛くて、右手は使えないから今日は戦いたくないかなあ。

「という訳で今回はやるよ」

ジュエルシードをフェイト向かって放り投げる。慌ててそれを受け取って、こちらを見るフェイト。なのはとユーノ、犬は未だに状況つかめてないってのに。

「どづいつつもり？」

「戦えないのはお互い様だろ？でも、そっちはあの犬がいる訳だし、戦えないからな」

「犬じゃないよ。アルフ」

「じゃあ、アルフがいるからな。勝ち目がない」

それにやるんだったら万全の状態でやりたいからな。次回の為に、今日は我慢。

「もってけよ。とりあえず、預けとく」

「……行こう、アルフ」

フェイトが飛び、一度だけ振りかえってからそのまま飛んで行った。アルフもその後を追い、途中で止まって俺の方を見る。

「なに？」

「……なんでもないよ」

そのまま飛んで行ってしまった。

そのまま姿が見えなくなるまで見送ってから、俺はなのはとユーノに近づいた。

さて、言い訳なんてするつもりはないけど、何でなのかの訳を話すと面倒だし、今回も上手く誤魔化そうか。

第七話　く知り得ない理由と決意く（後書き）

ごま「第七話。書き溜めていたものがとうとう切れた」

浩樹「早いな」

ごま「とりあえず、遊戯王はこの連載が終わるまで中断かなあ」

浩樹「だろうな」

ごま「それはそうと、原作六話後半から七話冒頭までのお話です。若干変わって、映画が入ったような・・・」

浩樹「まさか街中でフェイトと会うことになるとはなあ」

ごま「浩樹視点オンリーのはずだったのに、まさかのフェイト視点。はたして、今後、視点の変更はあるのか!？」

浩樹「そこはあまり楽しみにしないでいいですから、次回も楽しみにしていただけたら嬉しいです」

ごま「あと、評価を……ください……。一言でいいんで、感想とかアドバイスとかも……」

浩樹「必死な」

ごま「うう」

浩樹「はあ、では。今回はここまでです」

「ま」「ま」「ま」まで読んでおっ、ありがとうございます！

「ご・浩」では次回！

閑話 〳例えばこんなプロローグ〳(前書き)

サブタイトルを若干変更しました

閑話　く例えばこんなプロローグ

Sideなのは

はじめまして。高町なのは、小学校二年生です。現在、来るべきイベントの為に、色々頭を悩ませてます。

「うーん……」

「どうしたのよ、なのは」

私が教室で頭を悩ませていると、アリサちゃんが私に話しかけてきた。すずかちゃんも一緒にいる。

「えっと、もうすぐ誕生日なんだ」

「え？なのはの誕生日はまだ先でしょう」

「私じゃなくて。浩樹君だよ」

そう。五月十日は私の幼稚園に入る前からのお友達で近所さんの高坂浩樹君の誕生日なんです。まだ先、と言ってももう後五日。今まで誕生日を祝った事がなかったから、何を上げたりしたらいいかわからなかったりします。

「祝った事無かったの？」

「うん。浩樹君、誕生日忘れてるみたいで。浩樹君に聞いても、誕生日分からなかったから」

「あいつは……」

此処にはいない浩樹君の事を思い出して、アリサちゃんが苦い顔。実際、浩樹君の誕生日を知る事が出来たのはつい昨日。たまたま町

で浩樹君のおじいちゃんに会って、その時聞いたから。誕生日がもうすぐと聞いた時から、ずっと悩んでいるんだけど、同年代の男の子が何を喜ぶのかなんて分かりません。

「浩樹のおじいちゃんは何あげたのかとか聞いてないの？」

「今度の誕生日で新しい手袋を買ってあげるって言った」

「そつえば浩樹君。ずっと手袋付けてるよね」

「なんかそれ聞いたら、変な事言ってたわね。俺の右手には鬼が封印されててどうたらこうたら」

「私、左手に第三の目があるって言われたよ」

「にはは」

本当の理由は違うのだけど。浩樹君が話してないんだから、私が話さない方がいいかな？

とにかく、今まで私は今まで祝って貰ってばかりだったんだから、これを機に祝ってあげたい。その為にもまずは喜ばれるプレゼントを考えよう。

Side 浩樹

最近、なのはの様子がおかしい。それに気が付いたのは五月九日の事だった。今思い返してみると、六日辺りからおかしかったような気がする。日に日におかしくなっていってたな。

今も今とで、バスを待ちながら、ずっと唸っている。なにかあったのだろうか？

「なのは？」

「……」

「おーい、なのはー」

「ほえ？」

ようやく反応した。はあ、と溜息をついて、なのはのツインテールの片方を弄る。指でくるくる回したり、くいくいと軽く引っ張ってみたり。

「なにをするのー」

反応して、パタパタと腕を振って手を払いのけられた。とりあえず、それ以上の追撃は止め、何かあったのか、と問いかけてみる。

「な、なにが？」

「何がじゃないだろう。最近変だぞ。なのは。話しかけてもぼーっとしてるし、何かあったのか？」

「だ、大丈夫、大丈夫。全然大丈夫だよ？」

「大丈夫って三回も言ったな」

逆に不安になるから不思議だ。その内バスが来て、なのはが逃げようにして乗り込んだ。追いかけたけど、既にアリサやすすずかと合流していたから、聞くに聞けず、結局その日は聞く事が出来なかった。

S i d e なのは

あ、危なかった。

バスが来なかつたら、多分押し切られて、話す事になっていたと思う。どうせだつたら、驚かせたいから、何とか明日まで気が付かないようにしたい。とはいえ、肝心のプレゼントはまだ決まっていないのだが。

「どうでしょう……」

私のお小遣いだって限られてる。浩樹君に興味とかがあれば別なんだろうけど、そう言った話は浩樹君から聞いた事がない。強いて言えば、読書をしている姿は時々見るけど、色々読んで、何をあげたらいいか分からない。

「他には……」

包帯とかの治療道具とか。あれだったら、しょっちゅう生傷を作る浩樹君にぴったりかもしれない。でも、それは何か違うような気がする。

「お菓子とか？」

結構甘いものが好きだったし。喜ぶかも。……でも翠屋の売れ残ったケーキとかあげてるし、一日で作れるようになるとも思えないし。ああ、どうしょ。

頭を抱えていると、またツインテールが引っ張られた。顔をあげるとアリサちゃんとすずかちゃんがいた。

「アンタ、まだ悩んでるの？」

「うん……」

「あんまり難しく考えなくて、いいんじゃないかな？」

「すずかの言う通りよ。あいつはなのはから貰ったらどんな物だろうと無条件で喜ぶんだから、適当でいいのよ」

「アリサちゃん……。流石にそれはどうかと思うよ？」

「うぐ……。と、とりあえずなのは」

「何？」

「今の所、どんなプレゼントの候補があるのか、言ってみなさいよ」
誤魔化した。誤魔化せてないけど。

「えっと、本、救急セット、お菓子」

「え？最初と最後はともかく、真ん中は何？」

「浩樹君、よく怪我するから。どうかなって」

「無いと思うわ」「無いと思うな」

同時に否定されてしまった。一番喜ばれそうなのに……。でも確かにプレゼントで救急セットは変かな。それにしても他に何か喜ばれそうなものあるかな。

「アリサちゃんは何か案ある？」

「ぐっ」

黙ってしまった。……。

「そんな案があるなら、アリサちゃんがプレゼントするよね？」

「黙ってなさい、すずか!!」

顔を真っ赤にしてる。てかアリサちゃん、それ本当？そっいえば、一年生の頃に何かあったような気がする……。

「……」

「な、なのは？なんか、怖い顔してるわよ？」

「ほえ？」

心なしかすずかちゃんも若干引いてる気がする。私、そんな顔して

たのかな？それよりも、今は浩樹君の誕生日プレゼントだよ。

「どうしようかなあ」

「でも、浩樹君なら確かになのはちゃんから貰った物は何でも喜ぶと思うけど、変に凝った物じゃなくてもいいんじゃないかな？」

「うーん……」

そう言われても……。

結局、決められないまま、時間だけが過ぎて行った。

Side 浩樹

「と、いう訳なのだけど、何か分からないか？はやて」

アリサとすずかに聞いても教えてくれないから、同年代の女友達という事で、少し前に図書館で知り合ったはやてに何か心当たりがないか聞いてみた。

ちなみに今いるのは図書館だ。もしかしたらはやてがいるんじゃないかと思つて、来たらいた。いやあ、よかつたよかつた。

「いや、全く分からないで？もつと詳しく説明してくれないと」

「少し前から幼馴染の女の子の様子が変。理由が不明。何か心当たりがないかなと」

「その幼馴染の女の子のこと全く知らへんのに、理由が分かる訳ないやん。何か言つてたりしてへんかったの？」

「うーんと、『あーでもない、こーでもない』つて言つてた」「考える気ある？」

「冗談冗談。でも何かプレゼントを考えてみたいだな」

そう……、それきり少し悩んだ様子のはやて。

「何か、イベントでもあるんとちゃう？」

「イベント？」

「うん。何か心当たりあらへんの？誰かの誕生日とか」

「むう」

イベント、イベントか。はて、プレゼントを贈るようなイベントなんてあったか？なのはの誕生日はまだ先だし、アリサもすずかもそうだし。高町家の人達の誕生日も先だ。

「思いつかない」

「ほんまか？何か忘れてるんとちゃう？あんがい、自分の誕生日を忘れてたりして」

「俺の？……はて？いつだったか？」

「おいおい」

「ちよつと待つて。えーと……」

そういえば、この時期にじいちゃんからプレゼントをもらつ日があつたな。確かそれは明日か。

「五月十日」

「何が？」

「俺の誕生日。多分五月十日」

「明日やん!？」

「……おお！でも、俺の誕生日知らないと思うぞ」

「へ？」

「だって、俺自身が誕生日忘れてて、誕生日教えた記憶ないから」

「でも、なんか知つたきつかけがあつたかもしれへんし。一番確率が高いのがそれやで？」

まあ確かにそうだけど。でもそれだったら嬉しい。

「期待しないで待ってる事にしよう」

「いやいや。期待くらいしてもええやん」

「んじゃ、そうするよ」

開いていた本を閉じて、はやてに渡した。

「借りんの？」

「相談にのってくれたお礼って事で。まあ、返す時には教えてくれ。そのまま借りるから」

「了解。なるべく早く返すな」

「ああ」

そして翌日。

「なのは。悩みごとはもうすんだのか？」

「うん！昨日の夜に」

「そっか。なら良かった」

個人的にはなのはがいるだけでも満足だけど。それでも、彼女から何か貰えるのなら、それはかなり嬉しい事だなあ、なんて。

Sideなのは。

放課後。私は浩樹君へのプレゼントを買う為に町に来ていた。昨日

の夜、考えに考え抜いた揚句、私が決めたプレゼント。値段的にも手ごろだし、浩樹君も喜んでくれると思う。でも、予測できるはずだったのに、予測できなかった事態に陥ってしまった。

「え？売り切れ？」

「はい。申し訳ありません」

少し前に町に来た時（アリサちゃんに荷物持ちという事で、無理矢理連れて来られた）浩樹君がショーウインドの中を覗き込んで、いいなあ、とぼそりと呟いた、それ。プレゼントにしようと思っていたそれは、既に誰かに買われていた。

ありがとうございます！、という店員さんの言葉を背に、店内から出た私は途方に暮れてしまった。他のプレゼントじゃ駄目だ。あんまり自分の意見や感情を表に出さない浩樹君が、初めて素直に欲しかった姿を見たあれじゃないと。

「他のお店にも売ってるかも」

幸いにも雨は小ぶりだ。今のうちに回れるだけ、お店を回ろう。そう思っ、私は雨の中を走り始めた。

Side 浩樹

午後から急に天気が崩れ始め、空を雨雲が覆っていて、一時的に降水量が少なくなったにもかかわらず、今はこの時期にしては珍しくこれでもかという位に雨が降っていた。

そんな中を、傘を片手に俺は走り回っていた。理由は単純でなのは

が帰っていないらしい。電話越しに聞かれた瞬間、飛びだしていた。

「どこ行っただよ、なのは」

傘を差しているから走り辛い。考える事無く、差していた傘を閉じて、走る速度をあげた。既に高町家の人達が見つけたのならいいけど、そうじゃないのなら此处で休むわけにはいかない。彼女を一人にはしたくない。

「つつても、この時間は人通りが多いな」

右も左も人だらけだ。たださえ雨で視界が悪いのに、これだけ人が多いと捜し辛い。

その内、後ろから「浩樹ー！」と呼びかけられた。立ち止まって、振り返るとアリサとすずかがこちらに向かって来ていた。

「アリサ。すずかも。どうした？」

「どうしたじゃないわよ！なのはが行方不明って聞いて、慌てて探しに来ただから」

「そこまで大袈裟じゃないと思うが」

「とにかく！あんたはあっち探しなさい！」

「ああ。アリサとすずかはあっちを頼む」

「分かってるわよ！それより、何であんた、傘差してないの？」

「走り辛くてな。とにかく頼んだ」

アリサとすずかの返事を聞く事無く、振り返って、再び走り始めた。探していないあたりを思い出しつつ、全力で走った。

走って走って。それでも見つからず、流石に息が切れて来た。

「あと、探していないあたりは……」

住宅街の方は見たし、遠見市の方まで見たのだが。後行っていないあたりとなると、海浜公園だろうか。

「よし」

そこに行っていなかったら、一度高町家に連絡して、帰っていないか確認しよう。

Sideなのは

ありそうなお店もなさそうなお店も確認するだけ確認して、結局見つけることは出来なかった。

「はあ。どうしょ」

空を見上げると、雨は未だに降り続けていた。止みそうな気配は無く、公園の木の下で雨宿りをしたまま、かれこれどれくらいの時間が経っただろうか。

「お母さん達、心配してるよね」

この雨の中を走って帰るといふ選択肢もあったけど、その内小雨になるんじゃないかと思っているうちに、逆に強くなってしまった。

「運悪いなあ」

「俺の方がな」

振り返ると体中ぐっしょりと濡らした浩樹君が立っていた。

S i d e 浩樹

なのは訳が分からないという顔をしている。気持ちは分かるが、とりあえずなのは入っている木陰に俺も入り、生憎拭く物は無いが。

「えっと、使う?」

「使う」

差し出されたハンカチを受け取って、拭けるだけ拭く。まあ、このままいても風邪ひきそうだし、さっさと帰りたい。

「帰るぞ。このままじゃ風邪ひきそうだ」

「あ、そうだね。所で傘は?」

「ん?……ああ、これしかない」

持っていた傘を差し出す。「ええと」と困った様子なのは。だっしょうがないじゃん。なのはが行方不明って聞いて慌ててたんだもん。それこそもう一本の傘を持ってくる事忘れるくらい。

「どうせもう濡れてるし、使っていいぞ、なのは」

「そ、そんなの駄目だよ!だって、浩樹君、風邪ひくかもしれないし」

「そこはほら、鍛えてるから」

「さっき、浩樹君も風邪ひきそうだって言ってたよね!？」

「何の事だ？」

まったく。俺がそんな事言う訳無いじゃないか。

「いいから一緒に帰ろう？」

「……………ああ。そうだな」

傘を差してなのはもその傘に入る。ふと思い出して、なのはに尋ねた。

「そついやなのは。今日買い物に行つたんじゃないのか？」

ビクツとなのはの肩が跳ねた。そのまま頭を垂れる。そして「ごめんね」と呟いた。

「何が？」

「浩樹君の誕生日プレゼント、買えなかったの。ほら、前、ショーウィンドウ見て、いいなって言つてたやつ、あつたでしょ？」

「……………ああ、あれか。それなら俺が持つてるぞ？」

「ほえ？」

「なのはのプレゼントにちょうどいいと思つて、あの後買ったんだ。なのはに似合いそうだったし」

「……………じゃあ、浩樹君が欲しかった訳じゃないの？」

「プレゼント的な意味合いでは欲しかったけど、俺は別に」
「……………」

ズーン、とさらに落ち込んでしまった。少し考えて思い出して。なのはの髪を結っていたリボンを取った。

「浩樹君？」

「プレゼントで、このリボンを買ってもいいか？」

「え？うん。まだ、他にもあるし」

「そっか」

最近髪が伸びて来たから散髪に行こうと思っていた所だ。結ぶにはまだ若干短いけど、それでも結べない長さじゃない。

貰ったりリボンをポケットにしまって、開いている方の手でなのはの頭を撫でた。

「ありがと、なのは」

「え、あ。どういたしまして」

「ああ」

……

……

…

ムクリと体を起こした。若干堅くなっている体をほぐして、洗面所に向かう。まだ、頭が半分眠っているらしく、ひどい顔だ。冷水で顔を洗ってから、気合を入れる為に少し強めに頬を叩く。

「まだ少し眠いな。もう少し寝てたい」

こんな風に思うのも、あの夢が理由だろう。あの手の夢を見た時は大抵こう思うし。

「ああ、いい夢見たし、今日も頑張るかあ」

あの日、なのはから貰ったりボンであの頃より大分伸びた髪の毛を結って、鏡を見ておかしな所が無いかをチェック。

「うん。大丈夫だな」

登校まではまだまだ時間があるから、今日もいつも通りの鍛錬をこなす事にしよう。

さっさと着替えて外に出て。なのはの部屋の方を見ながら、おはよう、と呟く。

「さあ、頑張るとしますか」

そう宣言して、俺は走り始めた。

閑話 く例えばこんなプロローグく（後書き）

ごま「……」

浩樹「……」

ごま「……すみません」

浩樹「まさかの8日間放置。いくらなんでも予想外だ」

ごま「教習所が忙しかったのです。車の」

浩樹「で？」

ごま「すみません。いい訳です。せめて四日に一回くらいは上げています。でも、最高一週間は許して下さい」

浩樹「おいおい」

ごま「スランプ……というより、最近疲れが取れなくて。モチベーション上げるためにも」

浩樹「上げるためにも？」

ごま「15日のコミケットを楽しんでいます！..」

浩樹「えー」

ごま「そんな訳で 浩樹「どんなわけ!？」……そんな訳でまた次

回！
」

浩樹「最近あとがきが適当に……」

ごま「ここまで読んで下さった貴方に最大限の感謝を！ありがとうございます！
ございました！」

第八話 く停滞する物語と運命く（前書き）

オリ主による、リリカルなのは再編ものです。よろしければどうぞ。

第八話 　く停滞する物語と運命く

結論から言うとそれなりに大怪我だった。全治二週間。右腕は使用禁止だし、それ以外にも落下時の怪我で激しい運動は禁止。そのおかげで、今の俺は大分暇だ。

「だからって読書する気分でもないんだけどな」

「まあええやん。暇やったんやろ？」

「そりゃそうだが」

はあ、と溜息をつき、ページをめくる。その様子をニコニコと見ている車椅子の少女。名を八神はやて。さっきから本を読まず、じつところちらを見ている。

「なんだよ？」

「ん？何でもないよ」

なら見るなと言おうと思ったけど、一人でいたらとんどん暗くなりそうなのを拾ってもらったんだから、文句も言えない。

ニコニコしながらこちらを見るはやてと黙々と本を読み進める俺。

そんな中、口を開いたのははやての方だった。

「でも、珍しいな。浩樹君がそんな怪我、するなんて」

そう言うはやての目線の先には俺の右腕。指の先までびっしりと包帯が巻かれているその腕をじっと見ている。

「ま、ちよつとな」

「でも、何時も浩樹君が病院来る時って、大体健康診断やる？」
「確かにそうだが」

何で俺が病院に行っているのかを知っているのは、純粹にはやても同じ病院に通院しているからだ。それに加え、良くこの図書館で会うから、自然と仲良くなった。

今日は診察が終わり、帰る途中に病院内ではやてと遭遇。その足で図書館まで来た。否、連れて来させられた。

「たく、右手使えない人間に車椅子頼むなよ」

「でも、何だかんだ言いつつ、ちゃんと押してくれる、そんな浩樹

君が好きやで？」

「すまない。好みじゃない」

「ひどっ!？」

読んでいた本を閉じて、はやてに渡す。

「んじゃ、帰るな」

「え〜」

「え〜、じゃねえよ」

隣に行き、ポンポンと頭を数度叩いてから、改めて別れを言って図書館から去る。

暫く歩いた所で、携帯が鳴った。

画面には『非通知』の文字。少し悩んでから通話ボタンを押した。

「もしもし？」

『貴方が高坂浩樹君、かしら?』

「……………」

声からして若い女性。敵対心とかは無いけど、俺の携帯の番号を知っている理由が分からない以上、警戒は解けない。

『もしもし?』と電話越しに再び尋ねられて、反応を返した。

「ああ。俺が多分そっちが探してる高坂浩樹だ。で?そっちは何者?」

『時空管理局本局所属。リンディ・ハラウンと言います。以後お見知り置きを。高坂浩樹君』

「聞いた事無い組織だな。……ユーノの関係者か?」

『その答えは正解ではないけど、あながちはずれてもいないわね』

「そうかい。それで?わざわざ電話をかけて来たその理由は?」

『ちよつとお話をしたいから、来てもらえないかしら?』

お断りしたいが何時の間にか俺の前に立っていた同じくらいの身長
の奴に睨まれた。とりあえず睨み返す。友好的ではない事だけは確
かだし。

電話を切って、ポケットに仕舞い、ポケットに手を入れたま手袋を
はずす。我ながら器用だ。

「だれ?」

「時空管理局、クロノ・ハラウンだ。一緒に来てもらおう」

「お断りしたいのですが」

「そう言う訳にはいかない。ついて来て貰おうか」

そう言うて歩き始めたクロノ・ハラオウンの姿を見送る。少し歩いてからクロノ・ハラオウンが振り返った。少し顔が歪んだ。

足早にこちらに近づいてきて、腕を掴まれた。そのまま大外刈りの要領で投げる。受け身を取られた。

「おお、なかなか」

「いきなり何をするんだ君は」

「なんか偉そうだったから」

「気は済んだか？そうなら早く行きたいのだが」

そう言うて歩き始めた。もう一度ついて行かないを選択「早く来い」しようと思っただけでもうばれていたらしい。大人しくついて行く。

少し歩くと人気がない所に辿り着いた。そこになのはが魔法を使う時に出来るような魔法陣があった。

「此処に入るんだ」

「だが断「いいからは入れ」……はあ」

二人揃って陣の中に入る。光に包まれて、次の瞬間には別の場所
いた。

「ここは？」

「時空管理局所属の次元航行船L級8番艦アースラの中だ」

「じげんこーこーせん？まあ、それについてはよく分からんし、そ
もそもじくーかんりきよくってなんだ？」

「ちなみに聞くが。その喋り方はわざとか？似合わないぞ」

「訳のわからん言葉を並べられて、混乱しているって事を表現した
かっただけだ」

「なら普通に言えばいいだろう」

溜息をつかれた。とりあえず、先ほどの電話の主が待っているとい
う部屋に向かいがてら、時空管理局とか先ほどの移動方法とか分か
らない事を色々聞いた。

曰く、管理局は数ある次元世界の秩序を守る、要は警察のような組
織で、移動方法については転移魔法らしい。

「しかし、無駄に広いな」

「ああ。長い航海になる事もあるからな。色々施設もあるんだ」

「へえ」

「此処だ」

案内された先にいたのは長身の女性に見慣れたツインテールと見知らぬ女の子みたいな男。少し悩んでから、見慣れたツインテールに話を聞くことにした。

「で、なのは。隣にいる男は誰だ」

「そっち!？」

俺に突っ込みをいれたのは見知らぬ女の子みたいな男の方。はて？聞いたことある声だな。顔にはやはり見覚えはないが。

「誰だてめえ」

「……ユーノだよ。ユーノ・スクライア」

「人間に退化したのか？」

「浩樹にとっては人間のが下なの!？」

それはさておき。

「なんで人間の姿なんだ？」

「すごい話そらしたね。えっと、むしろこっちが本来の姿なんだけど」

曰わく、魔力回復につとめる為、燃費のいい姿にしていたらしい。

「もういいか？いいなら話を始めたいんだが」

そくだよな言ってきたのは確かクロノ・ハラウン。短気は損気って言葉を知らないのか。まあ、俺としてもさっさと終わるに越したことはないが。

そんなわけでさっさとなのは隣の腰を下ろした。

それから始まった話はどうにも壮大すぎて理解しがたい物だった。専門用語を使つての説明は止めてほしいけど。

俺としてはこの人のお茶の飲み方が気になる。

「あの」

「？何かしら、浩樹さん」

「その飲み方、不味くないですか？」

「「「!？」」」

反応したのはユーノと俺を除いた三人。無言の時間が過ぎ、リンディさんが自分が飲んでいたお茶をさしだしてきた。少しだけ悩んでから、飲む。

……。

「どっかしら？」

「甘過ぎです。砂糖とミルクを減らせば、飲めないこともないです」

「そうかしら？何時もより少な目なだけ」

「まあ俺はなんで。あ、ご馳走様です」

お茶を返した。口に残った甘さを緩和するために、残っていたお茶を啜る。

それにしても、それにしてもだ。

「なあ」

「何かしら？」

「俺たちを此処に呼んだ訳は？この前のジュエルシードで起こった爆発についてか？」

「それもあるわね」

それ“も”？他にも……ああ、なるほど。

「もう関わるなって、そう言いたいのか。此処までやってきた事を全否定して、今更辞めると」

「貴方の言い方はいつも棘があるわね。でも、否定はしないわ。この間のなのはさんとあの黒い子との接触で起こった爆発、次元震ね。貴方も身近で見たのなら分かるでしょう？あれが危険って事くらい」

「ええ、まあ」

あれが100%の威力ならともかく、実際はあの何万分の1程度の威力らしい。

ほんのわずかな恐怖を感じて。思わず右手を握りしめた。少し痛んで顔が歪み、それを目敏く、クロノに見つけられた。

「浩樹。その右腕。それはこの前の次元震の時についた傷じゃないのか？」

「その質問の答えは応であり否だな。その日に出来た傷ではあるが次元震とかいうのが原因という訳じゃない」

それに怪我した事なんてどうでもいい、というのが本音だ。激しい運動が禁止だから戦えないしね。それにしたって、どうも昔からこういう警察組織は好かないな。

昼間ぶらついてるだけで追っかけてくるし、今だってそうだ。どうも上から目線な所があるからむかつく。

「そもそも。ジュエルシードは次元干渉に関わるレベルだ。民間人が介入していいレベルじゃない」

「……」

突然の事になのはとユーノは戸惑って。そして俺は紡ぐべき言葉を探すため、押し黙る。

「まあ、今夜一晩ゆっくり考えて、それで答えを出してちょうだい」
「送って行こう。元の場所でもいいね」

クロノが立ち上がり、それに合わせて俺たちも立ち上がったが、「浩樹君はもう少しお話があるから待っててね」と言われ、座り直す。

「浩樹君？」

「なのは。先に帰ってユーノとどうするか考えるといい。俺は俺で考えるから」

「……うん。分かった」

クロノがなのはとユーノを連れていき、部屋には俺とリンディさんが残された。

「さて、浩樹君。ユーノ君に聞いたのだけど、貴方には封印師の力が宿ってるそうね」

「さあ？」

「とぼけないで。真面目な話よ」

「封印師って名前なのは知らないですけど、確かに触っただけで封印処理は出来ますよ」

「そう」

黙って何かを考え込み始めてしまった。手持無沙汰になりお茶を飲んでみると、クロノが帰ってきた。

俺の方を一瞬見たけどその視線は無視をして。クロノが先ほどの位置に座ると、リンディさんが口を開いた。

「浩樹君、お願いがあるのだけど」

「何ですか？」

何となく目的の理由は付くけどね。

「なのはさん達の意味とは関係なく、手伝って貰えないかしら？」

「随分いきなりですね。それこそ、俺の意思ならともかくそっちの命令に従う義務は無いですよ。それに、俺に頼むよりなのはとユーノに頼った方がいいです」

「そんな事無いわよ。それに貴方の選択肢は二択よ。私達の手伝いをするか、全部忘れて元の生活に戻るか」

「随分な選択肢ですね。なのは達には自分で選択させて、俺には命令ですか」

「こんな風に言いたくは無いのだけど、なのはさん達はクロノで十分なのよ。でも、貴方は違う。どんな状態だろうと、貴方ならジュエルシードを強制封印できる。こと、その技術に関しては、他に抜きんでる者はいないと言われたほどの一族なのだから」

「知らないですよ、一族とか。俺の家族はじいちゃんだけですから。でも、ま」

少し考える。仮に此処で行動して得られる物と失う物の差は大きいし、それに多分あの二人は受けるのだろうか、ここは……一択か。

「受けますよ。どうすればいいですか？」

「一時的に身柄を時空管理局の管轄に入って貰うわ。いいわね？」

「はい。じゃあ一度家に帰って着替えとか持ってきますから、帰っていいですか？」

「ええ。じゃあクロノ。送ってあげて？」

「はい、艦長」

その後、やはりというか、なのはとユーノはジュエルシード回収の手伝いをする事を決意し、俺、なのは、ユーノの三人で回収作業に当たる事になった。

それにしても。あれからフェイトの姿が見えないけど。大丈夫なんだろうか。

第八話 〈停滞する物語と運命〉（後書き）

ごま「第八話。原作でいうところの無印八話前半です」

浩樹「前々回で無印七話冒頭までだったのにな」

ごま「そろそろ難しくなってきたけど、折り返しだしね。多分原作同様、全十二話で終わると思う」

浩樹「俺の能力の説明が若干あったな」

ごま「てか、あれ以上に言いようがない気もするけど」

浩樹「確かにな。補足すると、俺は接触でしか封印できないですよ」

ごま「まあ、読んでれば何となくわからないでもないとは思っけど……」

浩樹「……今回はここまで」

ごま「はいはい。ここまで読んで下さった貴方に、最大級の感謝を」

ごま「浩」では次回！！」

第九話 く轟く砲撃と雷く（前書き）

オリ主による、リリカルなのは再編ものです。よろしければどうぞ。

第九話　く轟く砲撃と雷く

現在、俺は正座をしていた。上座にはじいちゃんが同じように正座をしている。大切な話をする時はいつもこうだけど、今回は特別だ。アースラへの泊まり込みを許してもらう為に、今までの事を話せるだけ話しているのだから。

「　と、いう訳なんです」

魔法云々については話せないから、ぼかしつつ、けれども話せる所はすべて話して。じいちゃんは、暫く考え込むように黙っていた。

この部屋には時計がないからどれくらいの時間が経ったのかは分からない。でも、それなりに長い時間が過ぎてから、じいちゃんは口を開いた。

「最近の深夜徘徊。以前よりも生き急ぐような生活。そしてその右腕の怪我。それら全ては先ほどお前が説明した、今為さねばならない事に起因している訳だな？」

「はい」

「そしてその為さねばならない事を為すために泊まり込むことが必要だと」

「お願いします」

正座をしているから、自然と土下座をするようになってしまふ。まあ、じいちゃんに頭を下げる事は苦じゃないから別にいいのだけど。頭をあげずにいると、じいちゃんが立ち上がった。そのままふすまの方に向かい、開ける。

「駄目だ、と言つても、お前は行くのだろうな」
「……」

さすがじいちゃん。分かつてるねえ。

「一つだけ約束しろ」
「何？」
「ちゃんと帰って来る事。それだけだ」

頭をあげる。じいちゃんはこちらを向いていたから、目を合わせて、こう言った。

「当然!!」

そう答えた俺を見て、じいちゃんが笑った。「わしも甘いな」と咳いてから部屋を出ていき、少ししてから戻ってきた。その手には何やら包装された箱。それを投げ渡され、どうしていいか分からずにいると、開けてみると言われた。

開けるとそこにあったのは、新しい手袋。

「本当は誕生日のプレゼントの筈だったのだがな。帰って来るか分からん以上、今渡しておこう」

「それは帰って来ないかもと?」

「違う。誕生日までに帰ってこないかもしれないから、今渡しておくというだけだ」

「なら、ありがたく」

手袋を取り出して、着けていた手袋をはずしてつけ直す。少しだけ大きいかもしれないけど、十分しっくりくる。

「ありがと、じいちゃん」

「ふっ。ちゃんと帰ってこいよ、浩樹」

「分かってるって」

そんな訳でアースラに入って早十日。その時々によってシフトの变化はあるけれども、基本的には今まで通り、俺とユーノが押さえ替えるのが封印。一番安定してるしな。

ジュエルシードを三つ手に入れていた。あれから一度も会っていない（なのは俺がはやと会っていた時に会ったらしい）が、フェイトの方も二つ手に入れたらしい。これで残るジュエルシードは六つ。探し物は難航しているらしく、なかなか見つからない。

「暇だな」

言った所で何が変わるわけでもないけど、思わず呟いていた。無いと色々不便だろう、と言われて支給されたクロノのS2Uと似た形のデバイス、F4Uを布で拭いていたけど、それも終わってしまった。

「暇だな」

こんなことならさっきなのはに誘われた時、一緒に食堂について行けば良かったな。まあ、後悔先に立たず。悔んだってしょうがないから、今からでも食堂に行くか、ひと眠り……。

「!？」

何やら嫌な空気を感じた。こう、非常に不愉快な空気だ。なのはやユーノと共にアースラーメンバーに自己紹介した時になのはとクロノの間で起こったみたいだな、むしろくしゃりする空気。

そう……ラブコメみたいな空気だ。発信元は分かってる。俺がやるべきは一つだ。

「この空気をぶち壊さなきゃ」

寝る事は諦めて、食堂に向かう為に部屋から出た。そのまま走って行くこととするが、その前に警報が鳴った。

思わず歯ぎしりしたが、結果的にあの空気は壊せただろうから、ま

あ良しとしよう。

ブリッジに着くと、前面一杯に戦闘中のフェイトが映し出されていた。今まで見た事のあるフェイトと違いなんか動きが鈍い気がする。天候もあるかもしれないけど、多分消耗してるのだろう。まず間違いないく、このままいけば自滅する。

その内なのが到着した。俺と同じようにフェイトの映像に気がつき、「今すぐ現場に」とそう言ったが、クロノの答えは「その必要は無い」というものだった。

「放っておけばあの子は自滅する」

「自滅、そうでなくても消耗した所を叩くと」

「そう言う事だ」

「!?!? そんな!?!?」

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

こんなやり取りの中でも、フェイトの戦闘行動は続いて行く。

「私達は常に最善の方法を取らなければならぬわ。残酷に見えるかもしれないけど」

ああ、当然だ。そんなこと分かるし、なのはだって頭ではちゃんと理解は出来るのだろう。でも、俺もなのはもまだ子供で、フェイトがあんな風に戦っていると知って黙っていられるようなやつでも無い。

『ユーノ』

『うん。なのは』

『え？』

『僕がゲートを開くから、なのはは行って、あの子を』

『でも、ユーノ君。私が行って、あの子とお話したいのはユーノ君とは』

『関係無いかもしれない。でも僕は、なのはが困っているなら、力になってあげたい。なのはが僕にそうしてくれたみたいに』

『俺の事全否定か？ユーノ』

何やら二人きりの世界みたいなのにはいられそうだったから、妨害した。『ち、違うよ』と慌てて反応したユーノ。本当に忘れてやがったか、この野郎。後で覚えとけよ。

『いいから行け、なのは』

『浩樹君は？』

『安心しろ。役に立つかは知らんが、ユーノと一緒にすぐ行く』
『……わかった!』

いつも転送に使用する場所にゲートが開いた。「君は!」と反応したクロノを無視して、なのはがゲートに入る。

追えないように立ちほだかる。

「ごめんなさい。高町なのは、指示を無視して勝手な行動をとります!」

「あの子の結界内へ。転送!」

なのはが転送された。ついでとばかりにユーノの事もゲート内に押し飛ばし、次いで俺も中に入る。

「俺達も行くぞ」

「……うん!」

「君達!」

「命令無視については後できっちり謝罪する。今は見逃してくれ」

転送され、結界内へ。なのはに向かって突撃していたアルフをユーノが止め、俺はなのはとフェイトと合流した。

「作戦は？」

「せーので合わせて、一気に封印！」

なのはが上に向かった。それを見送ってから、フェイトの方を見る。

「あれがなのはなんだ。分からないかもしれないけどさ」

「……」

「なのはが言った通り、せーので合わせて一気に封印。手伝ってくれよ、フェイト」

俺も飛ぶ。ある程度進んだ所で止まり、F4Uを構えた。上の方ではなのはとフェイトの足元に巨大な魔法陣が生まれている。すごいな、と感心しつつ同じく魔法陣を作った。

「いくぞF4U」

返事は無い。ストレイジデバイスらしいからしょうがないけど。――

息ついて魔力を溜めた。

クロノに相談して、色々教えてもらいながら組んだ、なのはと同じ長距離砲撃。流石に名前は違うし、なのはと違って量より質の砲撃だけど、ジュエルシードを抑えるには十分すぎる。

なのはが俺とフェイトの方を見てから「せーの！」と掛け声。

「サンダー！」 「デイバイン！」 「レイズ！」

一瞬の溜め。

「レイジー!!!」 「バスター!!!」 「シュート!!!」

雷と光線二本が竜巻に当たり、その余波で体が煽られるのを何とか耐えて、封印が終わるまで砲撃を続ける。

その内、自然と砲撃が止んで、青い柱と共にジュエルシードが六つ、海の中から浮かび上がって来る。

「疲れた……」

はあ、と溜息。襲って来たのは疲労感。上の二人は大丈夫らしい。すごいなあ、と感心してしまう。

何やら見つめあってる二人の方にのんびりと上昇していく。そして空気を読んだのか、クロノが俺にだけ念話を繋げて来た。曰く、すぐにそちらに行くから大人しくしている、との事。その言葉に適当に返しつつ、上昇を続けていると、なのはが口を開いた。

「友達に、なりたいんだ」

そう告げるなのはとそれを聞くフェイト。そして、俺が感じたのは何かが起こるといふ悪感。

「なのは！フェイトも！退避しろ！」
「え？」

叫んだ直後に雷が鳴り始めた。その時にはもう動き始め、「母さん……」と呟いて、呆然として動かないフェイトの胸倉を掴み、思い

つきりアルフに向かって投げつけ、なのはをレイジングハートごしに思いつきり蹴り飛ばした。

そして、先ほどまでフェイトがいた位置、つまり今俺がいる位置に雷が落ちた。

「がつ!？」

「浩樹君!？」

なのはの声を最後に視界が暗転して、俺は意識を失った。

Sideなのは

落下していく浩樹君に近づこうとしたけど、雷に阻まれて近づけず、そのまま浩樹君は海に落下した。

あまりにも突然の事で誰も動けずについて、最初に動いたのはフェイトちゃんを受け止めたアルフさんだった。フェイトちゃんを抱えたまま、ジュエルシードの方に近づいて、手を伸ばした。

「な!？」

しかし、そこにあったジュエルシールドは三つ。私が持っていないくて、ユーノ君もフェイトちゃんも持っていない以上、持っているのは一人だけ。

「くっ」

それに気が付いているらしく、一瞬海の方を見てから、三つを握って飛んで行った。

フェイトちゃん達を追うか、浩樹君を助けに向かうか。動けずにいて、結局フェイトちゃん達の姿は見えなくなり、浩樹君はクロノ君が助け出した。

今はアースラ内の医務室で眠ったまま目を覚まさない浩樹君の傍にいる。クロノ君によると、魔力ダメージが原因で昏睡状態になっているらしい。

でも、それだけじゃないと思う。……ううん。それだけじゃない。

「疲れた、のかな」

特別何が、という訳じゃない。多分ジュエルシードを集め始めてから今まで。デバイスも無いのに、最前線で戦って。フェイトちゃんとも闘って。次元震が起きた時だって、自分がボロボロになりながらもジュエルシードを封印した。

それにアースラに来てからはいつものトレーニングに加えて、魔法の練習も始めていた。疲れた様子なんて全然見せなかったけど、それでも、きつと限界だったんだと思う。

だから。だからこそ今は。

「ゆっくり休んでね？」

答えてくれない事は淋しいけれど、そっとしておいてあげた方がいいんだと思う。

いつも浩樹君が撫でるように、浩樹君の頭を撫でてから、私は静かに医務室を後にした。

第九話 く轟く砲撃と雷く（後書き）

ごま「第九話。原作でも同じく第九話。そして浩樹が昏睡状態なので急遽、代役を立てました！こちらの方です、どうぞ！」

はやて「みんなのアイドル、八神はやてです。よろしゅうな」

ごま「さて、という訳で浩樹君が昏睡状態になりました」

はやて「スルー！？まさかのツッコミ無しなん！？」

ごま「まあ、それは言いとして……」

はやて「ここまでゲストを無視していいもんなんか！？それに昏睡状態がそれは言いとしてレベルの事とは思われへんよ！？」

ごま「ナイスツッコミ。流石だな」

はやて「最初の反応がそれって、なんか嫌や！！」

ごま「着々と遊戯王SSの準備が整って……」

はやて「まさかの宣伝！？次回予告とかやないの！？」

ごま「した事無いよ。次回予告」

はやて「何となく予想付いたわ」

ごま「そして、今回一番大切な用件があります」

はやて「はあ」

ごま「空牙刹那さん。コメント、ありがとうございます！」

はやて「なんや。まともやね」

ごま「一体なんだと!?!」

はやて「おお!ようやく、突っ込んでくれたね!」

ごま「しまっ!?!ま、いいけどな。次回は多分、明日か明後日辺りに上げると思いますので、よかつたら待っていてください」

はやて「今回はこの辺で」

ごま「は」「では次回」

ごま「あ、ちなみにタイトルが若干変わりましたので」

はやて「魔法少女ってついただけやけどね」

コメントが頂けると、作品の原動力になりますので、よろしければ、コメントをください byごまだれ

第十話 く流れゆく虚構と現実く（前書き）

オリ主によるリリなの再編ものです。

良かったら最後まで読んでいってください。

第十話　く流れゆく虚構と現実く

Sideなのは

最後のジュエルシードを回収し終え、浩樹君のお見舞いの後、私とユーノ君はリンディさんに呼び出された。フェイトちゃんの時の勝手な行動についてのお説教。

「指示や命令を守るのは、集団を守るためのルールです。貴方達の勝手な行動が招いた結果が高坂浩樹君の現状という事を分かっていますね？」

「……はい」

「本来なら厳罰に処すところですが、彼自身にも非があり、色々と得る所もありました。よって、今回は不問とします。ただし、二度目はありませんよ」

「はい」

「すいませんでした」

リンディさんの言葉が胸に刺さる。私がフェイトちゃんとお話したいなんて思わなければ、浩樹君はあんな事にならなかったのかもしれない。

私の勝手な行動が浩樹君に迷惑をかけている。今まででも何度もあった事なのに、その事を忘れて……違う。浩樹君に甘えて、気にしていなかった。

最後に困っていたのは浩樹君なのに、そんな事をおくびにも出さないでいつも笑って、私に付き合ってくれている。ユーノ君の時もアースラに泊まる事になった時も今回も。あの時だって……。

「さん。なのはさん」

「はいつ!?!?」

何時の間にか、この部屋の中にいる全員が私の方を見ていた。テーブルの中央には一人の女性が映し出されている。

「ちゃんと聞いていたかしら?」

「えっと、ごめんなさい」

「はぁ。浩樹君の事が心配なのは分かるけど、話はちゃんと聞きましようね?」

「ごめんなさい……」

その後の話では、テーブルの中央の女性はフェイトちゃんのお母さんだという事、そしてアースラの強化などで一時的に帰宅できる事。

「えっと……。浩樹君は？」

「なのはさんが戻っている間も浩樹君はアースラで預かるわ。だから安心して頂戴」

「そうですか……」

正直なところ、帰れると言ってもそこまで嬉しくなかった。アリサちゃんやすずかちゃん、家族に会える事は嬉しかったけど、浩樹君を置いて帰るなんてこと、したくなかった。

「あの。やっぱり私、残りたいんですけど」

「駄目よ。あんまり学校を休ませる訳にもいかないし、ご家族にも元気でやっている所を見せる必要があるもの」

「でも……」

「浩樹君の事が気になる気持ちは分かるわ。でも、先ほど言った通り指示や命令には従って貰います。今は一度帰って、気持ちの整理をつけなさい」

「……はい」

一度部屋に戻って荷物を纏めて。私とユーノ君はリンディさんと一緒に海鳴に戻った。

Side out

何も無い暗闇。右も左も上も下も、何もかも分からない場所で、俺はどこに向かっているのかも分からないまま、その中を漂っていた。体の感覚は無く、自分が生きているのかすら分からなかったが、とりあえずこうやって考える事によって、まだ自分の意思は残っている事だけを確認していた。

(じつ、どこだろ)

まるで寝起きのぼんやりとした頭のように霞がかっていて、上手く考えがまとまらない。今だったら、このまま死ぬとか死んでいるとか言われても納得してしまいそうだ。そういう世界っばいし。

(死後の世界とかだったら洒落にならん)

最後の記憶が雷に撃たれた所だから、なまじ否定できない。

(心残りが多過ぎる……。何とか帰りたい)

でもどうしたらいいのかは分からない。

何とか方法を考えようと、頭を回転させられるだけ回転させていると、いきなりバチツと頭の中で火花が鳴ったような気がした。電気がいきなり流れ込んで来たような、そんな感覚。顔があったら顰めているだろう。

そして、直後に声が聞こえて来た。

『聞こえてる？もし聞こえてるなら「聞こえてるぜ、可愛子ちゃん」って三回唱えて』

(……………)

自分とのテンションの差に一瞬ついていけなかった。

『聞こえてないの？』

(あ、ああ。聞こえてるが)

『聞こえてるのなら「聞こえてるぜ、可愛」一回黙れ』はい』
(誰だ、お前)

『うーん、今は教えられないかな。敵ではないよ』

死後の世界かどうかは分からないが、こんな空間でそれだけのテンションを保っている時点で敵云々の前に何か異常な気もするが。それに敵だろうかそうでなかるうが、今の俺は戦えないからどうしようもない。

(で？何か用か？)

『強いて言えば暇つぶし』

(……帰れ)

『冗談だよ、半分。もう半分はようやく話せる機会が出来たから遊びに来たの』

(機会？俺が誰か知ってるのか？)

『知ってるよ。一方的にだけど』

(……本当に誰だ。お前は)

『いつか会えれば、その時に話すよ。それはそうと、何か願いは無い？』

(願い？)

『そう。叶えたい願望。何でもいいよ。絶対負けない力とか、不老不死とかは少し難しいけど、叶えてあげられる』

随分と唐突な質問だ。でも、願いなんて決まってる。

(今すぐ起きたいのだが)

『それは無理』

(おいこら)

『わたしの技術が届かないよ。力とか不老不死ならともかく』

(何が違う!? 寧ろお前があげてる方が難しいよな!?)

『精神に干渉するか、肉体に干渉するかの話だよ。力も不老不死も精神に干渉してから、それを肉体にアップデートできる。でも起こすって言うのは肉体に干渉する必要があるの。だから無理』

(……簡単に言えば?)

『最低限度の肉体的疲労とか損傷が治るまで寝てる』

(はあ。了解したよ)

『でもま。眠っている間、ずっとこんな空間じゃ暇だろうからプレゼントはしてあげる』

(プレゼント?)

『そう。楽しい楽しい夢の世界』

(あん?)

『という事で、行ってらっしゃい。また後でね』

(おい! 待っ!)

直後に世界は白に変わり、気が付いたら俺は見知った場所にいた。

「どうなってんだ?」

俺の部屋のベッドの上で。再び俺は途方に暮れる事になった。少しして目覚まし時計が俺に起きると急かし始めるまで、俺は暗闇で話した誰かも知らない奴を、内心で罵り続けた。

S i d eなのは

海鳴に帰って来たのは昨日の晩のことだ。お母さん達にはリンデイさんが見事に事実を誤魔化した説明をして、今日は久しぶりの学校の日。アリサちゃんとすずかちゃんに会える事は嬉しいけど、隣には誰もいない。

『なのは。バスを素手で触ってもいいか？』

『駄目だよ!？』

『じゃあなのはの携帯』

『それも駄目!』

『何だ。我が儘な奴だな』

『わたし悪くないよね!？』

半ば日課になっていたそんなやり取り。そんなやり取りも出来ないなんて。

「浩樹君……」

眠り続けている彼は、今どんな夢を見ているのだろうか。

S i d e o u t

暗闇の何もない空間を漂っていたかと思えば、今の見ているのは魔法に関わる前の日常の夢。恐らくこれが俺自身が目覚めるまでの暇つぶしの為のプレゼントなのだろう。

このプレゼントを贈ってきた奴とは夢の中で目を覚ましてから全く連絡がつかないが。

「しかし、まんまだな」

部屋の家具の位置。家の間取り。町の様子。恐ろしいぐらいに精巧だった。

「此処まで来ると、逆にホラーだな」

あの声の主が言った、俺を知っているという言葉は嘘じゃないらしい。もしかしたら、俺より俺自身の事に詳しいかもしれない。

例えば……俺の両親の現状とかも、もしかしたら。

「また後でって言ってたし、その内会えるか」

今はこの現状をどうにかして受け入れよう。

「浩樹君？何でさっきから一人事言ってるの？」

「そつだよ浩樹。どうしたの？」

何でフェイトが此処に、しかも聖祥の制服を着ているのか。

分かりやすく百文字以内で説明して下さい。そうしないと受け入れられません。

S i d eなのは

「なのはちゃん！良かった、元気で！」

「う、うん。ありがとう、すずかちゃん」

視線を感じて、少し離れた所に立っている視線の主の方を見る。

「ごめんね？アリサちゃん。心配掛けて」

「まあ、よかったわ。元気で」

「それより。なのはちゃん。浩樹君は一緒じゃないの？」

「そう言えばそうね。あいつが一緒じゃないなんて珍しいじゃない」

「アリサちゃん。久しぶりに会えるって楽しみにしてたのね」

「今回については、何で話を捏造してるのよ！！」

「つまり普段は捏造じゃないの？」

「なっ!?!」

私がそう言つとアリサちゃんは赤くなつて黙ってしまった。「それは、別に……でも……」と小声で何かを言っている。

すずかちゃんは少しくすくすと笑つと、私を見て、改めて浩樹君の事を聞いて来た。

「えっと。今回戻ってきたのは、私だけなんだ」

嘘は言っていない。ただ、帰って来なかったのではなく、帰る事が出来なかった。

此処で始業の鐘が鳴って、話は中断された。

そして休み時間。アリサちゃんとすずかちゃんが私の所に集まった。

「で？何で浩樹は帰ってきてないのよ」

「えと、向こうに用事が出来たみたいで」

「……まあ、いいわ。それについても、今は話せないみたいだし」

「アリサちゃん……」

空気が重くなった。そして、最初に口を開いたのはすずかちゃんだった。

「そつえば、なのはちゃんはいつまでこっちにいられるの？」

「え、あ。明日の朝には向こうに戻るんだ」

「そうなんだ……」
「大変だね……」
「でも、大丈夫!」
「放課後は?少しくらいなら一緒に遊べる?」
「うん!大丈夫」
「じゃあ、うちに来る?新しいゲームもあるし」
「え?本当!?」

そこで、ふと思い出したようにアリサちゃんが言った。

「そういえば。昨夜、凄く怪我をしてる犬を拾ったの」
「犬?」
「凄く大型でなんか毛並みがオレンジ色で、それでおでこに赤い宝
石が付いてるの」
「あっ……」

それって、もしかして……。

S i d e o u t

自分にとってはともかくとして、この夢の中だとフェイトがいるのは当たり前のことらしい。先ほど、思い切って聞けば良くね？、なんて思ってしまったって「何でフェイトがいるの？」と尋ねてしまい、フェイトに泣かれて、なのはに怒られた。数分前の自分を殴りたい。

そして今はバスの中で泣いてはいないものの、涙目でかなり不機嫌さんになっているフェイトを宥め様と試行錯誤していた。

とは言っても。

「すみませんでした」

「……」

「まじごめんなさい」

「……」

謝る以外の手段なんてものは無く、ひたすらに謝り続けているだけだが。

なのははフェイトが許してくれれば許すらしく、何も言ってこない。

「……」

「ああっ」

以前一度大変な事になった事があるから、言いたくなかったんだけど、ここまで来たらしょうがない。最後の手段。というより、奥の手というか何というか。

あんまり好きな手段ではないんだが。

「ど、どうしたら許していただけでしようか？」

「……」

「な、何でもしますよ？」

ぴくっとフェイトの肩が跳ねた。

「何でも？」

「な、何でも」

「そっか。……ふふ」

ビクウと、今度は俺の肩が思いつきり跳ねた。何その笑い！？怖い！！何やらされるの！？

実際のフェイトとここまで話をした事が無いからこんな子かどうかは分からないけど、今の笑いだけは凄く怖かった。

「とりあえず、考えておくれ。浩樹」
「あ、ああ」

出来れば、何かやらされる前に、目覚めたいなあ。

第十話 〈流れゆく虚構と現実〉（後書き）

ごま「若干遅くなりましたが、第十話公開！原作十話のBパート途中までです。相変わらず浩樹は眠りっぱなし。今回もはやてにしようかと思っていたのですが……。残念ながら違います。今回はこの人（？）」

????「浩樹を今の夢を見せることにした帳本人です」

ごま「まだ名前が出てないんで、????表記です。さて、また浩樹は妙な夢を……」

????「まあ、私はあくまで浩樹がこうなればいいなって夢想した世界を出来る限り人物を忠実に再現しただけだから」

ごま「その割にフェイトが黒い気が……」

????「それは浩樹がフェイトの事をよく知らないからっていう理由。あとは」

ごま「あとは？」

????「面白そうだったから」

ごま「なるほど」

????「でも残念なことにフェイトの何でもが発動する前に起きちゃいそうなんだよなあ、浩樹」

「ま」分かるのか？」

「？？？」愛故にね」

「ま」……本当に誰だよ、お前」

「？？？」ふふふ。それこそ神のみぞ知る、だね」

「ま」はあ、今回はここまでです」

「？？？」「ここまで読んで下さってありがとうございます！ございました！……」

「ご・？」「では次回！」「」

第十一話 く終わる虚構と停滞く（前書き）

サブタイが思いつかない・・・

オリ主によるリリなの再編物です。よかったらどうぞ。

感想とかお待ちしてます。

第十一話 く終わる虚構と停滞く

Sideなのは

『やっぱり、アルフさん』

『あんたか……』

放課後。アリサちゃんが昨日の晩に拾ったという子は確かにアルフさんだった。ひどい怪我をしているとアリサちゃんは言っていたけど、本当にひどい怪我だ。

『その怪我、どうしたんですか？それに、フェイトちゃんは何？』
『……』

アルフさんは何も言わないで、向こう側をしまった。

「あらららら、元気なくなっちゃった。大丈夫？」
「傷が痛むのかも。そつとしいてあげようか」

そう言って立ち上がったはずかちゃんの手からユーノ君が降りた。
そして檻の前でアルフさんを見ている。

「ユーノ。ほら、危ないぞ」

「大丈夫だよ、ユーノ君は」

他の犬だったらガブツといかれてしまいかもしれないけど、アルフさんだし。ユーノ君の結界はそう簡単には抜けないし。

『なのは。アルフからは僕が話を聞いておくから、なのははアリサちゃん達と』

『うん』

アリサちゃん達とユーノ君をその場に残して家に向かった。

でも、本当にどうしたんだろう。アルフさんがフェイトちゃんを一緒にいない所なんて、初めて見たよ。

」

「いや、あのさ」

」

「ほら。まだ朝だし、寝ぼけてたからっていつか」

」

」

」

「すいません」

場所は学校。バスの中で俺の何でもする発言を聞いてから終始ご機嫌だったフェイトに、何故か若干不機嫌になったのはと共に、校門を通り教室に向かい。そして、教室のドアを開けた途端、朝一で俺に挨拶をしてきた女生徒に対して、今朝のフェイトに対してと同じ発言をしてしまった。

「すいません、はやくさん」

八神はやて、その人に。

「だから寝ぼけてたんだって」

「そんな様子なかったもん。完全に目が覚めてて、ウチがいる事に疑問を感じてた顔やったもん」

どんな顔だ、それは？因みになのは朝と同じ反応。フェイトはあまり気にした様子が無くて、アリサとすずかはまだ来てない。あの二人が来る前には何とかしたいけど……。正直、フェイトに使った手は使いたくない。

「だから、ほら。はやてが俺より早く来てる事に驚いたって言うか」「いつもの事やん」

「なん……だと……」

「何やその反応！？本当に忘れていたんか!？」

「まあ、あれだ。ブラジリアンジョーク」

「分かり辛っ!？」

よし。このまま何とか誤魔化「因みに、誤魔化されへんよ?」そう
ですかい。

「なんかいつもの浩樹君と違うなあ。何か悪い物でも食べたん?拾い食いはしちや駄目やで?」

「昨日食べたのは三食俺の料理と後は……なのはの菓子?」

「それや!!--」

「違うよー！浩樹君、昨日私のお菓子食べてないでしょー！」

「なのは……。とうとうぼけたか」

「今までの話の流れだと、その症状が現れてるのは浩樹君だからね
!？」

「……俺、実は昨日から前の記憶が無いんだ」

半分本当、半分嘘。「え？」と同時に反応した三人。暫くして、最初に口を開いたのははやてだった。何故か顔が赤い。

「ウチ……。実は浩樹君の彼女やったんやで？」

「あり得ないな。好みじゃない」

「相変わらずウチには容赦ないなあ!？」

「……浩樹」

「何？フェイト」

「私がハラオウン家の養子になったことも覚えてない？」

「……まじで？」

「本当に覚えてないみたいだね」

そうしてフェイトは考え込み始めてしまった。なのはは……。わたわ
たしてる。気持ちは分かるけど。はやてはいじけてた。すぐに元
に戻るだろうから気にしない。

「浩樹」

「今度はなんだ？フエイト」

「実はなのは。ユーノと付き合ってるんだよ？」

「フエイトちゃん!？」

「……………」

ふーん…………。

「浩樹君!？椅子持っでどこ行くの!？」

「ちよつとユーノを殺^ましに」

「絶対違う字だよね!？それより、私は別にユーノ君と付き合っ
て無いから!！」

「そうなの？」

「でも。最近のなのは。こそこそユーノと会ってるよね」

「えっ!？し、知ってたの…………？」

「うん」

「……………」

「だから浩樹君!椅子置いて!違うの!違うから!！」

結局アリサとすずかが登校してきて、アリサに「何やってんのよ、あんた達」と突っ込みを入れられるまで、俺達はこんなやり取りを続けていた。

どうやら俺の記憶が無い事とはやてに「何でいるの?」発言は有耶

無耶になったらしい。助かった。

S i d eなのは

アルフさんから聞いた真実。フェイトちゃんの事。フェイトちゃんのお母さんの事。

そして、クロノ君から今後についての話を聞いて、私の決意は固まった。

『君はどうする？高町なのは』

『私は。フェイトちゃんを助きたい！アルフさんの思いと、それから私の意思。フェイトちゃんの悲しい顔は、私もなんだか悲しいのだから助きたいの！悲しいことから。それに、友達になりたいって伝えた返事を、まだ聞いてないしね』

『分かった。こっちとしても、君の魔力を使わせてもらえるのはありがたい。フェイト・テスタロッサについては、君に任せる。それでいいか？』

『うん。……なのは、だったね。頼めた義理じゃないけど、だけどお願い。フェイトを、助けて。あの子、今、本当に一人ぼっちなんだよ』

『うん。大丈夫。まかせて』

フエイトちゃんの事は心配だ。でも、それと同じくらい浩樹君の事だって心配。だから、浩樹君が目覚めます前に、全部終わらせるんだ。

悲しい事も、辛い事も。全部。

Side out

「お、俺の昼飯……」

「相変わらず浩樹君のご飯はおいしいなあ」

「ほんとね。何でかしら」

「あうあう」

「あんたがはやてにひどい事言ったのが悪いんだから、これくらい我慢なさいよ」

「あの話はあそこで終わりじゃ!？」

昼休み。やはりというか、この五人は一緒に昼飯を食べているらしく、その中にはやつぱり俺も混じっていらしい。そして、俺が弁当箱の蓋を開けた瞬間、はやてに奪われた。今朝の事は既にアリサやすずかに伝わっていたらしく、今ははやてとアリサ、時々すずかの三人がかりで、弁当が消費されている。

「ああ!そのミニハンバーグ、今日はいつもよりうまく出来たから

楽しみにしてたのに！」

「そうなん？……あ、ほんとや」

「ちよつとはやて！何であんた一人で全部食べてるのよ！」

「へ？ああ、ごめんね？美味しかったもんやからつい」

「まったく……」

今日はお昼抜きになりそうですね。さつき確認したら見事にお財布なんてものは無かったですし。

残り少ないカロリーを消費しない為に教室に帰って昼寝でもしたいんですけど、移動しようとするとな眠れなくて動けない。蛇に睨まれた蛙の気持ち分かる。しかも俺に非があるという事で誰も助けられないらしい。

（腹減ったなあ）

誰か俺に食事をください。

言っても無駄だから、声に出さずにそう思った。

S i d eなのは

「あれ？」

「どうしたのよ、なのは」

「え、あ、うん。ちよつと」

なんか浩樹君の悲痛というかそんな声が聞こえたような気がしたけど……。お腹すいてるのかな？何も食べたないのは事実だけど。

「うーん……」

「だから、どうしたよ」

「あ、浩樹君にこのお菓子持っていったら、喜ぶかなって」

「じゃあ、持って帰る？」

「うん！」

幾らか小分けにしてもらって、それを貰った袋に詰める。まだ目覚めていないみたいだから、起きたら一緒に食べよう。

クッキーが入った袋をカバンに入れて、アリサちゃんとすずかちゃんに手を振って、私は家に帰った。

S i d e o u t

さて、この夢の中の時間の流れが外と一緒になのかそうでないのかは俺には分からないが、とりあえずこの夢の中では現在放課後。

そんな中、バスに乗る事無く学校から歩いて帰っている俺の隣には、フェイトがいた。因みに隣にいないだけで後ろの方の電柱の陰とかになのもアリサも、てか昼食にいたメンバーは全員いる。あれで隠れてるつもりなのだろうか？

「それで？何やらされるんだ？フェイト」

「色々考えてるんだけど……。後ろが気になっちゃって」

「あー……。撒かなくていいか」

「ええっ!？」

「冗談だよ」

何でもすると言った手前、ここでそれは駄目な気がするし。という訳で。

「走るか」

「え？ええ!？」

最初の「え？」は俺の発言について。そして次の「ええ!？」は俺がフェイトの手を取って走り始めた事に対しての驚きだったんだと思っ。

後ろから「なっ!？」とか「待ちなさい!！」とか言ってるけど、

普段ならともかく今は待つという選択肢は無い。さすが以外からなら逃げ切れる自信はあるけど、すずかは……まあ、何とかしよう。

「速度上げる、フェイト!!」

「う、うん!!」

二人で速度をあげて、本気で振り切りにかかった。

そして体感時間にして約三十分ぐらい逃げて逃げて。ようやく撒いて辿り着いたのは海浜公園だった。

しかし、本当にリアルな夢だなと感心しつつ、海風を浴びていると「覚えてる？」とフェイトが口を開いた。

「何を？」

「この場所。私となのはが最初で最後の本気の勝負をした場所なんだよ」

「……そうなのか？」

「朝言ってた記憶喪失って、本当なんだね」

「ああ。若干、違うような気もするけど、実際に記憶は無い」

「じゃあ、どこら辺までなら覚えてるの？私やなのはとか、みんなの名前は覚えてたよね？」

「フェイトがなのはとジユエルシード関係で争ってて、最後のジユエルシードを封印した時に俺が雷に撃たれた辺りまでの記憶ならある」

「……………」

それきり黙ってしまった。無言の時間が続き、「浩樹」と呼ばれて顔をあげた。その瞬間、フェイトの顔が近づき、頬に柔らかい感触。

……………へ？

「ny」何やってんのよ、フェイトー！！！！」わああああ！！！！
?????」

「アリサ……………。何時から？」

「ついさっきよ。それより、浩樹は驚き過ぎ」

「撒いたと思ってたから……………」

「ふふん。こっちには対アンタ用の最終兵器！なのはがいるのよ！」

「！」

「確かに兵器かもしれないけどさ」

魔砲的な意味で。

「浩樹君が何考えてるか分かるよ……」

「事実だし？」

「……」ガタガタブルブル

「フェイト！？どうした！？何をそんなに怯えてる！？」

思い出したのはこの場所がなのはとフェイトの最初で最後の本気の勝負のステージだった場所らしい事。

「おのれ、なのは！！」

「なまじ否定できないけど、今の今まで大丈夫だったのに！？」

「ひろき〜」

「よしよし。怖かったなフェイト」

「って、それが目的か！！」

なのはより背が若干高いからなんか違和感。少し撫で続けてから、離れる。

「まああの約束は後でな。今日は帰ろっぜ、フェイト」

「……うん、そうだね」

そう言うと、何故か先に帰り始めていたみんなにフェイトが合流して、先に歩いて行ってしまった。その様子を後ろから暫く見て、頭の中に声をかける。間髪を入れず、『もういいの?』と尋ねられた。

「ああ。もう十分休んだと思う」

『まあ、確かにね。外では二日ぐらい寝っぱなしだから。大丈夫だとは思っ』

「じゃあ、もういい。決意も出来た」

『決意?』

「あの風景が本当になるように。フェイトを助ける」

『……うん。じゃあこれで終わり』

「浩樹君?」

暫く進んだ所で、五人がこちらを振り向いていた。そんな五人に、二ヘラと笑いかけて手を振る。

「用事があるから。俺はここで」

「え?あ、うん。分かった。またね、浩樹君」

「じゃあね、浩樹」

「じゃあね、浩樹」

「ばいばい、浩樹君」

「またなあ、浩樹君」

「ああ。またな」

そうして、その場から離れて。この夢に入った時のように強烈に光に包まれて目を開けた時、俺がいたのは戻る直前に望んだ、何も無い暗闇。

『どっいつつもり？』

「聞きたい事がある。俺の両親の事だ」

『……それについては、説明し難いよ。まだ、浩樹じゃ受け入れられない』

「受け入れられるとかじゃなくて、俺は知りたいんだ」

俺が今の生活になった理由を、じいちゃんは全くと言っていいくらい話してくれない。

「最低でも、生きてるかそうでないかだけでもいい。頼む」

『……後悔しない？』

「……多分」

『そこで多分って普通言わないよね』

「うっせえ」

『じゃあ、話すよ。結論からいえば、浩樹の両親は』

第十一話 く終わる虚構と停滞く（後書き）

ごま「第十一話。原作での第十話……なん、だと？」

????「まさかのね。本当に」

ごま「なのはとフェイトの最初で最後のガチバトルがまさかの量になってしまったので、急遽次話に。全十三話？」

????「まあ、外伝とか色々書くから、本編終わっても、ぜひ読んでてね」

ごま「しっかし、今までここまで会話文主体の小説を書いた事無いから、なかなか難しいな」

????「確かに、一話の頃と比べると段違いね」

ごま「良くなったのか悪くなったのかはあまりの違いで作者にも分からないけどな」

????「それを知るのは読者のみだけどね」

ごま「最初の頃から評価がほぼ一定だからなあ……。少しずつお気に入りにして下さっている方がいるからまだ……？」

????「どうだろうねえ」

ごま「最後に。空牙刹那さん。感想ありがとうございました。期待を裏切ってしまい、申し訳ありません」

「……」「」まで読んで下さってありがとうございます！

「……」「」では次回！」「」

第十二話 く激突する砲撃と雷く（前書き）

PV10000突破しました。この作品を読んで下さって、ありがとうございます。

突破記念ssは次々回辺りに書くと思うので、なにか希望とかがあったら言っていただけたらなあ、と思います

第十二話 く激突する砲撃と雷く

『フェイトと話すつもりなら、フェイトへの勝ち方でも考えるか？』
『え？でも、闘いたい訳じゃないよ？』

『そうは言ってもな。拳と拳をぶつけ合って、初めて伝わる物もあると思う！』

『そう、かなあ。レイジングハートはどう思う？』

『伝わる事云々はともかく、今後、あの魔導師と闘う事があるのなら、考えておいて損は無いと思いますよ』

『レイジングハートのお墨付きもあるんだし。な？なのは』

『……うん、そうだね』

あれから。家に帰ってお父さんと話をして。そして今、私はフェイトちゃんと対峙していた。お互いの手持ちのジュエルシードをかけた、最初で最後の本気の勝負。

不思議と不安は無い。あの温泉の日。フェイトちゃんに負けたあの日から浩樹君が提案して、レイジングハートと浩樹君が考えてくれた私がフェイトちゃんに勝つ方法。

空中に身を躍らせたフェイトちゃんと同時に突撃。一度打ち合って、距離を置く。

『Photon Lancer』

フェイトちゃんの周囲に四つの魔力球。

『Divine Shooter』

弾速は速いが直進弾だ。避けられるなら、避けるに越したことは無い。そう言ったのは浩樹君。その言葉通り、フェイトちゃんと同時に撃ったシューターを操作しながらフェイトちゃんのランサーを避け切って、次弾を準備。フェイトちゃんがシューターを相殺した所で、再び撃つ。

『Scythe Form』

フェイトちゃんのバルディッシュから魔力刃が出る。そして、私のシューターを四つ切って、最後の一つを避けてから、私に向かって飛んできた。レイジングハートと浩樹君の共通見解の一つは、間違いなくフェイトちゃんは私より速い、だったけど、本気のフェイトちゃんって、此処まで速いの!?

手を前に突き出す。

『Round Shield』

正面から防ぐ。はじけないけど、割られる事も無い。その間に、さつき避けられたシューターを操作して、フェイトちゃんの背後から攻撃するけど、気付かれて防がれた。

(でも、此処までは浩樹君達の予想通り)

『まあ正攻法でフェイトに勝つには時間が足りないか』

『そうですね。短期間で勝つには方法は二つです』

『二つ？』

『まず一つは裏をかく事です』

『もう一つはどんな戦況も一撃で粉碎出来る高威力の大技を覚える事』

『ど、どっちも何か違うような……？』

『しかしこれしか手はありません。高威力魔法の方は後にして、裏技から考えましょうか』

『そうだなあ。近接戦でも挑むか』

勝つ為の一つ目の方法。裏をかく事。その為にまずは、一時的にフ

エイトちゃんの意識を反らす為にフェイトちゃんのシールドに当たったシューターを炸裂させ、その隙に一気に上空まで上がり、光が収まった所で上から突撃。

『Flash Move』

「せえええい!!!」

フェイトちゃんに気付かれたけど、レイジングハートを思いつきり振りおろす。しかし防がれて、直後の閃光と衝撃でフェイトちゃんを見失った。

『それって危くない?』

『多少のリスクは覚悟だな』

『そうですね。まあ、しょうがないでしょう』

『うーん……でも』

『避けられたりなんなりして、もし見失ったら死角を主に警戒しろ』

『死角?』

『後方。より詳しくいえば、後方より斜め上』

『何で?』

『フェイトはなのはより戦闘を知ってるからな。狙うなら一撃。それも前後左右だけでなく上下もある三次元での戦闘なら間違いなく上からの頭部狙い。特に後頭部は注意しとけ。……そうだな。見失ったら警戒しつつ止まるな。すぐにその場から動きつつ、反転しろ。そうすれば死角からの攻撃じゃなくなる』

言われた通り反転しながらすぐにその場を動き、後ろに下がる。それと同時にバルディッシュが振り下ろされて、リボンが少し切られた。

フェイトちゃんを見つけたから、再び距離を置こうと再び反転して、フェイトちゃんの魔力球がセットされていた。

『Fire』

撃ちだされる。距離が近過ぎて流石に避け切れないから、小さなプロテクションだけ張って、当たる物だけそれに当てて弾く。

少しだけ離れて、フェイトちゃんの方を向く。フェイトちゃんの息も私と同じように荒い。あまり長くは戦えないだろう。それはつまり、正念場。

『まともに戦ったのは温泉の時だからな。その頃よりは確実に成長してる』

『あ、ありがとう……』

『だからこそ、フェイトがこれ以上、長引かせない為に大型魔法を狙ってきた時。それが正念場だ』

『それは……』

『攻撃の後はすぐに行動できない。どんな時も、それは変わらない』
『それに大型魔法を撃つという事はそれだけ魔力を消費するという事です。疲労している段階で撃てば、防御なども格段に下がる』

『相手が大型を撃ってきたら、耐える』

『避けるじゃないの？』

『バインドで拘束するだろう。俺ならそうする。だから耐える。耐えれば……』

『先ほど言ったどんな戦況も一撃で粉碎出来る高威力の大技を叩きこんで終わりです』

『……それってフェイトちゃんが危ないんじゃない？』

『後の事を心配する余裕なんてない。フェイトに勝つには容赦をす
るな。全力で向かってけ』

『……うん！』

フェイトちゃんの足元に大きな魔法陣が生まれ、直後に私の周りに小さな魔法陣が出ては消えを繰り返し始める。やっぱり正念場。だからこそ、避ける事なんて考えないでジャケットや後に発動するシルドの為に魔力を溜めて、戦況を一撃で粉碎する大技の為に準備を始める。

フェイトちゃんの周りに大型の魔力球が出来、そしてバインドで四肢を拘束された。しかし、浩樹君の言った通りだなあ。なんか怖いよ。

『まずい！フェイト、本気だ！』

『…………』

アルフさんの言葉。浩樹君達との作戦会議を知っているユーノ君は何も言わない。

でも、本気か。うん、そうじゃないと意味が無い。

『大丈夫だよ、アルフさん』

『でも！フェイトのそれは本気でまずいんだよ！！』

『平気！』

フェイトちゃんを見据える。フェイトちゃんの詠唱は続き、そして、終わる。

「フォトンランサー、ファランクスシフト！撃ち砕け、ファイア！」

上げた手が振り下ろされ、大量のフォトンランサーが私に向かって飛んできた。しかも今までの直線弾と違い、若干の誘導性能があり全弾、此方に向かってくる。

でも、耐えて見せる。

『レイジングハート、準備、お願いね』
『分かりました』

念話でレイジングハートに声をかけ、そして私は球体型の全面のプロテクションを張る。一発、二発。次々にランサーが当たり、それに比例してどんどん消耗していくけどそれでもプロテクションが碎ける事は絶対がない。減ったら減った分、魔力を足して一定に保つ。

そして、攻撃が終わった。念の為爆煙が晴れるまでプロテクションを続け、晴れてきてフェイトちゃんの姿を確認してからプロテクションを解き、モードを変えたレイジングハートをフェイトちゃんの方に向ける。

「いくよ、フェイトちゃん。今度はこっちの」
『Divine』
「番だよー!!」
『Buster』

「……」

知らない天井……って訳でもないな。何度か見た。

まだ若干痛む体のあちこちの関節をぼぐして、ベッドから降り点滴を外す。

「あー、よく寝た。寝過ぎてせいでまだ眠い」

『もうちよつと寝てれば？』

「これ以上寝たら起きられなくなる」

ベッドの脇の棚に置かれていたF4Uを手に取り、今着ている服を確認してから、先ずやるべき事を決めた。

「着替えよう」

『入院着で戦闘じゃ締まらないもんね』

「そもそも動きづらい」

病室から抜け出して、宛がわれている部屋に向かって歩き始めた。

フェイトちゃんが撃ってきたランサーを一方向的に打ち消して、真っすぐ向かってくるバスターをフェイトちゃんはシールドで防いだ。ギリギリと拮抗が続き、そしてフェイトちゃんは防ぎきった。

でも違う。此処からが本命。フェイトちゃんをバインドで拘束して辺りに漂う魔力を集める。

そして放つのは、どんな戦況も一撃で粉碎する大技！！

「受けて見て、ディバインバスターのバリエーション！これが私の全力全開！」

『何かすごい名前だな』

『でも合ってるよね？』

『確かに今見た限りじゃ、それは凄く合ってるけどさ。……レイジングハート、なのはがどんどん遠くに……』

『私も驚いています。まさかこれほどは』

『これで、どんな戦況も一撃で粉碎する大技の完成だよな？』

『あ、ああ』

『後は裏技ですね』

『あ、その前にもう一回練習させて？』

『ユーノを的にしてくれ』

若干浩樹君が難色を示してたけど、一番合ってると思う魔法名を叫ぶ。

「スターライト、ブレイカー……!!!……!!!……!!!」

収束砲撃。それがフェイトちゃんに直撃して、私達の勝負に決着がついた。

「着替えが辛い……」

「体中本体巻かれてるもんね」

「それにまだ若干痛みが残ってるしな」

結局医務室を出てから辿り着くまでに大分時間がかかってしまった。着いてからも大変で、とりあえず動きやすい服にしようと選んだ服が、大変着辛い。

しかし最後に見た日付から察するに丸一日は寝てたのか。長かったのか短かったのか。こんなに寝たのは初めてだったのは違いないが。

『十分短いと思うけど。少なくとも魔法初心者が次元干渉の魔法に直撃して一日で起きられるとか。私がかかするまでも無くチートな気がするよ……』

「失礼な。チートなんて言葉で片付けるな。俺は天才じゃなく秀才になりたい」

『あー、RPGで裏技なんて使わないでコツコツ経験値溜めてくた
イブだ』

「普通じゃね？」

『人によるかな』

人によるのか。俺の周りにはそういう人はいなかったからよく分からない。

何とか服を着こんでから、軽く体の確認をしてから外に出る

『どつするの？』

「起きましたって、挨拶しないとな」

向かう先はアースラのブリッジだ。

たとえ魔力とかが万全だったとしても、浩樹君みたいにいきなりの攻撃に対して、他の二人を庇って、且ジュエルシードを確保するという芸当が、私に出来る筈がない。

フェイトちゃんとの戦闘が終わって油断していた今なら尚更。ジュエルシードを確保する暇なく、突然の空からの雷に対して、フェイトちゃんを守る事もジュエルシードを確保する事も出来なくて、結果的にフェイトちゃんは気絶、バルディッシュは形状の維持が出来なくなり、ジュエルシードは奪われてしまった。

『ごめんね、クロノくん』

『いや、気にする事は無い。今のでプレシア・テストロッサがいる座標を特定できた。なのはは、フェイト・テストロッサを連れて、アースラに戻って来てくれ』

『うん』

フェイトちゃんを連れてアースラへ。ブリッジの画面には恐らくフェイトちゃんのお母さんがいる場所へ突入している管理局と思われる人たちの姿。

『なのはさん？フェイトさんに自分のお母さんが逮捕される瞬間を見せるのは忍びないわ。どこか別の部屋に』

『あ、はい』

「フェイトちゃん、良かったら私の部屋……」

私の言葉に聞く耳を持たず、フェイトちゃんは画面を見入っていた。画面の中では管理局に人達が、フェイトちゃんのお母さん、プレシア・テストロツサさんを発見した所。

『プレシア・テストロツサ。時空管理法違反。及び管理局艦船への攻撃容疑で、貴女を逮捕します』

『武装を解除して、此方へ』

動く気配が無いプレシアさんを取り囲み、別の人達は奥にあった部屋に入っていく。木の根が張り巡らされていたその部屋にあったのは……。

気がついた違和感は、人の気配だった。

「何か、寝る前より人の気配が少ないな」

『そうなの？私にはよく分からないけど』

「……………何かあったのか？」

『調べてみる？』

「出来るのか？」

『勿論。F4U経由で寝ていた間にあった事と今起こってる事を確認するから待ってね』

検索中でぐすとアナウンスが頭の中に流れ、それに若干辟易している間に検索が終わった。

『寝ている間に最終局面です』

「何となく分からないでもないが、簡潔かつ的確に説明してくれ」

『えーとですね』

かくかくしかじか。

「確かに最終局面ではあるな。急ごう」

『了解。とりあえず現状の音声だけでも再生しておくね』

「ああ、頼む」

頭の中にプレシア・テストロッサの言葉が響き始め、俺はブリッジ

に急いだ。

『でも、もういいわ。終わりにする。この子を失ってから暗鬱な時間を。この子の身代りの人形を娘扱いするのよ』
「あっ」

フェイトちゃんが息を飲んだ。

『聞いていて？貴女の事よ。フェイト。せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない、私のお人形』
「……最初の事故の時にね。プレシアは実の娘、アリシア・テストタロツサを亡くしているの」

エイミイさんの言葉が艦内に響く。

「彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる、使い魔を越える人造生命の生成。そして、死者蘇生の秘術。フェイトって名前は

当時彼女の研究につけられた、開発コードなの

『よく調べたわね。そうよ、その通り』

プレシアさんがフェイトちゃんそっくりの子、アリシアちゃんが入ったポットに寄り添う。

『だけど駄目ね。ちっともうまくいかなかった。作り物の命は所詮作り物。失ったものの代わりにはならないわ』

そう言って、こちらを、画面越しに恐らく自分を見ているであろうフェイトちゃんの方を見た。

『アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々我が儘も言ったけど、私の言う事をとてよく聞いてくれた』

「やめて……」

『アリシアは何時でも私に優しくかった』

ポットを撫でながら、言葉は続く。

『フェイト、やっぱり貴女はアリシアの偽物よ。せつかくあげたアリシアの記憶も、貴女じゃ駄目だった』

「やめて、やめてよ！」

どれだけ言っても、私の言葉はプレシアさんには届かない。多分、誰の言葉も今のあの人には届かない。

『アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけのお人形。だから貴女はもういらないわ。どこへなりと消えなさい！！』

「お願い！もう止めて！」

届かない。そう分かっていても叫ばずにはいられない。彼女の、フェイトちゃんの悲しい顔はこれ以上見たくない。

それから、暫く笑い、再びこちらを見た。

『いいこと教えてあげるわ、フェイト。貴女を作り出した時からずっとね、私は貴女の事が……大嫌いだったのよ！』

その言葉を最後に、フェイトちゃんがその場に崩れ落ちた。

「……………」

『それで？向かう先を変えてどこに行くの？浩樹は』

「転送ポートだ」

頭の中は怒りに満ちている。だからだろうか。痛む筈の体の痛みは無くなり、妙な所は冷静だった。不思議と、今なら何でも出来そうな気がする。

少なくとも……………。

「あの女のいる場所まで乗り込んで、殴ることぐらいはできる」

『正気の沙汰じゃないなあ』

「五月蠅い」

『本気？現状は最悪な方に突き進んでるよ。Aランクの機械兵士まで出てきて、おまけにジュエルシードが発動して発生した次元震。』

一人でどうにか出来るレベルじゃないよ？』

「どうにかするとか、そう言うのはどうでもいい。俺はあの女を殴る。それだけだ」

『……………くすくす。年相応の子供みたいで安心した』

「なんだよ」

『勇氣と無謀は違うよ』

「知ってる。俺が今からする事が勇氣じゃなくて無謀だって事もな
『そっか。でも安心してよ。私がいる』

転送ポートが見えてきた。発動していなかったが、何故か急に発動した。

「お前か？」

『うん。ねえ、浩樹』

「なんだ？」

『私がいるよ。助けてあげる。浩樹の無謀を、私が勇氣に変えてあげる。この私が』

「……………」

『忘れられた都、アルハザードの化身であるこの私が！…』

第十二話 〈激突する砲撃と雷〉（後書き）

ごま「第十二話。原作十一話です。という訳で今回も引き続き相方は????さんです」

アルハザード「いや、名前もつでたよ？」

ごま「忘れられた都がフランクすぎる」

アルハザード「変に格式ばってもしょうがないし。こういう方が浩樹も付き合いやすいでしょ。それにあくまで化身であって、本体じゃないよ」

ごま「それにしても何故に浩樹にそこまで入れ込んでるんだ？」

アルハザード「それはまあ、いずれじゃない？」

ごま「まあ、そうだな。しかし意外と難産だった」

アルハザード「期日2日オーバーだもんね。長さはいつもの1.5倍ぐらいだけだよ」

ごま「原作の戦闘シーンを殺さないように書いてたら難しくて。結果的に殺してしまった気もするけど」

アルハザード「ですよね」

ごま「もっとうまくになりたい」

アルハザード「あつはつは。そういえばpv10000突破したね」

ごま「そうだな。この作品を読んで下さって、ありがとうございます」

アルハザード「まあ、一応次回は最終回だけだね」

ごま「連載が完結するのって初めてな気が……」

アルハザード「ええ〜」

ごま「あはは。さてじゃあ、少し真面目に。佐山・御言さん。コメントありがとうございます」

アルハザード「29日のコメントだけだね」

ごま「すみません。次回は三日以内です。……多分」

アルハザード「まあ、浩樹が走り始めたもんねえ」

ごま「だよねえ。よし、予告しよう」

アルハザード「次回いよいよ最終回!!」

ごま「ジュエルシード事件が終息した時、果たしてどうなっているのか!!」

ごま「また次回!!」

第十三話 く物語の終わりと始まりく（前書き）

オリ主によるリリナの再構成物です。

この作品をここまで読んで下さってありがとうございます。

第十三話 く物語の終わりと始まりく

なのはside

「なっ!？それは本当か、エイミー!」

『うん!信じられないけど、間違いないよ!』

「どうかしたの?クロノ君?」

あの後、プレシアさんの元に乗り込むというクロノ君についていると、いきなりクロノ君が声を荒げた。

「まったく、あいつは!」

「クロノ君?」

「クロノ?」

『なのはちゃん。ユーノ君。よく聞いて』

先を急ぎ、さらに速度をあげたクロノ君に何とかついて行きながら、エイミーさんの声に答えた。

いい知らせと悪い知らせの両方があるらしいけど。

『どつちから聞きたい?』

「えっと、いい知らせの方からで」

『了解。いい知らせっていうのはね、浩樹君の目が覚めたよ』

「本当ですか!?!」

『間違いないよ。医務室には、もういないからね。それに浩樹君の部屋に彼が着ていた入院服が脱ぎ捨てられてたし、F4Uの起動も確認した』

「え?」

着替えた? デバイスを起動した? この船の中じゃそんな必要なんてないし、第一動く必要も無い筈。なら……。

「まさか……」

『多分そのまさか。悪い知らせっていうのはそれ。浩樹君、どうやってかは分からないけど、転送ポートを自力で繋げて、一人で現地に乗り込んだみたいなんだ』

「っ!?!」

思わず全力で転送ポートまで飛んで行きそうになったのを、クロノ君に止められた。

「待てなのは」

「でも、浩樹君が!!」

「分かってる!だが、艦内は一部区間を除いて、非常時以外は魔法の使用は禁止だ。今はその非常時じゃない。いいから走るぞ」

クロノ君に次いで、走れるだけ速く走る。これ以上速く走れないのに、それでも足りない。浩樹君だったらもっと速く走れるのに。そんな事を思ってしまう。

転送ポートに着いた時には息苦しかったけど、それを無理矢理整えて、クロノ君とユーノ君と一緒に転送ポートに入り、現地へ跳んだ。

そこにあっただのは。

「浩樹がやったのか……?」

傷一つつかず、しかし全く動く気配が無い機械達。そう、まるで、浩樹君に直接接触られて動かなくなった機械のようだった。

S i d e o u t

少し前。

「おお、いつぱいいるな」

『この程度じゃ。まだまだ中には沢山いるよ』

「そうだな」

臨戦態勢の機械兵士たちを尻目に、のんびりと手袋を外して、F4Uに設定されているバリアジャケットを着る。

「アルハザード……長いからアルハでいいか」

『別にいいよ』

「じゃあ、アルハ。俺の能力の制御とかは可能か？後はフェイトが使うみたいな高速移動の魔法」

『能力の制御は出来るよ。魔法の方はF4Uにインプットしてある』

「ならよし。あいつらを完全封印出来るのに最短何秒？」

『能力を一部に集中して出力上げれば0.1秒』

「了解。右手に集中。F4U、高速機動の魔法を頼む」

『Flash Action』

右手に力がたまる感触。そして足をメインに魔力強化された。

それを感じてか、今まで様子見をしていた兵士たちが一斉にこちらに向かってきた。

「やる気か？今の俺は強いぞ」

言った直後、此方に向かって来ていた一機の足元に移動し、ほんの少しの時間触り続ける。それだけで行動を止め、動かなくなった。

「うん、行けそうだ」

『よし。じゃあ、どンドン行こう』

「当然」

直後に動き始める。すれ違いざまに右手で触るだけ。それだけで済むのだから、対して時間がかかる事も無く、俺は奥に進み始めた。

所々に穴があいている廊下を一気に駆け抜けて、大部屋に出た。先ほどよりも断然多い機械兵士が当たり前の如く立ち塞がり、奥には昇りの階段と奥へ続く通路。

「どつちだ？」

『通路の方だね。上に行くとな駆動炉』

「駆動炉？」

『そう。暴走中でかなり危険な駆動炉だよ。まあまだ余裕があるから大丈夫だとは思っけど』

「そうか。ならクロノとかに任せるとしよう。今は」

通路の方を見据える。

「あの女に一言言ってやる方が優先だ」

なのはSide

大広間までは文字通り機械達の墓場のようだった。ある物は倒れ、ある物は何かに攻撃しようと、己が手に持つ武器を振り上げた状態で。ある意味かなり不気味な光景だったが、階段を上ってからは、それが無くなった。

普通に行動し、私達の行く手を阻んでいる。

「浩樹君、こつちには来なかつたみたいだね」
「うん、みたいだね」

向かって来た兵士を迎撃し、ユーノ君と言葉を交わしながら、浩樹君に念話で呼びかけ続ける。だけど向こうからの返事は全く無い。意図的に切っているのかそれとも何か出来ない事情があるのか。それは分からないけど。

「この事件が終わったらきつと会えるよね」

念話を切って、目の前の兵士を倒した。

『全部に言えることだけど、戦闘に関してそれは絶対。なのははただでさえ慣れてないんだから』

『そうは言っけど、浩樹君も地味に雑念多いよね？』

『そんな事言うのはこの口か？』

『ひふあひ、ひふあひ』

『全く。他ならともかく、戦闘中に他の事考えた事なんて……両手で数えられるくらいしかねえよ』

『あるじゃん』

『俺は慣れてるからいいの』

『えー』

まあ、後のやり取りはともかく、戦闘中とか何か為さなきゃいけない事がある時は集中しろって言うてたし。

「今は、動力炉の封印をしないと」

S i d e o u t

「ペース配分、間違えたかもな」

近づいて来た機械兵士を封印しつつ、ぼやく。封印処理に魔力を使う事は分かってたけど、此処までとは。

「先に言っといってくれよ」

『言っても聞かなかったでしょ？』

「……まあ、そうだが」

遠距離からの砲撃を後ろに跳んで回避し、左手に持ったF4Uを機械兵士たちの方に向ける。

「レイズシュート、エクスキュージョンシフト」

五つの魔力球が生まれる。ふう、と一息ついて、前を見据える。

「発射てえっ！」

一つの魔力球から五本の光線。計二十五本の光線が辺りを蹂躪して破壊する。

砂埃が晴れた時には辺り一面に残骸が転がるだけ。

『無茶するなあ』

「うっさい。多少無理でもしないと、魔力の温存なんてできないだろう。プレシアの所に俺は行く」

「それは認められないな」

振り向くと、そこにいたのは管理局の執務官殿。此処までいる敵は全部倒して来たつもりだけど、それでも速い。肩で息もしてるし、急いで来たらしい。

「浩樹。僕が送ってやるから、君は帰るんだ」

「断るよ。俺は進む」

「どうやって転送ポートを使ったのかは分からないが、君は怪我人だ。それに魔力の消耗しているだろう」

「関係無い。俺はプレシア・テストロツサが許せないだけだ」

どんな理由があろうと、フェイトにあんな事を言うなんて許せない。それだけ。

「フェイトは母親の為にって頑張ってきたんだ。それなのに……な
んで、素直になってやらないんだ、あいつは」

「……何？」

「とにかく！俺はプレシアに一言言ってやらなきゃ気が済まない！
！もっと素直になれって！！」

「……」

「……」

……あれ？何か空気がおかしいような？だってそうだろ？昔から人の悪意には敏感だった。で、俺がくらった攻撃は悪意の矛先が無かったし、さっきの言葉にだって悪意が無かった。寧ろ全く真逆の感情があつたようにも感じる。

「大方、フェイトを庇う為にあんな嘘を言ったんだと思つてたんだけど。それでも……」

「……」

「クロノ？」

「あ、ああ、すまない。予想外の言葉を言われたから、少し驚いていた」

「?とにかく、俺は行く」

そう言つて踵を返したら襟を掴まれた。

「邪魔」

後ろを向きつつ腕を掴んで捻りながら、無理矢理腕を外して投げる。それなりに本気で投げたけど、完璧に受け身を取られた。

しょうがないから、そのまま押さえこむ。

「やっぱり疲れてるみたいだ。切れが甘い」

「それが分かった様でなによりだ。ついでにそこからどいて貰える
と助かるが」

「俺の同行を認めるなら」

「それは認められない。君は民間協力者だ。此処までする必要は無
い」

「なのははどんなんだ？来てるんだろう。ユーノもだ」

「っ。それは」

「あいつらがいるから俺もいる。それだけだ」

「君とあの二人の置かれていた状況が違っただろう。君はプレシア・
テスタロツサの攻撃を受け、ほんの少し前まで意識不明だったんだ」
「……はあ」

何でこう頭が固いんだろうか。十日も一緒にいれば俺がどうという人
間に分かる筈だけど。

「なあ、クロノ」

「何だ」

「なのはがいるから。それが今の俺にとって絶対的で普遍的な行動
理由だって前に言っただろ」

「確かに聞いた。だが、それでも認めるわけにはいかない」

「むう」

心配されている事は分かる。分かるけど、だからって此処で認めるわけにはいかない。

ジリジリと時間だけが過ぎて、巨大な爆発音が廊下の奥で響いた。慌てて振り向くと、今まで倒してきた機械兵士とは比べ物にならないくらいの大きさで、背中に砲台を乗せている。

「ちっ」

すかさずクロノから手を離して、突撃。背中の砲台に魔力が溜まり始めるが、俺のが速い自信がある。

かなりあつた距離はすぐに埋まり、触れる為に手を伸ばして、何かに阻まれた。

「シールド!？」

拳が振り下ろされ、慌てて距離をとり、直後に自分の失策に気がついた。溜まった魔力が解放され、一直線に自分の方に飛んでくる。

左右のどちらかに避けようとして、後ろにクロノがいる事を思い出して、足が止まる。

『浩樹!?!』

「防ぐ!?!」

「馬鹿か君は」

思いつきり引つ張られ、体が宙に浮いた。足の下を砲撃が飛んでいき、暫くしてから収まる。

「君に庇われるほど、僕はまだ落ちぶれていないぞ。……浩樹」

「何?」

「……受け取れ」

そう言つてS2Uを通して魔力を渡された。それも結構な量だ。

「いいのか?」

「此処まで来るのに殆ど動かなかったからな。それより、早くあいつを倒して、プレシア・テストロツサを捕縛に行くぞ」

「別に捕まえない訳じゃないんだけどなあ……。まあ、了解」

直後に二人別れて、通路を飛ぶ。

『結界は僕がどうにかする。君は封印の用意をしておけ』
『分かった』

アルハに頼んで再び能力の制御。右手に魔力を溜めて、シールドが無くなる事を信じて突撃。

そんな俺を追い抜いたクロノが、シールドにS2Uを突き立てた。

『Break Impulse』

S2Uからの音声。そしてシールドが無くなる。速度をそのままに突撃し、右手でその巨体に触れた。
それだけで、機械兵士は駆動を止める。

「クロノ。さっさと行こう。……クロノ？」

『返事が無い。まるで屍のよ「アルハはちょっと黙ろうな」はい』
「どうしたクロノ?」

「ん、ああ。エイミィと連絡を取っていた。なのはとユーノは無事に駆動炉に着きそうだ」

「そうか」

「そしてフェイトとアルフはこちらに向かって来ているらしい」

「……そうか、なら急ごう。あの二人が来てからじゃ、俺が何を言っても届かない」

走り始める。廊下の奥にいる大量の機械兵士たちを睨みつけながら、クロノとのこの後の連携について考え始めた。

S i d e なのは

フェイトちゃんと別れてから、ユーノ君と二人、エレベーターで動力炉を目指していた。

今は戦闘中じゃないし、いいかなあ、なんて思ってエイミィさんに連絡を取ったら、浩樹君は無事らしく、今はクロノ君と合流して二人でフェイトちゃんのお母さんの元に向かっているらしい。

「なのは」

「何？ユーノ君？」

「良かったね。浩樹が目を覚まして」

「うん！」

本当に良かった。そういえば、昨日海鳴市に帰った時に、アリサちゃんとすずかちゃんと約束していた事を思い出した。

「ねえ、ユーノ君」

「何？」

「もう過ぎてるけど、これが終わったら皆で浩樹君のお誕生日会をやるう、って話してたの。ユーノ君も来てね」

「うん。分かったよ、なのは」

エレベーターが到着し、ドアが開いた。

Side out

「流石に多いな。少し辛い」

「弱音を吐くな。もう少しだ」

突然、続いていた地震が止まった。戸惑っていると、頭の中に響き始めたのはリンディさんの声。どうやら次元震を止めたらしい。

「なんてーか、凄いな」

「当然だ」

「……マザコン」

「黙れっ！！」

そんなやり取りの間もリンディさんの言葉は続く。

『忘れられし都、アルハザード。そしてそこに眠る秘術は、存在するかどうかも曖昧なただの伝説です』

『っ。違いわ。アルハザードへの道は次元の狭間にある。時間と空間が欠落した時、その狭間にある輝き。道は確かにそこにある』

『随分と分の悪い賭けだわ』

「と言ってるが、実際の所は？」

『プレシア・テストアロッサも間違ってる訳じゃないけど、でも足りないね。あの理論じゃ辿りつけない』

へえ〜。聞いたいてなんだけど、正直どうでもいいかな。

「酷いね!?!」

「貴方は其処に行つてどうするつもりなの? 失つた時間と犯した過ちを取り戻す?」

「そう。私は取り戻す。私とアリシアの、過去と未来を」

「取り戻すだと……?」

「クロノ?」

クロノの様子が変わった。何故か、急に怒り始めた。

走る速度が上がり、呼びかけても止まったり、速度を落とす気配は無い。

「取り戻すの。こんなはずじゃなかった、世界のすべてを」

急に立ち止まり、どうしたのかと思えば、杖を構えて砲撃。それで進行方向にあった壁を破壊した。

その先は広い空間に続いており、クロノはその空間の中にいた女性

に向かって吠えた。

「世界は、何時だって！こんなはずじゃない事、ばっかりだよ！！
ずっと昔から！何時だって、誰だって、そうなんだ！！」

「……」

クロノがそう言うつて事は、あの人がプレシア・テストロッサか。
プレシアがこっちを見た。クロノを見てから、視線を移動させて俺
と目が合った。

顔色が悪いのは何か病にでも侵されているのだろうか。ただ、俺と
目が合った時、その顔に形容しがたい感情が浮かんだ事だけは間違
いない。

プレシアが何かに気がついて顔をそちらに向けた。少しだけ身を乗
り出してそちらを見ると、上から降りてくるフェイトとアルフの姿。

「間に合わなかったか……」

誰にも聞こえないようにぼそりと呟く。だからこそ、クロノは気付
く事無く再び吠えた。

「こんなはずじゃない現実から！逃げるか、それとも立ち向かうかは、個人の自由だ！だけど！自分の勝手な悲しみに、無関係な人間を巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない！！！」

S i d e F e i t

白い服の女の子と別れて、アルフと二人で此処まで来た。地に降りて、母さんを見る。

しばしの間。唐突に母さんが咳込んだ。

「母さん！！」

慌てて近づく。しかし。

「何しに来たの……」

足が止まった。分かっていた。分かっている筈だったけど……。

「消えなさい。もう貴女に用は無いわ」

でも、あの白い子と約束をした。それに決意したんだ。

「貴女に言いたい事があつて来ました」

本当の私を始める為に、決着をつける。だから、想いを伝える。

「私は。私は、アリシア・テスタロッサじゃありません。貴女が作った、ただの人形なのかもしれません」

母さんは何も言わない。言葉を続けた。

「だけど、私は。フェイト・テストロツサは貴女に生み出してもらって、育ててもらった、貴女の娘です。」

少しの間。そして笑い始めた。私を嘲笑うかのように声をあげて。大嫌いとまで言われたのだ。もうこれくらいじゃ、私の心は揺るがない。

「だから何？今更貴女を、娘だと思えというの？」

「貴女が、それを望むなら。それを望むなら、私は世界中の誰からもどんな出来事からも、貴女を守る。私が貴女の娘だからじゃない。貴女が、私の母さんだから」

一歩だけ近づいて手を伸ばす。願わくばこの手を取って、此方側に来て。そして、一緒に罪を償って。共に暮らしたい。そう願って。

でも私の願いは。

「くだらないわ」

と、その一言で一蹴された。

直後に母さんが杖で床を突いた。直後に魔法陣が生まれて、ジュエルシードが発動。庭園全体が揺れ始める。

後ろにいる執務官が、私の名前を叫ぶ。でも、体は動かなかった。

「私は向かう！アルハザードへ！そしてすべてを取り戻す！過去も未来も！たった一つの幸福も！」

庭園が崩れ始める。執務官に下がれと叫び、その直後に床が崩れ始めた。そして、私の脇を誰かが通り抜けて行った。

「ふざけるなああああ！！！！」

S i d e o u t

「ふざけるな」

今更、突き放すと決めたくせに、その少女から貴女が母親だと言われて、そんな表情をするな。そんな嬉しさと悲しさが入り混じった

表情をするな。

「ふざけるな」

演じるのなら完璧に演じきれ。悪になると決めたのなら、その思いを貫き通せ。

「ふざけるな！」

今更、そんな狂気に染まった顔をしても遅い。お前の気持ちは筒抜けなのだから。

「ふざけるなああああ！……！」

クロノの制止を振り切り、フェイトの脇を一気に抜け、プレシアに近づく。

『浩樹。答えなくていいから聞いて。あの杖。ロストログアだ。力を与える代わりに使用者を呪う魔具。多分、プレシアの不調もあれが原因だから、引き離せば体は幾らか健康にはなるし、きっと目も覚めると思う』

距離を零にして、杖を思いっきり蹴りあげて、フェイトやクロノに聞かせるわけにはいかないから無理矢理念話を繋いで、その中で叫ぶ。

『ふざけるなよ、プレシア・テストロッサ。悪を演じる事に決めたのなら、フェイトに何を言われても揺らぐな』

『何を……』

『あんた、自分で思ってるより、表情に出てるからな』

足払いをしてバランスを崩し、魔力強化込みで無理矢理クロノがいる辺りまで放り投げる。

直後に床が崩れた。魔法を使おうとして、急激に力が抜ける感覚。ああ、これはあれだ。

「無茶し過ぎたかな」

『それはそうでしょ。寝起きで此処まで。途中魔力供給はあったけど、此処まで動けた方が不思議なの』
「そう、だなあ」

思わず納得してしまう。足場が無くなったのだから、体が下に引かれる事は当然だ。とりあえず、プレシアに最後に一言言っておこう。

『プレシア』

『……』

『もう少し素直になれよ。俺が言いたいのはそのだけ』

『……死ぬ間際に言うのがそれなんて。どれだけお人よしなのかしら』

『褒められたと思うておくからな』

床が大分遠くなってきた。フェイトがこちらを見てる。その顔に浮かんでるのは驚愕かな。まあ、気持ちは分かるけど。彼女にも言葉を残さない。

『フェイト』

『っ！?』

『なのはの事を頼む。後、伝言。一緒に帰れなくてごめんって』

Sideフェイト

『なのはの事を頼む。後、伝言。一緒に帰れなくてごめんって
な、何を……』

何を。彼は何を……。

『何言ってるの！！君がいなかったら、あの子はどうなるの！！』

念話の中とはいえ、びっくりするぐらい、大きな声が出た。

『だから、それを頼んだって』

『ふざけないでよ！私と君は違うんだよ！あの子の中で君がそれだけ大きいのか分らないの！？』

『……………』

初めて彼女と会った時。私の魔力弾が当たって倒れた君を支えて、私に敵意を向けた事。二度目にあつた時、やっぱり君の事を私が行った時、怒つた事。全く無関係だつた私でも分かつたのに、何でその事が分からない。

『何で。何で!?!』

『……にはは。ご……ん、フェ……ト。なん……。ノ……ズが、多……て、聞
き……い……』

『っ』

『と……あえず、フェ……ト。これ。な……はに、渡……て』

そう聞こえ、直後に彼の手から何かが飛んできた。それは彼が持っていたデバイス。そのまま、彼の姿が見えなくなった。

「あつ……。浩樹っ!!」

思わず、彼の名前を叫んでいた。

Side out

『ふぎ…ない…よ！私と…みは違…んだよ！あの子…中で…みがそれ…け大き…のか分から…いの！？』

急にノイズがひどくなってきた。それに、頭がどうにも回らなくなってきた。このまま眠ってしまいそうなのを何とか抑えて、F4Uを取り出す。ちゃんとなのはに伝わる事を願って、F4Uにメッセージを録音する。

『…で。何…！？』

『…にはは。ごめん、フェイト。なんか。ノイズが多くて、聞きづらいや』

『っ』

『とりあえず、フェイト。これ。なのはに、渡して』

F4Uを上に向かって投げる。届いただろうか。正直自信が無いけど、多分、大丈夫だろう。

やる事はやった。後は体が落ちて行くのに合わせて遠くなっていく意識に身を委ねてしまえばいい。

『ごめん、アルハ。例の約束、守れそうにないや』

Sideアルハ

『ごめん、アルハ。例の約束、守れそうにないや』

何で、そんな事を言うの？

『……らしくないよ、浩樹』

『まあ、確かに自覚はあるが。こればかりはな』

『もう、忘れたの浩樹？』

ほんの少し前に言ったばかりなのに。まったく。

『えっ。』

『安心して浩樹』

私の仕事は君の手助けになること。それが忘れられし都である私がした、初めての約束。その為なら、私は私の全てを持って、それを守る。

『浩樹の無謀を勇気に変えてあげるって約束したでしょう。忘れられし都の化身である、この私が』

『……』

『だから休んで。次に目を覚ました時には、安全な場所だから』

『……ああ』

浩樹の意識が途切れた。

私は自分自身に潜って必要な技術や情報を片っ端から引っ張り出して、それを元に魔法を組む。

『……ついでだし、あの子も連れて行こうかな』

浩樹のすぐ傍を落ちて行くアリシアという女の子が入ったポット。

それも巻き込んで、魔法を発動した。行き先は既に決まってる。

浩樹の回復とアリシアの蘇生。その両方が同時に行える場所。

アルハザード。

第十三話 く物語の終わりと始まりく（後書き）

ごま「最終回。原作第十二話です。長さ的には今までの倍近く」

アルハ「ふふ、ふふふ。これで、これで浩樹は私の物に!!」

ごま「なりません」

アルハ「えー」

ごま「思いのほか筆が進まず、結局6日になってしまいました。最終回とは言っていますが、まだ若干続きます」

アルハ「一応本編最終回って意味で。後日談というかエピローグ的なものがまだ続きます」

ごま「て言っても、本編十三話は書きません。書けません。この作品の中ののが浩樹喪失してあの十三話みたいになるとは思えないので」

アルハ「逆もまた然り」

ごま「まあ一応本編最終回。次回からそれぞれのキャラにスポットを当てた後日談になります。よろしければ、そちらも読んで下さい」

アルハ「と言っても、リアルが忙しくてなかなか難しくなってきたけどね」

ごま「前のように三日起きは無理だと思います。別の連載もあるの

で
」

アルハ「それでも待つていただければ、作者的には幸いです」

ごま「この作品を此処まで読んでくださってありがとうございます
た」

ご・ア「」ではまた次回「」

第十四話 く高町なのはの場合く（前書き）

前話で第一期が終了。今回から後日談です。

まだ続くので、これからもよろしくお願いします。

第十四話 く高町なのはの場合

手は届かない。

声は届かない。

想いはもう、届く事は無い。

「孫の浩樹だ。良かったら仲良くしてやってくれ」

そう言って、隣に住んでいた高坂のおじいちゃんが紹介したのは、私と同じ年位の男の子だった。名前は、浩樹君。

「えっと……よろしくね？」

「……」

すぐに視線をそらされてしまった。取り付く島が無いその態度に、思わず苦笑いしてしまった。

でも、私と浩樹君の関係は、この日から始まった。

私の家はお父さんとお母さんは翠屋。お兄ちゃんとお姉ちゃんも出かける事が多かったから、自然と私は家に一人で。浩樹君もおじいちゃんが良く出かけるらしく、やっぱり家に一人。

だからだろう。どちらかの家に遊びに行く事が多かった。まあ、最初はそんな事無くて、私の方が何かしらの理由を付けて遊びに行っ

「……、ね、ねえ浩樹君」

「……」

「え、えーと」

「何？」

反応がワントンポ遅いのは本を読んでいるからだ。基本、浩樹君は私としようといなかつた。体を動かしている時以外、本を読んでいる。レシピ本だったり小説だったり様々。

反応してくれるようになっただけ、初めて会った頃よりましだけど。

「た、たまには家に遊びに来ない？」

「家？高町の？」

「う、うん。あと、名前で呼んでほしいかなあ、なんて」

「……」

黙って何かを考え始めてしまった。少ししてから、「でも」と躊躇いがちに言われた。

「用事、無い」

「ふえ？」

……そう言えば、私が家に来る時って何かしらの理由つけてたよね。

「理由が無いのに、お邪魔するのって、まずいんじゃない？」

「べ、別にそんな事無いよ！！私がたまたま理由があったただだし

！！私も、理由無しに遊びに来てみたいなあ。なんて」

「……別にいいよ。どうせ暇」

「いいの？」

「ああ。明日、暇だったら遊びに行ってもいい？」

「え？あ、ああ！うん！是非！！」

「そっか。なら行く」

ニコリと笑った浩樹君。普段無表情な分、その表情は余りにも魅力的に見えて、思わず顔を反らした。

「……？」

「ふえ！？」

視線を感じて、再度浩樹君の方を見る。その浩樹君とえば、いつもの無表情ではなく、不思議そうな顔をして少し首をかしげていた。「な、何でも無いよ！」と私が慌てて言うと、また笑って、「変なのは」とそう言った。

「今日はもう遅いから帰った方がいい」

「あ、うん。そうだね」

「じゃあ、なのは。また明日」

「うん！また明日ね、浩樹君」

その日はそれだけで別れた。

家に帰ってから、最後に名前と呼ばれていた事を思い出して、ゴロ

ゴロと悶絶しながら転がる羽目になったのは別の話。

少しだけ関係が前進したその日から、私達は少しずつ近づいて行った。ある日を境に、浩樹君が私の家や私が遊びに行った時、本を読むのを止めた。

ある日を境に、浩樹君から名前を呼ばれたりニコリと笑った時に顔が真っ赤になる事が無くなった。

ある日を境に、浩樹君からも話しかけて来てくれるようになった。

ある日を境に、何も話さない無言の時間が続いても、気まずく無くなった。

そんな風に、少しずつ。少しずつお互いの関係が変わって行っていたさなかに、事件は起こった。

「え？お父さんが、事故？」

仕事中に事故にあっただらしい。意識不明の重体で生死の境をさまよっているとか。

本当は私も傍にいたかった。でも許してもらえなかった。翠屋がち

ようど忙しい時期だった事もあって、お母さんとそれを手伝うお兄ちゃんの帰りは凄く遅くて。お姉ちゃんはお父さんに付きつきり。私は今まで以上に家で留守番している事が多くなった。

そして、それに比例して浩樹君が、何と云うか優しくなった。前より話すようになったし、お母さんが遅い時には、夕飯も作るようになった。

今もお母さんが遅くなるという事で夕飯を作っている浩樹君。私は危ないからって配膳だけ手伝ってくれて言われてるから、今は特にやる事も無く料理をしている浩樹君の背中を眺めているだけ。

そして、ふと疑問に思った。

「浩樹君」

「何？」

「何で？」

「何が？」

「何で、急にそんなに優しくなったの？」

リズム良く、野菜を切っていた包丁が止まった。それから少し考えながら、私の方を見て最近よく見るようになった笑顔を浮かべながら、こつこつ言った。

初めての友達だから。

正直、納得したのかと言われれば怪しかったけど、浩樹君から友達と言われた事が嬉しかった事もあって、その時はそれで終わった。

でも、二日、三日。一週間も経つと、友達と言われた事とか、全部がどうでもよくなった。

もしも完全に一人だったら、私は多分、いい子でいられたんだと思う。でも、現実はそのじゃない。私には浩樹君がいて、浩樹君は私に優しくしてくれた。

だからこそ、私の感情は爆発してしまった。お母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも。誰も私を見てくれない。その事で募った不満が、一気に爆発して、その矛先は他でもない。浩樹君に向けられた。

怒って、泣いて、喚いて。浩樹君に掴みかかって散々言った。

何を言ったのなんて覚えてない。泣きながら支離滅裂な事を言うだけ言って。私が疲れ果てて寝てしまうまで、浩樹君は何も言わず、私の言葉に耳を傾けているだけだった。

目が覚めた時、私がいたのは自室のベッドの上だった。体を起して見下ろすと、床に座ってベッドにもたれかかるようにして眠ってい

る浩樹君の姿。その手は私の手を握っていて、目じりには少しだけ涙が浮かんでいた。

「泣いてたの？」

返事は無い。眠っているのだから当然だ。とりあえず開いている手で涙を拭くと、浩樹君が身じろぎして、寝言を呟いた。「ごめんね」と。

「……………え？」

謝るべきは浩樹君じゃなくて私の筈なのに。

再び、浩樹君は「ごめんね」と呟いた。

「ごめんね、なのは」

「……………どうして？」

どうして浩樹君が謝るの？どうして浩樹君はそんな悲しそうな顔をしているの？

浩樹君が再び身じろぎし、起きてしまいそうだったから慌ててベッドに横になって、寝たふりをした。少ししてからやっぱり浩樹君は起きたみたいで、頭を撫でられてまた謝られた。

何も言わず、ずっと私の頭を撫でて、頭を撫でるのを止めるとドアに向かった。そして部屋から出る前に、立ち止まってこう言った。

「ごめんね、なのは。僕には傍にいる事しか出来なくて」

何も言えない。もしこの時、何か言えれば未来は変わったのかも知れない。そんな事無い。浩樹君がいてくれてよかったって、そんな事を言えればもしかしたら。でも、そんなもしかしてなんて関係なく、この時の私は何も言えず、ただ浩樹君が部屋を出て行くまで寝たふりをして。起きた後も何も聞かなかった風に装って、喚いて、八つ当たりしてしまった事を謝っただけ。

「……………」

夕飯を作る浩樹君の背中を眺めながら、私は思い始めていた。私の

隣に浩樹君がいて、浩樹君の隣に私がいる。それが当たり前だと。

浩樹君がいなくなつて、何日が経つただろうか。あの日からの私は、何もしていなかった。朝起きて、学校に行つて、帰つて来て宿題をして、魔法の練習をして、夜に眠る。そんな日常を淡々と過ごしていた。

朝なんて来なければいい、なんて何度も願つた。夢の中なら浩樹君と会えるから。でもそんな願いが叶う筈も無く、いつも通り朝は来る。本音を言えば学校にだつて行きたくなかった。でも、アリサちゃんやすすかちゃんに心配をかける訳にもいかなかったし、もしかしたら今まで通り、門の前で私を待っていてくれるかもしれない。そんな、ありえる筈も無い希望を胸に、毎朝私は学校に行く。そんな毎日。

「……」

携帯の目覚まし音に起こされて、今日も私は目を覚ました。今日も見ただ夢は浩樹君の夢。初めて会った時から、あの日までの。相変わらず陰鬱になりながら、携帯を手にとって待ち受けを見るのが新しく出来た日課。そこに映っているのは私とアリサちゃん、すすかちゃん。それに浩樹君。

これを撮った時、浩樹君は写真に写るのは嫌だと言って逃げそうになったのをすずかちゃんが捕まえて、アリサちゃんが押さえて私が撮った。だからアリサちゃんが浩樹君と肩を組んでて少しだけ嫉妬してしまふ。アリサちゃんも嬉しそうだ。まあ、私じゃ押さえておけなかったからしょうがないんだけど。

陰鬱な気分は少しだけ解消され、そして気がついた。今日の日付。この日は……忘れもしないあの日だ。

「
っ!？」

再びベッドに入って毛布の中で丸くなる。携帯を握りしめて、強く目をつむり、夢の世界へ逃げようとする。他のどんな日だろうと我慢は出来た。でも、もう駄目だ。今日はあの日だ。

当たり前だと思うようになってしまったあの日。そして夢で見て、彼がいなくなつて、初めて気がついた。当たり前だと思う事で逃げていた事に。私が彼の隣にいたりとか彼が私の隣にいたりとかじゃない。

「私が、浩樹君と一緒にいたかつたんだ……」

泣いた。浩樹君がいなくなって初めて、私は大泣きした。

そしてこの日から、私は学校に通わなくなった。

第十四話 高町なのはの場合（後書き）

ごまだれです。今回はなのはの場合その1です。因みに今回は一人で後書きです。

さて、多分シリーズっぽくなっていたと思うのですが、どうでしたでしょうか？

時期的に土郎さんの事故は小学校に入る前の幼稚園ぐらいのはずですけど、その割に浩樹が夕飯作ったりなど謎の万能さというかチートというか。まあ浩樹君は幼稚園や保育園に通っていない設定だったので、一日中とはいきませんが結構な時間、キッチンで練習していたと思ってください。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

短いですがこの辺で。では次回。

第十五話 くアリサ・バニングスの場合く（前書き）

後日談編は全部まとめて十四話でもいい気がする……。

前回より長いです

第十五話　くアリサ・バニングスの場合く

最初に気がついた違和感はなのは。バスに乗って来なかったから、てつきり今日も休みだと思っていたら、何故か教室であいつの机に突っ伏して眠っていた。他の子に聞いたところ、どうやら朝一で来て、眠っていたらしい。

次の違和感は欠落。なのはがいるのにあいつがいない。この前、一時的になのはが帰って来た時も何か用事があるとかで帰って来なかったあいつが今回もない。

また用事だろうかとも思ったけど、なのははこの前帰って来た時、次に帰って来るのは用事が全部済んだ時、と言っていたからやっぱりいないのはおかしい。

すずかも同じ事に気がついたらしく、戸惑っていた。なのはに聞くにも完全に寝入っているし、電話は通じない。

「まったく。あいつはどうしたつてのよ。携帯はつながらないし」「そうだね。まだ帰ってきてないのかな?」「これはもう、なのはに聞くしかないわね」「それは止めてあげよう? 疲れてるだろうし。後で教えてくれるよ」「はあ、それもそうね」

結局、朝のHRが始まり、先生に起こされるまでなのはは眠り続け

ていた。

そしてHR。

「えー……。高坂浩樹君なのですが。お家の都合で急遽、転校する事になりました」

一時的に静かになった教室が、ざわざわと騒がしくなった。視線を動かすとすずかと目が合い、そのまま更に動かして、事の真偽を知つていそうなのはを見た。

そのなのは他のクラスメイトと違い、驚いた様子は見せてなかった。でもそれだけじゃなくて。あいつの転校の事を事前に知っていたとしても、なのはは表情一つ変えない。

結局、先生がその後になんて言ったのかは全く耳に入って来なかった。あいつの転校となのはの様子が気になって仕方が無かったから。

その後、休み時間の度になのはに話を聞こうと思ったんだけど、その度に私とすずかよりも早く、同じクラスの子や別のクラスの子まで教室にやって来て、あいつの転校についての質問攻め。ようやくなのはとコンタクトを取れたのは昼休みだった。まあ、授業中の間になのはに手紙を出して、昼休みに約束を取り付けたんだけど。

そして昼休み。私はなのはとすずかと共に屋上に来た。何時ものベ
ンチに三人並んで座って、普段だったらそのままお弁当だけど、今
日はそう言う訳にもいかない。

なのは越しにすずかに目配せをすると、頷かれた。それに頷き返し
て、私は口を開いた。

「それで、なのは。浩樹はどうして帰ってきてないの？」
「えっと……」

それきり黙りこんでしまった。その様子はまるで何か私達を納得さ
せるような言い訳を考えているようにも見えた。内容ですぐ判断で
きると思い、大人しくなのはの言葉を待つ。

暫くしてから、なのはがぼつぼつと言った。

「せ、先生の言った通り、転校したんだよ。うん、それだけ」
「……ふざけてるの？」

自分でもびっくりするくらい、怖い声が出た。それを聞いて、なの
はとすずかの肩が跳ねた。怒りのあまりなのはを掴みあげそうにな
るのを、なけなしの理性で何とか抑える。

「転校した？なのは。私の目を見て、もう一回同じ事を言ってみなさい」

なのはの顔を掴んで、至近距離でなのはの目を覗き込む。今度は何も言わず、私から視線を外した。

その反応は予想通りだったけど、その反応は今の私を更に怒らせるだけだ。顔から手を離すと、立ち上がって、なのはの胸倉を掴みあげて吠える。

「なのは！！答えなさい！！浩樹はどこにいるの！！」
「……………」

何も言わない。

「なのは！！」

「……………」

「なのは！！！！」

「……………ごめん。私も、知らないんだ」

「そんなのっ」
「アリサちゃん!!」

すずかに言われて、我に変えた。慌てて手を離して、数歩後ろに下がる。俯いてしまっていてなのは顔は見えないけど、少しだけ震えていた。それで、先ほどのなのは言葉が嘘ではないと分かる。

「何があったのよ、なのは」

「……ごめんね、アリサちゃん。話せないんだ」

「何で話せないのよ。あんた達、何やってたのよ」

「……ごめんね」

「っ」

歩き始める。「アリサちゃん!」とすずかが叫んだけど、止まる気にはなれなかった。

早く一人になりたかった。

放課後。なのはもすずかもおいて一人で帰る事にした。

今日は習い事も無いから、真つすぐ家に帰らないで、しかし目的がある訳でもないから、適当に道を進んで時々今まで通った事が無い

道を通って。

気が付いたら知らない場所……ではなく知っている場所に出た。

「そつえば、前もこんな事あったわね。よっぽど縁があるのかしら」

誰に言うでもなくそう言っつて、溜息をつきつっつ、しょうがないかと思いつつ、あの時のベンチに座った。

初めて浩樹を意識し出したのは一年生の時。勿論、恋愛とかそういう意味ではなく、寧ろ真逆。私にとって、浩樹は敵だった。その当時だったら、この世で一番憎んでいると言っつても過言じゃないくらい。

まあ、憎まれた浩樹からしてみればたまったもんじゃないと思うけど。あの頃、私には初めて親友と呼べる二人の友人が出来た。なのはとすずかだ。だからこそ、私が浩樹に対して危機感を覚えていた。なのはとすずかの共通の友人であったあいつを。

「ねえ、浩樹君」

「ん？何？なのは」

「すずか。これ」

「ありがとう、浩樹君」

「……」

なのはの話では小学校に入学する前からお隣同士の幼馴染。すずかとは学校の図書館で会って、当時ほとんど話さなかつたすずかが唯一話す読書仲間。

初めてできた友達を奪われたくない。私はそう思った。その為に、私がした事と言えば、なのはやすずかと浩樹が話している時に割り込んだり、お昼に一人だけはぶにしたり、廊下とかですれ違ったりする時に睨みつけて威嚇したり等々。

「思い出しただけでも大分酷いわね」

まあだからと言って浩樹が私に対して何かする事は無く、睨んだりなど目があったりした時は笑いかけてきたり、話しかけてきたり。私は馬鹿にされていると思って、もっと強く睨んだり、完全に無視をしたりして。その度に浩樹は苦笑して、大人しく身を引いていた。

そして事件というか、あれがあった。私となのはの二回目の喧嘩…
…というより、私が一方的にキレて、逃げだしたのだ。

「あの、アリサちゃん」

「なによ、なのは」

今日は土曜日だから、午前中で終了。でも、終わるのはお昼だから、いつも食べて帰る。だからこそ、私はいつも通り、高坂浩樹を威嚇した。高坂浩樹はそんな私に苦笑いで返しつつ、ヒラヒラと私達に手を振ってカバンを手にとって、教室から出た。

最後に少しだけ高坂浩樹はなのはに目配せをして、それに対してなのはは少しだけ不服そうにしたように見えた。

屋上に移動してから、余りなのはの箸は進まず、少し何かを考えてから、私に向かって声をかけた。

「えっと……何で浩樹君を目の敵にするのかなあって」

「別に、そんなつもり無いわよ」

「じゃ、じゃあ、今度お話」するつもり無いわよ」「あう……。で、

でも。少しくらいなら……ね？アリスちゃん
「うるさい！する気ないわよー！」

思わず怒鳴ってしまった。でも、一度出たら言葉は止まらない。

「そんなにあいつの居たいなら、ずっと一緒に居ればいいじゃない
！！」

漠然と溜まっていた不満と不安。事あることになのはとすずかがあげるのはあいつの話題で、時々なのはが私にこう言う事はあった。だからこそ、私なんかと居るより、なのははあいつと居た方がいいんじゃないかって、そう思っていた。

だからこそ、言った。言ってしまった。

二人の言葉を聞くのが怖くて、言うだけ言って逃げだした。二人の制止も聞かず、教室に戻ってカバンを手に取り、そのまま学校を出る。

走りながら思った。あんな事を言ったのだ。きつとなのはは私じゃなくてあいつを選ぶ。もしかしたら、すずかもそうかもしれない。そしたらまた、一人ぼっち。

不安や恐怖を振り切るように走り続け、見覚えのない公園を横切る

為に公園内に入って、そこで派手に転んだ。起き上がって走りだそうとしたけど、どうやら足を挫いたらしく、立ち上がれない。

何とか足を引きずりながらベンチに辿り着き、これからどうしようかと思っていると、横から声をかけられた。

「……何であんたが此処に」

「此処は俺のランニングコースだよ。それより、足、挫いてるみたいだな」

私の敵が、そこに居た。

「こうしてっと。うん、これで大丈夫」

あの後。私が足を挫いている事に気がついたこいつは、少し待ってと私に告げて、物凄い勢いで走りだした五分後。救急箱を持って戻って来た。

それでこいつの目的を知った私は足を動かしたり、直接蹴ったりして妨害したけど、最後には根競べに負けて、大人しく治療された。

慣れているのか、それなりに早く終わり、何故か私に背を向けて腰を下ろした。

「何やってるのよ」

「電話かけるなりなんなりしないと駄目だろ？とりあえず俺の家まで連れて行こうかなと」

「一人で歩けるわよ」

「そうは言っても……。歩けないだろ？」

「これぐらい平気よ！ー！」

そう言っただち上がろうとしたけど、足が痛くて立ち上がれない。それでも無理して立ち上がろうとして、額を抑えられた。

「……何してんのよ」

「足を挫いた時に無理は禁物。いいから大人しくおぶさりなさい」

「嫌よ。ていうか、何であんたはそんなに私に構うのよ」

「怪我人を放っておける訳ないだろ？」

「私はあんたに酷い事してるわよ？」

「酷い事ってなんだ？」

こいつは本気で言っているんだろうか。それとも分かっている私を

おちよくっているのだろうか。

「私は、あんたとなのはやすずかの間割り込んでるのよ？」

「割り込むって。別になのは俺にも俺にもお互いに知らない友達は居るから。すずかともそうだし」

そういえば、なのはとすずかかって初対面みたいだったわね。お互いがこいつの共通の友達って知った時の反応は、そうなんだ程度だったけど。

「だから別に気にならないかな」

「でも今までずっと一緒に昼食べてたでしょ。それはどうなの？」

「あゝ、あれは辛い……かなあ。話す友達はあるけど、お昼一緒に食べる様な友達はなのはだけだったし。一人は慣れてるつもりだけどな」

「っ」

苦笑するようにそう言って、頬を掻いた。

何で今まで平気そうな顔だったのに、いきなりそんな泣きそうな顔するのよ。

「でも、怒ってないよ？それは本当」

そう思ってるなら。何でそんな風に言えるのよ！

「何だよ！！」

「何が？」

「何で！？一人は辛いつて言ったのに、何であんたを一人にした張本人を怒らないでいられるのよ！？」

「ア、アリサ。落ち着いて」

「いいから答えなさい！！」

今日の私は怒鳴ってばかりだな、なんてまだ少しだけ冷静な部分の私がそんなどうでもいい事を考える。私の隣に座るこいつは悩む事無く、口を開いた。

「だって俺がアリサの立場だったら、多分同じ事するだろうし」

「……は？」

「いや。だから、俺とアリサの立場が入れ替わったら、アリサと同じ事するよ、俺は」

「何で言いきれるのよ、あんたは」

「俺とアリサ、意外と似てるよ？何だかんだで寂しがりな所も、自分で言うのも何だけど友達思いな所も。結構似てる。だからいいの」

「……なにが？」

「アリサはなのはやすずかの事を大切に思ってくれてるから。俺も我慢出来る。まあ、もう少ししたら、一緒に昼食食べたりさせてほしいなあ、なんて」

……何と言っか、こいつの話を聞いていると。

「あんたに敵愾心を燃やしていた自分が馬鹿みたいだわ」

取る取られる以前に、既にこいつにとって私は他人以上友達未満みたいな立ち位置らしい。友達の友達は友達みたいな感じだろうか。

だからこそこいつは私を信用して、あんなことされても怒らないのだ。

「それひどいよね？」

「酷くないわよ。何言ってるのあんたは」

時計を見ると三時を少し回ったくらい。結構な時間、話していたらしい。今日は特別習い事とかがある訳じゃないけど、結構な量の宿題も出てたし、病院も行かないといけない。

「もう帰るわ。ほら、さっさとしなさい?」

「……その心は?」

「足を挫いた時には無理しない方がいいんでしょう? おぶらせてあげるからさっさとしなさいよ」

一瞬、ポカンとして、その後、少しだけ笑いながら私に言ってきた。

「逆立ちで帰るって手もあるよ?」

「スカート穿いてるから嫌よ」

「……寧ろ逆立ちを推奨!!」

「何か言った?」

「何なりとご命令を、お嬢様」

「さっさとおぶりなさい」

「御意に」

私の前に背を向けて座り、そこにおぶさる。よっ、っつと一声あげて一気に立ち上がって、公園の出口に向かって歩き始めた。

……とりあえず、やる事をやらないと駄目よね。

「ねえ」

「何？アリサ」

「ごめん。今まで」

「別にいいって。気にしてないよ」

「明日……は休みだから、明後日ね。月曜日から、あんたも私達と一緒に食事していいわよ」

「本当！？」

そうやって私の方を見たこいつの顔は本当にうれしそう。思わず赤面してしまい、見られない為にこいつの顔を前に向けて固定する。もう一つ、やらなきゃいけない事があつた事を思い出した。なのはとずずかともした、通過儀礼だ。

「ねえ。あんたの名前、なんだっけ？」

「酷くない！？」

「別にいいじゃない。さっさと言いなさいよ」

「浩樹。高坂浩樹だ」

「アリサよ。アリサ・バニングス」

「知ってるよ」

「いいのよ。通過儀礼だもの。……よろしくね、浩樹」

「ああ、俺もだ、アリサ」

お互いに自己紹介をして。私と浩樹は友達になった。

この後、浩樹の家に着く時にジャストでなのはとすずか（何やら私と浩樹が仲良くなる為に色々画策していたらしい）に遭遇して、すごく喜ばれて、せっかく収まった赤面が再発したのはまた別の話。

「アリサちゃん」

あの時のように横から声をかけられて、そちらを向くとそこにはすずかがいた。すずかはそのまま近づいてきて、あの時、浩樹が座っていた位置に腰を下ろした。

「何やってたの？」

「考え事よ」

「浩樹君の事？それとも、なのはちゃんの事？」

「……両方かしら」

浩樹と初めて友達に慣れた日の事、そして今のなのはの事。その二つの事を考えていたから、あながちはずれじゃない。

「すぐかは「そっか」とだけ言って前を向いた。なんかすぐかには看破されてそうね。」

「なのはちゃん。謝ってたよ。ごめんねって」

「でしようね。そう言う子だもの。なのはは」

「浩樹君、どこに行っただろうね。なのはちゃんも知らないって、何かあったとしか思えないけど」

「それに関して知ってるのはなのはただけど、多分この前のお家の事情関係だから、話せないんでしょうね」

以前にあった、なのはの悩みごと。それに関して、浩樹しか事情を知らず、その時は浩樹に喝を入れるぐらいしか私達には出来なかったけど、今回はあの時とは違う。

「アリサちゃんはどう思う？」

「どうもこうも無いわよ。多分なのはは絶対話さないわよ。強情だから」

「うん」

「でも、もう一つの事に関しては、私は許さないわ。そっちは、なのは自身の事だもの」

「そうだね」

今日のなのはいい子のなのはなのだ。甘えず、自分の事を自分で解決しようとする、そう言ういい子のなのは。

「泣きたければ泣けばいいのに。それを必死に我慢してる。甘えてくれればいいのに。私にだって、胸を貸すぐらいなら出来るわよ」
「なのはちゃんにとっては、甘えられる対象は浩樹君だけなんだよ。昔からずっと」

「分かってるわよ、そんな事。だから許さないの。大切な人がいなくなつた事が悲しいのは分かるけど、友達がいなくなつて辛いのはなのはだけじゃないんだから」

「アリサちゃんは違うでしょ?」

「そう言うすずかだってそうでしょうが」

キョトンとしてから、クスクスと笑つたすずか。「そうだね」と私にそう言つて、携帯を取り出して愁いに満ちた表情で待ち受けを見た。私と同じ、四人で写っているあの写真。

「なのはちゃん。早く素直になつてくれるといいね」

「そうね。それまでは怒ってるつもりだけど。はあ、まったく。浩樹はこんな美少女三人に思われてるくせに、どうして居なくなるの
」

「そうだね。帰ってきたら色々してもらわなきゃ」

「当然よ。今のうちに何してもらおうか、考えとかないかね」

「うん！」

「さ、帰りましようすずか。考えなきゃいけないことはいっぱいあるし、喫茶翠屋でも行きましようか」

「そうだね！」

二人で立ちあがって、公園を出て行く。

この日から暫くして、なのはが学校に来なくなった。今度はお家の都合とかじゃなくて、純粹に体調不良と言う話だったけど、多分違う。

とりあえず、今日の昼休み辺りに、すずかといつ頃なのはの家に乗り込むのかでも考えましようか。

第十五話 〈アリサ・バニングスの場合〉（後書き）

後日談編のあとがきは一人でする事にしました。ごまだれです。

今回はアリサ・バニングスの場合という事で、時間軸的にはなのが帰ってきた直後辺りでしょうか。高町なのは場合より、少し前です。

こんな風に後日談編は時間軸が結構前後します。各キャラにスポットあてると、自然とそうなってしまうので許して下さい。

最後に、ここまで読んで下さってありがとうございました。

では次回。

P・S・もしかしたら、次話が次々話は番外編になるかもしれません。

閑話 く詩にのせる想いく (前書き)

もう詩なんて書くまい・・・

そう思った追試前日の夜

閑話　く詩にのせる想いく

初めての彼以外の親友と呼べる友達。

最初は色々あったけど、今ではすっかり仲良しさん。

でも、なんか少し複雑な気分になる時がある。

例えば彼が誰かとふざけあっていたり。

例えば彼が誰かと私が付いていけない話をしていたり。

例えば以前だったら私にだけ向けられていた表情を他の誰かに向けていたり。

彼に友達が出来て嬉しい筈なのに。

彼女達と楽しそうに過ごす彼を見ると、何故か黒い気持ちになる。

今もほら。流石に四人座るスペースは無いからと、私は机で後の三人は別の部屋から持ってきた丸いテーブル。

時々、他の子が彼の作品を覗こうとし、それを彼が阻止して。

そんな風に適度にふざけあいながら進めているその輪の中に、唯一の私は上手く入る事が出来ない。

最初の頃こそ、彼は話しかけてきたりしてくれたけど、今では隙を見せると覗かれそうだからと、ずっと向こうを向いて原稿用紙を隠して威嚇してる。

彼女達の気持ち分からない訳じゃないけれど、それでもやっぱり……。私の中に黒いもやもやした感情が沸々とわきあがって来る。

今までこんな事は無かったのに。

少なくとも、彼女達と彼が初めて仲良くなった頃には、そんなこと全然なかった。

純粹に彼が彼女達と仲良くしている事が嬉しかった。

でも、今は……。

彼の隣に居たのは私の筈なのに。私の隣に居たのは彼の筈なのに。

湧き上がって来るこの黒い感情がなんなのかは私には分からないけれど。

とりあえず今は、振り返って私の方を見てほしい。

私の名前を呼んでほしい。

図工の時間。紙粘土での制作をする事になった時、授業の始め、みんなが完成予定図を描き始めた中、一人だけ粘土の封を切って、制作を始めた。

三等分にした粘土を、鼻歌交じりにこねていき、次第に形作られる。

授業の終わりには三つの粘土は多少の余りを残して、ほとんど同じ形になり、私が聞いた時、そいつは笑って、次の次の授業で完成するから、それまでのお楽しみでとそう言った。

次の時間。そいつは手にした粘土に、更に前回の授業で余った粘土を付けて形を作って、ヘラを入れたりして、授業の最後には、私を含めたクラス全員が、そいつが何を作っているのか分かった。

授業が終わってみんなが教室に戻った中、私を含めた三人は、そこに残ってそいつの作っている粘土細工を見ている。

「な、なんか恥ずかしいね」

と一人が言って、私たち全員が首を縦に振った。そこに居るのはまさしく私たち自身だった。やたら精巧に作られていて、なんか怖いくらいのそれ。色を塗ったら更にそのままになることは簡単に予想できた。

「手先が器用ってのは知ってたけど、此処までとはね」

「スカートまで忠実に再現してあるわよ」

「でも……なんか足りないよね」

恥ずかしいと言った彼女がそう言った。分かっている事だ。だってこの人形達の中には、あいつがない。制作者が制作者自身を作る

のはどうかとは思うけど、そいつがいないと私達的には完成しない。

「私、粘土余るしあげようかな」

「そうだね。私もそうしようかな」

違う。それでは駄目。此処にあいつはいなきやいけない。

「あげて、その上で作れって命令するわ」

「……にはは、そうだね」

「うん。そうだね」

そして二週間後。あいつの言っていた完成予定日から一週間ずれて、あいつの作品は完成した。

そこには私達三人の人形に加えて、もう一つ。嬉しいような恥ずかしいような微妙な表情を浮かべた、あいつの人形が立っていた。

夕暮れの図書室。その戸を開けて、彼の元へ急いで向かった。

挨拶をする訳でもなく、向かい合った席に座り、私と彼は何も言う事無く本を読む。

校庭からの喧騒。時計の秒針。時々聞こえるページをめくる音。その三つの音のみが支配するこの場所で、私と彼は何も言う事無く本を読む。

初めてできた友達。そのきっかけとなった、お姫様を助ける王子様が主人公の冒険譚を。

初めてできた想い人。そのきっかけとなった、お姫様を助ける王子様が主人公の冒険譚を。

初めて彼と会った時、上の本を取ろうと梯子に登り、そこから落ちた私を助けてくれた。

まるで今読んでいる小説の王子様のように、そこから落ちた私を助けてくれた。

同じくらいの背丈に関わらず、ちゃんと私を受け止めた彼に、思わず心がときめいた。

「大丈夫か？」と微笑みながら尋ねられ、思わず心がときめいた。

それがきっかけで、何度か彼に会うようになって。その内、私は彼に惹かれ始めた。

その容姿に。その声に。その心に。その内、私は彼に惹かれ始めた。

でも、既に彼の隣には、彼女がいた。

私が割り込めない位近くに、彼女がいた。

だからこそ私は、諦めようと思った。

辛い思いをしないうちに、諦めようと思った。

でも、そんな思いとは裏腹に、彼はどんどん私の中に入ってきた。

今更、なかつた事に出来ない位、彼はどんどん私の中に入ってきた。

だから。

だから。

私は彼と一緒に居る。たとえどんな辛い事になろうとも。

この想いを抱き続ける。たとえどんな辛い事になろうとも。

三つの音が支配していた空間に、別の音が割り込んだ。

この時間の終わりを告げる、別の音が割り込んだ。

その音で顔をあげた彼が「帰るか」と、私に告げた。

あの心配してくれた時の笑顔で、私に告げた。

二人一緒に席を立ち、私だけはカウンターに向かう。

何度も読んだ思い出の本を再度借りる為に、私だけはカウンターに向かう。

普段は私の友達が歩く、彼の隣。

でも今日みたいな日だけは私が歩ける、彼の隣。

共に並んで帰る為に、私は戸口で待つ、彼の元へ急いで向かった。

「……」
「……」
「……か、」
「……書け！」
「……書けるか」
「……………」

俺とアリサが同時に吠え、テーブルの上に置かれていた原稿用紙（俺は名前以外何も書かれてないが）をぐちゃぐちゃに丸めて、ごみ箱に投げ捨てようとし、思い直して鞆に捨てた。ごみ箱に捨てたら後で見られるかもしれん。

アリサも同じように鞆に捨てて、再度吠えた。

「書ける訳ないじゃない！！何で小学生に詩を求めるのよ、あの先生は……！」
「そつだ！！大体説明が曖昧なんだよ！！書かせるならもっとちゃんとしろよ、説明……！」
「あ、アリサちゃん。浩樹君。落ち着いてね？ご近所迷惑だよ」
「そつだよ。アリサちゃんも浩樹君も落ち着いて、ね？」

そう言いながら、なのはとすずかもそれぞれ置かれていた原稿用紙を引き出しやら鞆に捨てている。

曜日は土曜日。時刻は午後七時。明日休みと言う事もあって、アリスとすずかはこの詩を書くという宿題を片付ける為に、なのはの家にお泊り。そんな俺も、何時でも帰れるからこの三人と一緒に詩を書いていた訳だが、うん、無理。

「すずか！浩樹！あんた達、よく本読んでるんだから、書けるんじゃないの!？」

「無茶言っつなつての」

「詩を読むのと書くのは全然違うよ、アリスちゃん」

「う。て言うか何よ！韻を踏むって!!訳わかんない!!」

「確かに。頭で分かってもいざやるとなると……きつい物があるな。なのはは?」

「にやはは。私、この四人の中で、一番国語の成績悪いんだよ?」

「えっと。とりあえずどんな感じに出来たのか発表してみる?」

そう言ったのはすずか。それを聞いた途端、すずかを除いた三人は全力で首を振った。横に。

「流石にそれはパスかな、俺は」

「ずずかは出来るの？」

「言い出しといてなんだけど、私も無理かな」

「ここは間取つてなのはだな」

「ええ!？」

勿論冗談だが。しかし、気になる事がある。

「詩の題材って何にした？」

「「「……は?」「」」

三人同時に同じ反応をされた。いや、そんな変な事を聞いたつもりも無いのだけど。

「題材つて。テーマは友達だよ?浩樹君」

「そういうあほの子を見る目で見ないでくれなのは。そう言う意味で言ったんじゃない。言つてただる。友達をテーマにするにしたつて、日常の事とか思い出とかそういう意味で、どれを題材にしたんだつて意味」

「「「あー」「」」

また同時に反応をされた。

「で、どつなの？」

「」「」「……」「」「」

無言で目を反らされた。何故か若干、顔が赤い。

「そ、そう言うあなたはどつなのよ」

「俺？」

一部幼馴染から期待に満ちた目で見つめられる。そんなに見つめられると照れ……じゃなくて、さて、どつしたものが。

……えーと。

「ノーコメントで」

「却下するわ」

「酷くないか、アリサ!？」

「いいから答えなさい! さもないと」

「さもないと?」

「あんたがさっき書いた原稿用紙を取りあげて音読するわよ」
「それは確実にひどいよな!？」

ジリジリと迫って来るアリサ。それに合わせて徐々に後ろに下がって行った俺だけど、流石に限界が来て、背中に壁が当たった。その直後。

「いいから見せなさい!!」

と叫びながら、アリサが襲いかかってきた。慌てて鞆を背に隠して庇う。

「目的が変わってるぞ、アリサ!原稿用紙を見るのが目的になってるだろ!？」

「悪い!？」

「悪いよ!!」

「いいからあんたは大人しく見せればいいのよ!」

「俺の見たって面白くないからな!？」

「えーい、なのは!すずか!手伝いなさい!!」

そう言われたのはとすずかは、しばしアイコンタクトをした後、アリサ側に回った。

「裏切り者!!」

「ごめんね、浩樹君。でも、見てみたいし」

「なのは、後で覚えてって、すずか!こっそり近づいて、鞆だけ掠め取ろうとするなよ!？」

「えっと……ごめんね?」

「謝るならやらないで欲しい!!」

「じゃあ謝らないね」

「止めるって選択肢は無いのな!？」

結局。余りにもうるさいから桃子さんが部屋に乗り込んでくるまで、俺VS三人娘の鞆を賭けた壮絶な闘いは続いた。

そして数時間後。あの闘いの後、暫く詩を書く作業をしていたのだが、途中で流石に資料も無しにやるのは無理だろう、という結論に達して、翌日町の図書館に行くという事で決着がつき、それ故に暫く遊んでいたのだけど、一人力尽き二人力尽き。気が付いたら起きてるのが俺だけになった。

そんな三人娘をベットに寝かせ、上から毛布をかけて、部屋を出た。

士郎さんと桃子さんに挨拶をして、なのはの家を出てほんの数分の

帰り道を歩きながら、ふと見上げた空に、星が輝いていた。

「……………」

『大切な親友達。俺にとって、この星達のように遠くて輝いて。だからこそ守りたいと
そう思う彼女達。』

大きな望みはしないから。願わくば、彼女達の隣にずっといる事が出来ますように。』

「……………なんてな」

韻を踏む訳でも、何かしらのリズムがある訳でもない。詩でも何でもない。ただの雑記。ただの想い。

「あーあ、詩なんてどう書けばいいんだか」

明日のしちに終わるといいなあ。

閑話 く詩にのせる想いく（後書き）

ごまだれです。久々の閑話なのに、よく分からなくてごめんなさい。すずかとはかく、なのは残念でアリスは最早詩ではない。そんな畏。

小学生のころに詩を書いてみようという宿題があったのを思い出して、書いてみたのですが……。やらなければよかった。息抜きにはなっただけ。

今回はこの辺で。

では次回

第十六話 くクロノ・ハラオウンの場合く（前書き）

後日談編その三。リリなのの中で好きな男性キャラ第4位にランクインしている、クロノの話です。

第十六話 くクロノ・ハラオウンの場合く

『事件の発端はユーノ・スクライアがジュエルシードを発掘し、それを運送していた時空船が事故、ジュエルシードが第97管理外世界極東支部「地球」に落下してしまった事である。

これに対し、ユーノ・スクライアは単身、ジュエルシードの封印の為に地球に向かうものの、暴走したジュエルシードとの戦闘中に負傷。それによりジュエルシードの回収が続行不可になる。

しかし、その時に会った現地の住民二名がユーノ・スクライアの手助けを始め、ジュエルシードの回収は続行される。

(中略)

時の庭園にてジュエルシード事件の主犯者であるプレシア・テストアロツサを捕縛。事件は解決する。

重軽傷者 多数

死者 高坂浩樹(ユーノ・スクライアの現地協力者)

「……」

悩む。果たしてこれでいいのだろうか。

「らしくないな」

あの状況。僕の目の前で間違いなく浩樹は次元の海に落ちて行った。フェイト経由で戻って来た、浩樹に貸していたF4Uの中には『必ず帰るから』とのメッセージがあったが、恐らくなのはに心配をかけるための物であり、それはあいつの扱いを変えるものではない。

「あれ？クロノ君。随分と短い報告書だね」

「これは事件の概要をまとめた物であって、報告書ではない。それよりエイミィ。君には他の仕事を頼んでおいただろう」

「もう終わったよ」

「何？」

「だって時間見てよ。寧ろクロノ君がいつもより時間かけてるんだよ」

そう言われて時計を見ると、確かに仕事を始めてから大分時間が経っていた。普段だったら、これぐらいの書類は終わっている時間だ。はあ、と溜息をついて、傍らに置いてあった緑茶の入った湯呑を手にとった。すっかり冷めてしまって、不味くなってしまったそれを、一気に飲み干す。

「お代わり、煎れてこようか？」

「……いや。いらないよ」

「まあ、浩樹君のお茶の後だと、どうにも味気なくなるしね」

「そんな事無い」

「まったまた〜。知ってるんだよ。浩樹君にお茶煎れさせたの」

「あれは、浩樹の勉強を見た事に対する、正当な対価だ!!」

「はいはい。そう言う事にしといてあげるよ。じゃあクロノ君。あんまり根を詰め過ぎないでね」

「ああ」

部屋を出て行くエイミイを見送って、再び画面を見る。先程までと全く変わらない内容。最後には『死者 高坂浩樹』の文字。

「何で、僕はあの時、あいつを止める事が出来なかったんだ」

あの時。時の庭園でプレシアと向かい合っていた時、プレシアの言葉聞きながら浩樹は何かを呟いていた。

「浩樹？どうした」

「……な」

余りにも小さい声で最初は聞き取れず、二度目は少しだけ大きくなったが、やはり聞き取れず。そして三度目でようやく聞き取れた。

「ふざけるな」と小さな声で、しかし明確に吠えた。

浩樹の性格を知らないわけではなかった。正義感が強い訳ではない。あったのは確固たる意志だ。まあ、その意思と言うのは絶対なのは至上主義だったのだが。

だからこそ油断していたのかもれない。自分の事など二の次、三の次のあいつが、なのはの事を悲しませるような事をしないだろうと高を括っていた所があった。だからこそ。

「ふざけるなああああ！……！」

そう吠えてプレシアに向かった浩樹を、叫ぶ事で制止しようとはしたが、腕を掴んだり魔法で拘束したりなど直接的な制止をする事が出来なかった。

一気に距離を詰めた浩樹がプレシアの持っていた杖を蹴りあげ、プレシアを僕の方に向かって投げ、そこで彼がいた床が崩れた。普段だったら魔法を使うなり、それこそ落ちる瓦礫を足場にしてこちらに移動するぐらいやってのけたかもしれない。

「失念していた。あいつは病み上がりで。まだ安静にしているべきだったのに。それでもあいつが余りにも自然体で戦っていたから、その事を……」

結果的に足から力が抜けたようにその場で崩れ落ちる瓦礫と共に落ちて行くあいつを、ただ見ている事しかできなかった。

その後、天井、なのはからしてみれば床を砲撃で抜いて、崩れかけていた床の上にいたフェイトをなのはが救出。そのまま時の庭園を脱出する事になる。

アースラに着いてから暫く。僕の部屋になのはが尋ねて来た。

「クロノ君。えっと……ちょっと聞きたいんだけど」

「……何？」

「浩樹君、どこにいるか知ってる？てつきり、あそこにいなかったから、アースラに戻って来てるって思ってたんだけど」

「あ、ああ……」

言葉が見つからない。だから何も言えなかっただろう。なのはは何かを悟ったらしく、「そっか」とそれだけ呟いて、部屋から出て行った。

その日は一日中部屋の中に居て、食事をする事も無かった。しかし、翌日には今までのなのには戻り、「昨日は心配掛けてごめんね」と笑いながら。そう、笑いながら謝っていたのだ。

僕達に心配をかけないようにという、なのはなりの配慮だったのだろうが、それも有り、なのはにまだ、浩樹からのメッセージを聞かせる事が出来ずにいる。一応、あの事件の証拠品と言う事にもなっているからしょうがないのだが。

「いつかは聞かせた方がいいんだろうけど」

なのは海鳴市に帰ってしまった以上、わざわざこちらに呼ぶ訳にもいかないし、こちらが向こうに行くことも難しい。

どうしたものかと考えていると、通信が入った。通信相手はフェイト・テストロツサ。通信を繋ぐ。映像の向こうは病室。恐らくプレシアの看病をしているのだろう。プレシアも何も言わず、大人しく看病されている。

「どうした、フェイト。何かあったのか？」

『あ、えっと。もうすぐ、裁判だよね？』

「ああ。そうだ。何、裁判についての心配はする必要は無い。君はともかくとして、プレシアが持っていたデバイスがロストログアだと言う事は分かっているから、プレシアも軽くは無いが、そこまで大きな罪に問われる事は無いだろう」

『え、えっと。そうじゃなくて』

「違うのか？」

『裁判が始まる前に、あの子に会えないかなって』

「ああ……少し待ってくれ」

『うん』

一度通信を切って、なのはの携帯に繋いでみる。ワンコール、ツーコール。コールは続いたが、出る気配が無い。

時間帯がまずかったかとも思ったが、そんな事も無い。暫く悩んでから、ユーノに念話を繋いだ。こちらはなのはと違い、すぐに反応

があった。

『どうしたの？クロノ執務官』

「いや。なのはと連絡が取りたかったんだが、つかなくてな。今は不味かったか？」

『不味いというか。なのは、少し前から寝込んでるんだ』

「何？何かあったのか？」

『クロノ執務官も知ってますよ』

「……浩樹の件か？」

『はい。僕にも何があったのかは分からないんですが、ある日突然朝起きなくなつて、話しかけても返してくれない状況で。たまに寝言で浩樹の名前を呼んでるから、恐らく浩樹の事だと思って』

画面の向こうが動き、ベッドが映された。その上にある毛布で出来た山は、全く動く気配が無い。

『今の時間はどの道、寝てると思いますから、繋がらないと思いますよ』

「そうか。じゃあユーノ。なのはが起きたら伝えてくれ。フェイトが会いたがっていたから、連絡が取りたいと僕が言っていたと伝えてもらえるか」

『分かりました』

通信を切って、再びフェイトにつなげる。

「フェイト」

『あ。執務官。あの、会えますか？』

「すまない。なのはと連絡が取れなくてな。まだ聞けていないんだ」
『え？それって……』

「なに。今は少し忙しいと言っただけだ。気にする事は無い」

『そう、ですか』

「決まったら伝えるから」

『分かりました』

通信を切って、椅子に浅く腰かけて背もたれに寄り掛かるようにして天井を見た。

「本当に、世界はこんなはずじゃない事ばかりだ」

父さんの死から始まり、執務官という立場上、色々な不条理を見て来た。そして、今回のジュエルシード事件もそうだ。

魔法など全く関係のない、戦争などはあるが概ね平和な世界。そこで暮らしていたやはり別段特別という訳じゃなく、ただ仲の良かった

た幼馴染二人。本来なら学校へ行き遊びに行き。時に喧嘩してその度に仲直りして。そんな平凡だけど幸せな日々を送る筈だったのだらう。

でも、現実はずう。あの二人は事件に関わった。彼女は持ち前の優しき。あいつはそんな彼女を守るという意思。それ故に二人は戦い、傷付き、そして、あいつは死に彼女は早すぎる別れを経験した。

「……………」

反省はするべきだが、後悔なんてしても無駄だ。だからこそ、あの時ああしていたら、なんて考えるだけ無駄なのだ。どうしたって死者が生き返る事なんて無ければ、時間が戻る事も無い。だからこそ、あの時彼らを事件に完全に関わらせず、元の生活に戻していれば、なんて考えるだけ無駄なのだ。

これは反省ではなく、後悔なのだから。

「……………」

今の彼女を。優し過ぎた結果、大切な人を失ってしまった彼女を救う手立てが果たしてあるのだろうか。

「……」

引き出しの中からデバイスを取り出した。あいつからのメッセージが入ったデバイス。一言、必ず帰るからとだけ吹きこまれたこれは、果たして彼女の救いになるのだろうか。

と言っても、持ちだす訳にもいかない。これは大切な証拠品で、僕がこうやって個人的に持っている事自体、まずい事なのだ。

「どうすればいいんだろうな、僕は」

ぼそりとそう呟いて、再びデバイスを引き出しの中に仕舞った。

第十六話 くクロノ・ハラオウンの場合く（後書き）

ごまだれです。まじめ過ぎて頭でっかちな所はあるけど、絶対優しいクロノの話です。

個人的に執務官としてのクロノとクロノ個人の葛藤を書きたかったんですけど、うまく書けたでしょうか？

シリアスが続く後日談編。果たしてどうなるのか。

今回はこの辺で。

では次回。

第十七話 三人娘の場合 前編 (前書き)

なのは、アリサ、すずかの三人の事です。

あと、なのはのその2が無くなったので、それも追記して。

第十七話 三人娘の場合 前編

アリサSide

「で？こんな所に呼び出して、何よ。浩樹」

放課後の屋上。茜色に染まるこの場所に、私は呼び出された。下駄箱に入っていた手紙には名前なんて書いておらず、正直行くか行かないかも悩んだけど、何となく見覚えのある字だったから、来る事にした訳だ。

そして指定された時間にここにきて、その男子生徒がいた。他の男子だったらともかく、肩より少し下まで伸びた髪。その髪をリボンで括っている男子生徒なんて、恐らくこの学校に一人だ。

だから、いつも通り私は浩樹に声をかけた。声に反応したからなのか、それとも呼びかけるまで待っていたのか。私の声にゆつくりと振り向いた浩樹は、私にニヘラと笑いかけて来た。心なしか、顔が赤い気もする。

「ごめんな、アリサ。呼びだしちゃって」

「別にいいわよ。それより何よ。大切な話って」

普通、このシチュエーションなら『あれ』なのだけど。……ま、ありえないわね。私とこいつの間に、そんな甘いイベント。

何故か浩樹は、いつもより妙に歯切れが悪い。あんまりそんな態度だとありえないと分かっているけど、期待しない事も無いからさっさと行ってほしい。

「えっと……」

「さっさと言わないと蹴るわよ」

「むう。相変わらずだなあ。まあ、アリサとの間にそういう空気になる事はあるけどさ。もうちょい待って」

スーハーと何度か深呼吸を始めた浩樹。私としてはさっきの浩樹のセリフが気になる。そう言う空気になることはありえないって、浩樹はそういう空気になる事を望んでいるのだろうか……え？それってつまり、そういう事？

そう考えたら、この状況がめちゃくちゃ恥ずかしくなってきた。そんな中、覚悟を決めたらしい浩樹に名前を呼ばれて「ひゃい!？」と声が思わず裏返ってしまった。

「どうした？」

「な、なんでもないわよ!?!」

「変なアリサ」

いつもだったらそんな事言われたら迷わず攻撃する。でも、この空気で今浩樹に近づいたら。

そう考えると動けなくなる。動けない私に、浩樹は今まで見せた事も無いような年不相応の笑顔を見せながら、再び私の名前を呼んだ。そして……。

聞きなれた電子音と普段の生活習慣が原因で目を覚ます。普段だったら余り夢の内容なんて覚えてないのに、今日に限って覚えてる。

320

「最悪……」

どうせ、どうせあそこまで見せたのなら、最後まで……。こうなったら二度寝しようとして再びベッドに横になろうとして、ドアがノックされた。

そのノックを聞き、思わず溜息をついてしまった。夢の内容を思い出し、とりあえず生殺しになった原因であろう、友人に怒りの矛先を向ける事にする。

「さつさと帰って来なさいよ

!!!!!!!!!!!!!!」

朝一番。我が家に響いたのは私の怒声だった。

Side out

すずかSide

どうしよう。正直、反応に困る。お昼休みの屋上。私とアリサちゃん。なのはちゃんと浩樹君の四人が普段お弁当を食べる場所。今は私とアリサちゃんしかいないけど。

そして今お昼ご飯の話題としてアリサちゃんが提供したのは昨日見た夢の話だったんだけど。

「それで、あいつが私の事を屋上に」

呼び出されて告白される直前に目が覚めた。もう何回も聞いた。ここまで来ると、もう嫌がらせでしかない。

もうあれだよ、アリサちゃん。

「浩樹君とそう言う夢を見た事が嬉しくて、自慢しているようにしか聞こえないよ?」

「な、何言ってるのよ!」

「だってもう、朝から何回も同じ話してるし」

「えっ?」

無自覚だったんだ。もう、バスの中、授業間の休み時間。暇さえあればその話をしてたのに。

よっぽど嬉しかったんだなあ。確かに私もそんな夢見れたら嬉しいけど。

「でも、アリサちゃんも乙女だね」

「どっという意味よ!」

「なんか、少女漫画とかで出てきそうなベタなシチュエーションだから」

「うぐ」

黙ってしまった。これはあれかな？少女漫画を読んで、本当にそのシチュエーションだったのかな？

真実を知るのはアリサちゃんのみだし、今日はもっと大事な用事がある。

「それで？どうするの、アリサちゃん。今日で一週間だよ」

「分かってるわよ」

「本当かなあ」

「すずかあ？」

「冗談だよ、冗談」

嬉しくなかった訳じゃないだろうけど、それで大切な事を忘れるよ
うな人じゃないって事ぐらい、分かっている。ちよっと意地悪なのは、
アリサちゃんが余りにも自慢してくるから。

「もう。……なのはの家には行くわよ。予定通り、今日ね」
「うた」

なのはちゃんが学校に来なくなって一週間経った今日。私とアリサちゃんはなのはちゃんの家に行く事になっていた。

「でも、なのはちゃん、お話聞いてくれるかな？」

「あいつが聞くか聞かないかじゃなくて、私達が伝えるか伝えないかよ。もっとも、それしか出来ないって言うのもあるけどね」

「うん。そうだね」

私と私の親友達の為にも。絶対になのはちゃんと。

携帯を取り出して待ち受けを見た。映っているのはアリサちゃんやなのはちゃんと同じ、あの写真。アリサちゃんの方を見ると、アリサちゃんも同じように写真を見ていた。

「ねえ、アリサちゃん」

「なによ」

「また、皆で一緒に写真撮ろうね」

「……ええ、そうね」

その為にも、まずは私達だけでも日常を取り戻さないと。

それは多分アリサちゃんにも分かった事。だから。

「待ってなさいよ、なのは!」

生徒がたくさんいる屋上で、アリサちゃんはなのはちゃんの家がある方に向かって、そう叫んだ。

S i d e o u t

なのは S i d e

「ん?」

誰かに名前を呼ばれた気がした。と言っても、この時間はお母さんとお父さんは翠屋だし、お兄ちゃんとお姉ちゃんは学校。家に居るのは私とユーノ君とレイジングハートだけ。

「気のせいだよね」

そう判断した。布団の下で、携帯を持ち、画面を見る。見続ける。写真だけでいいのに、それ以外の事も目に入って来る。今日の日付。今の時間。未読のメールの件数や着信履歴の数。

今日で私が学校に通わなくなって一週間と言う事も分かってる。だからどうしたという事も無い。もう関係ない。

「浩樹君……」

この一週間で、もう何度この名前を読んだらう。意味など無いし、求めてもいない。ただ呼びたいから呼ぶ。それだけ。

「浩樹君……」

写真はあるけど、ビデオとかはない。だから彼の声を保存している物なんてここに無い。彼の声はもう聞けない。

「浩樹君……」

再び私は、意識を手放した。

S i d e o u t

アリサ S i d e

面倒な授業も終わり、放課後になった。私とすずかはさっさとバスに乗り込み、普段なのはが乗って来るバス停で下車。真っすぐなのはの家に向かおうとした。

「なあ、その少女二人」

随分と軽い感じで呼びとめられて、無視して行くことも思ったんだ

けど、それも失礼な気がして、声の主の方を見た。

そこに立っていたのは二十歳位の好青年だった。时期的におかしいロングコートに身を包み、そのコートとその下にきている服とズボン、靴。髪まで完全に黒一色だった。唯一黒くない場所と言えば、露出している顔の部分と、オッドアイの瞳ぐらい。

何と言うか、怪し過ぎて逆に怪しく無い感じだ。

「なんですか？私達急いでるんですけど」
「うん。それは見れば分かる」

だったら呼び止めるな。思わずそう言いそうになったのを、何とか抑えた。

「だがこっちも聞きたい事があってな。君たちぐらいしか答えられそうにないんだ」
「……聞きたい事？」

まるつきり初対面、の筈だ。少なくともこんな目立つ人なら一度見たくらいじゃ忘れないだろうし。でも、自信が持てない。すずかもそうらしく、戸惑っていた。

前に立つ黒尽くめの人は少し考えてから何かを呟き、此方を見た。

「なのはは元気か？」

「なのはの事知ってるの!？」

「え？ あ、ああ。知ってる。それで、元気か？」

「なのはの事知ってるなら、元気が、なんて質問おかしいでしょう」

「何かあったのか？」

どうやら本当に分からないらしい。そうすると、本当になのはの事を知っているのかも怪しくなってくる。

「ねえ」

「何だ？」

「何個か質問に答えて？」

「え？ ああ。別に構わないが」

「じゃあ行くわよ」

なのはの名字は？高町。今の年齢。九歳だ。通っている学校。聖祥大付属小学校。次は。

幾つかの質問をして、完璧だった。なのはの事だけじゃなくて、私

やすすかの事まで完璧に分かっている。

「じゃあ、浩樹の事も知ってるの？」

「っ。ああ、知ってる」

何故か、一瞬顔が歪んだ。何かの感情が出そうになったのを、無理矢理押し殺したような、そんな感じ。

「……まあ、聞いてもあんたなら何でも答えられそうだから、信用してあげるわ」

「それはありがたい。それで？何かあったのか？」

「その浩樹がいきなりいなくなったのよ」

「……そうか、その辺りか」

「何？」

「いや、何でも無い」

何だろう。浩樹がいなくなったと言った辺りで、何かを呟いたような気がする。

何か考えていたらしい黒尽くめの人は、ポケットから何かを取り出すと、私に向かって放った。キャッチして見ると、中心に宝石のようなものが付いた金属製のカード。

「なのはそれを渡して貰えないか」

「……あなたが直接渡せばいいじゃない」

「そういう訳にはいかないんだ。悪いな」

「それは」

私の言葉を遮るように、強風が吹き、思わず目を閉じた。そして目を開けた時には黒尽くめの人は其処におらず、代わりに渡されたカードに別の、紙製のカードが張り付けられていた。

『因みに、このカードの事は他言無用で。なのはにもそう伝えてくれ』

「……訳分からないわ。すずかは？」

「私も」

渡されてしまった以上、届ける義理も無いけど、返す相手がいなし、どうせ行き先だから別にいいか。

「それじゃ向かいましょうか」

「うん」

私達は再び、なのはの家に向かった。しかし、このカードってなんなのかしら。

「鍵、開いてるといいけど」

「それに関しては問題ないわよ」

「え？」

門をくぐり、なのはの家の玄関に手をかけたが、やはり鍵が閉まっていた。

悩む事無く、再び門をくぐって外に出て、向かった先は浩樹の家。

「アリサちゃん？」

「えっと、確かこの辺りに……。ああ、あつたあつた」

手に取ったのは梯子。それを浩樹の家となのはの家を遮る塀にたてかけるようにして、なのはの部屋の窓までつなげる。

訳が分からない、と言う顔をしているすずかに声をかけ、二人して

梯子を上り始めた。

「アリサちゃん。何でこんな事知ってるの？梯子の場所まで」

「前に浩樹が言ったのよ。それに、私達がなのはの家に居た時、浩樹が窓から入ってきた事、あったでしょ」

「……。ああ、一回だけあったね」

なのはにとつてはそれは当たり前だったらしく、余り驚いた様子を見せなかったが、私とすずかは滅茶苦茶驚いた事はよく覚えてる。本当によくあのルートは使用するらしく、なのはの部屋のあの窓だけは、ほとんど毎日鍵が開いていた筈だ。

梯子を上りきり、窓を開けようとする、すんなり窓が開いた。無理矢理よじ登って窓から中に入ると、なのはがベッドの上で上体を起こしていた。

「アリサちゃん。すずかちゃん」

「おはよう、なのは。起こしに来てやったわよ」

「おはよう、なのはちゃん」

第十七話 三人娘の場合 前編（後書き）

お疲れ様でした、ごまだれです。実に一週間ぶりになりましたね。

今回は三人娘編です。前後編です。

一応既に後日談編終了までの流れは出来てはいるのですが、問題はその後だったりします。書きたいシナリオがいくつかあって、どれにするか迷ってます。

まあその辺りはぼちぼちという事で。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

では次回。

閑話 〱 第二 五話 滴る水と血 前編 〱 (前書き)

お久しぶりです。

まさかの閑話で前後編。これは予想外でした。

よろしければどうぞ。

閑話 第二 五話 滴る水と血 前編

自慢じゃないが俺の朝は早い。恐らく日本中の小学生と比べても負けない位だと思ってる。

何分やる事が多いのだ。いつもの鍛錬に加えて、じいちゃんと俺の朝食作り。そして新しい日課であるなのは魔法訓練の付き合い。その三つを朝のうちにする為には自然と朝が早くなってはならない。

何か減らせばいいのかもしれないけど、鍛錬の量を減らすのは落ち着かないし、朝食作りは俺が作らないとじいちゃんが食べないし、そもそも俺だつて腹が減る。魔法訓練の付き合いはなのはが主体だから俺にはどうする事も出来ない。

故に自然と朝は早くなり、俺の睡眠時間は減って、身長がちゃんと伸びるか不安な今日この頃。俺はなのはの捕獲魔法の練習台としてなのはから数メートル離れた位置に立っていた。

なのははきつちりバリアジャケットを着込み、杖を俺の方に向けている。そんなのはから少し離れた所にユーノが立って、色々なのはに言っていた。

「イメージに魔力を込めて、杖の先から一気に発動」

「イメージに魔力を……。リリカルマジカル。えーっと、捕獲魔法、発動！」

なのはが言った直後に近くの地面が爆発した。慌てて飛び退く。

「やった！成功！？」

「いや、多分失敗」

「多分じゃなくて確実に失敗だろう！うお！？危ねえ！？」

「ひ、浩樹君！！大じよって、きやあつ！？」

発動したなのはまで巻き込んで、暫く爆発が続き、収まった頃には俺もなのはも傷が無いとはいえボロボロだった。ちゃっかり逃げているユーノが、倒れているなのはの方に戻ってきた。俺も近づくと

「大丈夫！？なのは」

「にははは、なんとか」

「怪我無いか？」

「うん。浩樹君は？」

「俺も無い。まあ、当分俺の事を的にするのは止めてくれ」

「はい」

そう言つと何かを考え込み始めたなのは。

「どうした？」

「あ、えっと、ちゃんと上手くなってるのかなって」

「だ、そうだが、ユーノ？どうなんだ？」

「そんな事無いよ。たった数日で、ここまで出来るようになったんだから」

「うーん……。そうなのかな」

突然、なのはの携帯が鳴った。なのはの朝食の時間、ようは練習の終わりを意味する。

座ったままのなのはを引っ張って立たせ、なのはがレイジングゲハートを待機状態に戻す。

「んじゃ、帰るつぜ」

「うん！ー！」

「そうだ。浩樹君。今日の放課後はちゃんと開けてる？」

「ああ、問題無い」

「どこかに出かけるの？」

「ん？ああ、ユーノはまだ知らないのか。そういや、約束したのってユーノが来るより前だったからな」

「？」

「えっとね。新しく出来た温水プールにみんなで行くんだよ、ユーノ君」

練習帰り。帰路も中盤以降に差し掛かった時に、なのはが振った話題。今日は授業が午前中で終わる事もあり、新しく出来た温水プールに、皆で行こうと言う話になっていた。

まあ実際、最初俺は乗り気じゃなかったのだけど。メンバーの中で男性一人だったし。恭也さんはプールの監視員のバイトだから、実質参加者じゃない。

ユーノに説明するなのはの言葉を聞きながら、このプールに行くというイベントが決まった時の事を思い出した。

「プール？」

放課後。最後の時間がどうにもこうにも眠い授業で、睡魔と闘いながら過ごした五十分間も終わり、教師からの連絡事項も伝えられ、掃除の当番でも無かったからいざ帰ろう、と思っていた矢先、アリス達に呼び止められてそう言われた。

「プールってあの泳ぐプールか？時期にしてはまだ早すぎるだろう。寒中水泳でもするのか？」

「違うわよ」

「ほら、今度新しい温水プールが出来るでしょ？皆でそこに行こうって話をしてて」

「温水……ああ、そう言えばあったな、そんな話」

なのはの言葉にコクコクと頷く。今工事しているあの場所が温水プールになる、というのは少し前に来たチラシで知っている。それでも寒中水泳が出て来たのはまあ、俺がいつもしてるからだけ。

「それで、浩樹も一緒に行かない」……行くって結論出てるから

「うおい!？」

「別に暇だしいいでしょ」

「水着持ってないし」

「学校があるじゃない」

「あれやだ」

だって恥ずかしいし。

「だったら買いに行こうよ、浩樹君」
「ほえ？」

なのはの言葉に変な声が出た。いやだって、買いに行くって。

「今度の日曜日に皆で買いに行こう、って話してたんだ。だから浩樹君も買いに行こう？」

「そこは諦める所じゃ……………」

「でも、浩樹君とも一緒にプール行きたいし……………」

「ぐ」

終始何も言わずにこちらを見るすずかに、なのはが離し始めた途端に黙り、しかしずっと俺を見ていたアリサ。

結局、この三人相手に俺が勝てる訳が無い訳で。

「行きます……………」

そう返事をするのに、時間はかからなかった。

浩樹君？というなのは呼びかけで、俺の意識が現実に戻ってきた。

「なんだ？」

「今日、水着忘れちゃ駄目だからね？」

「分かってるよ」

せつかく買ったのだ。楽しまなかったら損だし。それにまあ、なのは達の水着姿も楽しみだ。なのははともかく、アリサとすずかは学校以外だと初めて見る水着姿だし。

「おお、そう考えたら、すごく楽しみになって来たぞ、プール」

「何を考えたのかはこの際だから言及はしないけど、あんまり変な事考えたら、アリサちゃんに怒られるよ？」

「アリサとすずかの水着姿が楽しみだな、でも？」

「……微妙だね」

「微妙なのか」

問答無用でけたぐり倒されると思うんだけどなあ。

S i d eなのは

「アリサとすずかの水着が楽しみだな、でも？」

「……微妙だね」

二つの意味で。一つはその発言がアリサちゃんを怒らせるか怒らせないか、と言う事と、もう一つはアリサちゃんとすずかちゃんと言う事は、私の水着は楽しみじゃないのかななんて。比率的には六対四くらいかな。

「微妙なのか」

うーん、と何か悩んでいる様子の浩樹君。アリサちゃんなら問答無用で攻撃してくるんじゃないか、とか思ってるんだろなあ多分。多分アリサちゃんは攻撃するだろうけど、それは照れ隠しだと思っし……。

……あれ？なんかこう、黒い気持ちか……。なんだろ？

「まあ、いいや。じゃあなのは。また後でな」
「え？あ、うん。後でね、浩樹君」

何時の間にか家に着いていて、私と浩樹君は自分達の家の門をくぐった。玄関の戸を開けると、ちょうどお兄ちゃんとお姉ちゃんがいた。

「ただいま。おはよう、お兄ちゃん、お姉ちゃん」
「お帰り。おはよう、なのは」
「おはよう、なのは。今日もユーノの散歩？」
「えへへ。うん」
「いつも通り浩樹君も一緒にと」
「ほえ！？何で分かるの！？」

お姉ちゃん、いつの間にエスパーに！？

「分かるよ。だってなのは、嬉しそうだもん」
「そうかな？」
「それに。なのはがいる所に、浩樹君在り、でしょ？」

「じゃはは。それはよく言われます」

学校でも浩樹君に用がある時は私を探せばいい、なんて言われてるくらいです。すると、お兄ちゃんが「おほん」とわざとらしい咳ばらいをした。お姉ちゃんと目を見合わせて、思わず笑ってしまい、お兄ちゃんデジト目で睨まれると、お姉ちゃんは慌てて話題を変えた。

「そ、そうだ、なのは。今日の準備、ちゃんとしてある？」

「うん！ばつちり！」

「浩樹君に見せるんだから、なのはもばつちり決めなくちゃね」

「えええ！？」

お姉ちゃん言葉に戸惑っていると、メールが来た。宛先は浩樹君。

『水着、着てくんだったら、代えの下着を忘れるなよ』

……流石に学校がある日にわざわざ着ていくななんて浩樹君も思わな
いだろうから、多分ふざけて送ったメールなのだろうけど。どうやら
アリサちゃんにも送った様で。浩樹君が学校でアリサちゃんに攻

撃される事だけは、確定したようでした。

S i d e o u t

午前中の授業も終わり、放課後。体を適当にほぐしていると、襟首を掴まれた。逃げられないようにだろう。

天を仰ぐ形で後ろを見て、俺の襟首を掴む親友に声をかけた。

「逃げないから。離してくれ、アリサ」

「ま、一応よ」

「一応で襟首を掴まれるのはちょっと」

「首輪とリードがあるけど、どっちがいい？」

「寧ろ持って来ている事と、それを人に使う事に疑問を持つ？
アリサ」

時々こう言う事を本気で言ってくる幼馴染、アリサ・バニングス。前は遊びに行った時、ゲームで負けたら犬耳着けるって言われたな。その時はなのはとすずかも敵にまわったせいで、散々ぼこられた末に負け、大人しく犬耳を着けたのだけ。

「そういえばアリサ。あの犬耳が着いた俺の写真、ちゃんと消したよな?」

「消す訳無いでしょ」

「消そうよ!?!」

「そんな事より、ほら、行くわよ。なのはもすずかも待ってるんだから」

「そんな事ってレベルじゃないよ!黒歴史だよ!あれ!?!」

そんな俺の魂の訴えに耳を傾ける事無く、アリサは俺の襟首を掴んだまま、廊下で待っていたのはとすずかに合流した。

ついでだ、聞いておこう。

「なあ、なのは、すずか」

「なーに?浩樹君」

「この前の俺の犬耳着けた写真、ちゃんと消したよな?」

「消してないよ?」

ハモられた。おまけに消していないらしい。

「消してくれって俺の望みは」

「にやはは……」

「えーと、ごめんね？浩樹君」

「謝るなら消そう？すずか」

「じゃあ、謝らない」

「このやり取りにデジヤブを感じるよ」

流石にお互い歩きづらいという事で俺の襟首は解放され、俺達は校門の所で待っていたすずか宅の車に乗って温水プールまで移動する事になった。

まあ、たまには鍛錬関係無しにプールで遊ぶのもいいかな。

閑話 〱第二 五話 滴る水と血 前編〱（後書き）

魔法少女リリカルなのは サウンドステージ01の再構成です。ごまだれです。

ここのところ、どうもシリアスが続けていた事と忙しかったこともあり、完全に脇道にそれました。原作同様、二話と三話の間のお話です。

どことなく懐かしいテンションでお送りした、第二 五話。いかがでしたでしょうか？

ここまで呼んでいた間の時間が、貴方にとって至福であった事を願って。

そして、よければ続きを待っていただける事を願って。

では。また次回。

閑話 〱 第二 五話 滴る水と血 後編 〱 (前書き)

学校で実習が始まって忙しくなったので筆が遅いです。

しばらくしたらまた元に戻ると思います。すいません

閑話 第二 五話 滴る水と血 後編

プールに着いて、さっさと着替えてプールサイドに出ると、思わず感心してしまった。

出来たばかりという事もあって、まだまだきれいだ。室内なのにプールも流れるやつとか色々な種類もある。遊べそうだ。

「にしてもなんだ？あのお立ち台」

どこか場違いな気がしなくてもないそんなお立ち台を横目に、俺はなのは達と約束した集合場所、監視員の仕事をしている恭也さんの元に向かった。

「お疲れ様です、恭也さん」

「ああ、浩樹か。どうかしたのか？」

「いえ、なのは達との集合場所が此処なので」「そうか」

お互い、特別口数が多い方じゃないから、そこで会話が終わった。俺は恭也さんが座る監視員席に寄り掛かるようにして、ロッカール

ームの方をぼんやりと見る。

すこしして、ロッカールームの方から見慣れた人影が歩いてきて。その人影に呼びかけようと手をあげて、俺の時間が止まった。

S i d e なのは

最初に着替え終わったのはアリサちゃん。次に私で最後にすずかちゃん。まだ少しかかりそうなお姉ちゃん達が先に行っていていいと言ったから、私達は一足早く、お兄ちゃんの元に向かった。

皆と一緒にプールサイドに出て、お兄ちゃんの方に向かうと、浩樹君は既にそこに居た。

浩樹君はこっちに気づいたみたいで、私達に手を振ろうとしたのか手をあげて、そのまま固まってしまった。

「どうしたのよ？浩樹」

浩樹君とお兄ちゃんの元に着いて、開口一番にアリサちゃんがそう言った。アリサちゃん言葉に反応したのか、手をあげたままビク

ツと体が跳ね、慌て始めた。心なしか、顔が赤い気もする。これは、もしかして。

「はーん、あんだ、私達の水着姿に照れてるのね」

私と多分すずかちゃんも思っている事を、アリサちゃんが言った。

浩樹君は「そんな訳無いだろ!!」と反論してたけど、そんな真つ赤な顔で言われても、説得力に欠ける。だからこそ、「照れるな照れるな」とアリサちゃんは更に浩樹君を冷やかした。

結果。

「別に可愛いとか似合ってるか思ってるけどって、うわああああああああ!!!」

「プールサイドは走るな」

お兄ちゃんという言葉を置き去りに、浩樹君はそのままの凄い勢いで走り去った。

「」「」……「」「」

可愛い。似合ってる。

「来た甲斐があったわ……」

ぼそりとそんな事を呟くアリサちゃんと、その言葉に少しだけ頷いたずかちゃん。私も嬉しかったけど、今はそれより。

「浩樹君、行っちゃったね」

「」……「」あ「」

頭を冷やすためなのか、プールでずっと潜水をしていた浩樹君と合流するまで、それから十分近くかかりました。

S i d e o u t

なのは達の水着が余りにも似合ってたせいで情緒不安定になって走りだして。流石に頭も冷えた頃、探しに来たなのは達と合流。今はアリサに泳ぎを教えていた。

顔を水につけられない訳じゃないし、アリサ自身の飲みこみも早いから、そんなに苦勞する事じゃない。

「うん、いい感じ」

アリサの手を持って軽く引きつつ、バタ足の練習。少し深くて足が届かないけど、これはじいちゃんから教わった立ち泳ぎでどうにかなった。便利だ、立ち泳ぎ。重りを着けて練習したから、アリサー人ぐらいなら支えられるし。

暫くバタ足の練習を続けてから、息継ぎの練習。これはじいちゃんに教わったから伸びっぱくなるのはしょうがない。

結局初めて三十分ほどでアリサは泳げるようになった。

「まあ、私にかかればこんなもんよね」
「確かに、凄いけどな」

俺なんかはここまで泳げるようになるのに半年はかかったのに。

「さて、浩樹。遊ぶわよ」

「そうだな。すずかは美由紀さんと競争するみたいだし、俺達はなのはと合流するか」

ちなみになのはは競争するすずかのアップに付き合っていたらしく、合流した時にはかなりへばっていた。

少し疲れたからと言ってプール際に座り、遊び続けているのは達を見る。これだけ離れていても、下手な事を言ったらアリサに何かされそうだから何も言わず、でも何か言いたかったから、「来て良かった」とぼそりと呟いた。……アリサからのアタックは無いから、大丈夫だったらしい。

「最近は何々あってなのはも疲れてるだろうから、息抜きとしてはちょっといいしな」

かく言う俺も、今まで自分のギリギリで鍛錬を含めた生活を組んでいた分、少し疲れが抜けていない訳だが。肩を押さえてコキコキと首を鳴らしていると、ジュエルシードの気配。そして、ユーノからの念話が入る。

『なのは、浩樹！ジュエルシードだ！』

『場所は？』

『ボイラー室付近！』

『了解！』

さっき怒られたけどしょうがない。緊急事態と言う事でプールサイドを走りながら向かううちに、結界が張られた。

その後少し走って、なのはと合流。そこに居たのは……。

「み、水のお化け！？」

「凄いな。かなりでかいぞ、こいつ」

「なのは！浩樹！」

「ユーノ君！！」

「ごめん！展開は出来ただけで、切り取り範囲が広くて、まだ中に、何人か人が残ってるんだ！」

「えー！？」

「さて、面倒な事にならなきゃいいが……」

そっぽやいた直後、プールの方から悲鳴が聞こえた。聞き知った、さっきまで一緒に遊んでいた親友達の声。

「っ!？」

声を聞いた直後に走りだした。

S i d eなのは

「あ………」

浩樹君と一緒に走りだした筈の足が、何故か止まってしまった。そんな私に気が付いていないのか、浩樹君は先に行ってしまう。

どんどん離れていく浩樹君の背中。思わず呼び止めようとして、その前にユ一ノ君に呼びかけられた。

「どうしたの？なのは」

「え、あ。何でも無いよ、ユーノ君」

にははと苦笑いで誤魔化す。浩樹君はこの間に角をまがったらしく、既に背中は見えなかった。自然と先程まで動かなかった足が動き、私も慌ててプールに向かった。

プールに着くと浩樹君がただ立っただけで、その近くにはアリサちゃんんとすずかちゃん。気絶しているのか、ピクリとも動かない。

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

慌てて近づいた。見た所怪我は無いみた……え？

「浩樹君。えっと、なんで……」

「言っつな！言わないでくれ！頼む！今も必死に忘れようとしてるんだから！」

見上げると浩樹君は水のお化けの方を見ているようで、実は必死に下から目を反らしているだけに見えた。それはともかくとして。

「どつしよう、このままじゃ風邪ひいちゃうよ」

水着が何故か無い、正真正銘、生まれたままの姿の親友二人をどうにかしないと。

S i d e o u t

少し前。プールに辿り着いた俺が見たのは、さっきの水のお化けとそいつに水着を脱がされそうになってるアリサとすずか。

「んな!?!」

辺りに響くアリサとすずかの声。眼前で行われる……あああ。

バクバクと心臓が痛い位に高鳴って、息が荒くなる。頭に血が昇っ

て、顔が熱くなるし頭が痛い。予想の斜め上を行っていた事態と急激な血流の変化に頭がついて行かず、ただ痛みと視覚情報と聴覚情報だけを認識。立っている感覚などが全部吹っ飛んで、体が動かない。

「お、落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け……」

何とか自身を取り戻そうと、そう呟くが効果は無く、アリサとすずかが水獣から吐き出された時、ようやく他の感覚も復活して、慌てて走り、二人を庇う。

「痛……くない？」

「えっと……」

「……殴られる事覚悟で言うが、早く降りてくれ」

「……」

アリサとすずかが下を向いた。そこに居るのは、当然下敷きになった俺。どういう状況か理解したらしく、慌てて二人は俺の上から跳びのき、アリサは口をパクパクさせ、すずかは茫然としていた。気持ちは分かるが……。

アリサが何か言おうとしたが、その前に水獣が動き、此方に攻撃し

てきた。

「っ！すまん！二人とも！」

二人の手を引いて後ろに庇いつつ、水獣のはなつた水流に対して、多少出来るようになった出力操作で、力を全開にした右手で対抗する。

水流は当たった傍からただの水に戻り、此方に向かってくる事は無いけど、如何せん消しきれない勢いで、ジリジリと押されて行く。拮抗状態だけど、長くは続かない事は容易に予測できた。

「さて、どうしたもんかな」

後ろにアリサとすずかがいる以上、回避という選択肢はあり得ない。かと言ってこのままじゃ押し切られることも明白。どうするかと考えていると、今朝のユーノの言葉を思い出した。魔法の練習の時に行っていたあの言葉。

「イメージに魔力を込めて……」

杖は無いけど、念話が出るのだから恐らく発動も可能だろう。ふう、と一度息を吐いて、魔法をイメージする。そのイメージに魔力を込めて……。

イメージの通り、右足に魔力が集まり、いつでも発動できる気がした。再び一息ついて、下から上へ、一気に足を振り上げる。

「一気に発動!!」

イメージした通り、右足に溜めた魔力は、そのまま斬撃のように水流を、左右に割った。

その間にと後ろを振り向いてアリサとすずかを抱えあげて、距離を置いて、少し移動してから二人を下ろし、戸惑っている二人に一定の間隔で指を鳴らしながら、「良く聞け」と前置きする。

「アリサ、すずか。これは夢だ」

「はあ!? 何言ってる!!」

「良く考える! 現実でこんな事があると思うか?」

「それは……」

「そうだけ……」

よし、もう少しかな。指は鳴らし続ける。

「いいか？夢だ、これは。アリサとすずか、思いつきり遊んだり泳いだりしてたから疲れたんだよ」

一字一句。語るようにはつきりと発音しながら告げていく。更に、会えてゆっくり話すことで、ただでさえ疲れているだろうから、眠気を誘う。現に、少しずつだけど、アリサとすずかはうつらうつらしてきた。

「俺なんかでいいなら近くに居るからさ。少し眠ろう？目が覚めたら、元通りだ」

「……ええ。そうね」

「じゃあ、ごめんね？浩樹君」

「ああ、気にするな」

指を鳴らし続け、そのうち二人は眠ったようだ。少しゆすってみても、起きる気配は無い。

「見様見真似の催眠術が上手くいった……」

自分でも何で上手く行ったのか分からない位適当にやったのに……。

そこで、アリサとすずかの今の恰好に気づき、慌てて視線を外して水獣の方を見た。そこで、遅れてなのはがやってきた。

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

なのはがこちらにやって来て、二人の傍に屈み、固まった。

「浩樹君。えっと、なんで……」

「言つな！言わないでくれ！頼む！今も必死に忘れようとしてるんだから！」

対水獣用の戦闘方法を考えて、頭の中から必死にさつき見てしまったあれとか触ってしまったあれとか色々忘れないと。

……アリサとすずかの顔がまともに見れなくなる。

「それは嫌だ。それは困る。何が困るって聞かれたら何がって特定は出来ないけど、でもとにかく困る。てか何でこうなった。誰のせいだ。誰の……」

ぶつぶつと煩惱退散していると、そこに行きついた。誰のせいでアリサとすずかがあられも……あんな姿になった。誰のせいで俺はこんなに困ってる。誰のせいで……。

「お前の……」

眼前の水獣。再びこちらに向かって来るつもりであろうあいつを睨みつける。

「お前の！」

「浩樹君？」

「お前のせいだ

「ええ！？」

！……！……！……！

なのは置いて、水獣に突撃する。再び放たれた水流を右手で消し、イメージして作り上げた魔力の足場を使い、空中で再度跳び、同じように右足に魔力を溜めて、斬撃のように撃ち出してその体を二つに裂く。

足場を作り、そこを跳んで、裂いた体の中にあつた結晶に手を伸ばして、それを掴んだ。そのまま通り過ぎてプールサイドに着地する。

「「お、おおー……」」

パチパチと疎らな拍手が聞こえたから、そちらを見ると、居たのはなのはとユーノ。若干顔が引きつってるのは何でだろう？

その体に取り込まれていたのか、大量の水着と下着が出て来た。しかしそれだけ。確実に握ったジュエルシードは手の中から消えていた。

「ユーノ。どうなってる？ジュエルシードが消えたぞ」

「反応もまだ消えてないんだ。まさか、分裂してる？」

「ええ！？」

「とりあえず、すぐに反応の方へ！」

「うん！浩樹君。アリサちゃんとすずかちゃんの事お願いね！」

『ええ！？』

驚き固まる俺の事を置いて、なのはとユーノはさっさと行ってしまった。

「ど、どつじると？」

……とりあえず、アリサとすずかの水着を見つけて、着させるか。

そう思い、大量にある水着や下着類の中から、余り苦勞する事無く二人の水着を見つけた。

「我ながら、何と云うか」

同じような水着がたとえ百枚あっても、なのはとアリサ、すずかの水着は間違えない自信がある。

水着を見つけたまでは良かった。そしてここからが本当の戦いだっ

た。

「落ち着け落ち着け。疚しい事は何も無い。何も無い、何も無いんだ」

この二人が脱がされる前に助ければ良かったんじゃね、とか色々あるけど、とりあえず水着を取り戻したりしたのは俺だからプライマゼ口って事で。てかさうして下さい、お願いします。

何かまた暴走して来た。この暴走を始めた思考を無理矢理抑え、回収した水着を持ってアリサとすずかの元へ。

「……」

き、着させなきゃ不味いよな？起きた時、裸だったらさつき誤魔化した事が無駄になっちゃうしな。うん、しょうがない。しょうがないと思ったらしょうがないんだ！

「と、いう訳で」

いきます。

.....

.....

.....

「すみません、舐めてました。着替えて、こんなに難しいものだったか？」

水着が濡れてるってのもあるけど、それ以上に……。

「め、めっちゃ恥ずかしい」

「直視できないから着替え、というか着させづらい。なのはの方はもう終わっただろうか？終わったのなら急がないといけない。」

「よし、一気に行くぞ。」

閉じていた目を開いてアリサとすずかを見る。……よ、余計な事を考えるな。

ぼたりと、何かがプールサイドに落ちた。赤い液体。はて、なんだ？この液体。……まあいい。プールだし。洗おうと思えばすぐ洗える。少し時間が経ち、幾らか渴いた水着をアリサとすずかに着せる。周りのプールサイドが赤に染まり、アリサとすずか、そして俺も赤い液体に幾らか染まった所でようやく着せ終わり、プールから水を持ってきてアリサ達の体を洗う。

ついでにプールサイドを掃除して、ふう、と一息つくとユーノから連絡があった。

『浩樹。こっちは終わったよ。そっちは？』

『辛く激しい戦いだっただ……』

『よく分からないけど、お疲れ様、浩樹。えっと、結界解くけど大丈夫？』

『それはいいが、どうするんだ？この大量の下着やら水着やら』

『それなら大丈夫、少ししたら持ち主の元に戻るから』

えーと、それはつまり？

『俺が何もしなくてもアリサとすずかの水着は帰って来たのか？』

『え？そうだね』

『…………』
『浩樹？』
『…………なんでもない』
『とりあえず一回合流しようか』
『ああ』

その内、水着やら下着がどこかに行き、なのはとユーノがこちらに
来た。二人に手をあげると、なのはの顔が引きつって、慌てて近づ
いて来た。

「浩樹君！！怪我したの！？」
「ほえ？なんで？」
「だって鼻！鼻血！」
「鼻血？」

鼻の下辺りを触ると、濡れていた。少し擦ってから手を離すと、赤
く濡れていた。ああ、なるほど。鼻血だったのか。なんてベタな。
そんな事を考えているうちに、なんだか体がだるくなってきた。そ
のままぐらりと後ろに倒れて、プールサイドに横になる。

「浩樹君。どうしたの？」

「血が足りない……」

「鼻血で!？」

「えっと、とりあえず結界解くね？」

ユーノによる結界が解かれ、世界が元に戻った。

ぶかぶかとファリンさんが持って来てくれた浮き輪に乗って、上方を見ながらぼんやりする。主に鼻血を止める目的で。

なのはもう一つの浮き輪で背泳ぎをした。

『なあ、なのは』

『ん、何?』

『三、二、一』

バシャーンと大きな音。なのはがひっくり返った音と、俺がひっくり返った音だ。

俺の方は分かったから特に慌てず顔を出して、なのはも若干慌てながらも、何とか顔を出した。

「おはよう、アリサ、すずか」

「なんだ、気付いてたの」

「驚かせたいなら完全に音を消して、波を全くたてる事無く、潜水でこっちに向かってこないと」

「機会があればやる事にするわ」

二人とも普通の反応だ。夢だっと思っててるんだと思うけど、それにしたって……。まあいいか。

気にする事無く、ジュエルシード発動前同様遊び始めた三人を、アリサに巻き込まれるまで、浮き輪でぶかぶかしながら見ている事にした。

閑話 〱 第二 五話 滴る水と血 後編 〱 (後書き)

お久しぶりです。ごまだれです。

閑話 〱 第二 五話 滴る水と血 〱 の後編、いかがでしたでしょうか？ 浩樹が大分キャラ崩壊してますね。

さて、プールです。しばらく行ってないので、久しぶりに行って、泳ぐのもいいかなあと思う今日この頃、季節外れもいいところですがちなみに浩樹の行っていた立ち泳ぎは、マスターすれば鎧を着て海を渡れるらしいですね。やった人が実際にいるのか？

ここまで呼んでいた間の時間が、貴方にとって至福であった事を願って。

そして、よければ続きを待っていただけの事を願って。

では。また次回。

p.s. この後エピローグがあるので、まだ続きます。

第十八話 三人娘の場合 後編 (前書き)

何というか、ひどい出来ですので、ご了承ください。

長くなってしまいましたが、中編に分けるほどでもなかったため、間隔を狭くして段落を入れました。

第十八話 三人娘の場合 後編

なのはSide

始めてそこから来た時は「危ないよ」と窘めた。何回か来るようになって、言っても無駄だと諦めた。更に何回か来るようになって、入り易いようにと窓の前に置かれていた一部の人形を、別の場所に移動させた。

ある冬の日。鍵を閉めていたから、彼が閉め出されてもう少しで風邪をひきそうになって以来、その窓の鍵は閉められていない。

そして、今日。その窓が久方振りに開いた。勿論私が開けた訳ではなく、外から誰かが。その窓から入って来る人なんて一人しかいないから、私は慌ててベッドから起き上がり、その窓の方を見た。そこに居たのは彼じゃなく、

「アリサちゃん。すずかちゃん」

「おはよう、なのは。起こしに来てやったわよ」

「おはよう、なのはちゃん」

何で此処に、と言う質問は愚問なのだろう。彼女達は優しいから。だから多分、私を迎えに来たのだ。

聞かずとも彼女達の意味は分かっている。だからこそ、私は。

「……帰って」

「随分ね、なのは」

話なんかしたくない。早く、早く帰って欲しい。そう思って、そう言った。でも、アリサちゃんもすずかちゃんも帰ったりしないで、

此方に近づきベッドに座った。

慌ててかぶるうとした毛布は取り上げられ、それでも逃げる為に、彼女達からそっぽを向いて、ベッドの上で丸くなる。

「はあ、大体予想通りではあるけどね。まあ、いいわ。そのまま聞いてなさい、なのは」

暫く黙って。そして、アリサちゃんは自分の気持ちを言い始めた。

Side out

アリサSide

さて、とは言ったものの、実はあんまり考えてなかったりするんだけど。

今日なのはの家に行く。なのはと話す。そう考えていたけど、結局考えは纏まらなかった。

結局、伝えたい事を伝えるしか、無いのよね。

「アンタ、いつまでこうしてるつもりよ」

「……」

答えは無い。当然か。

「こんな事してたって意味ないじゃない」

「……」

「アンタだって、それぐらい分かってるんでしょ？」

「……」

やっぱり答えは無い。それでも、言葉は続ける。

「浩樹がいなくなつて、悲しい気持ちは分かるけど。だからって」
「でよ」「え？」

小さく何かを言った後、なのはが吠えた。

「知つた様な事言わないでよ！！アリスちゃんとすずかちゃんには分からないよ！」

一瞬理解できず、少ししてなのはの言葉を理解して。そして私もキレた。

「分かつてないのはアンタも同じでしょうが！！」

私も吠える。自分でも驚くくらいの大声が出た。そのまま勢いに任せて言葉を続ける。

「何自分が悲劇のヒロインみたいな事言ってるのよ！！好きな人がいなくなつたのはアンタだけじゃないのよ！！……あ」
「え？」

今、私は何を言った？ほら、なのはも戸惑つてる。……ええい、ま
まよ！！

「えつと、アリスちゃ「今、言った通りよ！」ええ！？」
「私はいつが好きなのよ！なのはにべつたりだし！すずかと本の話ばかりしてるし！私にはセクハラしかないのに！何でかは私でも知らないけど、あいつの事が好きなのよ！！」

「え、えーと……」

ほら、さっき怒鳴ったのが嘘みたいになのはがいつもの突拍子もない事を浩樹に言われたなのは顔になってる。

ここまで言ったんだし、このまま暴露大会つてのもいいかもしれないわね。我を忘れて怒鳴れば、なのはも少しは聞く耳持つでしょうし。

そう考えて私は、自分の想いを再度言い始めた。

「何時からなんて分からない。気がついたら好きになってた！今日なんてあいつに告白される夢見たんだからね！！」

「ええ！？」

「いや、アリサちゃん。告白される前に起きたんだよね？」

「すずかうるさい！あんたはどうなのよ！浩樹の事どう思ってるの！？」

言える事が少なくなってきたし、すずかに振る。すずかは「私？」と少し首をかしげて何かを考えた後、口を開いた。

「私も好きだよ、浩樹君の事。勿論、アリサちゃんと同じ意味で」「すずかちゃんも！？」

驚くなのは。あんたは驚いてるけど、気がついて無かったの、あんたと浩樹くらいよ？とは口に出さない。

すずかはバッグから本を一冊取り出して、なのはに見せた。訳が分からず、なのはが首をかしげる。私も同じだ。

「この本はね。私と浩樹君が出会ったきっかけなんだよ」「へえ」

それは初めて聞いた。ついでに若干顔を赤らめて、はにかんでいる
すずかも初めて見た。

「この本取るうとした時にね、勢い余って、梯子から落ちちゃって
それを浩樹君が受け止めてくれたの」

「……」

「一目惚れだったんだよ？」

この目の前で本を抱いてうっとりしている女の子は誰ですか？すず
かですか、そうですか。

余りにも初めて見るすずかに、私もなのはもついていけなかった。
すずかじゃないすずかの言葉はまだ続く。

「一緒に図書館はドキドキしっぱなしだし、朝のバスで隣に座って
くれば、それだけでいい一日だと思うし、浩樹君がこの本の事覚
えてくれたら嬉しいし」

すずかの言葉はなおも続く。すずかかってこんな子だったっけ？

それから十分ほどすずかの言葉は続き、ようやく終わった。

「えっと……もういいの？」

「まだ話していいの？」

「撤回するわ。ちょっと黙ってなさい、すずか」

話したらなそうなすずかから、なのはの方に視線を戻す。なのはは
私とすずかの突然始まった暴露大会に驚いているようだった。

私も十分驚いたけどね。すずかかってあんな子だったのね。

初めて知った親友の新たな一面に驚き、長台詞に若干辟易しつつ、
「さて」と私は前置きした。

「次はアンタの番よ、なのは」

「……やっぱり？」

「当たり前よ。私とすずかは話したんだから。最後はアンタの番でしよ」

うー、と唸るなのは。まあ、確かにいきなり話し始めたんだからなのはにとっては暴論ではあるけれど。

少しの間が空き、なのはも話し始めた。

「私も、好きだよ。浩樹君の事。アリサちゃんとすずかちゃんと同じ意味で。分かったのはつい最近だけ」

「……」

「傍に居てほしい。名前を呼んでほしい。頭を撫でてほしい、一緒に並んで歩きたい。今まで当たり前のようにしていた事なのに、凄く浩樹君としたい事もしてほしい事もあげたい事もたくさんあるの」

「なのは……」

「なのはちゃん……」

なのはの想いはまだ紡がれる。

「またみんなで遊びに行きたい。ご飯作ってあげたいし」

「……」

「いつもして貰ってばかりだから、私が髪の毛乾かしてあげたいし」

ま、まあ幼馴染でお隣さんなんだから、髪の毛を乾かしあう位……。
若干雲行きが怪しくなって気がしつつも、なのはの言葉を待つ。

「朝、優しく起こしてあげたいし、こ、今度は抱きしめ返して
「待ちなさい、なのは」「待って、なのはちゃん」

流石に聞き捨てならないのは同じらしく、私とすずかの声が被った。
だって。抱きしめ返してあげたいって、つまり、そういう事でしょ？

「アンタ、浩樹に抱き締められた事あるの？」

「え？うん。何回も」

何回もときましたよこの子は。

言ってしまったたら人間というのは現金なもので、気持ちに素直にな
れる。つまりは。

「「羨ましい……」」

「ほえ？」

ぼそりと呟いた私とすずかの声で、なのはが首をかしげた。

ここで、なのはに抱きついたら間接的に抱きしめられた事になるん
じゃ？とか思った辺り、私も末期なのかもしれない。

とりあえず、このままではなのはにアドバンテージがあると思った
のか、次に口を開いたのはすずかだった。

「あ、でも」

「「？」」

「私、浩樹君に膝枕した事あるよ？」

「はあ！？」「ええ！？」

今度驚いた声をあげたのは私となのはだった。すずかはなおも言
葉を続ける。

「市立図書館で会った時にね。寝不足だったみたいで、二人でベンチに並んで本読んでた時に寝むそうだったから、膝貸してあげたの」「な、ななな」

「す、すずかちゃん……」

「てか、なのは。あんたはした事無かったの？」

「私はしてもらった事しか……」

「……」

「アンタもアンタでえ……、なんて嫉妬に満ちた声は心の中でしか出さない。どうせ私は膝枕した事もされた事も無いわよ。」

もしかして。否。もしかしなくても私が一番出遅れている。

何か。何か挽回できそうな事。私はこうだった。それなら私はこうだったと、言い合いを続けるのはとすずかの言葉にどんだんだメージを蓄積されながらも、私はこの二人からアドバンテージを取れそうな事を考える。

「おんぶして貰ったり怪我の治療は二人もあるだろうし、セクハラ位しか思いつかない……あ」

思い出した。あの時はお互いに顔真っ赤にして暫くあたふたしてから、事故って事にしてお互い忘れようって事にしたのよね。

「私。浩樹とキスした事あるわ」

事故だけだね。

その直後、なのはとすずかの今日一番の声が、なのはの家に響いた。

「どどど、どついう意味！？アリサちゃん！？」

「どつもどつも、そついう意味よ」

「本当に！？階段から落ちて、それで偶然とかそついうのじゃなく

て!？」

「と、当然じゃない!！」

まさにはずかが言った通りのシチュエーションなのだけど。足を滑らせて階段から落ちた私と浩樹が受け止めようとして、勢いを殺しきれずに転んでそのまま。

あの時は気が動転して、実はよく覚えてないのよね。思いっきり浩樹を引っ叩いた記憶ならあるんだけど。

「そ、そんな……」

なのはがベッドに崩れ落ちた。すずかも同じように、なのはに寄り添う形で崩れ落ちる。

……ええと。

「なのは?すずか?」

「聞いた、すずかちゃん。浩樹君とアリサちゃん。そういう関係なんだって」

「そういう関係って何よ!なのは!？」

「それならそうと言ってくれればいいのにね。二人とも酷いよ」

「あ、アンタ達、特にすずかは分かって言ってるでしょう!！」

「何の事?」

「あーもう!アンタ達が思ってる通り、どうせ事故よ!さつきすずかが言った通り、階段から落ちた私を浩樹が支えようとした時に当たっただけよ!！」

ま、まさか私が弄られる側に回るとは思わなかったわ。てか、すずか。何でこつちをじっと見てるのよ。

「アリサちゃん」

「何よすずか」

「本当にベタだね。夢の内容といい、事故といい」

「大きなお世話よ!!」

私だつて気にしてるんだから。その内、食パン啜えて登校してる時に、曲がり角であいつとぶつかりそうだし。

そんな事を考えていると、すずかがニヤニヤしていた。何で今日はすずかの妙な一面ばかり見る事になるのかしら。このままじゃ話も進みそうにないわね。

そう思つて、ゴホンと一つ咳払いをして、さっきまでの勢いでなのはを呼ぶ。

「は、はい!!」

「とにかく分かった!? 私達だつて浩樹の事がその……す、好きなんだから!! 寂しいのも悲しいのもアンタだけじゃないのよ!!」

「あ」

俯いてしまった。流石に無理があつた気がする、と思つていると、なのはが「そうだね」とぼそりと呟いた。

「でも……」

「……はあ」

思わず溜息をついてしまった。それから、改めてなのはに呼び掛ける。先程と違い、今度は勢いではなく、最初の頃のように語りかけるように。

語りかけた私に対し、なのはは何も言わない。それでも、ちゃんと聞いているから、私は言葉を続けた。

「なのは。なのはは、私達がアンタの気持ち分からないって言っ

たわよね?」

「うん」

「じゃあ、今もそう思ってる?」

少しの間が空き、なのはは首を横に振った。

「なのは。アンタの気持ちを私達は理解できる。だからこそ、アンタがそうやってベッドに潜り込んで現実逃避したい気持ちだって分かるわ。アンタの場合、アンタの傍で浩樹がいなくなったんでしょから、尚更ね」

「……………」

「でもね。一人で抱え込むのは止めなさい。確かにあいつみたいにアンタの事を背負って歩ける訳でもないし、なのはからしてみればあいつより頼りないだろうけど」

「そ、そんな事無いよ!」

「なら、もっと私達の事、頼りなさいよ。話せないことだってあるでしょうから、無理には聞かない。でも、そうやって悲しみを抱え込むなら、私達が受け止めるわ」

「あ……………」

「だからなの、げふう!」

言いきる前に、思いつきりなのはに体当たりされた。

「ちょっと、なのは!」

「……………」

背中にまわされている手に、更に力がこもった。そこでようやく気がついた。

私の体に顔を埋めたまま、鼻をすすったりして。なのはは、泣いていた。

「……もう。逃げたりしないわよ。だから安心しなさい、なのは」
優しくなのはの頭を撫でながら。私はなのはが泣き止むのを待った。

Side out

Sideなのは

「ごめんね、アリサちゃん」

「別にいいわよ。制服の予備ならあるし」

アリサちゃんに跳びついてからの私の記憶は、目が覚めた所から存在した。アリサちゃん曰く、アリサちゃんに跳びついた後、十分以上泣き続けて、その後疲れ果てて失神したように眠ってしまったらしい。

起きた時に私が見たのは、私の涙とか色々な液体で、ぐちゃぐちゃになってしまった制服を着たアリサちゃんと、すずかちゃんだった。

「すつきりした、なのは？」

「うん。まだ辛いけど、でも大丈夫。ありがとう、アリサちゃん、すずかちゃん」

「ならいいわ。っと、そういえば」

スカートのポケットを漁り、アリサちゃんが一枚のカードを取り出して、私に渡した。ここにある筈のない、大変見覚えのあるカー

だ。

「あ、アリサちゃん。これ、どうしたの？」

「どうしたって……どうしたんだっけ？ ずずか」

「誰かに渡されたんだよね……。えーと、凄く黒い人だったとおもっけど」

「そうよね？ 全身真っ黒の人だったわよね？ なんか、何でこんな思い出せないのかしら？ とりあえず、なのはに渡せとは言われた事は覚えてるから、渡すわね。後、他言無用らしいわ」

アリサちゃんとずずかちゃんが何か言っていたけど、私はアリサちゃんから渡されたカード、F4Uから目が離せなかった。

どうして？ これが何で此処に？ あの時、浩樹君と一緒に落ちたとか。そうじゃなくても、クロノくん辺りが持つてる筈じゃ……。

震える手でF4Uを握り、頭の中でレイジングハートをお願いして、F4Uを調べると音声データが録音されていた。

『再生しますか、マスター？』

『う、うん。お願い。レイジングハート。アリサちゃんとずずかちゃんにも聞こえるように』

そして、F4Uから声が聞こえた。

『ごめんね、なのは。でも、ちゃんと帰るから、安心して』

雑音はわずかにあったが、まぎれもなく彼からのメッセージ。アリサちゃんとずずかちゃんも、此方を向いていた。また泣きだしそうになるのを抑え、もう一度、音声を再生する。

『ごめんね、なのは。でも、ちゃんと帰るから。約束するから、安

心して』

「なのは？これって……」

「このカードって録音装置？今の声って……」

「アリサちゃん……すずかちゃん……」

「……」

「浩樹君。ちゃんと帰って来るって。そう言ってる……」

泣きそう。否、既に再び流れ始めた涙で、まともに前が見えなくなっている。

何度も。何度も。F4Uに録音されている音声を再生して、何日ぶりに聞く、彼の声は何度も再生する。

「約束、してくれた……！！」

涙を袖で拭って、アリサちゃんとすずかちゃんを見ると、二人の目も涙で潤んでいた。最後に、もう一度だけ再生して、三人で泣きながら笑い、そして、アリサちゃんがノートを取り出した。そこに書いてあったのは、浩樹君が帰ってきたらさせる事とか色々。

「アンタも書きなさい、なのは」

「うん！！」

どうせ家には誰もいないから。三人で大騒ぎしながら、そのノートの色々書きこんでいった。

夜。お母さんたちに明日からちゃんと学校に行く事と、一週間心配をかけてしまった事を謝り、部屋に戻った。

久しぶりに座る椅子の感触を味わいながら、一週間ぶりにユーノ君

と話す。

「ごめんね、ユーノ君。心配かけちゃって」

「いいよ、なのは。もう大丈夫なの？」

「うん！もうばっちり！」

「そっか。良かった。あ、執務官から連絡があったんだ」

「クロノ君？」

「うん、ちよっと待って」

そして通信が繋がった。画面の向こうには、クロノ君がいる。

「久しぶり、クロノ君」

『ああ。なのは、もう大丈夫なのか？』

「うん！それより、何かご用事？」

『ああ。フェイト・テストロッサの件でな』

「フェイトちゃん？」

何かあったのだろうか。ドキドキしながら、クロノ君の言葉を待つ。

『もうすぐ裁判が始まるんだが、その前にフェイト・テストロッサが君に会いたいそうなんだ』

「え？」

『会つか？』

「フェイトちゃんが、私に？」

『ああ、その通りだ』

「会っ！！会います！！」

会わない理由が無いし、私もフェイトちゃんに会いたい。あの時の返事も、まだ貰っていないのだ。

明日の早朝に会う約束をして。クロノ君が通信を切った。

「良かったね、なのは」

「うん!!」

その晩、私は、私と浩樹君とアリサちゃんとすずかちゃんとフエイトちゃんが同じ学校に通う。なんとも不思議な、でもすごく幸せな夢を見た。

第十八話 三人娘の場合 後編（後書き）

ひどい出来でしたね、ごまだれです。

ここ数日、英気を養おうとダークヒーローというか、そんな感じでポケモンの二次創作を書いていました。なので、その勢いで書こうとしたんですけど、いつも以上にひどくて、目も当てられないような気がしないでもないです。

とりあえず、時間があればそのうち書き直すかもしれませんが、多分直しません。そんな時間無いので。

一応、告知を。いよいよ次回無印編最終回。魔法少女達の場合を楽しみにしていただけたら幸いです。

では、次回またお会いしましょう

第十九話 く魔法少女の場合 前編く（前書き）

前後編にするつもりはなかったのだけど。まあ、その方がキリがいいので

いよいよ最終回です

第十九話 〈魔法少女の場合 前編〉

なのはSide

翌日。私は海浜公園に来ていた。待ち合わせの場所に行くと、既にフェイトちゃん、クロノくん、アルフさんは其処に居た。それが嬉しくって、フェイトちゃんの名前を呼びながら、急いでそこに向かう。

立ち止まった私の肩からユーノ君が降りて、アルフさんの元に向かい、クロノ君は「僕たちは向こうに居るから」と言って、アルフさん達と一緒にその場を離れた。そんなみんなにお礼を言って、あとに、私とフェイトちゃんが残される。

目が合って、お互いに笑う。言いたい事がたくさんあつた筈なのに、言葉に出来なかつた。でもそれはフェイトちゃんも同じらしくて。そんな中、フェイトちゃんが「嬉しかった」とそう言った。

「え？」

「まっすぐ向き合ってくれて」

「うん。友達になれたらいいなって思ったの」

でも、と思う。

「今日は、これからもう、出掛けちゃうんだよね」

「そうだね。少し長い旅になる」

「また会えるんだよね？」

私にある不安はそれ。出会う事が出来て。言葉が交わせて。友達になりたいと、そう思うこの子とまた会う事が出来るのか。

少し間が空いて。それでもフェイトちゃんは確かに首を縦に振ってくれた。

「少し悲しいけど、でもようやく本当の自分を始められるから。…来て貰ったのは返事をする為。それと、彼の言葉を君に伝えたくて。どっちから聞きたい？」

「……フェイトちゃんのお返事、かな」

聞ける物なら、同時に聞きたい。フェイトちゃんの返事も、浩樹君の言葉も。私にとって同じ位価値があるから。

でも、既に浩樹君からのメッセージは聞いている。だから、フェイトちゃんの返事を、私は先に聞きたかった。

「君が言った言葉、友達になりたいって。私に出来るなら。私でないならって。でも、私、どうしていいか分からない。だから教えてほしいんだ。どうしたら友達になれるのか」

「簡単だよ」

何となく、初めて会った頃の浩樹君と今のフェイトちゃんが被った。友達を作った事が無くて、上手く距離感がつかめない。だからこそ、あの頃の浩樹君も今のフェイトちゃんもあまり近づかない。近づき方を知らないから。

だから、あの時浩樹君にお願いしたように、今度はフェイトちゃんに。私の考えを伝える。

「友達になるの、すごく簡単」

あの日。私と浩樹君の関係が、少しずつ変わっていききっかけになった事。

「名前を呼んで？」

「え？」

「始めはそれだけでいいの。君とか貴女とかじゃなくて。相手の目を見て、はっきりと名前を言うの。私、高町なのは。なのはだよ」

「……なのは、は」

「うん！」

「なのは」

今度は頷くだけ。昨日のあれで、もう一生分泣いたと思っていたけど、そんな事無くて。涙があふれて来て、視界がぼやけ始めた、再びフェイトちゃんに名前を呼ばれて、また頷いて返し、彼女の手を取った。

風が吹き、私達の髪がなびく中、フェイトちゃんが「ありがとう、なのは」とそう言い、再び頷く。

「なのは」

「うん！」

「君の手は暖かいね、なのは」

限界だった。涙がどんどん溢れてくる。そんな私の涙を、フェイトちゃんは拭ってくれた。

「少し分かった事がある。友達が泣いてると、同じように私も悲しいんだ」

「フェイトちゃん！」

抱きつく。フェイトちゃんは受け止めてくれた。

「ありがとうなのは。今は離れてしまっけど、きっとまた会える。そうしたら、また君の名前を呼んでもいい？」

「うん！うん！」

「会いたくなったら、きつと名前を呼ぶ」

声色が少し変わった気がして、顔を上げた。フェイトちゃんもまた、私と同じように涙を流していた。

「だから、なのはも私を呼んで。なのはに困った事があったら、今度はきつと、私がなのはを助けるから」

「フェイトちゃん！」

二人で少しの間、泣き続ける。そして、離れていたクロノ君が、この時間の終わりを告げた。

フェイトちゃんの名前を一度呼び、髪を束ねていたリボンを外して、フェイトちゃんに差し出した。

「思い出に出来る物。こんなしかないんだけど」

「じゃあ、私も」

フェイトちゃんの髪を束ねていたリボンが外され、私に差し出された。同時にそれぞれのリボンの上に手を置く。

「ありがとう、なのは」

「うん……フェイトちゃん」

「きつとまた」

「うん。きつとまた」

それぞれのリボンを手に取る。肩に軽い衝撃。アルフさんの手で、ユーノ君が肩に置かれた。

「ありがとう！アルフさんも元気だね！」

「ああ。色々ありがとね、なのは、ユーノ」
「なのは」

後ろからクロノ君に呼ばれて、振り返った。彼の手にはF4U。

「これを。浩樹からのメッセージが入ってる」

「え？でも……」

既に別のF4Uが手元にあつた。今も私のポケットの中に入っている。他言無用らしいからどうしたらいいのか分からないしていると勘違いをしたのが、「気にする事は無い」とクロノ君は言った。

「ああ、気にする事は無い。必要なデータは全部コピーを取ったから。これは、なのはに渡す為に持ってきたんだ」

「えっと……」

受け取る。何故か私の手元にF4Uが二つあると言う状況になつてしまい、内心で首をかしげていると、「じゃあ、またな」とクロノ君。

「あ、うん。またね、クロノ君」

「ああ」

そこで、何かを思い出したらしいフェイトちゃんが声を上げた。

「あの、なのは。浩樹からのメッセージ」

「え？あ……」

「一緒に帰れなくて、ごめんって」

「……そっか」

不思議と、今回は落ち込む事は無かった。多分、アリサちゃん達から渡された方のF4Uに入っていたメッセージが、一方的にでも約束してくれたからだと思う。

だからだろう。あまり落ち込んだ様子の無い私に、フェイトちゃん達は不思議そうに首を傾げ、それを苦笑いで誤魔化した。

そして、別れの時。私とユーノ君を残し、三人の足元には転送用の魔法陣が発動していた。心の中で、再度皆に別れを告げると、涙目でも笑いながらフェイトちゃんが手を振ってくれた。そんなフェイトちゃんに答える為に、私も思いつきり手を振る。

辺りが光に包まれ、その光が終わった頃にはフェイトちゃん達の姿は無かった。ユーノ君に声をかけられて、私は移動を始めた。

海沿いを暫く歩いて、その人は其処に居た。決して座る為でなく、海に落ちないように存在する柵に座り、ぼんやりと空を眺めていた。普段ならあまり気にならないけど、その人の恰好に目が引かれた。

黒のロングコートにズボン。靴も黒でその手も黒い手袋に覆われていて。黒くない部分は露出している顔だけという不思議な人。アリサちゃんとすずかちゃんが言っていた、F4Uを私に渡すよう、頼んだ人の特徴と一致していた。

少し悩んで話しかけようと決心し、その人に近づいて行くと、まるでそれに合わせるように彼の体がどんどん後ろに傾き、そして。

ドボンー!!

「ええええええええ!!!!???」

海に落ちた。慌てて近づいて、海を覗き込むと、黒い人が水面に顔を出した。わしゃわしゃと頭を掻き、近くの地面に手をついて、そのまま一気に陸に上がった。

おおー、と思わず拍手。すると彼は私の方を見て、ニヘラと笑い

ながら私に手を振った。

その直後、辺りを結界が覆った。

「!？」

慌てて離れてレイジングハートを起動、しようとしてレイジングハートが無い事に気がついた。そして、先程まで私の前に立っていた彼が消えている。

「話がしたいだけだよ。人に聞かれたくないから、ちょっと強引だった事は謝るが」

後ろから声。振り返ると、二メートルほど離れた所に彼が立っていた。その手にはレイジングハートが握られている。

「か、返して下さい!」

「いいよ。その代わり、起動しなくてももらえると助かるな。本当に話したいだけだから。それは分かってくれ」

レイジングハートが放り投げられ、慌ててそれを掴む。彼は、先程私に笑いかけたようにニヘラと笑ってから、ちゃんと受け取ったのかと私に尋ねた。

「受け取ったって、F4Uの事ですか？」

「ああ。受け取ったか？」

「はい。アリサちゃんとすずかちゃんから。後、クロノ君からも受け取って、今二つ持ってます」

「そうか……そうだよな……」

少し悩んでいる。何を考えているのかは分からないが、不意に顔

をあげて、私に向かて手を伸ばした。

少し間が空き、その伸ばした手の指を彼が鳴らして、直後にF4Uが彼の手元に現れる。

「な!？」

慌ててポケットを漁ると、クロノ君から受け取ったF4Uが無かった。

「返して!！」

「それは駄目だ。なのは。君の手元にF4Uが二つある状況はあつてはいけないんだ。こいつに録音されているメッセージ。それを聞かせる訳にはいかないからな」

「……どういう意味ですか？」

「そのままの意味だよ」

F4Uがポケットに仕舞われる。F4Uが仕舞われたポケットを見ながら考える。実力が違う事は、すぐに分かった。だからこそ、私にはあれを取り戻す事が出来ない事もすぐに分かった。

それでも。私は取り戻す為にレイジングハートを起動させ、バリアジャケットを着た。

「戦うつもりは無いんだけど……」

「じゃあ、返して下さい。大切な物なんです」

「言うておくけど。この中に君が望むメッセージは入っていない。お望みなら、この中のメッセージを俺が伝えてやろう」

「レイジングハート」

『Divine Shooter』

魔力球四つ。それを、掛け声とともに放つ。普段と違い、特別な

軌道は描く事無く速度に重点を置いた直進弾。

仮に避けたり防がれたり相殺されても問題無いように、二撃目の用意もしておく。

「随分と喧嘩っ早いな。まあいいけど」

「!?!」

振り返る。先程まで確実に眼前に存在していた彼が、何時の間にか後ろに居た。鏡映しのように私を中心に先程立っていた位置と、同じくらい離れた所に立っていた。

その手にはデバイスも無く、魔法を発動した様子も無い。

「背後に二撃目の準備もしてあるのか。まあ、それはフェイトとの戦闘でも見せたから、あまり驚きはしないが」

「……フェイトちゃんの事も知ってるの？」

「ああ。親友だ。今は違うが」

フェイトちゃんの親友だったって事？じゃあジュエルシード事件に陰で関わっていたとか？

訳が分からず、色々考えていると、少しはいいかなと訳の分からない事を呟き、ポケットに手を入れて、直後に雰囲気が変わった。

「安心しろ。手は使わないし、当てもしないから」

S i d e o u t

第十九話 魔法少女の場合 前編 後書き

後書きは後編で

第二十話 〈魔法少女の場合 後編〉

Others Side

（該当は無し、その筈なのですが）

ユーノ・スクライアに出会い、そしてマスター・高町なのはのデバイスになってから暫く経って。レイジングハートは初めての困惑を経験していた。

普段なら情報が無ければ、情報が無いで判断され、情報があれば、的確にその情報を引き出せる筈の自分が、初めて感じている。

（見覚えが……ある……）

顔のデータを完全に覚え、且パーツごとに特徴的な部分をピックアップして記録する。そんな形で人の顔を覚えるレイジングハートにとって、見覚えがあると言う事は皆無だ。

確かに骨の形まで変えてしまうような整形をされれば、レイジングハートといえど即座に判別は付かないだろうが、全身を黒い服で覆う、マスターと対峙している青年の顔にはそんな様子は無い。

（変身魔法もあり得ますが、魔力だけで言えばEランク。そんなこととはあり得ない筈）

今までマスターを中心にさながら瞬間移動のような移動は見せてはいるが、あくまであれは技術。二度も見れば速度はある程度つかめ、実際レイジングハートは相手の速度をある程度分かり、それよ

り速く動ける前提での戦術を既にいくつか用意していた。

厳しい戦いにはなるが、マスターを守り、マスターに勝利を。それを私より以前からマスターを守り続けていたあの少年と約束したのだ。

(……そうか)

ありえない筈だ。少なくとも自分は知りえない。ただ、たった一つの可能性に思い至り、その可能性の為、彼の顔を改めて調べる。

目元、鼻の形。耳。顔のありとあらゆるパーツと、そして彼のデータを元に、彼の成長した姿を予測して、検証する。

そして結果は……適合率90%越え。十中八九、彼自身。

まさか、とは思った。でもそれが事実なら、私のマスターにそれを伝える義務がある。だからこそ、彼女にそれを伝えようとして、その前に静止が入った。

『駄目だよレイジングハート』

マスターも通す事無く、私だけへの強制的な介入。ここで声紋を調べるという手を思い出して、それを実行した。一致はしていないが、かなりの高確率で彼だった。

『貴方だったんですね。何故わざわざ』

『訳ありでな。長くは入れないんだ。時間は有効に使いたい』

『では、貴方の目的は?』

『今から十分。俺は歯車破壊の名の元に、なのはとレイジングハートを少しだけ教導する』

そう言った直後に彼が動いた。先程まで同様、何かの歩法なのだろう。それを使い、マスターとの距離を一気に詰めた。言った通り、

ポケットに手は入れたまま、技術なんて存在せず、ただ単純に右足を振り上げ、確かに当てはしなかったが、衝撃でマスターの体が宙を舞った。

「くっ!？」

「当てはしない。が、同様の衝撃は襲ってくるから気をつけるよ」

マスターの下に居る彼の声。その直後、彼の体はマスターよりも上にあつた。振り下ろされる足に、慌ててプロテクションを展開しつつ、マスターの体を安定させる。

「ガードにあまり自信を置くなよ。抜かれた時、素早い対処が出来なくなる」

そう言つて、彼は振り下ろした足で、プロテクションを破った。

「な……」

『Flash Move』

慌てて準備しておいた魔法を発動させ、マスターを移動させて、彼の足の下から退かせる。いくら当てないとはいえ、プロテクションを破った衝撃をそのまま与えられれば、いくらジャケットがあつても辛いだろう。

教導すると言つた以上、恐らく彼は手を抜かない。言つた通り十分間、彼は実戦で叩きこめるだけ、マスターと私を教導するのだろう。

『マスター』

『どうしたの、レイジングハート?』

『相手が魔法を使う使わない関係無しに、本気で戦いましょう』

『本気？レイジングハート』

『今の私たちでは恐らく彼には敵いませんから。戦うのではなく胸を借りる気持ちで全力でぶつかりましょう』

『う、うん。レイジングハートがそう言うなら』

「作戦会議は終わったか？なら再開だ」

何時の間にかマスターの目の前に彼がいた。

「レイジングハート！」

『Flash Move』

拳が動くよりも早く、彼から距離を開け、シューターの準備。理由は分からないが、魔力だけならEランクまで落ちている。恐らくまともに魔法は使う事は出来ないだろう。あそこまでは恐らく自前の身体能力だろうが、それでも空中での機動は不可能な筈だ。

『Divine Shooter』

「シューター！！」

四個のシューターが彼に迫る。避けられる。その自信があるのだろうか。彼の顔に笑みが浮かび、彼は何も無い所を蹴って、更に高く跳んだ。

「なっ！？」とマスターが戸惑い、私も同じように戸惑った。魔法を使った様子は無く、本当に彼は何も無い所を蹴り、更に跳んだのだ。

「戸惑うなよ。まだ続いでるぞ」

「っ」

次打の為に用意していたシューターを更に撃ち、それすらも避け

切った彼は、再度何かを蹴ってマスターとの距離を一気に詰めようと足に力を込めた所で、マスターが動いた。

私に魔力を溜め、フェイト・テストロツサと戦った時の作戦の一つ。裏をかくと言うその為に、彼が何を蹴ったのと同じタイミングで突撃した。

「へえ」

浮かんでいた笑みが僅かに歪み、魔力のランクが上がった。そして、その場に静止して、シールドが張られた。止まらず突撃し、シールドに体ごと当たる。暫く拮抗して、シールドの向こうで彼が指を鳴らした瞬間、シールドが炸裂した。

「きゃあ!？」

煽られて、マスターの体が後ろに下がる。そして、マスターの体勢が直るよりも早く、魔法を解禁して、自由に空を飛べるようになったらしい彼が距離を埋め、額を弾いた。

うっ、唸りながら額を擦るマスターの頭をクツクツと笑いながら撫で、先に下に降りた。少し思っ、マスターも同じように降りた。降りたマスターの頭を再び撫でて、ポケットから飴玉を取り出してマスターに渡した。飴玉を受け取るも、急な態度の変化にマスターが戸惑っていると、彼はポケットからF4Uを取り出した。操作をして、『Sound Only』と書かれた画面が表示される。

「聞くか?言った通り、内容は違う。少しだけ、足りない」
「え?」

また雰囲気が変わった。今までで一番、あの頃の彼らしい。そんな雰囲気。マスターもそれで何かを思ったのか、すぐに彼の言葉に

答える事は出来なかった。

「どうした？聞くのか？聞かないのか？」

「き、聞く！聞きます！」

そうかただけ呟き、彼は再び操作をして、音声が再生される。流れてきた言葉は、確かに彼が言った通り、少しだけ、メッセージの中にあつた約束が無かつた。

どうして、と呆然と呟くマスターを置いて、彼はF4Uを再度自身のポケットに仕舞い、その場を去る為に歩き始めた。

「あ、あの！！！」

立ち去る彼をマスターが慌てて呼び止める。立ち止まった彼は振り返り、気にするなとそう告げた。

「帰って来る。俺が渡した、あのF4Uのメッセージの方が正しい」

「そうなんですか？」

「信じられないかもしれないけどな」

少し悩んでから、彼が再び口を開いた。

「自意識過剰かもしれないけど、一応言っておきな、なのは」

「はい？」

「浩樹の事。待つてなくてもいいぞ」

「ほえ？」

『はい？』

何を言い出すのかと思えば。何を言い出したんだこの人は。

「なのははともかく、レイジングハートにまで……。まあいいや。待っていてもいいって言ったんだ。他の奴を好きになるのもいいし、忘れちまっても構わない。いきなりいなくなった事を憎むでもすればいい。とにかく、浩樹を想い続ける必要は無いって」怒ってますよ」「え？」

彼の言葉をマスターが遮った。言葉は続く。

「浩樹君。いきなりいなくなって。アリサちゃん達のお陰で悲しいのは少し楽になったけど、その分、今は怒ってます」

「じゃあ」

「アリサちゃんとすずかちゃんも同じです。だから」

「……」

「帰って来るのを待ってるんです。帰ってきたら、私達に心配かけた分、色々して貰おうって皆で考えてますから」

「…そうか。なら、せいぜい苛めてやるといい」

「はいっ」

今度こそ彼は、ヒラヒラと手を振って、その場を去った。私だけに、なのはの事よろしくなとだけ残して。

S i d e o u t

なのはS i d e

「なんか不思議な人だったね。レイジングハート」
『そうですね』

黒い服の人が立ち去って。その背中が見えなくなるまで見送った私は、少し思う所もあり、貰った飴を口に入れた。口の中に甘さが広がり、しばしの間、それを楽しむ。

飴も殆ど融けてから、レイジングハートに話しかけた。

「なんか、ふわふわしてて捉えどころが無いって言うか」
『何となく分かります』

僅かに残った飴玉を噛み砕き、飲み込んでしまふ。でも、と前置きを入れた。

「いい人だったよね」
『そうですね』
「……あ」

F4U、返してもらったのを忘れた。

慌てて去った方を見ても、その姿は既になく、既にF4Uを取り戻すタイミングは失ってしまった訳で。

「はあ。帰ろうか、レイジングハート、ユーノ君」
『そうですね』
「そうだね」

私は考えるのを止めて、自宅へと足を向けた。

第二十話 〈魔法少女の場合 後編〉（後書き）

ユーノの空気さ加減がヤバイ・・・ごまだれです。

ついに後日談編の最終回という事で、これにて完全に無印なのは編は終了です。今までありがとうございました。

あとがきについては長くなってしまいそうだったので、今後の予定について少しだけ触れます。詳しい予定とあとがきは活動報告の方に書いておきますので。

今後何ですか、とりあえず1〜2週間ほど、休みが入ります。それだけ伝えます。

活動報告の方を読んでいただけの事を願って。

またこの場所でお会いできることを願ってます。

この作品を読んでいた時間が、貴方にとって幸いであった事を願って。

では。

閑話 収穫する側とされる側（前書き）

お久しぶりです。

10月31日。ハロウィンです。なので、ハロウィン特別編です。

閑話 収穫する側とされる側

場所を探す。兎にも角にも、まずは隠れて様子を見なければなるまい。

「ゲーム開始して五分か……」

後五十五分。逃げ切って見せる。

「ハロウィン？それがどうかしたのか？」
「パーティーをやるから、そのお誘いよ」

そんな話になったのが、今から二日前。休み時間にアリサから渡された紙には、ジャック・オ・ランタンや幽霊らしきものの絵が書いてあり、紙の中央には『ハロウィンパーティー招待券』の文字。裏には開始時間などの情報が書いてある。

「まあ、パーティーって言っても、私となのはとすずか、フェイトとはやて。それにアンタただけだね」

「企画は？」

「アンタ以外の参加者」

「はぶられた！？」

シヨックだ。

「別に深い意味は無いわよ。ただ、今回はアンタには純粹な参加者でいてほしかっただけ」

「そういう意味だ？」

「言葉のままよ。ま、パーティー。楽しみにしときなさい」

そう言って去って行くこうとするアリサの背中に最後に一つ。聞きたい事があった。

「アリサ」

「何よ？」

「仮装とかはした方がいいのか？」

「あー……。普段着で大丈夫よ」

「そうか？ 分かった」

アリサの言葉に素直に頷く。今からじゃ仮装の準備をしようがなかったから、それはありがたい。俺がやるべき事と言ったら、いたずらされない為にお菓子を持っていく事ぐらいだろう。

「何にしようかなあ」

ジャック・オ・ランタンにちなんで、パンプキンパイとかもありかもなあ、なんて思いながら、その時の俺はハロウィンパーティーに思いを馳せていた。

417

「とりあえず此処かな」

腰を下ろす。時計を見て時間を確認した。

家に着いたのは三十分ほど前。パーティー開始の辺りに着くようにした。ドアベルを鳴らすと執事の鮫島さんが迎えてくれ、その人の案内で会場に向かった。

案内された部屋の戸を開けると、既にそこには全員揃っていた。でも不思議な事に、明るい雰囲気ではなかった。電気も点いてないし。

「どうかしたのか？」

「ねえ、知ってる？」

尋ねた俺に対して、アリサは質問で返してきた。訳が分からず黙っている、アリサが言葉を続けた。

「ハロウィンって元々どういってお祭りか知ってる？」

「ハロウィン？ 収穫祭だろ。元々って言うか、今もだけど」

「そう。そうよね。という訳で」

電気が点いた。いきなりで目がくらみ、暫くして慣れてくると、天井から下がった垂れ幕を見て、混乱する事になった。そんな俺を置いて、アリサがその垂れ幕に書かれている言葉を叫ぶ。

「第一回！！ チキチキ！ 浩樹収穫大鬼ごっこ大会 ！！！」

「「「「「おー！！！！！！」」」」」

「帰る」

「ルールは簡単！ 浩樹は逃げて、それを私達が追う。浩樹を捕まえた人は、一日浩樹を自由に出来る。範囲は家の中だけね。魔導師組は魔法有り。浩樹は使っちゃ駄目よ、魔法。何か質問は？」

「不公平過ぎるだろう！？ そして俺の意思は！？」

「考慮されません」

「酷過ぎる！！」

「勿論、逃げる側にも賞品はあって、もし逃げ切れたら私達を一日好きにしていって言う」

「すぐえやる気になった！！ すぐやろう！！」

「現金ね。相変わらず」

ほっとけ。まあいいわ、とアリサが仕切り直す。

「ゲーム開始は十分後。ゲームの時間は一時間。」

暗い家の中で、遠くの方に見えたピンク色に光る球体を、レイズシュートで破壊して、とりあえずその場を離れる為に走りだそうとして慌てて立ち止まる。金色の髪を持つ黒いマントを羽織った吸血鬼は、その手に俺が良く知る戦斧を持って、五メートルほど離れた位置で俺と対峙していた。

「早く離れたいな。さっきのでのんのは達にも位置が割れただろっし」

その場で一度だけ跳ね、一気に最高速度に入って距離を詰める。
ここからステップで一気に後ろに抜くっ！！

「そう来ると思ったよ、浩樹なら」
「っ!？」

直後にバインド。右腕がその場に固定され、そこを基準に左腕と両足も固定される。焦ってたと後悔しても時は既に遅く。目の前に立って、若干顔を赤らめて息が荒い吸血鬼、に仮装したフェイトを見る。

説得しようと思ったけど、無駄だとすぐに悟った。目が合った瞬間に分かったから。

(く、喰われる……)

どっという意味でかは置いておいて。カづくでバインドを外そうともがくが意味も無く、その間にフェイトが徐々に近づいて来た。

ああ、もう終わった……。そう感じた直後にフェイトがその場を離れ、直後に目の前の空間をピンク色の光が通過した。

(死ぬ！ 絶対！)

幸いにも当たる事は無く、俺とフェイトの間に箒を持った三角帽のよくある魔法使いといった仮装をしている少女が降り立つ。その手にあるのは箒ではなく赤い宝石が付いた杖。その杖をフェイトの方に向けている。

「させないよ、フェイトちゃん」

「でもなのは。もう私が捕まえたよ？」

「タッチでもなく、手で十秒以上掴まないと駄目ってルールだよ。だからまだ、浩樹君は掴まって無い」

そんなルールだったのか。

「私の役目はアリサちゃんが来るまでの時間稼ぎと、フェイトちゃんとはやてちゃんの迎撃」

「アリサが捕まえたら、なのは的にも駄目なんじゃない？」

「アリサちゃんとは友好条約を結んだから。アリサちゃんが捕まえても私が捕まえても、二人で浩樹君を一日自由に……」

ゴクリと、生唾を飲む音が良く聞こえた。ああ、この幼馴染も色々駄目な子になってるのかあ。

残念に思いつつ、バンドが緩くなった事に気がつき、一気に壊す

「あっ」

「なのは。こればかりはなのはでも譲れないんだ。なのはやアリサに浩樹が捕まるぐらいなら、私は逃がすよ」

「フェイトちゃんっ!!」

歯ぎしりが聞こえてきそうな雰囲気になったなのはを背に、全力でその場を離れようとして、正面から跳びかかって来る犬耳と尻尾を着けている多分人狼ワウルフに仮装しているアリサに顔が引きつった。

避けられない訳じゃないが、避けたら間違いなく派手に顔から突っ込むと思わせるぐらい、着地の事を考えていない。

「て、手を出すのはルール違反じゃないよな!!」

口に出して無理矢理自分を納得させ、投げ技の要領でアリサの体を一回転させて地面に横たえ、逃走しようとして、壁に気が付いた。

魔法で作られたらしい壁。それが四方を囲み檻になっている。魔力光とここまでの流れ的に、まず間違いなく、この壁と作ったのはやてだろう。

「でもこれなら」

魔力強化。そして拳を振り、壁を砕く。その壁はあまりにも簡単に砕け、瞬間的に悟った。

「誘いか!!」

「ご明察だよ!」

拳を振った直後。すぐに動けない体の懐に、黒っぽい衣装を身に纏い、蝙蝠のような羽と先が三角の尻尾を付けたすずかが踏み込んで来た。

「悪魔、かな？」

「残念。淫魔サキユバスでした」

「捕まったら不味い事は何も変わって無い！！」

伸ばされた手を振った拳で無い方の手ではじき、更に伸ばされた手を無理矢理体を動かして避ける。何歩か離れ、更に距離を詰めるすずかに猫だまし。怯んだ隙に思いつき走り走って逃げ、その前にミイラ男、否。ミイラ女がその手に杖を持って立ちふさがった。

「色気の欠片もねえな」

「大きなお世話や！！ 他のみんなが、あんなあからさまな仮装するって普通思わんやろ！？」

「確かにな」

俺得ではあつたけど、とは口が裂けても絶対に言わないが。

「面白いから、個人的にはありだけど」

「喜んでええのかよく分かんないんやけど」

「まあ、俺を捕まえるのは諦める。はやて」

一気に距離を詰めてその頭を何度か軽く叩いて、一気に追い抜く。

「しもた!？」

「俺は絶対逃げ切って見せるぞ!!！」

俺が逃げ切った際の自由に出来る、という賞品よりも。捕まった時の何されるか何となく分かるからこそその恐ろしさをばねに。俺は速度を上げた。

「後十分か。逃げ切れた、かな」

まだ油断は出来ない。最初の全員のアタック以来、ぼちぼち捕まえには来るが、全員一度に捕まえに来た最初を乗り切った事もあり、今のところはまだ逃げきれている。

「とりあえずのペアは、なのはとアリサ。すずかとはやて。それに

フェイトが一人」

恐らくフェイトの速度に誰もついていけないからこそ、フェイトは一人を選んだのだろう。二対一なら何とか逃げ切れるが、三対一だと自信が無い。てか間違いないく、魔導師組三人が組んだら逃げきれない。

あのメンバーが三組に分かれている以上は、互いに足を引っ張り合ったりして逃げる隙が出来る。

「流石に疲れた……。もう動きたくないなあ」
「なら大人しく捕まりなさい」

直後に出現したバインドを上に乗ることで避ける。着地して声の方を見ると、なのはとアリサ。それにすずかとフェイトとはやて。

「えーと……」
「一日あるとはいえ、五人で分けるとあんまり時間が取れないけど、まあ、背に腹は代えられないし」
「アリサちゃん的には好きにされるのもいいんじゃない？」
「何言ってるのよすずかは！……」
「……」

「フェイトちゃん？ 何で顔赤くしてもじもじしてるの？」

「え！？ そ、そんな事無いよ、なのは？」

「所でこんなやり取りをしている間に、浩樹君が逃げたんやけど、追わなくてええの？」

「早く（言いなさい）（言つてよ）！！」「

後ろでアリサとなのはが叫んだのを皮切りに、五つの気配がこちらに迫ってきた。

ああ、後十分。多分無理、だろうなあ。

大人しく捕まるのもいやだから全力で逃げるけど、砲撃やら斬撃やら。いい加減逃げ切れる気がしません。

言葉が違つとはいえ、全員が全員、俺に待てと告げている。捕まったら何されるのだろうかと考えているうちに、足がバインドで捕まり、シューターで体勢が崩され、思いつきり飛びかかれて、鬼ごっこは終わりを告げた。

後日。日曜日にまあ、色々大変な前にあつただけで、思いだしたくないような忘れたくないような思い出の為、別の話という事で。

閑話 収穫する側とされる側（後書き）

改めまして。お久しぶりです、ごまだれです。

久方ぶりのとある封魔。閑話でのスタートでした。今回はあえて、ハロウィンの仮装ではなく収穫祭だったという事に着眼点をあてた作品です。ひねくれてるなあ……。

最後に告知です。とある封魔の歯車破壊。二期第一話。いよいよ今週公開予定です。待っていていただけの方もそうでない方も、読んでいただけたら嬉しいです。

そんな訳で。では次回。

第二十一話 く歯車破壊の目覚めと目覚めく（前書き）

一応前回までを無印として

PV40498 ユニーク6596 でした

色々動いたり、動かなかったりする二期、はじまります。

第二十一話　く歯車破壊の目覚めと目覚め

物心ついた時から、僕の家族はじいちゃんだけだった。外の世界なんて知る機会すらなく、じいちゃんと武術の鍛錬をやったり料理や掃除といった家事を覚えたり。

最初の頃はボロボロだったけど、ある程度は出来るようになってきた頃、初めて同い年の子と知り合った。お隣の高町さんの末っ子で、名前は、高町なのは。

「孫の浩樹だ。良かったら仲良くしてやってくれ」

体づくりは継続しつつ、技の練習も少しずつやるようになってきた時期に、じいちゃんが良い刺激になるだろうと、初めて他流派。まあ小太刀二刀御神流の鍛錬を見学した日。

初めて見た他流派の鍛錬。そして土郎さんとじいちゃんの仕合に、表に出す事無く興奮をしていた僕だったけど、初めて彼女の事を見て、そんな興奮がすべて吹っ飛んでテンパった。

彼女の事は知っていた。たまに家の中から見かけていたし、話に聞いたこともあったから。でも、生憎と幼稚園や保育園といった場所に通っていなかった僕にとって、彼女は初めての同世代の子どもでおまけに異性だった。

「えっと……よろしくね？」
「……」

何も言わず、目を反らす。下手に何かをしゃべれば、声が裏返る事は間違いなかった。その時の僕は、人生で一番緊張していたと思う。

でも、僕となのはの関係は、この日から始まった。

理由は色々あった。例えばお裾わけ。例えば回覧板。他にも色々な理由を付けて、高町さんは家に来た。

僕とはいえば、高町さんと話す事に相変わらず慣れず、無言の間が余りにも長く続く事が多いから、本を読んでいる事が多く、そんな俺にも高町さんは色々と話しかけて来てくれた。

そして今日も。同じように高町さんは話しかけて来てくれた。

「……、ね、ねえ浩樹君」
「……」

「え、えーと」
「何？」

ちょうど面白い場面だったから、反応が遅くなってしまった。

しばし躊躇った後、意を決したように、高町さんは口を開いた。

「た、たまには家に遊びに来ない？」
「家？ 高町の？」

テンパって呼び捨てにしてしまった……。気にした様子はなく、高町さんは言葉を続けた。

「う、うん。あち、名前で呼んでほしいかなあ、なんて」
「……」

名前の方は置いておいて。遊びに行くというのは魅力的なお誘いだ。でも。

「用事、無い」

「ふえ？」

お裾わけ出来るほど料理が美味い訳でなければ、回覧板は高町さんの家の方から回って来るから、回す機会も無い。彼女の家に行ける用事は、じいちゃんの他流派との交流仕合ぐらいだが、そのじいちゃんも数日前にフラフラとどこかへ行ってしまった。

「理由が無いのに、お邪魔するのって、まずいんじゃない？」

「べ、別にそんな事無いよ！！私がたまたま理由があったただけだし！！私も、理由無しに遊びに来てみたいなあ。なんて」

「……別にいいよ。どうせ暇」

「いいの？」

「ああ。明日、暇だったら遊びに行ってもいい？」

「え？あ、ああ！うん！是非！！」

「そっか。なら行く」

嘘だ。掃除だって料理だって。やれるようになったとはいえ、まだまだ下手。じいちゃんがない間、家を守るのは俺の仕事だから、正直そんな暇は無い。

でも、それでも。高町さんの家に遊びに行く。それは本当に魅力的で。思わず顔が笑っていた。すると、何故か高町さんが顔を反ら

した。

「……？」

「ふえ！？」

何か顔に着いていただろうか？　ぺたぺたと顔を触るが何もついておらず、不思議そうに高町さんを見てみると、なのはさんがこちらに顔を向け、慌てたように「な、何でも無いよ！」と言った。その様子がおかしくて。思わず笑いながら「変なのは」とそう言った。

「今日はもう遅いから帰った方がいい」

「あ、うん。そうだね」

「じゃあ、なのは。また明日」

「うん！また明日ね、浩樹君」

その日はそれだけで別れた。

高町さんが帰ってから、彼女の事を名前で。しかも呼び捨てで呼んでいた事を思い出し、滅茶苦茶悶絶する羽目になったのだけど。それはまた別の話。

少しだけ関係が前進したその日から、僕達は少しずつ近づいて行った。ある日を境に、彼女が遊びに来たり、遊びに行った時、本を読むのを止めた。

ある日を境に、彼女の名前を呼ぶ事に抵抗が無くなった。

ある日を境に、僕からも話しかけるようになった。

ある日を境に、何も話さない無言の時間が続いても、気まずく無くなった。

そんな風に、少しずつ。少しずつお互いの関係が変わって行っていたさなかに、事件は起こった。

「士郎さんが事故に？」

家に来た桃子さんにその事を知らされた。何でも仕事中に事故に遭ったらしい。だから、これから仕事や士郎さんの看病でなのは家に一人にしてしまう事が多いから、なのはの事を頼むと、そうお願いされた。

分かりましたとそう答えたけれど、生憎と僕には微力しかなく。

それを尽くす事しか出来なかった。

前よりも積極的に話しかけて。桃子さんが遅い時には夕飯を作つて。

そんな生活がしばらく続いた。一度だけ手伝おうとした時、危うく怪我しそうになったのはには配膳を頼んでいるから、料理が出来るまでなのはの仕事は無い。だから手持無沙汰になっているらしいのはの視線を背に受けながら、添える為のキャベツを千切りにしているとなのはに話しかけられた。

「浩樹君」

「何？」

「何で？」

「何が？」

「何で、急にそんなに優しくなったの？」

手が止めて、少し考えてみる。桃子さんに頼まれたからとか思い浮かんだけど、一番しっくりくる答えは一つだった。

「初めての友達だから」

納得してくれたのかどうかは分からなかったけど、そう言うとなのは嬉しそうにして、とりあえずその時はそれで終わった。

でも一週間経ったその日。なのはの感情は爆発した。怒られて、泣かれて、喚かれて。掴みかかれ散々言われた。

不思議と冷静だった。冷めているというか、何とというか。現実味が無かった訳ではない。寧ろ真逆。どこか足がつかない気分になる事があった僕が、初めて地にちゃんと足を着け、様々な物を押し付けられた気分になった。

だから何も言えず、彼女が疲れて眠ってしまうまで、僕は彼女の言葉に耳を傾けている事しか出来なかった。

「なのは？」

暗い空間でなのはの姿だけがはっきり見えた。彼女は泣いていて、そんな彼女に近づいて声をかけようとしたけど、何故か声は出ない。触れようと手を伸ばしても、その手は彼女に触れることはない。

「何で？」

手を伸ばす。叫ぶ。僕にとってはそれをやっているつもりでも、泣いているなのはには伝わる事は無い。

何も出来ない。無力だった。

「ごめんね。ごめんね、なのは」

急に世界が歪む気がして。僕はどこかに放り出された。

眠ってしまった彼女を部屋まで運んで布団をかけて。ベッドの近くの床に腰を下ろした僕は、気がついたら眠ってしまったらしかった。目が覚めた時、まだ眠っている彼女を見て、手を伸ばして頭を撫でた。

良かった、と思わず呟きそうになった。泣いている様子は無い。彼女の頭を暫く撫で、料理の途中だった事を思い出して部屋から出る為にドアに向かった。

ドアから出ようとして、さっきの夢の事を思い出した。そして、さっき何故なのはの言葉に何も言えなかったのか。それも同時に分かった。

「ごめんね、なのは。僕には傍にいる事しか出来なくて」

怖かったんだ。泣いている君が。今まで見た事のない感情を僕にぶつけて来た君が。余りにも儂くて。触れたら壊れてしまいそうだから何もしてあげる事が出来なかった。

ドアを閉める。何かに当たりたい気分を無理矢理抑え、誰に見せる訳でもないのに平静を装って階下に降りて、料理の続きをした。少ししてなのはが降りてきて、先程喚いてしまった事を謝られた。

(やっぱり、そう、だよな)

彼女にしてみれば、きっと僕は支えてあげられる存在じゃないのだと、そう思った。彼女にしてみれば、僕は怒る彼女も泣く彼女も全て受け入れられる存在じゃないんだとそう思った。

強くなりたい。全部、受け止められる位。怒る彼女も泣く彼女も。全部受け止めてくれるんだと、彼女に思っただけで貰えるぐらい強く。

その日から。僕は俺になった。

電子音が響き、目を開けた。目を覚ましたその場所は、ずっと寝起きしていた自室のベッドでも、数日間寝起きしていたアースラのベッドでもなく、何かのカプセルの中のようなようだった。

「どこだ、ここ？」

そう呟くと、カプセルが開いた。体を起してあちこち調べると、痛みなどは完全に引き、魔力も元に戻っていた。まだ僅かに鈍い所はあるが、ほぼ万全と言えるコンディション。結構長い時間眠っていたような気がするのに、体が衰えていなかった。

『あ、起きた？おはよう、浩樹』

聞き覚えのある声が、カプセルのある部屋の中に響いた。少し考えてからその声の主を思い至る。

「おはよう、アルハ。ここはどこだ？」

『絶対安全な場所だよ。それより、体の具合はどう？』

「ほぼ万全だ。まだ怪我してた場所とかに違和感があるけど」

『あー、それは自然治癒じゃなかったからかも。すぐに気にならなくなるよ』

「そうか？ ならいいんだが」

軽く伸びをして、シャドーボクシングのように相手を想像しながら軽く体を動かす。

暫く動いて、軽く汗をかいて来た所で一気に加速。想像上の相手を一方的にぼこって終わらせる。

「で、アルハ」

『なに？』

「聞きたい事はいくつかあるが、これだけはまず教えておいてほしい」

『なんでも』

「ここはどこだ？ なんで絶対安全なんて言いきれる」

『ああ。それはね。ここが忘れられし都だからだよ』

忘れられし都。その言葉である場所を思い出した。

「伝説の筈だろう」

『言ったよ？ 導かれれば辿り着けるの。私が導けばね』

「でも……」

『でも何も無いよ。ここは』

部屋にあったスライドドアが開き、そこに料理を乗せた盆を持つ女の子が立っていた。その子の姿を見て、呆然としながら、その名前を呼んだ。

「アリ、シア？」

「私の名前、どうして知ってるの？」

「何でだ、アルハ？」

『だから。ここが忘れられし都、アルハザードだからだよ』

説明になつて無い。そんなツツコミが出来ないほど、俺にとって彼女がいる事は衝撃的だった。

混乱する頭を何とか抑え。絞り出すようにアルハにこう言った。

「とにかく、もう少し詳しく説明してくれ」

第二十一話 く歯車破壊の目覚めと目覚めく（後書き）

やつほー、ごまだれだよー！……すいません、調子に乗りました。

という訳で、今回から二期。一期後日談の高町なのはの場合、浩樹 Side の物語でした。

一期最終話のように浩樹はアルハザードにいたり、アリシア蘇生したりしています。

それと質問なんですけど、前回から、文章の間を以前に戻したのですが、いかがでしょうか？ こっちの方が読みやすいですかね？

それと、あとがきなんですけど、対談形式に戻そうかなとも考えてますが、それもどうでしょうか？

良かったら回答いただけると嬉しいです。文章の間については特に

では今回はこの辺で。

以上、ごまだれでした。

誤字脱字修正しました

第二十二話 くそれぞれの転生と修行く（前書き）

初めての方初めまして。今まで読んできて下さった方、ありがとうございます。

今回もある封魔の歯車破壊、はじまります。

第二十二話 くそれぞれの転生と修行く

S i d e : : : ? ? ? ?

「わぁ
」

電車から身を乗り出すようにして外を見る。窓の外を海が流れて行く。

「すつごく綺麗……」

海が好きだった。だから、この海辺の町で生活できる事は凄く嬉しかった。それに、あの人にも会える。

「どんな人なんだろう……?」

会った事がない、母方の祖父。私は今日から、その人にお世話になる事になっていた。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

混乱する頭を落ち着かせながらアルハから話を聞いて。聞いた話を元に推測するに、つまりはこう言う事だった。

「俺が次元の海に落ちた時、俺を助ける為に、転送魔法を使ってここに飛ばした」

「うん」

「それで一カ月の間俺は眠り続けて、その間にアルハは俺の治療をしつつ、俺が起きた時に人がいなかったからかわいそうだからと、アリシアを蘇生した」

「うん」

「あほだろ、お前」

溜息をつき、離れた所でこちらを見ているアリシアの方に目を向けた。その顔に浮かぶのは恐怖と興味らしい。

「ここはいつそと思い、アリシアに近づく。特に動く事無く。じっとこちらを見ている彼女の前に座り、余り悩まず「こんにちは」と挨拶をした。

「アリシア、だよな。アリシア・テストロッサ。俺は」

「高坂浩樹、だよな」

「む。俺の名前知ってるのか」

「アルハに聞いたから」

そう言って暗い顔をしてしまった。何で、と思い、ある事に思い至った。

「アルハ」

『何？』

「何をどこまで話した？」

『全部だよ。何で彼女が此処に居るのか。何で浩樹が眠っているのか。原因となったあの事件の全貌をね』

「何で？」

『いつかは話さなくちゃいけない。アリシアに知りたいって言われて、私は願いを叶える都の化身だよ？』

「……」

たとえそうだとしても時期尚早だと思う。しかし、俺が何か言うよりも早く、アリシアが口を開いた。

「浩樹。私を知りたかったの。アルハを怒らないでね」

「……分かった」

当事者にそう言われると、何も言えない。重い空気が部屋を覆い、そんな空気の中、アリシアが「ごめんね」と俺に謝って来た。

「何が？」

「浩樹の怪我。お母さんのせいだって聞いたから」

「ああ。気にしなくていい。これは俺が未熟だったからだから」

「でも」と食い下がるアリシアの頭を、乱暴に撫でる事で黙らせる。

「いいから。気にするな。俺が未熟だったんだ。……未熟と言えば

アルハ」

『何？』

「鍛えたい。俺がそう言ったらどうする？」

『望むがままに。最高を用意するよ？ まあ、私に気に入られてるんだから、鍛えなくても十分反則クラスの力は与えられるけど』

「冗談。今までの俺の事を全否定するつもりか？」

『分かってるよ。でも準備期間。それに浩樹もまだ安静にしてなきゃ駄目。だから……そうだね。一週間。一週間待って。その間に私が色々と面白ゲフンゲフン。色々と訓練を考えておくから』

「待て。お前今『じゃね〜』おい!!--」

返事が無くなる。八つ当たりのように自分の頭を搔いて、再びアリシアに視線を戻した。ポカンとしているアリシアの隣に腰を下ろす。特に何も言われないし、問題無いだろう。

それにしても。それにしてもだ。面白い訓練って効果あるのか？興味はあるからとりあえず何も言わないでおくのもありだけど……。やって効果が無かったら意味ないし。

はあ、と溜息をつく、アリシアが此方を向いている事に気が付いた。

「どうした？」

「アルハに聞いたんだけど、浩樹がお母さんの事助けてくれたの？」

「……いや」

「違うの？」

「結果的にプレシア・テストロッサを助けたのかもしれない。でも、俺が助けたかったのは別の奴だ」

「フェイト？」

ここまで話したのかと思い、内心でアルハに対して溜息をつきながら、首を縦に振る。そっか、とだけ呟いて、アリシアは前向き直った。

会ってみたいな、とアリシアがぼそりと呟いた。

「フェイトに？」

「うん。私の妹だもん。会ってみたいよ」

「フェイトの方が年上だけどな」

「でも、私の方が早く産まれたし」

「……そうだな。それもそうだ」

しかしそうになると、最低でもアリシアの年齢は14歳になるのか……タメ口ってまずいのか？

「ねえ浩樹」

「はい、何ですか？」

「どうしたの？ 急に敬語になって？」

「アリシアさんの方が年上かもしれないという事に気がついたので、タメ口ではまずいかなと」

ポカンとしてしまった。

「い、いきなりだね。別に気にしなくてもいいよ？」

「そう？ ならいいや」

「本当にアル八が言った通りの人だね」

「なんて言ってた？」

「妙に飄々としていて、掴み所が難しい人」

「……」

それについては何も言えない。自己評価もそうだし。

「でもなんか」

「ん？」

「上手く表現できないんだけど……うーん……掴み所が無いって言うより、地面に足がついてないというか」

「……」

「そう、流されやすいとか影響を受けやすいとか、そんな感じ」

「対して会話した事無い俺によくそこまで言えるな」

苦笑いするアリシア。そんなアリシアの頭を何となく撫でて、床に転がった。

妙に飄々としていて、掴み所が難しい人。すずかからも出会った頃に似たような事を言われた事がある。そして、俺自身の自己評価でもそんな所はあると思う。

なのはとのあの事件があり、俺の一人称が僕から俺に変わった日。

多分あの日から俺は俺だ。飄々としているのも掴みどころが難しいと感じさせるのも。弱い俺が必要以上に人に近づいて接する事が無いようにするため。あまり接してしまったら、守りきれなくなってしまうから。俺の微力じゃ、なのはとアリサとすずかを守ることで限界に近い。否。それすらも守れていないのが現状だ。

「みんな、元気にしてるかな」

ぼそりとそう呟いた。

S i d e o u t

S i d e : なのは

行ってきたーすと家の中に挨拶をして。いつものように私は家を出た。門の前。一か月前まで彼との待ち合わせ場所だったそこに相変わらず彼はいない。

そこで少しだけ足を止めて、隣の家の方を見ながら心の中で行って来るねと挨拶をして、バス停に向かって駆け出した。

「おはよう、アリサちゃん。すずかちゃん」

「おっす、なのは」
「おはよう、なのはちゃん」

いつものように二人に挨拶をして、二人の間に座る。暫くするとバスが発車した。

他愛もないおしゃべりをしながらバスに揺られ、最寄りのバス停に着いた。

「そう言えば聞いた？」

教室に着いて、それぞれの席に自分の荷物を置いたすずかちゃん
は私の席に集まった。アリサちゃんは職員室に用事があるらしく行
ってしまい、二人で話していると、戻ってきたアリサちゃんがそう
切り出した。

「何を？」

「今日、転校生が来るって話」

私の質問にアリサちゃんが答える。転校生……。

「何で知ってるの、アリサちゃん？」

すずかちゃんの最もな質問に、アリサちゃんは胸を張って答えた。

「さつき用事があつて職員室に居た時に聞いたのよ。それに転校生っぽい子も見かけたし」

「へえ、どんな子だったの？」

「女子だったわ。見た目はまあ、私達と同じくらいかしら」

「ふ〜ん」

「アンタ達、興味無いでしょ」

アリサちゃんはそう言うが、決してそんなことは無い。ただ実際に見たアリサちゃんと違って、私とすずかちゃんは見てないからどうとも言えないだけ。

でも、と思う。

「友達になれればいいなあ」

「そうね」

「そうだね」

新しく増えるかもしれない私の友達に、私は心を躍らせながら朝のホームルームが始まるのをアリサちゃんとすすかちゃんと一緒に待った。

第二十二話 くそれぞれの転生と修行く（後書き）

読んで下さりまして、ありがとうございます。でした。

第二十三話 対面した魔導師と転校生

Side: 佳奈

「緊張してるの？」

「あ、はい。少し」

「大丈夫よ。いいクラスだから」

職員室での手続きを終えた私は、クラスの担任の先生とともに教室を目指して歩いていた。いくらいいクラスだと言われても、私にとって初めての転校しての挨拶なのだから、緊張しないという方がおかしいと思う。

第一印象が大事。それは分かっているけど、うまく話せそうにない。

「でも、がんばらないと」

私は意気込み、先生の後についていった。

Side out

S i d e : なのは

八時半少し前位にクラスの担任の先生教室に入って来て、席を立っていた生徒が慌てて自身の席に戻った。

アリサちゃんとすずかちゃんもその例にもれず、少し早足で自分の席に戻って行った。

「え、今日は皆さんに新しい仲間を紹介します」

教壇に立った先生がそう言った。アリサちゃんの言った通り、転校生らしく、先生が教室の外にいる誰かを促すと、ドアを開けて一人の女生徒が入ってきた。

先生の脇に立ち、先生が黒板にその生徒の名前を書いている間に、恐らく殆どのクラスメイトは彼女の事を観察していた。こんな時か、転校生に興味持たないのは浩樹君位だろうなあ、と思いながら、私もクラスメイト達と同様、彼女の事を見た。

私より少し明るい茶髪は肩口まで伸びていて、エメラルドのような色の黒みがあった緑色の瞳が印象的な女の子。黒板に書かれた名前は徒神奈々。

「高坂佳奈さんです。高坂さん、自己紹介をお願いします」

「高坂佳奈です。よろしくお願いします」

「……えっと、もう少し何か無いかしら？」

「へ？ あ、えーっと、趣味は読書です。後は……すみません。無いです」

高坂、という苗字に思わず反応してしまった。顔をあげて高坂さんの方を見る。しばらく見たけど、彼の面影は全く無かったから、恐らく浩樹君とは関係ない人なんだと思う。

ちらりとアリサちゃんの方を見ると、私と同じように彼女を見て、そしてため息をついて視線を下した。思うところは同じだったらしい。

「あの、先生」

ふと高坂さんが口を開いた。

「何ですか？」

「私、目が余り良くないので、席は前の方がいいんですけど」

チラリと、彼女の視線が、私の隣の主人のいない彼の席を捕えた気がした。じゃあ、と今度は間違いなく先生の視線は私の隣の席を捕えた。

「とりあえず高坂君の「駄目!!」」

ガタンと大きな音を立てて立ち上がり、先生の言葉を遮るように私は叫んだ。

「私が他の空き教室から机と椅子を持ってきます!!」

「え？ でも「持ってきてます!!」そ、そうですか。それでは、お願いしますね、高町さん」

「はい!!」

「先生！ 私もついて行きます!!」

「私も!!」

教室を出ようとした私を追って、アリサちゃんとすずかちゃんも立ち上がった。先生に許可を貰って、三人で廊下に出る。

「全く。恥ずかしいっいたら無いわ」

「にはは。つい」

「ちゃんとあの子に、謝っておきなさいよ」

「うん」

「でも。なのはちゃんが止め無かったら、多分アリサちゃんが止めてたよね」

「それを言ったらアンタもでしょう、すずか」

苦笑しながら、私達は空き教室を目指した。

S i d e o u t

S i d e : 奈々

「……」

転入の挨拶なんてした事無いから、すごく緊張して考えていた事を話せなかった。

それでも目が悪いと言った私の為に机を持ってきてくれるという子がいたし、いいクラスというのは本当らしい。ふと私は、主人のいない席が気になった。

「あの、先生」

「はい？ なんですか、高坂さん？」

「あの席って、誰かの席なんですか？」

「ああ……あそこは、高坂君の席なのよ。今はお家の事情で休学中でね」

「高坂君……」

私と同じ名字だ。多分偶然だと思うけど。その後、高町さんとお友達の人が持ってきた机を列の前の方の席に置いてくれ、三人にお礼を言っただけに着く。その後、先生の連絡が終わり、私の周りにクラスメイトが集まってきた。

矢継ぎ早に色々と聞かれても答えられず、あははと苦笑いしている私に、クラスメイトの一人が助け船を出してくれた。

「ほーら、アンタ達。高坂さんが困ってるでしょうが。順番に一つずつ質問しなさいよ」

まさに鶴の一声で、金髪の強気な女の子がそう言うと、質問が一人ずつになった。と言っても元々この世界の人間じゃなかった私としては上手く答えられず、生前通っていた小学校の事について話した。

暫く休み時間は質問タイムで終わり、お昼休みになって質問する

生徒が減ってきた頃、誰かが私に話しかけて来た。

「高坂さん」

「はい？」

お弁当をカバンから取り出ししていると、声をかけられた。確か、私に机を持ってきてくれるといった女の子だ。確か名前は高町さん。

「えっと、朝はごめんね？ 高坂さんが隣に座るのが嫌だったとか、そうつもりじゃなかったんだけど……」

「いえ。……あの」

「何？」

「高坂君ってどんな人なんですか？」

少し考えてから尋ねてみることにした。もしかしたら、これをきっかけに仲良くなれるかもしれない、とそう思っ

「えっと……」

なのはちゃんが言葉に詰まった。そして悲しい顔をする。言葉を引き継いだのはアリサちゃんだった。

「変な奴よ。それに私達の下僕予定」

「下僕!？」

「あ、アリサちゃん」

「言い得て妙かもしれないけどね」

「すずかちゃんまで」

もう、と頬を膨らませるのはちゃん。そんな三人は本当に仲は良かったけど、何となくそれ以上な気がする。共通の秘密を持っているというか。でも、中心にいるのは高坂君という人なのだろう。

それなら。何故。

「何でその中心みたいな所にいる高坂君はここに居ないの？」

「「「「」」」」

しまったと思った時には既に遅く、三人の顔がこわばった。慌てて何か言おうと思ったけど、それよりも早くなのはちゃんが口を開いた。

「家の用事だよ。家の用事で凄く遠い所に居るの。連絡もつかない位。ちゃんと帰って来るのは分かってるんだけど、今はどこに居るのか分からないんだ」

凄く寂しそうな顔。それはアリサちゃんとすずかちゃんも同じで、三人がお弁当を食べる為に屋上に行ってしまうまで、私は何も言えなくなってしまうた。

三人の姿が見えなくなつて、私は席を立つと、高坂君の席に近づいた。椅子を見ると、背もたれの所に名前が書かれたシールが貼つてある。

「高坂、浩樹」

私と音だけでなく文字も同じ名字だった。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

悪感を感じ、起き上がる。フェイトやなのはを狙った、プレシア・テスタロッサの次元干渉型の魔法攻撃の時ほどではないが、今まで生活していた中で、トップスリーに入るくらいの予感。

しかし辺りに何か気配がある訳ではない。アルハの言った通り、ここには俺とアリシアいないはいないだろうから。しかし、気のせいで済ませるには余りに明確過ぎる。

「どうかしたの？」

「ああ、ちょっと」

起き上がって、周りを警戒し始めた俺を不審に思っただらしいアリシアにそう答える。

しかし何だったのだろうか。プレシアの時など、普段なら悪感の原因になりそうな事には心当たりや反射的に何か分かる筈なのに、今回はそんな事が無い。ただ漠然と、何かが起こりそうだと、そういうだけ。

とりあえず、頭の片隅にとどめておきつつ、ふとテーブルの上に置かれていた食事に気づいた。そう言えば、この部屋に入った時、アリシアが持っていた奴だ。

「なあ、アリシア」

「何？」

「テーブルの上の食事、食べてもいいか？」

「あ、うん。アルハに頼まれて、浩樹用に持ってきた奴だから」

「なら遠慮なく」

立ち上がり、テーブルの上の食事を見る。当たり障りのない洋食のメニューだった。ためしに一口食べて見て、むうと思わずうなづいた。

「これってアリシアが作ったのか？」

「ううん。何か簡易食料みたい」

「そうか……、何か微妙だな。喰えなくないんだが」

「それは……確かに」

かき込むようにして全て食べてしまう。

「これからは俺が作るか。アルハに頼めば食材は手に入るだろうし」

「浩樹、料理できるの？」

「ああ。ずっと作ってたからな。少なくとも、この簡易食料よりは美味しいよ」

「じゃあ、私もお手伝いするよ」

「大丈夫か？」

「お母さんのお手伝いしてたから。大丈夫」

「そうか。なら明日から一緒に作るか」

うん、と頷くアリシアの頭を撫で、俺は明日のメニューを考え始めた。他にやる事もなかったからな。

第二十三話 対面した魔導師と転校生 (後書き)

読んで下さりありがとうございます、ごまだれです。

連続投稿、果たしてあと何日続くか。とりあえず、間が一週間開くようなことは無いようにします。最大三日を目標に。

以上、ごまだれでした。

第二十四話　く得る力と得た知識く

Side: 浩樹

「アリシア。それ塩じゃなくて砂糖だ」
「あれ？」

『浩樹く。右と左どっちがいい？』
「質問の意図がつかめないが、とりあえず右」
『了解。じゃあ、これやっておいてね』
「ん？ ああ」

カタカタ
「難しい……」
「何やってるの？」
「アルハの課題。プログラミングなんてやった事無いから分からん」
「教えてあげようか？」
「分かるの!？」

「ああ!？」
「よっし」
「うっ……はい、どっち!?!」
「とりゃ。ういな」
「二十八連敗……」
「絶望的にババ抜き弱いな、アリシア」

目覚めた日からの一週間を表すと、概ねこんな感じだ。朝昼晩の

三食をアリシアと共に作り、目覚めた翌日にアルハから出されたプログラミングの課題をアリシアに教えられながら、ほとんど我流でやって行き、余った時間は大抵アリシアと遊んで過ごした。

そして約束の一週間。まだアリシアは起きておらず、手持無沙汰な俺は軽く身支度を整えてから、瞑想しつつアルハを待った。

『やつほー、お待たせ』

「相変わらずな、アルハ」

目を開け、体をほぐしながら立ち上がる。

「それで？ 俺の願いは聞き入れて貰えたのか？」

『モチのロン！！ 浩樹の願いをかなえる為に、私の趣味を詰め込んだ個人的にはトップクラスの面白いものが出来上がったよ！！』

「隠すつもりはもう無いのか！？」

『まあ、効果はあるよ。それは事実だから安心して』

「安心できる要素は皆無なのだが……。まあ、信用しよう」
『所で浩樹。私の課題はちゃんとやった？』

「ああ。俺の部屋にあった端末にデータが入ってると思う」

『ちよっと待ってね。確認するから』

本当にわずかの間で確認が終わったらしく、アルハが唸った。

『これってアリシアに教わったの？』

「ああ。前半は。後半は完全に我流だから正直自信ないよ」

『そっか。やっぱり浩樹は面白いな』

「面白いと評価された理由が分からないが」

『面白かった？』

「……面白かった」

『そっか』

すると、天井からスクリーンが降りて来た。それに合わせて徐々に部屋が暗くなっていく。スクリーンが降り切ると、壁の一部がスライドして、映写機のようなものが出て来た。

そうして準備が終わると、映写機からスクリーンに文字が投影された。スクリーンに書かれた文字は『浩樹改造計画』。

「改造は勘弁」

『別に腕をドリルにしたり目からビームが出来るようにする訳じゃないよ。浩樹にとっての魔法戦は能力と小さな頃からやってた格闘術を使ったクロスからゼロレンジの白兵戦メインで、距離があればレイズシールドで、つてのが大まかなイメージでしょ？』

「まあ、そうだな。一番分かり易いし、堅実だろ」

『だからその魔法戦に一捻りも二捻りも入れていくのが今回の改造

計画です。テーマは……』

「テーマは？」

『ビーストレイカー歯車破壊を本気で作ろう!! です』

「……」

その二つ名、誰が覚えてるだろうなあとぼんやり考える。もう名付け親が誰かも分からないんじゃないのか？

『何かすごくメタな事考えてる気がする。メッ!』

「うるさい。それで？ 改造内容は？ 修業プランは？」

『それは今からスクリーンに表示するよ』

表示された文字を見る。

「うわあ」

『うわあ、じゃない!!』

「でもま、面白そうではある。効果の方は信用してるぞ」

『うん。じゃあさっそく』

足元に穴が開いた。

『修業開始』

「はあ」

溜息をついた直後に、俺の体は落下を始めた。

Side out

Side：佳奈

転入してきて一週間。あれ以来、高町さんやバニングスさんとは話していない。

しかも高町さんとは家が隣だから、たまに会ってしまっ度に、大変気まずくなる。でもだからと言って仲直りをする切っ掛けが無いのも事実だったりする。

「だって、転校したてで知らなかったんだもん」

ぼそりと呟いた言い訳は、私以外誰もいないこの家の中で、誰の

耳に届く事もない。

「でも、困ったな」

触れてはいけない点というのは本当らしく、この事を聞くのにも結構な時間がかかった。おまけにあまり友達が多くなかったらしく、彼の事を聞きたいならなのはちゃん達に聞くしかないね、とまで言われてしまった。

「またそれについて聞いたら、今度こそ絶対的な壁が生まれる気がするんですけど」

気がするというか、まず間違いなく壁が出来る。それこそ、今後金輪際、仲直りなど出来なくなってしまうそうなくらい。

仲直り云々の以前にそもそも仲良くなっていけないような気がしたけど、気にしない事にした。

「そつえば」

彼の名字は高坂だ。あの時は私と無関係だと思っていたけれど、おじいちゃんが入ってはいけないと言っていた、この家の開かずの間。もしかしたらそこは彼と関係があるのかもしれない。

「……よし」

立ち上がる。部屋を出て、向かうのは立入禁止の開かずの間。何度か深呼吸をして、戸を開けた。

S i d e o u t

S i d e : ア ル ハ

修業終了後。浩樹は改造計画と修業内容を聞いた部屋で、床にうつ伏せに倒れていた。眠い訳ではない。動けないのだ。肉体的疲労は全くないはずだが、頭脳労働の異常な疲れが、肉体にまで影響を与えているのだ。最早知恵熱とは言えないほどの体温の上昇。汗と鼻血が流れるようになっているが、それを拭う様子もない。

『大丈夫？』

尋ねるが、既に無言という答えすらない。私の言葉を理解しているかすら怪しい。このままにしておく訳にも行かず、アリシアを呼んだ。アリシアは部屋に入ると、息を飲んで慌てて浩樹に近づいた。この一週間で随分仲良くなったなあ、この二人。

「アルハ！！ 何があつたの!？」

『修業の疲れで浩樹が動かなくなっただけだよ。大丈夫。命に別状は無いから』

「全く信用できない……」

そう言つてアリシアは私が持つてくるように言つたタオルで、浩樹の汗や血を拭き始めた。

その間に浩樹の事を診る。体温など様々なデータを取って行き、それを修業前に取つた浩樹のデータと照らし合わせながら検証する。

(うん。やっぱり命に別条は無い。でも明日起きるかどうかは怪しいかな)

それに修業の頭でここまでのダメージ……。これは予想外だった。慣れていないと、その一言で済ませてしまうのは簡単だけど、それにしたってダメージが大き過ぎる。こうならない為に、事前に課題という形で作業をさせていたにも拘らず、だ。

『ふむ』

いい機会だし色々調べてみよう。

そんなアリシアに浩樹をある部屋まで運ぶように指示してから、私は明後日の修業と浩樹の治療の準備、そして調べる準備をする。

「アルハ。運んだよ」

『うん。ありがとう、アリシア』

此処に来た時に浩樹の治療の為に使っていたポット。そこに彼を寝かせるように指示して、彼が寝かせられるとポットの蓋を閉じる。

「アルハ。浩樹、大丈夫？」

『大丈夫だって。一日ゆっくり寝てれば回復するから』

「そう？ 分かった」

椅子を持って来て、ポットの近くに座る。本当に仲良くなったなあ、とぼんやり思う。個人（？）的にはこの仲睦まじい光景を浩樹の幼馴染とかその辺りに見せたいところだ。どんな事になるだろう。

しばし考えて、結論が出た。

（血を見る事になるわね）

勿論鼻血じゃない。それもそれでわくわくな展開ではあるが。

（ま、今はやる事やろうかな）

私はシステムのスイッチを入れ、治療と解析を始めた。

S i d e o u t

Side：佳奈

「じじじって……」

シンプルな部屋だった。机と本棚。部屋の隅の方には布団が畳んである。目を引くのはそこらへんだけだった。

机の上に並ぶ教科書は私が使っているのは同じもの。その机の一角には綺麗に着色された四体の人形が並んでいた。

「この人形のモデルって、高町さんとバニングスさんと、月村さん」

480

そしてもう一体。複雑な表情で立っている、唯一男の子の人形。恐らくこの人が高坂浩樹君なのだろう。この人形の制作主もこの部屋にあるのだから多分高坂浩樹君。

ゴクツと唾を飲み、高町さんの人形を手に取って、下から覗き

「って、何やってるのよ、私は!!」

慌てて人形を置く。はあ、と溜息をついて、次に本棚に目を向けた。

様々なジャンルの本が所狭しと並べられていた。一口に小説でも有名なファンタジー小説があつたかと思えば、私が全く知らないようなSF小説があつたり。それにレシピ本や歴史書、漫画もある。それがごちゃごちゃとジャンル別に分ける訳でもなく入っている。

「大雑把な人だつたのかな？ でもそれにしては教科書ちゃんと並んでたし、人形の出来も凄かつたし部屋も片付いてる」

部屋はその人の人柄を表すというけど、全く読めない。適当なのか几帳面なのか。手先が器用というのは間違いないみたいだけど。

深まつた高坂浩樹君への謎を抱えたまま、暫く部屋を漁つた。高町さんとかと一緒に撮つた写真とかはいろいろ出て来たけど、彼の居ない理由までは分からなかつた。

「どうしてだろ」

人形のモデルである四人が移る写真を引き出しの中に戻して、私は溜息をついた。

第二十四話 く得る力と得た知識く（後書き）

サブタイが……どうも、ごまだれです。

凱龍輝さん、感想ありがとうございます。

改稿しました

という訳で、今回はここまでです。

読んで下さってありがとうございます。以上、ごまだれでした。

第二十五話 く愛すべき隣人達

Side:アリシア

衝撃で目が覚めた。

「……………ああ。そっか」

起き上がった先に言ったポットを見て、自分がどこで寝ていたのか思い出した。昨日はアルハに指示されて、浩樹を此処まで運んで来て。そのままここで寝ちゃったのだ。

思いつきり打った背中をさすりながら、椅子をたてて再び座る。ポットの中で眠る彼は、私が眠ってしまう前と何も変わっていないかった。

「アルハ。浩樹の具合は？」

『心配無いよ。寝てるだけ』

「そっか？」

アルハがそう言う以上、私にはその言葉を信じるしかない。でも

彼の寝顔は、奇しくも私が初めて見た、目覚めないのではないかと
思わせた寝顔と同じだった。

「そつえば、もうすぐ一カ月だな」

アルハによって与えられた二度目の生。それを与えられてから、
もうすぐ一カ月だった。

私が目を開けた時、私は液体の中に居た。不思議と息苦しくはな
く、どこか温かった。

『あ、起きた？』

どこからともなく声が聞こえた。苦しくはなかったけど、流石に
返事をする事は出来なかったから、首を縦に振ることで答えた。

『そっか』

声の主は、そう答えるとブツブツと呟きながら何かを確認して、私が入っていたポットの中の液体が抜かれた。

更にポットが開き、そこから出る。体が少し重くなった気がした。

『おはよう。一応、確認の為に名前を聞いてもいい？』

「アリシア。アリシア・テスタロッサ」

『ん。アリシアね。私の名前は、ん〜そうだな。アルハでいいや。アルハって呼んでね』

呼んでねって本当の名前で無いのだろうか。

『因みに本当の名前はアルハザードって長いから、略してアルハだよ』

「へえ。アルハザードって、ええ!?!」

『おお。やっぱり魔法世界出身の人は驚くよね』

「それって何かの冗談じゃ?」

『それについては、アリシアの現状を考えればいいんじゃないかなあ』

「私の現状?」

『前の記憶は残ってる筈。なら、アリシアの最後の記憶は？』
「最後の記憶？」

思い出す。お母さんとの約束。その約束が無くなり、研究所で行ってしまってお母さんを見送って。その研究所の方を眺めていて、突然の閃光が私を包んで。

「あ、あ」

『思い出した？』

「私、死んで……」

『うん。でも、今生きてる。正確には生き返らせたんだけどね』

言葉が出なかった。理解できている筈だ。私は一度死んで。それをこの声の主、アルハザードは失われし都と呼ばれるその技術で、私の事を蘇生した。

「なん、で？」

『気まぐれかな。もう一人、この場所に居るんだよ』

「え？」

『もう一人、この場所に居る。今は眠り続けてるけど、その内目覚める私の大切な子。その子が起きた時、此処に居るのがその子だけだったら寂しいでしょう？ だから、君を連れて来て。君を蘇生さ』

せたの』

「なっ!?!」

驚いて目を見張り、そしてどこに居るか分からないから宙空を睨みつける。

そんな私の反応なんて無視をして。アルハは言葉を続けた。

『まあ、それだけでもないんだけどね。そうしておいてよ』

「……………」
『完全に警戒されちゃったなあ。それじゃ、アリシア。一応施設の説明だけしておくね』

説明が始まったけど、ほとんど耳に入って来なかった。そして最後に、アルハが大切な子がいると言う部屋の場所を説明された。

『まあ以上かな。何か質問は?』

「……………」

『……………ごめんなさい!!--!』

「……………はい?」

いきなり雰囲気が変わった。RPG的に言えば、ラスボスか最低でも敵幹部クラスだったのに、今は最初の村に居そうな無駄にフランクな村人Bのようになってしまった。

アルハの変化について行けずにいる中、アルハの懺悔(?)は続く。

『いやさ。最初はこう、荘厳っていうか、そんな感じでこうラスボスみたくにしたかったから。ごめんね、アリシア』

「え？ え？」

『まあ、あんまり気にしないで、フランクに接してくればいいよ。聞きたい事があれば、何でも答えるし』

訳が分からなかった。けれど、とりあえず。

「じゃ、じゃあ、アルハ。タオルと着替えを頂戴？」

いい加減寒かった。

アルハにタオルと服を貰って。着替えた私は廊下を歩いていった。向かう先は、アルハが大切な子だと言っていた高坂浩樹という人の所。

「どんな人なの？」

『情緒不安定で落ち着きのない人』

「はい？」

『っていうのはまあ、半分冗談として』

半分本気らしい。

『うーん、妙に飄々としてて掴みどころが難しい人、かな』

「へ〜」

話した事が無いからなんとも言えない。その内、部屋に到着してドアが開いた。部屋にはぼつんと一つだけポットがあり、その中で私より何歳か年上らしい少年が眠っていた。

見た感じは分からないが、近くのモニターを見ると、浩樹の損傷具合が書いてあった。

「大分酷いんだね。どうしてここまで」

『知りたい？ 覚悟が必要になるよ』

「どういう事？」

『言葉のまま』

「……まだいい、かな」

『それで正解』

ポットに触る。此処に居る、私以外の人間。何故彼が此処に居るのははまだ分からないけれど、とりあえず。

「よろしくね、高坂浩樹」

挨拶だけでも、する事にした。

この日から、彼の世話を私も手伝うようになり、数日たって知らされた、彼の眠り続けている理由を聞いて、更に世話をするようになったのだ。

「もう、こんな事無いと思っただけだな」

あの時のようにポットに触る。早く目を覚ましてほしい。早く目を覚まして、また料理を教えてほしい。

「まだ一日も経ってないんだけどな」

アルハも入れれば三人だけど、実質は私達二人だけ。だからだろうか。結構依存しているのかもしれない。

「早く起きろー」

退屈で退屈でしょうがなくて。結局私は彼が目を覚ますまで傍に居続けた。

S i d e o u t

S i d e : アリサ

「何でその中心みたいな所にいる高坂君はここに居ないの？」

その日転入してきた彼女は、そう言っってしまった。彼女は転入したてであいつの事を知らなかったからしょうがないのかもしれない。でもその言葉は私とすずかのペアとなのはとの絶対的な壁だった。

「私を知る訳ないじゃない。話してくれないんだから」

私とすずかの間で決めた約束。なのはに『お家の事情』についての質問はしない事。なのはが話してくれるまで待つ事。そう決めたからこそ何も言わないだけで、その約束が無ければ、締め上げるなんてことは流石にしないけど、なのはが白状するまで問い詰めると思っ。

こればかりは惚れたものの弱みよねとらしくない事を呟いてしまい、慌てて左右を見て人がいない事を確認した。幸い人っ子一人おらず、ふうと一息ついた。

「しっかし、私も最近よく此処に来るわね」

そう呟いて、自分が座るベンチを撫でた。そう、この場所は初めて浩樹とまともに話した場所だ。そして、私の浩樹に対しての意識が様変わりした場所でもある。

再び左右を確認して誰もいない事を確認すると、携帯を取り出して操作。目的の画像を見つける。

「なのはとすずかに内緒で撮ったツーショット写真。まだばれてないわよね？」

あの二人も持つてる様な気がするけど、この写真は間違いなく私のアドバンテージだ。なのはやすずか。私も含めてあいつが頭を撫でることは多々あるけど。

「ほ、頬にキスをされたのなんて、私だけの筈だしね」

そう。この写真は売り言葉に買い言葉で、二人きりだった時、写真を撮ろうとした瞬間、あいつがキスして来た時のだ。私は訳も分からず間抜け顔だし、浩樹も浩樹で凄く真っ赤になってる。こういう所も可愛いと思うのだから、ほんとに私らしくないと思う。

無意識のうちにキスされた頬のあたりを撫でている事に気がつき、

慌てて手を話して、悶絶する羽目になった。

「まったく。こんな所を誰かに「アリサちゃん？」見られたからおしまいね」

再び溜息をつく。よりもよつて一番見られなくなかった相手だ。お昼休みにすずかが席を立った時、なのはと最近、すずかわ変わったよねという話をしたのは、記憶に新しい。

平静を装って携帯をポケットにしまう。すずかが隣に座った。

「ところですか。いつから居たのよ」

「アリサちゃんがポケットから携帯を取り出して、ニヤニヤし始めた辺りかな」

「ちゃんと確認したの筈」

「左右だけじゃなくて、後ろも確認しなきゃだめだよ？」

「……」

後ろ。という事はもしかして。てか、もしかしなくても。

「み、見た？」

「見たし聞いたよ？」

「……」

「……」

「浩樹がいきなりやって来て避けられなかっただけよ！」

「ふーん」

「ごめんなさい」

即座に謝った。こういう時はすぐ謝るに限る。隠し事をしてごめんなさいって。決して、さすがが怖くて諂う訳じゃない。

「でも、アリサちゃん、こんな事してたんだね。ちょっと意外かも」
「この時は、お互いによく分からないテンションだったのよ。それで勢いで」

「なるほど。情緒不安定にすれば……」

ぶつぶつと何かを言いながら考え始めたすずか。取り残された私は、居るかも分からない神様という奴にお祈りをし始めた。最近親友の一人が怖いです。助けて下さい。

……答えは無い。溜息を一つついて、いつものように、此処に居ないアイツに怒りの矛先を向ける事にした。

ちつちと帰って来なさいよ、
下僕。ひきやく

第二十五話　く愛すべき隣人達く（後書き）

サブタイ……そしてさすがが……。どうも、ごまだれです。

アリシアとアリサって似てね？なんて思ってしまい、浩樹倒れてるしこれでいいかという事で、アリシア回想とアリサの絡み（？）にしました。さすがが『アリサ・バニングスの場合』と同じシチュのはずなのに、全然違う……、

そのうちすずか視点も書きたいな、と思いつつ、今回はここまでです。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

では次回。以上ごまだれでした。

第二十六話 〱都の日常と番外編〱

Side:アリシア

ポットが開いた。上体のみを起こして、暫くぼんやりしていたのち、

「あー、頭痛い」

目を覚ました浩樹の最初の一言はそれだった。本当に痛みが取りきれないらしく、頭を抑えながら複雑な顔をしている。

498

「大丈夫？」

「ん？ おお、アリシア。おはよー」

ニヘラ。笑いながら私に手を振って来て。そんな浩樹に溜息を一つついて、再びポットに倒した。

キョトンとしている浩樹に、一応持つて来た濡れタオルを彼の額に乗せる。

「まだ痛いなら寝てなきや」

「でも暇だし。腹も減ったから食事でも作ろうかなと」

「私が作ってあげるから」

「まじ？ よし寝るわ」

「どういう意味よ！！」

「だって塩と砂糖をナチュラルに間違えるし、米を洗剤で洗おうとするし。正直、爆発オチしか見えないんだけど」

失礼過ぎる。そりゃ最初の頃はそうだったけど、教えて貰ったからそれなりに出来る……と思う。お粥なんて昼飯前だよ！！

「朝飯じゃないのかよ」

「うわ！？ 何で私の考えが分かったの！？ エスパー！？」

「声に出していたオチという平々凡々な理由なのだが」

「そ、そうなんだ」

苦笑い。起き上がろうとする浩樹を抑えて、よし、と決心した。

「絶対美味しい料理を作っ来て、驚かせて見せるからね！！」

「アルハク。アリシアに付いててくれ」

『うん。分かってるよ。流石の私も、施設内で爆発沙汰は嫌だしね』

「アルハまで!!」

こうなったら本当に美味しい物を作って、あつと言わせてやる。
そう意気込んで、

「首を洗って、待ってるー!!!!!!」

捨て台詞を吐いて、私は部屋から外に出た。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

「アルハ」

『どうしたの？ 今日はやけに語尾が伸びてるね』

「まだうまく頭が働いてないんだ。それより、アリシアに」

『分かってるって。ちょっと行って来るね』

会話が途切れた。アルハに任せておけば大丈夫だろうけど、それでもやはり不安は残る。アルハはアリシアに対して言葉でしか制止

が出来ない。あんなに意気込んでいたから、もしかしたら言葉の制止だけでは止まらないかもしれない。

「アルハに頼んで胃薬も用意しておいて貰おうかな」

その前に痛み止めが欲しいけど。

寝る前よりは幾らかマシにはなったが、未だに残る頭痛に辟易する。アルハの修業だ。効果はあるのは信頼していたが、あそこまで辛いとは思わなかった。負けず嫌いだからこそ、痛みに耐えてその日のノルマは完遂したが、結果がこのザマである。

溜息をつき、四肢を投げ出して大の字になる。目を閉じて、自身の中に潜る。

己を知る。俺がじいちゃんから教わっていた武術で絶対必須の条件。その為に得た技術。意外と便利で結構多用する。

「反省する時とか現実逃避とかなあ」

潜った先でそうばやく。本来は戦闘時に使う技術の筈だけど、どうしても深く潜り過ぎてしまい反応が遅れるから、戦闘では使いつ

らい。実際、潜っている時になのはやアリサに話しかけられた時、すぐに気がつかなかったほどだ。

それ以来、なのは達がいる前でこれをやるのは禁止になったのだけど、まあ今は関係ないか。

頭痛が原因でこの空間に違和感を覚えるけれどそれは置いておいて。修業の反省を始めた。

Side out

Side：アリシア

- 1、米を洗って30分程水につける。
- 2、厚手の鍋の米と分量の水を入れて火にかけ、沸騰した後弱火にし、ふたをずらして約1時間炊く。
(むやみにかき混ぜない)
- 3、火を止め、フタをきっちりして5分間蒸らす。

アルハに頼んで調べて貰ったお粥の作り方がこれだ。何度も手順を確認して、同じサイトに書いてあった水の分量と睨めっこして。

「よしっ」と気合を入れ直した。

「さあ、作るよアルハ!!」

『うん。お願いだからレシピ通りに作ってあげてね?』

「それでいいの?」

『素人の創作料理ほど地雷になる物は無いよ』

まるで経験者は語るとでも言いたげな言い方をするアルハ。首を傾げつつ、先ずはお米を一合、鍋に入れる。

『洗わないの？』

「洗うよ！！」

まったく、アルハは。そう思いながら鍋に水を入れて洗剤を『ストップ、ストップ！！』はっ。

洗剤を置いて、頬を膨らませる。

「もう、何アルハ？」

『今普通に洗剤入れようとしたよね！？』

「何言ってるのよ。夢でも見たんじゃない？」

『いくら私が高性能なAIでも、睡眠はしないから夢も見ないよ！』

「じゃあ、あれだ。白昼夢とか幻覚とかその類いだよ。疲れてるんじゃない？」

『このノリで行ったらまず間違いなく疲れるよ』

さて気を取り直して。鍋に水を入れて何度か米を洗い、水を入れようと思いい手を止めた。

「うーん、五分がゆでいいかな？」

『いいんじゃない？ まともに作れば、浩樹はちゃんと食べるだろうし』

「さつきから、あるはの言葉に悪意を感じるよ」

『浩樹に頼まれてるから。厳しくいくよ』

「はい」

容量比に合わせて水を入れる。さて次は……三十分か。

「長いよ……」

『私に言わないでよ……！』

「はあ、まあ、待とうか」

『じゃあ、その間に私がお話をしていてあげるよ』

「暇だし聞いているよ」

という訳で、アルハのお話が始まりました。

Side out

Side:アルハ

『はい、いい子のみんな集まって〜』

「いやいや。ここにいるの私と浩樹だけなんだから」

『それもそうだね。それじゃあ始めようか』

タイトル：古井戸からの呻き声

「待った」

『何?』

「タイトルのにホラーなの?」

『それは聞いてからのお楽しみかな』

「このタイトルでホラー以外とかまさかすぎるよ!?!? そしてこの時期にホラーって季節外れもいとこるだよね!?!?」

『はいはい。では古井戸からの呻き声。始まり始まり〜』

実はあまり昔の事じゃなく、結構最近に起こった話。

ある少年、H君がある理由で森に入ったの。そこは結構深い森でね。木が鬱蒼と茂っていて、昼間でも結構薄暗かったの。

へえ。それで？ H君が森に入った理由は？

うん。H君が森に入った理由はね。ある噂を確かめる事だったの。
噂？

そう。少し前から話題になっていた噂。ある人が、その森に入った時の事。風が吹いて葉が擦れる音が辺り響く中、どこからともなく「オオ、オオ」と呻く声のようなものが聞こえてきたんだって。そこで、その人は誰かが苦しんでいるのかも知れない。そう思ってその声の方に近づいて行ったの。

勇気あるねえ。

本当だね。「オオ、オオ」と声は途切れ途切れにその人の耳に届いた。その人はその声を頼りに、森の奥にどんどん進んでいく。しばらく歩くと開けた場所に出たの。そして、その場所の中央には井戸があつた。石で出来た古井戸。

お約束と言えばお約束だね。

その井戸の中から声は聞こえてくる。しかもさつきよりも大きく。いつの間にか荒くなっていた息を整えて、その人は井戸に近づいたの。井戸に手を置いて、中を覗き込んだ。生憎暗くて何も見えなかつたから、その人は声を張り上げて言った。

「おおい！！ 誰かいるのか！！ 居たら返事をしてくれ！！」

……それで？

返事は返ってきた。今までの呻くような答えとは違う。「オオオ

！！ オオオ！！」とまるで地底の底にいる何かが威嚇するような声。

うわあ

その人はびつくりして、慌ててその場から逃げだした。という話そして、その噂を聞いた人たちが何人もその場所を訪れては、声を聞いた。だから尾びれが付いて、その井戸の底には何か化け物がいる、ってそういう噂になったの。

そしてまた一人。正義漢という訳ではなかったけど、そういう話が好きな友人に言われて、H君はその森に入ることになった。

その日はあいにくの天気だね。ただでさえ暗い森が、さらに暗かった。

なんでわざわざそんな日に。

友達との約束が翌日だったの。

納得。あ、ちょっと待って。火にかけるから。

はい。

……はい。大丈夫。続きをお願い、アルハ。

はいはい。えーと、H君が森に入った理由まで話したよね。じゃあ、その続きから。暗い森の中を、H君は一人で歩いて行った。生憎とコンパスは家に無かったし、おじいさんに教わったアナログの時計で方角を調べる方法も曇っていて使えなかったから、H君は通る木々にリボンの切れ端を結んでいくっていう原始的な方法をとった。

ヘンゼルとグレーテルみたいだね。

目印はパンじゃないけどね。木々にリボンをつけながら奥に進み、暫く歩くと「オオ、オオ」と声が聞こえて来た。

声の方向に大よその見当をつけて、H君は森を進み、そして井戸に辿り着いた。

うん。

H君はすぐに近寄らないで、その井戸をためつすがめつ眺めた。その間も声は聞こえてくる。そして彼は、思いきってその井戸に近づいた。底の方は相変わらず暗く、H君は「誰がいるのか!!」と初めてここに来た人と同じように叫び、返って来た声を「オオオ!! オオオ!!」とまた同じ声だった。少し悩んでから、彼は手近に落ちていた石を拾い上げると、その井戸に落としたの。

……はい？

一つ落として、底の方で石が何かに当たる音がした。続いて二つ、三つと石を落して、落ちるのにかかる時間と音の発信源からの距離からある程度の井戸の深さを調べたH君は、一度その場を離れて家に帰ると長い長いロープを手に、その場に戻ってきた。

H君が何を考えが分かるけど……。

もう一度石を落として、深さを確認してから、ロープを木に縛り付けると、H君は井戸の中へ降りて行った。

何と言つか、行動力あり過ぎでしょ、H君。

降りて降りて。底に着いた彼が見た物は、声の主だった。

はい？ 誰かいたの？

うん。違うよ。降りた彼の前にあったのは、懐中電灯で照らしても奥まで見えない横穴。声の主はそこを風が吹いた時に響いてくる音だったってわけ。

幽霊の正体見たり、枯れすすきって感じだ。

うん。まあ、そんなもんだよね。でも彼はそこで止まらなかった。その横穴は、屈めば何の問題もなく入れる程度の大きさだったから。

うわあ、入ったの？

うん。まあ、それは別の話かな。聞きたければ本人に聞いてね。

あ、やっぱり浩樹の話だったんだ。

ふふ。古井戸からのうめき声。第一部はこれにて終幕、ってね。

第二部も楽しみにしてるよ。

S i d e o u t

第二十六話 く都の日常と番外編く（後書き）

Side：アルハの時にかなり筆が進んだ……なんでだろ？ どうも、ごまだれです。

凱龍輝様、感想、ありがとうございました。

さて、今回はこの時期に何故か怖い話？でしたが、本当に何となくです。あまりにネタが無くて逃げに走った訳じゃないです。どちらかといえば、次回から本格的に奈々がA's介入を始めるので、アルハザード組が空気になる前にインパクト(?)を与えておきたかったです。……すいません、言ってる意味が分かりませんね。

今回はここまでです、以上、ごまだれでした。

一番最後のは、今回利用したサイト様です。

しかし今回も間に合って、良かった……

参考文献

おかゆの作り方

閑話 ～重要な報告～

ごま「はい。まあ、今回も始まりました。報告の方は後で二して、まずは本編の現状についてです」

アル『スクリーンの方をどうぞ』

浩樹・アリシア：アルハザード滞在中

なのは・アリサ・すずか：とりあえず、普段通りの日常

ごま「そして報告ですが、すいません。作者の勝手な都合で出てきて五話経っていない、キャラが一名左遷はくせんされます」

アル『うわぁ』

ごま「まじすいません。奈々のポジは佳奈さんについてももらいます」

アル『佳奈？』

ごま「魔法なし。至極一般人の転校生です」

アル『うわぁ』

ごま「正直、奈々を出してしまったことに後悔を隠せなかったり…
…」

アル『そういうことは、考えても言わないの』

ごま「浩樹だったらともかく、転生者でA・S介入って時点で、他の作者様と殆ど内容が被ってしまうのだけだ」

アル『まあ、細部はともかくとして、大筋は似たり寄ったりにはなるでしょうけど』

ごま「既に出だしからして何度か見たしね」

アル『あー、まあ。お約束？』

ごま「今ならまだ戻れるし、ここはいつそ、奈々を……」

アル『奈々を？』

ごま「別の世界に飛ばしてしまおう。GEとか」

アル『二日で連載止まったわね。あれ』

ごま「ミナに持たせる御三家をどっちにするか悩んでるんだ、未だに」

アル『決めとこうよ!?!』

ごま「ワニノコの予定だったんだけど、ヒノアラシも捨てがたくなってきたて。こんなに悩んだの『例えばこんなプロローグ』以来だぜ」

アル『話戻すわよ。話題としては今後の奈々の扱い？』

ごま「正直、一番好きなんだ、A・S。それに終わり方もあれでいいと思ってるから、なんとなく介入したくない」

アル『また、はっちゃけたわね』

ごま「元々出す予定無かったからな、奈々」

ごま「まじすいませんでした。そして今回はここまでです」

アル『読んで下さっている方々、すいません。提供は忘れられし都、アルハザードと』

ごま「キャラクター一人、まともに動かせない駄作者。ごまだれでお送りしました」

第二十七話 高坂のプロローグ 前編

Side : 浩樹

二兎を追うものは一兎も得ず。単純に言っしまえば欲張るな、とそれだけの話だ。初めてこの言葉を聞いた頃は、努力が足りないのだとそう思ったけど、今の俺は自分の限界という物をきちんと理解しているから、二兎を追うつもりなど毛頭もなく、ただただ一途に一兎の獲物をひたすらに追っただけ。

それで満足しているからこそ、現在進行形で行っているこの修業だつて、今の俺は軽く走り込みなどはしているけど、ただただ一途にそれに励んでいるだけだ。

『はい、オツケーだよ、浩樹。ノルマ達成、お疲れ様』

「ああ、疲れた〜」

『でも、流石に一カ月も経てば慣れてくるね』

そう、この修業を始めてから、既に一月が過ぎた。幸いな事に倒れたのは初日だけで、それ以降は若干難易度をアル八が緩めた為、時間はかかるがそれでも確実にこなしている。

タオルで汗を拭き、床に倒れ込む。アル八が気を利かせて部屋の温度を少し下げていてくれるから、床の方はかなり涼しく、慣れたとはいえ未だオーバーヒート気味になっている体には心地よかった。

『今度測定して見る？』

「測定？」

『うん。実戦でどの程度使えるのか、調べてみようよ』

「それはいいが……」

『一カ月。浩樹はもう万全だし、アリシアだって十分技術を手に入れたよ。主にバックアップだけだね』

「それは助かるが。アリシアを巻き込むのは賛同出来ない」

『そう言うと思ってたよ。だから、今夜一晩、アリシアと二人きりで話してみて。私は色々考えておくから』

「了解したよ、アルハ」

バイバイと軽い口調で行ったのを最後に、アルハの声が途絶えた。しかし、アリシアの奴。裏で訓練なんかしてたのか。俺の修業中は暇だろうから時間はあっただろうけど。

アルハの言葉を反芻する。あれはつまり、アリシアを連れていくと、そういう意味の言葉だ。確かに此処に置き去りにするよりはそちらの方がいいのかもしれないし、もしかしたらアルハの事だ。俺の旅の目的を既にアリシアに話しているのかもしれない。

「それでも、納得する訳にはいかねえよな」

自分がどんな道をこれから歩んでいくのか。それが分かっているからこそ、尚更アリシアを巻き込みたくなかった。折角得た二度目の生なのだ。彼女には日の当たる道を歩んで欲しいとそう思う。

かといって、アルハも含めて三人で一カ月と少しの時間を過ごして来たのだ。彼女は彼女で、強情な所も知っている。説得にはかなり骨が折れることは間違いなかった。

「それでも、言わなきゃな」

決心し、アリシアがいるであろう部屋に向かって、俺は歩き始めた。

Side out

Side : 佳奈

更に一月経った。現状を問われれば、新しい友人とか日課とか。そういうのは色々変わったのだけど、高町さんやバニングスさんとの関係について問われれば、何も変わっていないの一言に尽きる。

溜息をつき背凭れに身を預けた。既に部屋に勝手に侵入した事はばれているから、部屋をなるべく元のまま使う。その条件で私は結

構な頻度で彼の部屋を利用していた。

「どつしよつ、かな」

考える事は専ら、高町さん達とのこと。特に高町さんとはお隣さん同士だから、もつと仲良くしたいと、切に思う。最低限、朝の時間に合わせてしまつたら気まずいからつてこそこそする生活を脱したい。

気にし過ぎな気もするけどね。

「どつしたらいいと思いますか、高坂君」

同じ名字だから紛らわしい事この上ないけど、流石に名前で呼ぶ勇氣はない。答えが返つて来ないと分かつていても写真に相談してしまうぐらい悩んでいても、だ。

カーテンを開ける。ここから見えるものと言えば、対面の高町さんの家の部屋くらい。生憎と誰の部屋かは分からない。カーテンが閉まっているから。今日も誰の部屋かは分からず、カーテンを閉めようとして、対面の部屋のカーテンが開いた。

そして、そのカーテンを開けた高町さんと、目があった気がして、慌ててカーテンを閉めて部屋から逃げる。自室に戻り、布団の中で震えていると、階下で玄関の開閉音。話し声が聞こえてきて、誰かが階段を昇りソックもなく私の部屋のドアが開いた。そして、同世代とは思えないほどの力で、布団が剥ぎ取られた。

「えーと……おはようございます？」

「この状況でその挨拶は間違いかな」

ですよねー。正直、高町さんが今まで無いくらいに怖くて、直視できない。だから視線を反らしたんだけど、顔を掴まれて無理矢理戻された。

「高坂さん……」

「な、何でしょうか？」

「ちよっと私と『お話』しようか？」

「お、お手柔らかにお願いします」

「何言ってるの？」

「何言ってるんでしょう？」

どうやら大分テンパっているようだった。私、頑張れ。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

居ない。居そうな部屋は大抵回った筈なのに、目当ての人物はどこにも居なかった。

「どこに居るんだ、アリシアは？」

再び外れだった部屋の戸を閉じて、腰に手を当てる。後探して居ない部屋を何部屋か思い浮かべる。どの部屋もアリシアとは無縁な部屋だ。しかしアルハに聞いても答えが無い以上は、此処はローラー作戦で一部屋ずつ当たって行かなければならぬらしい。

とりあえず一番近くの部屋の戸を開けた。居ない。次。居ない。次……。

「こ、此処まで当たりを引かないのも、まあお約束か」

溜息をつき、最後に残った部屋の戸を開けた。部屋の中に居たの

は目的の人物はいた。珍しい事に端末を、それこそ俺が穿いて来た事に気がつかないほど真剣に弄っているらしい。

少し悩んでから、気配を消して部屋に入った。そして後ろから何をやっているのか覗き込み、アルハの言葉を思い出した。

「バックアップの練習、か」

「……!?!」

初めて見るような俊敏な動きで、端末の画面を隠すように俺から離れた。その時、変なボタンを押してしまったらしく、辺りに電子音が響き始め、これが原因で再び慌て方が悪化して、電子音が止められない。

とにかく落ち着かせようと、電子音を止めて、アリシアの頭を撫でた。暫く撫で続けると、落ち着いたらしく、アリシアは「ごめんね」と謝った。

「いや。俺も邪魔して悪かった」

「確かにいきなり後ろに居た事にはすごくびっくりしたけどさ。声をかけてくれてもよかったのに」

「邪魔したくなかったからな、結果的にしてしまったが」

「気にしないでいいよ、そろそろ休憩だったし。浩樹は？ 修業はどうしたの？」

「今日のノルマはもう終わった。アリシアに話があって探してたんだ」

「話？」

首を傾げるアリシア。俺はと言えば、どうしたものかと内心で同じように首を傾げていた。当初は彼女に悪いと思っても、強引に別の場所に送り、連れていくつもりはなかった。しかし、アルハとの修業でプログラム関係もかなり分かるようになってきたからこそ、彼女が今やっていたプログラムが、戦闘補佐をも視野に入れたものだというのはすぐに分かった。

それだけ、ついに行くつもりなのだろう。押し黙ってしまい、「浩樹？」と声をかけられて、慌てて開いた俺の口から出た言葉は、当初の予定と別の物だった。

「何やってたんだ？ アリシア」

「これ？ 見て分からない？」

「分かるが、一応聞きたい」

「バックアップの訓練用プログラムだよ。浩樹が修業初めてすぐぐらいから始めたの」

「何でまた」

「足引っ張りたくなかったもん、浩樹の」

言葉に詰まった。アリシアはなおも言葉を続けた。

「ごめんね、浩樹。アルハから聞いたんだ。修業完遂したら浩樹がどうするのか。それで、聞いた時に思ったの。浩樹は優しいから、多分私の事を置いてくって言うだろうなって」

「ああ」

「あんまり一緒に居た訳じゃないけど、今の私にとっての家族は浩樹とアルハだけなんだよ。だから、浩樹が行くなら私もついてく。でも、戦闘の役には立てそうにもないから、せめてこっやってバツクアップの訓練だけでもやって行こうかなって。もうすぐ終わるんだよ」

だから、とアリシアは前置きを入れた。顔を上げて、しっかりと俺と目を合わせる。その今にも泣きだしそうで、でも意志の籠った表情を見て、思わず感心した。

アリシアは俺が何の話の為に此处に来たのか分かっていたらしい。アルハに聞いたのか友一瞬思ったが、彼女の顔がそれは違うと言っているようだった。

「浩樹、私の事、連れてって？ 足、引っ張らないように頑張るか
ら。だから」

「……駄目だ」

「っ」

「アリシア。俺だって同じだ。お前の事を家族だと思ってる。だから」

からこそ、俺はアリシアについてきて欲しくない。アリシアには、俺が歩むような道は歩んで欲しくないんだよ」

「それは、私も同じだよ!!」

アリシアが吠えた。俺に突撃して、服を握りしめて。至近距離で俺の目を見て思いの丈をぶつけるように、吠え続ける。

「私だって、浩樹にはそう言う道を選んで欲しくないよ!! 修業終わったら、お母さんとか、フエイトとか!! 浩樹のお友達にだって会ってみたい!! そうやって、浩樹は前の生活に戻って、私もそこに入れればいいなって思うの!! でも違うでしょ? 浩樹は帰らないで、アルハと一緒に旅に出る。私だけ別だなんて嫌だよ!!」

「アリシア!!」

「やだ!!」

「アリシア!!」

「やだ、やだ、やだ!!」

堪え切れなくなって溢れて来た涙を隠すように、俺にしがみついて来た。背に手をまわして、意地でも離れないつもりらしい。

何も言えなくなり、黙ってしまふ。無言の時間が続いて、頭の中に声が響いた。

『折れるしかないんじゃないの？ 浩樹』

『アルハ。でもな』

『アリシアは頑張ってたよ。それは私が保証する。今のプログラムが終われば、足を引く張る事は無いよ』

『それとこれとは』

『話が別？ そうだね。でも、浩樹。置いて行けるの？ 私が言うのもなんだとは思っけど、アリシアは絶対に意志を変えないと思うよ』

『……ああ、そんな気がする』

アルハとの交信をそのままに、俺はアリシアに声をかけた。

524

「アリシア」

「……」

泣いていたからだろう。涙や鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で、アリシアは俺を見上げた。苦笑いしながら、その顔をハンカチで拭い、俺はまたも当初の予定と違う言葉を口にした。

「一緒に行こう、アリシア」

「え？」

「でも、条件はつける。アリシアの仕事はバックアップ。危なくなつたらすぐに逃げる事。たとえ俺がピンチでも、だ。いいな？」

「……分かった」

頷くアリシアに俺は頷き返した。

「じゃあ、これ早く終わらせるね!！」

再び端末に向かったアリシアの背中に「夕飯、先に作っておくかな」と声をかけて、俺は外に出た。

第二十七話 高坂のプロローグ 前編（後書き）

佳奈になのはどの O H A N A S I フラグ立ちましたね。ごま
だれです。

奈々の代わりに出てきたのは高坂佳奈。じいちゃんの血縁で孫でし
た。浩樹との関係は一応叔父と甥になります。

近くに住んでいるというなのはアドバンテージを奪った佳奈。今
後どうなってしまうのか……。

今回はここまでです、

読んで下さってありがとうございました。

以上、ごまだれでした。

第二十八話 高坂のプロローグ 後編（前書き）

前後編合わせて33KB。多いのか少ないのか……

第二十八話 高坂のプロローグ 後編

Side: 佳奈

私が居る場所は何故か高坂君の部屋だった。そこで慣れない正座をしている。対面に座っているのは高町さん。私と同じように正座をしているが、慣れているのか、辛そうには見えない。思わず凄いなあと感心してしまう。

「高坂さん」

「ひゃい!？」

別の事を考えていたからすぐに反応できず、現実逃避して変な声が出てしまった。

高町さんは、「まあ、色々聞きたいから、答えてね」とそれだけ言っつて、圧倒されている私は首を何度も縦に振ることで答えた。

「じゃあまず。何でこの家に居るの?」

「へ? ああ、それはここに住んでるからですけど……」

「いつから?」

「転校してきた前の日です」

そうなんだ、と呟いて、何事かを考え始めた高町さん。居心地の悪い時間が続く。

「でも、浩樹君から姉か妹がいるなんて、聞いた事無いよ？」

「はい？ それは私も同じですけど」

「どういう事？」

「私、私以外に孫がいるなんて聞いた事無いです。おじいちゃんはお母さんのお父さんなんですけど、お母さんは一人っ子だった筈ですから」

「でも、高坂のおじいちゃんから、孫の浩樹だって紹介されたよ？」

「そうですか……」

「どういう事だろう。もしかして誘拐でもして来たとか？ ……あれえないよね。おじいちゃんいい人だもん。高町さんも不思議そうだったが、何かに気がついたように顔を上げた。

「そんな事はどうでもいいんだよ！！」

「ええ！？」

「どうでもいいの！？」 かなりどうでもよくない事の気がするんだ

けど!？」

「そんな事より高坂さん!! 紛らわしいから佳奈ちゃんって呼ぶけど!！」

「な、何と紛らわしいんですか？」

「何で浩樹君の部屋に居たの!！」

「やっぱりそれでs」答えて!！」は、はい!！」

と、言われてもだ。何で此処に居たのかと聞かれれば

「い、居たかったからです」

としか答えようがないのだ。かなり肌に突き刺さる沈黙が続く。そして、かなり低い声で「納得できると思う?」「と尋ねて来た。間髪をいれず首を横に振る。

「だよね」

「は、はい」

「じゃあ、改めて聞くけど、どうして浩樹君の部屋に居たの?」

「そ、それは……」

少し悩んで、思いつく。これはもしかしたらチャンスなのかもしれない。上手くいけば、高町さんと仲直り（？）出来るかもしれない。

意気込み、そして口を開いた。

「考え事してたんです。自分の部屋より落ち着くから」

「落ち着くって気持ちには同感だけど、何考えてたの？」

「た」

「……？」

「高町さんとかバニングスさんに、どうしたら謝れるかなって」

「はい？」

言った。言ってしまった。頑張れ私と意気込み、話し続けた。

「て、転校した初日に皆さんの気に障る事を言ってしまったから。話しかけづらくて、どうやって謝ろうかなって考えてたんです」

「そうだったんだ」

「じめんなさい！ー！ 高町さん！ー！」

正座をしたままだったから、土下座みたいになった。私のその様子にびっくりしたのか、今度は高町さんが慌て始めた。

「い、いいよそんな！ 頭上げてよ佳奈ちゃん！！　そもそも、何も知らなかったんだからしょうがないって！！」

「でも、皆さんを不快にしまった事実は変わらないですから！！」

「あ、うう。ねえ、佳奈ちゃん。頭上げて、私の話を聞いてほしいな」

言われた通り、頭を上げた。そして、近づいて来た高町さんに両手を握りしめられた。

「えと、佳奈ちゃん」

「はい」

「私も、ごめんなさい」

「何で、高町さんが謝るんですか？」

「知らなかったのに、あの時、突き放すような事言ったから。それに、知ってたんだ私達。佳奈ちゃんが、私達に謝ろうとしてくれたの」

「どうして……？」

「佳奈ちゃんのお友達の人が、私達に教えてくれたの。佳奈ちゃんが浩樹君の事調べた後、どうやって謝ろうか考えてるって。だから

謝ったら許してあげてともお願いされた」

今度こそ何も言えなくなった。

「でも、頼まれたからってわけじゃない。私は自分が悪かったって失敗したって思ってるし、佳奈ちゃんは自分が失敗したって思ってるんだよね？」

「はい」

「前にね。浩樹君が言ってくれたんだ。どっちも失敗したって思ってるなら、それはどっちも失敗したの。だから、あんまり悩まないで、次に活かそうって」

「それって……」

「佳奈ちゃんとは和解したらお友達になりたいなって思ってたんだ。アリサちゃんとすずかちゃんも。だから、良かったら私と友達になつて？」

「っ、はい!!」

「あと、名前で呼んで欲しいな？」

「ごめんなさい」

「ええ!？」

本当にごめんなさい、高町さん。それは無理です。今は無理です。そのうち慣れるまで待ってくれませんか？

そんな事をお願いしたら、敬語を止めるという条件で、しびしび

ながらも高町さんは了承してくれた。

「さて、今日は帰るね？」

「あ、はい。じゃなくて、うん。ごめんね？ お持て成しも出来なくって」

「急に來たんだもん。気にしなくていいよ」

玄関まで高町さんを見送って、戸を開けた所で、高町さんがもう一度こちらを振り返った。

「じゃあ、また明日。佳奈ちゃん」

「うん。また明日。高町さん」

手を振る彼女に振り返して、見えなくなるまで見送ってから、私は戸を閉じて、鍵を閉めた。

携帯を取り出して、電話帳に追加された新たな名前を見て、思わず顔がほころぶ。

久しぶりに、今日はよく眠れそうだった。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

翌日。普段俺が修業の為に使う部屋には珍しく俺以外の影があった。まあアリシア以外、ありえないのだが。昨日の晩に話を聞いた所、昨日で完璧にプログラムの全工程を終了したらしく、今日は俺の試験の為に応援団ということらしい。

「がんばれ」

「ああ、頑張るが……、そうだ。アリシア」

「何？」

「準備をしておいて貰えないか？」

「準備？」

「旅のだ。これが終わったらすぐに出る」

『おお、自信满满だね』

俺とアリシアの会話に割り込むようにしてアルハが会話に参加して来た。視線をアリシアから、モニターの方に移す。そこには先程まで書かれていなかった、『修了検定試験』の文字があった。

「当然だろう。為せば成る。何事もな」

『実力が伴ってればね』

「分かって言ってるさ。さっさと始めよう、アルハ。アリシア、旅の準備は頼んだ」

「了解。頑張ってるね、浩樹」

「ああ」

部屋から出ていくアリシアを見送り、俺はモニターに視線を戻した。底に書いてあった注意事項をさっさと読み終える。

『準備は出来た？』

「いつでも、アルハ」

『じゃあ、試験開始』

足元に穴があき、体が落下を始めた。

S i d e o u t

S i d e : 佳奈

寝る前に貰った、高町さんからのお休みメールのおかげなのか、本当にぐっすり眠る事が出来た翌日。門から外に出ると、高町さんの家の前で高町さんが待っていた。

出てくる時間が被ったのかとも思ったけど、私が出た時間はいつもと同じ高町さんと会わない為の時間だった。だから高町さんと会うなんて無い筈だ。それでも会ったという事はつまり……

「おはよう、佳奈ちゃん」

「お、おはよう、高町さん。もしかして、待っていてくれた、とか？」
「少し」

「じめんなさい……」

思いつきり百八十度曲げる勢いで頭を下げた。「ええ!？」と高町さんが驚く。

「そんな！ わざわざ、私なんかの為に、待たせるなんて！ 本当にごめんなさい……」

「そこまで謝らなくていいよ!？ 私が勝手に待ってたんだし!! っていうか、頭上げて!! 早く行かないと、バスに間に合わないよ……」

高町さんに言われて、頭を上げて携帯で時間を確認した。うん、急がないといけならしい。それもこれもすべて

「私の性で」

「もういいからああああ!!」

私の言葉を遮るように、高町さんが叫び、そして私の手を掴んで走り始めた。

慌ててついて行き、暫く走ると、速度的に勝っていた私が高町さんを抜いて、逆に高町さんを引つ張る形になった。ギリギリバスには間に合い、飛び乗る。

「だ、大丈夫？ 高町さん？」

「だい、じょう、ぶ……」

全く大丈夫には見えない。どこかに座らせられないかと席を探している、最後尾の席でバニングスさんと月村さんが手招きをしていた。

少し悩んで高町さんをそこまで連れていき、バニングスさん達の間座らせる。そして私がそこを離れようとする、手を引かれてバニングスさんの隣に座る事になった。

「どこ行く気よ、あんた」

手を引つ張つた主であるバニングスさんが若干怖い顔で私を睨む。

「え、ええと、移動しようかなって」

「なのはから聞いてるわ。あんたが謝つた事とか全部ね」

「へ？」

月村さんの方を見ると、バニングスさんに同意するように、首を縦に振つた。バニングスさんに視線を戻す。

「悪かつたわ、佳奈。あんな態度とって」

「ごめんね、佳奈ちゃん」

「あ、いえ。こちらこそ、ごめんなさい。あんな事言つて」

「いいわよ。知らなかつたんだし。なのはが許したなら、私達も許すわ」

「うん」

「それに、あんた、なのはと友達になつたんでしよう？ 昨日、なのはから聞いたわ。友達の友達は友達って事で、私達とも友達になりなさい」

「は、はい！」

「後、私達の事はな」
「ごめんなさい」
「なのはに聞いた通りね。ま

あ、いいわ。とりあえず、敬語は禁止ね。じゃあ、よろしくね、佳奈」

「よろしくね、佳奈ちゃん」

「う、うん！ よろしく、バニングスさん、月村さん」

いつか名前で呼べればいいなと思う私と、新しく友達になってくれた高町さんとバニングスさんと月村さんを乗せて、バスは学校に向かって走っていた。

Side out

Side：浩樹

試験終了後。俺はアリシアと一緒に旅の準備をしていた。

「自信あるの？」

「手ごたえはある。多分問題無い」

そんな話をしている間に準備は終わり、ぼんやりしていると、アルハに呼ばれてアリシアと共に、先程の部屋に移動した。

部屋に入りモニターを見ると、『合格』の二文字。

『おめでとー!!』

「すげえ嬉しくない合格発表な」

「ほんとだね。探す必要もないし、焦らされた訳でもないし」

『……さあ、浩樹は果たして合格したのか!!』

モニターから文字が消えた。アリシアと目を見合わせ、同時に溜息をつき、アルハを無視して話を進める事にした。

「とりあえず、アリシア」

「何？」

「アルハから聞いているだろうが、俺からも旅の目的を説明するから、聞いて欲しい」

「うん」

『聞いてよ!! ちよっと悪ぶざけしただけじゃない!!』

「悪質」

「流石に笑えないかな」

『ごめんなさい』

「……まあ、いいよ。とにかく、戦闘で使える最低限のレベルには達した、そう思っているのか？」

『うん。実際はデバイスのサポートもあるし、戦闘で使うなら慣れもあるから』

「デバイス？」

『うん。準備したんだよ』

そう言うのと、部屋の中央に穴があき、そこから台が浮かび上がってきた。その上にはレイジングハートと似た球状の群青色の宝石に紐がついていた。

『ストレージデバイス。デバイス状態の形状と名称は決まってるよ。ま、ストレージだから名前は無くても困らないけど。形状の方は決めてね』

「ああ。了解」

近づいて、それを手に取る。名前を考えて、思いつかなかったからすぐに諦めた。まあ、ぼちぼち決めていく事にしよう。

形状はすぐに思いつき、イメージしたまま「起動」と呟くとデバイスの形状が腕輪に変わった。シルバーのリングの途中に群青色の宝石が挟んであるだけというシンプルな形。

何時の間にか覗き込んでいたアリシアが、いいなあとぼそりと呟いた。

「アルハ、私には？」

『無いよ』

「無いの!？」

『冗談だよ。と言っても、通信と電子機器の制御用デバイスだから、戦闘力は皆無だよ』

アルハがそう言うと、デバイスが置かれていた台が沈み、再び上がってきた。其処に置かれていたのは、俺のデバイスが起動した時と同じく腕輪。違いと言えば宝石がなくシルバーのみという事だろうか。しかし、アリシアの手首に対しては大分緩い。現に、アリシアがデバイスを手を入れるが、かなりブカブカだった。

「アルハ、これ緩いよ」

『ちよつと待つて。浩樹のも含めて所有者登録が……終わったよ。これで自由に大きさは弄れる筈』

「そうなの？」

そう呟き、アリシアが目を閉じた。すると、腕輪がアリシアの腕にぴったりな大きさに縮んだ。「おお」とアリシアと同じように思わず感心してしまう。

得意気なアルハが、更に解説を続けた。

『アリシアのデバイスは望めば仮想ディスプレイとキーボードが出

てくるよ』

「ちよつと待って」

再び目を閉じる。すると、アルハを囲むように鍵盤のようなキーボードとディスプレイが出て来た。

再び「おお」。

『浩樹の方はアリシアと同じ仮想ディスプレイとキーボード。それに加えて他にもデバイスの形状を二つまでは保存できるから、考えておいてね』

「了解」

答えつつ、アリシア同様仮想ディスプレイとキーボードを展開。少し考えてみると、キーボードは形状を変えたり、ディスプレイが増えた。

それを見たアリシアが、試してみたらしく、同じようにディスプレイなどが増えた

『説明する前にやらないでよー!!』

「あ、すまん。出来るのかなって」

「ごめんね、アルハ？」

『うう。もういいよ。私の断片って訳じゃないけど、私の意思表示にもそのデバイスは使うから、なくさないでね？』

「了解」

『大丈夫だとは思うけど、何か不安だなあ』

「まあまあ。それより、すぐに出るつもりだけど、アルハの準備は？」

『準備することなんてないからね。それより、そっちも大丈夫？』

いくら私が招待したって、行ける場所は限られてるから、アルハザードは一度出たら戻って来れないよ』

「大丈夫」

『ならいいけどね』

アリシアと同じタイミングで答える。そもそも持ってきて来ている物がほとんどないから、あまり関係ない。旅の準備だって、ぼちぼち持っていく物を幾らかまとめたくらいだ。

アルハの話が終わった。次は俺の番だ。さて、と前置きを入れて、アリシアの方を向き直った。

「アリシア。さっき言った通り、旅の目的。俺の口からもう一度説明するぞ」

「うん」

「俺達の旅の目的は仇討ちだ」

そう、俺達の旅の目的。アルハと初めて出会った時、アルハから聞き出した事。俺の両親について。そして、その時に約束もした。

「アルハの初めての親友でもあった俺の生みの親。その人達を殺した奴を俺は許さない」

「でも、浩樹には生みの親の記憶ないよね？」

「まあな。でも、その人達がいたおかげで、俺は皆に会えたんだ」

なのはにアリサ。すずかにフェイトにはやて。アリシアやアルハもそうだ。

「だからこそ、俺は許せないんだ。俺が感謝したい人を殺された事。アリシアの言う通り、記憶は無いけど、俺の家族だから」

「でも、当てるはあるの？」

『当然だよ』

その言葉に答えたのはアルハだった。そしてモニターにあらゆる次元のあらゆる座標が表示される。

『浩樹の両親が関わっていた研究をしていた研究所の座標だよ』
「それって、此处全部？」
『うん。まあでも、調べながらある程度は絞れる筈だよ』
「先は長いが、関係ない。さて、アリシア。最終確認だ」
「え？」
「先は長いぞ。ついてくるのか？」
「うん」

迷うことなく、アリシアは即答した。

「言ったよ。私の家族は浩樹とアルハだもん。浩樹が家族の為に戦うなら、私も戦う」
「ああ、ありがとな。アリシア」
『それじゃあ、二人とも、準備はいい？』
「ああ」
「うん。大丈夫」
『じゃあ浩樹。門出に一言』

いきなり振られる。少し悩む。アリシアの顔と世話になった部屋を見て、まとめた言葉を頭の中で反芻して頷き、声に出した。

「アルハ。アリシア。俺の旅は自己満足の為の旅になると思う」

『その通りだけどね』

「アルハはアルハ自身の親友の為でもあるのに何でそう言う事を言うかな」

「アルハの言う通りだよ。それでも、俺は行くって決めた。でも、俺には微力しかないから。だから、助けて欲しい」

『そう言う約束だよ』

「うん！」

「ああ、ありがとう。アルハ、アリシア。……よし、行こう」

足元に時空転送用の魔法陣を展開する。修業の副産物的に出来たプログラム構成の最良化によって、最低限の魔力でより遠くに跳べるように改良した物。

それを展開して、跳ぶ。

「行くぞ」

そして、二か月ほどお世話になったこの場所に、俺とアリシアは別れを告げた。

第二十八話 高坂のプロローグ 後編（後書き）

昨日の分を合わせて、一日に二つ投稿。ごまだれです。

アルハザード組がアルハザードを出て、旅に出ました。佳奈はなのはたちと仲良くなれました。名字で呼ぶは変わりませんが。

GEもそうだけど、旅の理由に仇討ちが多いなあと思う今日この頃。

追記ですが、明日の連載はお休みします。明後日に落としたくないテストがあるので追い込みに入ります。

今回はここまでです。

読んで下さってありがとうございます。

以上、ごまだれでした。

第二十九話 くアリシアの日記（前書き）

予定変更

第二十九話　〜アリシアの日記〜

一日目　天気：晴れ

デバイスの操作に慣れる事と旅の記録という事で、今日から日記をつける事にした。

今居るのは管理外の無人世界。浩樹とアルハ以外の誰かに見られたら困るから、正確な座標などは書いておかないけど。

着いた時にはこの世界はもう夕刻で、今からの侵入は危険と判断した浩樹が、とりあえず一泊しようと提案。でも無人世界だから宿泊施設なんて無く、当然のように野宿。キャンプみたいで、少しだけワクワクした。

一応野外炊飯用の鍋とかテントとかそういう物は何故かアルハザードにあったから、それを持って来たけど、食材などは保存のきくもの以外は皆無。どうするのかと思っていたら浩樹が森に入っ行き、一時間ほどで戻って来た時には両手いっぱい食料を抱えていた。曰く「じいちゃんに食べそうな物と食べなさそうな物の違いは教わったからな」とのこと。

浩樹が食材を持って来たのだから私が作るうと思っただけど、せっかく取ってきた物を台無しにしたくないと浩樹が言ったから、結局いつも通り手伝いだけ。

既に足手まといな気がするよ。こういう時の料理位は私が作れるようにならないとね。

でもやっぱり浩樹の料理は美味しい。いつかこれくらい作れるよ

うになるかな？

二日目 天気：晴れ

一晩過ごした私達は出発前にアルハが見せたりリストの一番上に書いてあった座標に居た。遠くから暫く浩樹と一緒に手がかりがある筈の研究所を見て、先ずは浩樹が侵入。一時間ほどで戻ってきた浩樹が今度は私を連れてその研究所に入った。

何を警戒する訳でもなくズカズカ入っていく浩樹の後を追って、私は気がついた。この研究所は無人だった。既に放棄されてから大分経つのだろう。室内にまで蔦が伸びていたりしていた。

暫く歩いて、ある一室に辿り着くと、浩樹が端末に触った。うんともすんとも言わず、溜息を一つ。その後浩樹に指示されて、私は端末へアクセス。浩樹がディスクやら資料を探しに行った。

幾つかの破損データなどを回収していると、浩樹が戻ってきた。どうやら空振りだったらしく、浮かんでいるのは落胆。それでも、私が破損データを幾らか回収した事を告げると、笑いながら頭を撫でてくれた。エヘヘ。

その後は昨日と同じ。昨日と同じキャンプで浩樹が食材の回収と調理をしている間に、私がデータの復元をしていた。生憎と復元したデータは大したものではなかった。

明日には別の世界に行くらしい。浩樹の料理は今日も美味しかった。

三日目 天気：晴れ

移動した先は同じく管理外世界だったけど、前回と違って有人だった。魔法文化はなかったけど。

有人だったから街はあったのはいいんだけど、生憎と此処で使えるお金はなかった。少し悩んだ浩樹が変身魔法で成人に変身して、金策に走る事になった。その間、私はカフェの一角でバックアップの復讐と料理の勉強をしていた。時々ウエイターさんがこっちに怪しい視線を向けるのは辛かったよ。

日が沈むころにようやく戻ってきた浩樹は、バテバテだった。どうしたの？ と尋ねたら、この世界には魔法が無いのにドラゴンとかそういうファンタジーな生物は存在して居たみたいで。浩樹のやった仕事は複数のチームとはいえ、それを着の身着のままて狩ることだったらしい。よく生きてたね？

でも、その分、報酬は弾んだようで、その得た報酬で今日と明日の分のホテルを取るとさっさと寝てしまった。流石に疲れたみたい。お疲れ様、浩樹。

夕飯は美味しかったけど、浩樹ほどじゃなかったかな。

四日目 天気：快晴

同じ次元世界。今日は日が出ている間は浩樹が昨日稼いだ残りのお金を使って、色々な物資を調達した。携帯食料とか。アルハザードには食料はあったって言うても、そこまで無かったし。

それでホテルに帰りがけに露天商がたくさんいる通りを通った。浩樹がそこら辺に居た一般の人に聞いたら、今日が特別という訳じやなくて、何時もこんな感じらしい。

色々な露店を冷やかしながら歩いていたら、私の目が一点に止まって動かなくなった。浩樹のデバイスである腕輪と同じ、シルバーのリングに群青色の宝石が付いた指輪。それが一発で私の心を掴んだ。

私がそれをじっと見てみると、横から手が伸びて、それを手に取って店の人に渡した。手の主は浩樹だった。お金を払い、浩樹は店の人からそれを受け取ると、私に渡した。どうしたらいいかわからないでいると、店の人から「着けてやんな」と言われた浩樹が、私の手を取って指にはめた。流石に左手の薬指じゃなかったけど。

「いいの？」と尋ねた私に、「旅についてきてくれたお礼だ」と浩樹は答えたからお礼を言って貰う事にした。大事にしよ。

夕刻になって、浩樹はこの世界にある研究所の下見に行った。二時間で戻ると言った浩樹はなかなか帰って来ず、私が夕飯を食べ終わった頃にようやく戻ってきた。

話を聞くと、見るだけだったけど、動きが無いから近づいてみたら既に放棄されていたらしい。データも消されていたから、しょうがなく破損データなどの抽出だけして戻って来たそうだ。

浩樹が夕飯を食べている間に私が復元したけど、やはり何もなかった。

夕飯の味は昨日と同じ。浩樹の料理が食べたいな。

五日目 天気：雨

管理外、無人世界。天気は生憎の雨。でも濡れなかったのは、浩樹の得たハッキング能力の副産物的に得た能力の一つで、窒素の塊を作ってそれを空中に固定。屋根にしたとか。アル八曰く『マテリアル・ハイ』って言ってたけど、既にハッキングじゃないよね？ってそう言ったら浩樹も渋い顔をした。アル八は『あくまでイメージなんだよ！！』って力説してたけど。分かり辛いなあ。

それはそうと、今日はこの次元に来てすぐ、研究所に下見に行った。いつもと違う様子だったからか、浩樹はいつも以上に慎重で、私にも遠くから見ているだけとそう言った。戦闘には参加しない約束だもんね。

そして夜。浩樹が侵入した。後で聞いた話だと、浩樹が侵入した段階で、防衛システムは生きていたらしく、ある程度の反撃はされたそう。でも、アル八が言う所のハッキング能力で防衛システムを無効化。幸いシステム以外に妨害してきそうな気配が無かったら、私が呼ばれて、いつも通り情報を回収。

今回は当たりでもなければはずれでもなかったらしく、重要な単語と計画名が出て来たから、それを日記の最後に書いておく。

今日見つけた重要そうな単語

戦闘機人 プロジェクトF 魔導師生成計画

十日目 天気：晴れ

五日目以降当たりは無かった。というのも、アルハのリストがそもそも他の場所から盗んだもので、防衛の為なのか五日目の座標以降には研究所すらなかったからだ。そして今居るのは有人の管理外世界。

はずれが続いているからか、浩樹の元気が無く、この世界に来ると、金策に行つて来るとだけ言つて、さっさと成人に変身するとどこかに行つてしまった。

私とは言えば、いつものようにカフェの一角で、チャットのようにアルハと話していた。どうやったら、浩樹が元気になるかな？という質問に対して、アルハの解答は裸でベッドに潜り込めばいいよと、本気で言ってるのかこの腐れAIはというものだった。

そう思っていた筈なのに、チャットでなんか正論じみた事を言われているうちに、本当にそれがあっているような気がして来て混乱して来た。その混乱は、浩樹が私と合流してチェックインしてから、浩樹が眠ってから続き、気が付くと私は生まれたままの姿になっていた。

今この日記を書いている段階でその姿だ。という訳で、今から浩樹のベッドに潜り込みます。

結果は明日の日記で報告するね。

十一日目 天気：快晴

同次元世界。お外の天気はいいけれど、私の心は思いつきりブルブルでした。グスン。

昨日ベッドに潜り込んだのは良かったんだけど、私はそこからどうしていいか分からなくて、浩樹の温もりに安心したからか、気がついたら眠ってしまったていて。朝になって浩樹に叩き起されて、そのまま説教されました。

いくら元気づける目的だったとはいえ、流石に裸は不味かったみたい。気持ちは嬉しいが行為はいただけないらしかった。

そんな私はお説教のあと、明日に備えて下見に行ってくると言っ出掛けた浩樹とは別行動で、散歩をしていた時に出会いがあった。

どうやら私が迷子なのではと心配して話しかけて来てくれたらしい、その二人の女性は私みたいに腰辺りまで髪を伸ばしていた。

それから、何故か一緒に散歩をしつつ、ウインドウショッピングをする事になって、もし何かあったら浩樹にすぐに連絡できるように準備しつつ、彼女達について歩いていった。服飾店に入った時なんかに着せ替え人形のように色々な服を着せられて若干疲れた。

帰りがけに、その二人の名前を聞いた。クイント・ナカジマさんとメガーヌ・アルピーノさんというらしい。また会えるかな。

帰宅後。帰って来ていた浩樹と話をした。研究所は活きているらしい。もしかしたら何か情報が手に入るかも、とのこと。

突入は翌日夜。その為に、今夜はお休みなさい。

第二十九話 くアリシアの日記く（後書き）

今日はお休みだったはずなのに、気づいたら書いてたZ E ごま
だれです。

一期と違い、テンポ重視な所があるので、アルハザ組の旅をダイジ
エスト？風にお送りしました。

ちなみに『マテリアル・ハイ』はジャンプに連載中のP S Y R E N
・サイレン・での技というか能力です。原作では空気中の大気を超
圧縮して自分の思い通りの形状に固めることが出来る能力ですが、
ここでは窒素限定にしました。

窒素限定の理由はまあ、浩樹がクロスレンジ主体の戦闘って言えば、
もしかしたら分かる人もいるかなあ、なんて。

今回は以上です。

ここまで読んで下さってありがとうございました

以上、ごまだれでした。

すいません、追記です

凱龍輝さん、感想、ありがとうございました

第三十話 く邂逅 前編く(前書き)

多分前中後編になると思います

第三十話 く邂逅 前編く

Side: 浩樹

今の俺の心情とは裏腹に、いい天気とは程遠いけど、悪い天気でもない曇り。侵入する予定の今日としては星などが隠れていい感じに暗闇になるだろうから多分最良の天気だ。ま、あくまで個人的見解だけ。

そんな今日の空模様を眺めながら今晚の侵入のシミュレートをしている俺がいるのは、先日から滞在している街の一角だった。朝の内こそ、部屋でおとなしくシミュレートをしていたんだけど、流石に厭きがきて今は散歩という非常に軽い運動をしながら行っている。

「ん、よし。シミュレート終わり」

伸びをしながら道を進み、立ち止まる。右を見て左を見て。最後に後ろを見て、溜息を一つついた。

「どっつだろ、っ」

すっかり迷子になっていた。どうやら考え事をしながら考えていた事が仇となつたらしい。そういえば海鳴に居た頃も図書館で本を借りて、読みながら帰っていると気がついたら知らない場所に居た事があつたなあ……まあ、あそこならある程度移動すれば知つたところに出られたんだけどね。

でもここではそうはいかない。とにかく分かる所まで戻ろうと思ひ、振り返ろうとして、その足が止まつた。何かの違和感を感じ、先程まで進行していた方向を見る。当然の如く人が行きかう中、一際目立つ巨躯の男性が一人、此方に向かつて歩いて来ていた。その男性も、俺の視線に気が付いたらしく、此方を見た。

視線が交差し、共に相手の方に向かつて歩き、互いの一メートルほど手前で、立ち止まつた。俺の身長の一メートル近くあるような気がした彼の体は、実際そこまで無く二メートルオーバー程だろうか。たがいに視線を合わせる為、俺は見上げ、彼は見下ろす。

しばしの時間が過ぎ、俺の後方で「ドロボー!!」と誰かが叫び、俺達はそちらの方を見た。男性が一人地面に転んでおり、此方に向かつてチンピラ風の男が二人、走ってきた。

「一人」

伝わったかどうかは分からないが、一方的にそう告げ、男達の方に一気に近づき、後ろを走っていた荷物を持った男の顔面に膝で一撃を入れる。こちらに向かつて走っていたからこそ、カウンター気

味にはいったその一撃で、男の一人は完全に伸びた。

もう一人の男も、同じく近づいてきていた巨躯の男性に当て身をされて気絶した。

へえ、と思わず感心してしまう。一目見た時に強いなとは思ったけど、もしかしたら想像以上かもしれない。

もし戦えた時のイメージをしつつ、とりあえず荷物を拾って、此方に向かって来る、転んでいた男性に渡した。

「ああ、ありがとうございます！ 大切なものだったんです、助かりました！」

ふとある事を思い出した。今の俺はこの世界で身分を証明できる物を持ち合わせていない。もしかしたら面倒な事になるかもしれない。そう思ってしまう、頭を下げて来てくれる人には悪いと思ったけど、その人に軽く頭を下げるだけで、鞆の持ち主ともう一人。巨躯の男性の視線を受けながら、さっさとその場を去った。

それから数時間経って、遅めの昼食をとる為とアリシアが昨日知り合ったという女性と一緒に来たらしく、美味しかったから食べてみなよと言われたから、俺はあるカフェに来ていた。アリシアに進められたパスタをのんびり食べつつ、どうにかして味を奪えないか

なあと模索していると、周りに席が空いているにも拘らず、対面の席に一人座った。

顔を上げ、そこに居たのは巨軀の男。興味が無い訳ではなかったけど、今は料理の方に興味があつたから特に何も言わず、食事を続けた。

それも終わり、再び顔を上げると、男はまだそこに居た。

「あの、何か？」

「……」

尋ねた直後に殺気をあてられ、テーブルの上から食事で使っていた食器と手に持って、男に向かって思いきり机を蹴った。勢いのまま椅子から離れて次手に備える。男はその机を受け止めると、殺気が消し、机を元の位置に戻した。

余りにも目立ってしまったからさっさと立ち去りたくもあった。けど

「どついつつもりですか？」

席に戻る。手に持っていた食器を机に置き、頬杖をついて男の方を見る。男は質問には答えず、「良く鍛えている」と何故か俺を褒めた。

「君のような若者が居れば、安心なのだがな」
「訳分からないです」

俺のその言葉に、男は何も答えない。近くに置いてあったレシピを手に取ると、店員に俺と同じ物を頼んだ。

溜息をついて、席を立つ。そこで、ある事を忘れていた事を思い出し、男に言った。

「高坂浩樹です」
「……ゼスト。ゼスト・グランガイツ」

お互いにそれだけの自己紹介をして、俺はその場を離れた。

夜。結局一日中部屋に居たらしいアリシアと合流した。適当に腰かけ、今晚の予定について話し始める。

「まずは昨日の下見の結果。昨日も大まかには話したけど、もう少し詳しく説明するな」

「うん」

「よし。まず防衛システム。これは生きてる。内側だけじゃなくて外側にも防衛用の機械兵がいるってくらいだ。今までで一番嚴重。多分……いや。間違いなく当たりだ」

「自信あるの？」

「ああ、まあその根拠は後で話す。続けるな。外から見た感じだが、防衛システムは三種。さっきも言った機械兵。設置型の質量兵器。そしてセンサー系だな。一番厄介なのはこれかもしれん」

「どうして？」

アリシアの問いに対し、昨日のうちにまとめた資料をデバイスのディスプレイに表示して、昨日の事を思い出しながら、そう告げる。

「機械兵は自身への衝撃が目当たりにある多分熱映像装置が一定量の熱を捕えるかで発動。質量兵器は一定の範囲内に熱源反応があれば発動する」

「……ごめん。それはどうやって調べたの？」

「昨日の下見の時に色々やったからな。続けるぞ。そしてセンサー系なんだが、これは直接的な攻撃力は無いけど一つでもかかったら機械兵と質量兵器全て敵に回した揚句、防火用シャッターみたいな物まで下りてきて閉じ込めにかかる始末だ」

「閉じ込められたの？」

「映らないように機械兵に近づいた筈なのに、強制発動してシャッターが閉まつたり色々あったんだ。閉じ込められはしなかったが。追って来た機械兵を撒いた後、しばらく見てシャッターが開いたりしてたから、多分大丈夫だと思う。それに人の気配はなかったから、多分無人だな」

アリシアを見ると、凄く難しい顔をしていた。

「どうした？」

「浩樹。久しぶりに手掛かりが入るかもしれないからって無茶し過ぎだよ」

「……そうだな。気をつける」

「まったく。それで？ プランは？」

「大まかな所はいつもと同じ。昨日の下見のおかげで熱源を隠せるようにバリアジャケットを調整しといたからな。後はセンサーに引っかかるなければいいんだが」

「う、うん……？」

流石にそればかりはなんとも言えない様子のアリシア。構わず言葉を続けた。

「俺が侵入。防衛システムを終了させるのとの安全を保護したら、アリシアを呼ぶ。それまではいつも通り、幾らか離れた場所でサーチャーを飛ばして、外から誰か来ないか見張っていてくれ」

「了解」

「よし。じゃあ、それくらい。……今回は当たりって言ったよな？」

「へ？ うん。言ったね」

「もしかしたら今までで一番面倒かもしれない。俺達以外にあそこを調べようとしている人達が居そうだからな」

思い出すのは、昼間に出会った巨躯の男性。昼食後、席を離れて暫く行った所で、どうしても気になった違和感をアル八に調べて貰った所、魔導師だった。魔法文化が無いこの次元世界に居た魔導師。勿論なののように、いくら魔法文化が無いとはいえ、魔導師が産まれる事はある。

だが、魔導師云々以前に、昼食の席でぶつけられた殺気と、突然飛んで来た机を確実に対処して見せたあの實力。

「どうしてそんな風に思うの？」

「ああ、昼間に只者じゃ絶対ない魔導師かもしれない男にあった」

「それって……」

「言っただろ？ 俺達と同じかもしれないって」

情報が無い事もあるが、それ以外に思いつかない。あの人と戦う

事をシミュレートしたけど、もしかしたら無駄にならないかもしれないな。

「出会った場合、極力戦闘行動は避ける。負けはないとは思うが、足止めは間違いなくされるからな。仲間が出てくる状況は避けたい。つーわけで、アリシア」

「うん」

「サーチャーの数はいつもより多めで。侵入があった場合の報告は最優先。それに侵入があったらすぐにその場を撤退しろ。いいな？」

「了解」

「俺はデータを取れるだけ取って、即離脱。戦闘はなるべく避けて、アリシアと合流するから。その後はすぐに時空転送でその場を離れる」

コクリと首を縦に振るアリシアと最後に合流地点の確認をして、俺達は最後にお互いに装備を確認しあうと、頷きあって部屋を出た。

昼間考えた通り月も星も隠れ、暗雲が空を覆っていた。だからこそ、俺達は気配を消した誰に、俺達が出立する瞬間を見られていた事に気が付かなかった。

Side out

Side:クイント

少し気になる事があるらしく、予定の時間を過ぎても出かけていたゼスト隊長が部屋に戻ってきた。

「すまない。遅くなった」

「いえ。何かあったんですか？」

「予定を繰り上げる。すぐに出るぞ」

私の言葉に答えず、ゼスト隊長はそう言つとデバイスを手に取つた。訳が分からなかったが、とりあえず同じようにメガー又共々、デバイスを手に取る。

「行くぞ」

そう言い、私達はそこを出立した。

第三十話 へ邂逅 前編へ（後書き）

間に合わなかった……ごまだれです。

もう一度。凱龍輝様。感想、ありがとうございます。

White Seal様、思っていらっしやるとおりです。

既に11時以降は次の日だよなあ、とは思っていますが、旦那の口調が分からなかったのと旦那と浩樹が以上に絡ませづらかったので時間がかりました。すみません。

次回は久々に戦闘です。

ここまで読んで下さってありがとうございます

以上、ごまだれでした。

第三十一話 〱邂逅 中編〱（前書き）

あれ？ バトルに入れると思ったのに？

あらずじなんて物を書いてみました

第三十一話 邂逅 中編

『前回のあらすじ』

「どこだろ、こゝ」

「あの、何か？」

「……」

「良く鍛えている」

「高坂浩樹です」

「……ゼスト。ゼスト・グランガイツ」

「自信あるの？」

「……そうだな。気をつける」

「それって……」

「俺はデータを取れるだけ取って、即離脱。戦闘はなるべく避けて、アリシアと合流するから。その後はすぐに時空転送でその場を離れる」

「行くぞ」

Side：浩樹

アリシアを所定の位置まで送った後、俺はセンサーに引っかからない高さから、研究所を見下ろしていた。

昨日との変化はない。つまり抜け道らしいものはないらしい。

「やっぱ、あの手で侵入するしかないか」

『そーみたいだね。アロシアに伝えなくてよかったの?』

「あ……やべえ、忘れてた」

『だよな。言わなかったけど』

「まあ、行くうぜ」

『はいはい』

「ハッキング開始。プログラム『オフエンスアーマー窒素装甲』。発動」

プログラムが完全に発動した所で、高速機動開始。一気に地面に降りる。センサーに引っかかり、研究所がシャッターに覆われた。

「アルハ。時の庭園でやったあれ。頼める?」

『了解。左手集中。接触とほぼ同時に封印処理が終わるよ』

「助かる」

やってきた複数の機械兵を破壊と封印で片付け、最後に封印した機械兵の足を持って

「せーのっ……!」

研究所の壁に向かって思いっきり投げつける。見事にシャッターや壁を破碎し、即席の入口が出来た。

よし、と一つ頷き、中に侵入する。

『何やってるの!?!』

アリシアから通信が入った。サーチャー越しに見ていたらしい。迫ってくる機械兵を片付け、時々その機械兵を投げつけて固定されている質量兵器を破壊しながら、先に進みつつ、アリシアの言葉に答えた。

574

「何って、ナニ?」

『訳分らないよ!?! 私が見たいのは、何でわざわざそんな派手に侵入したのかってことだよ!?!』

「必要だったからな」

『せめて言おう!?! 後、作戦開始直後に予定で話した事以外の事するの止めよう!?!』

「前向きに検討する。すまん、切るぞ」

『やらない事の代名詞!?!』

渾身のアリシアの突っ込みを流しつつ、通信を切断する。

さて、と呟いて思考を切り替えた。今の所の誤差は特にならない。事前に考えていた作戦通りに事を進めて行ける。不確定要素である昼間の男の事が気にはなったが、それは頭の片隅に留めておく程度で、深くは考えない。

「実際、鉢合わせたら適当に相手して退くだけだしな」

封印して動きを止めた機械兵を、此方に銃口を向けた質量兵器の射線上に置き壁にしつつ、そう呟く。壁にしている間に後ろから別の機械兵がやってきた。質量兵器に向けて壁にしていた機械兵を投げつけ、後からやってきた兵士は相手にせず逃げの一手に勤める。

もし仮にあの男が来たら壁にすらならないだろうが、数を増やせば時間くらいは稼げるはずだし。

「しかし、広いな。逃げの一手って言っても、厳しいかも」

部屋から壁を破って最短距離での脱出……。考え、すぐに無いなと否定する。あの男に仲間が居ればそいつらも呼ぶ事になってしまふ。そうなら最後、まず間違いなく負ける。自身を持って断言

できる。

もしアリシアが旅の同行をしておらず、俺だけの旅だったら戦う事もしたかもしれないが、アリシアは居るのだ。あまり無茶は出来ない。壁をぶち破ったのだって、下見の段階であの時間なら大丈夫と踏んでのことだ。アリシアに言わなかったのは、純粹に伝え忘れただけだし。

「帰ったら、アリシアに謝らんな」

『そうだねえ。心配掛けただろうし。あ、そこ右だからね』

「分かってるって。曲がって直進。二つ目の角より先の左の手前から三番目の部屋だろ？」

『うん。その部屋なら』

『割り込みごめん！！ 浩樹！！ 今サーチャーに反応あったよ！』

『！』

切羽詰まったアリシアの声。それでも確実に情報は伝えて来てくれる辺りは、本当にありがたい。

走り、目的の部屋に飛び込むと、端末からデータの収集を始めつつ、遠隔操作で封印処理を解除した。

「人数。それと魔力反応」

『数は四。魔力反応も同じだけ。でも、さっきちらっと映った時に

見たけど、人三他一だったよ、パーティー編成』

「他が何か分かる？」

『ごめん、そこまでは。でも、侵入したのは人二。一人は巨軀で黒髪の男の人で手に持っていたのは槍。もう一人は……クイントさんだった。クイント・ナカジマさん。装備は両手に付けたナツクルと足のローラー。それに、外に居るのはメガーヌ・アルピーノさんだし。装備はグローブ、かな。それで最後の一人、というより一匹？は装備無し。強いて言うならマフラーくらいかな』

「了解した。巨軀の黒髪にも心当たりはある。それじゃあアリシア。言った通りに頼む。後で合流しよう」

『うん。了解。気をつけてね』

「ああ」

通信を切る。座標を指定して、プログラム『マテリアル・ハイ』
を発動。防御重視。サブプログラム『^{フルアーム}極装甲』。

それを使い入口を塞ぐ。そう簡単には抜かれない筈だ。それでもそちらに気を配りつつ、アルハがデータの抽出をしている間に、脱出経路の目算をたてる。

「さて、どうだ？ アルハ」

『一応、この前の単語を重要視してそれ関連の情報から引っ張ってる。廃棄されて間もない事が幸いしたね。データが殆ど破損してないから、大分引っ張り易い。もうすぐ……終わった。関連情報は全部取ったよ。他にも取る？』

「……いや、いい。戦闘機人とかプロジェクトFとか。その辺りの

情報があれば、次に繋げられる筈だ」

接続を切り、フルアーム極装甲を解こうとして、止める。まだ遠いが徐々に音が迫って来る。音源は足音ではなくローラーだろう。

「クイントさん、だっけ。早いし速いな」

多分逃げ切れない。まっすぐこちらに迫って来ている事を考えると、どういう訳か、俺の居場所も割れているらしい。少し考え、デバイスを起動。形状を腕輪に変える。フルアームそして、体を覆う窒素装甲の再確認をして、ドアを塞いでいた極装甲を解除。

ローラー音の主が部屋に迫り、ドアが吹き飛ばされこちらに向かってくる。そのドアを片手で一枚ずつ右と左に弾き、その後に向かってくる拳による一撃目をギリギリでいなが、足による二撃目は防げず、そのまま直撃。オフエンスアーマー窒素装甲があるから実際には直撃とは少し違い、骨が折れたりした訳でもないが衝撃は消せず、それが原因で体が吹き飛び、後方の壁を粉碎して廊下を転がる羽目になった。

「ちよつどいいかな」

そのまま走り去ろうとして、進行方向の壁をぶち破り、クイントさんが立ちはだかった。

「マジかよ……」

やるしかないらしい。右足を半歩下げ、重心を落とす。悪いが、少し眠って居て貰おう。そう考えて、一気にその場からクイントさんに向かって動いた。

Side:クイント

この世界での拠点としている場所を出発して、ゼスト隊長、メガー又と共に向かった先の研究所には、辺りを守っていた機械兵の残骸や元のまま動かない物、そして先日見た時には空いていなかった大穴があいていた。

「ナカジマはこのまま俺と研究所に。アルピーノはこの辺りに大穴を開けた主の仲間が居る筈だ。そいつを抑える」

既にあの穴を開けた主もその人数構成なども分かっているらしいゼスト隊長の指示。出立前に言った、気になる事とはあの穴の主の事なのだろうか。

そんな事を考えつつ、ゼスト隊長の言葉にメガーンと共に「了解！」と返し、メガーンを外に残して私とゼスト隊長は穴から中に侵入した。

外の様子から何となくの予想はついていたが、中も酷い有様だった。文字通り向かって来るものを一方的に蹂躪したのだろう。外同様機械兵の残骸や何故か動かなくなったらしい機械兵。さらに天井についていた筈の質量兵器も投げつけたらしい機械兵で破壊されるという光景が、穴から左右に伸びる廊下に対し、まるで足跡のように一方向にのみ続いていた。

「……くるぞ」

「え？」

唐突にゼスト隊長の言葉。直後、先程まで動きを止めていた機械兵が動き始めた。

「なんで!？」

「恐らく足止めが目的だ。一人で出来る事でも利用できる物は利用するような男だった」

「知り合いですか？」

「今日知り合ったばかりだ。お互いの名前しか知らないが、殺気を当てられて即座に攻撃に移る男だ」

そう言うと、ゼスト隊長は私に背を向けた。

「此処からは別行動だ」

そう言い、さっさと足跡とは別方向に行ってしまう。……とりあえず。

向かってきた機械兵を破壊する。

「この足跡の主を追いましょう」

ローラーで疾走を始めた。

『聞こえる？』

メガーヌから念話が入った。返事を返すと、内容はゼスト隊長が言っていた主の仲間を捕まえた、というより保護したとのこと。その保護された子の名前は、昨日私が聞いたばかりの名前だった。

『本人は自分の意思で手伝ってたって言ってるんだけど……クイント？ 聞いてる？』

メガーヌがまだ何か言っているようだったが、耳に入って来ない。さらに速度を上げ、足跡の主を追い詰めていく。

「許さないわ」

あんな年端もいかない子どもにこんな事を手伝わせている。二児の母親として、その事が許せなかった。

走り、角を曲がった所で、足跡が途切れている部屋を見つけた。一気に近づき、観音開きのそのドアの中心を殴り、ドアを室内に向

けて殴り飛ばし、そのまま侵入。私が飛ばしたドアを左右両方に弾いたその人影に、先ずは一撃目を入れるがそれをいなされ、間髪入れずの二撃目はその人影に当たり、そのまま飛ばした。

後方の壁を粉碎しつつ、廊下に転がり出た影を、進行方向を予測して、そちらの方の壁を粉碎して、立ちふさがる。

「マジかよ……」

改めて見た人影はギンガほどの身長。そしてぼそりと呟いたその声から子どもだという事が分かり、足が止まる。直後、その子どもが驚異的な速度で私に迫った。

第三十一話 邂逅 中編（後書き）

発言を抜粋してそれをあらすじとする。A Bの次回予告みたいですね。ごまだれです。

やっぱりゼストの旦那の口調が分らん。そして浩樹VSゼストと見せかけて、起こったバトルは浩樹VSクイント。色々都合がよかつたんです、すみません。

今回は久々のバトルです。実に十五話ぶりぐらいです。

ごまだれは描写のうまい下手にかかわらず、バトルを書くのが一番好きだったりします。まあ、ほのぼのも好きなのですが。

今回はここまでです。

ここまで読んだ下さり、ありがとうございます。

以上、ごまだれでした

第三十二話 〱邂逅 後編〱（前書き）

予定通り三部 何故か難産だった

そしてプロットの溜めがここまでしかない……

第三十二話 邂逅 後編

Side: 浩樹

一気に距離を詰め、昏間にひったくり男の一人にやったように、速度を殺さず膝での一撃を狙う。しかしその一撃は受け止められ、そのまま力任せに投げられた。僅かに踏鞴を踏みながら姿勢を整えている所に、クイントさんの拳による一撃。それをいなすのではなく、クロスさせた腕で防ぎ、その衝撃を利用して一度距離を開けた。

(膝での一撃は無理か……変えるか)

お互いの攻撃範囲外からの不意打ち気味な一撃は効かないらしい。だからこそ戦い方を変えることにした。その場で一度だけステップを入れ、ふつと短く息を吐きそして、左右の壁と天井まで使い、立体機動で距離を詰める。

「フッ!!」

最後にクイントさんから見て右の壁に着地し、後頭部を狙って回し蹴り。それは見事に反応を見せたクイントさんに防がれたが、所

詮は本命の為の時間稼ぎだ。蹴りに使っていない方の足で魔力で作った擬似的な足場を蹴り跳躍。そして魔法を発動する。

「レイズシュート、エクスキュージョンシフト」

廊下を塞ぐように五つの魔力球が出来る。着地した場所に魔法陣が出来

「発射^{てえっ}！」

光線が発射される。二十五本の光線がクイントさんの居た辺りを含めて、今居る廊下を一撃で廃屋のように変えた。徐々に加減が出来なかつたらしい。

クイントさんが気にはなつたが、それ以上にアリシアが心配だった。クイントさんの方は非殺傷設定だったし、大丈夫だろうと自身を納得させ、アリシアに連絡を入れつつその場を離れようとして、足が止まった。

「アリシア？」

呼びかけても返事が無い。いつもならすぐに帰って来る筈なのに。

「アリシア？　アリシア！」

何度も何度も呼びかける。それでも返事はなく、俺は呼びかけを中断して振り返った。直後に額に衝撃。しかし今度は違い、吹き飛ばされない。

そして、俺は衝撃を与えた主に尋ねた。

「アリシアを、何処へやった」

何かを感じ取ったのか、クイントさんが後ろに跳び退いた。迷わず追う。頭に血が昇ってまともに思考が出来ない……。だからこそ、戦い方は一択。ヒット&アウェイの一撃勝負の戦い方ではなくゼロレンジでの手数勝負。オフエンスアーマー空素装甲がある故の普段ではありえないゴリ押し戦法。

ただ倒す。その一点のみを考え、俺は距離を詰めた。

Side out

Side：クイント

どんな相手だろうと自分の最高の一撃で、一撃で落とす。私が心情とするその戦い方。そして数手手合わせしたただけだが、彼も同じだという事はすぐに分かった。一撃目の膝。二撃目の蹴り。三撃目の魔力砲撃。どれも私を一撃で落とす為の物だった。

しかし、今は違う。そう、アリシアちゃんの名前を呼び、私に彼女をどうしたのかと尋ねてから。一撃必倒を狙った戦い方ではなく手数勝負の戦い方。いくら離れようとその小柄な体と速度を生かして懐に入られ続けられる。この上ない程、戦いづらかった。

「くっ」

無理矢理後ろに下がり、それを追ってきた彼に向かった足の一撃。戦い始めたばかりの彼なら衝撃を幾らか殺す為に、それに合わせて後ろに跳んだのだろうか、今の彼はそんな一撃などものともせず、その場に踏み止まり、簡易の砲撃で私を狙う。

ガードなど考えず、100%全てを攻撃に回している。その筈なのに、この少年は全く揺らぐ事が無い。撃たれた砲撃を避けるが、

その隙に懐にはいられ、拳による一撃を、掌のみに集中して作ったプロテクションで防ぐ。二撃目も何とか防ぐが、間髪入れずの三発目で蹴り飛ばされた。

「使っしかないか」

再度迫る少年に対し、相手が子どもだと分かった時から封じていたカートリッジの使用を決心して、一発使う。何故か驚いたように目を見張る少年に対し

「リボルバー、シュート!!」

衝撃波。反応が遅れた少年に直撃し、その体が吹き飛ぶ。相変わらず有効打ではなかったが、彼の戦い方が変わってから初めて私の間会いになった。

「魔力が、増えた？」

ぼそりと呟いた彼の言葉に、私も内心で首を傾げた。嘘をついているようにも見えない所を見ると、彼は本当にカートリッジシステムを知らないらしい。自身が魔法を使っているのにもかかわらず、だ。

可能性としては魔法文化の無い世界出身。魔法を多用せず、クロスレンジの戦い主体という彼なら、確かにあり得るけど……。

そんな事を考えている間に、再び彼が動いた。拳を振るい私に迫り、同じく私もカートリッジを使い、迎え撃つ為に拳を振るい

「そこまでだ」

お互いの顔に向かって振られた拳は相手に届かず、ゼスト隊長が受け止めた。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

自覚している。今の俺はかなり不機嫌だ。具体的に言えばドツキりに嵌められて、その内容が冗談じゃない内容だった感じ。まあ、そのままなただけだな。床に正座をして、何故か膝の上にアリシアが座っているという状況の中、どうにも暇だった俺は今の心境的に

も溜息をついた。アリシアの首筋を狙って。

アリシアは、ひゃっ、と可愛らしい悲鳴を上げると、俺の方にもたれかかってくる。体重がかかっている、腹筋で支えているが、如何せん限界がある。それを見たメガー又さんが「そこはイチャイチャしないの」と声をかけられ、アリシアは俺に寄り掛かるのを止めた。相変わらず膝の上だが。

さて、何故俺がアリシアはともかく、メガー又さんと同じ部屋に居るのかと言えば、クイントさんとの戦闘の後の事を説明する事になる。戦闘がゼストさんによって強制終了させられた後、メガー又さんがアリシアを連れだって俺の前に現れ、自分達が时空管理局の人間だと教えられた。それから全員で場所を移動して、今居るのはゼストさん達が拠点としている部屋に来た訳だ。そして現在、ゼストさんはどこかに行っていて、クイントさんは俺の前でメガー又さんに説教されていた。

「クイント。いきなり手を出す人が居ますか」
「すみません」

「时空管理局だという事も説明せず、私の話もまともに聞かないで勝手に思い込みから拳を向けるなんて」

「反省してます……」

「はあ、高坂浩樹君、だっけ？ ごめんなさいね。家のクイントが迷惑をかけて。それに、連絡してあげれば良かったわね」

「いえ。こちらにも非がありますから。それにアリシアを保護して下さいましたし。ありがとうございました」

アリシアの話だと、移動の最中、機械兵に襲われたらしく、そこをメガー又さんに助けて貰ったらしい。連絡が付かなかったのは、その時にデバイスを紛失してしまったからのようだ。アリシアが襲われた事は完全に俺の配慮不足だった。まさか離れた場所に居るアリシアが襲われる筈が無いと思い込んでしまっていた。

だからこそ、メガー又さんには感謝しこそすれ、謝られるようなことなんて何もない。そこで正座している人も、まあ喧嘩両成敗という事で。

暫くしてゼストさんが戻ってきた。相変わらずの無表情だったが、俺より付き合いの長いメガー又さんとクイントさんは表情を読み取ったらしく、どうかしましたか？とそう尋ねた。

「データの回収が出来なくてな」

曰く、俺が居た部屋がメインのコンピュータールームだった訳だが、そのこの端末がドアによって破壊され、中にあったHDDが見事に粉碎。破損データすら回収できなかつたらしい。

ドアによって破壊、と聞いた時、俺とクイントさんは同時にゼストさんから目を反らした。目敏くそれを見つけたアリシアとメガー又さんがそれぞれ俺とクイントさんの顔を持ち、目を覗き込んでくる。

「何で目を反らすの、浩樹？」

「クイントも。どうして目を反らすのかしら？」

「え、えーと……」

「クイントさんが吹っ飛ばしてきたドアを俺が弾いた時に、運悪く端末に当たったんだと思います。すいません」

「高坂君!？」

こういう時は素直にさっさと話した方がいいのだ。下手に誤魔化そうとすると、大抵失敗するか後で面倒な事になる事は、アリサやなのは達と一緒に過ごしていた時に学んだ。

俺のその言葉を聞きゼストさんとメガーヌさんがクイントさんの方を向き、暫しの間が空いて「すいませんでした」と土下座した。俺もしようと思ったけど、相変わらず乗ったままのアリシアが居るから出来なかった。

その後、メガーヌさんによるありがたいお説教がしばらく続き、話題はあの研究所でのデータの話になった。

ゼストさんとメガーヌさんの会話を聞きながら、俺は打算を働かせ、それに目敏く気づいたのは当然のようにアルハだった。

「取り入るうとか考えてない？」

「失礼な。協力姿勢を見せようと考えているだけだぞ。その途中で

色々情報引き出そうとか思って無い』

『はあ。まあ、このままだとじり貧になるかもしれないしね』

『だな。少なくともリストの座標を回るだけでも俺達だけじゃ辛いかもしれないし』

旅に出た時はそんなこと考えなかったんだけどな。十日でハズレを引きまくったら冷静になった。

「そつえば、ひろモグツ!？」

何かを言おうとしたアリシアの口を抑える。此処でカードは見せたくないし。

訝しげな視線を向けられるが、とりあえず無視をして念話でアリシアに話しかける。

『おい、アホリシア』

『酷いね!？ 既に悪意しか感じないよ!？』

『まあまあ。とりあえずアリシア。何話そうとしたの?』

『え? 浩樹がデータ持つてるよね、って事とか』

『アホリシアちゃんはちょっと黙ってようね』

『アル八まで!？』

『さて、思わぬ所に居た伏兵は置いておいて『伏兵!?!』ちよつと静かにしような。実際今後の行動でこの次の俺の言葉が決まる訳だが……アリシア。一つ聞きたい』

『うっ……何?』

『俺の今後がどうであれ、アリシアはついてくるか?』

『うん』

即答。迷ったのか迷って無いのか。それでも、彼女はこう言った以上、曲げることはないだろう。彼女が言った家族という言葉を思い出して、少しだけ顔が綻んだ。家族みたいな人はいたけど、家族はじいちゃんだけだったしな。

『情報は増えるだろうが、動きづらくなるのは痛いかもしれんな』

『そうだね。まあ、また今日みたいな事が無いとも限らないし。アリシアの安全考えるなら、こっちなだね』

『そうだなあ』

『何? 何の話?』

『ん、俺の将来の話』

『……?』

どつやら分かっているらしい。まあ、いいか。アリシアが付いてきてくれると言った。でも家族アリシアの事を考えるなら若干のデメリットはあっても、選ぶべき道はこちらだ。

まあ、向こうがどう言ってくるか分からないけれど、研究所の座標データというカードがあるし、多分何とかなるだろう。

さて

「あの」

お願いをするところよ。

第三十二話 邂逅 後編（後書き）

計二日。昨日は気が付いたら寝ていた。今日書いてたら異常に難産だった。ある程度、戦闘のための空間があればいいけど、廊下だったからな……。ごまだれです

という訳で前書きの通り、プロットの溜めがここまでです。大体の流れは出来てるけど……。どうしたもんかな。

明日に閑話を投稿した後はしばらく二日置き位になると思います。久しぶりにオリジナルが書きたいですし、文芸部の作品も書かねばなので。

今回はこの辺で

ここまで読んで下さってありがとうございます。

以上、ごまだれでした

閑話 くなぜなに作者 その2

ごま「さて、今回も始まりました。司会は私。『後出のキャラが壊れ始めてる……』ごまだれと」

アル「『忘れられし都だって好きに生きていいじゃない』アルハザードことアルハの二人でお送りします」

ごま「さて、今回のゲストは三名」

アリ「『理想の家族計画は嫁が浩樹』アリシア・テストロッサです」

かな「え、えつと……。『最近、高町さんとかがよく遊びに来てくれるのは嬉しいんですけど、高坂君の部屋が……』高坂佳奈です」

ひろ「おい！？ どうなってるんだ俺の部屋！？ あ、『運動してるし良く寝て食べてるのに身長が伸びないのが悩み』高坂浩樹です」

ごま「以上三名でお送りします。今回のなぜなに作者ですがコーナーは二つです。ですが、その前に一応現状のPVとユニークを公開します」

ユニーク77,693 PV9,991

ごま「二期開始時よりPVは二倍弱。ユニークは1.5倍くらいかな。連続投稿すごいな」

アル「相変わらずコメントは伸びないけどね」

ごま「まあね。ここであらためて今までコメントをくださった方に感謝します。」

空牙刹那様 佐山・御言葉 凱龍輝様 White Sea
1様。

コメントありがとうございます。これを糧にがんばらせていただいています。空牙刹那様。コメントの返信をせず、申し訳ありません」

アル「区切りがついたところで、次のコーナー。現在でのキャラスペック紹介です。最初は一応主人公の」

ひろ「一応!？」

アリ「知らなかったの？」

ひろ「むしろ、アリシア知ってたの!？」

アリ「浩樹の事なら何でも知ってるよ?」

ひろ「凄いな!？」

アル「進まないからその辺でね。さて、改めて高坂浩樹のスペックです」

名前：高坂 浩樹

ふりがな：こうさか ひろき

年齢：9歳

誕生日：5月10日

身長：130.5cm

体重：29.0kg

髪型：黒髪・後ろ髪は長めで、後ろ髪を若干残す形で、リボンで結つてある。

一期の頃よりも伸びた。

後、特徴的なのは殆どのリリなのキャラ全員に言える、特徴的な前髪。

好きな事・物：動物（特に猫）と戯れる事。鍛練。プログラミング
手袋とリボン（手袋はじいちゃんから。リボンはなのはから貰った）

嫌いな事・物：なのは達や家の事で色々言われる事。今までの鍛練の否定

しつこい人。

機械類はある程度使えるようになったため、苦手意識は無くなった
趣味：読書

能力 括弧の中には後に何も特筆事項が無い場合、魔力強化時の物

筋力：A（AA）

（S）オフエンスアーマー 窒素装甲使用時

魔力：A+

技術：AA（体術）

A（魔法）

耐久：B-（A）

（AA）ハッキング使用、オフエンスアーマー 窒素装甲使用時

速度：A+（AAA+） 魔力の操作性の向上による、最適化が理由

スキル：AA（封魔） 使用能力。アルハのサポートがあれば。無い場合でもA

A (ハッキング) データの変更。今のところ、自身の情報変更による窒素固定。イメージはそらおとのニンフ嬢なので、まだ色々出てくる予定

ひろ「身長が！ 少し！ 伸びたああああー!!」

アル「いや、喜びすぎでしょ。どんだけ気にしてんのよ」

ごま「能力欄にある封魔ですが、大体分かってくださると思います。浩樹の接触封印の能力の事です。なんか出すタイミングを逃しまくったので、ここで説明させていただきますと、魔力変換資質『封印』みたいなものだと思ってくだされば結構です」

アリ「すっごく適当だね」

ごま「ごまだれがそもそもそのイメージで書いてるからな」

かな「全く話についていけないんですけど……。魔力っていつt」

ごま「さあ次行こうか！ 次はアリシアだー!!」

アリ「いえーい!!」

かな「無視ですか!？」

名前：アリシア・テストロツサ

ふりがな：ありしあ・てすたろつさ

年齢：5

身長：107.5cm

体重：17.0kg

髪型：フェイトと同じ色の髪。腰まで伸びる。髪は結っていない後、特徴的なのは殆どのリリなのキャラ全員に言える、特徴的な前髪。

好きな事・物：浩樹　アルハ　浩樹の手料理

浩樹から貰った指輪　アルハから貰ったデバイス

嫌いな事・物：浩樹からのけものにされる事　一部野菜

趣味：プログラミング

技術：A - (バックアップ)

アリ「浩樹の家事スキルは本職顔負けだよな」

ごま「そもそもアリシアが何も出来なかったから、アルハザードの色々を一人でやってたからな、浩樹」

アリ「だから浩樹が私の嫁だったら、万事解決すると思うんだよ」

ごま「何がだよ」

かな「そんなこと言ってるとその、怖い人たちが……」

ごま「それは友人たちか？」

かな「はうっ！」

アリ「凶星みたいだね」

ごま「ま、確かに『お話』することに……あー、佳奈。何も無かつ

ただろ？ だから落ち着け」

アリ「全然聞いてないね」

かな ガタガタ

ごま「浩樹とアルハはさっきから漫才やってるし。しょうがない。進めよう。次は佳奈のスペックです」

名前：高坂 佳奈

ふりがな：こうさか かな

年齢：8 今年9歳

誕生日：11月20日

身長：125.0cm

体重：24.0kg

髪型：なのはより濃い色の茶髪。髪の長さは肩甲骨辺りまで。アリサやすずかの半分くらいの長さ。気分によって結んだり、そのままだったり

好きな事・物：聖祥大付属小の友達 家族写真 浩樹の部屋

嫌いな事・物：虫類

趣味：読書 主にファンタジー小説

ごま・アリ「うわぁ」

かな「……はっ！？ た、タイム！ タイムです！」

ごま「好きな事・物の三番目なんぞ」

アリ「そうだよ。私だつて入ったこと無いのに」

ごま「いや、それなんか違う」

アリ「へ？」

かな「なんか落ち着くから好きなだけです。それだけです」

ごま「はいはい。さて、浩樹、アルハ。いい加減帰ってこい。次のコーナーだ」

ひろ「え？ 何時の間に？」

ごま「漫才してる間に。さて、次のコーナーでは、この駄文を読んで下さつている皆様が疑問に思つていそうな事を勝手に考えて、それに答えて行こう、というコーナーです」

アル「要は無理矢理、理由付けしてしまおうつてことだね」

ごま「そういうこと言わない。さて、最初の質問」

『浩樹の二期からの技が漫画が元になつてるのは何故？』

ひろ「ああ。残念なことに俺にはネーミングセンスが皆無でな。アルハから貰ったデバイスにもまだ名前を付けていないしまつた。だから自分では付けなかった。アルハがイメージに使つたという作品からそのまま引用させてもらったんだ」

アル「イメージというか、殆どそのまんまだけだね。私の趣味を推せる且浩樹の強化につながる且出来そうなものでこうなったの」

ごま「ハッキングは出来そうだったのか……。まあ、次」

『アルハがサブカル好きになった理由は？』

アル「正直暇だったの。人間みたいなAIがあるとね。誰もいないのが退屈で退屈で。だから色々な次元世界のデータベースに入って遊んでた時、たまたま見たアニメにとことんハマっちゃって。それからかな」

ごま「次」

『アリシアはまだフェイトやプレシアに会いたい？』

アリ「勿論！これが私の嫁ですって浩樹の事紹介したいし」

ひろ「プレシアさんに蒸発させられそうなんだけど……」

ごま「……次」

ひろ「なんか言ってる!？」

『佳奈が浩樹のじいちゃんの家でお世話になる事になった理由は？』

かな「あ、はい。えーと……両親が事故にあって死んでしまっ
て。お父さんの両親も無くなってましたから、自然と。でも、おじい
ちゃんが好きですよ。今まで会ったこともなかった私の事、何の躊躇
いもなく引き取ってくれましたし。とっても良くしてもらってま
すから」

ごま「次。そしてラスト、かな、ちょうど一人一問で」

『いつまで続くの、これ？』

ごま「だれだ！！ この質問したの！！」

ひろ「考えたのお前だろ！！」

ごま「くっ、考えた時はそんなに胸に来なかったのに……。えーと、とりあえずSTSまで確実に。その後もオリジナルがしばらく続く予定です。Vividに入るのかは何とも。原作が月一ですし、しばらくストーリーが進まなそうなので」

ごま「今回のなぜなに作者はこのくらいかな」

ひろ「次回からは元に戻ってオリジナルが暫く続くな」

ごま「そうだな。浩樹・アリシア・アルハのアルハザ組はゼスト隊入隊なるかだし」

かな「あの〜」

ごま「なに？」

かな「お手紙を預かってます。二通」

ごま「……？ うん、ありがとう」

アル「内容は？」

ごま「待ってって」

『うちの出番はいつですか？ by八神家一同』

『出番寄こしなさい by聖祥大付属三人娘』

ごま・ひろ・アル・アリ「……」

グシャグシャ。ポイチヨ

ごま「いやあ、今回は疲れたな」

アリ「ホントだね。浩樹とアル八が漫才やってるから」

アル「うぐ。だって、浩樹が。そもそも浩樹はまだまだ成長期なんだから。伸びるって」

ひろ「だよな。伸びるよな？」

かな「え、あ、あの？」

ごま「まあ、何事もなく良かったじゃないか」

ひろ「ほんとほんと」

アル「このまま何事もない前にお開きにしよう」

アリ「アル八に賛成」

かな「あ、なるほど。そういう流れですか。じゃあ、私も賛成です」

ごま「今回もここまで読んで下さりありがとうございます」

ひろ「次回は明日か明後日か。リアルで書かなければいけないものがあるので」

アル「待っていていただければ幸いです」

アリ「では最後に」

かな「ここまでの時間が貴方にとって苦痛で無かった事を願って」

一同「……………では次回」「……」

閑話 くなぜなに作者 その2 (後書き)

アリ「あ、外部から魔力攻撃」

アル「狙いは作者だね」

ひろ「ご愁傷s」

ごま「あまい！！ 浩樹ガード！！」

ひろ「えっ！？ ちよっまっギヤアアアアアア！！！！！！！！！？！！！！？」

アリ「うわぁ」

アル「主人公盾にする作者って。吹っ飛ばされる落ちでしょう、こ
こは」

ごま「それじゃ、ワンパターンだからな」

かな「え、えーと、改めてここまで読んで下さってありがとうとっぴんが
いました。では次回です」

ごま「出番ないけどな」

かな「ええ！？」

閑話 く佳奈の一日く（前書き）

11月20日誕生日の高坂佳奈の誕生日記念です。

決して、本編が難産で、逃げに走った訳ではありません

閑話 く佳奈の一日

AM 06:00

携帯の電子音によって朝が告げられる。携帯を手探りで探し、音を止めてから体を起こす。軽く伸びをしてから、ベッドから降りて姿見を覗き込むと、半分寝た顔で頭が酷い事になっている私の姿が映し出された。

「うわぁ」

癖毛自体はそこまで酷くない筈なのに、雨の日に限って爆発というか、ともかくそういう形容詞が似合う髪形になってしまふ。これは治すのに苦労しそうだ。いつそのこと眠気覚ましも兼ねてシャワーでも浴びてしまふのも手かもしれない。

欠伸をかみ殺して、私は部屋を出た。

AM 07:00

ドライヤーでも櫛でもどうにもならなかった髪の毛を、シャワーを浴びることで強引に直して、歯を磨いたり着替えをしたりしている間に、既に起床から一時間。いつもより少し遅いけど、朝食を作

り始めた。

その内本にでもして売るつもりだったのか、やけに丁寧にまとめられた、高坂君の料理ノートと睨めっこしつつ、朝食を作っていく。いつも通りの純和風。白米とみそ汁と海苔と鮭の切り身。並行してお弁当も作っていく。これは昨日のうちに仕込みをしておく、朝が楽という高坂君のノートに書いてあったから、夕飯のついでにやるようにしている。

鼻歌交じりに朝食とお弁当を作っていく。時間にして三十分ほど。両方の作業が終わり、食卓に並べているとおじいちゃんが入ってきた。

「おはようございます。おじいちゃん」

「ああ。おはよう、佳奈」

おじいちゃんに挨拶をして、二人で卓につく。私が座って対角線上におじいちゃんが座っている。そしておじいちゃんの対面。私の隣の席には逆さまに茶碗が二つと箸が一膳置かれている。いつものように。

それについて何も言わず、私達は食事を終え、食器洗いを済ませると私は家を出た。

AM 08:00

私が家に出ると、横から「佳奈ちゃん」と声をかけられた。隣家の家の前に居たのは栗毛色の髪の毛の私と同じ年の女の子。

「おはよう」

「おはよう、高町さん」

高町なのはちゃん。私の友達の一人。仲良くなってから大分経つけど相変わらず名字で呼んでる。少し不服そうだけど、こればかりはもう少し待って欲しいかな。

合流してから道を進み、バス停に向かう。

「ごめんね、高町さん。少し遅くなっちゃって」

「いいよ。でも、珍しいね。佳奈ちゃんが遅れるなんて」

「うーんとね」

そう言いながら、髪の毛を弄る。そんな私の行動を高町さんは不思議そうに見ている。今朝も鏡を見て見たけど、ひどかったなあ。

「髪が纏まらなくて」

「ああ、今日雨だもんね」

傘越しに空を見上げる高町さん。そんなに激しくはないけど、それでも雨は降り続けている。多分今日一日降り続けるだろう。

憂鬱だなあ。

「雨は嫌いじゃないけど……朝、髪の毛整えるのが大変なのはなあ」
「そうだね。それはちょっと大変だけど、でも私は雨の日好きだよ」
「そうなの？」

以外……かな。アウトドア派って訳でもないけど、結構空を見上げてる時があるから。

でも何となく理由に検討が付くのは、私がそれだけ彼女と仲良くなれた証拠なのかな。でもまあ、とりあえず。

「どうして？」

「えっとね！ 去年の誕生日なんだけどね！」

ああ、やっぱり……。地雷。地雷かあ、やっぱり。

高町さんの惚気話に耳を傾けつつ、私はバス停への道のりを歩いた。

A M 11:45

授業中。席替えをしたから私は一番前じゃなくて後ろから二番目。そして今の授業は理科。実験は好きだけど、こう言う席に座って授業を聞くのは……正直眠い。

朝が早いのはいい加減慣れたと思うけど。何故か理科の座学は苦手だ。眠くなってしまう。

欠伸を噛み殺しながら、眠気覚ましにクラスを見渡す。

窓際から二列目。前から三番目。私の斜め前の席。そこに座っているのは、アリサ・バニングスちゃん。頬杖をつけて顔は見えないけど、多分半眼で私みたいに授業を聞いているけど、半分流しているんだと思う。

ふと視線に気が付いて後ろを見た。私と目があってから、前を向
き直り何かを書いて私に渡した。

『どうしたの？ 何か用？』

何か思っ て見た訳じゃなかったんだけど。 まあ、とりあえず

『バニングスさん可愛いなあって』

先生の間を見てバニングスさんに投げ渡す。 投げ渡された紙を見て、バニングスさんが急に立ち上がった。「どうしましたか？」と先生に尋ねられ、慌てて座る。

そして鬼気迫る勢いで何かを書く と、私に渡して来た。

『いきなり何なのよアンタは！！』

思った事を書いただけなんだけど。 そう思い、そう返す。

『思ったから、つい』

『ついでいきなり言わないでよ。 まったく』

『じゅめんね』

『まったく。最近浩樹に似てきた気がするわ。脈絡のない言動とか』
『そう？』

アリサちゃんがそう言うと言得力がある。でも何でだろう？ 高坂君の部屋に入り浸ってるからとか？ それとも高坂姓だからとか……ないよね。

『にしてもアンタ。手紙でもバニングスさんって呼ぶのね』

それについてはノーコメントだ。だから視線をバニングスさんから月村さんに移す。

廊下側から三列目。前から二番目。席替え前は高坂君が座っていた位置。そこが現在の月村さんの位置だ。そしてその隣。もともと高町さんが座っていた席に、高坂君の席がある。因みに私の席のバニングスさんとは反対側の隣の列で二つ前。

そんな彼女は、私やバニングスさんと違って、真面目に授業を聞いている……ように見えるけど。何となく頭の中では多分隣に高坂君が座ってるんだろうなあ。

ふと思ひ、手紙をまわして貰った。内容は『授業楽しい？』だ。手紙を受け取って、内容を読んでから、私の方に振りかえって少し

微笑んでから、返信が来た。

『楽しいよ。だってとなりが浩樹君の席だよ?』

ノーコメントを貰きたいけど、バニングスさんがこちらを見ていたから、先程の月村さんの手紙を渡す。それを見て、うわぁという顔をしてから、ノートを破り何か書いて月村さんに回した。受け取って、中身を見てから、何故か私に回ってきた。中を見る

『すずか……。アンタ、益々駄目な子になってるわね』

『ふふ。気にしたら負けだよ、アリサちゃん。それより、佳奈ちゃん。相変わらず浩樹君の部屋に入り浸ってるの?』

今度は私が立って、周りの視線を集める羽目になった。どうしたの?とバニングスさん同様尋ねられ、何でもないですと答えながら席に着く。

紙に返信を書きその紙をバニングスさんに回して、バニングスさんが月村さんに回して。

授業中の間、私とバニングスさんと月村さんの三人で手紙を回しあった。そして結論。

月村さんは変わってしまったらしい。」

P M 0 0 : 3 0

「うう。三人で何のお話してたの？」

お昼休み。屋上でランチタイム。因みに高町さんは窓際一列目。一番後ろの席だから、手紙に不参加だった。でも場所的に私達が手紙を回しあっていた事に気が付いていたから、やはり気にはなっていたらしい。

とりあえず、この話の予測はついていたから、私はポケットに入っていた手紙を取り出して、高町さんに渡した。受け取った高町さんは、内容に目を通して、にははと苦笑いをしつつ手紙を私に返した。

「なんて言うか、相変わらずだね」

「アンタが言うな」

「アリサちゃんもね」

「私から見たらどっこいどっこいだよ？」

私の言葉にピシリと音を立てて空気が固まり、暫くしてから全員が溜息をついた。

その後は、前の話題に触れないように、当たり障りのない会話をしながら、昼食を食べた。

P M 04:30

「えーと、今日の買い物は……」

一度帰宅して、私服に着替えてから私は買い物に来た。本当は制服のまま来てしまった方が色々楽なんだけど、学校帰りの寄り道は禁止されてるからしょうがない。どんなに面倒でも、規則は規則だしね。

という訳で、私服に着替えて買った物を入れる籠を持って。ノートに書いてあったレシピに必要な物を書いた紙を片手に、私は買い物をしていく。

「こんばんは」

「あら、佳奈ちゃん。こんばんは。なに買いに来たの？」

「ジャガイモと人参と、後……」

高坂君曰く買い物は商店街の方がいいらしい。よほど手に入りにくい物じゃない限り仕入れていて安いし、たまにかなりマニアックな物を仕入れていたりして面白いからだそうだ。買い物基準で面白いというのはよく分からなかったけど、以前いった魚屋ではたはたを仕入れていた時は本当に驚いたから、多分こつこつ言う事だろう。因みにその日の食事は季節外れのしょつる鍋だった。

まあ、そんな感じでたまに想定外の買い物をしたりしつつ、買い物を済ませて家に帰った。

「ただいま」

返事はない。キッチンに向かうと、普段食事をするテーブルの上に紙が置いてあった。ああ、またかと思いつつ、紙を読む。

『西に行く』

内容的にまた旅に出たのだろう。私的にはもう少し詳しく書いて欲しい所だけど、それを望むのは多分無駄なのだろう。そう言う事を注意するタイプの人なら、ちゃんと口頭で伝えていくし。

溜息を一つつき、最低でも三日は無駄になってしまいそんな食材をどろやちって使うか考える。

「何とかなるでしょ」

困った時の高坂君ノートもあるし。そんな事を思いながら、予定通りの食事を作り始めた。

P M 08:00

春夏秋冬365日24時間。いつだってお風呂は気持ちいい。気がついたら一時間以上入浴しているなんてざらにあるくらい、私はお風呂好きだ。それに、最近は慣れてきたとはいえ、家事はやっぱり疲れるから尚更。

だからこそ、今日は凄くのんびりする為に、すぐに宿題を終えて好きな温泉の元も入れた。

「ふふふ。さて」

シャワーで軽く汚れを流して、私は左足から、ゆっくりと体を湯につけていく。

そして、肩まで湯につかると、自然と息を吐いた。

「やっぱりいいなあ、お風呂」

フンフーンと鼻歌を歌いながら、体を温める。暫く温まってから、浴槽から上がり、シャワーを浴びる。

浴びながら、ふと気になって胸に手を当ててみる。

「……むー」

あまり変化はない。そりゃ一日二日でどうにかなるものでもないし、まだまだ成長期だから気にする必要も無いだろうけど、高坂君が凄く身長のことを気にしていたと聞いたから、どうにも気になってしまっ。

これはあれだろうか。バニングスさんが言った通り、私が浩樹君に似てきているからだろうか？

「うっ……」

微妙な心境になりつつ、シャンプーを適量だけ取って、髪を洗い始めた。

P M 11:00

「ふあ〜」

眠い。つい、高坂君の部屋にあった小説で面白かった物を読みふけてしまった。

欠伸をしつつ、ふらふらと浩樹君の部屋の布団に向かった。普段なら自分の部屋に戻るけど、今日は……いいかな。正直眠くて動きたくない。布団を適当に敷き、その上に倒れた。

「ん、ああ……」

思い出し、近くに置いてあった携帯を手にとって目覚ましを合わせる。そして重い体を引きずりながら立たせ、高坂君の机に置いて

あつた写真を手に取つた。

高町さんとバニングスさん。月村さんと高坂君が映つた写真。

「おやすみなさい、皆さん」

写真を元の位置に戻し、布団に倒れ込んだ。心地いい眠気に抵抗する事無く、私は眠りについた。

閑話 く佳奈の一日く（後書き）

前書きではああ言いましたが、すいません。難産です。ごまだれです。

何故か異常にキャラどうしが絡ませづらくて困ってます。サークルで必要な作品を書いていたからもありますが、これはつらいです。最後に閑話をあげてから大分経つのに、いつもの半分くらいしか書けていません。

今からばちばち書きつつ、また毎日更新を心がけようと思います。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

では次回。以上、ごまだれでした。

第三十三話 く試験前日く（前書き）

すいませんでした。

第三十三話 試験前日

Side:アリシア

私達の旅はまだまだ続く！ っていうのは、まあ、討ち切り時の決まり文句的な物だけど、私も言う事にしよう。私達の旅はまだまだ続く！！

……まあ、別に討ち切りという訳ではないんだけどね。こう言ったのは、まあ、現実逃避と確認の為。

「ギンガー、ここは？」

「ここはですね」

もうこれでもかって位に距離を詰めて、実質的な距離が零の二人。その二人の名前はそれぞれ浩樹とギンガ。浩樹は集中しているからともかくとして、ギンガの方は完全に意識してくっついてる。

子供だし、離れるー！！ って大騒ぎしてもいいんだけど、浩樹の邪魔はしたくないから動けず、これ以上発展だけはしないように見張るしか出来ない現状。ああ、それにしても

「誰得……。少なくとも私の知り合いは損しかしないわ」

浩樹とクイントさんの娘のギンガがイチヤイチャしながらの勉強風景なんて。

何でこんな事に……。ってまあ、浩樹がゼストさん達の隊に入りた
いって言ったら、学が足りないって事になったからお勉強中。はい、
回想終わり。

「うっ」

別にギンガじゃなくてもいいじゃんってそう思ったけど、生憎ゼ
スト隊の人は忙しいし、ちょうどよく浩樹に物を教える事が出来
るのがギンガくらいからだ。だから、ギンガに白羽の矢が立ったの
だ。

私が教えられたらよかったのに。まあ、知識が偏り過ぎてて、浩
樹の役に全く立たないからしょうがない。

だから今の私には浩樹とギンガのイチヤイチャしながらの勉強風
景を眺めて、親指の爪を噛み締めるぐらいしか出来ないのだ。

S i d e o u t

S i d e : ギンガ

初めて彼らが家に来た時は私もスバルも父さんも凄くびっくりした。管理外世界の長期任務に行っていた母さんの手紙を携えて、全く似ていない自称兄妹の二人が家に来たから。母さんの手紙曰く、事件の最中に巻き込まれて、その時に保護をしたみたいなき事を言っていたけど、少なくとも男の子の方はどこもなく不機嫌そうに見える。

父さんが母さんから連絡を貰った矢先にやって来た二人が自己紹介をして、慌てて私達も自己紹介を二人にしてから、いざ夕食となった時、何時もなら出来あい物なので済ませるのだけど、キッチンに立ったのはなぜか男の子、高坂浩樹君だった。

「ただで住まわせてもらうのも悪いですから」

そう言っつて、どこからともなく取り出したエプロンを身につける。持ち歩いているんだなんて感想が一番に出た私は、果たしてずれているのだろうか？

しかし、意気揚々とキッチンに立ち、料理を始めたまでは良かった。それこそ、母さんが手を出せない位に。だけど、少しして流れるように動いていたその手が止まった。困ったように首を傾げている。何かあったのだろうかと思っつて首を傾げていると、此方を向いた。

「これって、どうやって使うんですか？」

指を差した先にあったのは結構新しい型のクッキングヒーター。どうやら、妹の方も分らないらしく、近づいたはいいけど首を傾げている。次に反応したスバルが、恐々としながらも彼に近づき使い方を教えると、おお、と感心して「ありがと」と先程の不機嫌そうな顔が嘘のようなほんわかした笑顔でスバルの頭を撫でた。

そうして出来た料理は……美味しかった。父さんとスバルにとっては味が薄いみたいだったけど、私としてはこれくらいが好みだったし。

そうして家事お手伝いさんみたいな立場で我が家の一員となった浩樹兄さんとアリシアだった。

そして現在。魔法文化が無い世界出身で、魔法を殆ど独学で覚えたといい浩樹兄さんの為に、私は勉強を教えていた。最初こそは対面の席に座って教えていたけど、なかなか反応を得られず、暫くしたら今みたいに思いつきり体を近づけて。寧ろ押し付けるようにしているんだけど、反応があるのは対面の席で私の事を親の敵のように見ているアリシアくらい。

あの人見知りで大人しいスバルですら、ちよくちよく膝の上に乗

ったり膝枕（これは正直羨ましい）をして貰ったりしているけど、アリシアだけはあまりそう言う事が無い。ただただ、そう言う事をしている私達を羨ましそうに見るだけ。

少しだけらしくないな、とは思ってしまっ。でも、スバルが恋愛というより兄弟とかの親愛の情の方が大きい以上、目下のライバルはアリシアだ。だからこそ、牽制しておく。

「……よし、終わり。ありがとな、ギンガ」
「へ？」

何時の間にか、今日やる予定だったノルマを終えていた。時計を見ると、昨日より早い。徐々に学力は上がっているらしい。

立ちあがってのびをすると、手近に架けてあったエプロンを手に取り身に付けた。

「えっと夕飯のメニューは……」

夕飯の予定をぶつぶつ呟きながら、浩樹兄さんは部屋を出て行った。

その様子をポカンとしながら私は見送り、含み笑いをしているアリシアを睨みつけた。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

やってる事が変わらない。最近の生活での印象はそれだった。

学校に通ってはいないけど、朝は走り込み等の鍛錬。その後、ギンガやスバル、ゲンヤさんのお弁当と朝食をクイントさんと日替わりで作り、全員起きて来たら朝食。

学校や仕事に向かうナガジマ家を見送り、アリシアと分担……ではなく、アリシアに家事を教えながら二人で作業。間に昼食を挟みつつ、掃除と必要なら買い物を済ませ、夕方分の鍛錬メニューを終わらせたあたりにスバルが帰宅。

二人で宿題やら勉強をしている時にギンガが帰宅。後はギンガに教わりつつ勉強をやって、ノルマが終わった辺りで夕食作りとアリシアに頼んで風呂を沸かす。残業とかが無ければ作ってる最中にクイントさんやゲンヤさんが帰って来て、夕食。

後は洗い物をしてぼちぼち腹ごなしを兼ねて走り込み。帰って来て、何故か待ってるアリシアと一緒に風呂に入って……。

「後は復習して寝るだけ。何か海鳴に居た頃の何も無い日曜日みたいだ」

とりやっと中華鍋を振り、中身を上に飛ばしてキャッチ。それを何度か繰り返す。

作り始めた頃からの事だけど、中華鍋の中に入れた量が半端無いから、こうしないと全体に火が通らない。おかげで右腕に無駄に筋肉が付いて来た。

「クイントさんもギンガもすげえ喰うからな」

クイントさんはナカジマ家で一番。ギンガも二番だ。大差を開けられ、俺が三番。ゲンヤさんが四番でアリシアとスバルが同じくらい。

「クロスレンジ魔導師なら体力と魔力をかなり消耗するし、しょうがないか」

俺は最近魔法を使う機会が無いけど、相変わらず魔力はただ洩れ

状態だから魔力は常に消費してるし、それに加えて一挙手一投足に関わらず魔力を消費する何とかギブスをアル八監修のもとで発動してるから、魔法は使わずとも魔力は消費しているというのが現状。

クイントさんやギンガ程ではないがよく喰う。だから食費が……。

「家計簿付けてる訳でもなし、俺が気にする事でもないのかもしれないけど……」

付けてた頃があるから気になる……。でも頼んで見せて貰うのもな。

「まあ、大丈夫って言うクイントさんを信じよう」

盛り付けて完成。料理などを分けて二つの盆に乗せ、それを持ってダイニングに移動する。

「ギンガ。クイントさんとゲンヤさんは？」

「二人とも遅くなるそうです。食べてくるからいらないみたいです

」

「まじか。しょうがない、明日の朝か弁当だな」

盆を置き、ギンガと二人で食事を並べていく。スバルとアリシアも入って来て、四人での食事が始まった。俺の隣にスバル。対面にアリシアでその隣にギンガ。普段ならスバルの隣にクイントさん、ギンガの隣にゲンヤさんが居る。

「そういえば」

食事の席で、アリシアがそう切り出した。

「ん？」

「明日だね。いよいよ」

「ああ……そうだな」

「ヒロ兄なら大丈夫だよ！」

「そうか？　ありがとう、スバル」

頭を撫でた。えへへと笑うスバルに微笑み返し、アリシアの方に視線を向ける。

不機嫌、という訳ではないけど、ここ数日どことなく元気が無い。内心で首を傾げているとスバルに話しかけられ、意識を引き戻された。

ドアをノックする。少ししてから返事があり、中に入った。

アリシアはベッドの上で身を起こしていた。眠っていた訳ではないらしい。すぐに返事あったし。

「よっ、アリシア。元気？」

「まあ、ぼちぼちだけど……。どうしたの浩樹？」

「いや。帰ってきたら、風呂に入らないで寝たって聞いたから。それに、最近元気なかったし」
「そうかな？」

アリシアの傍に腰を下ろす。アリシアはベッドから出て、俺と同じようにベッドに腰掛けた。

「悩みごと？」

「……うん。そうかも。ねえ、浩樹。自信ある？ 明日の試験」

「どうした？ 急に」

「いいじゃん。答えてよ」

「ん〜、筆記は何とかか。八割くらい。戦闘の方がな……誰が相手になるのか分からんし、なんとも」

「そっか……。ねえ浩樹」

「何？」

「私、いない方が良かった？」

アリシアの言葉にすぐに答える事が出来なかった。アリシアの言葉は続く。

「私が居たから浩樹は管理局に入ろう、って思ったんだよね。それって、やっぱり私が足手まとって事だよね」

「……」

「私がいなければ、浩樹は今でも一人であちこちの次元渡って、もしかしたら浩樹の敵の人を見つけただかもしれない。だから……」

「……はあ」

溜息をつき、アリシアを抱き寄せる。

驚いたのか、顔を上げたアリシアと目が合い、アリシアは頬を紅く染めながら目を反らした。

「ずい」

「だってアリシアは俺の話の聞かないから。口で言わないで、行動する事にしてるんだ」

「でも、浩樹がいくら言ったって。方針を変えたのは事実だもん」

「確かにそうかもしれないけど。俺は最善策を取っただけだ」

「でも」

「でもじゃない。何回言う気だ」

更に強く抱きしめる。

「家族だって言ったのアリシアだろ。なら、家族の事考えて何が悪い」

「だって」

「それに動きづらくはなるかもしれないけど、情報は今までより入るんだ。悪いことばかりじゃない」

「……」

「アリシア。俺が言える義理じゃないかもしれないけど。私のせいで、なんて言わないでくれ。助かってるんだ。アリシアが居てくれて。本当に」

本当に助かってる。アルハザードで会った時からずっと。寂しがりでも出来ない俺の傍に居てくれて、料理を美味しいと言ってくれて、俺の為に技術を学んでくれて、俺を家族と呼んでくれて。

「頼むから言わないでくれ。俺にとって、アリシアは私なんかなくて存在じゃないんだ。俺にとって、アリシアは傍に居てこれからも助けて欲しい存在なんだ」

だから。

「だから、そんな顔しないでくれ。アリシアが俺を助けたいって思ってるなら、俺は助けて貰ってるから」

「浩樹……」

泣きそつな顔になるアリシアの頭を軽く数度叩き、抱き寄せる。嗚咽が聞こえ、震える背中を、震えが収まるまで撫で続けた。

S i d e o u t

S i d e : アリシア

脇を見下ろすと、浩樹が寝てる。

少し前まで泣く私の事をずっと抱きしめていてくれて。久しぶりに一緒に寝たいって言ったら、その願いをかなえてくれた。

まあ、実は変な時間に寝てしまって、眠くない。だから隣で寝息をたてている浩樹の顔をぼんやり眺めていた。

「ねえ、浩樹」

声をかけてみる。反応は無い。構わず言葉を続けた。

「ありがとね。嬉しかった。浩樹がああ言ってくれるなら、私は頑張るよ。家事だって何だって。浩樹の事ちゃんと助ける」

だから、そんな顔しないで。

普段とは逆で。少しだけ泣きそうな浩樹の頭から頬に向かい数度撫でる。

時計を見上げると午前三時。浩樹の管理局への入局試験は、刻一刻と迫っていた。

「がんばれ、浩樹」

最後にそう呟いて、浩樹と同じベッドに潜り込んだ。

第三十三話 試験前日（後書き）

アリシアが浩樹といちゃつくナカジマ姉妹に嫉妬するだけの話だったはずなのに……ごまだれです。

本当は邂逅の続きを少しだけ書いてから、日常パートのつもりだったんですが、なんかうまく纏まらず、急遽この形にした結果、閑話が二度続くということになりました。それでも昨日の予定が今日になっただけですね。

今回は浩樹の入局試験です。

ここまで読んで下さってありがとうございました。

では次回。以上ごまだれでした。

第三十四話 試験

Side: 浩樹

「いい？ 君の話は聞いたから。まずは魔法のみ。その後、休みを入れてハッキングを含めた技能を混ぜての戦闘を。分かった？」

「はい」

「試験自体は勝敗に関係なく、内容を評価するのでそのつもりで。では、少ししたら試験官が向かうので、それまで待っていて下さい」

アリシアと話した翌日。アリシアの部屋から出て来た所を、ジャストで起きて来たギンガと鉢合わせて、何を勘違いしたのか泣かれて、遅く帰って来たクイントさんの逆鱗に触れたりして色々大変だった朝を乗り越えて、筆記試験を終えた俺は今、管理局地上本部の訓練場にいた。

コキコキと首を鳴らす。

「だそうだ、アルハ。ハッキングは禁止だっつて」

「難しいね。魔法だけの技能はゼロじゃないとはいえ、最近オフエンスアーモは装甲使った力技のゴリ押しの戦い方が多かったし」

「そうだな……。戦い方自体が無い訳じゃないが、パターン化した物が何個かあるだけだからな。読まれたら終わり。短期決戦で一気にオフエンスアーモにな」

「そうだね。室素装甲さえ発動しちゃえば、魔法はほとんど関係な

いからぬ。使い切る勢いで一気に行くぞ』
「ああ」

その後、アルハとぼちぼち作戦会議をしながら時間が来るのを待ち、『もしもし?』とスピーカーから声が聞こえて来た。

「はい?」

『こっちの準備は出来たみたいだけど。そっちは?』
「いつでも」

『了解了解。あ、隊長。準備できたみたいです。いつでもいいそうですね。……はい、了解しました。なら高坂君。そっちに今向かったから。武運を』
「ありがとうございます」

再び通信が切れ、距離にして十メートルほど向こうに今日の試験官らしい人が現れた。

黒い髪。茶色のコート。二メートルを余裕で越しているであろうその巨躯。見覚えがあるなんてレベルで無く、俺が望む部隊の部長が、そこに居た。

「これはまた……。ゼストさん。いいんですか?」

「ああ。高坂のランクを越える魔導師というと、あまり人数が居なくてな。俺が務める」

「俺のランクって……そんなに高くない筈ですけど」

「……始めるぞ」

「ノーコメントですか。ま、了解しました」

両手をだらりとさせ、両足に力を込めて。デバイスを構えるゼストさんを見る。

そして。試験が開始した。

S i d e o u t

S i d e : クイント

魔導師ランクが高くないって……。

「どの口が言うのかしらね。あの子は」

「確かに。まあ、彼が魔法文化の無い世界の出身だから、しょうがないと言えましょうがないのかもしれないけれど」

「それでもね」

実際の所、あの歳で次元転送が出来る子なんて、それこそ片手で数えられるほどしかない。メガーヌのような召喚師ならともかく、彼はオーソドックスな魔導師だ。

技能としての接触封印ならあるが、それは転送魔法とは関係ない。デバイスのサポートはあるとはいえ、次元転送。それを一人でやっているのだ。

「本来ならそれだけで魔導師ランクは最低でもB。それに加えて、魔法とは違う戦闘技能を持っていて」

「それを使えばクイントと互角かそれ以上。それに家事が万能で、手抜きが無い。料理が美味しいし、その隙間を縫って勉強した試験の結果は十分合格圏内。物件的にはお買い得ね、クイント」

「それでも、あんな子供を私達の仕事にはまきこみたくないのが本音よ。あれぐらいの子は、学校に通って。そう言う日常の幸せに居て欲しい。あの子たちみたいに」

「……そうね」

「あ、クイント隊長。メガーヌ隊長。始まるらしいですよ」

先程から浩樹の試験の監督をやっていた部下の子に言われ、モニターに目を移す。私の時とは違う構えをした浩樹君は、開始のブザーと共に動いた。

Side：浩樹

ブザーと同時に動いた。見事に好きの無い構えを見せていたゼストさんに真正面から突っ込む……のではなく

「……………!？」

思いつきりバックステップを踏み、それに加えて上昇。

「アルハ!!！」

『準備出来てるよ!!！』

「上等!!！ レイズシュート、エクスキューションシフト!!！」

魔法陣。魔力球。完全に不意を突かれたらしく、まだ動かないゼストさんに向かって

「てえっ発射!!！」

問答無用で攻撃する。そこでようやく動き出すが、時既に遅く、ゼストさんが居る辺りを魔力砲撃が蹂躪する。

でもこの程度で落とせるなんて思わない。撃ち切った後、即座に次弾を用意し、

「発射てえっ!!」

放つ。

そして次弾も撃ち切り、荒くなった息を整えながら、それでも消えない闘気に口の両端がつり上がる。その場で反転。足を上に頭を下にして足場を作ると、

「行くぜ!!」

未だ爆煙が消えぬ中、そこから抜け出し、突撃して来たゼストさんに、今度こそ真正面から突撃した。

S i d e o u t

S i d e : クイント

戦闘が始まってから、この部屋に居る私達は無言だった。最初こそ、戦闘を見つつ評価をしていこうと思っていたけど戦闘開始直後にいきなり距離を置いての、遠距離集中砲火という予想外の展開に一気に置いて行かれた。

二回連続の遠距離集中砲火を行って見せた浩樹君もさることながら、それを耐えきるゼスト隊長もゼスト隊長。今はヒット & amp ; アウェイで近づいては離れを繰り返しているが、

「攻め切れてない、か」

「威力的には中の上位の砲撃とはいえ、あれを同時に複数。それも殆どチャージ無しにやってのけたんだから。ゼスト隊長じゃなくても、慎重になるでしょ」

チャージ無し。つまりそれは乱戦状態になろうとも、少しでも隙があるとなあの砲撃が来るかもしれないという事だ。普段の並みの相手ならともかく、相手は次元転送を一人で正確に行う魔力の持ち主。

その彼がここ暫く魔力を使わず、万全とも言える状態での戦闘だったのだ。

「二度撃つても、最低でも三度目があり得る」

「だからこそ攻めきれない。下手に攻めれば返り討ちにあうかもしれないし、かといって攻め無さ過ぎれば砲撃の餌食。これは辛い」

つくづく敵じゃなくて良かったと思う。いや、一度戦闘した時はあんな派手に……あ、なるほど。

「室内戦は苦手なのね」

「そうみたいね。あの火力で空戦技能に加えて足場も使った三次元機動。広い場所ならいざ知らず、クイントと戦ったような狭い通路は苦手みたいね」

「そうね。機械兵はあの接触封印と窒素装甲オフエンスアーマーで蹂躪してたらしいし」

「広い場所なら高火力と速度生かしてヒット& amp ;アウェイ」

「狭い場所でも装甲があれば力と封印でそれなりに戦える」

「おまけに情報処理とかもお手の物と来た。至れり尽くせりね、あの子」

「それって、あの子が入ってきたら、私いない子ですか!？」

半泣きになっている隊の新人の子。こういう所が相変わらず可愛い彼女の頭を撫でていると、電子音が鳴り響いた。

「なっ!？」
「えっ!？」
「へ?」

その瞬間、画面の中の戦闘が激化した。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

唐突に鳴った電子音。その意味する所がすぐには分からず、魔力で作った足場に着地して、ゼストさんの方を見ると雰囲気が変わった。

先程までより強い闘志。そして戦う前に言われた言葉を思い出した。

「ふむ。少し言われていた事と違うけど……まあいいか。アルハ!」
『オーライ!!』
『いつでも!!』
『プログラム』
『オフエンスアーマー空素装甲』、起動!!」

ハッキングを起動。そして、オフエンスアーマー空素装甲を身に纏う。

そして、足場を蹴って突撃し、鏢競り合う。先程まで触れただけで吹き飛ばされそうだった一撃だったが

「互角!？」

「そのようだな」

逆に突き飛ばし体勢を崩す為だった筈の一撃を、ゼストさんは見事にその場で耐えきってみせた。それにカートリッジを使う事無くだ。

驚きを見せる暇なく『ある事』に気が付き、直後に『ある事』が実行された。

「カートリッジ、ロード」

弾丸がはき出される。直後に魔力が上がった。その魔力はすぐに力に変換され、逆に突き飛ばされる。崩す筈だった体勢を逆に崩され、直後に振られたデバイスの一撃で、叩き落された。

息が詰まるが気合で目を開けてゼストさんの方を見据え、三度目になる砲撃を撃つ。

「レイズシュート、エクスキューションシフト!!」

最後に撃つ一撃。それに必要な物以外を撃ちだしてしまう勢いで、一撃を放つ。

それで距離を詰められるまでの時間を稼ぎ、その間に全力で作り上げたマテリアル・ハイを蹴って上へ上へ目指し、そして魔法陣を作り上げる。

「っし、アルハ！ 予定変更！ あれやるぞ！」

『人に向けて撃つ物じゃ……。まあいいけど』

「んじゃ行くぜ。収束開始！」

魔法陣の下に魔力が溜まり、魔力球が出来始める。

「カウント。10……9……8……」

S i d e o u t

S i d e : クイント

「収束砲撃!?」

「ちよつとクイント!! 聞いてないわよ!？」

「私だつて初めて知つたわよ!!！」

「お二人とも落ち着いて下さい!! 今はゼスト隊長の事を気にした方が!! 後はこの試験会場の事も!!！」

思いきり取り乱す私達三人を余所に、試験は終幕に向かう。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

「おおおおおおおおお.....!!」

「.....!!」

「おおおおおおお.....!!」

俺の収束砲撃がゼストさんのシールドと拮抗する。

まだまだ改良できるとはいえ、収束砲撃を防ぐってどんな硬さだよ！

撃ちながら愚痴り、そのガードを破る為、更に力を込める。

そしてどんどんと砲撃が細くなり、砲撃が途切れた直後に、爆煙の中から槍を振りかぶるゼストさんが現れた。バリアジャケットはボロボロ。ダメージは少なくない筈なのにまだ動けるタフさに感心しつつ、振られた槍を装甲を纏ったままの腕で防ぐ。

「はあっ！！」

拳を振り下ろす。俺のが上に居る以上、ポジシヨ的な優位は俺にある筈なのに、それを防いだゼストさんは槍で俺を飛ばし、距離を詰めて来た。同じく距離を詰め、俺の拳とゼストさんの槍がぶつかる寸前に、俺とゼストさんの間に道が出来た。それが壁になり、お互いの攻撃は届かない。

「これって……」

「ナカジマか」

「そこまです。ゼスト隊長も浩樹君も。これは実戦じゃないんですから」

ウイングロードが消え、ゼストさんと目が合う。そして、二人で降下し床につく。

そこで、限界だったらしく、足から力が抜けその場にへたり込んでしまった。溜息をつかれる。

「じゃあ浩樹君。この後、試験結果を発表します。合格していたらその後面接。それまでゆっくり休むといいわ」
「はい……」

力が抜けてきて、その場に倒れた。

S i d e o u t

S i d e : クイント

やっぱり。そう思い、溜息をついて、浩樹君を抱えあげた。歳の割に重いのは筋肉が付いているからだろう。それだけ鍛えたという事だ。

ゼスト隊長を見ると、床に座りつかれた色を見せている。

「強かったですか？」

「ああ」

今までこの試験でゼスト隊長をここまで消耗させた受験生もいない。少なくとも、私が覚えている限りは。

「では？」

「……ああ」

そう言って、ゼスト隊長は私の腕の中ですやすやと寝息を立てている浩樹君を見た。

らしくも無く少しだけ笑って言った。

「合格だ」

第三十四話　〜試験〜（後書き）

完全オリジナルならともかく、原作含めて資料が少ないゼスト隊が異常に書きづらい……ごまだれです。

浩樹入局試験でした。無事合格しましたね。

これからはぼちぼち事件でも入れてこうかなと。

P・T・事件が5月上旬に終わったとすると、現在海鳴組は8月ぐらい。夏休み真っ盛りですので、それについても書くつもりですが……。

どうにも展開がつかめなくなってきました。作者なのに

ここまで読んで下さってありがとうございます。ごまだれでした。

今回はここまでです。以上、ごまだれでした。

第三十五話 試験後と一方その頃

Side: 浩樹

「かんぱーい!!」

チンツと音が部屋に響き、全員が手にしていた飲み物を口にした。

現在。俺はナカジマ家でパーティーをしていた。

主催はスバルで、その主催者本人によって書かれた垂れ幕には「
ヒロ兄。合格おめでとう！」

」の文字。

そう、無事に管理局の入局試験、並びにゼスト隊入隊を果たした俺の為に、スバルが企画をしてギンガやアリシアと共に準備をしてくれたのだ。

とは言ったものの。

「ヒロ兄、大丈夫?」

「あ、ああ。大丈夫、大丈夫」

隣に座るスバルに苦笑いで返す。

スバルが行うといい、始まったパーティー。これ自体は凄く嬉しいのは本当だ。

それでも、実際に今、テンションが高いのは参加者のうち、企画準備をした三人だけだったりする。先程、乾杯と言ったのも、この三人だけだ。

残りの参加者。俺とクイントさんとゲンヤさん。それにメガーヌさんにその娘のルーテシアちゃんはローテンション。というより、俺だけがローテンションでその他の人達は普段通りだ。

管理局に所属しているため、立場上、派手に騒いだりできないクイントさん達。ルーテシアちゃんに関しては夢の中。

そして俺はと言えば

「大丈夫、浩樹？ まだ痛むの？ 筋肉痛」

「は、ははは。平気に決まってるだろ」

「えい」

「ぐおおお……」

ゼストさんとの実戦形式の試験が行われたのは五日前。

幸い（？）以前のように、魔力や体力の消耗により一週間、一カ月

など長期間眠り続けることはなかったが、以来、筋肉痛のままだった。

寝ても覚めても痛みに苛まれ、家事はまともに出来ないし鍛錬なんてもつてのほか。それでもやれる範囲ではやったけど……。

そんな訳で。企画準備の三人以外、パーティーの最初の頃こそ静かだったけど、暫くして、お酒が入り始めた辺りから、徐々におかしくなっていた。

「ねえ、これ着てくれない？」

そう言って、メガー又さんが俺に差し出したのは女性物の服。

まあ、女性物の服というだけならいい。着せられた事あるから、免疫があるという言い方はおかしいけど、普通に着ない事も無い。

だが。だがだ。

「メイド服は無いです。メガー又さん。ありえないです」

そう、メイド服だったら話は別だ。おまけにミニだし。

メイドは普通ロングですよ。……何の話をしているんだろう、

俺。

「とにかく着ませんから」

「上司命令よ？」

「明日からです」

「じゃあクイントの命令」

「勝手に人になすりつけないでよ、メガーヌ」

ジト目でメガーヌさんを睨むクイントさん。そういえば、両方顔が赤い。

視線を下げると、結構な数の空き缶が転がっていた。

「まったく……」

「メガーヌさん。酔うなら飲まないで下さいよ」

「酔ってないわよ？」

「素面なら俺に女装を進めないで下さい」

「じゃあ、酔ってるわ」

「はぁ……」

「それにメガーヌ」

そしてどこからともなく、新しい衣装を取り出した。

因みに、ギンガとクイントは準備の疲れで既に夢の中。ゲンヤさんも明日仕事だからともう床に着き、アリシアは

「えっと、カメラの準備は出来てる。録画も撮影準備も……」

「てめえ！ アリシア！！ いい度胸してるな！？」

「まあまあ、浩樹。浩樹が女装すれば皆幸せだよ？」

「俺は不幸だよ！」

撮影準備を整えていた。恐らくアル八監修なのだろう。

溜息をつき、自室に戻ってさっさと寝てしまおうと立ち上がった途端、取り押さえられた。

ただでさえ筋肉痛で痛む体に鞭が打たれ、悲鳴を上げることすら出来ず、無言で悶絶する羽目になった。

「よし、大人しくなつたわね」

「クイント。ここはいつそのこと、両方着せましょう」

「そうね。そっちの方が早そうね」

「あ、それなら私も着て欲しい服が」

「早く持ってくるわいいわ」

ああ、これは駄目だな。そう悟り、すぐに諦めた。

筋肉痛がなければ抵抗もするけど。まあ、女装するだけだしな。
でもやっぱり溜息をついた。

S i d e o u t

S i d e : 佳奈

「はっ」

隣に座っていた高町さんが唐突に顔を上げた。首を傾げつつ、高町さんが見ている方を見たけど、何も無い。

高町さんに視線を戻したら、高町さんはわなわなしていた。何故？

「どうかしたの？」

今、私と高町さんは明日の国語のテストの為に勉強をしていた。

元々は高坂君が教える立場だったみたい。それにしても。

「本当にどうしたの？ 高町さん。変だよ？」

「佳奈ちゃんって言葉丁寧でも、結構ストレートだよね」

「それで？ どうしたの？」

「しかも普通に無視するし。まあ、それはいいけど……。佳奈ちゃん」

「？」

高町さんの顔が近くに寄った。それに合わせて下がる。

「何で下がるの？」

「いや。普通に近いからね？ で、どうしたの？」

「今」

「今？」

「浩樹君が女装した気がするの。メイド服」

「……」

さーて、勉強勉強。えーと、何何？

「傷付く！ 普通に傷つくよ!？」
「ごめん。私には高町さんみたいな超感覚は持ってないから」

そこで、ふと携帯が鳴った。メールの着信を告げている。

手に取って、画面を見ると、『月村さん』の文字。表示されている件名には『今、大変な事が!』の文字。

躊躇いつつ、それでも見ない訳にいかず、メールを表示した。

『From: 月村さん』

Title: 今、大変な事が！

Text: 浩樹君が女装した気がするの！ メイド服!』

携帯を閉じた。そこで、再びメールが来た。

もうやだ、と思いつつ、画面を見ると『バニングスさん』。件名は『さつき、すずかが』

メールを開いた。

『From: バニングスさん』

Title: さつき、すずかが

Text: 変なメールがいったと思うけど、気にする必要はないわ。まあ、多分なのはも同じ事を言ってると思うけど。いつもの事だから』

「……………」

メルメル。

『To: バニングスさん

Title: Re: さつき、すずかが

Text: バニングスさん、大好きです』

心のオアシス的な意味で。多分高坂君もそんな風な好きだったと思います。

暫くしてから返信が来た。

『From: バニングスさん

Title: 何言ってるのよ!!

Text: 急に何を言い出したのよ! 思いっきり、むせて鮫島に変な目で見られたじゃない!!』

むせたんだ。うーん……。

『To: バニングスさん

Title: Re: 何言ってるのよ!!

Text: 好きななんです!! 誰に何と言われようど、この気持ちは抑えられません!!』

送信つと。

着信。メールを開く。

『From: バニングスさん

Title: ……

Text: え? ごめん。急にそんな事言われても……。ほら、まだ知り合っただばかりだし』

……確かに友達になってそんなに日は経ってないけど。友達のこと、大好きって言っただけならまずいのかな?

でも、気持ちは口に出さないと伝わらないって、何かで読んだし。

『To: バニングスさん

Title: Re: ……

Text：そんな事言われたって、困ります……。私は本気で
すよ』

送信。

暫くして、着信。何故か月村さんからだった。

『From：月村さん

Title：告白？

Text：アリサちゃんから佳奈ちゃんから告白されたって相談
されたんだけど、ほんと？』

『To：月村さん

Title：Re：告白？

Text：告白って何の事ですか？ 確かに、バニングスさんに
は私の気持ちを伝えましたけど』

暫くして。

『From：バニングスさん

Title：紛らわしいのよ！！

Text：真面目に悩んだ私が馬鹿みたいじゃない！！』

何故か怒られた。首を傾げつつも、バニングスさんにごめんなさいメールを送って、私は再び勉強に戻った。

「あの、佳奈ちゃん……無視ですか？」

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

「疲れた……」

『お疲れ、浩樹』

ようやく終わった強制コスプレイベントが幕を閉じたのが大分前。そして、酔いが回ったのか、クイントさんとメガー又さんが就寝。アリシアもホクホク顔で自室に戻り、俺はと言えば剥ぎ取られたままどこかにいった私服の代わりにメイド服のまま、洗い物をしたり目が覚めて泣きだしたルーテシアちゃんの面倒を見ている間に気がついたら、空が白んでいた。

「寝てねえ」

『それにしても、浩樹。メイド服似合うね?』

「別段嬉しくないぞ。それにメイド服はロングしか認めない」

『九歳にしてそのこだわりは如何な物だろうね』

「……ノーコメント」

着替える為に自室に戻り、メイド服を脱ぎ捨てて少し悩んでから管理局の制服に身を包んだ。

姿見で自分の姿を確認する。

「メイド服の方が似合う……」

『自分で言っちゃ世話ないね』

「てか、異常に似合わないんだ。着られてる感じ」

『それは確かに。背伸びしてる感じだよね』

溜息をつく。まあ、メイド服の方が似合うという事実は若干心に響くが、それ以上に自分が管理局の制服に身を包んでいる事は純粋に嬉しかった。

「今日から同員だな」

『そつだね』

「なんか、魔法と出会った時はこんな事になるなんて思いもしなかったが」

『そっか』

「ま、それはいいんだ。アルハ」

『何？』

「これからもよろしくな」

『当然！ 浩樹の無謀を、勇気に変えるのが私の仕事だよ！！』

第三十五話 〱試験後と一方その頃〱（後書き）

海鳴組を書いていた方が筆が進む・・・ごまだれです。

という訳で晴れて管理局員になった浩樹です。アリシアはまだですが。

今回は海鳴組の事件を一つ書いてから、浩樹サイドのオリジナルの事件でも書くつもりです。

それにしても……季節的にまだ海鳴組は夏。A・Sは遠いです。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました

以上ごまだれでした。

第三十六話 くらぶくらぶ 前編 (前書き)

他の魔法少女作品が出てきます

携帯で書いたものなので、行間がいつもより空いていません。
これから、多分そうなるかもです。

大分派手に改稿しました。

第三十六話 　C・C・K 前編

Side：佳奈

「あれ？　これって……」

日曜日。普段なかなか出来ないから、いい機会だし掃除をしようと思ったのが今朝の事。

そして間にお昼の休憩を挟みつつ掃除をして、今掃除をしている場所は高坂君の部屋。

それも殆ど終わり、最後に押入を掃除している時に、それを見つけた。

「……杖？」

持つ部分がピンク色。そして上の部分に星が輪の中に入っていて、その輪は外側に羽が着いていた。

「手に持ってカード相手に『封印解除！』とか叫びそうな、この杖はいつたい？」

ついでだしカードも無いかななんて思って、更に押入を漁っていく。

そして、見つけた。

本の中に仕舞われたカード達。その一番上のカード。それを手に取って、ドキドキしながらそこに書かれた文字を読んだ。

「う、『ウインディ』……」

……何も起きない。だよねえ、なんて思いカードを仕舞おうとして、それは起こった。

風が吹いた。漫画のようにそれこそ、カードを根こそぎ飛ばしてしまうような強風ではなかったけれど、淡い風がそのカードを中心に吹き抜けた。

「……え？」

い、今の扇風機の弱かもしかしたらそれに満たないかもしれない程度の風はいつたい！？

隙間風ですか！？ いえ、それにしても静かでしたし、このカードから吹いてる感じでしたし！？ って事は、つまり？

「ほ、本物！？」

それはつまり、『カード ヤプター佳奈』が

「始まらないです」

始まるわけ無いじゃないですか。だってカードかばらまかれてませんから。カードをキャプチャーする必要がありません。

それにその必要があっても、あの程度の微風しか吹かせられない時点で、私には無理です。

という訳で、私は溜息を一つついて、カードとステッキを元の場所に仕舞った。

その時はそれだけの事で。でもこの事があんな事になるなんて、このときの私は思いもしなかったんだ。

S i d e o u t

S i d e : アリシア

あまりに暇で、ふとある事を思い出した私は、腕についているブレレットに声をかけた。

無くしたと思ったんだけど、浩樹とアルハが見つけてきてくれたものだ。今度は無くさないように、大きさを調節して、ぴったりと自分の腕に着くようにしてある。

「ねえ、アルハ」

『ん？ 何、アリシア？』

「前にアルハザードで話してくれた浩樹の昔話の続きが聞きたい」

『随分唐突だね』

「思い出したからね。今、暇だし」

スバスとギンガは学校。浩樹とゲンヤさんとクイントさんは管理局。私と言えば、家事をしていたのはいいんだけど、それも一段落ついた。

それであまりに暇で、ふと、昔こんな状況だった時にアルハから怖い話もどきの浩樹の過去話を聞いていたから、その続きが聞きたくなっただけ。

「と言う訳でお願いします」

『いいよ。どこまで話したっけ？』

「浩樹が枯れ井戸に降りて、横穴を見つけて、入って行った所まで」

『了解、じゃあ、その続きからね』

呻き声が聴こえる人喰い井戸とも呼ばれた、森の奥の枯れ井戸。そこに降りた俺は、そこで横穴を見つけた。ずつとずつと。先が見えない位に続く横穴に俺は足を踏み入れた。

Side out

Side：佳奈

「魔法？」

翌日の月曜日。昼食の席で私の質問にバニングスさんが怪訝そうな声を上げた。

「うん。あると思う？」

「あると思うって言われてもねえ。私はそういうのは専門外よ。なのはかすずかに聞きなさい」

「わ、私も専門外だから、すずかちゃんに聞いた方がいいと思うな
！！」

何故か慌てた様子でそう言う高町さん。

しょうがなく月村さんの方を見た。因みに席順は私の隣にバニングスさんと高町さん。そして高町さんのさらに隣に月村さんが座っている。

だから自然と身を乗り出す。月村さんは「魔法かあ」と呟いた後、少し考えてから

「あるかは分からないけど、あつたら素敵だと思うかな」

とそう言った。

「ていうか、なんでアンタは急にそんなことを言い出したのよ？」

「うっ。え、えーと……」

バニングスさんの疑問も尤もだ。

どうにか誤魔化そうと考えに考えて。出て来たのは

「き、昨日読んだ本が魔法使い物だったから」

と当たり障りのないものだった。

Side out

Side：アリシア

横穴を歩き続け、たどり着いた場所はドアだった。おまけに脇にはチャイムもある。

一般家庭の玄関のような普通の扉なのに、この空間の中での日常的な光景は、純粹に違和感しかなく、その違和感は俺が抑えていた恐怖心を煽った。

その場で何度か深呼吸。冷たい空気。そのお陰で冷静さを取り戻せた。

そして。俺は一息でドアの脇にあったチャイムを押し、全く待たされずそのドアは横に開け放たれた。

「いらっしゃいぞな」

妙に語尾の白衣を着た爆発頭。そいつに出迎えられ、ついて行けない頭でとりあえず真っ先に思った事を突っ込んだ。

「そのドア。観音開きななのな」

「なにそれ？ 地底人？」

『聞いて行けば分かるよ』

何やら予想外の展開になってきた浩樹の過去話。

すると、ガチャリとドアが開いた。ビクツと肩が跳ね、玄関から私がいるリビングに通じるドアを開けた主を見た。スバルだった。

「駄目だよスバル。ちゃんとただいまって言わなきゃ」

「言ったよ？」

「あれ？」

『言ったよ』

「気が付いてたんなら教えてよ！！」

怖がって損した。

その後、スバルといいタイミングで帰ってきたギンガを交え、浩樹の過去話は続いていく。

S i d e o u t

S i d e : 佳奈

魔法使い物の本を読んでと誤魔化した後、いつも通りの授業を終えた放課後。特に塾など無いらしい高町さんと一緒に帰った私は、自宅の前で高町さんと一緒に途方に暮れていた。

(どうしよう。変態だ。変態が家の前に立ってる)

爆発頭。ヨレヨレの白衣。瓶底のように分厚いレンズのメガネ。正直なところ、近付きたくない。でも、あんな形なりでもおじいちゃんとか高坂君の知り合いかもしれない。

兎に角、高坂君とずっと一緒にいた高町さんに見覚えがないか聞こうと、横を向くが、そこには誰もいなかった。

「どちら様ですか？」

先程まで隣に立っていた筈の高町さんの声が、前から聞こえてきた。

まさかなあ、と思いながらそちらを向いた。高町さんがいた。変態さんのそばに立っていた。しかも、さっきどちら様ですかって聞いてた。つまり、つまりだ。

「なにやってるの高町さん!？」

ほえ?と返す高町さんに慌てて近づいて、腕を取って無理矢理変態さんと距離を開けさせると、背中に庇った。

「知らない変態と話したら、変態に……ごめん」

「なんで謝られたの!？」

「……それで!! 家に何か用ですか!？」

「無視!？」

「ねえ！！　ねえ！？」と背中を引つ張る誰かを華麗に無視しつつ、私は門の前を陣取る変態さんを睨みつける。
変態さんと言えば、意外そうな顔をしていた。そして、逆に私に問いかけて来た。

「家にという事は、ガールはここに住んでいるぞな？」

「……そ、そうですね」

「ふむ、同志浩樹は祖父と二人暮らしと聞いていたぞな……」

「……！？　浩樹君の知り合いなんですか！？」

私の事を引つ張っていた高町さんが身を乗り出して、変態さんの方を見た。

そんな変態さんは、高町さんの方を暫し見て、何かを考えてから、柏手を打った。

「ガールが噂の高町なのはぞな？」

「ほえ？　私の事知ってるんですか？」

「当然ぞな。同志浩樹から色々聞いてるぞな」

「い、色々？」

顔を見なくても分かる。高町さんの顔は間違いなく引きつっている。

そして、そんな引きつっているであろう顔が見えている筈の高町さんを見無視して、再び変態さんは家の方を向いた。

「同志浩樹は留守ぞな？」

「あ、はい。そうですね」

「何とか、連絡を取りたいぞな。連絡先を教えてくださいな？　携帯が繋がらないぞな」

そう言つて、携帯の画面を私達に見せた。一応聞いている浩樹君の番号と同じ物。

高坂君が見ず知らずの人に携帯の番号を教えるとも思えないし、この人も同志つて呼んでるくらいだから、本当に知り合いなのだろう。

でも……。

「同志つて、何のですか？」

「む？ CCS同好会ぞな」

「あれ作つたの貴方ですか！？」

「おお！！ つまり昨日夕方振りに起動の反応があつたのは、てっきり同志浩樹が起動させたが、ガールが発動させたぞな！？」

「は、はひっ！？」

いきなり近づかれて、思いきり声が裏返つた。

そして反射的に手が動き、変態の顔を一闪。笑顔で飛んで倒れた所に止めを刺さんとして何度も何度も踏みつける。

「ちょ、ちよつと佳奈ちゃん落ち着いて！！」

後ろから高町さんにはがいじめにされ、無理矢理引きはがされる。暫くして起き上がった変態は、何故か満面の笑みだった。

思わず舌打ち。「佳奈ちゃん！？」と高町さんに言われたけど、気にしない。変態はニヤニヤしてる。

「私の業界ではご褒美ぞな、美少女よ」

ガールから美少女に格上げになつたらしいけど、そんな事どうでもいい。この変態にいかにして止めを差すか。それだけを考える。

……踏んで駄目なら蹴るか。

「それも業界ではご褒美ぞな。だけど、今は一刻を争うぞな」

心を読まれた私が嫌そうな顔をしているのにもかかわらず、そう
言って、変態は私の手を取って

「それじゃ行くぞな」

思いつきり連れ去り始めた。

「佳奈ちゃん!?!?!?」

叫ぶ暇があつたら助けを呼んで欲しい。

そんな事を思いながら、私は転ばないように暫く走った揚句、ス
クーターに乗せられて、変態と一緒に夕暮れの街をドライブする羽
目になった。

687

Side out

Side:アリシア

い。 どうやら俺が足を踏み入れてしまったのは変態の住処だったらし
い。

個人的にすぐにでも回れ右して帰ってしまいたいけど、「久しぶ
りの来客ぞな!」なんてきらきらした顔で言われたら、キモいけ
ど流石に帰り辛い。

「どうぞぞな？ 我が家は？」

「すげえの一言だな」

「褒められて光荣ぞな」

どうやら褒めた事になってしまったらしい。ドン引きって意味だったんだが。

そんな他人の家でドン引きするなんて結構珍しい事態に陥っている俺の視界には所狭しとフィギュアとかポスターが貼られていた。

これが数種類、数十種類のゲームやアニメやらなら別段驚かないかもしれないが、これがアニメ漫画含め、一つの作品のみと言うのは、流石に……。

「何でCCS……」

「おお！ 知ってるぞな！？ あれは魔法少女物でも最高峰の

」

「アンタが好きってのは分かったから帰っていいか？」

「まあ、待つぞな」

そう言ってさらに奥の方に招かれた。ダイニングなのだろうか。テーブルが一つに椅子が四つ。でも、一つの席以外薄く埃が被っているから、多分あるだけなのだろう。

変態はその内の一つ。埃が全くかぶっていない、椅子に座った。溜息をつき対面の椅子の埃を払ってそこに座った。

「さて、CCS好きに悪い奴はいないって信じてるぞな」

「そうか。良かったな」

「だからボーイも悪い人じゃないぞな」

「……俺は高坂浩樹だ」

「これは失礼。同志浩樹も悪い人じゃないぞな」

「同志って言うな！！」

突っ込みを入れる。そして、溜息を一つついて、俺は頭をガシガシと乱暴に掻いた。

そして、辺りを見渡す

「なんだって、こんな所に一人で暮らしてるんだ？」

「大人の事情ぞな」

「そうかい。ならそれについては聞かない。もう一つ」

「なんぞな？」

再び辺りを見渡した。所々にインスタント食品の包装などが転がっている。

「まともな物、食べてるか？ 後ゴミ捨てるよ」

「最近のインスタント食品は馬鹿にならんぞな？」

「……はあ」

溜息をついて立ち上がる。そして、辺りのごみを片付け始めた。ついでに、今から作るうと思っ食事を考える。

「おもむろに掃除を初めてどうしたぞな？」

「此処に居ると息が詰まるから、せめて掃除と、後腹が減ったから食事を作るうと思っただけだ」

「まるでエロゲーの世話焼きな幼馴染ぞな」

「安心しろ。ごみは捨てて来てやるが、食事は俺の分しか作らん」

「……ま、まあ、子どもが作る料理なんて高が知れてるぞな」

「毎日家事してるからな。そんな所そこの子どもよりは美味いぞ」

無言になった。同じように黙る。

そして、暫くして

「調理場所と食材代提供するから、吾輩のも作って欲しいぞな」
と、そう言った。

「CCSって何？ 何で浩樹はこんなに甲斐甲斐しく変態の面倒を見てるの？」

私の言葉に、両脇に座るナカジマ姉妹がうんうんと同意した。

『浩樹に聞いて？』

「答えになって無い！！」

「CCSはその頃、俺がハマってたアニメだな。面白かったぞ。甲斐甲斐しくの部分は、俺はそんなつもり無いんだが。食事代提供されなかったら作らなかつたしな」

唐突に後ろから聞こえた声に、私達は一斉に振り返った。当然の如く、声の主である浩樹が立っていた。

「ただいま。そして、何を聞いているんだ？」

「……ア、アハハ……」「」

苦笑した私達にとりあえずデコピンを一発ずつお見舞いした浩樹は

「着替えてくつから、覚えてるよ」

そう言ってリビングを出て、自分の部屋に向かった。
残された私達は

「お、怒ってるよね？」

「みたいだね……」

「き、今日の浩樹の仕事って何だったけ？」

「お、お風呂掃除じゃなかったかな？」

「よし！ 私達でやっちゃおう！」

オー！！ と浩樹のご機嫌取りの為の行動を開始した。

S i d e o u t

第三十六話 くらくらくら 前編（後書き）

CCS面白いよね！ ごまだれです。

佳奈サイドの事件って何がいいかなあと思っていたところ、ふとバスの窓の外をよぎった怪獣の文字。怪獣、魔法少女、怪獣、魔法少女……あ。

という訳で、二次創作でCCSのパロをするという何ともあれな事態になったと共に、『第二十六話 くららの日常と番外編』の続きを若干書くという無駄に詰め込んでしまったような回になった今回。

前後編ならいいなあ

ちなみに行間なのですが、携帯で書いたものなので、いつものように開けていません。

今回はここまでです

ここまで読んで下さってありがとうございますございました。

では次回。ごまだれでした。

読みづらいという意見があったので、改稿しました。

改めてみたら、確かに分かりづらかったですね……。

第三十七話 〽 C・C・K 中編 〽 (前書き)

色々と解せぬ…

第三十七話　く・く・く　中編

「まあ、あがるぞな」

「……はい？」

変態に誘拐されました、私、高坂佳奈は現在、郊外の森の中にいる。

そして、あがれと言われたその場所は、周りになにもない空き地だった。

「あがれって。何処にです？」

「ここぞな」

そう言って変態は地面の一部を持ち上げた。そこには、下へ向かう為の梯子があった。

「帰る」

「まあ、待つぞな」

振り返るが、肩を捕まれた。

その瞬間、我ながらなかなかの体捌きじゃないかと思うくらい滑らかに動き、肘鉄を変態の鳩尾あたりに突き立てた。

いくら「褒美」でもやっぱり痛いらしく、地面に虫のように丸くなっている。見えている顔は恍惚の表情だが。

そういえば後で蹴るといふ約束をしていたことを思い出した。でも体勢的に蹴りづらい。

「しょうがないか」

顔を踏む。そのまま、ぐりぐりと踏みにじる。

……何だろうか。この気持ち。

「はっ」

慌てて離れて深呼吸。

そして、私は変態じゃないと自己暗示をかける。しばらくそれを続け、ようやく落ち着いて視線を変態に戻すと、変態は既に立ち上がり、恐らく自分が格好いいと思うポーズを決めていた。

それを見ると、「死ね豚」など様々な罵倒をしながら何度も踏みつけたくなったが、その衝動は何とか抑えた。

「さて、御主人様の足を堪能したところで、そろそろ行くぞな」

「誰がご主人様だ。調子に乗るなよ変態豚が」

「おおっ」

身悶えしだした。ああ、もう本当に。

「罵られて悦ぶなんて本当に変態ね。ほんの一時でも貴方なんかと同列に扱われた豚が本当に可哀想に思わない？ 思うなら懺悔しなさい」

「す、すまんぞな。全国の豚」

「地球上最底辺のヒエラルキーの貴方が豚さん相手に呼び捨て？ふざけてるの？」

「す、すまなかったぞな、全国の豚さん！」

「フアアック！！様でしょう!？」

「すまなかったぞな、豚様ああ！！！！！！」

「アハハハハ！！！！いい様ね！！」

Side out

S i d e : 浩樹

「む?」

『どうかした?』

「……いや、気のせいだろう」

どこかで唐突に誰得のSMが始まった様な気がしたけど、半ば願望を混ぜつつ、俺はそう言った。ゼスト隊での仕事をするようになってから、家事はクイントさんと分担するようになった。

今日は夕飯を作る役をクイントさんがする為、俺は風呂掃除とかをするはずだったんだけど、それはギンガとスバル、アリシアがそれを見事に終わらせており、手持ち無沙汰な俺は一部からナカジマ家三人娘と言われるようになった三人と一緒に珍しくアニメを見ていた。特別理由はなく、純粹にこの後やる情報番組が見たいだけなんだけど始まったら始まったで、一番ガチで見ているのは俺だった。いや、だって。あいつの影響もあって、かなり好きになったアニメだったし。

『面白いよなあCCS。アニメの方、カード多くて頭が混乱してるけど』

『私は桜ちゃんの衣装がカラーで見れたから満足だったけど』

『すまん。俺はアニメ見てから漫画だったから。ただ放送の時間帯的に見れなくて、ビデオをレンタルしてたけど、結構な頻度でテープが部分的に駄目になってたな』

『あるある。最近だと、DVDも傷付いてて見れなかったりするよね』

『DVDデッキなかったから、それは分からないな』

そんなやり取りをしながら、見続け、当然のように三十分ほどで

番組は終わった。

その後目当ての情報番組が始まったのだけど、俺はスバルに絡まれていた。かなりCCSが気にいったらしく、色々話しかけてくる。俺が話しても良かったけど、とりあえずアル八に振るよう言い、俺は情報番組の方を見る。

それでもアル八とスバルの会話が耳に入り、俺はふと、あの事を思い出した。

「そう言えば、実家にカードと杖のセットがあつたな」

「「「……!?」」」

ガバツと振り返ってきたナカジマ家三人娘。スバルはともかくとして、アリシアとギンガまで振りかえって来たのは……。

「勘違いするなよ？ 貰った物だからな？」

間違っていない。お近づきの印ぞなとか言って渡された物だ。最も、封魔の影響なのか俺には扱えなかったが。

「そんな事どうでもいいです」

「それは地味に傷つくぞ、ギンガ？」

「問題は浩樹の持つてるそれが本物かどうかで事だよ」

「まがい物に決まってるだろ。まあ、多分アリシア含めて、起動は出来ると思うけど」

「本当に!? 私も!?」

「ああ。スバルも勿論出来るさ」

スバルとギンガはもちろんのこと、アリシアにだってEが良くてもDランク程の魔力はあるから何の問題も無く起動できる筈だ。

仮に封魔の封印が働いていたら、解除すればいいだけだな。

「でも、何でそんな物持つてるの？ 自作？」

「貰った物って言っただろ、アリシア。俺が偶然知り合った変態科学者がCCSのファンでな。そいつが自作したんだ。最も、杖なくとも発動できるけどな」

「い、今からでも手に入りますか？」

「ん？ ああ……ちよっと待って」

席を立つ。そのままクイントさんがいるキッチンに向かった。

「クイントさん」

「ん？ どうかしたの、浩樹」

「ちよっと時空転送していいですか？」

「コンビニに行くノリでとんでも無い事聞いてくるわね、貴方」

だって、体調万全だし、アルハもいるから正直コンビニ行くノリで出来なくもないし。

なんて、口に出すことはしない。クイントさんは暫く悩んでから、
「理由は？」と尋ねて来た。

「ちよっと実家に帰って荷物を持って来ようかと」

「……はあ。何で今までしなかった事を、今しよつと思ったの？」

もうすぐ夕食よ？」

「三十分で帰ってきます」

「十分もしないで出来るわよ」

「じゃあ、通路を繋げてもいいですか？」

「通路？」

はい、と頷いて、前々からアルハと一緒に組んでいた物質転送用

の魔法陣の応用で作った魔法陣を作った。
首を傾げているクイントさんに、解説を始める。

「これ、遠くにある物をその場に居ても取れるようになって作った物なんですよ」

「具体的に言つと？」

「転送魔法を応用して、強引に言えばゲートを挟んで体の一部を転送させる魔法なんです。つまり」

そう言つて、俺は魔法陣に手を入れて、クイントさんの背後に出
口を作り、そこから手を出して、クイントさんの肩を叩いた。

振り返ったクイントさんは一瞬驚き、すぐに溜息をついた。

「便利かもしれないけど、余り若いうちからこういうのは使わない方がいいわよ」

「分かってますつて。まあ、正確な座標が分からないといけないですし、あんまり重い物は持って来れないですから、使うか使わないかで言つたら殆ど使いません。それに、これ使つてる時は俺、動けませんから。手を抜かないと」

手を抜く。手首を回したりして、違和感が無いか確かめる。

「という訳で、これを使いますので、通路を繋げてもいいですか？」

「はあ、それならいいわ」

「ありがとうございます」

頭を下げてダイニングに戻る。デバイスを起動して、キーボードとディスプレイを出してかなり正確な単位まで、座標を纏めていく。

「さつて、手首だけとはいえ、久しぶりの帰省だな」

『閉まってあったのって押入れだっけ？ 誰かが開けた瞬間、手首が中空に浮いてたら、かなり驚くよね』

「まあ、じいちゃんなら冷静に攻撃してくるだろうな」

『だよねえ』

「んじゃ、やりますか」

『了解』

「プログラム『ゲート』起動。入口、並びに出口を設定」

俺の右前位に再び魔法陣が出来た。

「よっし。じゃあ、アルハ。映像は問題ない？」

『デバイスから画面に。ちゃんと出力出来るよ』

「了解。確認した。んじゃ、入れるぞ」

そして、俺はデバイスのついた右腕をゲートに入れた。

700

Side out

Side: 佳奈

「……………」

「げ、元気出すぞな？」

「誰のせいですかあ……………」

散々罵倒し、蹴ったりして、我に返った時、私はその場にうずくまって泣いた。本気で泣いた。

ああ、変態になってしまったと思って、本気で。

流石にご主人様とか言ってもらえなくなっただからか、変態さんも私

を家に上げると、ホットミルクを出してくれて、散々罵った事への罪悪感から更に泣いて、既に一時間ほど経っていた。

いい加減泣き止み、私は完全に冷めているホットミルクを啜っていた。

「すまんぞな。吾輩も調子に乗って……」

「いいですよ。全部私が悪いんです」

カップをテーブルに置いた。そして、ふと、此処に呼ばれた理由を思い出した。

「それで、助けて欲しいって何の話ですか？」

「おお。覚えておったぞな。実は」

ガンツと派手な音が壁の向こうから聞こえた。

解説を始めようとしていた変態さんは冷や汗を流しながらかたまり、私も何か嫌な予感がし始めていた。

「聞きますけど、あの音の主と関係してます？」

「あれを仕留めて欲しいぞな」

「なんですかその無理ゲーバリのミッションは！！ 不可です！！ 無理ですよ！！」

「カードが使えた美少女なら十分出来るぞな！」

「そよ風しか吹かせられないのに、私が出る訳ないでしょう！！ てか、そんな事、高坂君に頼もうとしてたんですか！？」

「知らないぞな？ 恐らく同志浩樹なら可能ぞな」

私と同じ年の男の子を捕まえて、よくもまあそこまで自身満々に言える物だと思うけど。

今まで静かだったのに、音は継続的に壁向こうから聞こえてくる。

「何で突然暴れ出したんです？」

「恐らく麻酔が切れたぞな」

「因みに聞きますけど、外見はどんな？」

「鵜を思い浮かべてくれればそれぞな。ぬらり よんの孫で出て来たのではなく、完全獣の姿の物ぞな。猿の顔、狸の胴、虎の手足、蛇の尾をもつ妖獣ぞな」

「CCS全く関係ありませんよね!？」

「最近CLAN ADも好きぞな」

「出て来たの本当に一時的なのに!! そして私は何も言っているんだらう!？」

もう訳が分からなくなってきた。溜息をついた。ホットミルクの残りを飲みほし、席を立つ。

「じゃあ、ごちそうさまでした」

「帰るのは許さないぞな」

「だから無理ですよ!!」

机を思いきりたたく。変態さんは意に返さず、懐から一冊の本と杖を取り出した。昨日、高坂君の部屋で見つけたあれだった。

「不法侵入!？」

「これさえあれば、君も魔法少女、ぞな」

「魔法少女の仕事は鵜を退治する事じゃないと思っただけ!？」

Side : 浩樹

右手をゲートに通して暫く。俺は首を傾げていた。

「無いな。アルハ、見つけた？」

『全然。それらしい物は何もないよ』

「おっかしいなあ？」

一旦手を抜く。ゲートを閉じて、腕を組んだ。

「閉まつて置いた筈だ。じいちゃんが出したとも考えにくいし……」

『あ、それじゃあ、あの変態の所にも、ゲート繋ぐ？ もしかしたらあるかもよ？』

「……そうだな。食事終わったら行ってみるか」

そう考えて、とりあえず俺はそろそろ配膳だから、それを手伝おうと思いきッチンに向かった。

Side out

第三十七話 く・C・C・K 中編く（後書き）

じ、十五禁……？ ごまだれです。

この作品の壊れてしまったキャラの筆頭は、作者的にすすかだったのですが、出てきてあまり間もない佳奈が追いついてきましたね。

そして全体的に他作品のネタが多い今回。書いてから気がついたんですけど、浩樹のこれって、まんまブラックキャットで出ましたよね。違いは氣か魔力かってだけです。ネギみたいですね。

まさかの三部になってしまったCCKも次回で最後です。佳奈がカードをキャプチャーする展開だけは無いです。まず間違いなく。

今回はこの辺で

ここまで読んで下さりありがとうございました

ではまた次回。ごまだれでした

第三十八話 く・C・C・K 中編 その2 (前書き)

言いたい事は色々あるかもしれませんが、とりあえず本編をどうぞ

第三十八話　く・く・く　中編　その2

Side out

Side：佳奈

「普通に美味しいですね……」

「当然ぞな、と言いたい所ぞなが、残念な事にある人物の影響で自炊を始めたのは一年ほど前の事ぞな」

「それって、高坂君ですか？」

「そうぞな」

あれから、帰る、帰らせないとお互いに一步も引かず、暫くして私のお腹が空腹を告げた。

顔を真っ赤にすると、変態さんは特に何も言うでもなく「良かったら夕飯を食べていくぞな」とそう言っつて、キッチンに向かった。

それから三十分ほどで作られて持って来られた料理が普通に美味しそうだつた事もあり、私達はテーブルを囲んでいた。

「……そういえば、名前を聞いてなかった気がします」

「ずっと変態呼ばわりだつたぞな」

「いや、普通に見かけ怪しいですからね？」

「おお、滅多に人前に出ないから忘れてたぞな。改めて見ると酷いぞな」

そう言いつつ、着替える様子はない。私ももう慣れたけど。

「それで、名前なんて言うんですか？」

「デイビットぞな」

「デイビットって……見かけ思いつきり東洋人じゃないですか」

「髪を染めただけぞな。外に出た時、視線を集めないように」

「はあ、そうだったんですか。それで？ 本名は？」

「それは美少女の為にも教えられないぞな」

訳が分からず、首を傾げた。

「それよりも」と変た……じゃなくてデイビットさんが言った。

「そろそろ危険ぞな」

「ああ、やっぱり。そうですね」

二人して同じ壁の方を向いた。ずっと鵜に体当たりを受けている壁は、どんどん歪んできていた。まず間違いなく、そろそろ破られるだろう。

はあ、と溜息をついて、ドアに足を向けた。

「帰ります」

「手遅れぞな」

最後に最も大きな音をたて、とうとう壁が破れた。

……ああ、本当だ。

「鵜ですね」

「鵜ぞな」

猿の頭。狸の胴。虎の手足に蛇の尾。まんま鵜だった。嘘だったらよかつたのに。

そんな嘘だったらよかつた鵜は私とデイビットさんの方を見て、猿の顔から涎を垂らしていた。その涎が当たった床が融けていく。鉄板だよな？

「鵠って溶解液出せましたっけ!？」

「鵠を想像すればいいと言っただけで、鵠ではないぞな」

「結構大事な問題ですよね!？」 少なくともあの溶解液の有無は何事にも変え難い位、大切な問題ですよ!？」

「サービスサービス、ぞな」

「このド変態!！」

ギャーギャー喚く私達（主に私）の耳に気味の悪い鳴き声が聞こえた。声の方に視線を送ると、当然のように、鵠もどきがいた。

文字通りの猿顔なのに牙を露出させ涎を垂らすその姿は何かシュールだ。

（ああ、お父さん、お母さん。もうすぐそっちに行く事になると思っています。出来ない娘ですいません）

謝り、目をつむり。そして、直後に私の前に何かが出て来た。

「ええ!？」

「ミッド式の魔法陣……。誰ぞな？」

そこから右足が出て来た。そこから、どんどんと体が出てきて、最終的に出て来たのは

「メ、メイド服？」

メイド服に身を包んだ子だった。

Side out

Side: 浩樹

おかしいなんてレベルじゃない。食事の途中に水が飲みたくなったらしいスバルが席を立つて、戻って来る最中に転倒。俺が頭から派手に水を被った事はいい。

先に食事が終わっていたから、そのまま席を立つてシャワーを浴びて。出て来た時には俺の着替えが無くて、先日のパーティーで着たメイド服があった。違いといえばミニだったのがロングになったくらいだ。

「……」

探す。探す、それ以外に着る物が一つも無い。それどころか、タオルまで体を拭く用なのか、小さなハンドタオルが一枚のみ。

「嫌がらせか！ 俺が何した!？」

「まあ、いいんじゃない？ 一応着れば？」

「良くないだろ!？ 一応でこの服着たくないぞ!？」

「女装癖あるから大丈夫じゃない？」

「そもそも女装癖自体ねえよ!！」

「えっ!？」

「何その反応!？」

はあ、と溜息をついた。とりあえず何か着ないと此処から出られないのは事実だ。

メイド服を手に取り、素早く身を包む。最後に髪を結び直して力チューシャをつければ完成。最後に姿見の前でクルリと一回転しておかしな所が無いか確かめる。

「よし、大丈夫だな」

『以外とノリノリだよ。浩樹さ』

「……心外だな。心が折れそうなくらいに辛いぞ」

『間があるよ』

溜息をついて廊下を通りリビングに入ると、お茶を飲んでいたゲンヤさんが思いきり噴いた。その後ろで、スバルとギンガとアリシアがお互いに向かつて親指を立てていた。何となく予想は出来てたけど。

溜息をつき、着替えるのが面倒になった俺はその場で夕食前に設定しておいた座標への移動用の魔法陣を作る。先程までと違い、俺一人なら悠々と入れる大きさだ。

「あー、クイントさん。出かけてきます」

「え？ ちょっとそのかつ「時空転送」」

そして足を踏み入れた。

移動先で最初に目に留まったのは俺を同志呼ばわりする変態……
改め自称デイビットと床にへたり込む同い年位の少女だった。

……ああ、なるほど。

「てめえ！ この変態！ とうとう女の子に手を出したな！！ 去勢するぞこら！！」

「久しぶりに会ったのに随分な言い草ぞな。そしてへたり込んでいる少女の視線の先を良く見るぞな」

「あん？」

デイビットに言われ、改めて少女の方を見た。少女の視線は主に俺と、俺の奥の空間に向けられている。そういえば、先程から気味の悪い声が聞こえていた。

振り返ると、頭が猿、胴が狸、手足が虎で尾が蛇の不思議生物がいた。重心を前に置き、前足と後ろ脚を曲げクラウチングスタートのような姿勢になっている。

「……鳩？」

と、そこでその体が動き、此方に向かってきた。

「これを使つぞな!!」

投げ渡された物を受け取ると、本に入ったカードと杖。探し物だった。

とりあえず杖を少女の方に投げ渡し、本の中のカードを全て取り出し扇状に広げる。其処から目当ての一枚を取り出して、中空に投げ発動した。

「『シールド
盾』!!」

見えない壁が鳩との間に立ちはだかり、暫しの拮抗の後、鳩の方が離れた。

その鳩を目で追いつつ、今後の作戦を考えていく。

(何とか……なるか。カードは発動するけど、安定してない。杖使わないと駄目なのか。てか、そもそも、何でわざわざこれで戦う必要があるんだ?)

ためしに砲撃を撃ってみた。何の問題も無く、真つすぐ砲に向かつて行った砲撃は、しかし砲に当たる前に何かに阻まれるようにして消滅した。

「何？」

思わず首を傾げた。その瞬間、先程の数倍はあろうかという速度で距離を詰められ、そのまま轢かれた俺の体が宙を待った。その衝撃で、カードが部屋の中にはばらまかれる。

「やつちまつたな」とぼそりと呟き、体が上昇を続けている間に今の攻撃での異常を全て確かめる。

（折れた骨はない……。ただ胸に違和感があるのは、ヒビは入ったか。流石に無傷ってわけにはいかないな。しかし、さっきのあれは一体……）

体が落下を始めた。そんな俺に再度突撃してきた砲を見ながら、俺はばら撒かれながらも唯一掴めたカードを発動した。

「頼むぜ、『翔』^{フライ}！！」

背中から羽が生えた。ありがたいと思いつつ、いつもの要領でその場から離れ、少女の前に着地した。

一旦羽を消す。やはり杖を使わないと、安定しないらしい。

「すまない。やっぱり杖を渡して貰えるか？」

「へ？ あ、うん」

渡される。その杖をバトンのようにクルクルと回し、その先を砲に向ける。

「どういう道理で魔法が効かんのかは知らんが、俺も死ぬ訳にはいかん。すまんが、少し眠って貰うぞ」

そう言つて、俺は杖を構えた。まあ、手元にあるカードが『翔』^{フライ}だけで、よくこんな大口叩けるなど、我ながら思っけど。

再び『翔』^{フライ}を発動させて、俺は宙に舞った。とりあえず、あそこにあるカードから拾つていく事にしよう。

Side out

Side: 佳奈

私は茫然としていた。いきなり現れた同い年くらいの男の子。自分より、何倍、何十倍も大きい体を持つ鶴に対して、真っ向から戦う姿。私の目の前でその体が吹き飛ばされた時、私は悲鳴を上げることすら出来ず、しかし彼が背中から羽を生やして飛んだ時は、心が躍った。

鶴がいなくなった訳でもなければ、自身が危険に晒されなくなった訳でもないのに。メイド服に身を包み、片手に女の子向けの杖を持ち、背中から羽を生やす。そんな妙な格好のその少年を見ていると、自然と安心が出来て。そして、私は悟った。

この人が、自分がずっと会いたいと思っていた高坂浩樹君なんだって。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

目下。自身に求められている事は二つ。カードの回収とこちらを見ている女の子を安全な場所に送る事。

転送という手段が使えればいいのだけど、あれは時間がかかる。攻撃魔法は無効化され、それはつまり防御魔法も恐らく無効化されるという事を意味している。

(厄介な……)

ハッキングを使う手段も考えて、でも二つの理由からそれを却下した。一つは発動までのラグ。プログラムとして登録はしているが、どうしても時間はかかる。そして二つ目はマテリアル・ハイでも室^{オフ}素装甲でも、あの溶解液を防げるのかが分からないからだ。それ故に、最も現状で堅実な手は自称デビットの手によりつくられたカードなのだけど。そのカードも手元がない。

「ちいつ!!!」

こちらに向かつて跳んで来た鶴の体を上昇する事で避ける。

ふと、何かに呼ばれたような気がして、視線をそちらに向けた。カードが一枚、其処に落ちている。

其処に向かい一気に飛び、そのカードを手を取った。訳が分からなかったが、求めているカードだった事もあり、迷わず発動する。

「彼の物を捕えよ!」
『風』^{ウインド}!!!

俺のその言葉を皮切りに風が吹く。暴風とも言えるその風が鵜を捕える為に吹き荒び、鵜を襲った。

そして、鵜にまとわりつき、その体を拘束しようとしたその風は、鵜が暴れた事により、強制的に掻き消された。

「……さっきの魔法無効化でも働いたのか？ それとも自力で？」

一度『盾』^{シールド}があいつの突撃を止めている以上、恐らく後者。となれば、やはり意識を奪うしかないだろう。

そう考えつつ、突撃してきた上昇して回避。再び聞こえ始めた力ードの方に向かい、それを拾い上げる。

「また？ まあ、いい……かつ！？ つ、『剣』^{ソード}！！！」

持っている杖が細身の剣に変わった。それで壁のように視界を覆うようにして迫る、溶解液を切断する。

そのままだったら自分が当たっていたであろう辺りから、溶解液の壁が二つに割れた。

「賭けだったけど、使い手の思いで切断力が変わるってのも実装かよ！？ 凄いな！？」

それでも流石に完全に両断することはできず、振りかかってきた数滴の液は腕を振ることで防いだ。

服に穴が開く結果になったが、やけどをする事はなかった。

「さて、切断力が変わるなら、斬ることも簡単だがそれだとあまりに報われない。元々来たくて来た訳じゃないだろうしな」

恐らく原因はあそこで「頑張るぞなー」とかほざいている変態だ

ろっから。溜息をついて、剣を構えなおした。カードには悪いが、もう少し頑張って貰うしかない。

(せめて、俺が打開策を考え着くまで、粘ってくれ)

それに対し、肯定という、聞こえない筈の返事が聞こえた気がした。

S i d e o u t

第三十八話 ～C・C・K 中編 その2～（後書き）

……すみません、ごまだれです。

凱龍輝様、Goldchild様。感想、ありがとうございました。

さて、まさかのC・C・Kが三部で終わりました。予想外です。四部で終わるとは思いますけど。

本作のカードの設定なのですが、一応さくらカード。出てくるのは原作カード19種のみです。アニメのカードがあったら、鶴にてこずる事は無いと思うので。

戦闘中に全部のカードを……出せなさそうですが、まあ、出せるだけ出してみたいものです。

ここまで読んだ下さりありがとうございました

今回はこの辺で。

では次回。

第三十九話 く・C・C・K 中編 その3 (前書き)

うわぁ……

第三十九話　C・C・K　中編　その3

Side：浩樹

襲いかかってきた溶解液を斬り、上昇する事で突撃してきた体を避ける。上から部屋全体を見下ろす。

(こいつ……)

鶴は床から俺の方を見上げ、威嚇はするも、かといって先程までのように向こうから襲いかかって来る事が無くなった。

しかし俺が一度降りれば、溶解液と突進を使い絶対に俺を床に降ろさないようにしている。

(カードの回収が出来なくしてるのか……)

参った。でも、とりあえず。

(機動力が翔^{フライ}で五分なら、あれなら勝てるか)

まずは速度。こつ何度も襲いかかれては、纏まる物も纏まらない。
い。

声が聞こえた。剣^{ソード}を解除。杖に戻し、足元にマテリアル・ハイで足場を作り着地。そして翔^{フライ}もカードに戻す。

「プログラム『マテリアル・ハイ』。サブプログラム『宙森^{フォレスト}』!!」

言つのと同時に、事前に俺を中心にしての大まかな座標を指定しておいたマテリアル・ハイがいくつも空中に出来る。

そして、足場を蹴って移動を開始した。

Side out

Side：佳奈

浩樹君が羽と剣を消したと思ったなら空中に立って。拳句に空中を蹴って移動を開始した。

(……違う?)

良くは見えないけど、足場のような物がある気がする。首を傾げる私の脇に、何時の間にかデイビットさんがいた。

感心するように高坂君を見てる。

「珍しい魔法ぞな」

「魔法、ですか？ カードじゃなくて？」

「魔法ぞな。少なくとも、同志浩樹が足場に使っている物は、カードの効果ではないし、美少女の前でも一度、魔法を使ったぞな」

「あ……」

思い出したのは砲撃とも言える、光。鵜に向かって放たれたそれは、結果的に意味はなかったけれど。

高坂君は再度、何かを蹴って移動すると、スカートを靡かせながら、私達の前に着地した。「動きづらいな」とぼやきながらも何かを投擲するような姿勢を取る。

「プログラム『オフエンスアーマー窒素装甲』発動。並列でプログラム『マテリアル・

ハイ』、サブプログラム『ブレード円刃』。モード『ランス投槍』。刃は潰せよ？」

何かを言った直後、構えられていた手が何かを握った。そして「せーの！」の掛け声の元、鶴に向かって投げつけられる。

真つすぐ飛んで行った何かは鶴の額に当たり、その体をよるめかせた。

「なっ!?!」

「ふむ。こっちは当たるのか。でも、やっぱり威力が足りないか。クロスで直接殴れば聞くかもしれないが、正直加減できるかも分からんし……。やっぱりカードの方が確実か」

何かを確認するように呟く。そして、いきなり私の体を掴むと、跳んだ。先程まで私達がいた所に鶴が突撃し、床が陥没して「ぞなー!」と悲鳴？を上げながら、デイビットさんの体が吹き飛んで行く。

「とりあえず、お前の事を安全な場所に、か」

「そ、そんな事よりデイビットさんが!?!」

「あいつはあの程度じゃ死なん。っと、よし」

着地。私を床に降ろして、落ちていたカードを拾い上げ、杖を構える。

「守ってやってくれ。『シールド盾』!」

私を守る様にして全方向に壁が出来た。その外で杖を構える高坂君。

「さて、いくぞ」

高坂君の体が動いた。

Side out

Side: 浩樹

飛行を止めて、足場を蹴つての三次元移動。室内戦なら、やっぱりこっちのがいいらしい。それに、空中に作った足場のせいで、鷓も思うように動けないようだ。

「とりあえず、マテリアル・ハイは当たるみたいだな」

『そうだね。溶解液は防げるかは分からないけど。サンプルが取れば解析も出来るし、その結果によっては解けないようにも出来るけど、出来そうにも無いしね』

「だな。それに、解析してる間に、俺があいつのどつちかが落ちそうだしなっ!!」

跳ねる。飛んで来た溶解液が、先程まで居た足場を溶かして見せた。

「駄目らしいな」

『みたいだね』

床に降り、数度バックステップで距離を置き、カードを拾う。

「風で駄目なら」

カードを投げ、杖をかざす。

「こいつならどうだ!! 『樹』^{ウツキ}!!」

大量の鳶が鵺を直接縛った。鵺がもがき、暴れる度に一本ずつ切れては行くが、如何せん数が多く、流石の鵺でも一度には切れないらしい。

時間稼ぎにしかならないだろうが

(今はそれで十分!!)

動き、カードを拾う。先程一瞬、脳裏をよぎった『火』^{ファイアー}のカード。五行の考えが適用されている以上、木生火が働き『火』^{ファイアー}のカードの威力を上げる事も出来るけど、それでは意味が無い。

次いで、拾ったカードも『水』^{ウォーター}のカード。攻撃用のカードだった。

「そもそも、地下で使う訳にもいかないよな」

『そうだね。』^{アース}『地』も使ったら危ないだろうし、『風』^{ウィンド}は効かない。四大元素のカードが使えないから、火力としてはいまいちだね』

「火力は求めてないっての。でも、どうするか」

カード枚数19枚だったという事は、恐らく原作のカードなのだろう。『眠』^{スリープ}みたいな便利なカードは無い。

「なるべく怪我はさせたくないし……」

『砲撃撃つたり、刃を潰したとはいえ、かなりの力で投槍を投げた人間のセリフとは思えないね』

「うっさい、アルハ」

カードを拾いながらその場を離れる。鳶が全て切れて鵺の体が動

いた。拾ったカードを発動する。

「『^{ジャンプ}跳』！」

足から羽が生えた。床を蹴り一発で天井付近まで跳ね上がった。

「アルハ！魔力強化解除！」

『してたけど……』

「しててこれ！？」

切断力が変わる剣といい、色々凄いな。デイビットが凄いのかカードが凄いのか良く分からなくなってきた。

鶴も、俺の姿を見失ったらしく、辺りを見回している。何とか空中で反転、天井に足をつき、マテリアル・ハイで作った小刀を天井に刺して、落下しないようにする。

『どうする？ 機動力では上回ったけど』

「そうだなあ……まだ手元に無いカード……。あれ？」

『どうしたの？』

「なんか出かかっているんだ。なんだろ？」

鶴が此方を向いた。小刀を抜いて、慌ててその場を離れる。

床につく寸前に反転。痛みを殺してその場を離れる。

「強制転移で無理矢理飛ばすか」

『やれれば苦労しないけど……。どこに？』

「あいつの故郷……あ」

『そっか。あの手があるんじゃない？』

「そうだな。寧ろ、それで駄目なら勝ち目が無いな」

そして、求めるカードを願ひ、声は再び脳内に響いた。
そちらに向かい跳んで、カードを拾う。

「……」

振り返った。向かってきた溶解液はマテリアル・ハイで防ぐ。
埒が明かないと思ったのか、突撃してきた鶴に、カードを放り、
杖を向けた。

「目が覚めた時には、お前は故郷に戻ってる。だから安心して、今
は幻想の世界に落ちろ」

体が迫る。カードの使用を宣言した。

「彼の者に望む幻想を見せる。」
「イリュージョン幻」

Side out

Side: 佳奈

「いいんですか？ 送って貰って？」
「ん？ ああ。気にするな。家には帰れないが、少し位、実家を眺
めるのもありだろう」

鶴と高坂君の戦闘が終わって、既に三十分ほどが経っていた。
戦闘は、最後に高坂君が「イリュージョン幻」を使う事で決着が付いた。カード
を使った後、鶴はいきなり大人しくなり、その内眠りに落ちた。

「ああ、しんどかった」

メイド服から、高坂君の自室にあった様な服に着替えた高坂君は家に帰る私の付き添いをしていた。

「でも、何ですか？」

「何が？」

「鵠です。『幻』イリュージョンには眠らせる効果なんてないですよね？」

「ああ、まあ、鵠が見た幻想が鵠に眠りを誘ったんじゃないのか？
良く分からないのは、俺も同じだ」

ふと、何を思ったのか、くるくる回りながら歩き始めた。暫くくるくると回り、急にぴたりと立ち止まった。

ある建物の方を見て、首を傾げている。

「なあ、佳奈」

「はい？」

「あの建物は何？」

「最近出来たショッピングセンターです」

「へえ」と感心したように呟いた。でも、それだけですぐに興味を失ったらしく、最初のように前を向いて歩き始めるが、それからもちよくちよく立ち止まっては、あの建物は？とか色々な事を私に尋ねて来た。

先程まで命がけの戦闘をやっていた人とは思えない。

それでも、その内、住宅街に入ると高坂君の口数が減った。

(……よし)

後悔するかもしれない。けれど、高町さん、バニングスさん。月

村さん。おじいちゃんだつてそうだ。皆、高坂君に会いたがつているし、私だつてもつとお話しがしたい。

何度か深呼吸。そして「高坂君」と声をかけた。

「何だ？」

「その、このままこつちに居るとか……」

「いや。鶴も送らなきゃいけないし、明日も明後日もやる事あるしな」

「……」

「それに……いや、あいつを言い訳にするのは良くないか」

それにの後の声が小さくて上手く聞き取れなかった。

首を傾げていると、今度は高坂君から話しかけて来た。

「佳奈は、俺の事知つてたつて事は、なのはやアリサ、すずかとは友人なのか？」

「はい」

「そつか、みんな元気？」

「此処に居るんですから、自分で確かめたらいいじゃないですか」「手厳しいな」

苦笑しながら、高坂君は頬を掻いた。そして「駄目だよ」と苦笑いをしながら私に告げた。

「今はまだ、帰れない。今日だつて、カードと杖を回収しに来ただけだ。最も、結局こつちまで来る事になつたけどな」

「どうしてですか？ 高町さん達の事、嫌いに「なる筈ないだろ！」「っ！？」

「あ……、悪い。怒鳴つちまつて」

下を向いた。街灯が照らす彼の顔はうかない顔だ。

「でも、帰れない。帰れないんだ。俺が為すべき事をしてない」
「為すべき事？」

「……」

私の問いに、高坂君は答えなかった。

その内、私達はおじいちゃんの家の前に到着した。電気は点いていないから、多分おじいちゃんはまだ帰って来て無いんだと思う。

高坂君は、おじいちゃんの家と高町さんの家、二階で電気が点いている高町さんの部屋の王をぼんやりと眺めてから、「それじゃ」と言って立ち去ろうとした。慌てて、そんな彼の腕をとった。

高坂君がこつちを振り返った。何も言わず、私を見る。鶴と戦っていた時とは別人ではないかと思える位、今にも壊れてしまいそうな表情だった。

「そんな顔するなら、会えばいいじゃないですか」

「……どんな顔してる？」

「寂しそうな顔してます。とつても」

そうか、と高坂君は自嘲した。本当はそれだけじゃない。寂しいも確かにあるけれど、それと同じくらいある感情が浮かんでいた。

（迷ってますよね、高坂君）

声には出さない。高坂君も何も言わない。

無言の時間が流れ、高坂君が口を開いた。

S
i
d
e

o
u
t

第三十九話 く・C・C・K 中編 その3 (後書き)

最早、何も言うまい。ごまだれです。

凱龍輝様、ご指摘、ありがとうございました。

昨日、四部で終わるとか面白い冗談を言ったはずなのに、まさかの五部。思ったより、バトルパートが長くなった……。それに終始コメディみたいなノリにするつもりがまさかのシリアス？ムードに。

まあ、それはそうと、オリジナルが出たので、一応解説を。

『フォレスト
宙森』

浩樹のプログラム『マテリアル・ハイ』のサブプログラムの一つ。浩樹を中心に、元々指定してあった大凡の座標に、マテリアル・ハイでの足場を作る。』

まあ、説明すればこれだけです。普通なら形状に差はあれど、一度に一つ作るものでしたが、これは例外で一度に複数個のマテリアル・ハイを生み出します。

ゼスト戦で使った物は、宙森と違い、一個のマテリアル・ハイを蹴つてから、到着するまでに新しいものを作っていました。

原作では、マテリアル・ハイの使用者である天樹院カイルも行っていました。彼はプログラムによる指定無しに、一度に何個も作れましたから、こちら辺がオリジナルとコピーの違いですね。

『サブプログラム『ブレイド
円刃』。モード『ランス
投槍』』

サブプログラムの方は原作で出ました。モードの方は槍投げで使わ

れる槍を思い浮かべて下されば、それです。普通に投げてもあまり意味無いですが、浩樹は魔力強化と窒素装甲オフエンスアーマーの恩恵で純粋に馬鹿力なので、距離が近ければ、下手な砲撃より威力があります。

長くなりましたね。今回はこの辺で。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

では次回。以上、ごまだれでした。

第四十話 く・C・C・K 後編く(前書き)

全五部になってしまった……

第四十話 〱 C・C・K 後編 〱

Side: 浩樹

俺の世界の中心だった。彼女がいたから、俺は俺になった。彼女達がいたから、俺は俺でいれた。今の俺がいるのは彼女達のおかげなんだ。そんな彼女達を俺が嫌いになる筈が無い。

だから本能的には理解していたんだ。いくら決意したって、俺がこの場所に来れば俺は歩けなくなる。だからここには来るつもりはなかった。

だけど、それでも俺はここに来た。本当の決意と、決別をするために。

「そんな顔するなら、会えばいいじゃないですか」

「……どんな顔してる？」

「寂しそうな顔してます。とつても」

佳奈の言葉に自嘲した。来る前に決心はしていた筈なのに、彼女に腕を取られたら、俺の体が動かなくなつた。

振り払える筈の手が振り払えなくて、歩ける筈の足は歩かなかつた。

そんな俺を俺自身が惨めに思い、そして許せなかつた。

「お前の覚悟はそんな物か」

「え？」

言い聞かせる為に、口に出す。首を傾げている佳奈を無視して、

更に己に問う。

「その程度でお前はこれから歩いていくつもりだったのか」

「情けないとは思わないのか」

「惨めだとは思わないのか」

「あの時の決意は嘘だったのか」

言葉は続く。

「両親の話聞いた時、敵を討つと決意したのはなんだったのか」

「旅立ちの日、自己満足の旅についてくると、俺の仇討ちに付き合
うと言ってくれたあの子はどうなる」

「俺を受け入れてくれた隊の人達は。隊の家族の人達は」

「お前は どうする高坂浩樹。全てを理解したうえでお前に尋ねよう」

「全てを投げ出し、此処に戻るか。決別を誓い、再び歩き始めるか」

「お前の答えは どちらだ」

其処まで言い、一息ついてから、俺は佳奈の方を向いた。

相変わらず腕を掴んでいる彼女。それはもう構わない。俺の表情
が変わった事に気が付いたらしく、表情が変わった。僅かな怯え。
それが理由で腕を掴む力が衰えた。

その瞬間、先程と違い、強引に腕を外す。

「あ……」

「俺は行くぞ。またな、佳奈」

「だ、駄目です!!」

去ろうとして、今度は腕に抱きつかれた。

「なっ!?!」

「駄目です!! 絶対に行かせません!!」

Side out

Side: 佳奈

高坂君が自問していく度に、其処に居る筈の高坂君がどんどん離れて行く気がした。

彼の自問が終わり、私の方を向いた時。さっきまでの彼じゃなくなっていた。浮かんでいた迷いが消えている。思わず、腕を握る力が弱まり、その隙をつかれて振りほどかれた。

「あ……」

「俺は行くぞ。またな、佳奈」

「だ、駄目です!!」

慌てて捕まえる。掴むんじゃなくて、腕に抱きついて。そうでもない、また振りほどかれてしまいそうだったから。

「な!?!」

「駄目です！！ 絶対に行かせません！！」

先程までとは打って変わった様子。さっきは思わず怯んでしまった。だから、もう迷わない。

だからこそ、お互いに一步も引かず、じりじりと時間だけが過ぎた。

「いいから離せ」

「絶対に嫌です！！ 皆に会って言うまで、離れません！！」

「だから「あと、敵討ちなんてさせたくないです！！」む」

「私には憎しみはとか言えた義理じゃないです！！ もし、お父さんとお母さんが誰かに殺されたって言うなら、私だって考えたと思います！！ でもっ！！」

「だけど！！」

「貴方には皆がいるじゃないですか！！ 高町さんだってバニングスさんだって月村さんだっておじいちゃんだって！！ 皆がいるのに、どうして！？」

「だからだよ」

「……え？」

「皆がいる。皆に会えた。お前が言っただけじゃない。アリシア、アルハ、クイントさん、メガーヌさん、ゼストさん、スバルにギンガに、ゲンヤさん。デイビットの奴だっけそうだし、佳奈だっけそうだ。両親のすべてで、俺は皆に会えた。感謝してる。だからこそ俺に出来る親孝行なんてこれ位なんだよ」

「そんなの！？」

「分からねえのはお互い様だ。会った事無いだろう。それに、勘違いするな」

「え？」

「じいちゃんだって俺の家族だ。だから、じいちゃんが言った通り、俺は誰も殺さない。捕まえて、罪を償わせるだけだ」

……でも、それなら。

「会えばいいじゃないですか。後ろ暗い事なんて、何も無いんですから」

そう言った私に、高坂君は苦笑した。そして「違うよ」とそう言った。

Side out

Side：浩樹

佳奈の言葉はあながち見当はずれじゃない。後ろ暗い事をしていくつもりはないけれど、個人の次元転送はあまり許される事じゃないから。管理外世界の間を渡る分には縛る物などないけれど、それだって下手すれば密入国にはなる訳で。

でも、俺が彼女達に会いたくない理由はそれ以上の物があった。だからこそ、彼女の言葉に俺は「違うよ」と答えた。

「俺が会わないのは弱くなるからだ」

俺の言葉に佳奈は首を傾げた。

「皆に会ったらもつと死にたくななくなつちまう。死にたくななくなつたら、俺は弱くなる。それは駄目だ。だから決別を誓った。俺は仇を討つか自身の強さに自信を持てるまで、皆とは会わない」

佳奈の腕から力が抜けた。俺の腕を抱いていた体が離れ、今度こそ俺は振り返らずにその場を去った。

S i d e o u t

S i d e : 佳奈

詭弁だっと思う。喧嘩なんてまともにした事無い私だから、詳しい事なんて分からない。だけど

「死にたくなかったら弱くなるって、分からないですよ」

会いたい人がいるから、生き残りたいと思うんじゃないのか。生きたいと思っではいけないのか。

「分からないですよ……」

その場に座り込んでしまう。何か、無性に悲しくなった。

「うっ…うっ…」

両親の葬式以来だなど、ぼんやりそう思っ

「うわああああああああん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

泣いた。思いっきり。私の声を聞きつけた高町さんが私の所に来

て、そんな彼女に抱きついて。そうやって、暫く私は泣き続けた。

「ごめんね、高町さん」

「うん。別にいいよ」

私は今、高町さんの部屋に居た。制服は高町さんのパジャマを借りて着替えた。シャワーも浴びたから、私はある程度落ち着いていた。

それでも、洗面所を見た時、私の顔は浮かないままだった。

「何かあったの？」

「ちよつと。……高町さんは」

「ん？」

「人との繋がりが、人を弱くすると思う？」

私の問いに高町さんは首を傾げた。それから、暫く悩んで話し始めた。

「浩樹君がいなくなって暫くしてからの事、話してないよね」

「え？ うん」

「浩樹君がいなくなった時、その実感が無かったの。ただ、生活をしていたら、ひょっこり帰って来るんじゃないかってそう思った」

「……」

「だけど、ある日。私は唐突にある事が理由でその事を理解したの。浩樹君がいない。帰って来ないって。そうしたら、もう駄目で。私はこの部屋に引き籠ったの」

「え？」

「でも、数日経ったら、アリサちゃんとすずかちゃんが来てくれた。

まあ、何でか知らないけど、浩樹君への気持ちの暴露大会になったんだけど……」

「はい？」

「なんですと？ 暴露大会？ 何で？」

「ま、まあ。それは置いてさ」

「凄く気になるんだけど。」

「私は浩樹君との繋がりが原因で引き籠ったの。でも、アリサちゃんんとすずかちゃんの繋がりのおかげで、普通に学校に言ってるし、佳奈ちゃんにこうやって話せる。だから、私はこういう事だと思っの。繋がりは人を弱くしてしまうかもしれないけど、でも、間違いない。それだけじゃないって」

「……」

「それに、浩樹君が私達の会いたくないって言ったのは多分、繋がりにだけじゃないから。巻き込みたくないんだよ」

「……え？ あの？」

「仇討ち。巻き込みたくないから何も言わないで行っちゃったんだと思う」

「何で、それ知って……？」

「ご近所であんなに大声出してたら聞こえるよ。まあ、私は浩樹君の声が聞こえた時点で気が付いてたけど」

「そりゃそうだ。高町さんの部屋に電気が点いてたって事は、居ただろうしね。」

「でも、なら何で出て来なかったんだろ？」

「何か入りにくい雰囲気だったから入らなかったけど。でもああ言

ってたから、浩樹君はまた戻って来てくれるから。だから待つ。
いつか「よっ、なのは」「って私に声かけてくれるって信じて」

「……」

「佳奈ちゃん。ありがとうね」

「ほえ？」

お礼を言われるようなことはしたつもりはないのだけど。

「浩樹君の事。ありがとう」

「っ」

何で？ 私は。

「どうして……」

「何が？」

「どうして、お礼なんて言うんですか。結局、止められなかったんですよ。文句ならともかく、お礼なんて」

「うっん。ありがとう、引きとめてくれて。それに、彼の為に泣いてくれてありがとう」

「あ……あ……」

俯く。再び涙がこぼれ始めた。そんな私を、高町さんがそっと抱きしめてくれる。

「いいよ。私も少しだけ泣くから。一緒に泣こう」

そうして、私達は静かに。抱きしめあいながら涙を流した。

Side out

Side: 浩樹

「おかえり、浩樹」

「……ただいまです。クイントさん」

ナカジマ家自室を転送先に指定して戻ってきたのに、其処にはクイントさんがいた。

「ちゃんと帰って来たのね」

「……随分意地が悪いですね。帰ってきますよ。そりゃ」

「もしかしたら、あのまま故郷に居ついちゃうかもしれないでしょ。私としては、そっちの方が安全だからいいんだけど」

「まだ言ってたんですか。いい加減諦めて下さいよ」

佳奈を送る為にバリアジャケットを着ていた今の恰好は、既にメイド服に戻っていた。

穴が開いたり破けた個所を見て、繕わないとなと思い、メイド服から着替え始める。クイントさんはいたけど、別に見られて恥ずかしい訳じゃないからいいだろう。

「大丈夫よ。もう言わないから」

カチューシャを外して、エプロンを外す。そして、ようやくワンピースが脱ぎ終わり、半裸のままクイントさんに視線を送った。

「そうなんですか?」

「今までは迷ってたじゃない。どこか決意し切れてなかった」

シャツと長ズボンを着る。それでいつもの俺だ。

「分かってたんですか？」

「そりゃ、二児の母ですから」

「御見それしました」

メイド服を掲げて、修繕箇所を確かめる。やっぱり溶解液を袖で払ったのは失敗だったな。

色に合う糸とかあるかなと、部屋にある裁縫セットの中を漁る。

「最後に。本当にいいのね？」

漁る手を止め、メイド服を机に置く。そして、クイントさんの方を見た。

「当然です。俺はその為に此处にいるんですから」

「……分かった」

クイントさんがドアを開けた。そして、部屋を出る前に、一度こちらを振り向いた。

「後でリビングに顔を出した方がいいわよ。スバル達、待ってるから」

「分かりました」

ふふ、と笑って、クイントさんが手を振りながら部屋を出た。

俺は修繕箇所を確認して、どんなふうに直すか考えてから、カードと杖を手に取って部屋を出た。

この後、スバルが『ウインディ風』を発動させ、カードがミッドの街にばら

撒かれて、俺がカードをキャプチャーする羽目になるのだけど。それはまあ、別の話、かな。

第四十話 〽C・C・K 後編〽(後書き)

ある意味予想通りのオチですね。ごまだれです。

Goldchild様。〽指摘、ありがとうございます。

企画段階、というかC・C・Kを書き始めた段階では、浩樹と佳奈の本編初顔合わせと終始コメディ&バトルにするはずだったので、なぜこうなったと自分で自分に問いかけています。

思いがけず浩樹の再決心など意外と大事な話になってしまったC・Kでした。

次回の予告を少しだけ。

今回はオリジナルの事件になります。まあ、事件と言うか任務なのですが。

楽しみにしていただけたら幸いです。

今回はこの辺で。

ここまで読んで下さって、ありがとうございます。

では次回。以上、ごまだれでした。

第四十一話 くとある皇女の魔法嫌い (前書き)

又は『高坂浩樹とミニユ・クライツの憂鬱』

第四十一話 くとある皇女の魔法嫌い

Side: 浩樹

「護衛、ですか？」

デスクワークの最中。放送で呼び出された俺はゼストさんの元を訪れた。俺に加えてもう一人、同じく呼び出されたミイユさん ミイユ・クライツ一等陸士。俺の試験の時の試験官の一人だ と一緒にゼストさんの話を聞いていると、ゼストさんにとある要人の護衛を命じられた。

「そつだ」

座ったままのゼストさんが俺達の方を見る。俺とミイユさんは一度目を見合わせ、アイコンタクトをしてから俺が質問する事にした。

「それは俺とミイユさんだけで？」

「そつだ」

「はあ」

気の抜けた返事をしてしまう。

俺とミイユさんの疑問で共通している物が一つある。俺はいい。

一応オールレンジ対応できるし、マテリアル・ハイを使えば、生半可な攻撃だったら防げる。でも

「あの、ゼスト隊長。何で私も？ 浩樹君はともかく、私は一介のロングアーチなんですけど」

「クライツには高坂の手綱を握っていて貰う」

S i d e : ミイコ

『高坂は魔法を使わずとも戦えるからな。適任だ。詳しくは書いてある。それを読め』

ゼスト隊長がその言葉を最後に、私と浩樹君を送りだした。とりあえず数日かかるらしたから、一度帰宅。それぞれ荷物を纏めて再度管理局で合流。

其処から移動して、現在飛行機の中にいる。

「えーと、護衛対象は」

「ウイリアス・クリステリア・ロンゴミアント。名前にゼストさんのデバイス『ロンギヌス』の別称を名に持つクリステリア皇国の第一皇女」

「へ？」

脇に座り、ハードカバーの小説を開いている浩樹君の方を見た。浩樹君は小説から目を離す事無く、書類の要点を音吐朗々と読み上げていく。

「年齢は非公開。今回の仕事はウイリアス皇女殿下を無事に隣国で行われる皇族のパーティーに送迎する事。なお、備考欄にあった魔法を使わず、実力のある者、という指名は皇女殿下が魔法嫌いであるため。原因は不明なれど、クリステリア皇国はミッドチルダからしても資源という意味で大切な場所の為、文句は言えず。結果、ゼストさんに話が行き、俺とミイコさんにお鉢が回ってきた、と。何か質問は？」

「良く覚えてますね？」

「普通」

「はぐっ」

私よりも年下（因みに私は15歳です）の子にとつての普通が出来ない私って一体……。でも、何時の間に読んだんだろ？ 飛行機に乗る前からずっと本読んでた筈だし。

そう思い、彼の顔を眺めていると、視線に気がついたらしい浩樹君が、私の方を見た。

「何か？」

「え？ あ、えーと……。そう言えば二人きりって初めてだね？」

「そうですね」

短くそう答えて、浩樹君は再び小説に視線を落とした。

（な、何だろう。まるで凄く冷静な馬相手に、手綱を握るところか触れることすらできない感じ……）

「何か今、失礼な例えをしませんでしたか？」

「ギクッ」

「擬音を口に出す人、初めて見ましたよ」

相変わらず視線を小説に向けたままだ。クイントさんとか隊長達を相手にする時はそんな事無いのに。

……はっ。もしかして初めての二人きりで緊張してるとか！ なら、お姉さんとして私から積極的に近づいて行った方がいいのかな！？

そうおも「声に出ています」えー。

「別に緊張なんてしてません。純粹に今、本を読んでいるのは読みたいからです。移動中はオフですから。読める時に読まない」と

「ああ、さいですか」

「もうすぐこの章が終わるんで、少し待ってて下さい」
「はい」

そうして浩樹君は文章が上下で段になっている小説も、黙々と読みふけた。

Side out

Side: 浩樹

正直な話、読みづらい事この上なかった。

なのはと初めて会った頃も俺のなのはへの態度はこんな感じだったけど、ミイユさんの場合、その頃のなのはより口が動くから、色々話しかけてくる。それどころか、自分の頭の中で考えている事すらぶつぶつと呟くから、どうしても気になってしまう。

それに妙な所で鋭いから。緊張してるって言われた時は焦った。さつきミイユさんに章が終わるまでと言った通り、俺はその章を読み終わると、栞を挟みバッグに仕舞った。

「それで？ 何の話をするんですか？」

「そ、それを振られるとなあ……」

まあ、数日間は何応なしに一緒なんだし、これからの事を考えても、仲良くしたいのが本音だ。

がんばって会話しようと、内心で意気込んでいると、ミイユさんが話しかけてきた。

「じゃあ、趣味の話でもしようか？」

『やっぱり、どこかで一泊してからの方がいいかな。でも、十五歳と九歳だし……。泊めてくれる所あるかな』

『うーん……。あれ？ 浩樹。こっちに車が一台近づいてきてる』

『え？』

『右から』

アルハに言われ、そちらを見る。確かに車が一台、此方に向かって走って来ていた。

そして

「もう駄目え」

「うお!?!」

いきなりミイユさんに後ろからのしかかられた。

「なんですか、ミイユさん!?!」

「ね〜む〜い〜」

「知りませんよ! 重いです!」

「いいから、いいから」

思いきり抱きしめられる。相手によっては問答無用で投げけるけど、流石にミイユさんは投げづらい。ここで、俺はようやくゼストさんの言った、俺の手綱を握るの意味が分かった。

(確かにこれは動きづらいつ)

無理矢理振りほどく事も出来なくはないけど、それをすると良心の呵責に耐えきれなくなりそうだ。かと言って、既に半分寝入っているミイユさんに、俺の言葉は届かない。

溜息をつくとき、此方に向かって来ていた車が、俺の前に止まった。

初めて見るような黒塗りの無駄に長い車。そして、後部座席の戸が開き、其処から眼鏡をかけた男性が降りて来た。

(へえ)

深夜という事もあり、外は暗かったが、空港からの明かりで男性の姿は確認出来た。細身とはいえ、かなり鍛えているようだ。

(護衛の人かな?)

「時空管理局地上本部所属の高坂浩樹様、ミイユ・クライツ様ですね」

「あ、はい」

ミイユさんに乗せたままという、なんともあほな体勢で返事をする。何とかミイユさんを起こそうとしたけど、男性は笑いながら「時間も遅いですし、そのまま構いませんよ」と、俺にそう言ってきた。

「夜分遅くにご苦勞様です。私、ウィリアス・クリステリア・ロンゴミアント皇女殿下の付き人をさせていただいております、カヅキ・ヴォーダンと申します。カヅキとお呼び下さい」
「……」

ヴォーダン、ねえ。

皇女殿下の事もあり、ファーストネームよりフェミリーネームの方が気になった。

「高坂様?」

「はい? なんてしょう、カヅキさん?」

「いえ。ぼんやりしているようでしたので。大丈夫ですか?」

「あ、すみません。少し考え事を」

「そうですねか？ では車へ。皇居までお送りいたします」

はい、と頷いて、八割方寝入っているミイユさんを車内に放り込もうとしたが、思いのほか力が強くて外れず、仕方なしに一本背負いの要領でミイユの体を車内の椅子の上に投げ、自分も乗り込みつつ、ミイユさんの頭を膝に乗せた。そうしないとミイユさんの体が椅子から落ちるかもしれないし。

個人的にバーカウンターなんていらなから、席を増やして欲しい所だ。

「何かお飲みになられますか？」

車に乗ったカツキさんに尋ねられ、苦笑いで「結構です」と返した。

少しして、車が出発した。落ち着かなさをミイユさんの髪を弄る事で誤魔化していると、「そういえば」とカツキさんに声をかけられた。

「高坂様はお幾つなのですか？ とてもお若いようですが」

「ああ……今年で九つに」

「……はい？」

「九歳です」

カツキさんが眼鏡を外して眉間を揉み始めた。怒ってらっしゃるのかなあ？ 俺は悪くない筈なただけだ。

「すみませんが高坂様」

「何でしょう？」

「疑う訳ではないのですが、皇居に着きましたら、腕試しをさせて

「いただいても？」

「はい。もし僕が貴方の立場なら、僕みたいな子どもが来たら不安になると思うので。納得がいくまで、試して下さい」

「ありがとうございます、高坂様。それと、クライツ様は……」

「クライツ一士は戦闘は行いません。あくまで、有事の際の戦闘は僕だけが」

「そうなのですか？」

首を傾げたカツキさんに頷いて返す。

そして、俺の事や皇女殿下の事を話しているうちに、車は皇居に到着した。

それから、今夜の部屋へ案内され、数時間後の予定を説明され。

俺は……何かが間違いなく起きる悪寒に身を震わせながら、数時間だけ夢の世界に落ちて行った。

第四十一話 くとある皇女の魔法嫌い（後書き）

とある封魔も閑話込みで五十話です。ごまだれです。

凱龍輝様、Goldchild様、感想、ありがとうございます
た。

今に始まった事じゃないですけど、相変わらず原作キャラが空気です。ここ数話、アリシアですら空気なくらいですから、半端ないですね。

さて、はじめに多めに言っておけば、後でどうとでもなると思うので、このとある皇女ですが、恐らくC・C・K同様、五部になると思います、と言っておきます。

まあ、バトルパートが長くなるかもですけど。

果たして、浩樹がまともに魔法を使って戦闘をするのはいつになるのか！？

と言ったところで、今回はここまでです。

ここまで読んで下さりありがとうございます。

では次回。以上、ごまだれでした。

第四十二話 くのある皇女の魔法嫌い そのく (前書き)

又は『姉、ちゃんとし』ry

後書きで報告あり

第四十二話 くとある皇女の魔法嫌い その2

Side: 浩樹

重い、苦しい。体にかかる重圧によって、無理矢理夢の世界から引き摺り上げられた俺が目にしたのは

「何でこっちで寝てるんですか……？」

ミユさんの寝顔だった。重く、苦しいのは、もう一つのベッドに寝かせておいた筈のミユさんが何故かこっちに来て、俺の事を抱きしめているからだ。思いきり抱き寄せられ、足を絡められ、ある意味役得なのかもしれないけど、抱き枕になる趣味は生憎と無い。

「起きて下さい、ミユさん」

顔のすぐ前で声をかけているにも拘らず、起きる気配が無く寧ろより強く抱きしめられる結果になった。

「えへへ、ひくくん」

笑みを浮かべながら頬ずりしてきた。

「何言ってるんですか、ミユさん。俺はひー君じゃないですから」

あながち、ひー君でも間違っていないけどさ。ミユさんの言っているひー君は、最近、趣味の可愛い物集めの一環で買ったらしい黒猫の人形の名前だ。飛行機の中で端末にあった画像を見せて貰った

けど、『どこでもいっしょ』というゲームに出て来た黒猫みたいだった。

名前をつけるのは自由だけど、個人的には俺を連想させない事も無い名前を、人形につけるのは止めて欲しい。言わないけどさ。

溜息を一つつき、もぞもぞと体を動かして「忍法 空蝉うつせみの術」と言いながら服を脱いで行く。脱ぎにくかったが、何とか上半身の服だけ脱ぎ、そのままミィユさんの拘束から抜け出す。

「はあ、どうしょ」

再び溜息をついて、時間を見る。七時少し前。皇女殿下との会う時間が十時ごろの予定だから、ミィユさんもそろそろ起きるべきなのだが。

かといって声をかけても起きないし、少し考え制服に着替えた。そして、普段首からかけているデバイスを、ミィユさんの首にかける。

『アルハ。八時になったら、ミィユさんの事を起こしてやってくれ』

『ええ〜』

『頼むよ。起こしたら、予定も伝えて』

『最近、都使いが荒くない?』

『大人しく言う事聞けば、お前の中のあのメモリを消さないでやるよ』

『……知ってたの?』

『んじゃ、頼んだ』

ヒラヒラと手を振って、俺は部屋を出た。少し、本当に少しだけ、皇居の中がどうなっているか、気になったから探検しようと思ったからだ。

Side out

Side:ウイル

メイドの仕事を初めてまだ数日しか経っていない事もあって、私は結構疲れていた。朝が早ければ、夜も遅い。素直に凄いなと感心してしまう。

そして今も、朝の六時から黙々と窓ふきをしていた。ただ如何せん窓が大きく、梯子を使わないと拭き切れない。

「何でこんなに窓が大きいんじゃ」

ぼそりと呟く。誰にも聞こえない筈だったのだが、偶々廊下にい taraしい誰かに「何か言ったか？」と尋ねられ、驚いて梯子から落ちそうになった。

倒れそうになった梯子を、その誰かが支え、私の姿勢が安定してから、梯子を抑えている誰かの方を見た。

「……誰じゃ？」

顔にはこれっぽっちも見覚えが無い。背丈から察するに、年齢は同じくらい。更に着ている物から管理局の人間だという事は分かった。

「もしかして、皇女の護衛の者か？」

「ん？ ああ。今日から数日、皇女殿下の護衛を務める、時空管理局地上本部ゼスト・グランガイツ隊所属、高坂浩樹だ。よろしく」
「帰れ。皇女は魔法嫌いじゃ。管理局の人間を傍に置く訳が無かる

う

私の言葉に、管理局から来たという高坂浩樹がぼかんとした。それから、困ったように腕を組む。

暫く悩んでから、高坂浩樹は私の方を見上げて来た。

「なあ、君は何故、皇女殿下が魔法嫌いか知っているのか？」

「知っておる、と言ったら？」

「教えて欲しい」

「断る」

即答すると、高坂浩樹は苦笑しながら頬を掻いた。それから、再び私の方を見上げて、窓の方を指さす。何か付いているのかと思いき、そちらを見るが、何も無い。

「なんじゃ？」

「いや。窓、円で拭くと四隅が拭けないから。窓枠と平行に拭いた方がいい」

「む」

そう言われると。何とか隅を拭こうと梯子から身を乗り出して、手を伸ばす。「おい！ 危ないぞ！」と下から声が聞こえて来た時は既に遅く。手が届いた事にほっとしたのもつかの間、今度こそ、私は完全にバランスを崩し、梯子から落ちた。

目を閉じ、衝撃に耐えようとするが、何時まで経っても衝撃が襲ってこない。恐る恐る目を開けると、高坂浩樹の手によって、きつちりと受け止められていた。

「すまん。余計な事を言った」

降ろされる。そして、私の手から窓を拭く為の布を奪うと、私の代わりに梯子に登って窓を拭き始めた。

私の何倍も慣れていられるらしく、効率よく窓を拭き終えて、次の窓を拭き始めてしまう。そうして、五枚目の窓を拭き終えた所で、ようやく私は我に帰り、慌てて高坂浩樹を引き留めた。私の方を見て、首を傾げる高坂浩樹に向かって、言うべき事は決まっているにも拘らず、何を言うか少し悩み

「わ、私の仕事じゃから、取るな!!」

言うべき事は言えず、文句を言った。

高坂浩樹は私の言葉にポカンとしてから、少しだけ笑って布を私に返してきた。引つ手繰る様にその布を取り返して、梯子に登る。先程まで見ていた高坂浩樹の手際を思い出しながら見様見真似で拭き始めた。

暫く私の姿を眺めてから、ポケットから何かの端末を取り出すと、高坂浩樹は慌てて踵を返した。

「それじゃ、残りの仕事、頑張つてな!!」

そう言葉を残して。高坂浩樹は走り去った。

残された私は窓を拭きながら、言うべき事が言えなかった事を少しだけ。少しだけ後悔していた。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

「起きてねえのかよっ！」

『私も頑張ったよ？ でも、流石に目覚ましじゃないから限界があるよ』

「目覚ましじゃないにしても、目覚ましより優秀だろ」

『面位次第も無いね』

「反省の色が見えないな」

ミイユさんの首からデバイスを回収しつつ、その体を揺する。

「起きて下さい、ミイユさん。さっさと起きないとてるてる坊主の刑ですよ」

『て、てるてる坊主の刑！？ な、なんて恐ろしい……』

「いや、お前は知らんだろう、アルハ」

『でも、名前に分かるよね。どんな事されるか』

そりゃまあ、そうだが。

その後、体を揺すりながら、耳元で「てるてる坊主」、てる坊主」と歌っていると、ミイユさんが体を起こした。

ぼんやりと辺りを見渡し、俺と目があう。

「……てるてる坊主？」

まだ、相当寝ぼけていらっしやるらしかった。……「ここは、なのはがどんなに寝ぼけていても、一発で起きる魔法の挨拶を使うのか。

「Guten Morgen。ミイユさん」

「うん……？ 何語？」

「ドイツ語で『おはよう』って意味です」

「そっか、ぐーてん、もーげん、ひろきくん」

「はい。おはようございます、ミイユさん」

魔法の挨拶、破れたり。しかも、普通に返された。

ツッコミ気質のなのはなら一発で起こせるんだけどなあ、なんて思っていると、天然という言葉が脳裏をよぎった。俺の周りには居なかったタイプの人だ。

ミイユさんは大きく伸びをしてから、俺を見ていつもの笑顔で改めて「おはよ〜」と言ってきた。それに再び挨拶を返す。

「所で、此処は何処かな？」

「後で教えてあげますから、とりあえず制服に着替えて下さい。俺は外で待ってますから」

ミイユさんの荷物を指さす。荷物に近づき、おもむろに服を脱ぎ出したミイユさんから慌てて目を反らし、外に出る。

寝ぼけているミイユさんが一発で目覚めるような挨拶を考えて時間を潰していると、部屋の中からノックされた。

「おはよう、浩樹君」

「三度目ですが。おはようございます、ミイユさん」

きつちり管理局の制服を着て、身支度を整えたミイユさんに頭を下げる。そして、部屋の中をきよるきよると見回した。

「それで、此処は何処かな？」

「皇居です」

「こーきよっ？」

「こ、う、きよ、です。今居るのはクリステリア皇国の皇居ですよ」「……」

はあ、と溜息。そして、大した事はないが悪寒はしたので、耳を

私の言葉に、浩樹君は腕を組んだ。そのまま、難しい顔で何かを
考え始める。

暫しの間。そして、顔を上げて私を見た。

「ありえません」

「そこまで!？」

「話が進まないの、今日の予定をさっさと説明しちやいますけど、
皇女殿下との面会予定時刻は十時。会ったらずくに護衛が始まるそ
うです。すぐに移動を開始して、到着予定は十七時。それから、パ
ーティーの警備です。何か質問は？」

「はい」

私は拳手した。「はい、ミユウさん」と浩樹君に指名される。

「面会時間まで、後一時間もありません」

「そうですね」

「……」

「用意する事があるなら、可及的速やかに準備した方がいいです。
そろそろ、カツキさんが朝食を持って来る、と言った時間ですから」

「カツキさん？」

「昨日、俺達の迎えに来た皇女殿下の付き人の方です」

その言葉を待っていたかのように、ドアがノックされた。

浩樹君が答えると、ドアが開き、向こうにいたのは食事の乗った
カートを押す眼鏡をかけた細身の男性に、浩樹君より年下と思われ
る、給仕服姿の女の子。

戸を閉め、食事を部屋にあったテーブルに並べ始める給仕服の女
の子の横で、男性が一礼した。

「おはようございます、高坂様、クライツ様」

「おはようございます、カヅキさん」

「え？ あ。お、おはようございます……えーと」

「カヅキ・ヴォーダンと申します」

「おはようございます、カヅキさん。時空管理局地上本部、ゼスト・グランガイッツ隊所属、ミィユ・クライツ一等陸士です。昨晚はご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありません」

「いえ、私は何も。貴女を車に乗せ、車から此处まで運んだのも、そちらに居る高坂様ですので」

「ふえ？」

高坂君の方を見た。高坂君と言えば、私の方に目もくれない。

でも、若干、顔がさつきより赤みがかっているのは……照れてる？

「照れてねーですよ」

「心読まれた!？」

普通に驚く私を置いて、浩樹君はカヅキさんと話を進めた。

「カヅキさん。こちらは予定通りで構わないのですが」

「ええ。こちら問題無いと伝えるよう、皇女殿下から言われております」

「分かりました」

「では、九時五十分ごろに、お迎えに上がります」

「ご苦労様です」

そんな浩樹君の言葉に、最後に「いえ」と答えると、カヅキさんと女の子は一礼して部屋を出て行った。

女の子が、終始浩樹君に何か言いたそうにしていたのが、気になっただけ。

「さっさと食べちゃいましょう、ミイユさん」

「うん。そうだね。ところで浩樹君。さっきの女の子と知り合い？」

「どうでしょう？ 今朝がた、皇居内を散歩していた時に偶然出会いましたけど、名前は知りません」

「そうなんだ」

まあ、また会った時に聞けばいいかなと思い、「いただきます」と二人揃って言って、私達は食事を始めた。

S i d e o u t

第四十二話　くある皇女の魔法嫌い　その２（後書き）

姉しよのゲームは未プレイです。ごまだれです。

凱龍輝様、Goldchild様、感想ありがとうございました。
何やら予定より進んでません。五部で終わるか怪しくなってきた。

そして報告です。活動報告を見ている方が恐らくいないのでこちら
で。

今度、Goldchild様の執筆なさる

『魔法少女リリカルなのは Only Hero Hero』とコラボ
させていただくことになりました。

現在の『とある皇女の魔法嫌い』と並行して、執筆していますが、
うまく纏まらないので、どれくらいの長さになるのか読めない……。

流石にコラボで前後編とかはないと思うので、いつも通り4000
字だろうと、10000字いこうと、そのまま載せます。

Goldchild様、改めてよろしく願います。

と言ったところで、今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

では次回。以上、ごまだれでした。

第四十三話 くある皇女の魔法嫌い その3 (前書き)

(仮)です。短いです。詳細は後書きで

前言撤回しました

第四十三話　くある皇女の魔法嫌い　その3

Side：浩樹

食事は大変美味しかった。少し味が濃かったけど。

そんな事をミィユさんと話していると、カヅキさんが部屋に来た。そして、カヅキさんの案内で皇居の中のとある一室へ案内された。そんななか、俺は少しだけそわそわしていた。それをカヅキさんに気づかれた。

「どうかしましたか、高坂様？」

「あ、いえ。何でもないです」

ただ、食事の後に洗い物をしてない事が気になってるだけです。

……職業病？

カヅキさんは「そうですか」とだけ答え、そのまま部屋の戸をノックした。中から聞こえた言葉に、カヅキさんが自身の名前と要件を答えると、入室を促された。

カヅキさんが戸を開け中に入り、後を追って俺とミィユさんも入室する。

初めて見る大きさの部屋には兵の方が計二十二名。そして、上座には十八程の女性がその兵の内、歴戦の戦士のような風格を漂わせている二名と今朝、窓拭きと食事を運んでくれた給仕服の女の子を両脇に控えさせている。

年齢非公認。そして顔写真も無かった事もあり、俺は失礼を承知で嫌疑の目を向け、ミィユさんは戸惑っているながら、女性と俺を見比べている。そんな中、カヅキさんは歩を進める。それに俺がついて行き、慌ててミィユさんもついて来た。

女性の前まで行くと、カヅキさんが跪く。

「時空管理局地上本部から来られた二名をお連れしました」

「随分と若いな」

そう言ったのは皇女らしき人の右隣にいた男性。その言葉に、左隣にいた男性も頷いた。言外に「こんな子どもで大丈夫なのか」と言っている事は良く分かった。気持ちは分かるが、カヅキさんに同じ事を言われた、というか思われた時よりも許せないのは

(目か)

威圧、そして見下す目。最初から俺やミィユさんのことを役立たず、とそう見ている目だ。その目は両側の壁に立つ兵士達からも向けられている。

(俺はイライラはするけど、慣れてるからいい。ミィユさんは)

チラリと顔を見上げると、おどおどしていた。予想通りの反応で、溜息をつきそうになったのを慌てて止める。

そして、前を向いたまま、一步前に出て敬礼した。

「時空管理局地上本部、ゼスト・グランガイツ隊所属。高坂浩樹二等空士であります。若輩の身ではありますが、全力を尽くす所存であります」

俺の言葉で我に返ったのか、慌ててミィユさんも前に出て、敬礼する。

「同じく、ゼスト。グランガイツ隊所属。ミィユ・クライツ一等陸士であります。高坂二士同様、全力を尽くす所存であります」

威圧が増した。そして、両脇に控えている男性達が更に険のある顔になる。それ以外にも両脇の兵士たちが士官で大丈夫なのか、みたいなきことを言っている。

少しだけざわつく部屋。そんな中、皇女殿下が口を開いた。

「静まれ」

その言葉で、部屋が静かになる。

「楽にして下さい。高坂二士。クライツ一士」

そう言われて、手を下ろした。

「よく来てくれました、と言いたいのですが……家の者たちが納得していないようです。実力を見せていただいても？」

「すみません、皇女殿下。その前に」

「何でしょう？」

「今回、有事の際の戦闘を行うのは、僕だけです。なので、実力を見せるのは僕だけになってしまおうのですが」

「分かりました。では」

そう言って、部屋を見渡す。そして、笑顔で言った。

「此処にいる兵、全員と戦って貰いましょうか。出来ますね？」

「当然です」

皇女殿下の問いに俺はそう答えた。

Side out

Side:ミイク

場所は移って闘技場。というより、兵の皆さんの為の訓練場という意味合いの方が強いみたい。そんな場所で浩樹君一人相手に、部屋にいた二十二名の兵の皆さんが槍（ゼスト隊長と違い、突くのみ重点を当てられたものだ）を向けていた。

挑発のような事を言った浩樹君にも非があるかもしれないけど、だからって本当に全員で向かう兵の皆さんも兵の皆さんだと思っ。まあ、実際、皇女殿下に言われたからって大義名分もあるけど。険しい顔で兵の皆さんが浩樹君を睨む中、浩樹君はと言えば

「ん」

伸びをしていた。指を絡めて背筋を伸ばし、そのまま右や左、前や後ろに体を曲げたり回したり。今から武器を持った人と戦うとは思えないほどリラックスしていた。

「彼はいつもあんな感じなの？」

急に横から尋ねられそちらを向くと、何時の間にか立っていたウイリアス・クリステリア・ロンゴミアント皇女殿下だった。

驚き、普段の自分では考えられないほどの俊敏さで、その場から退いてしまう。失礼に気がつき、慌てて謝った。

「す、すいません。皇女殿下」

「いえ、構いませんよ。それよりも」

「はい？」

「はっ！ い、いえ！ 何でも無いです！！」

「そう？」

「はい！！」

「ひー君と浩樹君、どっちの方が気持ちいい？」

「正直甲乙つけ難いけど、温もりにやっぱり浩樹君かな！！」

…って、へ？」

「口に出してたわよ？」

「ああ、やっぱり……」

浩樹君の時もそうだったけど、どうして口に出しちゃうんだろう？ …… おっちょこちょいの一点に尽きるだろうけどさ。

そんな事を思いながら、再び私は浩樹君達の方を見た。

「大丈夫かな？」

「心配ですか？」

「うん。怪我したりしないといいけど……」

「大丈夫でしょう。武器は持っていますが、限度は守るでしょうし」

「えっと……皇女殿下」

「ウイリアスです」

「はっっ」

思わず、身を仰け反らせる。笑顔がまぶしすぎる。だから、私は嘘をつくなんて事は出来ない。

「えっと、ウイリアスさん」

「はい？」

凄く嬉しそうだ。名前を読んだだけなのに。これを言ったら、その笑顔が曇ってしまうだろうか？

でも、そんな私の脳内とは裏腹に、口は勝手に動いていた。

「どうかしましたか？」

「あ、あの、私が心配してるのは……兵の人達なんですけど」

「……はい？」

首をかしげる皇女……じゃなくてウイリアスさん。

お互いに無言になり、その静寂は、カヅキさんの「開始！」という声を皮切りに破られた。

Side out

Side：浩樹

(何の話をしてるんだ、ミィユさんは……)

思わず頭を抱えなくなった。あれがデイビット辺りなら問答無用で^{フルアーム}極装甲のマテリアル・ハイを投げつけるし、アジア辺りでもとりあえずデコピン位ならするんだが、どうにもミィユさんには手を出し辛い。

(頼むから、俺とひー君を比べるのは止めてくれ)

後、皇女殿下に駄目口になっているんだけど……。まあいいか。皇女殿下も敬語を止めようって言うていたみたいだし。

溜息を一つつき、前を見る。二列横隊で槍を構え、最後尾には皇女殿下の両隣にいた男性二名。

(布陣はごく平凡な物。でも、皇女殿下の近辺警護役のこの人達な

ら、多分かなり鍛えられてる)

ま、それでも。

「分かり易い布陣だ。十分攻め手はある」

とにかくやる事は連携を崩す事。その為討つべき敵は二人いる。どちらから討つのではなく

(二人同時に、初撃必倒)

「ハッキング開始。プログラム『オフエンスアーマー窒素装甲』起動」

元々使う予定だし、問題無いだろう。まあ、直接殴ったりしたらスプラッタな事になるから、軽く一撃入れて意識を刈り取る。

ふう、と息を吐き、両足に力を込める。そして

「開始！」

と、カヅキさんの言葉と共に、体を動かす。一気に加速して、前列にいた兵達が目を見張る中、その内の一人の頭に着地し、其処を踏み台にして跳躍。最後尾にいた、随分と若いなと言った男性の前に着地。目を見張る彼にニコリと笑いかけ、オフエンスアーマー窒素装甲を発動したその体で、足を取りその場で横回転をして狙いを定める。

「とりあえず、先ずは貴方達から!!」

投げる。投げられたその体は地面とほぼ水平に飛び、もう一人にぶつかっても勢いは殺される事無く、二人纏めて訓練場の片隅まで飛んで行った。

いきなりリーダー格がやられた事に焦っているのか、残りの兵が全員取り乱している隙に、一気に距離を詰めて殴ったり蹴ったり。戦闘がはじまり五分も経たず、訓練場に立っているのが俺とカヅキさんだけになった。

「浩樹君、お疲れ〜」

皇女殿下とカヅキさんが啞然としている中、いつも通りのミユウさんの声が訓練場に響く。

「はぁ、と溜息をつき、俺はカヅキさんに声をかけると気絶している兵の人達を運び始めた。」

S i d e o u t

第四十三話　くある皇女の魔法嫌い　その3く（後書き）

いつもの3ノ4位の長さです。ごまだれです。

凱龍輝様、感想ありがとうございます。

（仮）とありましたが、深い意味はないです。その4、その5を書いた後、軽く纏める、と言うだけです。

その3（仮）、その4（仮）、その5（仮）　その3（真）、その4（真）

になります。妙な事になってすみません。

床で寝てる事が原因なのか、疲れが取れなくて筆が進まないんです。どんないい訳だよ、って自分でも思いますけどね。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

では次回。ごまだれでした。

前言撤回しました。長さは短いですが、キリがいいのでここまでで

コラボですが、とある皇女編が終わったら、投稿します。すいませ
ん

第四十四話 くとある皇女の魔法嫌い その4 (前書き)

又は『浩樹、初めての……』

第四十四話 くとある皇女の魔法嫌い その4

Side: 浩樹

さて。実力の確認の為の仕合が終わったのが一時間半くらい前。そして現在。俺は列車の中にいた。

十両編成の七両目。その一角のボックス席どころか、車両自体を占拠しているのは、俺に

「おお！ 速いな！ 窓を開けてもいいか!？」

「落ち着け、ウィル。危ないから」

「お主には聞いとらん!!」

「……そうかよ」

ウィル。そして

「ねえ、ウィリアスさん。あの建物は何？」

「ああ。あれは教会ね。それなりに有名なのだけど」

「すいません」

ミユさんとウィリアス皇女殿下がいた。でもカツキさんはいない。四人だけだ。

何でこうなっているのかと言えば、まあ、皇女殿下の発言が原因な訳だ。

仕合終了、十分後位。流石にそのまま、というのもまずいと思っただ俺は少しだけ時間を貰って、身支度を整えた。

姿見で自身の恰好を確認し、問題無い事を確認して皇女殿下のいる部屋に戻ってきた。先程まで居た兵の人達がいなくても別段、部屋が広く感じないのは部屋が無駄に広いからだろう。

さつき見たカヅキさんの見様見真似で入室し、ミイユさんの隣に並ぶ。

「時間をいただき、ありがとうございます。皇女殿下」
「いえ」

先程と違い、皇女殿下の脇にはカヅキさん。それに、今朝窓拭きをしている所を見かけて少し話したメイドの子。二人が皇女殿下の両脇に立つのは初めて見るけど、どこかしっくりくる。

「お疲れさまでした。高坂二士」
「いえ。お気になさらず。皇女殿下。疑って当然ですから」

言葉に偽りはなく、俺は本当に気にしていない。気にしてはいないけど、気になった事はあったけど。まあ、それについては言わなくていいか。個人的な事だし。

そんな事を考えていると、それでは、と皇女殿下が仕切り直した。

「高坂二士。並びにクライツ一士」

「はい」

「貴方に改めて私の護衛を任命します。お願いしますね」

「排命しました」

敬礼する。そんな俺達に皇女殿下がにこりと微笑みかけた。ミイユさんも敬礼はそのままに、ニヘラと笑い返していた。

非常に突っ込みたいけど、流石に皇女殿下の御前だし、皇女殿下気にしてなさそうだし、カヅキさんも苦笑しながらも特に何も言う

つもりじゃないらしいし、メイドっ子は……俺みたいになんか言いたそうだった。でも我慢してるみたい。

「では護衛内容の確認を。カヅキ」
「はい」

一歩前に出たカヅキさんが告げたのは、書類に書かれた内容と同じものだった。だからだろう。皇女殿下の魔法嫌いを思い出し、首を傾げそうになった。

何となくだけど、あの二人が逆な気がするけど……。まあ、これも気にする事はないか。使わないってそれだけなんだし。

意識を切り替えた。カヅキさんの「何か聞きたい事は？」の質問に、とりあえず手を挙げた。

「高坂様、なんでしょう？」
「会場までの移動の方法は？」
「電車で行きます」
「……はい？」

首を傾げてしまった。

「あの、皇女殿下？ 本気でしょうか？」

思わずそう尋ねた俺に、皇女殿下は「本気です」とそう答えた。

「移動は電車。私と高坂二士。クライツ一士にウィルを連れていきます」
「ウィル？」
「この子です」

そう言って、隣にいたメイドっ子を示した。……？

「カヅキさんは？」

「カヅキは留守番です」

……何で？

「カヅキには、私達が向こうに行っている間、城内の警備をしていて貰いますので。カヅキも了解しています」

カヅキさんを見ると、コクリと頷いた。えーと。

「では、先程仰られた通り、向かうのはこの部屋にいるカヅキさんを除いた四名だと？」

「はい」

……まじですか？

以上、回想終了。つきそうになった溜息を飲み込み、三人の方を見る。女三人集まれば姦しいとはよく言ったもので、そんなに五月蠅い訳じゃないけど、おしゃべりは尽きなかった。その事に感心している、悪寒がして、後部車両に繋がるドアが同時に開け放たれた。その気配と隠す気のない殺気で、そいつらが何者なのかはすぐに分かった。

「動かないで下さい。すぐに終わります」

三人にそう告げ、通路に出る。ドアには四人いた。首を鳴らし、

そちらを睨みつける。

『アルハ』

『プログラムに問題無し。いつでも行けるよ』

『ああ。了解した』

一度視線を下に向け、顔を上げる。

「ハッキング開始。プログラム『オフエンスアーマー室素装甲』発動！」

言葉と同時。四人が此方に向かってきた。こんな狭い場所で正気だろうかとも思ったけど、此方に好都合だったし、わざわざ指摘をしてやる義理も無く。振り下ろされた刃を避け、腹部に一撃。力尽くで四人纏めて押し飛ばし、車両から追い出す。

『さて、じゃあ、頼むぞ。アルハ』

『了解。フォルム：セカンド』

腕輪の状態だったデバイスが外れ、二つの指輪になる。とはいえ、核となる宝石を二分する事は出来ないから、宝石の付いた指輪とついでにない指輪だ。

その内、宝石のついた指輪を、ミイユさんに渡した。

「何かあったら連絡下さい。それに、簡単な防御ならそれで十分出
来ます」

「浩樹君は？」

「後部車両にいるさっきの奴らを追います。話を聞きたいですから」
それだけ告げて、走り出した。

Side out

Side: other

最後尾。オフエンスアーマー 窒素装甲を解除し、襲撃者達をとりあえずマテリアル・ハイで作った枷などをつけたりして拘束した後、十両目の車両から戻る中、いきなり車両が動きを止めた。

「つと」

浩樹は転ばないように何とか踏みとどまる。首を傾げつつ、今にも停まりそうな車両を走り抜けると、誰かが立ちはだかった。

外套を羽織り、フードをかぶつて。右手には槍（兵の人達が持っていたようなランスとは違い、斬る事も出来る和槍だ）を持っている。そして、その更に後方。本来なら前方車両と繋がっている筈の開け放された扉の向こうに、車両が無かった。

「なっ!?!」

浩樹が外套の人間を睨みつける。そしてそいつは槍を構え

「貴様には死んでもらう」

と一言そう言って、浩樹に向かってきた。殺気と共に、言葉通り浩樹を殺す為に放たれた槍を屈んで避け、迎撃しようと考え、

「つ」

浩樹は本能に従い、後ろに下がることで避けた。すかさず踏みこ

まれ、二撃目、三撃目が浩樹に迫る。避けられる物は身を反らして避け、そうでない物は後ろに下がることで避けながら、浩樹は齒軋りした。

（何でだよ！？）

内心で叫ぶ。ある程度の思考はするとはいえ、基本的に浩樹は思考よりも、浩樹自身の有事の際の悪寒に従い行動する。だからこそ己の思いと別の行動をする時はそれなりにあった。でも、それでも最後には勝利に導いていた事もあり、普段なら疑う事はしない。

だけれども、居なくなった前方車両にいたミユさん、皇女殿下、ウィル。その三人の事と普段なら傍にいるアルハがいない。その二点が、浩樹に焦りを生んでいた。

突き出された槍を避ける。相手が槍という長物の為、狭い車内で攻撃のパターンが限られているから何とか避けられてはいる。それでも、攻めなきゃ勝てない以上、これ以上時間を使うのも嫌だった。

（一か八か！）

浩樹は再度突き出された槍を避ける。本能が離れろと告げる中、足に力を込め一気に踏み込み、そして

「がつ！？」

腹部に衝撃。そして、異物が入り込んだ違和感。見下ろすと、何かが刺さっていた。そのまま、刺さっていた何かごと後ろに飛ばされ、車両の壁に叩きつけられる。

足がついた直後、倒れないように両足に力を込めて、壁に寄り掛かる様にして立つ。痛みを耐えて腹部に刺さった何かを抜いた。

「槍……?」

相手が使っていた獲物の半分ほどの長さ。顔を上げると相手に手に持っている槍の長さが半分ほどになっている。

「仕込槍の亜種みたいだな」

「……」

浩樹の言葉に何も答えず、半分の長さになった槍を構え突撃した。浩樹は、手に持っていた槍を投げつけて襲撃者の勢いを殺すと、三段跳びの要領で壁を蹴って、振られた槍を避けつつ背後を取る。

(加減は無理。これで終わらせる)

加速。振り返る途中の襲撃者の顔へ膝での一撃を狙って跳び、一撃。さらに襲撃者の体を蹴って翻り、距離を置き、加速できるように構える。

襲撃者は体をよろめかしながらも、倒れずその場に踏み止まる。舌打ちと同時に、浩樹が再度顔めがけて跳び、今度は受け止められた。

「やはり強いな」

「……っ!?!」

その足が、二つに分かれたままの槍の一本で刺される。体を蹴って再び距離を開け、今度は槍を抜かず、浩樹は賭けに出た。

「ハッキング開始!」

サブでも発動できるとはいえどうしても発動が遅くなるし、自身

に潜る必要がある為、その間、相手の行動に対しての反応が遅れ、まともな動けなくなる。故の賭け。しかし、利き足である右足と腹部の刺傷がある以上、これ以外に手が無いのもまた同じだった。

自身に潜り、データを上書きしていく。そして、その間を狙い、襲撃者が浩樹に向かった。絶対的に反応が遅れ、向かってきた槍を敢えて避ける努力を放棄し、少しだけずらして後ろに跳ぶ事で、致命傷にのみならないようにする。

「何とか、なった!!」

新たに開けられた風穴が、自身の肺を貫いた事を意識しつつ、浩樹は準備を終えた自身の矛であり盾である装甲を発動しようとした。

「プログラム『オフエンスアーマー窒素装甲』発つ!？」

プログラムの準備が終わり、浩樹の意識が戻った事が災いした。迫った槍を反射的に避け、それでも避け切れずに槍が浩樹の頬をかすり、そのせいでプログラムに乱れが生じて発動できなくなる。

初めての事態で戸惑い、致命的なまでに反応が遅れ、そして、また槍が俺の体を貫き、俺が体は宙に舞った。

S i d e o u t

S i d e : 襲撃者

力無く横たわる彼の体を見下ろす。体に開いた刺傷から血が溢れ、床を汚して行くのを眺めた。

まだ生きているかもしれない。そう思い槍を振りかぶり……降ろ

した。止めを差さずとも、このままなら出血多量で死ぬだろう。

彼の体に刺さっている槍を引き抜き、一本に戻すと、私は槍を背負い線路に降りて、移動を開始した。しかし、数歩歩いた所で、立ち止まり、車両の方を振り返る。床では、相変わらず彼が倒れている。

「恨みはないのですが」

自然に声が出た。そして、あそこまでやらなくても良かったかもしれないと思い始めてしまう。だがこれからの事を思い、首を振ってその思いを頭の中から追い出そうとする。

「今はまだ、立ち止まる時じゃない」

恐らく、彼と一緒に来た彼女は号泣するだろう。ならば、全てが終わった後、彼女に殺されるのもありだ。それまでは、自身の業を自分で背負う。

再び振り返り、今度こそ移動を始めた。

彼の方から目を反らしたから、彼の手が思いきり握り締められている事に、私は最後まで気がつかなかった。

第四十四話　〜とある皇女の魔法嫌い　その4〜（後書き）

最近、『初めて』と『始めて』の使い方がごっちゃになって分からない……。ごまだれです。

凱龍輝様。Goldchild様。感想、ありがとうございます。た。

書いといて何なんですが、九歳くらいの子供が、ここまで刺されたら普通に……。まあ、主人公補正ですね。主人公補正なんです。主人公補正ということで納得してくださいお願いします。

それより、Side:otherについてですが。三人称視点と書いてください。決して浩樹視点で書いてたら、書けなくなつたとか、そんなんじゃないです。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

では次回。以上、ごまだれでした。

第四十五話 くのある皇女の魔法嫌い その5く（前書き）

又は『先輩と後輩』

第四十五話 くとある皇女の魔法嫌い その5

Side : 浩樹

気配は消えた。最後にこちらを眺めていたようだが、何もなかったし恐らく気がつかれなかったのだろう。

『流石に一回死んだ気がする……』

『大丈夫だよ。心肺停止状態になったりはしてないから』

『いや、精神的に』

『それだったらあるかもね』

アルハと軽口の応酬をしつつ、目を開けた。いつの間に来たのか、後部車両にいたであろう人たちが俺の事を覗き込んでおり、その人達と目が合って彼らの体が跳ねた。死んでいると思われたのだろうか。

そんな人達を無視して、何とか体を起こす。

『血が足りねえ』

『これだけ出血してればね。生きてる方が不思議だよ』

『全くだ。とりあえずアリシアに連絡。その後、前に組んだあのプログラムで』

『連絡済み。データ処理の為の準備も出来てるから、いつでも行けるよ』

『オーライ。流石だな。んじゃ、ハッキング開始。プログラム『^リ肉^バ体再生』発動』

プログラム『^リ肉^バ体再生』。自身の持つ自然治癒能力を異常に活性化させ、傷を治す。言ってしまうえば自身にハッキングしてデータを

書き変える、マテリアル・ハイ等の窒素固定と同系統のプログラムだ。

しかし、窒素固定と違い、リアルタイムのデータの処理が必要な為、戦闘中の使用は論外。おまけに処理の間、オーバーヒート気味になる為、体温が異常に上がるなど、地味に使い勝手が悪かったりする。流れ出た血が増える訳でもないし、傷によつてはやっぱり治るまで時間がかかる。

『あ、浩樹。服脱いで。傷治した時に、巻き込まれてたら後で痛いよ?』

『ああ。了解』

さつさと服を脱ぐ。パンツ一枚だけの姿になり、体を見下ろすと、まあ見事に穴だらけだった。周りにいた人達も、それを見て若干引いている。でも、傷口は目に見えて治り始めている。

『どれくらいかかりそう、アルハ?』

『一時間半くらいかな。でも、輸血しないとまともに動けないよ』

『ああ、正直口を動かすのも億劫だからな』

むしろ念話で会話しているだけでも大分辛い。今すぐ眠ってしまいたい衝動を何とか抑えながら、何とか立ち上がり、座席に腰を下ろした。

『さて、これからどうするか』

『ミイユ・クライツとの合流かな。必須事項だよ』

『そりゃそうだが。飛行は無理だ。絶対に墜ちる』

傷さえ治れば何とかいけるかもしれないけど、血が足りないのは致命的だ。

溜息をつくど、電車が動き始めた。逆走して皇国に戻り始める。

『お客様に連絡します。当電車は、一度、直前の駅まで戻らせていただきます。お客様には大変なご迷惑を』

「……まじ？」

思わず声に出していた。電車は徐々に速度を上げて行く。そんな中、後方車両に繋がる戸が開き、車掌が入ってきた。

「お客様。この車両は危険ですので、此方の車両に移動してください!?」

業務連絡のように告げていた車掌の声が跳ねた。そりゃそうだろう。夥しい量の血が、車内の床を汚しているのだ。車掌は辺りを見回し、俺に気がつくど慌てて近づいて来た。

大丈夫か聞こうとしただろ車掌を手で制する。

「俺は平気ですから。それより、十両目にいた拘束されている彼らに何か変化はありましたか？」

「い、いえ。気絶した状態で拘束されたままです」

「そうですか。ありがとうございます」

「あの、包帯か何かあった方がいいですか？」

「あ、大丈夫です。到着までには治りますから。それより、輸血が出来れば輸血の方が」

「分かりました。連絡しておきます」

「お願いします」

俺に頭を下げて、車掌は他の乗客たちを誘導しつつ、出て行つた。

『すげえ、丁寧な人だな。俺みたいなお子とも相手に』

『寧ろそんなに怪我してるのに普通に接してきて、気圧されてた感じだけだね』

『ああ、そつちか』

そんな事を話しながら、窓の外を見た。先程まで後ろに流れて行った景色が今度はどんどん流れてくる。

「負けた」

『……』

ぼそりと呟いた俺の一人事に、アルハは答えない。それが救いだつた。

拳を振り上げ、座席を殴る。

「有効打は一撃だけ。でも、その一撃でも倒せなかった」

『……』

「一方的だった。あの人が強くて、俺が弱い。それ以上でもなく、それ以下でもない。それだけの事。それだけの事を叩きつけられた」

でも、そんな事はどうでもいい。そんな事より

「最後の一撃の時。俺は勝つ事を諦めた。それが許せない」

最後の一撃の時、俺は『リバーズ肉体再生』の準備を始めていた。その事が許せなかった。戦闘で、負ける気になったのだ。

「くそつたれが」

判断としては正しいとか、そんな事はどうでもいい。勝つ事を諦めるのは、俺にとって前に進む事を諦めるのと同じだ、

「くそつたれがあ……」

俯き、歯を食いしばり、拳をもう一度座席に叩きつけた。悔しかった。ただ何よりも。

そんな俺の思いとは裏腹に、電車は進む。駅に着くまで、俺はずっと前を向く事が出来なかった。

Side out

Side:ミイク

「大丈夫ですか？」

「え？」

「先程から、何度も溜息をついていますよ。そんなにあの子の事が心配ですか？」

「あ……はい」

その後。切り離された後部車両を置いて、私達は無事に駅に到着した。其処から、隣国で用意したという車に乗り換えて移動を開始して、私達は皇居を目指していた。

「浩樹君、大丈夫でしょうか」

「それについては、私達より貴女の方が詳しいのでは？」

「そんなことないです……」

そう、そんな事無い。何故かと問われれば単純で、私は浩樹君と

まともに話した事なんて殆ど無いのだ。

昨日と今日とで、もしかしたら浩樹君入局後に会話した量の軽く二倍くらいは話したかもしれない。それだけ、私と彼の接点はない。私が一方的に意識しているだけだ。

ふと外を見た。どれくらい時間がかかるかは分からないけど、少し位、話すのもありかなと。そう思って私は口を開いた。

「ウィリアスさん。少しだけ、お話を聞いて貰ってもいいですか？」

「お話、ですか？」

「はい。私から見た浩樹君についてです。到着まで時間もあるでしょうし」

「……そうですね。ぜひ」

はい、と頷いて。私は話し始めた。

「浩樹君と初めて会ったのは、彼の管理局への入局試験の時です。

私は試験官の一人だったんですよ。仕事の幅が増やせるように私にとって初めての新人になるからって部隊の隊長が気を利かせてくれたみたいで」

「そうなんですか」

「まあ、でも。浩樹君はその時から私より優秀でした。入局の筆記試験も中途だった事もあって、私より難しいテストを私と同じくらいの点数を取って見せて。でも、圧巻だったのは実技です」

あれは生涯忘れる事はないって自信を持って言える。彼は、

「浩樹君は、部隊の隊長と互角の戦いをしたんです。勿論、ゼスト隊長も手加減はしました。それでも、私よりも短い、それこそ十年生きてない男の子が、地上本部最強と謳われるゼスト隊長と互角の戦いをしたんです」

「……………」
「衝撃的でした。私にとって、ゼスト隊長はその……とにかく凄い人だったんです。以前、助けて貰った事があって。まあ、それが理由で管理局に入局したんですけど」

だからこそ。

「その凄い人と互角に戦う浩樹君が純粹に凄くてだから興味もわきました。どんなの子なのかって」

とはいえ、せわしなくパタパタ走りまわっているような子だったから、全然話す機会なんて無く、隊長達からどんな子なのか聞いたりしただけだけだ。

「特殊技能あるし魔導師ランク高いし家事万能だしで、文句のつけようがない子なんです。でも」

「でも？」

「浩樹君は子どもなんですよ。周りの人達が思ってる以上に」

いつも前を向いて。自信満々で。他の人達の弱みを見せようとしていないだけ。

「負けず嫌いで優しいんです。だから何でも一人でやろうとして、肩肘を張って背伸びして。でも、ちゃんと為し得ちゃうから、周りの人達は皆誤解するんです。あの子は一人でも大丈夫って」

「ミイユさん……………」

「だから甘えさせてあげられないかなって色々頑張ってみたんですけど。飛行機の中ではお姉さんぶったりして。でも駄目でした。私の方が甘えちゃって」

自嘲する。そんな私に、ウィリアスさんは「そんな事無いですよ」とそう言った。

「あの子も貴女に甘えていると思いますよ？」

「そんな事無いですよ。だって」

「あの子がかもし、貴女に甘えていないならもつと事務的なやり取りになると思いますけど？ それに、電車でだって、必要以上に何も言わなかったのは、貴女への信頼だと思えますけど」

「……………」

そうなの、かなあ？ 此処まで自信たっぷりと言われるとそんな気もするけど。

「きつと彼は…………あれです。つんでれ？ とかいう奴です」

「ツンデレ…………なるほど。そうかもしれないですね！」

「はい！」

ウィルちゃんは窓の外の景色にご執心だった事もあり、残念な事にツッコミ不在だった。

だから私とウィリアスさんは、どうやったら浩樹君がデレるのかという、後になって考えて見れば良く分からない議論をしながら、車に揺られていた。

S i d e o u t

第四十五話 くとある皇女の魔法嫌い その5（後書き）

最近筆が進まない。前にも言った気がするな、これ。ごまだれです。

凱龍輝様、空牙刹那様。感想、ありがとうございました。

浩樹が半ばチートになり始めつつ、その裏ではミイユから見た浩樹でした。個人的に浩樹をミイユはいい感じに姉弟になるような気がします。性格的に。

遅筆&微妙な出来とこれが俗に言うスランプなんですかね？ 今年中にとある皇女編は終わらせたかったのですが、残念です。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

では次回。ごまだれでした。

閑話 くクリスマス特別編く（前書き）

ずっとアリサのターン

追記：書き忘れましたが、今回は浩樹を含め、大体15歳位の設定です

閑話 〱クリスマス特別編〱

〱浩樹〱

暇だ。異常に暇だ。

普段なら考えられない位に、俺はグータラしていた。何故グータラしているのかと聞かれれば、休暇だからだ。この歳で『地上の過労死候補NO.1』と伊達に呼ばれてはおらず、有休が溜まりに溜まっていたらしい。

今までもちよくちよく言われて来たけど、その度に忙しいからとか色々な理由を告げて逃げて来たんだけど。

男性諸君。想像して欲しい。かなり鍛えているらしく、制服がパンパンになってしている強面で髭面の何で人事部にいるの？と思わず思ってしまうような男性から「有休をとるか、俺に掘られるか。どっちがいい？」とか聞かれるんだ。どうする？

因みに俺は即日有休を取って逃げた。まあ、そんな訳で俺は今、年末年始という事で、久しぶりに実家に帰って来ていたんだけど。なのはとフェイトとはやては仕事。アリサとすずかと佳奈は課外らしく、暇じゃなかった。

「アリシアが起きてれば、アリシアと出かけるんだけどなあ」

生憎とアリシアはまだ夢の中だった。俺がクリスマスを含めた年末年始に休暇を取ったと知ると、彼女は何故か鬼気迫る勢いで自身と俺の仕事を片付け始めた。それで二日ほど貫徹したらしく、起こしたけど起きる気配が無く諦めた。

「あー、出掛けようかな……。でも、炬燵から出たくない」

もぞもぞと動いて、更に炬燵に入り込む。

「温い〜」

まあ、今日のはのんびりしようかと、そう思った。今日は12月25日。俗に言うクリスマスで街を賑わっているだろうから、一人じや空しいだろうし。

家事はするけど、洗濯とかは終わってるし、今日は炬燵で茶でも飲んでいようと思い、茶を煎れる為に、一度炬燵から出た。若干寒く、さつさと戻ろうと小走りで移動していると、家電が鳴った。

「じいちゃんかな？」

少し考えて、ありえないと首を振った。出かけている時のじいちゃんに連絡してくるなんて滅多に無いしな。

「となると、人妻に墓石を売りつけようとしたり生保に契約させようとする業者か？」

どっちにしてもご苦労様な事だ。少し悩んで俺は声色を変えて無垢な女の子でも装って、業者さんとお話でもしようか。

ちよつど喉が渴いていたから、茶とは別に用意していた水を口に含んで、何度か声を出し、声色を変えいく。そして電話に出た。

「はい、もしもし〜？」

『……え？ うえっ！？ ど、どちらさまですか！？』

自分で電話かけといて、どちらさまは無いだろうに。まあ、でも今の声で業者ではない事は分かった。俺が帰って来ている事を知らない筈だから、多分佳奈にでも用事があったんだろう。

えーと、えーと、と電話の向こうで戸惑っていた幼馴染のアリサ・バニングスは意を決して声をかけて来た。

『え、えーと、お譲ちゃん？』

『はい？』

『か、佳奈……じゃなくて、高坂佳奈さんはいる？』

『お母さんはお出かけしてます〜』

『そう。それは残念ってお母さん！？』

ナイス突っ込みだな、アリサ。

……そうだな。いい加減間延びした喋り方と発声に疲れたし、普通に話すか。断じて飽きた訳じゃないよ？

「それ『あ、あの子何やってるのよ！　っは、もしかして浩樹との……。浩樹はこっちにいる間、佳奈の家にいる訳だし。睡眠薬でも盛れば流石の浩樹も起きないだろうし……。でも、そんな様子なかったしああもうー！』落ち着けアリサ。冗談だから」

それにしても睡眠薬って。アリサから貰った飲食物、食べ辛くなるだろう。

『……浩樹？』

『ああ』

『さっきの子は？』

『俺が出した』

そう言い、先程の声で「アリサお姉ちゃん」と言ってみると、何故か電話の向こうで悶絶しているらしかった。

そしてガサゴソと音が聞こえ、アリサが『アンタって九歳頃の声も出せるの？』と訳の分からない事を聞いて来た。

「ああ。問題無いぞ。ちょっと待って。んんっ。『アリサ。大好きだ』」

『っ。あ、後、その声でアリサお姉ちゃんってもう一回!!』

「なん『いいから言いなさい!!』訳わかんねえよ。はあ、行くぞ。

“アリサお姉ちゃん?” “これでいいか?”

『うん……』

満足いただけたようで。それにしても久しぶりにアリサと話せるのはいいんだけど、この時間って課外じゃないんだろうか? 佳奈に用事もあつたみたいだし。

「なあ、アリサ」

『何よ?』

「課外はいいのか? てか、佳奈は今朝、課外に行くって言って出掛けて行ったんだが」

『……つかぬ事聞くけど、アンタはいつ帰って来てたの? 連絡をよこさなかったのは何で?』

「帰って来たのは一昨日の23日。連絡しなかったのは、佳奈が皆忙しいからって」

『あんの小娘え……』

小娘!?

「あ、アリサさん?」

『抜け駆けしてたわね。浩樹が必要な時以外、出不精なのと携帯が無いのを利用して……』

「……課外はいいの?」

『そんなもん、昨日終わったわよ!! 今日から暇で! なのは達は仕事でいないから、とりあえず佳奈とすずかでも誘って遊びに行

こうと思ったら！ 携帯にかけたらでないから、家電にかけたらア
ンタが出たのよ！』

「でも、佳奈の奴、今日は課外って言って出掛けたぞ？」

『そんなの、アンタのプレゼント買うのに出掛けたに決まってるで
しょー！』

決まっではないと思うけど……。

そんな俺の内心を捨て置いて、アリサは暫く何かを考えるように
呟き始めた。手持無沙汰になり、スピーカーモードにして受話器を
置き、床に座って茶を飲みつつ、置いてあったどら焼きを食べてい
ると『浩樹？ ねえ浩樹？』とアリサに呼ばれた。

受話器を取って耳に当てる。

「ふあひ？」

『とりあえず飲み込んでから喋りなさい』

もぐもぐ。ごくん。

「それで？ どうした？」

『アンタ。家に居たって事は暇なの？』

「ああ。だから日がな一日、炬燵でのんびり茶を飲んでるつもりだ
った」

『そう……なら……』

私と出かけない？ とアリサは恥ずかしそうにそう言った。

くアリサく

約束をしたのが十分前。集合予定時間が電話で話した時から一時

間後。つまり後五十分。最低三十分前には家を出ないと間に合わないから、荷物も含めて実質後十五分しかない。

「さ、誘ったはいいけど」

着て行く服が決まらない。まさか帰って来るとは思わなかったし……。てか佳奈め。普通に抜け駆けしてたわね。

自分の事は棚に上げている自覚しつつ、意気揚々と服を脱いだまでは良くて、下着姿のままクローゼットから服を取り出しては自身に当て、姿見でそれを確認してベッドの上に放り投げる事を、ひたすら続けた。

「これにする？ それとも……」

どうせ浩樹は服に無頓着だからそんなに気にしなくてもいいかもしれないけど……。同じくらいあいつは気紛れだから、無駄に力を入れた服装で来ないとも限らない。

結局私は、時間ぎりぎりどころか、服選びに悩み過ぎて、でなければいけない時間をオーバーしてまで服を選んでいた。

（浩樹）

遅い。時計を見ると、既に集合予定時間から三十分経っていた。

（アリスが遅れるなんて珍しいな）

時間ぎりぎりに来る事はあっても、遅れてくる事は無かった。何かあったのかもしれないけど、生憎と確かめる手段が無ければ連絡する手段も無い。携帯電話は無くしたきり買っていないし、公衆電

話も周囲には無いからだ。

かといって、下手に動けば行き違いになる可能性だってある。つまりあれだ。

（早く来てくれアリサ）

雪が降って来て余計に寒くなってきたし。

手に息を吹きかけつつ、俺はアリサの到着を待った。

くアリサく

なんだって、今日に限ってこんなに混んでんのよ。って、まあ、クリスマスだからだけだ。

服を選ぶのに手間取って、たださえ遅刻だと言うのに、余りの人の多さに走ることすらままならない。電話が繋がればいいけど、生憎と彼は携帯を持ってないし。既に約束の時間から一時間経った。

「はあ。浩樹なら待っててくれると思うけど……」

きつと寒空の下、少しだけおしゃれな格好をしてその上にコートを着て。でも、天気予報見てないから、傘を持っていなくて。それでも、私と入れ違いになるとまずいからって傘もささずに其処で待っている、と思う。

（前にもあったしね）

その時は翌日、彼が風邪をひいて大変だった。主に誰が看病するのかで。

(早く行くこと)

そう思い、歩く速度を上げようとして、周りの人達の並みに逆らえず速度の変化はなかった。

〈浩樹〉

くしっ、と可愛らしい拍手が聞こえたが、俺じゃない。くしゃみの主は、俺の隣に座る名も知らない少女だ。少し前から其処に座っている少女は、俺と同じく待ちぼうけをくらっているのか、俺が座るベンチに座り。地面に届いていない足をぶらぶらさせている。

再び可愛らしいくしゃみ。着ている物は俺と違い厚手の物だし、傘もさしているけど、それでも寒いらしい。余り悩む事無く自分が着けていたマフラーを差し出した。キョトンとしている少女に、ニコリと笑いかける。

「それで少しは寒く無くなるだろ？」

「うん……。でもお兄さんはいいの？」

「鍛えてるから」

本当はそんな事無いけど。実際、マフラーがあっても無くても変わらない位に寒いから、正直どうでもいい、というのが本音だ。

少女の頭を撫で、ベンチに座り直す。特に会話も無く、二人でぼんやりしていると、その内少女の待ち人が来た。それに気がついた少女が、俺のマフラーと自分の傘を俺に差し出して、その待ち人の方に走って行く。

「あら？ 傘は？」

「あげたの！」

「誰に？」

「マフラーのお兄さん！」

そんな会話が聞こえて来た。少女は一度、此方を向いて手を振ってきた。そんな彼女に同じように振り返し、彼女が去ってから、マフラーをつけ直し傘を差した。

女の子向けの兎の絵が書いてあるような可愛らしい小さな傘。それでも、雪が凌げる様になっただけでした。

「アリサ、まだかなあ」

いい加減寒いし、温かい飲み物でも買うかと、そう思って俺もベンチから立ち上がった。

「アリサ」

着いたはいいけど、既に二時間遅れ。こんなことなら、送るって言ってくれた鮫島に素直に送って貰えば良かったわと思いつつ、私を待っていてくれる筈の彼の姿を探す。

「いない？」

右を見ても左を見ても。彼が座っているであろうベンチを見ても。何処にも彼の姿は無かった。

これだけ待たせたのだ。怒って帰ってしまった可能性だってある。思わず「最悪……」と呟いて、開いていたベンチの一つに腰かけた。二時間前から振っている雪は未だに降り続け、勢いを増している。これなら明日には積もるだろう。雪なんて久しぶりに降ったのだから、明日は雪だるまを作ったりして、遊ぶのも悪くないかなあなん

て考える。

「馬鹿みたい」

溜息をつく。携帯を取り出して見てみるが、着信もメールも無い。

「帰ろうかしら」

「決断、早くないか？」

横からその声をかけられて。そちらを見ると、缶コーヒーを二つ持ち、可愛い傘を差した浩樹が其処にいた。

（浩樹）

飲み物を買って帰って来ると、ようやく来た待ち人が其処にいた。

「帰ろうかしら」

と思つたら既に帰る気でいて焦った。近づき「決断、早くないか？」と突っ込む。もう少しこう「なんでやねん！！」みたいな元気な突っ込みがしたかったけど出来なかった。思ったより、体力は奪われているらしい。

俺の姿に気がついたアリサは慌て始める。首を傾げつつ、彼女に缶コーヒーを一つ差し出し、残った方を飲み始めた。

「何かあったのか？ 大丈夫？」

アリサの隣に腰をおろしつつ、そう尋ねる。アリサはしばらく沈黙し、コーヒーを若干飲んでから「大丈夫よ」とそう答えた。

「そっか。なら良かった」

「……ね」

「うん？」

「ごめんね浩樹。待たせちゃって」

「ああ、いいよ。別に」

気にしてないとそう言うと、アリサの顔が歪んだ。

くアリサく

何で気にしないのよと、私は浩樹にとっては理不尽でしかない怒りを覚えた。だからだろう。その事が顔に出ていたらしく、浩樹は不思議そうな顔をした。

「アリサ？」

「……何で気にならないのよ」

「え？」

「アンタの事、この寒空の下、二時間も待たせたのよ？ 自分から誘っておいて。アンタは私に怒っていいのに。どうして」
「だって来ただろ？」

浩樹はそう言って立ち上がり、傘を閉じた。これ返さないとなあとかぼそりと呟き、私に手を向けて来た。

戸惑っていると、私の手を取って、無理矢理立ち上がらせる。

「前に言っただろ？ 俺とアリサは似てるんだって。だから、アリサは来るって分かった。だから気にしてないの」

「っ」

「とりあえず、どこか入ろうぜ。流石に寒い」

そう言って、私の手を引いて歩き始めた。

ああ、もう本当に。こいつには敵わないって、そんな事を思いながら、私も私の手を握る浩樹の手を握り返した。

閑話 〱クリスマス特別編〱（後書き）

リア充なんて、リア充なんて！ ごまだれです。

原作海鳴組の、聖祥付属三人娘で唯一キャラ崩壊していない（筈）のアリサ嬢のターンでした。本当は三人分書こうかと思ったんですけど、時間がないのとアリサ嬢が長くなってしまった。

そして26日になりました。今、この瞬間に。残念でならない。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さってありがとうございました

では次回。以上、ごまだれでした。

第四十六話 くとある皇女の魔法嫌い その6 (前書き)

又は『天使は天使でも告死天使』

今更ながら、新年、明けましておめでとございませう。

第四十六話　　とある皇女の魔法嫌い　その6

Side：浩樹

俺は今、クリステリア王国で一番大きな病院にいた。電車が駅に戻ると、本当に連絡をしていたらしく、すぐに捕まり救急車に詰められ、輸血が開始された。傷が治っていた事はかなり驚いていたけど、それは魔導師なのでと誤魔化した。

搬送後は精密検査などをして病室を一室充てられた。検査結果は問題無いとはいえ、出血が激しかった事もあり、言い渡されたのはある意味いつも通りの絶対安静。だけど時間が惜しい。

『さて、そろそろ退院するか』

『言ってる事、おかしいからね？　患者の判断で退院出来るとかないから』

『十分休んだよ。とりあえず、ほとんど残ってないが、今付いてる輸血パックだけ貰って行こう』

『無いなあ』

ベッドから体を起こし、針が腕から抜けないように注意しながらベッドから降りて、俺は入院着からボロボロになった管理局の制服に着替え始めた。

しかし、着替え途中に上手く服が着れない事に気がついた。

『血って飲んでも吸収できるかな？』

『発想が吸血鬼だね。で？　飲むの？』

『針が刺さったままだと、チューブが邪魔で上手く着れない。一回抜いたら、刺しにくそうだし……飲むか』

『針刺したままチューブだけ抜いて、服着てからもう一回針につな

「げればいいんじゃない？」

「……………おお！」

「浩樹って時々、凄く馬鹿だよな」

その言葉は無視をして、俺は針からチューブを外すと、手早く着替えて再び付けた。若干血が漏れたけど、既に制服が血みどろだし、気にする事もないだろう。

穴だらけの制服をこの後どうするか考えながら、輸血パック片手に外に出た。既に診察費などは払っているから問題ないとは思いつけど、後でもう一度顔を出しておこうと考えつつ、眩暈などに襲われふらつきながらも、出入り口ではなく屋上に向かう。

「なんで？ 外に出るんじゃないの？」

「走る元気は正直ない。電車はあんな事があつた後じゃ多分、ダイヤが乱れてたりでまともに走って無いだろう。だから」

「飛んでくと。許可は？ 取らなくてもいいの？」

「魔法じゃなくて、科学の産物で飛ぶさ。ま、科学かどうかは怪しいけどな」

「……………ああ、なるほど。屁理屈って訳だ」

「緊急事態だしな」

時々すれ違う人達からドン引きされつつ（幸いな事に病院関係者とはすれ違わなかったからよかったのだが）、屋上へ出た。

「ヤバい、灰になりそうだな」

「まさしく吸血鬼だね」

今朝は気にならなかったのに、さんさんと降り注ぐ太陽光に辟易しながら、屋上の縁を目指す。

どうしようもなくふらつく体を、何とか支えながら柵まで辿り着

き、少し悩んでからデバイスの内にしまっておいた、カードと杖を取り出した。

『自力で飛ばないの？』

『言っただろ。屁理屈を通す。それに、こっちの方が速いんだ。悔しいが』

慣れていない訳ではないけど、残念ながら。

という訳で、辿り着くまでに無くなった輸血パックを針ごと放り投げ、先ずは着替えの意味も含めて、バリアジャケットの起動。カードを投げ杖を向け。使用するカードの名前を宣言する。

「^{フライ}翔」

背中から翼が生えた。軽くパタパタ動かしてみても具合を確かめる。問題無く働いている事を確認し、一つ頷いていざ飛ばうとした途端、「天使様？」と後ろから声をかけられた。

慌てて後ろを振り向くと、スバル程の女の子が、人形を抱きしめながら其処に立っていた。音も立てずにどうやって！？と思っただけ、ドアを閉めた記憶が無かったし、多分開けっ放しだったのだから。

まあ、生憎とそんな事は些細な問題で、今は見られたというその事実をどうにかすべきで。

「えーと……」

どうしたもんかなあ？

S i d e o u t

S i d e : ミイク

私が浩樹君の話をしているうちに到着した皇居は、クリステリア皇国のそれと比べても、大差ない程に立派だった。

おお、と感心していると、此処に仕えているのであるう、給仕さんの一人がこちらに来て頭を下げて来た。余りにも丁寧で、反射的に頭を下げ返す。

「良くおいで下さいました」

でも、そんな私を無視して、給仕さんは事務的に会話を進め、皇居内に案内された。中には、それなりに多くの人がいて、その中にはテレビで見た事があるような人もいた。

(それなりに規模が大きいパーティーみたい……。そこらへん、もっと詳しく伝えて下さいよ、隊長)

そんな事を思いながら給仕さんに着いて行く。

(早く来てね、浩樹君)

そう思い、少し考えてみた。

(浩樹君……うーん、ウィリアスさんにデレて貰う為に、もう少しだけ近づいてみようって言われたし……)

一つ頷く。

(あだ名で呼ぼう。とりあえず、ひー君でいいよね。早く来てね、ひー君。後、連絡下さい)

車内で色々言った傍から、甘えているなあと思いつつ、私は指に光る指輪の持ち主に、そんな事を願っていた。

Side out

Side: 浩樹

「もふもふ」

さつさと飛び去る事も出来ただけど、女の子の口止めをしたかった事もあり、飛び立つ事はしなかった。今は何故か翼が気にいったらしい、女の子に翼を弄られつつ、これからどうするか悩んでいた。

『さつさとこの子に口止めして行くか』

『でも、離しそうもないよ?』

『何だよな』

チラリと横を見ると、翼に頼ずりしている女の子。この翼、地味に神経が繋がっているという訳ではないのかもしれないけど、触角などはリンクしていて、頼ずりしている女の子の感触が、少しばかりこそばゆい。

ふと、視線に気がついたのか、女の子がこちらを見た。

「天使様は、私の事を迎えに来たの?」

「迎え？」

「私、もうすぐ死んじゃうらしいから、だから迎えに来たのかなって」

その言葉に反応してしまふ。女の子は歳不相応に自嘲気味に笑った。

「病気の原因も良く分からないみたいで、お医者さんとお母さん達の話はよく分からなかったけど、もうすぐ死んじゃうって事は何となく分かったから」

「……」

羽を動かして女の子から離し、手を取る。驚いた様子の彼女を無視して、ハッキングを開始する。

『そう言えば、他人に潜るのって今回が初めてだな』

『そうだね。まあ、接触しないとハッキングは出来ないだし、しようがないとは思っけど』

「あ、あの？」

「生憎と、俺はお迎えに来たんじゃないよ」

「え？」

「治しに来た」

潜って潜って。頭の中に流れてくるデータを調べて行く。そして暫く潜り続け、異常を見つけた。本来そこにある筈なく、あつてはいけないプログラム。

『ふむ。消せば楽だが、それは無理か』

『流石にね。でも、書き換えなら出来るし、なんなら自然消滅するプログラムでも組み込んでおけば、勝手に消えるから、あんまり気

にしなくてもいいかも』

『そうだな……どっちの方が确实？』

『うーん……自然消滅のプログラム組み込むなら一回、これを解析しなきゃいけないし、多分書き換えた方が确实かもしれないけど……。ある程度書き換えて、後は自然消滅でいいんじゃない？』

『んじゃそれで。一応、バックアップは取っておいてな』

『了解。それじゃ、』

『『プログラム、書き換え開始』』

言った直後、浩樹の思考の中に、二頭身にデフォルメされた浩樹がノートパソコン片手に現れ、凄い勢いでタイピングを始めた。ガガガガと、本来ならありえないような音が響き、デフォルメされた浩樹が打った量に比例して、プログラムがどんどん書き変わっていくのが分かる。

『きつついな。分かってるつもりだったけど、他人の体に潜るのが此処まできついと』

『潜るだけならそこまでだよ。書き換えたりは辛いだろうけど』

『てか、この頭の中で書き換え作業をしているデフォルメされた俺は一体？』

『可愛いでしょ！…！』

『良く分かん』

やり取りの間も書き換え作業は続いて行く。

『そろそろ終わるか？』

『そうだね』

そんな言葉を最後に、書き換えが終わった。目頭を揉みつつ、ずっとピントが合っていなかった視線を、隣に座っていた彼女に合わ

せると顔が至近距離にあった。彼女の顔が真っ赤に染まる。

そんな彼女を無視して、「具合は？」と尋ねた。

「え？ ……あ」

数歩離れ、ぴよんぴよんと何度も跳ねたり、走りまわったりして、暫く動き続けてから、嬉しそうに俺に抱きついて来た。普段なら難なく受け止められるだろうけど、相変わらず血が足りないのと先程までのハッキングでまだ頭が良く働いていない事もあり、そのまま押し倒された。

情けないなあと思っていると、俺の両脇に手をつけて、嬉々とした表情で俺の顔を覗き込んできた。

「治った気がする！！」

「気がするんじゃない、治ったんだ」

勿論完璧に治った訳じゃない。プログラムを書き換えて、問題無くしただけ。それでも、その内自壊はするから、治るのも時間の問題だ。

「ありがとう！！」

「うおっ！？」

倒れた姿勢のまま、抱きしめられる。そのままでもいいかなとも思いはしたけど、起き上がるのが億劫になりそうだから、力付くで起き上がり、彼女の体を退かす。

「さて、俺はもう行くな」

「……もう？」

「ああ。悪いな。急いでるんだ」

数歩離れて、翼を広げた。衝撃で羽が数枚、宙に舞う。

「うわぁ……………」

「……………？ なぁ、一つだけ約束。出来る？」

「あ、は、はいー!!」

「俺の事、誰にも言っちゃ駄目。親にもな」

「え？」

訳が分からないと言った感じの女の子。そりゃそうだろう。俺としても、後々面倒な事にならないように、言わないでほしいというだけだからな。

暫く悩んでから、うん、と女の子は確かに首を縦に振った。

「分かった。絶対に誰にも言わないよ」

「よし。信じた」

「その代わりなんだけど……………」

「うん？」

「また、いつか会える？」

「……………ああ。きつとな」

必ずとは言えないけど。何となく、多分会える気がするのとはなぜだろうか。

(まぁ、いいか)

わしゃわしゃと少しばかり乱暴に撫でて、走り出す。向かう先は隣国の方面。走り、そして柵に飛び乗って、一気に飛び立つ。

「行くぜ！ アルハー!!」

『あんまり無理しないでって、まあ、言っても無駄か』

より一層、強く羽ばたき、俺は風を切って隣国に向かい始めた。

Side out

Side:コズエ

病院の屋上から、たった今、天使様が飛び立った方を見る。

「……」

近くに落ちていた羽を一枚拾った。それを、持っていた人形の手ヤックを開けて、その中に仕舞う。

「……どうやって説明しよう?」

いざ、病室に戻ろうとして、天使様との約束を思い出した。いきなり治りましたで果たしていい物だろうか?

「うーん、ま、いつか」

治りましたって事にしてしまおう。そう思って、私は院内に向けて走り始めた。

約束したし、また、会えるよね?

S
i
d
e

o
u
t

第四十六話 くとある皇女の魔法嫌い その6（後書き）

新年早々、何なのですが、きつとこれがスランプですね。ごまだれです。

相変わらず微妙な出来で、泣きそうです。てか、とある皇女編もその6です。このままだとその10まで行きそうな雰囲気……。いや、多分、その9か。

1月中に皇女編が終わるのか、怪しくなってきました。

ところで、普段なら最新話をあげれば、多かれ少なかれPVやユニークが増えたんですけど、今回増えなかったのは、割り込み投稿をしたから、分からなかったからか、年末で忙しかったからですよ？ そうだといいんですけど……。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

2011年になり、ごまだれも、新しい連載を考えたり考えなかったりしていたりしますので、これからよろしく願います。

以上、ごまだれでした。

第四十七話 くるとある皇女の魔法嫌い その7 (前書き)

又は『ミィユ・クライツの憂鬱』

第四十七話　とある皇女の魔法嫌い　その7

Side…ミニユ

「えーと……」

「……」

デジャヴロ
既視感だ。しかも昨日あった気がする。ていうか、あったよね。

「うい、ウイルちゃん？」

「なんじゃ？」

「も、もう少し近づいてくれてもよくない？　お話したいかなあって」

「十分会話できる」

既視感だけど、ひー君と違って、ウイルちゃんは会話する気は皆無だと思ふ。だって、わざわざ私と離れた所に椅子を持って行って座った位だもん。

何で私の周りには一癖も二癖もあるような子が多いんだろうね？

「でも、少し位会話を……」

「何か話題を振れば、答える」

「じゃあ、趣味とか」

「無い」

ひーくん！！　今すぐ此処に来て、傷心というか、既に心がズタボロにされそうな私の事を慰めてー！！　嫌がるかもしれないけど、抱き締めさせてぬくぬくさせてほしいな！！

多分だけど、ひー君は優しいから、何だかんだ言いつつも、抱き

締めさせてくれる気がする。

仕事が終わったら、ひー君がどれだけ嫌がろうと、抱き締めようと思っていると「ミイユは」とウィルちゃんの方から話しかけて来た。

「何!? 何何何!?!?!」

「ち、近いわ!! 離れる!!」

「あ、ごめんごめん。つい、興奮しちゃったよ」

話しかけられた途端、立ち上がり詰め寄っていた体を、ウィルちゃんから離して、先程までの位置に座り直す。

まったく、と呟きながら、ウィルちゃんも座り直した。……あれ? 私の方が年下みたいじゃない?

「それよりもミイユ」

てか、ナチュラルに呼び捨てにされてるよ。ウィルちゃんの口調で私にさん付けも似合わないけど。

「聞いたるか?」

「え? あ、うん。聞いてるよ? 私の趣味はね」

「聞いてないではないか」

「ごめんなさい。考え事しました」

「全く。それで、質問なんじゃが」

「何? 答えられることなら、お姉さん、何でも答えるよ?」

まあ、答えられない事の方が多いけど。

「ミイユは魔導師なのか?」

「え? えーと……私は違うよ? そっちの才能はてんで無かった

から」

「そうか……。浩樹はどうなんだ？」

「ひー君は魔導師だよ。まあ、今回は魔法を使わないけどね」

「……？　なんでじゃ？　なんでわざわざ使わない？」

「うーん、言ってもいいのかな？」

少し悩む。……まあ、いいかな。多分だけど、関係者だし。

「ウイリアスさんの指定なの」

「皇女殿下の？」

「うん。魔法を使わなくても戦える人って」

私の言葉に、ウイルちゃんは首を傾げた。そして、何かを考え始めた。

何となく会話をする雰囲気じゃなくなり、私も椅子に座り指輪を眺める。連絡する方法を模索しても、生憎とボタン一つなく、やり方が分からない。はあ、と溜息をつくといきなり『Sound Only』と書かれたウインドウが現れた。

『浩樹から連絡だよ』

「喋った!？」

『インテリジェンス・デバイスって事にしておきなさい、ミィユ・クライツ一等陸士。それよりも、繋げるの?』

「あ、うん。お願いします」

『はいはい』と答えてから『ん？　繋がったのか?』とひー君の声が聞こえた。

「ひー君、今どこ!？　後、どれくらいで来れる!？」

『落ち着いて下さい、ミィユさん。こっちは問題無いので』

「本当に!？ 怪我とかしてない!？」

『あー、今の所は。そちらは?』

「あの後は特に。ちゃんと着いたよ。本当に大丈夫?」

『大丈夫です。今、そちらに向かっています。どれくらいで着くのかはちよつと。すいません、ミイユさん』

「ううん。いいよ。本当に怪我とかは無いだね?」

あまりに心配するからだろう。画面の向こうでひー君が苦笑しているのが分かった。いくら笑われようと、心配な物は心配なんだよ?

『心配し過ぎですよ。ミイユさん。大丈夫ですから』

「でも、ひー君はこんな風に言われたくないかもしれないけど、私より年下で、子どもなんだよ? 心配するのは当然だよ」

『子ども扱いはいいです。子どもですから。それより、呼び方がひー君になってる方が気になります』

「ギクッ」

溜息が聞こえた。

『それについては後できつちりと。今は一旦切りますね。ミイユさん。後ほど』

それを最後に通信が切れた。うう、と唸りながら、指輪を凝視する。

『そんなに見つめられても、私も困るんだけど。ミイユ・クライツ
一等陸士?』

「うわ!？ えつと、ごめんなさい?」

『謝られても困るけど。まあいいや。さっき言った通り、浩樹はこっちに向かっているから。何か質問は?』

「えと……特に無いです」
『そう。なら、何かあったら呼んでね』

通信が切れた。……私のヒエラルキーが異常に低い気がするんだ
けど気のせいだよな？

私はぼんやりと、そんな事をウィリアスさんに呼ばれるまで考
えていた。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

通信を切った俺は、一層強く翼を羽ばたかせ、目的地に向かい始
めた。高度がどれくらいなのかとは分からないが、下から捕捉さ
れたりしないように出来る限り高く飛んでいる事もあって、体がか
なり冷えていた。吐く息は白いし、まさか雲をこんなに近くで見る
事になるとは。

『寒いな』

『浩樹が魔力消費をケチってるからでしょ。バリアジャケットの設
定を変更したって、凍らない訳じゃないんだから。凍傷になっても
知らないよ？』

『うぐ……。アルハ。甲冑を頼む』

『了解』

体を魔力が覆い、魔力光の色に光る。寒さが消える。殆ど感覚が
無くなっていた指先の感覚も戻っても来た。ふう、と一息つく。

『それにしても、ミイユ・クライツ一等陸士は暫く話さない間に、随分過保護になったね』

『そうか？ たいして変わって無いだろ。あの人は、ずっとあのままだ』

『そうかなあ？』

『そうだよ。あの人は、俺の事を子どもとして見てて、でも認めてくれている稀有な人だよ』

まあでも、確かに変わった様な気がするけど。子ども扱いはしていても、あそこまで顕著じゃなかった筈だし。何もなかったって言うてたけど……。うーむ。

『あんな事言いつつ、実は何かあったのかな？』

『あつたんじゃない？ ウイルと二人きりとかさ』

『それはミイユさんには致命的だな』

俺の場合は魔導師だった事もあるけど、それを差し引いたらって、ウイルスは見た感じ、人と積極的に接しようとするタイプじゃなかったからな。ミイユさんが苦手なタイプってのは一目瞭然だ。ミイユさんは魔導師じゃないから、少しは接しやすいだろう筈だけだ。

まあ、死ぬ事はないだろうけど……。

『兎というより犬だしね』

『兎は寂しいと死ぬって言うのは迷信だぞ。てか、俺の思考を読むな』

『気にしない、気にしない』

「つたく」

最後に吐き捨て、前を見据える。距離と速度から考えても、

(パーティーの開始時間には間に合わないだろうなあ)

溜息をついた。申し訳ないですが、もう少し一人で頑張ってください。

Side out

Side:ミイク

そして夜になった。ひー君が来ない中、パーティーが始まる。来た時にちらつと見かけただけでも、凄かったのに、いざパーティーが始まったゲストは、本当にそうそうたると言っているいい人達だった。少なくとも、私なんか居ていいような物じゃない。

そんな訳で、隣にいるウィルちゃんと共に、隅の方でジュースを啜りながら、ウィリアスさんの方を見ていた。普通に溶け込んでるのが凄い。私なんかとは住んでる世界が違うのは分かっていたけど、改めて思い知らされた感じ。

「凄いなえ」

「当たり前じゃ」

大して興味なさそうにウィルちゃんはそう呟いた。ちらりと彼女の方を見ると、ストローを加えて、オレンジジュースを啜りながら私と同じようにウィリアスさんの方を見ていた。

何処となくその横顔が寂しそうに見えて、その頭に手を乗せた。

ウィルちゃんはちらりと私を見上げ、興味がなさそうに視線を外した。ただ、少し頬が赤らんでいるのが分かって、それが嬉しくて暫しの間撫でる。

「いい加減にしろ、無礼者」

「あ、ごめんね。ウィルちゃん」

怒られて、頭から手を退かす。「全く」と呟いて、改めてジュースを吸い始めた。

それを見て、音沙汰が無い彼を思い出した。

「それにしても、ひー君、遅いなあ」

最後に連絡があつてから既に数時間が経っていた。あの後、すぐにウィリアスさんと合流した為、私からも連絡する事が出来なかった。

それもあつて、彼が今どこにいるのかが分からない。もうすぐにも着くとは思いつけど、それにしたつて遅い。

「やっぱり何か『ミイユさん』!? ひー君!？」

「大きな声を出さないで下さい。それと、思念通話可能なので、声に出す必要はありません。それよりもすいません。当分、到着出来そうにないです」

「ええ!? な、なんで!？」

「ええ、まあ。ちよつと」

「ちよつとつて何!? もしかして、本当に何かあつたの!？」

「何かあつたのではなく、何かありそうだったので予防線を張っただけです」

ひー君の言葉に、首を傾げた。

「当分着きそうにもないので。申し訳ありません、ミイユさん」

「う、うん。よく分からないけど、頑張つてね?」

『はい』

思念通話が切れた。

Side out

Side: 浩樹

思念通話を切って、俺は倒れている男達を見下ろした。

「人目につかないように森の中に着地したら、こんなところに出くわすとは」

『運がいいのか悪いのか、よく分からないね』

「いいんだろ。少なくとも、列車襲撃の犯人もこいつ等の仲間みたいだしな」

『そっなの？』

「襲撃メンバーのどこかしらにあったマークがこいつ等にもあるから。十中八九な」

足元に倒れていた男を転がせ、背中を上向きにする。其処には、自分の体を穴だらけにしたあいつの背中にあったマークと同じ物があつた。

「列車襲撃の事を考えると、こいつらがさっき話していたパーティー会場への襲撃は隠れ蓑。本当の目的は」

『ウイリアス皇女殿下下の暗殺か……。でも、何でわざわざ今日なんだろうね？ 少なくとも、パーティーを行う位なんだから、警備は嚴重の筈なのに』

「それは聞いてみないと分からないな」

全員をマテリアル・ハイの枷で拘束し、同じく檻の中に閉じ込めておく。

「それよりアルハ。魔法は使うなと言われていたが、そんな事も言っていないなくなった。広域サーチャー。こいつらだけで襲撃しようとしたとは思えんからな」

『索敵条件は？』

「こいつらと同じマーク保持者」

『了解』

俺の周りに数個の魔力球が生まれ、それがあちこちに向かって飛んで行く。

「さて、頑張るとしよう」

ミユユさんにああ言ったし、ウィリアス皇女殿下を守るためとはいえ、皇居の中じゃ派手に動けないだろうから、寧ろ此処が正念場。それに、多分あの人も出てくるだろう。

「止めないよ」

襲撃も皇女殿下暗殺も。絶対に。あの人は敵に情けをかけてしまいう程に優しいから。

第四十七話 くとある皇女の魔法嫌い その7（後書き）

やっとここまで……ごまだれです。

White Seal様、凱龍輝様。感想、ありがとうございます。

ようやく終わりが見えてきた、とある皇女編です。後2話で終わって、3話目でエピローグと言うか、ほのぼのみたいなのを書いて、一応は終わりです。

まだ入ってないのにA・S編とA・SからSTSまでの間がどうなるのか読めません。

そんな訳（どんな訳？）で今回はこの辺で。

ここまで読んで下さりありがとうございます。

では次回。ごまだれでした。

第四十八話　くとある皇女の魔法嫌い　その8　（前書き）

又は『雪辱戦　前編』

第四十八話 くとある皇女の魔法嫌い その8

Side: ミユコ

うーん……。何かあったのは確かだ。でも、何かあったのかが分からないし、護衛が仕事だから此処を離れるべきではない。それに下手に行つて邪魔してしまつても良くないし。

「どうした、ミユコ？ 何を唸っている？」

「ウイルちゃん……。私、どうしよう？」

「知らん」

ばつさり切られてしまいました。グスン。ウイルちゃんは事情を知らないからしょうがないけどさ。何で私の周りの子は、こんなに私に冷たいんだろうね？

でも、今はそれよりもひー君だ。何かあったのは確かで、でも何があったのかは分からないし、護衛が仕事だから此処を離れるべきじゃないし、でもひー君の事心配だし、でも行つたら行つたで怒られそうだしってあれ？ ループしてない？

「してますね」

「ですよねえってうわ！？」

「それは失礼な反応ですよ、ミユコ・クライツー等陸士？」

「あつ……。すみませんでした、ウイリアス・クリステリア・ロン
ゴミアント皇女殿下」

何時の間にか近づいてきていたウイリアスさんにぺこりと頭を下げた。

「あまりにも絶妙なタイミングで突っ込まれて、びっくりしちゃって」

「声に出てましたから」

「ああ、やっぱり」

「こつちに来てから三回目だからもう驚かないよ。二度ある事は三度あるって言う位だからね。」

「それで、あの」

「画期的な案を思いつきました」

「……はい？」

「私も行きましょう。それなら問題ないでしょう？」

「……」

問題しか無いですし、それでウィリアスさんの身に何かあったら、私がひー君に怒られると思うんですけど。

しかし、突っ込みを入れる前にウィリアスさんは既に歩きだし、私とウィルちゃんは慌ててその背中を追った。

「あの？」

コンコンと指輪を叩く。

『叩かないで。ちゃんと浩樹には伝えるわ。あと、今の浩樹の居場所も教えてあげる』

「あ、ありがとう」

『怒られる事は覚悟しときなさい』

「……はいです」

Side out

Side: 浩樹

「あん？ 皇女殿下がこっち向かってるって？」

「うん。下手に迷ったりしても面倒だと思うから、居場所教えちゃったけど」

「はあ。何やってるんだよ、ミィユさん」

「今回は皇女殿下が暴走したただけだけどね。それに、もしかしたら知ってるかもよ？」

「……列車での襲撃か」

「多分」

舌打ちをして、襟首を持って締め上げていた男を投げ捨てる。魔力球と締め上げて吐かせた情報から考えても、皇女殿下が来るまでに全て片付けられるかと聞かれれば、五分五分だろう。

まあそれも。今のままでならの話だが。

「アルハ。あれやるぞ」

「オーライ浩樹」

皇居に近く、姿を隠すのなら確かに森の中は効果的だが、今はそれが災いしたな。

こういう場所にある研究施設に潜り込んだ事だつてあるし、その時に食肉植物なんて甚だ面倒な物に襲われた事もある。あの時はアリシアが襲われた事もあって、辺り一面、手加減無しファイアリーの「火」で焼け野原にしたっけな。

話が反れた。まあ、その前にその辺りを根城にしていた盗賊に襲われた時、その盗賊が逃げた際に使った手だ。

「悪いな、名も知らぬ樹よ。俺の為に働いて貰う。ハッキング開始」
潜り、少ししてから、樹の根が蠢き、そして異常な速度で伸び始めた。俺が指示した方向に、地面の中を進んでいく。

「プログラム『暴走植物』ライオットフラント。でもやっぱり時間がかかるな。品種改良して、専用の種でも作ってみるか」

『それもありがたもね。少なくとも自生してる植物にハッキング仕掛けるより、全然いいよ』

「自覚はあるぞ、と」

アルハとの軽口の応酬の間に、先ずは三人。捕えたらしい。その後、確実に先ほどよりも速いペースで捕縛して行く。

しかし相変わらず、これもリスクが大きい。変更は加えているとはいえ、やっている事は言ってしまうえば成長の促進。あまりやり過ぎてしまうと、

「やべっ」

枯れてしまい、拘束力が皆無と言っている程になる。だからやり過ぎてはいけない。

だから、慌てて手を離れた。若い樹だと思っただんが、そんな事も無かつたらしい。もう少しで枯らす所だった。ま、こんな事をやっている俺が言うのもなんだがな。

それに、獲物は釣れた。

ガサリと後ろで音がして、そちらを振り向く。

「数時間ぶり。元気にしてた？」

「……………」

答えは無い。周囲が暗い事とフード付きの外套のせいで顔が見えないから、相手の表情は分からないけど、多分驚いていると思う。あの出血量で生きていると思う方が不思議だろうし。

軽く体を動かして、体をほぐす。相手は動かさず、此方を見据えている。

「アンタの仲間は捕まえた。それは、此処に来るまでに見ただろうから知ってるよな？」

「……」

「アンタで終わりだ。一応聞いておく。投降すれば、貴方には弁護の機会がある。同意するなら武装の解除を」

俺の言葉に、相手は半歩だけ足を引いて、槍を構えることで答えた。それはそうだろう。俺は一度勝った相手だ。それに、こんな事をする位なのだから、生半可な覚悟じゃない筈だ。

戦い方は真逆のタイプだろうけど、似たタイプ。覚悟をしていた筈なのに、あの時俺に止めを刺さなかった事を、今まさに悔いているのかもしれない。そして、覚悟し直した筈だ。今度は必ず、俺の息の根を止めると。

(だけど、二度目はねえよ)

血が足りず、僅かにふらつく体を両足で支える。满身創痕という訳ではないけど、それでも長い間は戦えない。時間的な振りはあるけど、今回は地の利は俺にある。

(どの道、皇女殿下が向かって来てるんだ。長い間は戦えないしな)

オフエンスアーマー
窒素装甲は問題無く発動している。槍に貫かれる可能性が無い訳

ではないけど、それでもいくらかは安心できる。まあ、これを使うと直接人を殴ったりする訳にもいかなくなるから、もう一つ。

「プログラム『マテリアル・ハイ』。サブプログラム『円刃』^{フレード}。モード『小太刀二刀』^{ツインズ}。刃は潰せ」

両手に小太刀を握る。マテリアル・ハイは元々見えにくいし、この暗さだ。殆どどこか全く見えていないと言っても過言じゃないだろう。

しかし、構えたらどんな武器なのかは分かっってしまうだろうから、構えはしない。所詮俺のは見様見真似のコピー剣術だ。今更細かい事を気にしたってしょうがない。

(ま、相手としては何度も戦ったし、練習風景は何度も見た。コピーとはいえ、それなりだけだな)

勿論、恭也さんや土郎さん相手じゃ足元どころか、月と鷲。ガメラとミドリガメ。ゴジラとスファエロダクチルス・アリアサ工程の戦力差と言えない程の差はあるが、それは戦闘に使うのを剣術のみに限った話だ。それに、相手は恭也さんや土郎さんじゃないしね。

「行くぞ。あまり時間はかけられない」

地を蹴り、接近して槍の一撃を右手の小太刀で弾く。そして、左の小太刀で首を狙った一撃を、分解した槍の片方で防がれた。蹴ろうとした足はもう一方の槍で防がれ、そのまま踏み台にして跳ねて距離を置く。

そのまま地面を蹴って距離を置こうとすると、逆に向こうから攻めて来た。時間差で来た槍を一本ずつ小太刀で払い、放たれた蹴りは回避も防御も間に合わないから、覚悟を決めて後ろに下がりなが

らも、甘んじて受ける。

「っ」

直撃は無くても、衝撃は通る。一瞬息が詰まりながらも、その勢いのまま、先ほど同様に無理矢理距離を開けた。

今度は攻撃直後だったこともあり、追撃は無かった。

(やっぱり強いな)

簡単に勝てるとも思っていないが、血が足りない事は思いのほかハンデになっているらしい。

「でも!」

負ける訳にはいかない。これ以上、ミュウさんに心配かけたくないからな。

Side out

Side…ミュウ

「ち、ちょっと待って下さいよ、ウィリアスさん!」

先に行く背中を、私は慌てて追いかけていた。私と違ってドレスだしヒールの筈なのに、私より歩くのが速いってそう言う事!?

走らないと追いつけないけど、それはあんまり良く無い気がするし……。

そんな訳で、私は先を進むウイリアスさんを早歩き程度のスピードで追いかけていた。そんな私に、平然と付いてくるウイルちゃん。お姉さんシヨックだよ。

『何でこの二人、こんなに歩くの速いの!?!』

『さつさと歩きなさい、ミィユ・クライツ一等陸士。見失ったら浩樹に怒られるわよ』

何も答えず速度を上げた。何かと此方を見る人達を置き去りにして、最初にウイリアスさん。次いで、私とウイルちゃんが皇居から外に出て、慌てて駆け寄りその手を取る。

「ま、待って下さい、ウイリアスさん。は、速いですから」

「そうですか？ 体力が無い証拠ですよ、ミィユさん。ねえ、ウイ
ル？」

「皇女殿下の言う通りじゃな。これ位でへばるな、ミィユ」

「ごめんなさい」

もう泣いてもいいよね？ よし泣こう。

『此処で泣いても浩樹に慰められる事は無いでしょうから、泣くなら浩樹の前にしなさい』

「……………」

我慢我慢。

『あんだ、以外と現金よね』

『いいじゃないですか。此処で泣くより、後でひー君の事ぎゅってしながら、泣いた方が気が楽になるってもんです』

『ふーん……………ねえ』

『何ですか？』

言いずらそうに、少しもった。少しして、『そんなに気持ちいの？』と尋ねられる。

『ひー君がですか？』

『うん。そんなに？』

『そりやもう！！ 今まで抱きしめた物の中で、間違い無くトップクラスですよ！！ もしかして興味あります？』

『そ、そんな事無いもん！！』

キャラが違う……。何か可愛いかも。うーんと。

『感覚の共有と違って出来ないんですか？』

『感覚をデータ化すればできなくもないけど……。それでどうするつもりなの？』

『それが出来れば、ひー君の抱き心地の良さが分かります』

『……いいの？ 一人占めしたいと違って思わないの？』

『うーん……。ひー君の事は好きですけど、別に恋人と違って訳じゃないですし、それに皆で共有した方がもっと気持ちよさそうじゃないですか』

私の言葉にデバイスさんは黙り、溜息をついた。

『何故？』

『え？ ああ、深い意味は無いわ。浩樹の気持ちとこれから先、色々ありそうだなって思っただけよ』

『はい？』

訳が分からなかったけど、デバイスさんは楽しそうにクスクスと

笑っていた。何か人間らしいというか、私が見た事のあるインテリジェンス・デバイスとは何か違うような気がする。

『そう言えば、自己紹介をしていなかったわね。アルハよ』

『み、ミイユ・クライツ一等陸士であります』

『知ってるわ。よろしくね、ミイユ』

『はい！ アルハさん！』

『敬語は使わなくていいわよ。デバイスだしね』

『えっと、じゃあ。うん、アルハ』

『それでよし。さて、さつさと、浩樹の所に案内してあげるわ』

『お願い！』

そう言っただけで先程までとは逆に、今度は私が先陣を切って移動を始めた。

……すっかり失念してたけど、ひー君の所に本当に行っているのかな？

第四十八話　〜とある皇女の魔法嫌い　その8〜（後書き）

ミイユ……。ごまだれです。

Gold・Child様、空牙刹那様。感想、ありがとうございます。しました。

書いてて、その13くらいまで、行くんじゃないのかとか思えてきました。あつてほしくないですね。そろそろコラボも載せたいし、海鳴編とかミッド組のほのぼのとかA・sが書きたいですし。

とりあえず、オリジナルが出たので説明をば。

プログラム『暴走植物』ライオットプラント

そらおとfの某話でニンフとアストレアがイカロスのスイカを食べ
てしまい、それがイカロスにばれそうになった時に、ニンフがスイ
カにハッキングをして、というシーンがありましたのでそこから。
結果としてどうなったのかは、知らない方はアニメか漫画を見てく
ださい。原作を知っている方は「え？ あれって」とか思うかもし
れませんが、察していただければ。だつて、ねえ？

サブプログラム『円刃』フレード。モード『小太刀二刀』ツインズ

マテリアル・ハイで作った小太刀です。CCKの時、小刀を作った
事と浩樹が何度も小太刀二刀御神流の練習風景や組手をやっていそ
うだなと思ひ、今回対武器戦闘という事で持たせました。残念なこ

とに飛針も鋼糸も使いませんが。

本当は御庭番衆式小太刀二刀流（一応説明しておく、るろうに剣心という漫画で出てきた、四乃森蒼紫の使う剣術の名前です）にしたかったんですけど、残念なことに、浩樹がハッキングに集中し過ぎたため、アル八が仕込めずに断念。俺もアル八も諦めてません。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

では次回。ごまだれでした。

第四十九話 くとある皇女の魔法嫌い その9 (前書き)

又は『犯人』

第四十九話 くとある皇女の魔法嫌い その9

Side: other

槍を弾いて距離を置き、右の小太刀を投げつける。襲撃者はそれを見事に弾いたが、それに合わせ新たな小太刀を作りだし、一気に距離を詰める。小太刀の間会いにしても近過ぎるゼロレンジは浩樹の間会いだった。

「しっ！！」

息を吐きながら拳で一撃。魔力強化のみで、オフエンスアーマー窒素装甲を部分的に消した拳の一撃は、ギリギリで防がれるが、二撃目のアツパー気味の拳は、襲撃者の顎を捕えた。

そして、その体を殴り飛ばす。しかし、その体は空中で翻り、何の問題も無く着地した。

(手ごたえは悪くなかったんだが、幾らか消されたか)

オフエンスアーマー窒素装甲を再生し、突撃。流石に幾らか脳が揺れたのだろう。いつもほどのキレなく、放たれた槍を浩樹は難なく防ぎ、意識を刈り取る為に振った小太刀は、再び二本に分けられた槍の片方で防がれる

「くっ」

マテリアル・ハイを発動。足場を作って、其処を蹴る。

現状は五分だった。というより、お互いに決め手が無い状況。襲撃者からしてみれば、浩樹は小柄な体とそれを十二分に活かせる速度。そして大人顔負けの腕力を発揮し、更にほぼ不可視と言ってい

い武器を振るう為、攻め切れず、浩樹も時に二本の短槍。時に一本の長槍になる槍を自分の手足のように操っている襲撃者に、攻め切る事が出来なくなっていた。

(不味い……。このままだと、負ける)

ハッキングや潜るまでも無く、浩樹は自身の限界を感じていた。しかし此処で攻め急いでも、列車での二の舞になる事もまた、理解していた。

樹を蹴って上に跳び、一本の枝に？まりその上に乗る。荒い息を吐く口元を押さえて、呼吸の音を、なるべく殺す。

(地の利があつてようやく五分なのに、時間が無い)

『アルハ。後どれくらいで、到着する？』

『十分、かな。今のままで進めばだけど』

『十分か……。正直足りないかな』

十分なら戦えるが、まず間違いなく攻めきれない。地の利を捨てての攻勢もありと言えはありだが、勝てる確率は圧倒的に低くなる。暫し悩み、一つ頷いて浩樹は立ち上がった。頭の中で『^{フレード}円刃』の新しいモードを思い描き、いつでも発動できるようにしておく。

「プログラム『マテリアル・ハイ』。サブプログラム『^{フォレスト}宙森』」

作られたマテリアル・ハイの足場はいつもと変わらない。これは目を瞑ってでも足場から足場へ移動できるように特訓した。どんなに暗かろうと、この足場だけは絶対に外さない自信があつた。

枝から、足場の一つに跳び乗り、直後に浩樹は跳ねて移動を開始した。場所は分かっているし、向こうも同じだろう。足場の一つを蹴って、襲撃者を視界に捉え、同じく襲撃者も浩樹の方を向いた。

「ちっ！」

小太刀を二本とも時間差で投げる。一本だけ弾き、もう一本は回避を選択したようだったが、僅かに足りず、当たる事は無かったがフードが外れた。

しかし、その正体に何となく心当たりのあつた浩樹は、木々の間から差し込む月光に照らされた襲撃者の顔を見ても、さして驚く事無くマテリアル・ハイを発動。

「サブプログラム『^{フレード}円刃』と『^{フルアーム}極装甲』を並列発動。モード『^{ハルバード}斧槍』

襲撃者からは見えないが、単純に全長2メートルを超える斧が浩樹の手に握られた。最後に足場を蹴り、襲撃者に向かって、^{ハルバード}斧槍を振りかぶる。

言ってしまうば、なのはに對フェイト戦を想定した作戦を考えていた時に、浩樹がなのはに言った短期間で戦力差や実力差のある人間に勝つ方法の一つ。どんな戦況も一撃で粉碎出来る高威力の大技。魔法が使えない以上、今の浩樹に出来る大技はただ一つ。

「おおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!」

^{オフエンスアーマー}

窒素装甲の恩恵である馬鹿力を重量級の武器を使った、本気の一撃。そして、その一撃を防ぐように、槍が翳される。

(防がれる事は織り込み済み。狙うのは武器破壊だ。槍を叩き折つて、^{ハルバード}斧槍で殴つて終わりだ!)

振り下ろした。槍に喰い込み、そのまま叩き折る。その直後、足

った。

『ミイユ。流石に五月蠅いと思うけど』

『驚くなつて言う方が無理だよね!?! どういう事!?!』

『どうもこうも。列車襲撃の主犯格がカツキ・ヴォーダン。それだけのことだよ?』

『だけ!?! どう考えても、ただだけじゃ済まないよね!?!』

思念通話とはいえ、声を荒げる私に、アルハは溜息交じりに『落ち着きなさい』と言った。何か本当に人間みたいだなこの子。ひー君、どこで手に入れたんだろう? 隊長達の話じゃ、最初から持ってたみたいだけど。って、今はそんな事より。

『ウィリアスさんの事、連れて行ってもいいの?』

『それに関しては正直ノーコメント。浩樹は何も言っただけからいいんじゃない?』

『そうかな?』

『そうそう。ミイユは細かい事を気にせず、急がず騒がず確実に皇女殿下を浩樹の所に連れて行けばいいと思うよ』

『うう、何か気になるけど、とりあえず了解』

そう答えて思念通話を切った。溜息を一つつく。

『本当にどうかしましたか?』

『あ。いえ。大丈夫です』

『そうですか? ……ミイユさん』

『はい?』

ウィリアスさんが居住まいを正した。理由は分からなかったが、ならって私も居住まいを正す。一つ息を吐き、そして、こつ続けた。

「カヅキの身柄。私の方で預からせては貰えませんか？」
「……はい？」

空気が固まった。そんな気がした。

Side out

Side：浩樹

足を止める。武器をお互いに構えたまま、一定の距離を置いて対峙していた。

「その言い方だと、最初から私だと気がついていたようですね？」
「質問しているのは俺ですよ、カヅキさん。答えて頂ければ、答えましょう」

「……復讐ですよ。それ以上でも、それ以下でもない」

カヅキさんはそう答えた。その言葉に、思わず反応してしまったが、気がつかれただろうか。

「今度は此方の質問に答えて頂きたいのですが、高坂様？」

「あの列車での移動が他意はあれど、貴方を動かす為の罠だった。それだけです。皇女殿下は気がついていていますよ」

「なっ」

（回想）

移動開始前。

「ちよつと待って下さい。本当ですか？　そして、本気で言っているんですか、ウイリアス皇女殿下？」

「本当ですし、本気ですよ」

こんな事を言うのは失礼だと思った。でも、思わず声に出していた。

「大胆ですね。だって、それはつまり」

「ええ。私がカツキを呼ぶ為の囿になります」

数歩よろめき、溜息をつきそうになったのを、何とか抑えた。そんな俺にウイリアス好悪殿下はまるで悪戯が成功したようにクスクスと笑った。

恨めしそうにウイリアス皇女殿下を見ると、笑いながら宥めるように頭を撫でられた。

「でも、何故？　確かに気になる所は何か所がありましたけど、それあの人が黒と決めつけるのも」

「ふふ。わかりますよ。だってずっと一緒に居るんですから。ある日を境に私を見る目に殺意が宿った事もね」

「……それでも一緒に居たんですね」

素直に凄いと思う。俺の場合なら、なのは達に殺意を向けられても一緒に居るし、仮に何かあっても何とかする自信があるけど、皇女殿下はそうじゃない。本気で殺されそうになったら、彼女は多分、何も出来ない。

「元々そのつもりで？」
「さて、どうでしょうね」

此処まで計算していたのだろうか？ それなら魔法抜きという縛りが不思議ではあるけど……。

「もしかして、電車はアドリブだったりします？」
「ウイルと一緒に、一度乗ってみたかったので」

今度こそ、失礼と思いながらも溜息をついてしまった。

く回想終了く

思いだして再び溜息をついてしまった。そんな俺に、カツキさんが不思議そうに首を傾げた。

「どうかしましたか？」
「いえ。ちよつと辟易してしまっただけです」

頭を切り替えて、カツキさんの方を睨む。カツキさんの雰囲気も変わった。互いに睨みあい、その空気を打ち破る様にして、ガサリと何かを踏む音がした。

カツキさんがそれに反応し、二つに分かれた槍の片方を投げる。それに合わせ、斧槍ハルバートを振り上げ、突撃する。

「ひっ」

「っ!？」

この数日で聞きなれた声のか細い悲鳴が聞こえ、隙になるにも拘らず、足を止めて思わずそちらを見た。管理局の制服。肩までの長さで、ふわふわとした天然パーマの女性というより女の子を言った方が似合う彼女は、顔に恐怖を浮かべ、頬から血を流していた。

『何で……』

『皇女殿下と別れて一人で来たみたい。皇女殿下は皇居に戻ったよ。ウイルと一緒に』

アルハの声が響く。確かに、その可能性はあった。一人なら他を気遣う必要が無いから早いだろうし、アルハが案内したのなら十分かからないことだって納得がいく。

その可能性を失念していたのは俺だ。結果としてミユさんが来た時にすぐに気がつかず、ミユさんが怪我をした。

「あ……」

カヅキさんを睨む。カヅキさんも動いていない。握っている斧ハルバードを横に振り、思いきり殴ってその体を打った。樹にぶつかり、そのまま崩れ落ちるカヅキさんに、斧ハルバードを更に強く握りしめ、吠えながら突撃した。

第四十九話 くとある皇女の魔法嫌い その9（後書き）

全く関係ないですが、重量級武器ってロマンがありますよね。ごま
だれです。

多分これから、斧ハルバード槍は多用するどころか、浩樹の徒手空拳以外のメ
イン武装の一つになると思います。他にもありますけどね。徒手空
拳は武装か？

それはそうと、いよいよとある皇女もクライマックスです。長かつ
た。展開グダグダでしたし、もっと纏められるようになっていたです
ね。

今回はここまでです

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

では次回。ごまだれでした。

第五十話 くるとある皇女の魔法嫌い その10 (前書き)

又は『鏡像』

第五十話です。だから何だ

第五十話 くとある皇女の魔法嫌い その10

Side:ミニユ

森の前まで来たのは良かったけど、ウィリアスさんが恰好的に森の中を歩くのに向かなかった事もあって、私は一人でアル八先導の元、ひー君の所を目指した。

「どうかしましたか？」

「いえ。ちよつと辟易してしまっただけです」

今日聞いたばかりの男性の声に、聞きなれた幼い少年の声が森の奥から聞こえた。暗い森を一人で進む不安感もあって、嬉しくなり足早に森を進む。

そして、二人の姿が見える所まで来て、カツキさんが私に向かって何かを投げた。当たる事は無かったけど、怖くなって無意識にか細い悲鳴を上げた。その声で気がついたのか、ひー君が此方を向き、目があった。

「あ……」

呆然としてそう呟き、カツキさんの方に振りかえる。一瞬の事だったけど、その時のひー君の表情が目には焼きつき、思わず体が固まる。そして、大きな音が響き、カツキさんがひー君によって吹き飛ばされた。

そしてひー君は、右手を更に握りしめて、先程私の目に焼きついた、恐ろしい般若のような表情のまま、再びカツキさんに襲いかかった。

「っ、駄目!!」

嫌な感じがして、慌てて駆け寄る。何かを持っているらしく、それを振り上げたひー君に慌てて抱きついてその動きを止めた。

「落ち着いてひー君!! 私はそんなに酷い怪我した訳じゃないから!!」

「でもっ!!」

「大丈夫だから。ね?」

正面に回って抱きしめた。まだ何か言いたそうだったひー君だったが、何時の間に消したのか、何も持っていない右腕を力無く降ろして「ずるいです」と私にそう言った。

不謹慎なんだけど、可愛いなあ、ひー君。

(っと)

またこんな事を考えている事が知れたら、ひー君に今度こそ凄く怒られるかもしれない。そう思つて急いでその考えを頭の中から追出した。幸い、口に出る事も考えを読まれる事も無かった。

「落ち着いた?」

「……はい。すいません、ご迷惑をおかけしました」

私の事を押すようにして、私から離れると、ひー君は私の横を通り過ぎてカツキさんの前に立った。その場に座り、彼の顔を確かめる。同じように私も身を乗り出してカツキさんを見た。目をつむつて、規則正しく息を吸っては吐いている。

「大丈夫ですね。良かった……」

安心するように、ひー君が溜息をついた。そんなひー君を見てクスリと笑うと、その声を聞いたひー君は私の方を見て、ばつの悪そうな顔をしつつ、立ち上がる。そして、片手でカヅキさんの事を抱えあげて、肩に担いだ。

「さっさと行きますよ、ミィユさん」

そう言つて、さっさと歩き始めてしまったひー君の後を、私は慌てて追つた。

「えっと……これからどうするの？」

「その質問は的を射ていないので何とも言えないのですが、どういう意味でしょうか？」

「カヅキさんの身柄とか」

「カヅキさんを含め、今回列車とパーティーの襲撃メンバーの身柄は全て皇女殿下に預けます。そう言う取り決めは皇女殿下としましたので。今回の俺達の仕事はあくまで皇女殿下の護衛ですから」

椅子に座り、小説から目を上げずにひー君はそう答えた。

場所は森から移つて隣国の皇居内。森の外で待つていたウイリアスさん達と合流して、戻つて来て、今は充てられた部屋で気絶しているカヅキさんを看ていた。それ以外の襲撃者の人達は、此処の兵隊さん達が大まかな場所をひー君に聞かされて、一人一人回収しているらしい。時々部屋を訪ねてきては、ひー君に顔の確認をさせていた。

でも、それもつい先ほどあつた来訪を最後に、全て片付いた。その後、ひー君が私とかわつてウイリアスさんの護衛をしようとする

と、「お二人は部屋で休んでいて下さい」と言われた為、部屋に戻ってきたひー君は何処からともなく取り出した小説を読み始めてしまった。

……正直、暇だ。

「ねえ、ひー君」

「なんですか？」

相変わらず顔は上げない。しかも今は照れ隠しとかじゃなくて、純粹に小説が読みたいから上げないだけだと思う。顔赤らめて無いし。

それがあまり面白くなくて、私はひー君の後ろに回り込むと、思いつき抱きしめた。一分、二分と経って、何時まで経っても反応が無い事に気がついた。覗き込むと、小説を読む手も止まっている。更に顔を覗き込もうとすると、体が跳ねた。そして、持っていた本で視界を塞がれる。

「離れて下さい!!」

「えー、いいじゃん」

「良くないです!!」

ぐいぐいと顔を押しされる。暫く押しして押されてを繰り返して、諦めたのかひー君が本を最初の位置に戻した。

「えへへ」

「はあ」

更に強く抱きしめると、溜息をつかれた。改めて顔を覗き込もうとすると、再び本で止められた。今度は私から離れた。二度ある事は三度あるだろうから、ひー君の顔を見る事は諦めた。

唸りながら、更に強く抱きしめる。ひー君は相変わらず、本に夢中。

「ん？」

唐突に顔を上げた。本を閉じて、ベッドの方を見ると、カヅキさんが起き上がっていた。半ば振りはらうようにして、私を押しつけた。そして私を庇うようにして立つ。

カヅキさんは力無く私達の方を見て、苦笑いをした。

「負けたんですね。最後に貴方に思いきり殴られた気がしますよ、高坂様」

「殴りましたから。すいません、加減しそこねました」

「いえ、構いません。おかげで頭も冷えましたから」

そうですかと答えながら、ベッドの脇に椅子を持っていき、其処に座った。

「体の具合は？」

「血が足らなくて気持ち悪いです。フラフラして今にも倒れそうです」

「ご愁傷様です」

「……ええ、まあ。自業自得なので何も言つつもりはないですけどね」

そう言う割に、滅茶苦茶引き攣った笑みを浮かべてる。すごく悔しそうだけど、頑張って隠しているつもりなのだろう。本当に負けず嫌いだなあ。

それが分かっているからか、カヅキさんも苦笑している。

「ですが、一勝一敗ですよ？」
「……はっ」

鼻で笑った。

「最後の最後で避けられる一撃避けなかったくせに良く言いますよ。はあ、それはもういいです。とりあえず、貴方。そして貴方と一緒にいた彼らの今後についてです。と言っても、貴方方の身柄についてだけです」

「はい」

「全員、ウイリアス皇女殿下が預かりましたので、詳しくはあの方から聞いて下さい」

「……それだけですか？」

「それだけです。どうするのかなどは聞いていないので。さて」

背凭れに寄り掛かったままだった体を乗り出して、カヅキさんに近づいた。

「時間があります。貴方がこんな事をした目的、話して貰えませんか？」

「お断りします」

即答した。そんなカヅキさんに、ひー君はにこりと笑った。先程の悔しさを噛み殺すような笑いではなく、微笑みかけると言ったのが正しい笑い。

身を起して、再び背凭れに寄り掛かった。

「同い年くらいの幼馴染がいて」

「……？」

「武に精通していて。それに目がそっくりです。自慢じゃないです

が、似た者を見つける事は結構得意です。貴方は……いえ。貴方と皇女殿下の関係は程度の違いはあれど、俺と俺の幼馴染に似ています」「えっと……ひー君？」

「皇女殿下の好きでしよう？ それでもあの方を殺そうとする理由はなんですか？」

私の言葉を無視して、挑発するようにそう言った。その言葉に、今度はカヅキさんが苦笑した。

ひー君の表情は再び変わって無表情。どこか、睨むような形になる。理由は分からない。だけど、どこか怒っているようだった。

「貴方には関係ありませんよ」

カヅキさんのその言葉に、目の鋭さが増す。

「自分の決意の為に、幼馴染との縁を切りました。貴方と同じです。貴方と違って、幼馴染に手を出そうとは思いませんが」

「……」
「まるで映し鏡のように、貴方は俺で俺は貴方です」

断言した。目つきは変わらない心の奥底を見透かそうとする様に、鋭い視線を向ける。少しして、「それなら」とカヅキさんは言った。

「私の理由もまた、貴方には分かるのでは？」

「想像はついてますよ。それでも、貴方の口から聞きたいので」

お互いに表情を変えない。そして、何も言わず時間だけが過ぎ、そしてカヅキさんが何かに気がついたように顔を上げた。

「……なるほど。確かに同じだ。これは見透かされてもしょうがな

「いすね。お察しの通り、私の目的は復讐ですよ」
「っ」

その言葉に、私は息をのんだ。しかし、ひー君はやっぱりと言ったように、再び溜息をついた。

「素直じゃないですね、貴方も」

「私に言った言葉は、そのまま貴方に返ってきますよ、高坂様？」

「……ごもつとも。それじゃ、信じてますので。ミニユさん、外に出てましよう」

「へ？」

ひー君に手をひかれながら、扉に向かった。そして扉を開けると、其処にはウィリアスさんの姿。少しだけ端により、ひー君はウィリアスさんを招き入れた。

「それでは。話が終わったら呼んで下さい」

「分かりました。ごめんなさいね、高坂さん」

「いえ。では」

ひー君と二人で廊下に出て、戸を閉める。そして、少し離れた所に立っていたウィルちゃんに近づいて行った。

「入らないのか？」

「皇女殿下に頼まれたのじゃ。二人きりで話をさせてくれとな」

「そうかい」

短くそう答えて、近くの壁に寄り掛かった。

「やっぱり俺の事嫌い？」

「どっじゃろっな」

苦笑いしながら、ふと、何を思ったのか手を伸ばして顎の辺りを撫でた。

「ゴロゴロ」

「ゴロゴロ……って、なにするか!」

ウィルちゃんがひー君の手を弾いた。

「ミイユさん! 俺、猫を買おうと思います!……!」

「落ち着いて、ひー君!? 気持ちは分かるけど!」

「どうしたんじゃ二人して……」

ひー君と目を合わせる。それからウィルちゃんの方を見た。

「「ねえ?」」

「……はあ」

溜息をつかれた。

「ミイユの方はともかく、浩樹。お前もそんなだったのか?」

「はあ、ミイユさんじゃないんだから。今は少し気を抜いてるだけ。昨日から殆ど仕事モードで気張ってたから疲れてんだ」

「ミイユの方はとか、ミイユさんじゃないんだからって酷く無い!」
「?」

「そっちの方がらしいような気がするがな。そうしている」

「仕事が終わったらな」

「普通に無視しないでよ!」

「なあ、浩樹?」

「ん？ なんだ、ウイル？」
「……」

隅の方に行き、体育座りをする。相変わらず、そんな私の事を無視して、ひー君とウイルちゃんは何かを話していた。

暫く話しが続いた後、肩を叩かれた。

「何をやっているんですか？ ミイユさん」

「ふんだ。ひー君なんて知らないもん」

「はい？ なんですか急に」

むう、と頬を膨らませていると、溜息が聞こえ「訳が分からん」とぼやきが聞こえた。

「ウイル。他言無用。出来れば目を反らして、耳を塞いで貰えると助かる」

「む？ ……まあ、いいじゃろ。頼み事をした身じゃしな」

そして、後ろから手が回された。

「へっ！？」

慌てて振り向きざまとして、強く締め付けられて動きを止められる。

「今振り返ったら、二度とこんなことしませんし、二度とさせませんよ」

脅しのような、というよりまんま脅しの言葉を聞いて、慌てて前を向いた。

「えっと……ありがとうございました。止めてくれて」

私の肩が跳ねた。それでも、ひー君は離れず、抱きしめていく。ふと、その手がカツキさんの槍がかすった頬の傷を撫でるようにして動いた。

「傷、大丈夫ですか？ 結構深かったようですが」

「う、うん！！ 大丈夫！！ 大丈夫！！」

「そうですか？ なら良かった……」

ひー君の雰囲気が変わってる！？ さっき仕事モードと言っていて、その後はプライベートモードというなら、今のひー君は何モード！？ 女殺しモードとか！？

「何か妙な事を考えていませんか？」

「ぜ、全然……」

「……はあ。もういいです。慣れました」

再三つかれた溜息が、首筋に当たってこそばゆい。でも、そんな事よりも何か、嬉しいかな。

「ねえ、ひー君」

「何ですか？」

「抱きついていい？」

「……か、勝手にして下さい」

「ほえ？」

絶対駄目とか言われるもんだと思ったけど。少しすると、急に恥ずかしさが込み上がってきたのか、ひー君はいきなり離れた。

「サービスタイム、終了です!!」

私に背を向けた。迷わず、その背中に跳びつく。少し背が低いから抱きづらい。それに、何か前に抱きついた時より体温が低いよう
な……。

「キユウ……」

そのまま倒れた。

「え？ ひー君？ ひーくん!？」

診察結果は血が足りなかった状態での、無理な運動などが原因だったようだ。

翌日。ウィリアス皇女殿下がクリステリア皇国へ出発するまで、ひー君はベッドに寝たまま、輸血されていました。

はあ、あんまり無理しないでね、ひー君。

S i d e o u t

第五十話 くとある皇女の魔法嫌い その10（後書き）

イチャラブが書きたい症候群に襲われて、少しだけイチャラブを書きました。ごまだれです。

空牙刹那様。感想、ありがとうございました。

バトルを書くのは上手下手を置いておいて、好きなんですけど、こ
うも続くと駄目ですね。ごまだれは定期的にギャグとかイチャラブ
とか書かないと、筆が進まんです。現に短いとはいえ、イチャラブ
のところはそれなりに早く書けたしね。

そして、だから何だと自身で一蹴しましたが、第五十話です。最近
不定期更新になっていますが、これからも読んで頂けると嬉しいで
す。

そんな訳で、今回はここまでです。

ここまで読んで下さりありがとうございました。

以上、ごまだれでした。では次回。

第五十一話 くとある皇女の魔法嫌い その11 (前書き)

又は『依頼』

第五十一話 くとある皇女の魔法嫌い その11

Side: 浩樹

「電車はいいですが、慣れていないとやはり、疲れますね」

「確かにそうですね。まあ、ミイユさんとウィルは昨日の晩、遅くまで起きていたから、というのもあると思いますけど」

背中に乗せているウィルを背負い直しながら答えた。

一夜明け、輸血も終わり久方振りに十分な睡眠をとった事もあった、今の俺は絶好調だった。まあ、正直な所、家事を全くやっていなかったり、筋トレ等の基礎鍛錬がここ数日で来ていない事もあって、やや不眠ではあるけれど。

そんな俺は、現在。昨日同様電車に乗り、クリステリア皇国に帰って来ていた。行きと違い、ウィリアス皇女殿下の脇にはカヅキさんが立っていて、その背中には寝息を立てているミイユさんの姿。まったく、何やっているんだか。

「すみません、カヅキさん」

「いえ。重く無いので。大丈夫です」

鍛えてるからそうでしょうけど。それでもご迷惑をおかけしている事は変わらないので。

「迎えは来ているようです。帰りましょうか」

そう言って、ウィリアスさんは再び歩き始めた。その後を追って、カヅキさんも歩き始める。俺は立ち止まったまま、そんな二人の後姿を眺める。

結局。カヅキさんを含め、クーデターを起こそうとしていた彼らへのお咎めは殆ど無いと言っている程のものだった。クーデターを起こそうとしていたとは思えないほどに。カヅキさんは暫しの無償奉仕。その他メンバーも同じように、皇居への無償奉仕だった。クーデターというやり方だったとはいえ、カヅキさんを除いたメンバーは元々国の為という理念の元に集い、行動していたから、彼らと話しその意見を尊重したい、というのがウィリアス皇女殿下の談。

(あまいなあ……)

正直、甘過ぎる。様々な偶然が重なって列車の件以外に何も起こらなかったけど、仮にも国家転覆を図ろうとしていたのだから。

(まあ、嫌いじゃないんだけどな。そう言うのも)

「高坂さん？　どうかしましたか？」

「いえ。何でもありません、皇女殿下」

後を追って、慌てて車に乗り込んだ。相変わらず無駄に広い車の座席にウィルを寝かせ、自分も腰を下ろす。「それでは出して下さい」という指示が運転席に伝えられ、車が発進した。

「そつだ、高坂さん」

「はい？」

「到着したら、少し時間をいただけますか？」

「？　はい。どうせ、ミイユさんが起きるまで帰れないですし、このままだともしかしたら明日まで寝てるかもしれないので」

「そつですか」

そつ言ってニコリと笑った。

到着後、皇女殿下に案内され、庭に出ていた。

「おお」

流石に広くてきれいだ。アリサやすずかの家でそれなりに慣れて
いるつもりだけど、やっぱり凄い。

そのまま、庭の中央辺りのテーブルまで来た。促され、顔を向か
い合わせるように、椅子に腰を下ろす。

「さて、今回はお疲れ様でした」

「仕事です」

「お礼に、というのはおかしいかもしれませんが、貴方の疑問に何
でも答えますよ。聞きたい事、あるのではないですか？」

「ええまあ。それなりに」

ニコリと笑いかけられ、傍らにあったティーポットに皇女殿下が
手を伸ばした。カップ二つに紅茶がそれぞれ入れられ、その内の一
つが俺に差し出された。

「ありがとうございます、と頭を下げて一口飲む。……風味が弱い。
喫茶翠屋の紅茶を飲み慣れてしまったせいか、あまり美味しく無い。
いい葉なんだろうけど。」

「あまり美味しく無いですね。自分で淹れて見たのですけど……。
やはりカツキに淹れて貰った方がいいようです」

俺と同じようにカップに入った紅茶を飲んだ皇女殿下が、そう咳
いてカップを元の場所に戻した。同じくカップを置く。

「ごめんなさいね、高坂さん」

「いえ、慣れていないので、しょうがないかと」

「あら。此処はお世辞でも、そんな事無いという所では？」

「幼馴染の家が喫茶店を経営してしまして。其処の紅茶を飲み慣れているせいか、紅茶に関しては舌が肥えてしまして。紅茶については嘘をつけません」

「そうですか。茶菓子は私が作ったものではないですから、問題無いですよ」

軽く言われた皮肉に苦笑しながら、クッキーをつまむ。

「それで……」

「はい。なんででしょう？」

「何故わざわざ、魔法を使わないようにと指示したのでしょうか？魔法嫌いという理由でしたが、見た所、貴方は魔法が嫌い、という訳ではないようですか？」

「少し違いますよ。私は魔法が嫌いです。ウィル程ではないですが」
「なら、魔法を使うなという指示はウィルの為に？ なぜそこまで？」

皇女殿下は紅茶を一口、口に含んだ。その仕草で長く話すつもりなのは分かった。時間はあるから、特に気にせず同じく紅茶を飲み、クッキーをつまんだ。

「私がそこまでやるべき子なんです。ウィルは。私の妹ですから」
「……今、かなり衝撃の事実をさらっと述べましたね？ なんですって？ 妹？ ウィルが？ 皇女殿下の？ そう言われると、顔の造形含めて似てる所は多かれ少なかれあるような気がしないでもないですが。それなら」

「捲くし立てなくても答えますから。落ち着いて下さい」
「すみません」

素直に頭を下げた。いやだって。なんでこう、衝撃的な事をさら
つと言っかな。こんな驚いたの、アルハの見せた夢以来だよ。

「でも、妹って一体？」

「妹と言っても、腹違いの妹です。私の父と当時の給仕長との間に
生まれた子です」

「……」

気を紛らわせるように紅茶を飲んだ。軽い話では無いとは思って
いたけど、個人的にはかなり重い話になりそうだった。

「だからと言って、其処までするほどの相手でも無いのでは？」

「そういう訳にもいきませんよ。その人は私の育ての親のような人
でもあるのですから」

「はあ」

「私の産みの母は私を産んですぐに死んでしまいましたので。普段
は父が。それでも、父も多忙でしたので殆どカヅキ共々ウィルの母
親に育てて貰いました。ウィルはその事は知りませんが」

「カヅキさん？ ……じゃあ、カヅキさんってウィルのお兄さんな
んですか？」

「まあ、戸籍上」

「……」

なんともまあ。此処までそっくりだと、気持ち悪……いや。気に
しない事にしよう。

紅茶を飲もうとして、無くなっている事に気がついた。少し唸っ
てから、紅茶のお代わりを買った。冷めていたけど、其処まで不味

くなっていないのは……はあ。

「どうかしましたか？」

「何でも無いです」

ただちよつと、考え方が駄目に始めただけです。なんでやねん！
みたいに大声のツツコミが出来ないから欲求不満で。

「そうですか？ …… ああ、来たようですね」

視線をそちらに向けると、大量のファイルを持ったカツキさんがいた。しかも全部紙媒体。一つ一つはあまり厚くないが、冊数がありあり、結構な重さがありそうで、現にカツキさんでも額にうつすらと汗を掻いていた。

そのファイルが全て俺の前に置かれた。

「ウイルの母親、並びに同一犯によるものと思われる犯行の資料です。お役に立てて下さい」

「……いやいやいや。見せたらまずいのでは？ それに、何故わざわざ？」

「一つ目の質問に対する答えは私が許可を出しました。二つ目はウイルに頼まれたでしょう？ それに、私とカツキからもお願いします」

頼まれるのは別に構わないけど……自由だ。自由すぎる。でもまあ、助かるのも事実だし、此処はありがたく受け取っておこう。

そう思って、頭を下げた。……しっかし、多いな。全部読むだけで数日かかりそうだ。あんまり時間をかけられないし……。

『アルハ……』

『電子媒体じゃないと流石の私も……』
『だよねえ』

とりあえず、ウィルに聞いていた彼女の母親の名前が書いてあったファイルを手を取った。パラパラとめくり、中身を覚えて行く。俺だけならともかく、アルハもいるから大分楽だな。

最後まで速読レベルの速さで読み切り、次のファイルへ。その調子で五冊ほど読み終える。要点をぼちぼちと纏め、それを踏まえて更に事件前と後で数冊ずつ。

『ふむ……運がいいのか悪いのか』

『そうだねえ。浩樹の人生、そんなのばっかだ』

『否定しきれねえ辺りがむかつく』

溜息をついて立ちあがった。幸い、まだ時間はあるようだけど、下見がてらもう出る事にしよう。後は……。

「皇女殿下」

「はい。何でしょうか?」

「魔法を使ってもいいでしょうか?」

「……構いませんよ」

「ありがとうございます。では、もう行きますので。失礼します」

頭を下げた。そして、足早にその場を去った。

S i d e o u t

S i d e : カツキ

「大丈夫でしょうか？」

傍らに座り、私が淹れた紅茶を飲む皇女殿下にそう尋ねた。

「大丈夫でしょう」

皇女殿下は顔を上げずにそう答える。まあ確かに、私もそう思ったからこそ、これらの資料を彼に見せた訳だけだ。

それでも、彼が読んだのは資料全体の半分ほど。それも、本当に読んでいるのか怪しい位に速く読んだ。

「ねえ、カツキ」

「はい。何でしょうか？」

「二人きりなのだし、昔のように話さない？」

「……はあ、分かりまし……じゃないな。分かったよ。ウィル」

「それでよし」

満足そうに僕の幼馴染は頷いた。

「それにしても、彼は半分ほどしか資料を読んでいないけれど、良かったのかしら？」

「さあね。まあ、何か理由があっただろうし、此処を去る時の彼は、戦地に赴く戦士のような顔でしたから、恐らく問題無いだろうけど」

紅茶を啜った。傍らに積んであるファイルの山を見て、こんな事なら直接彼に来て貰えば良かったと若干後悔する。

まあ、後悔先に立たずだから、諦めて大人しくしまっしかない。

「だけど、昨日の貴方の理由を聞いた時は驚いたわ」

ふと思いついたらしく、ウィルがそう言った。

「止めてくれ。少し冷静になれば分かった事なのに、頭に血が昇ってたんだ」

「何年もの間？」

「何年もの間」

「そう」

「本当にどうかしていたよ。君も。君の父君も僕の母の事を想っていてくれる事は知っていたのに。それなのに」

「私や私の父の指示で貴方の母親が殺されたなんてね」

ありえない。母の葬儀であれほど泣いてくれたこの二人を疑うなんてあつてはいけなかった筈なのに。

「僕は幼馴染失格だなウィル」

「あら。それなら貴方の気持ちに気がつかなかった私も幼馴染失格ね」

「なら、失格者同士、これからもよろしく、でいいのかな？」

「ええ。貴方は死ぬまで私に尽くしてね？ 父みたいに離してなんかやらないわ」

「お互い様、かな。君に負い目もあるし、そんな事関係無しに、僕も君と一緒に居たいから。君がクビって言っても君の傍に何としても居続ける。君がもし、結婚する事になってもね」

「なっ!？」

ウィルの顔が朱色に染まった。相変わらずこういう所は初心だ。変わらない幼馴染をほほえましく思いながら、自分によく似た少年の事を思い出した。

(頼んだよ。浩樹君)

S
i
d
e

o
u
t

第五十一話 くとある皇女の魔法嫌い その11 (後書き)

ようやく終わりが見えた……。ごまだれです。

凱龍輝様。空牙刹那様。感想、ありがとうございます。

とりあえず、とある皇女編は次回で終わり。その後、皇女編のエピローグとコラボと閑話を、コラボはともかく、残りの二つは趣味前回でイチャイチャとほのぼのを書きます。バトルは当分いいや。空気な海鳴サイド……は書かない？ 書く？ どうしよう。まだ決めてないや……。

書いた場合はその次。書かない場合はこの後すぐに、A・S編に入ります。長かった……。浩樹がミッドにいるせいで、大分書きづらいですけどね。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございます

では次回。ごまだれでした。

第五十二話 くとある皇女の魔法嫌い その127 (前書き)

又は『帰還』

予約投稿です (19日 19:57)

第五十二話　くある皇女の魔法嫌い　その12

Side：浩樹

「くしゅんっ」

「風邪？」

「誰か噂してんだろ。多分」

アルハとそんな話をしながら、裏路地から外に出た。大分視点が高くなってる事と手足が我ながら不安になるぐらい華奢な事。そして周囲の男性陣の視線が非常に気になる。

「いやあ、凄いね。見られてる見られてる」

「気になる……」

「ねえ、浩樹って本当は女装趣味というより、女性になりたかったりとか」

「しない！！　そもそも、この外見を設定にしたのはお前だろう、アルハ！！」

「浩樹を女の子と仮定して、骨格とかからその成長を考えたらそうなるよ？　九割間違いないね」

「そもそも俺が男だという大前提が無視されている時点で、この姿は幻以外の何物でもねえよ」

溜息をつき、耳を覆う髪の毛を耳にかけながら俺は歩き始めた。

現在俺の姿は九歳の男の子ではなく、十九歳程の女性になっている。襲われていた人達の特徴が若い女性という事もあったからなのだが、何故か無駄に視線を集めていた。辟易しながらも、アルハとの作戦会議は止めない。

『でも、本気なの？ 浩樹が囮になるだなんて』

『ああ。至って真面目だ』

『まあ、浩樹なら大丈夫だとは思うけど……。それより、本当に今夜なの？』

『知らん。ただ、近日中に何か起こる可能性が高いのと、俺の悪寒が今日嫌な事が起こるって言ってる』

『浩樹の悪寒は良く当たるけど、近日中に何かが起こるっていうのはどこから？』

『勿論、資料から』

速読で中身の確認とアル八が記録をし、其処から要点を纏めて。それを踏まえてファイルを更に読んで、犯人の事を妄想しただけだ。

『それってプロファイリングって言うんじゃない？……』

『そんな高尚な物じゃねえよ』

『ふーん。ま、いいけど。それで？ 高坂先生の妄想の産物は？』

『多少頭は使ってたけど、今はただの快樂殺人者。ウィルの母親が殺されたのは、偶々其処に居たから、だろうな』

『……』

『おまけに殺人者になった理由は、多分ウィルの母親を殺して、何かに酔ったから。それか何かあって、ウィルの母親から殺す事にしたから』

思いだす。ウィルの母親が殺される前の事件は、半殺し以上に痛めつけられる事はあっても、殺される事は無かった。最初の死亡者がウィルの母親。それから、最新のファイルに至るまでは全員殺されている。

『多少頭を使ってたって言ったのは、ウィルの母親の前までは日数が開いて、それなりに警戒している様子があったから。それ以降は

かなりの頻度で殺してる』

『確かにそうだけど……。今日って言うのは、どこから？』

『最後の事件を最後に、ずっと殺していないからな。改心したというのもあるかもしれないけど、それは考えづらい。それより、警備体制が一層強化されたからって言われた方がしっくりくる』

『そういえば、備考欄にそんな事書いてあったね』

『でも、その我慢もそろそろ限界だろう。あんな常習的に殺しをしているんだ。依存症みたいなもんか？』

『みたいなもんかって……。はあ、説得力としてはイマイチだけど、浩樹の悪寒はよく当たるし、まあ、八割か九割がたつてところかな』
『十分じゃないか』

そう答えながらとりあえず、ふらふらと気ままに道に行く。視線が高い事とかは楽しいけど、歩幅が違うせいでたまに人にぶつかりそうになるのを避けながら進む。

「っと、ごめんなさい」

再びぶつかりそうになった人に頭を下げる。その脇を抜けて更に進んだ。

『……。なあ。アルハ』

『見てるよ。凄く見てる。……。あ、付いて来た』

それなら張り倒してやろうかとも追うけど、先に手を出した事になるし、ロングスカートだから蹴り辛い。

結局、後をつけてくる男を引き連れたまま、合間に食事を挟んだ以外、色々な場所。ウイルの母親を殺した奴と同一犯と思われる事件のあった現場を歩いた。

『しかし、ねちねちと嫌な視線だな。これは当たりかもな』
『まあ、実際に手を出して来ないと何とも言えないけどね』
『はあ。もし当たり前なら、夜までこの視線に晒され続けるのかよ…』

囃捜査も楽しじゃないなあなんて思いながら、俺はこっそりと溜息をついた。

結局男は。夜。俺が最後に来たウィルの母親の頃された場所まで付いて来た。

Side out

Side: other

殺すつもりはなかった。今まで大丈夫だったから、また大丈夫だろうと高をくくり、その結果として男はその日、初めて人を殺した。本当はその時、自首なりなんなりをしていれば良かったのだろう。だが、結局それをせず、逆に男は殺すことへの快楽に囚われた。殺しを続け、しかしその内、ただでさえ嚴重にされていた警戒が更に強くなり、身を隠していた。しかし、それも限界が訪れた。ぶつかりかけた女。

(殺したい)

男にとって、これほど殺したいと思ったのは初めてだった。あの女に何があるのか、そもそも何者なのかなどは興味無く、ただ純粹に殺したく、穢したい。

だからこそ、出会ってから今まで、全く離れる事無く女の後に付いて行った。合間に少しばかりの休憩を挟んだとはいえ、一日中歩きどっしだった筈の女はそれほど疲労の色は見せておらず、そしてある場所で立ち止まった。

「……」

暫くその場に立ち、手を合わせて目を瞑った。どちらにしるチャンスだ。周囲に誰もいない。隠れていた場所から出て、魔力弾を作り、足めがけて撃つ。放たれた魔力弾はそのまま女に向かい、その足に当たった。

「っ」

顔をしかめ、その場に座り込む。当たった部分を抑えながら男の方を見た。近づいて行く男を睨む。

「何か？」

「……」

男は答えない。女はそんな男を見上げ、ニヤリと口を歪めた。

「シヨウエ・ダグダ」

女の言葉に、男、シヨウエ・ダグダの肩が跳ねた。そして、ダグダが待機させておいた魔力弾を放つよりも速く、女の姿が消えた。

「なっ」

「攻撃して来たって事は当たりか」

後ろから聞こえた女の声に、慌ててダグダは振り返った。いつの間
に離れたのか、かなり遠くにその姿がある。魔力弾を用意し、放た
れるよりも速く、女から放たれた閃光がそれらを全て撃ち抜いた。
そして、女の傍には閃光が放たれた魔力弾が、未だに浮かんでいる。
「さて、まあ。一応言っておくか。時空管理局地上本部所属、高坂
浩樹二等陸士だ。と言っても、今回は皇女殿下直々の依頼だから管
理局は関係無いけどな」

逃げようとしたダグダの足を、浩樹が砲撃で撃ち抜き、倒す。痛
みで悶絶するダグダに近寄って、見降ろした。そこで、ダグダはよ
うやく思いだした。今日、この女、浩樹が歩いて来た場所。其処は
全て、自身が今まで人を殺した場所だった。

つまり、手を出してはいけなかったのだ。自身が釣られていると、
昔ならすぐに分かった筈なのに。それでも分からなかったのは……。

「懺悔も言い訳も。此処でする必要はない。証拠は十分。何よりも
現行犯だ」

襲ってきた恐怖。月が陰り、街灯も無いこの場所は暗い。だから
だろうか。自分を見下ろす浩樹が、ダグダには人間ではないように
見えた。

しかし、逃げようにも撃たれた足が動かず、恐怖で竦んだせいで
指の一本も動かない。ただただ、自身に下される刑を待つ事しか出
来ない。

「だからまあ、とりあえず」

右手を振り上げた。其処に、何時の間にか漆黒の斧槍ハルバードが握られて
いた。

ぼそりと最後に何かを呟く。そして、振り下ろされた斧槍ハルバードを最後に、ダグダは意識を失った。

Side out

Side: 浩樹

「む？ なんだ。失神おちたしたのか」

『ひどい顔』

「もうちよつと骨があるかと思ったけど、そんな事も無かったな。

……つまらん」

寸止めた斧槍ハルバードを肩に乗せる。

「そういや、これってどうやって着色したの？」

『マテリアル・ハイのプログラムを少し書き換えて、黒くなるようにしたただけだよ？ 元の透明にもちゃんと戻せるから大丈夫』

「ふむ、ならいいけど」

斧槍ハルバードを消す。そして、バンドで縛り上げたダグダの事を持ち上げた。

「あ、っ」

『どうかした？』

「足。痛かったの忘れてた。油断させる為にわざと当たったけど、結構痛かったな。まあ、どうでもいいか」

少しだけ、足をさすってから、目にかかった髪を掻き上げて歩き

始めた。

「さっさと帰って寝たい」

『あはは……。お疲れ様、浩樹。……所で』

「何？」

『何時までその姿なの？』

「運び終わるまで」

『迎えに来て貰えば？』

「……その手があったか」

それから。カヅキさんに連絡をして場所を告げ、暫くしてから迎えが来た。

カヅキさんにさっさと引き渡して、そのまま寝た。

翌朝、習慣とは恐ろしいものでいつも通り目覚めた俺を見たミイユさんとウイルに「誰!？」とツッコミをいれられ、変身魔法が切れていない事に気がついて慌てたりとかの一悶着の後、俺とミイユさんは空港に居た。勿論帰る為だ。そして、ウイルもいた。見送りの為に態々ついてきてくれたよう。皇女殿下とカヅキさんは用事があるらしく、流石に来なかった。

そんなウイルは、さっきから何も言わない。俺とミイユさんもウイルの様子に戸惑い、何を言えばいいのか分からず、やはり何も言えない。そのまま時間だけが過ぎて、結構ぎりぎりの時間になり、腹をくくった。

「ウイル」

「……なんじゃ？」

「えっと……お世話になりました？」

「なんじゃ、それは。……ミイユ」

「ほ、ほえ？ 私？」

いきなり話を振られて、ミユさんが戸惑った。構わず、ウィルは話を続けた。

「この数日間、楽しかった。こんなに楽しかったのは初めてじゃった。ありがとう。会えて、良かった」

「あ……。うん、私もだよ、ウィルちゃん」

「浩樹。その……」

「うん？」

「ありがとう。それと、すまなかった」

「……？ 謝られるような事をされた記憶は無いんだけど？」

本気で心当たりはなかった。

「浩樹への数日間の態度と初めて会った時に掃除のコツを教えて貰ったのに、礼を言えなかった事に対してだ」

「それなら別に気にしてないよ。気にするまでの事でもないし」

「謝りたかったからじゃ。お前こそ気にするな」

「そっか」

そしてウィルが微笑んだ。釣られて微笑む。そう言えば、初めて見たな。ウィルの笑った顔。

「良かったら、また遊びに来てほしい。皇女殿下もそう言っていた」

「ああ」

「うん。また会おうね。ウィルちゃん」

「うむ」

時間は本格的に不味くなってきた。それじゃあ、と手を振って去ろうとして、ふと視界の隅に見覚えのある顔が映った。そちらを見

ると、病院の屋上であった女の子が両親らしき人と一緒に居た。

ふと思い出したのは、天使と呼ばれた事。……もし見つかったら、天使って呼ばれるんじゃない……。

「やばっ。ミイユさん、行きますよ!!」

ミイユさんの荷物と自分の荷物を右手で持ち、左手でミイユさんの手を取って走り始める。

「へ？ ひー君、どうしたの急になって、引つ張らないで!? 速い

よ!? あー、ウイルちゃん!! またね!!」

「ウイル!!! またな!!!」

「あ、ああ!!! 浩樹!!! ミイユ!!! また!!!」

ウイルに向かって大きく手を振るミイユさんの手を引つ張りながら、俺は空港の中を走った。

S i d e o u t

第五十二話 くとある皇女の魔法嫌い その12 (後書き)

なんかだいが駆け足で、しかも微妙……。ごまだれです。

見送りのところはもうちょっと書きたかったような。ダグダのところは知りません。警察物とかそういうのでもないですし。

今回はテストも兼ねて予約投稿です。なので、前書きにあった時間に一応は投稿しました。今日の段階で出来てるんだから、アップしてもいいんじゃないかとは思ってますけど、まあ一応。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

では次回。ごまだれでした。

第五十三話 くとある皇女の魔法嫌い その13 (前書き)

又は『エピローグと伏線』

もしくは『クイントさんの憂鬱』

とある皇女編は総文字数55,674文字でした。案外短いな

第五十三話 くとある皇女の魔法嫌い その13

Side:クイント

早朝：自宅

早朝。今朝は私が食事を作る番だったから、欠伸を噛み締めつつ、キッチンに向かうと其処には浩樹がいた。

既に何品か作っていたらしく、盛り付けられた料理が並んでいて、それでも浩樹は料理を続けていた。しかし、昆布巻きとかきんぴらとか、相変わらず渋いわね。

「浩樹。今日は私が当番だった筈だけど？」

「へ？ あ、クイントさん。おはようございます」

「おはよう。それで？ 私が当番じゃなかったっけ？」

「いや。これはお弁当ですから。結構作ったんで、朝食にしちゃっても大丈夫ですけど」

「お弁当？」

確かに浩樹が朝食当番だった時は、たまにお弁当は作っていたけど、今日みたいに態々自分が当番じゃ無い日に作ったのは初めてね。ギンガヤスバル。アリシアを含めて、今日は特別なイベントみたいなのは無かった筈だけど……。

「どうしたの急に？」

「へ？ い、いや。特に理由は無いですよ？ 偶々作りたくなっただけで、決して昨日の帰りにミィユさんに頼まれたからとかそんなんじゃないです……！」

「あ……、そう……」

何があったのかは知らないけど、昨日の晩からキッチンで何かを
そこそやっていたのは、あの子の為だった訳ね。それにしたって、
本気で作り過ぎでしょう。何品よ。

キッチンを覗く。さっき見た昆布巻きときんぴらごぼろに加え、
蓮根と露の煮付けにめざし。今作ってるのは豚の生姜焼き。もしか
してと思い、炊飯器を覗くと、いつもの白米ではなく炊き込みご飯
が入っていた。

(六品……。しかも全部手作りって)

元々浩樹がお弁当を作った時は殆ど四品で、夕飯の残りとかを詰
めた物がほとんどだ。それなのに、今回は一品一品作っている。何
かのお祝い事？ ミイユの誕生日とか。

「ねえ、浩樹？」

「はい？ なんでしょうか？」

「ミイユって今日、誕生日だったかしら？」

「知らないですよ」

「あ、そう……」

つまり何でも無い日、なのだろう。少しして生姜焼きが出来上が
り、浩樹は鼻歌交じりでお弁当箱に料理をそれぞれ詰めて行く。

「……うーん、バランスは取れてるだろうけど、色が地味だな……」
(普段だったら気にしないのに!?)

詰めた後のお弁当を睨みながら何かを考えている浩樹に、内心で
ツッコミをいれた。

「うーん……卵焼きでも作るか。どうせあの人の事だろうから、甘い方が好きだろうから、味付けは砂糖でいいか」
(塩味しか作らないじゃない……)

普通に美味しいのだけど。

「」

(鼻歌!?)

珍しい事だらけだ。そんなにあの子のお弁当を作る事が嬉しいのだろうか。その後、四つのお弁当箱にそれぞれ料理を詰めていった。朝から珍しい事が続いたこの日。この日が、私にとってなんともむず痒い日になるなんて……心のどこかでは確信していた。

朝：職場

「ミイユさん」

ミイユは大抵、私と浩樹よりも早く仕事に来ている。真面目というのもあるんだろうけど、単純に局の寮に住んでいるから。そんな彼女は、浩樹同様昨日遅かったのか、寝ぼけ眼で船を漕いでいた。意識は半分飛んでいるらしく、浩樹が呼んでも気がつかない。

溜息をついた浩樹は、軽くミイユの肩を揺すった。ミイユは少しそれを続けると少しだけ目をこすりながら、浩樹の方を見た。そして、ニヘラと笑い、覆いかぶさる様にして抱きついた。抱きつかれた浩樹は、諦めたようにして、そのままだった。

暫くしてから抱きついたままで顔を上げて、浩樹と目を合わせた。

「おはよう、ひー君」

(ひー君!?)

「おはようございます、ミユウさん」

(あ、普通ね)

少し安心した。

「目が覚めたのなら離れて下さい」

「も〜少し〜」

「嫌です。さっさと離れて下さい」

口ではそう言う割に、全く抵抗はしていない。浩樹だったら、無理矢理引き剥がせるでしょうに。

離れて下さい。いい加減にして下さい。そう言い続けられ、しづしづとミユウは離れた。浩樹は溜息をつきながら、鞆から包みを取り出した。

「どつぞ」

「ほえ?」

包みを受け取ったミユウは首を傾げた。

「何これ?」

「お弁当です」

「……本当に作って来てくれたの!? 私の為に!?!」

「ちょっと作り過ぎたので詰めて来ただけです」

浩樹はそう答えた。

(ツンデレか!?!)

六品全部手作りで作った拳句、好きだろっからって普段作らない甘い卵焼きを作ったくせに、ちよっと作り過ぎただけとか無いでしょっ!!!

数日で何があつたのよと思ひながら、ツッコミが出来ないストレスで痛む頭を押さえる。

「おはよ、クイント。どうかしたの?」

肩を叩かれた。脇を見ると、同期で同じ隊の副隊長であるメガー又がいた。

「おはようメガー又。別にどうもしないわよ」

「そう? 何かあるようにしか見えないけど……」

「はあ、あれよ」

指を差した。メガー又がそちらを見ると、「あらあら」と楽しそうに呟いた。

「随分、仲良くなったみたいね、あの二人」

「わざわざ手作りでお弁当を作っていく程度には仲がいいみたいよ」

「それどころか、タイを直して、寝癖を直してあげる程度に仲がいいみたいね」

「……」

再度、あの子達の方を見た。そこでは浩樹がミィユの髪を梳いている。何あれ、どんな状況?

「今言つたじゃない?」

「人の心読まないでよ」

今朝から何度目になるか分からない溜息をついた。

昼：食堂

「それで？ 何で俺はミィユさんと一緒に食事をとっているんでしようか？」

昼休み。のんびりとデスクで食事を食べる予定だったにも拘らず、メガーヌに連れられ食堂にきた。何故態々と思っていると、同じような感情らしい言葉が食堂の一角から聞こえて来た。納得しながら、とりあえず確認の為にそちらを見ると、浩樹とミィユが対面に座ってお弁当を広げていた。

「一人で来ればよかったじゃない、メガーヌ」

「いいじゃない。私一人じゃ面白くないもの。それより、早く食事にしましろう？」

「貴女の目的はこっちって訳……」

「違うわよ、クイント。そっちも、ね」

溜息をついて、弁当を開けた。「いただきます」とメガーヌが言っ
つて、さっそく昆布巻きが持つて行かれる。

「流石ねえ。それにしても、今日は随分と品目が多いわね？ 昨日の夕食は、そんなに豪華だったの？」

「まさか。これは昨日の晩に浩樹が仕込みをして、全部今朝作った物よ」

「……はい？」

メガーヌが固まった。その際にとお弁当を食べつつ、浩樹達の方

に意識を向けた。

「おお！ ひー君、美味しそうだけど、凄く渋いね？」
「ほっといて下さい」

同じく弁当を食べている浩樹がそう答えて、さつさと食べ始めた。鼻歌を歌いながら、別のケースに入っていた卵焼きから食べ始めた。

「美味しいよー！」

「それはどうも」

「所でひー君。この卵焼きはひー君の分は無いの？」

「……気にしないで下さい」

「無いの？」

「浩樹は甘い物は好きだけど、おかずとしてそれを食べるのはあんまり好きじゃないのよ」

現に大学芋とか作る事はあっても、食卓に並ぶ事は無い。

フーンと適当に答えながら、メガー又は私の卵焼きを一つ持っていった。特に気にすることなく、メガー又の弁当にあったおかずを適当に貰う。

「ほんとだ。結構甘いわね。ミユちゃんが好きそう」
「本当に。らしくないわ」

あの子達の方に視線を戻した。

「食べないの？」

「味見はしました。問題は無い筈です」

「うん。確かに美味しいけどさ」

「では何が？」

「うん……。あ、そうだ」

箸で卵焼きを取った。そのまま、浩樹の方に差し出す。

「はい、あーん」

「いりません」

「あーん」

「ですから、いりません」

「……あーん」

「……」

パクリと卵焼きを食べた。

(泣き落とし……)

「甘……。自分で作っというてなんだけど、やっぱり甘いですね……」

「そう？ 私は好きだよ？」

「食事時に食べるには……やっぱり甘過ぎです」

複雑そうな顔。何とか、自分で作ったのに。

「でも、美味しいよ」

「うぐ……。あ、ありがとうございます」

浩樹が僅かに顔を赤らめた。それから、意を決して箸を伸ばし、卵焼きをつまむとミィユの方に差し出す。

「ごっご」

「ほえ？」

「やれって言われる前に自主的にやることで、少しでもダメージを減らそうかと」

「別に強要するつもりは……」

「……」

「……」

一気に顔が真っ赤に染まる。お弁当の残りを掻きこみ、蓋をして布で包んで。

「~~~~」

逃げだした。

「え！？ ひー君！？ ひーくん！！！」

慌てて残りのお弁当を食べ、ミユもその後を追って走っていく。

「青春ねえ」

メガー又がぼそりとそう呟いた。何時の間にか私のお弁当が全部なくなっていた。

「ごちそうさまって伝えておいて？」

「あんたねえ……」

「それにしても、あの二人、もしかして付き合い始めたのかしら？」

「それは無いでしょ。仮にあっても、アリシアとかギンガが怖いし、あつて欲しく無いわね」

浩樹が任務でクリステリア皇国に行った翌日に、アリシアとギンガが浩樹の部屋で鉢合わせして以来、ただでさえ、アリシアとギンガが冷戦状態なんだから。最近は本格的にスバルも参戦しそうな雰囲気だし。

今夜あたり、浩樹に胃に優しい物でも作って貰おうかしら。それなりに楽しみにしてたお弁当を殆ど食べられた訳だし、それ位いいでしょ。

夜：自宅

「はい？ 俺とミィユさんがですか？」

「うん。付き合ってるの？」

「メガー又さん。何ですか、急に」

「ほら。今日、手作りのお弁当とか寝癖直したりとか、あーんしたりとか色々やってたじゃない？ だからそうなのかなあって」

食材持参で自宅に突撃して来たメガー又と、その食材を調理している浩樹の会話に、テレビに集中しているように見せかけて、アリシアとギンガとスバルが聞き耳を立てている事は容易に分かった。それどころか、アリシアとギンガに関しては殺気だってる。そりゃ、今日浩樹とミィユがやっていた事を思い返してみれば、やってた事はまんまカップルとか、もしかしたら新婚生活とか……。べ、別にゲンヤさんとそう言う事やってた訳じゃって、誰に言い訳していいのかしら、私。

「ん？ どうした、クイント？」

「何でも無いです……」

新聞を読んでいたゲンヤさんに尋ねられて、そう返す。

「おおっ!?!」

「ご近所迷惑を考えず、冷戦状態だった二人が爆発した。最終的にその矛先が浩樹に向かう事で、一旦は終息。

それでも、食卓の席では浩樹を間に挟んでのアリシアとギンガのいがみ合いは続いた。

『……クイントさん』

『何?』

『明日は胃に優しい物を……』

『残念。私は重い物が食べたい気分なの』

『酷い!?!』

誰のせいであんななってると思うのよ。

とはいえ、私としてもそんな重い物は当分食べられそうにないから、明日は軽い物になるでしょうね。はあ、胃が痛いわ。

Side out

Side…ミニユ

夜：自室

「うん。今日は髪形とか直して貰ったり、お弁当も作って来てくれたよ」

『へえ。じゃあ、ようやく仲良くなれたんだね。よかったじゃない』

「うん! その内、二人みたいな関係になりたいかな、なんて」

『アハハ。むしろ、もう、私達より仲がいいかもしれないよ? 手

料理なんて学校で食べたつきりだもん』

「あの焼きそば美味しかったよね！ 私もまた食べたいなあ」

『忙しく無い時を見計らって、また頼んでみるよ。まあ、当分は忙しいけど、それももうすぐ終わるし』

「例の件？」

『そ。まあ、私としては無理し過ぎな気もするんだけどね』

「A級ロストログリア事件で犠牲者一名だったと言う方が奇跡に近いと思うけど……」

『実際はね。でも、そう考えて無いみたい。僕があの時止めてればつてたまに言ってるし』

「そっか……」

『無理して忘れようとしてるみたいで、何か痛々しいんだ』

「そうだね。一人で抱え込むタイプだし」

『……あー、もう。暗い話はおしまい！！ それで？ 仲良くなった暁にはツーショット写真を撮るんだって意気込んでたけど、撮れたの？』

「え？ ……忘れてた」

『なんか、ミイユちゃんらしいね』

「う、ごめんね？ 明日は必ず撮るよ！」

『うん。例の男の子。私も見てみたいから、頑張ってねミイユちゃん』

「うん！ 頑張るよ！」

『それじゃあ、明日も早いし、もう切るね？ 早くミイユちゃんも寝ないと、明日寝坊するよ？』

「む。私、遅刻した事無いよ」

『そっか。それじゃあ、お休み、ミイユちゃん』

「うん。お休み、エイミイちゃん。クロノ君によろしく伝えてね」
『了解っ』

第五十三話 くとある皇女の魔法嫌い その13 (後書き)

作者の趣味丸出しです。ごまだれです。

空牙刹那様、凱龍輝様。感想、ありがとうございました。

頑張れクイントさんな今回。暴走ツンデレの浩樹と天然ミユの二人相手にクイントさんにツッコミ役をやらしてもらいました。ホントに頑張れ。

それ以外に特に言うことはないです。久しぶりに趣味全壊……じゃなくて趣味全開で書いて楽しかったです。次はほのぼのですね。

最後のミユ視点で会話オンリーにしたのは、電話とかモニター越しの会話だからです。後は、最後まで会話相手の名前を出さないためですね。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

では次回。ごまだれでした。

閑話　く初詣特別編く（前書き）

時間軸はクリスマス特別編と同じ。

ずっと、佳奈のターン

閑話　〜初詣特別編〜

Side：佳奈

「初詣？　皆で行くって言って無かったか？」

「そうなんだけど……。少しかだけフライングして、二人で行きたいなあって。除夜の鐘つけるし」

12月31日22時00分。後二時間もすれば新年になるこの時間。まだまだ現役と言わんばかりに、あちこちを放浪しているおじいちゃん、珍しくアリシアがハラウン家に行っている事もあって、今日は朝から私は浩樹と二人きりだった。まあそれも、後十時間もすれば、家だけじゃなくて、高町家、バニングス家。月村家とハラウン家、八神家総出での初詣が決定しているから、終わってしまうのだけど。

だからこそ。私は今のうちに何とかアドバンテージをと思い、浩樹君の事を初詣に誘った。クリスマスは抜け駆けがアリサちゃんにばれて、いいところ全部持って行かれたし、明日の夜には浩樹君もミッドチルダに帰ってしまうから。……私が言えた義理じゃないけど、アリサちゃんのあるも十分抜け駆けだよな。

そんな訳で、私は浩樹の事を初詣に誘っていた。浩樹は悩むように首を傾げながらも、テキパキとお節の準備をしていた。

「じゃあ、お節の準備が終わったら行くか」

「……本当に？」

「嘘なんかつくかよ。朝じゃ混むだろうし、久しぶりに鐘をつきたいからな」

ちよっと待ってと言って、浩樹君は本格的にお節の準備を始めた。

その後ろで思わずガッツポーズをして、私は着替える為に部屋に向かった。

「朝よりはましだけど……。やっぱり混んでるな」
「そうだね」

見渡す限りの人、人、人という程ではないけど、それでもやっぱり人口密度は高い。下手したらはぐれそうだし、此処は手を繋いでもと考えていると、逆に手を取られた。

「浩樹君？」

「ん？ 嫌だったか？ でも、逸れたら面倒だし。嫌なら離すけど」

その言葉に慌てて首を振った。嫌とかそんな事はある得ない。寧ろ指を絡めてその腕に抱きつきたい位だけど、そんな事したらなのはちゃんと“お話”する事になりそうだ。

だから大人しく諦めて、変わりに彼の手を強く握った。浩樹君は不思議そうに首を傾げながらも、やっぱり強く握り返してくれる。

「行くか」

「うん」

頷いて、境内に入った。

手を繋ぎながら境内を進む。

「そういえば、買い物以外で佳奈と二人で出掛けたのって凄く久しぶり？」

「久しぶりどころか、買い物と友達の家遊びに行く以外で初めてだよ」

「そうだったか？ こっちに来たらかなりの時間一緒に居るから分らなくなつた」

「アリサちゃんとかすずかちゃんの家泊まりにでも行かない限りはずっと家に居るもんね」

出不精な所があるから、当然と言えば当然だ。まともに出かけるにしても、大体が夕飯の食材の買い出しとかが殆ど。そういう時にも、大抵佳奈はついて来るし。

「けどそうか。こうやって二人で遊びに来た事って無かったのか。すっかり忘れてた。」

「そう考えると、向こうに戻る前に、佳奈と二人で出掛けられた事は喜ぶべきかな？」

「そうそう。こんなに可愛い子と二人で出掛けられるんだから。もっと楽しそうにしないと」

「はいはい」

おざなりに答えると、更に強く手を握られた。

「そつちがそんな態度とるなら……」

「うん？」

「こつだ！…！」

手が離れ、腕に抱きつかれた。突然の事で、少しバランスが崩れて踏鞴を踏む。強く抱きしめられて甘えるように肩に寄り掛かられた。初めての事でドキドキしながら、とりあえず抱きつかれている方の手をジャンパーのポケットに入れた。

少し深呼吸をして、平静を装って佳奈に声をかけた。

「危ないだろ、佳奈」

「浩樹がそんなつれない反応するからだよ」

「いや。理不尽すぎるだろ」

そう答えると、佳奈は頬を膨らませた。それから、片手を何故か俺のジャンパーのポケットの中に入れ、元々その中に入れていた俺の手を繋いだ。先程までとは違う指を絡ませた、俗に言う恋人繋ぎとか言う奴だ。

そんな事よりもジャンパーのポケットが破けないかどうかの方が気になる……という事にしておいた。断じてこんな風に腕組んだり恋人繋ぎした事無いかその他にもるもろで緊張してるとか、そんなことは断じてない。

「なんだよ……」

「こつすれば、いくら浩樹でも少しは意識してくれるかなって」

「どういう意味……」

「私の胸の膨ら（スパーン）痛っ!？」

デコピンで黙らせた。少し赤くなった額を、繋いでいない方の手で撫でながら、佳奈は恨めしそうな目で俺を見た。

「少し黙ろっか佳奈」

「何が不満なの？ 自慢じゃないけど、私はアリサ以上フェイト未

満だよ？」

「それって、結構あるなって違うだろ!？」

「ナイスノリツッコミだね!」

「……」

溜息をついた。

「何か変わったなあ、佳奈。昔とは違うよ。なんてか、明るくなっ
た」

「そうかな？ だったら、それはみんなのおかげだよ。なのはちゃんにアリサちゃんにすずかちゃん。フェイトちゃんとはやてちゃんもだし、悔しいけどあの変態だって一役かってると思うし」

「あの変態って……。事実だけどさ」

「それに浩樹君もだよ？ 今回だって、自惚れかも知れないけど、年末年始に私が一人なんじゃないかって思ったから来てくれたんでしょ？」

「何の事だかな」

何故分かった……。休む原因になったのは人事部のあの人だけ、こっちに来たのは、純粹にじいちゃんがまたふらふらとどこかに出かけて、佳奈が一人なんじゃないかと思ったからだ。

来たら、実際に一人だったし。普段ずっと家を開けてる俺が言えた義理じゃないが、もうちょっと落ち着こうぜ、じいちゃん。

「まったく……」

「どうかしたの？」

「いや、何でも無い。それより、どうする？ お参りしちゃうか？」

「うーん……。しちゃおつか。また来た時は別にお願ひするよ」

「それっていいの？」

「褒められた事じゃないけど、駄目とは書いて無いよ」

褒められた事じゃないってのは自覚あるのか。それにしても、何をお願いするかな。正直、叶えて欲しい事が複数ある訳でもないし……。

「浩樹君は何をお願いするの？」

「大切な人達の無事息災かな」

「良く分らないけど、こういう時って例の仇討ちの相手が見つかる様にとかって願うんじゃない……」

「自分で出来る事じゃなくて、出来ない事を頼みたいだけだ。それに今まで色々な人の助けを借りながらだけど、自力でやってきたんだ。これからだってそうだよ」

「ごだわり？」

「ただの意地だよ。それに、俺が尊敬する上司が神頼みをしてなかったってのもあるし」

そんな事をしなくても、全てを行える実力があつたからだ。まだまだ未熟な俺にとってはやっぱり雲の上の存在と言つた所だ。すると、何を感じ取つたのか、再び強めに腕を抱き締められた。

何か当たっている柔らかい物は意識しないようにして、その手を強く握り返した。予想外だつたらしく、佳奈が驚く。

「浩樹君？」

「そついや、まだ新年じゃないな」

戸惑っている佳奈を無視して、さつさと話を進める。下手な事を喋つたら声が裏返りそうだから、それを意識しつつ腕時計を見た。

23時30分。新年まで後30分あつた。

「お参りする前に何か温かい物でも飲むか。確か、豚汁が配られて

た筈だし」

「……そうだね。除夜の鐘も突きたいし、温かい物でも飲みながらのんびり待ってよっか。こうやってくっ付いてたら暖かいしね。早く行こう?」

佳奈に手を引かれ、歩き始めようとした途端、誰かが俺にぶつかった。と言っても大した衝撃で無かった事もあり、俺はよろけず、その代わりに衝撃の原因の方が倒れた。そちらを見ると、私服の女の子がいた。

「すまない。大丈夫か?」

手を伸ばすと女の子が顔を上げた。その顔が歪み

「うっ、ぐすっ」

「ええええええ!?!」

泣かれた。周りの、それこそ佳奈の視線まで冷たくなり、繋がれていた手が離れ、体が離れた。うわ、地味に傷つく。傷つくけど、それよりも

「え、えつと。ご、ごめんなさい!?!」

「土下座!?!」

形振りなんて構ってられない。女の子に泣かれた方が、女系家族というか、女性の方が多い家族と過ごしてきた俺的に、アウトというか辛かった。

S i d e o u t

S i d e : 佳奈

なのはちゃんとの“お話”の恐怖を勢いで乗り切り、浩樹君と腕を組んだけど、そんな時間はすぐに終わり、現在

「はいこれ。熱いから気をつけてな」

公衆の面前で自分の半分にも満たない歳の子にガチ土下座を見せた浩樹は、鮫島さんのような名執事よろしく、甲斐甲斐しく自分にぶつかって泣いてしまった女の子に尽くしていた。

「さつき本当にごめんな？」

「……」

女の子が座るベンチの前に座り、浩樹がそう言うと、フルフルと女の子が首を横に振った。それで許して貰えたと思ったのか、安心したように浩樹が一息つくくと、再び顔を上げて女の子と視線を合わせた。

「所で、こんな時間に一人でどうしたんだ？もしかして迷子だったり？」

浩樹がそう言うと、女の子の肩が跳ねそして歪み始める。また泣くと思っただからだろう。浩樹が慌て始めた。

「す、すまん！本当にごめん！お、俺の分の豚汁も食べていいから、是が非にでも泣かないでほしい！！」

泣いてる女の子をあやすのに豚汁ってどうだろう……。女の子的にはそれが壺にはまったのか、泣く事無くクスクスと笑った。浩樹が安心したように一息つき、女の子の方は自分の豚汁を食べ切って、浩樹の手から豚汁を奪ってそれも食べ始めた。ちゃっかりしてるなあ。

浩樹は何も無くなった手を見て、溜息を一つ。自分で言った手前取り戻すのもどうかと思っているのだろう。

「それで？ どちら辺で逸れたとか分かるか？」

フルフル。

「誰と一緒に来たんだ？」

……フルフル。

「……もしかして一人で来たのか？」

フルフル。

「ん？ 一人で来た訳じゃないけど、誰かと一緒に来た訳じゃ無いって事か？」

コクコク。

「どういう意味？」

近づいて私も尋ねた。女の子は答えず、浩樹は何かを考えていた。

「うーん……。もしかして、迷子じゃなくて失せ物？ 何か無くし

たのか？」

……コク。

「え？ 当たり？ なんで分かったの？」

「局で嫌がらせなのか託児所の仕事を押し付けられる事があってな。これぐらいの子が、何かに凄く感情移入している所は何度か見たから。女の子だし、もしかして人形とか？」

「ミミちゃん」

「ミミちゃん……、兎かな」

コクコク。

「兎の人形か」

「ミミちゃん」

「そうだったな。なら、ミミちゃんの迎えに行こうか。もしかしたら落とし物になってるかもしれないし、そうじゃ無かったら、心当たりを探しに行こう？」

浩樹の言葉に、女の子は頷いた。

Side out

Side : 浩樹

幸いな事にミミちゃんは親切な人が拾って届けてくれたらしく、
落とし物として預けられていた。

そんな俺隊は現在、俺の肩に乗っているミミちゃんを嬉々として

抱いた女の子先導の元、神社の裏手にあるそれなりに深い山の中を歩いていた。一人なら造作もない山だけど、流石に女の子一人を肩車して、何故か佳奈をお姫様だっこするという、登山家も真っ青な登山だ。

おまけにミニちゃん隊長曰く、来年までには到着しなくてはいけないらしく、現在23時55分。到着予定場所の半分ほどしか進んでいない現状を考えると、何かもういいやと思えてならない。

「浩樹、大丈夫？ やっぱり、私歩いた方が……」

「佳奈、ヒールじゃないか。山道歩くの、危ないだろう。大丈夫だから」

強がって見せた。足に力を入れ、一步踏み出す。更に一步。そして

「ぬあああああああ！！！！！！！！」

走り始めた。

「死ぬ……。もう死ぬ」

女の子先導、ミニちゃん隊長の指示通りに進んだ所、広場に出た。現在23時59分。間に合うとは……。筋肉痛は無いだろうけど、暫く動きたくない。広場にあったベンチに腰をおろして、一息ついた。

「お疲れ様。浩樹」

「お疲れ」

「ん？ ああ。ありがと。それで？ 何で此処に？」

女の子は俺の手を取り、其処についていた時計を見た。そして、俺にミニちゃんを渡すと、俺と佳奈に向かって指を立てた手を見せる。

首を傾げると、一本、また一本と指をどんどん曲げて行った。そして最後の一本が曲げられ、それと同時にピッと腕時計が鳴った。時計を見ると00時00分を過ぎていた。何時の間にか新年だった。そして別の音が聞こえ、空が明るくなった。見上げると冬の夜には似合わない物が消え始めていた。

「花火？」

「どうしてまた？」

この時期に、というのもあるが、今までこの日に花火があったことなんてなかった。それにこの場所は花火を見るのに絶好の場所だ。カウントしていた所を見ると、恐らくこの子は花火の事を知っていたのだろう。

「花火の事、知ってたの？」

「今朝此処に来た時、此処から花火の準備をしているのが見えたから」

俺からミニちゃんを取り戻しつつ、女の子はそう言った。質問の答えにしては若干ずれてる気がしないでもないけど。

「お話を聞いたら、この時間に合わせて打ち上げるって言ってたから、見に来たの。お兄さん達を連れて来たのは、ミニちゃんのお礼」
「そっか。ありがとう」

パツツという音に俺の声がかき消された。仕方なく、頭を撫でる

ことで感謝の意を示して、俺も空を見上げる。再び空に花火が打ちあがった。

「たーまやー!!」

佳奈が叫んだ。再び花火が上がり、今度は「かーぎやー!!」と叫ぶ。

「佳奈、元気な」

「お姉ちゃん、五月蠅い」

「二人とも、冷め過ぎじゃない!？」

だって、とそう言いながら数歩前に出て柵の方に行き此方を向いた。四度目となる花火が上がり、それに合わせて手を広げた。

「こんなに綺麗なんだよ!!」

「正直寒い。もう帰りたい。ミニちゃんもそう言っている」

「本当に冷め過ぎじゃない!？」

「同じツツコミは面白くないよ、お姉ちゃん」

「まあまあ」

少しはましになるだろうから、マフラーを外して女の子の首にかけた。ミニちゃんには悪いが、少し我慢して貰おう。

「なに?」

「少しはましだろ? すまないが、もう少し佳奈に付きあってやってくれ」

「お兄ちゃんの頼みならしょうがない」

「え? 何で私が我が儘言ってるみたいなの?」

再度花火が上がる。女の子と一緒に前に行き、佳奈の隣に並ぶ。いつまで上がるのかは分からないが、とりあえず、数年ぶりに見た花火を堪能する事にしよう。

Side out

Side: 佳奈

何か釈然としなかったけど、その後、結構多く上がった花火にテンションが上がり、釈然としなかった気持ちはどこかに置いて来た。まあ、それでも、山から下りる時は肩に女の子、両手に私を乗せて、浩樹が一人で歩く事になった。

山を下った私達は、浩樹の希望通り除夜の鐘を突いて、ぼちぼちある出店を冷やかしたりしたお御籤を引いた（私と女の子は大吉、浩樹は吉だった）後、帰路に付いた。

「じゃあ、お兄ちゃん。お姉ちゃん。バイバイ」

「ああ、またな。今度は一人で来たりするなよ？」

「ミミちゃんがいる」

「じゃあ、ミミちゃんと二人で行ったりするなよ？ 佳奈はどうせ暇だから、何かあれば誘うといい」

「お兄ちゃんは？」

「俺は普段は別の場所に居るからな。まあ、もし年始に帰って来てたら、その時は一緒に花火見よう？」

「うん」

一つ頷き、手を振って女の子は走り去った。……そういえば。

「名前、聞いて無いね」

「…………おお。すっかり忘れてたな。むう、まあいいか。また会えるだろ」

ググツと伸びをしながら、浩樹は家に向かって歩き始めた。慌ててその背を追って、隣に並ぶ。

「結局、殆ど二人きりじゃなかったなあ」

「ん？ 普段、こつちに来たら大抵二人じゃないか」

「そう言うのじゃなくて。二人で出掛けた事が買物とか誰かの家に遊びに行くとか以外ほとんどないでしょ？ 色が無いなって」

「色が無いって、お前…………。はあ」

溜息をついた浩樹が、私の手を取る。そして、あの事会っ前のように繋いで、その手をポケットに入れた。

「…………えっと」

「たまにはいいだろ。嫌なら離すが？」

「…………」

強く握り、腕も絡める。あの時と同じだ。少し悩んでから、名残惜しいと思いつつ、一度手を話す。不思議そうにする浩樹のマフラ―を外した。アリシアが編んだというこれは、張り切り過ぎたのか狙ってなのか、かなりの長さがあったから、私と浩樹で共有するのにも余裕だった。

再び腕を絡めて手を繋いでポケットに入れ、寄り掛かる様に、浩樹の肩に頭を乗せる。

「やりすぎだろ」

「いいからいいから」

まったく、とぼやいた浩樹は、私に合わせず、寧ろ私よりも遅い歩調になった。来る時よりも全然遅い、それこそ帰るのに一時間くらいかかるんじゃないかと思える浩樹の速度に合わせて、のんびり歩く。

「ねえ、浩樹君」

「なんだ？」

浩樹君がこっちを見た。そして自分より少しだけ高い浩樹君の顔に近づくと背伸びして、私の唇が浩樹君の顔に触れた。まあ、流石に唇同士は恥ずかしいし、それをするのは浩樹君とちゃんとそういう関係になってからって決めてるから、頬にだけど。

そして、浩樹君はと言えば

「なっ!？」

顔を真っ赤にして、そっぽを向いてしまう。それでも、手は離さないから怒ってる訳じゃないらしいから、少しだけ安心した。

「いきなり何だよ……」

「お礼とお御籤の結果が微妙だった浩樹君の為のおまじない、かな」「そうかい」

相変わらずこっちには向かない。でも、街灯に照らされている彼の耳が真っ赤に染まっているから照れている事は分かった。相変わらず、女の子にもてるのに、こういう所は初心のようだ。

「ゆっくり帰ろう?」 浩樹

「変だろ、それ。温かいからいいけどさ」

そう呟く浩樹君に更に強く抱きつく。

「佳奈」

「何？ 浩樹く」

浩樹君の顔が近づき、額に柔らかい感触。

「……へ？」

「仕返し」

顔を離れた浩樹君が、やはりそっぽを向いて、ぼそりと呟いた。された事の自覚が湧き、顔が火照った。多分真っ赤になっている顔を隠すように、首に巻かれたマフラーで顔を隠す。自然に顔が綻び。

「……」

ギュッと、お互いに握っている手を、少し痛い位まで握りしめた。

閑話　〈初詣特別編〉（後書き）

さあ、上げてこうか！　共に青春を謳歌しようぜ！（某銀河美少年風に）　どうも、ごまだれです。

凱龍輝様、Goldchild様、空牙刹那様。感想、ありがとうございます。

PV200、000とユニーク20、000突破の記念も兼ねて、初詣編です。内容については触れませんが一つだけ。大きさはフェイト>アリサ>すずか>なのは>はやての順番だと思います。異論は認める。

コラボですが、一応完成したのを読み返し、あまりにネタに走り過ぎていた為、一から書き直してます。Goldchild様、すいません。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

次のイベントはバレンタインだけど、誰のターンにしようかなと思いつつ、では次回。以上、ごまだれでした。

閑話&コラボ くるとある封魔と転生少女く（前書き）

GoldChild様の『魔法少女リリカルなのは ONLY Her Hero』とのコラボです。当初の予定とは全く違う作品になってしまった……。

閑話&コラボ くとある封魔と転生少女

Side: はやて

暗い病室の中で、カチカチと携帯を弄る。画面に開かれているのはメールフォームで、其処に十一冊の本のタイトルが書かれていた。

「これで良しっ」と

そのメールを、同じ内容にもかかわらず、わざわざ二度に分けて二人の人間に送った。二人とも明日は学校。終わる時間帯も同じくらいやし、これなら私の企みも成功するやろ。

「こんな事やったら、カータにも浩樹君にもばれるて怒られるやろうけど」

私はちよくちよく入院して、あの子に寂しい思いさせてしもてるし、浩樹君には悪いとは思っけど、少しだけ協力してもらおう。

そう思いながら携帯を閉じてベッドの脇に置くと、私は横になつて目を閉じた。

Side out

Side: 浩樹

溜息をつきつつ、手に持った携帯の画面と睨めっこする。そこに

は、数冊の本のタイトルが書かれていて、俺はそれを借りてくるように友人であり、現在入院中の八神はやてに頼まれたのだ。しかし「何で、こつも見つからないんだらうな？」

ぼそりと呟く。メールに書かれた冊数と手に持っている冊数が合わない。まだ探している途中の本はあるけれど、それでも明らかに少な過ぎたのは、何故か狙ったようにこの中の一部の本が借りられているからだ。

俺かはやてに恨みを持つ者の犯行か、なんて最近読んだ推理小説に出て来た探偵よろしく呟いてみて、画面の一番下に書いてある本を探して行く。はやてには悪いが、とりあえず、見つけた物だけで我慢して貰おう。

「えーと……」

指を差して、本のタイトルを確認しつつ、右に右に歩いて行き、ようやく目当ての本を見つけて手を伸ばすと、右から同じ本に向けて手が伸ばされた。お互いにその事に気がつき、手を止めてそちらを見る。

銀色の綺麗な髪で同じくらいの背の高さの女の子。……はて？ あった事はない筈だけど、彼女の事は知ってる気がする。

「どこかで会った事あったか？」

「開口一番にそれ？」

「ごもつとも。ちらりと視線を落とすと、彼女が抱えるようにして持っている本が目に入った。タイトルが見えている物だけでも、此方が頼まれて、且俺が見つける事が出来なかった本だ。」

(このままじり貧になるよりは、交換条件を出してみるのもありか)
「なあ」

「何？」

「この本、そっちに渡すから、一番上に置いてある本、こっちに譲ってくれないか？」

「私が個人的に読みたい本なら構わないけど、これは全部、頼まれた物だから駄目かな」

「そうか。でも、俺も頼まれた物だし、これは借りたいんだけど」

ふと、彼女の視線が降りた。見たのは俺が持っている本のタイトルだろう。少しだけ首を傾げて、「それなら」と彼女は言った。

「貴方の持っている本。どれか一冊、譲ってくれれば」

「悪いな。俺も頼まれた品なんだ。優先順位みたいなのは聞いてないから、借りられるだけ、借りて行きたい」

「……貴方も頼まれたの？」

二人で目を見合わせる。手に持っていた携帯を彼女に渡す。受け取り、それを確認してから、同じように彼女も携帯を渡してきた。その画面を確認すると、俺の携帯に書かれていた物と、全く同じ内容のメール。

「同じ物だな」

「そうね」

全く同じ物を別の人物に頼まれたとも考え難く、誰に頼まれたのか尋ねてみた。

「お姉ちゃん」

「友人だ」

「……」
「……」

「八神はやて（です）（だ）」

思わず同時に溜息をついた。

「何を企んでるんだ、はやては……」

心当たりは？という意味を込めて、銀髪の少女の方を見た。心当たりはないらしく、首を横に振られた。同じく心当たりなど無く、俺も首を横に振る。

「まあ、元々十一冊だったから、一人じゃ借りきれなかったんだが、そこら辺もあいつは確信犯か」

「うん、多分」

「はあ。まあ、とりあえず」

「とりあえず？」

「本を借りて病院行くか」

「おお。そう言えばそうやったね。ごめんな、二人とも」

白々しいと、俺はそう思った。そんな様子を億尾にも出さないようにして、普段の俺の様に返す。

「ったく。とりあえずこつちが俺の借りて来た分で」

「こつちが私の借りて来た分」

「おお！ おおきにな、浩樹君、カータ」

とりあえず、最後の一冊は俺が手に取り、二人でメールにあった物を分担して借りることにした。そして、本の入ったバッグを二つ持って、俺と彼女、八神カータは病院のはやての病室に移動した。

「しっかし、そうか。君がはやてから聞いてたカータだったのか。通りでどこかで会った事あると思った」

「私も。貴方がお姉ちゃんから聞いてた浩樹君だったんですね」

後で聞いたのだが、カータも俺を見た時、どこかで会った事があるような気がしたらしい。綺麗な銀の髪とかある訳でもないから、特別俺に特徴があるとも思えないんだけど。

そう思って尋ねたら、はやてがカータにした説明があり俺に酷似していたらしい。黒い服を好んで着るとかなら、他にも居るだろうけど……。

「因みになんて説明されたんだ？」

「黒っぽい服を好んで着ていて……」

まあそれなら。

「女装が似合いそうな人」

「よし、はやて。屋上行こうか。何、すぐ終わる」

「何する気や!？」

「てか、初対面のカータにも女装が似合うって思われたのか」

「え？ だって実際似合いそう」

八神姉妹に口をそろえて言われては、もう溜息をつくしかない。普通に溜息をついた。カータとは此処に来る前に打ち合わせをしたから、彼女の言葉は演技だと思いたい。

「でも、浩樹君の女装は一回見たいなあ。女装してくれへん？」

「しないよ!？」

「大丈夫。私が服とか準備するから」

ね?と小首を傾げるカータ。それなりに親しいはやての態度は分らないでもないけど、本当に演技かと思う位、初対面のカータ嬢まで乗り気なのは一体?

とりあえず、する気はなかったので丁重にお断りした。頼むから残念そうな顔をしないでほしい。

「落ち着いて考えろって。似合う筈ないだろう?」

「「そんな事無いと思うけど」」

「かぶった!？」

はあ、と溜息をつく。病室の時計を見ると、約束の時間だった。カータもそれに気がついたらしく、一度こちらを見てから、はやての方を見た。

「お姉ちゃん」

「ん? なんや、カータ?」

「花瓶の水、変えてくるね?」

そう言っつて、ベッド脇に置かれていた棚の上にあった花瓶を手に取りっつて、廊下に出る前に、再び俺に目配せしてから外に出た。

そして、俺とはやての二人が病室に残される。

「なあ、浩樹君」

「なんだ?」

「カータの事、どう思っつ?」

「どう思っつって……」

訳が分からない質問に首を傾げた。その質問ははやてが企んでいる何かと関係あるのだろうか。でも、はやての顔は真剣そのもので、はぐらかす必要もなく、俺は素直に答えた。

「はやてから聞いてた通りの子だった」

「ええ子やる？」

「そうだな。……それが理由か？」

「なにがや？」

「何の目的があったとは思っていたが。カータの為だった、とでも言う気か？」

俺のその言葉に、はやてが自嘲気味に笑った。

S i d e o u t

S i d e : はやて

ばれとるかなとは思った。カータが病室出て行く時に浩樹君と目配せしてたし、もしかしたらと。だからこそ、先手を打って尋ねてみたけど、印象は良かったみたいや。

ベッドの脇に椅子を持ってきて、浩樹君はそこに座った。

「そつや」

嘘をついても見破られそつやったから、正直に話す事にした。

「私、ちよくちよく入院とかで家を開けてまうやる？」

「そうだな」

「だからカータに寂しい思いさせてると思うんや。だから」

「俺がカータと仲良くなれば、寂しい思いさせなくてすむからって事か？」

首を縦に振ると、溜息が聞こえてスパーンと軽快な音が聞こえた。目がチカチカして額がズキズキする。少しして、デコピンされたのだと分かった。

「痛い……」

「あほな事言うからだ。まったく」

「あほな事って」

少し睨む。浩樹君はその視線を受け止めて、それでも微笑む。初めて見る顔やった。

「本当にいいお姉ちゃんだなあ、はやては」

馬鹿にする訳でもなく、感心するようにそう言った。

「なんや。急に？」

「いや。別に」

ポケットを漁ると絆創膏を取り出すと、私の額に張った。

「俺が言える事じゃないとは思っし、こんな事言うのもおかしいって自覚はあるけどさ」

「？」

「カータは大丈夫だと思う。詳しくは何も知らないから、なんとも言えないけどさ。でも、はやての妹だろう？ だから大丈夫だって」

な？と、今度は初めて会った時の笑顔で、浩樹君はそう言った。

Side out

Side: 浩樹

「卵、ありがとうな」

「お姉ちゃんの付き添いで良く買い物に行ってるから」

面会時間が終わりをづけ、方向が同じだった事とはやてに頼まれた事もあって、俺はカータと一緒に、八神家への道を歩いていた。まあ、その途中、お一人様一パック限定の卵を買うのを手伝って貰った。

「所で、はやての企んでた事、聞かなくていいのか？」

「……少し気になるけど」

「けど？」

「お姉ちゃんが私にとって酷い事をする筈ないから。話してくれるまで待つかな。お姉ちゃんも聞かないでいてくれるし」

「ん？」

カータの言葉が少し気になったけど、聞かなかった事にした。

「それならいいけど。……なあ」

「何？」

「はやてってどんな姉？」

「いいお姉ちゃん」

即答だった。

「そっか」

なら、はやての心配し過ぎなんだろう。とはいえ、カータがはやてが話すのを待つと言っている以上、俺は何も言わないで、カータの意思を尊重する。

その内、十字路に差し掛かった。其処で止まり、俺とカータはそれぞれ別の道を指さす。

「んじゃ、此処でお別れか。じゃあな、カータ」

「うん。じゃあね」

お互いに手を振り、それぞれの家に歩きだした。

S i d e o u t

S i d e : はやて

「うゝむ。やっぱり作戦の失敗はメールやったか。やっぱり同じ内容じゃなくて、数冊くらいかぶせる形すれば良かったんやね。後は……」

携帯をカチカチと弄りながら、私はブツブツとつぶやく。

「でも私もそうやったし、カータの初めての友達も浩樹君やと安心なんやけど……」

そこまで言って、浩樹君の言葉を思い出した。少し悩んでから、打ち込んだ本文を全て消して、携帯をベッドの脇に置いた。

「ちよつと暴走してたみたいやね。浩樹君より、私の方がカータの事、よう知つとる筈やのに」

あんなええ子で美人さんなんや。私がかかしくなくても、カータは大丈夫。

「それに、私の妹やしね」

クスリと笑って、ベッドに横になった。おやすみや、カータ。浩樹君。

閑話&コラボ くるとある封魔と転生少女く（後書き）

GoldiChild様、すいません！ ごまだれです。

コラボは初めてだったので勝手に分からず、結果として『魔法少女リリカルなのは Only Her Hero』本編での概貴君転校前のお話になってしまいました。世界はこんなはずじゃなかった事、ばっかりですね。

そもそも、浩樹と八神姉妹の掛け合いと言いますか、ほのほののよくなものが書きたかったのに、暴走したのが原因。大筋の流れはともかく、殆ど一から書き直した結果、時間軸的に書きやすかったこともあり、こうなりました。

個人的にははやとカータの姉妹仲をうまく書きたかったのですが……。GoldiChild様、ならびに『魔法少女リリカルなのは Only Her Hero』ファンとカータファンの方、すいません。全部ごまだれが悪いので、恨んでくださって構いません。自分で自分が許せないのです。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さりありがとうございました。

では次回。ごまだれでした。

第五十四話 A・S 第零話 〱前日〱 (前書き)

今回からA・S編です。後の事を考えると、シリアスになるかもだったので、ギャグ一辺倒

第五十四話 A・S 第零話 〈前日〉

Side: 浩樹

地球歴 11月30日

迫る拳を横からつかみ、此方に引きつつカウンター気味の拳。それが防がれ、無理矢理腕を外すクイントさんに更に迫るが、弾かれて投げられて地面に叩きつけられる。

「っ」

立ち上がるよりも速く拳が降るされ、顔に当たる直前で寸止めされた。

「参りました……」

「お疲れ様」

腕を引かれて、立ち上がる。服に付いた土を払ってからクイントさんの方を見て、頭を下げた。

「朝からすいませんでした、クイントさん」

「気にしなくていいわよ。たまにはこういうのもいいしね」

「ええまあ。この頃は魔法使わない戦闘訓練なんて、ハルバード斧槍を使いこなす為に、ゼスト隊長と仕合だけでしたから。徒手空拳での組手なんて、本当に久しぶりです」

「貴方がもうちょっと背が高ければ、もっと練習になるんだけどね？」

「うぐ。ま、まだまだ成長期ですから」

クイントさんにそう答える。それから、自分の手足を眺めて、少
しだけ溜息。

「それよりも本当に行っちゃ駄目ですか？」

「当然でしょ？ 規則なんだから」

「ですけど」

「駄目」

「了解しました……。とりあえず、俺は朝食を作るので、シャワー
でも浴びてきたらいかがでしょうか」

「そうするわ」

クイントさんが家に入っていった。その背中を見送り、再び溜息。

「どっちゃって時間つぶそう……」

初めての休暇は前途多難だった。

.....
.....
.....

事の発端、という言い方はおかしいけど、俺が有休をとる事にな
ったのは昨日の事だ。

「いえ。全力で遠慮します」

「許されると思つか？」

いきなりゼスト隊長に呼び出され、部屋に行くと、有休を言い渡

された。正確には有休をとる様に説得もどきの命令をされた。

丁重にお断りしたら、更に疑問形とはいえ脅された。怖い……。

「ですが、別に疲れている訳でもないですし。休まずとも問題無いのですが」

「そう言う問題ではない」

「ですよねえ」

そういえば、時々ミュウさんがいなかったなあと、ふと思い出していた。そっか、休んでたんだ。

「規則だ。入局してそれなりに経った。一度は休ませねばならん」
「しかし」

「聞いたぞ。お前、クリステリア皇国の時も大怪我を負ったらしいじゃないか」

「……何のことでしょうか？」

「それに入局して間もないにも拘らず、長期とまではいかずとも中期の任務をいくつかこなしているのも事実だ。だからこそ、少し休め。今後の為にもな」

「ですが」

「報告書」

短く言ったゼスト隊長の言葉に、思わず肩が跳ねた。

「な、なんの……」

「時折虚偽という訳ではないが、情報の隠蔽があるだろう。なら」

「高坂浩樹二等陸士。明日より数日間、休暇を頂きたいのですが、よろしいでしょうか……」

「手続きはしておく。今日はもう、帰っていいぞ」

「了解しました……」

隠蔽の内容は自分の事を含め、話さないと誓った物もある以上、話す訳にはいかないから、此处で休暇を取るのは当然のこと。

分かつてはいるが、礼をして部屋を出ると、俺は溜息をついた。首をからかけているアルハを手に取り、起動する。形状は腕輪を選択し、手に付ける。

『どうしよっか。休みって言われちゃったよ』

『言われちゃったねえ。まさか、そのまま緩やかにクビに』

『ごめんなさい！ 絶対にもう嘘は付かないので、それだけは！？』

『落ち着いてよ浩樹』

『すまん。ちよっと、取り乱した』

休憩所へ足を向ける。小銭を数枚、自販機に入れ、出て来た紙コップ入りのコーヒーを少しすすする。苦かった。先程の自販機で自分が押したボタンを見ると、『砂糖・ミルク無し』の文字。

買い間違えた事と、明日からの休暇の事を考え、先ほどよりも深い溜息を付いた。

『やっぱ疲れてんのかな？』

『浩樹がドジっ子ってだけじゃない？』

『こんなミスしたの初めてだったの』

『まあ、でも。ゼスト・グランガイツの言う通りなのは事実かな。』

夜は夜で浩樹も色々やってるから、休めなくて、それでも無理に動かうと、ただでさえ駄々洩れ状態で常時消費してる魔力を、更に使う悪循環。ここら辺で一回、思いつきり休むのも手だよ。浩樹の場合、完全に漏れないようにするのは無理だから、漏れるのを最小限に抑える魔力操作は私がしてあげる。だから浩樹は、何も気にせず休めば？』

『そうだな。アルハがそう言うなら休むか』

殆ど冷めたコーヒーを一気に飲み干し、カップをゴミ箱に捨てる。少し悩んでから自販機に再び小銭を入れ、砂糖とミルクが入ったコーヒーを買った。息を吹きかけそれを冷まし、少しだけすすする。

『態々買い直さなくてもいいじゃん』

『うっさい。別にいいだろ』

「因みにあまりコーヒーを飲み過ぎると、背が伸びないよ？」

「言っておきますが、それはあくまでも迷信です。少なくとも科学的な証明は全くされていません」

「なるほど。誰かに言われて調べたね？ 高坂浩樹二等陸士君？」

「果てしなく大きなお世話ですよ、データ・ランスター執務官殿」

俺の後ろに立っていたデータ執務官に返した。

データ・ランスター執務官。そうかい、と楽しそうに言った執務官は俺と同じようにコーヒーを買った。

「それで？ 元気が無い様だけど、どうかしたのかい？」

「ゼスト隊長にお休みを頂いてしまつて。どうやって時間を潰そうか悩んでいた物ですから」

「君くらいの歳の子で休みを貰つて困るというのも珍しいね」

「しょうがないじゃないですか。学校に通っていた頃は、休みは溜まっている家事を片付ける位だったんですが……。最近アレシニアは家の娘も家事がそれなりに出来るようになってきましたから。まあ、料理はまだまだですが」

「そうかい。まあ、僕ティアナの妹は昔から家事は出来たけどね」

「そうですね。まあ、今まではともかく、今じゃ勝負にもならず、家の娘アレシニアの圧勝でしょうけど」

「「……」「」

またか、というアルハの言葉が聞こえた気がしたが、そんなことにせず、手に持ったコーヒを飲み切ると、そのカップをゴミ箱に捨てた。
睨み合う。

「「ちょっと訓練場まで顔貸して貰え（ます）（る）？」」
「「上等（です）（だね）」」

.....

.....

.....

「はあ」

『どうしたの？』

「昨日の事を思い出したら、疲れがぶり返してきた」

『あー、いい加減、仲良くなればいいのに』

生憎とアルハの言葉に対しての答えは持っていない。だから答えず、作り終わった料理を盛り付けた。

「アリシア。配膳、手伝って」

「あ、はい！」

返事が聞こえ、アリシアが此方にパタパタと走ってきた。そんな彼女に盆を渡し、その上に盛り付けられた皿を置いて行く。

「んじゃ、よろしく」

「はい」

「ジクリアだ。もしかして、全クリ？」

『そうだね。レベルマックスのゲームなのにノーミスだよ。おお、ハイスコア。流石だねえ』

ふう、と一息つき、笑いの主が此方を見た。清々しい笑顔だが、あれを見た後だと、その笑顔に裏があるような気がしてならない。アリシアは俺に銃の形をしたコントローラーを渡してきた。

「はい。次浩樹の番だよ？」

「いや、俺はいいや。アリシアの見てるだけで楽しいよ」

「やった方が楽しいと思うけど」

「気にせずに楽しむといい」

「うん。分かった」

アリシアが家事がそれなりに出来るようになった今、二人である程度分担すれば、やるべき家事は大体終わってしまい、俺とアリシア。というよりアリシアがやっているのはコントローラーの形から分かる様に射撃ゲームだ。

元々この家には無く、アリシアが自宅に居る時にしたプログラムを組むアルバイトで稼いで買った物だ。少し前に通帳を見せて貰ったが、俺より全然持つてる。そんなに儲かる物なのかとも思ったんだが、アリシア曰く完全実力主義の会社らしく、いい物を組めば組んだだけ貰えるらしい。それなら納得、と言った感じだ。

そんな訳で、自力で稼いで、アリシアが個人的に買った二つ目の物（一つ目は俺のプレゼントの事でチョーカーを買ってくれた。まさかこの歳で、父親というか、就職して初めての給料でプレゼントされた親の気持ち分かるとは思わなかったよ）として、ナカジマ家三人娘の娯楽として、大切に使われており、俺はあまり触れなかったのだが、休みという事で良かったらやってみたらとアリシアが言うから、やる事にしたのが少し前の事。そして、見本としてアリ

シアが初めて今に至る訳だ。

『ああ、また高笑いが始まった……』

『怖いね。其処に居ないのに私も怖いよ』

『高笑いしながらも的確にヘッドショットを決めて行くからな。どれだけやり込んだんだって感じた』

何か無性に遊びに行きたくなった。海鳴でも基本的にはゲームとかお茶が多くて、余り外で派手に遊ぶ、という事が無かったから、たまにはそれもいい気がする。

これ以上、アリシアと一緒にこのゲームを続けていたら、俺の心が持たないとかそんな訳では断じてなく。

『でもどうやって連れ出すの？』

『たまには外で食事もいいだろ。何かもう、無性にファーストフードが食べたい』

『無性にやりたい事が多いね』

『まっただくだな』

返しつつ、ゲームを続けているアリシアを見ながら、ソファアに横になった。防衛本能なのか、少し眠い。ふわぁと小さな欠伸をして目を閉じた。

……き。……るき。

「浩樹！ 起きて！」

「んあ？」

アリシアに体を揺すられて目を覚ました。まだ半分寝ていて、中々開かない目を擦りつつ、伸びをして体をそれなりに覚醒させると、ようやく目が開いた。

「おはよ、アリシア。どうしたの？」

『私が頼んだの。いくら声かけても起きないから。通信だよ』

「通信？ 繋いでくれ」

体を起して、アルハを手取る。ウィンドウが開かれ、暫しのノイズの後、通信相手の顔が映った。

『久しぶりぞな』

「聞きたい事は大量にあるが、とりあえず、よくも俺の安眠を妨害したな、この野郎」

『む？ この時間は仕事の筈ぞな』

「よし分かった。お前は俺の仕事の邪魔をしようとする訳だな？」

『いやいや。管理局員の高坂浩樹に用事があったぞな』

「あん？」

改めてストレッチなどをして体をほぐし、完全に目を覚まさせる。昼寝なんて滅多にするもんじゃない。どうにも頭が働いて無い。寝ていた時間が中途半端だったからだろうか。

欠伸を噛み殺し、若干寝癖で立っている髪の毛を弄りながら、どうやってかは知らないが、アルハに直接連絡を入れて来た変態テイレットに言葉返す。

「どつという意味だ？ 自首？」

『吾輩は潔白ぞな。自首する必要なんてないぞな』

「裏取引とか次元外世界への不法滞在とか、叩けば色々出てくる癖によく言うぜ。それで？ 態々アルハに連絡を入れた理由は？」

『さつきも言った通り、管理局員の同志浩樹に用事、というより頼みがあるぞな』

「断る。俺は休暇中だ」

『君に大好きな幼馴染も関わる可能性があるぞな』

その言葉に、思わず反応してしまった。それを見たデイビットの顔がにやける。

「チツ。詳しく聞かせろ」

『6月に突然大きな魔力反応が複数出現したぞな』

「……どういう意味だ？ 何もない所から、いきなりポツと現れたつてのか？」

『少し違うぞな。元々其処には何かがあった。その何かからその魔力反応が現れた』

「分からん。現れた事も気になるが、仮に現れたとして、それがお前と、そして俺の幼馴染にどう関係する？」

これは純粹な疑問。まあ、寝起きで上手く頭が回らないというものもあるけど。

『ここ最近、その魔力反応が消えたり現れたりを繰り返している、と言ったら同志は何を想像するぞな？』

疑問に疑問で返すなと思いつつ、アリシアが淹れてきてくれたコーヒーを啜りながら、思考を巡らせる。

「お前が言う通り、いきなり現れたってなら、消えられるんじゃないか？」

『消える直前に何かの魔法が発動してるぞな。其処から考えると？』

「次元転送って言いたいのか？ まあ、ありえない話じゃないが。」

でも、それでもお前となのはに危険が及ぶというのが想像出来ん」
『随分と鈍いぞな』

ほつとけ。

『それならもう一つ。その魔力反応以外に時折また別の魔力反応が此処に来ては消えてるぞな』

「……アリシア。ちょっと本局にアクセスして、武装局員の状況を調べてくれ」

「え？ うん。十分もかからないと思うよ。この前、新しいハツキング用のプログラムも組んだし」

『察しが良くなったぞな、同志浩樹』

「しかし、デイビット。そんな状況は考えたくないぞ」

最悪じゃないか。それなら相手は……。

「終わったよ」

「『早い(な)(ぞな)！?』」

「これ位ならザルだね」

『先が思いやられる少女ぞな』

「世界を敵に回しても、アリシアだけは敵に回したくないな」

「私が浩樹の敵になるなんてありえないから大丈夫だよ」

そりゃ何よりだが。

「それよりも結構大変な事態みたいだね。動員した武装局員の人数もさることながら、接敵してまともに帰って来た局員は一人もいないみたい。怪我は色々だけど、全員共通なのは、異常な魔力の消費過多」

「……アリシア」

「何？」

「海鳴に行く。どうする？」

「勿論着いてくよ」

「じゃあ、悪いが荷造りをしておいでくれ。俺は局に行つて、次元転送の許可を貰つて来る」

「りょーかい！」

パタパタと走つてリビングを出て行く。溜息を一つつき、画面の向こうに居るデイビットに視線を戻した。

「面倒事に巻き込んでくれたお礼は後できっちりとして貰つぞ」
「分かつてるぞな」

通信を切り、コートを羽織ると俺は外に出た。足はそのまま、地上本部に向ける。

「アルハ。心当たりは？」

『症状的には十中八九、夜天の魔導書。今は闇の書つていった方が通じるかな』

「生憎と無知だからどっちの名前も知らんが……。これだけは聞いておく。危険か？」

『かなりね。元々は健全な資料本だけど、ある男がプログラムを改変したから。改変した男の情報は生憎無いんだけど』

「気にしなくていい。悪いが、情報を纏めておいて貰えるか？」

『了解だよ』

「すまん。助かる」

『気にしなくていいよ。じゃあ、あとで』

会話が途切れた。この後やるべき事を考えていると、ふとアリシアとアルハの事が頭をよぎった。

アリシア・テストロッサ。弱冠5歳にして、俺以上のプログラマーで管理局への不法アクセスもお手の物。

アルハことアルハザード。ロストロギアを含め、様々な事の知識が豊富で、その豊富な知識を処理する能力の格段に高い。

なら俺は……と考える。考えて、考えて。

「何も出ない……」

何かひとつくらいとも思ったが、何も出て来なかった。本当にアリシアとアルハに助けられてるといっつか、おんぶに抱っこだなあと思っていると、不意にある言葉が頭をよぎった。

「ヒモ……」

呟き、ブンブンと頭を振ってその言葉を追い出した。そして今日何度目かになる溜息をつき、空を見上げた。

(もっと頑張らないとなあ)

そんな事を思い、俺は管理局への足を速めた。

こうして、11月30日。事件が本格化する前日に、浩樹とアリシアは海鳴の地を踏んだ。

第五十四話 A・S 第零話 〈前日〉（後書き）

ディータのシスコンは最早デフォ設定な気がする。ごまだれです、空牙刹那様、凱龍輝様、Goldchild様。感想、ありがとうございます。

という訳でA・S編です。ようやく八神家にも海鳴組にも本格的に出番がある訳ですね。キャラを五人以上同時に絡ませられないごまだれとしてはキャラが増えて辛いところです。

まあ、ぼちぼちなんとかなるでしょう。

今回はここまでです。

一週間以上放置してしまい、すいませんでした。

そして、ここまで読んで下さりありがとうございます。

では次回、ごまだれでした。

第五十五話 A・S第一話 くそれぞれの朝く（前書き）

ごま「何故だろう、筆が進まない……。もしかして、これがスタンブー!?」

浩樹「スランプだろ!!!」

第五十五話 A・S第一話 くそれぞれの朝

Side: 浩樹

12月01日 午前06時00分

「ふう」

海浜公園の柵に手を着き、一息つく。まだ太陽が昇らず若干薄暗い公園を歩く。

「閉まった。速度が速かったか。いつもと同じくらいのもりだったけど……。やっぱり、久しぶりの海鳴でテンション上がってるのか？」

予定では日の出とほぼ同じ位に着く予定だったんだけど。殆ど毎日のように走っているから、速度を一定に保てるのにこれだ。まあいいかと思っていると、横から光に照らされた。手で影を作りつつ、そちらを見ると、水平線から太陽が昇り始めている。

「帰って来たんだなあ」

思わずそう実感した。

デイビットの家にやって来たのは昨日の事だ。昨日はとりあえず、泊まる部屋を片付けたりしているうちに一日が終わった。昼間とかに外に出たら、なのは達と鉢会う可能性もあるから別に構わなかったけど。アリシアが外に出たがるのは少し困ったか。

「しかし……」

此処に来るまで走りながら見て来た場所を思い出す。

『どうかした？』

「いや、結構あちこちに転送の痕跡はあるけど、全部、管理局のだなと思つてさ」

『そついえば……』

「夜天の魔導書の……守護騎士だっけ？ そいつらの気配が全くと言って言い位に無い。デイビットが言った事がガセだったのか。それとも、よほど上手く隠れているのか。アルハ的には？」

『多分後者。そつじゃ無かったら管理局の痕跡が此処まで残るとも思えないし。それに守護騎士が目覚めるとすれば、湖の騎士なら今の浩樹じゃサーチ出来ない結界を張るのだから容易いよ？』

「それはそれで地味に傷つくが。しょうがないか。それに俺の悪寒も何かが起こるって告げてるし」

『ぞつとするね』

まったくだ。戦闘時の不意打ちに対してとかに關してはある程度の予測も付けられるから、この悪寒も役に立つけど、こつという何も無い時は何かが起こるといふ事実だけを伝えるこの悪寒は俺と俺を知る人間を含めて、ただ不安を撒き散らすだけだから困つた物だ。

何かあると分かっているから、気構え出来るだけ、ましかもしれないが。

『まあ、今は』

「のんびりするか。何かあると、それだけを念頭に置き、すぐに動けるように準備だけしておこつ」

『そつだね』

とりあえず、戻りながらサーチャーを撒いておこつ。

Side out

Side:なのは

同日 午前06時45分

魔法を知って、フェイトちゃんと初めて会ったその日から、皆で歩いていた道は、半年以上前に一人減って、数ヶ月前にさらに一人減って。ついには私とレイジングハートしかいなくなった。でも、人とは慣れてしまう物で、今はもう私とレイジングハートだけでも特に思う事無く道を進み、いつも通りの魔法の練習。今はいつもの練習の仕上げに、シュート・コントロールを始める所だった。

「じゃあ、始めるね？」

『分かりました』

「リリカル、マジカル」

足元に魔法陣。前に掲げた左手の先に魔力球が出来上がる。

「福音たる輝き、この手に来たれ。導きの元、鳴り響け」

右手に持った空き缶を、空高く放り投げた。そして、魔力球ごと左手を空に掲げる。

「ダイバインシューター、シュート!!!」

少しだけ不規則な軌道を描いた魔力球は、その後真っすぐと空を

缶に向かい、空き缶を更に上空に飛ばした。それが数度続き、レイジングハートのカウントが二十を切った所で、魔力球の速度を上げる。

速度を維持したまま、空き缶を落とさないように魔力球を当て続け、レイジングハートのカウントが百になった所で、一息つく。最後に落ちて来た空き缶に魔力球を横から当て、ごみ箱に向かって、空き缶を弾く。ごみ箱に飛んで行った空き缶は、中に入らず縁に弾かれ、地面に落ちた。

「ああ〜」

『よい出来ですよ、マスター』

「にはは、ありがとう。レイジングハート」

レイジングハートを手に取り首からかけ、コートを着る。空き缶に近づいて、改めてゴミ箱に捨てた。

「今日の練習、点数にすると何点？」

『約80点です』

「そっか」

可も無く、不可も無いと言った点数だった。昨日とさほど変わらない。

「帰ろっか」

『はい、マスター』

少し時間も危ないから、私は家に向かって小走りで走り始めた。だからだろう。別ルートで私と入れ違いになる様に広場に来た誰かに、私は気が付かなかった。

Side out

Side : 浩樹

同日 午前06時50分

「ん？」

脇を見る。自分が此処まで来るのに使った道とは別の道を使って、坂を下っている背中が見えた。

「あれって……」

『浩樹の大好きな幼馴染だね。まだ魔法の練習続けてるんだ』

「みただいな。まあ、今は関係ないが」

『そんな事言って今すぐ近づいて行って抱きしめたりとか「飛んでけ」って浩』

言葉は最後まで聞こえず、待機状態の宝石だったデバイスが、真つすぐどこかに飛んで行った。ていうか投げた。力加減とか色々調整したし、いざとなればゲートで回収も出来るから気にしない。たまには一人になるのもいいだろうし。

「魔法の練習か。そういえば、なのはが途中から始めたあれ、結局出来なかったな」

ゴミ箱に近寄り、その中から空き缶を取り出した。お手玉する様に片手で放り投げては取ってを繰り返しつつ、広場の中央辺りに立つ。目を閉じ、魔法陣を作る。

「……よし」

空き缶を高く放り投げ、普段なら停滞させる魔力球を、空き缶に向かつて飛ばす。操作して先ずは一回目。空き缶に魔力球を当て、更にも上へ。二回目、三回目とそれなりに調子よく続き、二十回を越えた所で速度を上げて、操作を失敗して魔力球が外れた。

「ちっ」

やっぱり苦手だと思いつつ、魔力球を操作。落下する空き缶に向かって、魔力球から砲撃を放つ。放たれた砲撃は、空き缶が地面に落下する前に空き缶を一部削った。そしてそのまま空き缶は地面に落ちた。

「力加減を間違えたか」

やっぱり威力の調節は難しいなあ。……まあ、俺の周りに居る人達が基本的に俺が加減する余裕なんて無い位強いからなんだが。

「ふむ。練習するか。同じ消費量でもやる事によっては色々変わるし」

少なくとも魔力砲撃を撃つ度に此処までの魔力消費は余りいいとも思えない。弾道計算は出来るけど、所詮は直進砲。何処まで計算しようとして、避けようと思えば避けられる。速度を上げるか砲撃の本数を上げるか。同じ魔力量でそのどちらかやれるだけでも、大分違うのは自明の理だ。

「うーん……とりあえず本数かな。速度上げるのは上手くイメージ

出来ないから後々か」

夜まで暇つぶしが出来たり、とぼんやり喜びつつ、俺は朝食のメニューを考えながら空き缶を捨て、アルハを回収しに行った。

まあ、あれだ。考えなしに行動するもんじゃないね。

Side out

Side:ミイク

同日 午前07時30分

「出無いし」

コールのみで全く出る気配が無い。朝早いけど、ひー君なら絶対に起きてると思っただけだなあ。お休みだから少しお寝坊さんなのかな？ とりあえず私は、彼に連絡を取るように頼んだ依頼主に謝罪する事にした。

「ごめんね、クロノ君」

『いや。僕も急に連絡してすまなかった。今日で裁判が終わるから、その前にあいつに報告位はしておいてやろうと思っただけだ』

「ふふ。クロノ君は優しいね。私がお願いしたら、ひー君に会うのも止めてくれたし」

『君には恩もあるからな。気にしないでいい』

私のお願い。それは、ひー君の事を教えるのはいいけど、会わないでほしいという物だ。ひー君が会いに行かないのはきつと理由が

あるから、会いに行くまで待つていて欲しい。そういう願い。その願いにクロノ君もエイミーちゃんも応じてくれた。その代わり、ここ数カ月、結構な頻度で二人には連絡をしている。

「でも、本当に浩樹君が連絡して出てくれないのって久しぶりだな。寝てたとしても、連絡すれば起きてくれたのに」

『寝てるのを起こすのはあまり感心しないが。まあいい。連絡がつかいたらフェイトとプレシアの件。伝えてやってくれ』
「了解」

通信が切れた。再びコールするが、やはり出ず、溜息について通信を切った。

「どっしたんだろ？」

まさか彼が、自身のデバイスを思いっきり投げた事を後悔しながら、必死になってデバイスを探してる事なんて露知らず、私は仕事の準備を始めた。

Side out

Side: 佳奈

同日 午前08時00分

「……うん。これくらいかな」

味噌汁を口に含み、一つ頷く。いつもの大差ない味だ。焼き魚も

ちょうど焼けたし、朝ご飯はこれで完成。珍しく家に居るおじいちゃんを呼ぶ。でも確か今日から暫く、町内会の温泉旅行に行くみたいだった。行き先が分かってる分、普段よりは心中穏やかと言ったところだ。

「そういえば、おじいちゃんが昨日、不思議な事言ってたな」

確か……。

「『帰っても顔は出さん、か』だっけ？ おじいちゃんが帰ってきたのについて表現する位だし、もしかしたら……」

帰って来ているのだろうか。この町に。だとしたら、何となく行き先や居場所は分かるけど。

「高町さん含めて、バニングスさんとか月村さんの家に居る訳無いし、まず間違いなくあそこだよな」

個人的には余り近寄りたくないけど、まあ、暇なら遊びに来ていとは言われてるし……。

「久しぶりに行こうかな」

「何処へだ？」

何時の間にかやってきたおじいちゃんが、いつもの席に座りつつ、私に尋ねた。そんなおじいちゃんに愛想笑いで答えつつ、私も座る。

「ちよつとね。それよりおじいちゃん。今日から温泉でしょ？ 準備出来てる？」

「まるで母親のようじゃな。大丈夫。ちゃんと出来とる」

「そう？ ならいいけど」

個人的に母親のようだって言われたのは少しショックだ。余り考えたくないけど、もしかして私って老けてる……？ お弁当渋いつて言われるし、ってこれは関係ないか。高坂君のレシピが原因だし。

「じゃあ、おじいちゃん。夕飯はいらないんだよね？」

「ああ」

「うん。了解」

おじいちゃん言葉に頷き、時計を見上げた。いつもの時間だ。箸はほとんど進んでない。

「……ち、ちよつと危ないかなあ」

珍しく朝食時に話をしたらこれだよ！ と思いつつ、私は慌てて朝食を食べ、食器類を水に浸すと、お弁当と鞆を持って外に出た。

「行ってきます！ おじいちゃん！」

「行ってらっしゃい」

第五十五話 A・S第一話（それぞれの朝）（後書き）

お気に入り百件突破したぜヤッホー、ごまだれです。

こんな作品をお気に入り登録していただき、ありがとうございます。

凱龍輝様、Goldchild様。感想、ありがとうございます。

恐らくA・S編は無印の時のように一話でアニメ一話分、みたいな事は出来ないと思います。無印と違って、キャラが微妙に増えたので。あの頃はオリキャラは主人公だけって思ってたんだけどなあ。

まあ、日常パートがどうにも書けないですし、とりあえず、次回は夜です。バトルです。ごまだれがリリなのにハマる理由になった、ゴスロリ騎士の出番です。

と言ったところで、今回はここまで。

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

では次回。ごまだれでした。

第五十六話 A・S第二話 く都とのしりとりと鉄槌との喧嘩く(前書き)

最近K&S、ぜんぜん書いてないな・・・

第五十六話 A・S第二話 く都とのしりとりと鉄槌との喧嘩く

Side：浩樹

12月01日 午後10時35分

「えーと、ここをこうしてっと。それで、此処をこう弄って……」

夜。街に一角にあるビルの屋上で、貯水タンクの上にレジヤースートを敷き、その上に横になりながら、レイズシュートのプログラムを弄る。今朝考えた通り、速度は後回しで先ずは複数本同時に撃った時の本数の調整。及び微調整をして、スターライトシフトによる、収束も含めた魔力の運用効率を上げる。生憎と改造した後、試し撃ちが出来ないのが少し残念ではあるが、これではちばち行ける筈。

「てか、アルハ。いい加減機嫌直せよ」

『誰のせい!?!』

「アルハだろう。余計な事言うつから」

『それでも、危うくカラスに持って行かれそうになって、酷い目に遭いかけた私に何か一言ある筈だよね!?!』

「助けたんだ。礼を言え」

『酷過ぎない!?!』

もう、とアルハが諦めたようにそう言った。

『浩樹』

「何?」

『イライラしてる?』

「少し。すまん、アルハ」

『いいよ。私も余計な事言ったから。それより浩樹。どんな感じ？』

「レイズのプログラムはぼちぼち。悪感^{カン}の方は十割の確率で何か
起きるってさ」

『そっか……』

動くとしたらそろそろか。もしかしたらもう少し遅くかもしれない。動いた時のシミュレーションは出来てるし、それに合わせてバリアジャケットも変更した。

「あとは、現場判断か」

『アリシアとの連携も大丈夫だよな？』

「そっちも大丈夫。朝のうちに打ち合わせしておいた」

それにしても、と思う。

「暇だなあ」

『そうだねえ。しりとりでもする？』

「よっしゃ。何か縛りつけようぜ。えーと、じゃあ神話上の武器な」

「オツケー。じゃあ、私からね。えーと……天沼矛^{あめのぬほこ}」

いきなりマニアックなと思いつつ、少し悩む。

「子狐」

『浩樹のはマニアックってレベルじゃないよね？ まあ、いいや。』

えーと、祢々切り丸』

「むう。実存だが……まあ、ありが。る……る？ 日本神話でるか

ら始まる武器なんて無いぞ」

『別に日本神話って縛りはないよ？』

「そうだったけ？ じゃあ、ルーの槍」

『あるけど！ 確かにあるけど、何かずるい！ うっ……リットウ』
「お前はさつきから、マニアックすぎるわ！ バビロニアだったか、確か！？ えーと、ウだな。ヴァジュランダ」

『大人しくヴァジュラって言えばいいのに。浩樹もよっぽどだよ。えっと、ダ……ダグダの棍棒』

「またか。んじゃ、お望み通りヴァジュラ」

『ラ……雷上動ライウツウドウ。そろそろ飽きたね』

「確かに。内容がマニアック過ぎるからな。決着つくか怪しいし。ウ……烏号ウゴウ」

『中国の黄帝の弓だっけ？ むせび泣きって意味の。何でそんなの知ってるのさ。しかも、またウだし。牛頭の槌矛』

「それってどうなんだろうな』ごす』とも読むだろ？」

『さあ？』

溜息をつきつつ、時計を見た。既に一日が終わり、二日になっている。

「日が明けた。今日はもう動かないのか？」

『どうする？ 待つ？』

「うーん……。アリシア」

『ほえ？ 何？』

「もう寝ていいぞ。俺も帰る」

『はい。お休み、浩樹』

「ああ、お休み」

通信を切り、俺も立ち上がった。のびをしていると、サーチャーに反応。誰かが転送してきたらしい。

『術式的に管理局か……。アルハ、予定変更。こいつらに尾行く』
『了解』

「さて」

脚部を魔力強化。そして貯水タンクを蹴って一気に宙に舞い、屋上から地面に向かって真つすぐ落ちて行く。

暫く落下をしながら、風を切る感触を楽しみ、飛行魔法を発動して先程の反応の方に向かって飛んだ。

S i d e o u t

S i d e : ヴィータ

12月02日 午前02時35分

路地で今し方、自分の手で倒した管理局員を見下ろす。

「雑魚いな。こんなんじゃ、大した足しにもならないだろうけど」

はやての事を考えれば、そんな大した足しにならなくても、少しでも集まれば闇の書の完成に近づく。

シグナムに言われた事を思い出し、一步前に出て闇の書を宙に投げた。文字が書かれていないページを開いて、闇の書が制止する。

「お前らの魔力、闇の書の餌だ」

一際まばゆい閃光を放ち、闇の書が局員たちから魔力を吸収する。吸収が終わると、闇の書が戻ってきた。それを持ち家に帰ろうとして、後ろから声をかけられた。

「なーに、やってんの?」

慌てて振り返る。気配はなかった。それだけじゃ無く、魔力反応も然り。それなのに、何時の間にかそこに現れたそいつは、両の手をポケットに入れて、フードを被り、街灯の光を背にして立っていた。顔は見えずらいが、声的に男。身長からして、はやてと同じ位だろうか。

「だから、なにやってたんだって?」

「……うるせー。関係ねーだろ」

「本当にそう思ってるなら、お前は相当残念な子だな」

「何だと、てめえ!!」

アイゼンを突きつける。が、男は距離があるからか意に返さず、先程までと同じノリで言葉を続けた。

「いいか? 此処にいて。武器を持っていて、足元に大の大人が二人転がっていて、いかにもまずそうな相手に、普通話しかけるか? そもそも、こんな時間にお前のような子供が外を出歩いている事自体が間違えている」

「誰が子供だ!」

「此処までの会話で俺がお前以外の少年少女が出て来たか、ゴスロリ鉄槌の幼児体型?」

「こ、此処までむかつくのは、初めてだ……」

「おお! つまり、お前の初めての人間になった訳だな? 嬉しくもなんとまあねえが」

ブチッと、何か切れる音がした。もう絶対にこいつだけは許さないという考えが、頭の中に溢れて行く。

た。

「答えてくれないか？なんで、魔力の蒐集をするんだ？」

「関係ねえだろ」

「不思議な事を言うな。主の命令なら、素直に命令だって言えばいいだろ？」

「……」

違う。はやては、あたし達にそんな事を絶対に命令しない。

「命令じゃないなら、もしかして自分達の意志で蒐集をしているのか？だったら、尚更なんでだ？」

「……黙れ」

「黙らん。その反応なら凶星みたいだな。なら、こう言ってやろう。集めても無駄だぞ」

「何言ってる！！」

「事実だ」

何を！一体何を！

「お前に、闇の書の、あたし達の何が分かるってんだ！！」

「少なくとも、プログラムに関しては、お前達より詳しい自信ぞ。

だからこそ、こう言おう。集めても無駄だ。それより、俺を闇の書の主に会わせる。救ってやれる。……いや、救ってみせる。だから「黙れ！」

耳障りだ。何も知らないくせに、知った口を聞く、この男の言葉が耳障りだ。

「いいから聞け！鉄槌の！！」

「黙れって言ってるんだ!!」
「それしか言えねえのか!!」

近づき、アイゼンを振り下ろす。それを防いだのと逆の腕の拳を、戻したアイゼンで防ぐ。でも、そのまま殴り飛ばされ、今度は男の方から距離を詰めて来た。放たれた蹴りを空を飛ぶ事で避け、それを追ってきた男と、空中戦が始まる。

Side out

Side : 浩樹

同日 午前02時45分

「ダメか。ちっ」

「まあ、いきなり現れて、いきなり信じるも無理な話でしょ」

「……そうだな。とりあえず、ゴスロリ鉄槌には悪いが、少し静かになってもらって、話を聞かせよう」

「出来そう?」

「難しいかもな。思ったより出来る。手加減する余裕がねえ」

振られた鉄槌を避けつつ、反撃の拳。それは防がれ一度距離が開き、再び距離を詰めてのヒット&アウェイによる殴り合いが続く。基本的に初撃必倒が出来ない時は手数で攻めるタイプの俺にとっては、かなりやり辛い。というのが本音だ。とはいえ、相手の武器も一撃必倒型の武器。無理矢理攻めた結果、カウンターで、というのも十分あり得る。だからこそ攻め切れず、だからこそ攻め切られ

ないように速度でのかく乱をする。

「ちょこまかとっ」

「いいから話を聞け、ゴスロリ鉄槌！」

「誰がゴスロリ鉄槌だ！ このススワタリ！！」

「だ、誰がススワタリだ！ その呼び方は俺じゃなくて、別の奴にしるー！！」

オフエンスアーマー

室素装甲を纏った拳とゴスロリ鉄槌の持つ鉄槌が再度ぶつかり、

衝撃で距離が開いた。大声で説得したり、罵りあいながらの空中機動戦。お互いに息が切れていた。

「いい加減、諦めて、話を、聞けよ。ゴスロリ鉄槌」

「だ、誰がゴスロリ鉄槌だ、てめえ。私はヴィータだ」

「ヴィータ、ヴィータな。俺は高坂浩樹だ」

「誰がてめえの名前なんて覚えるか！！」

「上等だゴスロリ鉄槌！お前が俺の名前呼んで話を聞くまで、ゴスロリ鉄槌って言い続けるからな！！」

「何だとてめえ！！」

「文句あつか！！」

距離を詰めてお互いに再び一撃。距離を開ける。

(このままじゃじり貧……。なら)

思考を切り替えた。戦闘の方法を武器や砲撃を多用する物に切り替える。

気配を隠す為にした、魔力のリミッターを解除。及びプログラム『マテリアル・ハイ』の解禁。

「行くぞ」

Side out

Side: ヴィータ

同日 午前02時48分

『ヴィータ』

『シグナム……』

『どうした。何があった』

『どうもこうも』

ねえという言葉は、男の雰囲気で打ち切られた。魔力の上昇と雰囲気の変化。そして、男の足元に魔法陣と、男の周囲に魔力球が生まれる。

そして、私が動き出すより速く、男が動いた。

「穿て！ レイズ……」

左の肩辺りまで上げられた右手が

「シユート……」

振られる。直後、魔力球一つ一つから、砲撃が飛んで来た。一撃目を上に、二撃目を左に避けて、追撃の砲撃もどんどん避けて行く。

『おい、ヴィータ』

『わりい、シグナム。まだ帰れそうにねえ』

『今、結界の中か？なら迎えに行く』

『ああ』

その受け答えが隙になった。あたしの進行方向を遮る様に一本の砲撃が前を通り足が止まり、止まったあたしに向かって砲撃が迫る。それをプロテクションで防ぐが、そのせいで完全に足が止まり、二撃三撃とプロテクションに砲撃が当たり、じりじりと削られる。

「くっ、アイゼン！！」

『Explosion』

アイゼンからカートリッジが吐き出される。その魔力をそのままプロテクションの維持に回す。

「これで！」

「終わりだ」

上から声が聞こえた。見上げると拳を振り上げる男の姿。

「リボルバー……」

「なっ！？」

「シュート！！」

慌てて二枚目のプロテクトを張るが間に合わず、そのプロテクションを粉碎して拳があたしに叩きつけられた。

そのまま拳が振り切られ、あたしの体は下にあったビルの天井などを粉碎しながら、ビルの中を突き進み、暫くして止まった。見上げると、先程と同じように、複数の魔力球が男を囲むようにしている。何も無い筈なのに、砲身を向けられている気分になった。

「レイズシュート、エクスキューション……!?!」

男がその場を離れ、入れ替わる様にして見覚えのある剣士が其処に立った。

「大丈夫か！ヴィータ!!」

「ああ、何とか」

「そうか」

そう答え、シグナムは男に向かって切りかかった。

S i d e o u t

第五十六話 A・S第二話 く都とのしりとりと鉄槌との喧嘩く（後書き）

個人的にジブリで一番好きなのは『海が聞こえる』。キャラでは『スワタリ』又は『まっくろくろすけ』が好きです。ごまだれです。

凱龍輝様、感想、ありがとうございました。

さて、ジブリの話ですね。『海が聞こえる』はテレビでのみ放送やスタッフさん達が理由なのか、認知度が異常に低く、ジブリで海が聞こえるが一番好きと言って、ああ、あれねと言って貰えた事が一度もないです。

あと、ヴィータはきつと、最近『千と千尋の神隠し』を見たんだと思います。だから、フードまで被って全身黒の浩樹をスワタリって呼んだのかと。

あと、前半のしりとりは作者の趣味ですのであしからず。

と言ったところで今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

では次回。ごまだれでした。

P S ・明日、バレンタインですね。……チョコでも作るか

第五十七話 A・S第三話 〈意図せず立った、色々なフリグ〉(前書き)

第三話なのに、まだアニメ第一話なんだぜ？

第五十七話 A・S第三話 〈意図せず立った、色々なフラグ〉

Side：アリシア

12月2日 午前10時00分

ガンツと、大きな音が室内に響いた。音源を見ると、拳をテーブルに叩きつけている浩樹。らしくないが、物に当たっているようだった。

「仮面の野郎……。次に会った時は……」

ぼそりと呟く。

「とてもじゃないけど、管理局員とは思えない発言だね」
「まったくぞな」

まあ、どうして浩樹がこんなに怒っているのかは、私は浩樹本人ではなく、浩樹に一番近いアルハから聞いているのだけだ。

「らしくないなあ」

『そりゃそうだよ。ようやくまともに説得できそうな人が来た直後にあれだもん。おまけにバインドも結界破壊も足元にも及ばなくて、ブライドずたずたにされたんじゃないかな？』

「浩樹がそういう事、気にするタイプとは思えないけど」
『負けず嫌いだからねえ。あそこまで一方的じゃ』

らしくなく怒ってもしようがないよと言われ、戦闘記録を見た私もまあ、確かにと思ってしまうた。

〈回想（Side：浩樹）〉

同日 午前02時55分

一難去つて、また一難……。いや、最初の難は去つて無いから、一難増えて、二難か。話がしたいだけなんだが、まあ、和平の使者にしてはやつてる事が荒っぽいか。

「さて、貴女は話を聞いてくれるか？」

「黙れ。仲間をあそこまで傷つけておいて、話がしたいだと」

「うぐ……。それ言われたら弱いぜ。でも、血の気が多いあのゴスロリ鉄槌に話を聞かせるには、あそこまでしないと駄目だと思わない？」

「……確かに。そうかもしれないな」

「てめえ、シグナム！！どっちの味方だ！！」

下からゴスロリ鉄槌の大声が聞こえた。視線を少しだけそちらに向け、直ぐに目の前の、シグナムと呼ばれた剣士に向けた。

そして、どちらからともなくシグナムは剣を、俺は作りだした斧ハル槍バドを構えた。

「話、聞いてくれないの？」

「貴様が話していた事は、ヴィータの念話を通して私と他の守護騎士達も聞いていた」

「なら」

「信用できると思うか？少なくとも、お前より闇の書に詳しい」

「思い込みだ。闇の書と、正式の名称で呼んでいない時点で、お前

達守護騎士の言葉は、俺にとって信用に値しない。悪いが、闇の書の改変時にお前らも改変されたと考えた方が、説得力があると思わないか？」

俺の言葉に、剣士の動きが止まる。やはり、最初のゴスロリ鉄槌と違って、言葉は通じるらしい。

「何か今、失礼なこと考えなかったか、てめえ!!」

「言われてるぞ、シグナム」

「ふざけるな。貴様の方だろう」

「お前ら、両方だ!!」

「……まったく」

「納得いかねえ!!お前ら、本当に初対面か!? 打ち合わせでもしてんじゃねえだろうな!!」

ああ、もう。

「そんなこと出来るなら、説得するわ!!」

「逆ギレ!?!」

「逆ギレだど!?! てめえと一緒にするな!!」

「どういう意味だてめえ!!」

ガルルとお互いの姿が見えないにも拘らず、いがみ合う俺とゴスロリ鉄槌をみて、シグナムが溜息をついた。手に持っていたデバイスらしき剣は鞘に仕舞われ、変わりに残念な子を見る目で俺の方を見ている。

「どうした?」

「いや。貴様は私達を説得に来たんじゃないのか?」

「貴様じゃなくて、高坂浩樹だ。後、説得に来たのは確かだな」

「なら高坂。貴様は何故態々ヴィータを怒らせる」

「それは」

「それは？」

ハルバード
斧槍を消して、腕を組む。そして少し考えた。

「面白いから」

「上等だあ！！今度こそ、アイゼンの頑固な染みにしてやっから、其処動くなあ！！」

そして、そんなゴスロリ鉄槌の言葉に軽口を返そうとして、悪寒がした。上を向き、迫る足に対して、手を交差する事で防ぐ。

しかしそのまま蹴り飛ばされ、どこかのビルの屋上に叩きつけられる前に体勢を立て直し、何とかビルの屋上に降り立つ。しかし、その後俺が動き始めるより早く、バインドによって締め上げられた。

「ちいつ！？」

何とかバインドを解こうとするが、あの短時間で行われた割に、魔力量が思いの外多いバインドは堅く、おまけにプログラムまでなかなか凝っていた。

魔力量の多さかプログラムだけなら、直ぐにでもと思うも、現実には両方なのだ。ハッキングをしかけつつ、力付くで引き千切るうとしながら、俺は蹴った本人を見上げた。

仮面をつけているから性別は分からない。だが、体格的に男だろうか。

少なくとも分かるのは、あいつは守護騎士達の仲間ではない事だ。

「何のつもりだ！！何者だ！！」

「……」

男は答えない。ここでようやく、ハッキングが六割完了し、そのまま力付くで引き千切った。

しかし、時既に遅く、捕縛結界が完全に破壊、結界としての機能が停止する。

「なっ!？」

(冗談だろ!？展開速度重視でいくらかは脆くなってるとはいえ、こんな短時間で)

自問自答しているそんな俺を無視して、二つの閃光が飛び去っていった。

「あ、待」

待てと最後まで言う前に、男が再び蹴りかかってきた。それを交代する事で避けて、五メートル程の距離を開けて睨み合う。

「邪魔するなよ。てめえ」

「今は動くな」

敵意を剥き出しにして、脅すようにそう言った俺の言葉など完全に無視をして、男がそう言った。訳が分からず内心で首を傾げていると、男の言葉がさらに続いた。

「時が来れば分かる。そして終わりだ」

「……訳わかんねえが、これだけは言える」

右手を引き、突撃の準備。そして、右手の掌には、新型のレイズシュートの魔力球を固定させる。

「俺は闇の書を救いたい。人間によって壊された、あの魔導書を。だから」

第三者の手によって、人生を狂わされたのは、自分も同じだから。同じ境遇の闇の書を、夜天の魔導書を救いたい。だから。

地を蹴り、数歩で距離を詰めて飛び掛かりながら、残りの言葉を叫んだ。

「今！ここで！動かないで、何時動けつてんだよ、てめえは！！」

「……」

「レイズシュート、ゼ！？」

右腕が新たなバインドによって固定された。続いて、足や胴も同じく固定される。

「くっ」

「子どもが。貴様が動いた所で高が知れている」

「なんだと！！」

「動くな。そう伝えたぞ。これ以上、私達の邪魔をするなら、容赦はしない」

そう言って、男は姿を消した。

〈回想終了（Side：アリシア）〉

同日 午前10時05分

「あー、もう！あの仮面野郎め！！……いや、違うか？」

叫んでいたと思ったら、唐突に腕を組み、何かを考え始めた。最近思っただけで、浩樹つてもしかして情緒不安定なのかな？一回、病院で見て貰った方がいいんじゃない……。

「アリシア」

「っ！？何！？」

「夕食。一品抜き」

「何故！？」

「たった今、失礼なこと考えただろう。それが嫌なら、少し手伝え」
「うう、夕飯抜きなんて言わなくても、手伝うのに」

ぼやきながら、浩樹の近くに腰を下ろす。

「それで？何をお手伝いすればいいの？」

「戦闘中のデータを送る。あの野郎の分析を頼む。俺はバインドと結界を機能停止させられた時のプログラムを調べる」

「うん、了解」

浩樹から送られてきたデータを元に、解析を始める。同じように浩樹も解析を始めた。

S i d e o u t

S i d e : ヴィータ

同日 同時刻

「どうした、ヴィータ」

「何でもねえ」

「大方。高坂の事でも考えていたんだろう」

「誰があんなススワタリの事を考えるか!!」

凶星をつかれて、慌ててシグナムに噛みつく。そんなあたしの様子を見て、シグナムが笑った。

「なんや？何の話？」

「はやて！？何時の間に!？」

「それでヴィータ。シグナム。何の話や？」

「な、何でも無いよ、はやて」

「ヴィータがある男に興味があるらしく」

「てめえは黙ってる、シグナム!!」

はやてを見ると、はやてがニヤニヤと笑っていた。

「なんや？ヴィータもとうとう恋したんか？」

「恋!？ち、違っよ、はやて!!そんなんじゃない!!」

そう。断じてそんなんじゃない。断じてそんなんじゃないんだけど、はやてはあたしのそんな反応を照れ隠しと受け取った様だった。

「それで？相手の名前はなんなん？」

「高坂浩樹と名乗っていました」

何で今日に限って、こんなにおしゃべりなんだよシグナム、と思しながら、この後問い詰められた時にどんなふうに戻すか考える。しかし、何故かいつまで経っても、追及が来ず、不思議になっ

やての方を見ると、驚いた顔をしていた。

「はやて？どうしたの？」

「……シグナム。ヴィータ。その浩樹君ってどんな子やった？」

「はい？」

「ええから。どんな子やったん？」

「どうと言われましても……」

「何か黒い服着てるって位しか。フード被ってたから、よく顔見えなかったし」

すると、はやてが携帯を取り出した。その中の一枚を此方に向ける。

「この子やなかった？」

「え？うーん……」

「この少年ですね」

「え？シグナム、顔見たのか」

「ああ、まあな」

「ほんま！？ほんまなんやね、シグナム！？」

「は、はい」

珍しい事に、シグナムが若干はやてから引いていた。はやては身を乗り出し過ぎて、車椅子から落ちそうになり、慌ててシグナムに支えられた。

椅子に戻されると、携帯を手にはやては普段なら絶対出さないであろう速度を車椅子で発揮し、部屋に戻っていった。

「……シグナム。いつの間に顔を見たんだ？」

「あの仮面の男に高坂が蹴り飛ばされて、バインドで拘束された時だ。衝撃でフードが外れてな」

なるほど、と納得した。生憎とその時はまだ、ビルの中だったから自分は見れなかったらしい。
しかし、しかしだ。

「あいつがはやての言ってた『浩樹君』だったんだな」

「闇の書が覚醒する一カ月ほど前から音信不通だったと聞いていたが」

「ああ、もう。わけわかんねえ」

八つ当たりのように強めに頭を搔いていると、はやてが戻ってきた。

「シグナム！ ヴィータ！」

「は、はい！」

「今度浩樹君と会ったら、捕獲して家まで持ってくる事！ ええな！？」

「りよ、了解！！」

Side out

Side：浩樹

同日 10時30分

何か悪寒を感じ、肩が跳ねた。その衝撃で、解析を行っていて初めてのミスをした。

「どうしたの浩樹？」

「いや。会う予定の無かった幼馴染達に俺の存在がばれたような気がした」

「随分と具体的だね」

「日の出てる内は外歩けないな」

元々そんなつもり無かったけど。

「でも大変だね。きつと、浩樹が会わない間にキャラ崩壊した子と
かいるよきつと」

「小学三年にして、人生末期じゃねえか」

「紫色の髪の子とか読書好きな子とか家にたくさん猫がいる子とか」
「それらの特徴に合致する心当たりが一人いるんだが」

「まあ、浩樹がいない時にデイビットがかな？とか言う子から聞いた
たつて言ってたけど」

「個人的に佳奈がここに遊びに来ている事自体、ばれる原因じゃね
えかとも思うが、会って半年くらいしか経っていないだろう佳奈に、
キャラ崩壊してるって言われてるすずかかって一体……」

「どうやら住む場所を考えないといけないらしいと思いつつ、俺は
溜息をつけて作業に戻った。」

第五十七話 A・S第三話 〈意図せず立った、色々なフラグ〉（後書き）

この調子だと、A・S編に三十話位使って、A・S終了まで一年くらいかかりそうですね。ごまだれです。

空牙刹那樣、凱龍輝様、Gold・Child様、感想、ありがとうございます。

結局バレンティン編は作者暴走の結果、収集がつかなくなったのでお倉入りになりました。いつもの事です。

最近筆が遅いですね。これも、深夜アニメと特撮とヴァン・ロードが面白いからですね。つい、そっちに集中してしまつて筆がゲフンゲフン。

ブシードカードゲームライブ2011に行きたいなあと思いつつ、今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

では次回、ごまだれでした。

第五十八話 A・S第四話 くのちした働と投げやりな変身 (前書き)

17日ぶりですね。

第五十八話 A・S第四話 〱的中した勸と投げやりな変身〱

Side: ヴィータ

12月2日 午後07時45分

「それで、どうするつもりだ？」

「結界でも張れば、あいつなら反応すると思うけど」

ザフィーラにそう答える。多分ではあるが、今朝のススワタリなら、此方の結界に反応して、無理矢理にでも侵入してくる。

「でも、それだと、もう一つの魔力反応の方も気になる」

この間から出てくる妙に馬鹿デカイ魔力反応。蒐集出来れば、一気に二十ページは埋まりそうなそれも、もしかしたら反応を見せるかもしれない。

はやての事。それに、守護騎士内で一応あいつの話も聞いてみるという結論に達したからには、一旦魔力蒐集は休み。

「別れて探そう。闇の書は預ける」

「オツケー、ザフィーラ」

ザフィーラが飛び去った。その姿を見送ってから、アイゼンを一振り。そして、結界を発動する。

「封鎖領域、展開」

短くそう呟き、そして私を中心に結界が発動。海鳴市全体を覆っ

た。そして、その中にある大きな魔力反応が二つ。片方はこの間から出てくる妙に馬鹿デカイ物で、もう一つは恐らくあのススワタリ物だろう。

山間部とビル街、つまり今居る辺りだ。さてどちらがススワタリ物だろうか考え、溜息をついた。

「こつち、だな」

そう呟き、あたしは迷わずビル街の方に向かった。

Side out

Side：浩樹

同日 午後07時30分

アリシアに仮面の男、自分が結界やバインドについての解析をそれぞれ終えて、一息入れた頃、何の脈絡も無く、地下にある何故存在しているのかと思う勝手口（デイビット曰く、俺が入ってきた井戸から通じる扉が玄関らしい）のドアが開いた。

俺とアリシア、それにデイビットが音につられそちらを見ると、聖祥大付属の制服に身を包んだ、見覚えのある少女が一人。

「昨日の今日……というより今朝の事なんだが、やけに情報が早いな」

「デイビットの毒牙にかけないようにって一人で来る選択したけど、実際に居るとやっぱり一人で来て良かったと思うよ。来なかったら今頃大変な事になってたよ？」

「ああ、非常に同感だ」

少女、佳奈の言葉にそう答えながら、席を立ち、佳奈を席に案内しつつ、自分は茶を煎れる。

それを佳奈と自分の前に置いた湯呑に注ぎつつ、テーブルの中央に茶請けにと持ってきた煎餅などが入った器を置いて、対面に座る。

「聞きたい事は多々あるんだが……まあ、一応これだけは先に聞いておく。此処に来る前から、俺が居る可能性を考えてたのか？」

「うん。ある人達からの情報で、高坂君を見かけたって」

「なるほど……。ある人達って？」

「八神はやてさんのご家族の方だけだ」

「……何？」

佳奈の言葉に、俺は首を傾げた。

（あいつに家族がいるなんて聞いた事も無いし、見た事も無いんだが……）

少なくとも俺が居なくなる直前まで。つまり既に半年以上、前の話ではあるのだが。はやてからもはやての主治医である石田先生（俺が受けていた健康診断の担当の人でもあった）からも、はやてに家族が居るなんて話は聞いた事が無い。

はやてからは金銭上の管理をしていてくれるという『足長おじさん』の話は聞いた事はあるが、もしかしてその人が一緒に住み始めたのかとも、一瞬思ったが、大前提としての問題があった、

「なあ、佳奈」

「何？」

「その情報、何時の？」

「へ？ 何時のつて、今日のお昼休みに月村さんの携帯に八神さんから」
「……………」

情報を整理する。

此方へ来たのが二日前。そしてその間。俺が出掛けて人と接したり、俺の姿を見かけるなりする暇があったのは、あの守護騎士達の動きを待っている時から、此処に帰って来るまでの間だけだ。勿論、早朝訓練もあるが、此方は誰かに姿を見られたりした記憶は無い。つまり、俺がアリシアとデイビットを除いて、姿を、そして顔を見られたのは二人だけ。守護騎士の剣士、シグナムとあの仮面の男だ。ゴスロリ鉄槌もありえないけど、彼女前でフードは外さなかつたから、仮に見えていたとしても、其処まではつきりとは見えなかつた筈だし。

『これは…………面倒な事態、なのかもな』

『かなりの高確率で八神はやてが巻き込まれてる可能性は否めないね』

『私的にはその女とか八神はやての事が聞きたいんだけど？』

『落ちて着けアリシア。後で説明するから』

『何なら私が面白おかしく』

『いい子だから黙ろうぜアルハ。そうじゃないと、空き缶の代わりにお前にしないとイケなくなりそうだ』

『オーライ。いい子にしてるから昨日みたいに全力で投げたりしないでね？』

分かつてるよと答えつつ、佳奈に視線を戻すと訝しげな眼で見られた。いきなり話さなくなったから、しょうがないと言えはしょうがないか。

「悪いな。考え事をしていた」
「それはいいですけど……。あの」
「帰るつもりは無い。此処にいるのだって、事情があつての事だしな。それが終われば、直ぐ帰る」
「でも、少し位」
「佳奈」

少しだけきつい視線を送りつつ彼女の名前を呼ぶと、佳奈は肩を跳ねさせた。

そして少し俯き、「分かりました」と呟いた。

「なら、もう一つ聞いてもいいですか？」
「ああ」

「えっと。其処の子、テストロッサさんに似てるというか、瓜二つな子は誰ですか？」

「ノーコメント」

「答える気ゼロ!？」

「聞いてもいいとは言ったが、答えるとは言つて無いぞ。てか、フエイトの事知ってるのか？」

「高町さんとビデオメールのやり取りしてる子ですよ?」

その言葉には、思わず「へえ」と感心してしまった。

ビデオメールを送って来るくらいだ。楽しく、と言ったら一応囚われの身なのだし、語弊があるかもしれないが、それでも母親含めそれなりによろしくやっているらしい。

そういえば、昨日、ミイユさんが誰から聞いたのか、フエイトとプレシアさんの裁判がもうすぐ終わると言っていた気がする。

(誰から聞いたんだ? てか、何で俺が知り合いつて知ってたんだろ?)

そこら辺の質問は、ミイユさんにしては珍しくぼかされてしまったから、分からなかったが、どちらにしても、あの母娘おやちがそれなりにやっているなら何よりだ。

そんな事を思っていると、直後、海鳴市全体を広域結界が覆った。その効果だろう。アリシアとデイビット、佳奈の三人が姿を消した。

「正確には、俺があの人三人の前から、いきなり姿を消したんだけどな。アルハ。アリシアと連絡は？」

『少し難しいかも。ベルカの封鎖領域は外から中への侵入はともかく、中から外への侵出は難しい事は知ってるでしょ？』

「ああ。それは隊の隊長陣から散々叩きこまれてるからな。俺の捕縛結界だって、そっちよりだし。さて」

考えるべきは結界が張られた理由だ。術式からして、十中八九世界の発動主は守護騎士の誰かだが、結界を張った理由が読めない。

勿論魔力の蒐集にしたって、誰かが転移してきた様子も無いし、仮に俺が気がつかなかっただけでも、並みの武装局員なら接敵即殺でそんな事をする必要無かっただろうし。

範囲内の指定した条件を満たす対象者を効率的に舞台に引き摺り上げるのが、ベルカの封鎖領域だ。言ってしまうえば、その条件を満たす者は何であろうと舞台に引き摺りあげられる。舞台に引き摺り上げられたという事は、俺はその条件を満たしているのだろう。

結界を張る手間と、俺を舞台に引き摺り上げる条件。そして、あの守護騎士達のやっていた事から察するに、恐らく……。

「一定量以上の魔力所持者を条件にしたのか？ 何でまた」

こんな面倒な事をと考え、血の気が引いた。今俺が考えた条件が

正しいとしたら、まず間違いなく彼女も巻き込まれる。

そして、どれほど彼女が強くなっているかは分からないが、恐らく魔導師^{かのじよ}じゃ騎士には勝てない。相性もそうだが、戦闘経験や場慣れ等も、勝敗には関わって来る。正直アルハザードに滞在中、アルハからなのはがフェイトとの一騎打ちで勝利したと聞いて、耳を疑った位だし。

「チィ！相手が誰だろうと、なのはに手を出す事だけは許さねえぞ」

苛立ち交じりにそう呟いて、俺はデイビットの家の勝手口を粉砕する勢いで開け放つと、其処から夜空に舞った。

S i d e o u t

S i d e : なのは

同日 午後07時45分

浩樹君を見かけたという話を聞いてから、居ても立っても居られなくなつたんだけど、流石に学校と塾があつたからそれをサボる訳にもいかず、結局学校と塾が終わって、食事が始まる前の数時間を浩樹君の搜索に当てる事になった。

それで探していたんだけど……。

『結界……？』

『明け方に張られた物とは別の物ですね』

『……そうなの？明け方に張られた事すら初耳なんだけど、レイジングハート』

『余り長い時間ではなかったの。それよりマスター。魔導師が一人、此方へ高速接近中です』

え？と戸惑う暇なく、人の気配がして、上を向いた。其処には赤い服に身を包み、ハンマーを持った、赤毛の女の子。

鋭い眼光が私を射抜く。

「あの」

「……チツ、こつちじゃなかったのか。なら、今こつちに向かっている魔力反応の方が。何であんな辺鄙な場所に住んでんだよ、あのスワタリは」

私の言葉は無視して、女の子はそう言うと、別の場所に向かって飛んで行った。

……えーと。

「ええ……」

『マスター、追わなくてもよいのですが？』

「ほえ？」

『恐らくではありますが、彼女の言っていたスワタリが全身黒い服装という外見から来ている呼び名なら』

「レイジングハート、セーット、アツプ!!」

『……Stand by Ready・Set up』

レイジングハートを起動。バリアジャケットに身を包み、空に舞う。

結構先を飛ぶ、赤い閃光を追って、私は速度を上げた。

第五十八話 A・S第四話 〽的中した勸と投げやりな変身〽（後書き）

更新する必要もないのに、放置記録更新。申し訳ないです。ごまだれです。

凱龍輝様、空牙刹那様。感想、ありがとうございました。

体当たり連載もあって、内容があっち行ったりこっち行ったりで全く纏まらず、久しぶりの掲載なのに進展は殆ど無し。これは困った。そして、この後もどうするかも纏まってないという状態です。殆ど独自といいますが、A・Sとは違う流れなので、無印のようにアニメ本編とにらめっこしながらという訳にもいきませんので、すいませんが、気長に待っていただけると嬉しいですよ。

という訳で、今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

また次回。以上、ごまだれでした。

第五十九話 A・S第五話 くそれぞれの戦闘く（前書き）

前書き劇場第一回

浩樹「そついえば、この前、調べてたら気がついたんだけどさ」

アリシア「何？」

浩樹「プレシアの魔導炉の暴走があつたのつて、新暦の0039だろ？」

アリシア「うん……。そうだね。私が覚えてる限り」

浩樹「つてことは、アリシアつて俺より年上、しかも一回りも二回りも年上つてことになるよな。……。アリシアおばさん？」

アリシア「いくら浩樹でも殴るよ？」

第五十九話 A・S第五話 〈それぞれの戦闘〉

Side：シグナム

12月02日 午後07時45分

「何者だ。貴様」

レヴァンティンを起動。その切っ先を目の前に立つ仮面の男に向けた。男はそれでも、高坂と同じように雰囲気一つ変える事が無い。そして、唐突に架空ディスプレイが現れた。

「何だ？」

「これを見る」

そう言っつて、男が架空ディスプレイに何かを表示した。切っ先は向けたまま、そちらを見ると、ある男のプロフィールが載っていた。そして、そのプロフィールに載っている内容と、証明の為だろう。制服に身を包み、少し不機嫌そうな顔をしている写真は、まごう事無き高坂の物だった。

「どついつ事だ」

「あの子供は管理局員だ。自身が闇の書の主を友人という事を利用して、お前達に甘言を投げ、全員捕まえるつもりだ」
「……」

ヴィータが初めて高坂に会った時に言っていた言葉を思い出す。武装局員から魔力を蒐集したヴィータが関係無いだろと言ったのに対し、そう思っているならと返した。それはつまり、管理局と関係

がある、という事だろうか。

状況で判断するには材料が足りない。この男が高坂か。どちらを信じるべきか。しかし、今朝の高坂と男の行動を考えると、信じるに値するは後者な気もする

そう思っていると、結界が張られた。恐らくヴィータが高坂をおびき寄せる為に張ったのだろう。

「……」

少し悩み、私は移動を開始した。高坂の目的が私達守護騎士や、主はやてならば、ヴィータに向かって飛んでいる魔力反応の方が高坂だろう。

別の魔力反応に向かっていたヴィータも、そちらに向かって飛び始め、その魔力反応もまた、ヴィータを追って飛び始めた。

Side out

Side：浩樹

同日 午後07時50分

「ん？ っと」

飛行を止め、其処に止まる。少し前方から今朝見かけたゴスロリ鉄槌。そして、その更に後ろからは更に見覚えどころか、個人的に会いたい^{ついたらね}が会いたくない少女の姿。

（何で尾行^{ついたらね}されてるんだよ！！）

逃げだしてやろうかとも思ったが、それだと此方に来ているゴスロリ鉄槌に悪いなあとも思うし、しょうがないから諦めっ!?

「っ!？」

いきなり振り下ろされた刀型のデバイスを避ける。そのまま数メートルの距離を置き、デバイスを振り下ろした方を、シグナムを睨む。

そして、ゴスロリ鉄槌がシグナムに合流した。其処から数メートルの距離を置き、なのはも止まる。

「シグナム？　どうかしたのか？」

そう尋ねたのはゴスロリ鉄槌。しかし、シグナムは答えず、俺にレヴァンティンを向けたまま、尋ねて来た。

「高坂。貴様、管理局員なのか？」

「……ああ」

何で知ってるのさ!？何時、誰が、何で教えただよ!？頭の中でぐるぐると考えながら、冷静を装ってそう答えた。

そして、シグナムの言葉を肯定した俺に、シグナムからは先程までの、ヴィータからは鋭い視線が向けられた。その視線を受け止めながら、やはり頭は休む事無く働かせる。

誰が話したのか。そして、この後の会話の展開予測。

(まあ、でも。多分……)

「ヴィータ。蒐集を再開するぞ。お前はあっちの魔導師を開いてしろ。私は高坂の相手をする」

「オツケー、シグナム」

（ちっ。最悪じゃねえか）

どうやら既に問答をするつもりも無いらしい。

最初から俺が管理局員だという事を言っておけば良かったのか。そう考え、否を出す。そんな事を言ったら、ゴスロリ鉄槌の事だ。話を聞く事もしないだろう。

だからこそ隠していた事実なのだが……。本当に誰が言ったんだか。

（俺が管理局員だと知る事が出来る。且、俺が管理局員だとばらして、徳のある人物か）

シグナムに聞いて答えてくれればそれはそれで手っ取り早いのだが……。いや、何となくの予想はつくけど、中身が分からないんじゃない、分からないのと一緒にだ。

どちらにしろ、シグナムとは本気の戦闘になるだろう。その最中になのはゴスロリ鉄槌の戦闘に無理矢理介入して、なのはを安全圏まで逃がすのは今の俺じゃほぼ不可能だ。

「くそ。考えがまとまらねえ」

頭が無駄に回る事は自負してるけど、それでも現状の打開策は全く浮かんでこなかった。はやてが何かしらの形で巻き込まれている事。シグナムが、そう、よりにもよってそれなりに話が通じそうだった彼女が、完全に敵対という意志をあらわにして、言葉が届かなくなつた事。

異常事態が多過ぎて、頭がついて行かない。
イレギュラー

そして、その間にシグナムが距離を詰め、その背中の方こうでゴスロリ鉄槌となのはの戦闘が始まっていて。完全に思考停止した俺の体が真っ先に行った事は、迫りくる脅威の排除だった。

Side out

Side：ヴィータ

同日 同刻

正直訳が分からねえ。シグナムとはあたしかザフィーラのどつちかがススワタリと会ったら、その会った方と合流する予定だったけど、合流したシグナムは何故かススワタリを管理局員だと言って。あいつはそれを肯定した。

今朝は初めて会った時は淀みなく口が、「……ああ」と短く答えたつきり、重く閉ざされた。こつこつという頭を使う事は苦手だ。だけど。

「ヴィータ。蒐集を再開するぞ。お前はあつちの魔導師を開いてしろ。私は高坂の相手をする」
「オツケー、シグナム」

管理局員というなら、ススワタリはあたしの敵だ。

だからあたしは、シグナムの言葉に答え、あたしを追ってきた白服の魔導師と対峙した。魔導師はあたしを見ず、あたし越しにシグナムかススワタリの方を見ているようだったが、そんな事を気にせず、あたしは鉄球を作りだした。

それを上に投げ、アイゼンで叩いて飛ばす。あたしの魔力光である、赤い光の尾を引きながら、鉄球は真つすぐ魔導師に向かって飛んで行った。

そこでようやく気が付いたが、回避は間に合わないと踏んだのか、

シールドで鉄球を防いだ。その間に距離を詰め、魔力を付加したアイゼンの一撃を、シールドに叩きこむ！

「テートリヒ・シュラーク！！」

アイゼンとシールドが拮抗し、シールドが割れる事は無かったが、そのまま弾き飛ばした。魔導師は、弾き飛ばされながらも魔力球を4つ作りだし、それを此方に向けて飛ばした。

誘導弾だったそれを、避けたり叩き潰したりして、全て処理し、魔導師の方を見ると形状の変わった杖を此方に向けていた。

「なんだかよく分からないけど……」

『デイベイン……』

「邪魔、しないで！！」

『バスター』

桃色の閃光の奔流が私に向かってきた。ギリギリで体を動かしてそれを回避して顔を上げると、魔導師はあたしではなく、シグナムと戦っているスワタリの方に向かおうとしていた。

「アイゼン！！」

『R a k e t e n f o r m』

カートリッジを一発消費して、アイゼンの形状が変わった。更にアイゼンに着いたブースターが着火した。

「ラケーテン！！」

数度その場で回り停止。そのまま魔導師の方に突っ込んだ。あたしに気が付いた魔導師は、足を止めてシールドを張る。アイ

結界への侵入者。その内、男の方が、魔導師の傍に座り肩に手を置き、女の方があたしの一撃を防いでいた。

「仲間か……」

一旦距離を置き、アイゼンを構える。女の方も、デバイスを此方に向け、デバイスから『Scythe Form』と声が聞こえ、魔力刃が生まれ、女の方もデバイスを構えた。

そして、あたしの言葉に答えるかのように、小さく答えた。

「友達だ」

Side out

Side：浩樹

同日 午後08時00分

誰か転送してきたのか？

何度目かになるシグナムのレヴァンティンによる斬撃を斧槍ハルバードで防ぎ、事前に作りだしておいた三つの魔力球のうち、一つから砲撃を撃って、無理矢理距離を作らせる。

そのまま、レイズの砲撃を続けつつ、転送してきたのが誰かを調べる為、魔力反応を調べる。そして、下手したら悪化したかもしれない現状に、内心で吠えた。

（フェイト……。それにユーノにアルフだったか？ ユーノはとも

かく、フェイト達は何で此処に……。まだアースラに居たんなら、下手したら管理局員としてか？)

だとすれば、俺が管理局員とばれている以上、口ではああ言いつつ、逮捕が目的だったとか思われてもおかしくない気もする。

実際はアースラは本局。俺は地上本部所属だし、今は休暇中で全く関係は無いのだが。まあ、言っても無駄なのだろう。

溜息は内心でのみついて、レイズの弾幕を潜り抜けたシグナムが、再びレヴァンティンを振り下ろしてきた。それを、やはり斧槍ハルバートで防ぎつつ、それでも思考は続ける。

(でも、フェイト達なら、間違いなくなのはの味方だ。あの頃からフェイトがどの程度成長してるのかは知らないが、アルフとのペアなら、ヴィータにだって劣らない。

それにユーノは結界や治癒みたいな、補助魔法が得意なのはの盾だ。だから、なのはは大丈夫。気にする必要は、多分無くなった)

ここで、シグナムが今までと違う事をした。レヴァンティンにカートリッジがロードされ、形状が刃から連結刃になる。

「っ」

慌てて距離を置くがそれより早く、レヴァンティンが動き、魔力球は全滅した。そして、シグナムはその場から動かず、連結刃となったレヴァンティンのみが、俺の後を追って伸びてくる。

何とか回避しようと飛びまわり、動きまわるうちに、刃に囲まれた。舌打ちして、その場で足を止め、魔力球を飛ばし、適当な場所で停止させる。そして、刃が迫ると同時に魔法を発動し、魔力球の場所まで転移する。

驚きに染まるシグナムに戦闘が始まってから初めて、此方から突

撃、先程のゴスロリ鉄槌の一撃にならって、という訳ではないが、魔力強化に窒素装甲オフエンスアーマー。更に遠心力も加えた斧槍ハルバードによる一撃を、シグナムに叩きこんだ。

レヴァンティンで防がれたが、そのまま弾き飛ばし。体勢が崩れているシグナムに、容赦なく接近し、斧槍ハルバードを消して、全ての指を曲げた掌底打ちのような手にして、レイズシュートに使う魔力球を一つ、掌に停滞させる。

「レイズシュート……」

バリアブレイクを乗せた掌打しょうだの威力とゼロ距離での射程でなく瞬間の爆發力を求めた魔力砲撃。その二つで相手を倒す、新しく考えたゼロ距離必倒の一撃！！

「ゼロソフトオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

シグナムが張ったシールドを破り、掌打と魔力砲撃、というより魔力爆發の二つの衝撃がシグナムと俺を襲い、シグナムの体が落下した。

しかし、未完成だった事もあり、シグナムの体はビルに突撃する寸前にリカバリーされ、危なげなくビルに着地し、撃った俺は爆破の衝撃も相まって、掌底に使った右腕が痛みと共に、痙攣していた。

（未完成……というより組んだばかりでぶつつけ本番の技は使うもんじゃないな）

痛みに耐えながら、俺は滑空し、シグナムは上昇。左の拳とレヴァンティンが激突した。

第五十九話 A・S第五話 〈それぞれの戦闘〉（後書き）

なんかいつもと戦闘パートが違う気がする。ごまだれです。

空牙刹那様、GoldiChild様、凱龍輝様、感想、ありがとうございました。

凱龍輝様に関しましては、メッセージの返信をせず、申し訳ありません。一応無事です。

さて、今回の戦闘パートなんですが、個人的な感想としましては、『静か』でした。変な事を言っているような気もするのですが、ヴィータが冷静だったり、浩樹が他の事考えてたりするので、なんかそんな感想でした。

前書き劇場ですが、なんとなく思いついたので、続けたいと思います。本編で語られない裏事情が語られたりとかするかも

と言ったところで、今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

では次回。ごまだれでした。

第六十話 A・S第六話 〽再会と最近短いなっ b y作者〽 (前書き)

前書き劇場第二回

浩樹「作者がサブタイ進出!？」

アリシア「浩樹。偉い人は言ったんだよ？」

浩樹「やな予感しかしないのだが」

アリシア「前書き劇場のネタがなければ自分で作ればいいじゃん!」

浩樹「予想通りだよ!! てか、第二回にして早くもネタ切れか!!」

第六十話 A・S第六話 〽再会と最近短いなっ by作者〽

Side: 浩樹

12月02日 午後08時00分

激突した拳と剣が互いに弾かれ、再び距離が開いた。未完成とはいえ、レイズシュート・ゼロソフトはそれなりのダメージは与えられたらしく、距離が開いた今でも、先程までのようにシグナムが果敢に攻めてくる様子は無い。

むしろ、あの一撃で頭が冷えたらしく、怒気や殺気等は収まり、冷静に戦術をたてているらしかった。雰囲気等が抜き身の刃の様に鋭い、戦士のそれ変わった。

(さてと……。これで片手間で戦うのは無理かなあ)

チラリと視線を動かすと、なのはとゴスロリ鉄槌が突っ込んだビルから、最初にゴスロリ鉄槌。それを追うようにして、フェイトらしき影が飛びだしてきた。そして別のビルの陰ではアルフらしき影が、そちらを見てい

「つとー!」

シグナムの一撃を避ける。少し悩み、斧ハルバード槍ではなく手甲をマテリアル・ハイで作り上げる。

振られた刃を今度は手甲で防ぎ、返しの拳。それはスウエーで避けられるが、技術も何もない足の裏で押し出すような蹴りを放つ。その一撃も今度は鞘で防がれるが、そのまま押し飛ばし、その距離を今度は此方から詰め、体を捻りながら、鞭のようにして手甲での

一撃を避けられ、次手の拳は鞘で。そして殴る為ではなく掴む為に伸ばした腕で襟を掴み、背負い投げの要領で投げ、それでもシグナムは投げられながら下から斬ってきた。

「っ!？」

慌てて手を離し、シグナム同様ギリギリを避けて行く。それで距離を置かれた直後、お互いの視界の隅だったのだろう。ゴスロリ鉄槌がアルフのバインドで捕縛されたのが見えた直後、シグナムが動いた。

俺を無視し、真つすぐゴスロリ鉄槌の方へ向い、間髪いれずに俺も追うが、ほんの数瞬の差にも拘らず、シグナムがほとんど俺と距離を離して行った。

結局、追いつく事無く、シグナムはフェイトに斬りかかり、アルフも何時の間にか結界内に入って来ていた、犬耳らしきものを生やした、筋肉質の男に蹴り飛ばされた。

そしてシグナムがアルフのバインドを破壊しようとするのを、移動しながら作った魔力球から、レイズシュートを乱射して、妨害して距離を開けさせる。そのまま飛んで、固定されたままのヴィータの前に立ちほだかる様にして静止した。

眼下の中空ではフェイトVSシグナム。アルフVS青服犬耳の戦闘が繰り広げられていた。

「……………」

何で二対二じゃなく、各々で一対一をやってるんだらうと思う。守護騎士の方はともかく、フェイトとアルフは力量の差が分からないだらうかと思う辺り、正直限界が近いと思う。目の前がチカチカする。魔力的な余裕はまだあるんだけど。

……………うん。眠いんだ。あの仮面の野郎について調べてたら、気が

ついたら夜だったし。今一息ついたら、一気に睡魔が襲ってきた。

「っ!？」

悪寒を感じ慌てて振り返り、回避は諦めシールドを張る。そこにゴスロリ鉄槌のデバイスが振り下ろされた。しかし、拮抗することなくシールドが叩き割られ、デバイスが叩きつけられた。

悩むことなく威力を少しでも軽くするためそのまま弾き飛ばされた。ただ予想より威力があり、真っ直ぐビルに叩きつけられた。

「く」

目は覚めた。ただ体が痛み、すぐに動けずにいる所に、デバイスを振りかぶったゴスロリ鉄槌が迫って来ていた。

先ほど同様、回避は間に合わない。しかし、上司を含め、模擬戦の機会がある人達は全員、どんなシールドも力業なり技術なりで破壊突破してくるような人達である。

だからこそ、防御より回避を優先的に学び、鍛えてきた。そんな自身の紙レベルのシールドで、ぶち抜く事が得意であろう鉄槌の一撃を防げる訳がない事は、やはり先程証明された。

(だったら)

この際、骨折を覚悟して片腕で無理矢理止め、カウンターで一撃を決める。

覚悟を決め、防ぐために片腕を伸ばす俺とゴスロリ鉄槌の間に、人影が割り込んできた。その人影は俺が見慣れた魔力光のシールドを張り、真正面からゴスロリ鉄槌の一撃を防いで見せた。

攻撃を防がれたゴスロリ鉄槌は一度距離を開ける。それでも此方を睨み続ける中、割り込んだ人影は何を考えたのか此方を向き、俺

のフードに手をかけた。

それを隙と思っただろう。此方に再度向かってきたゴスロリ鉄槌の進行を、フェイトが打ったフォトンランサーが阻んだ。更にそこにユーノが割り込む。

フードが外され、かなりの至近距離で、俺と彼女の視線が交差した。

「……浩樹君」

「なのは……」

ピシッ。

「痛っ!?!」

デコピンをして、溜息をついた。なのはは額を擦りながら、涙目ながらも恨めしそうな目で此方を見る。

そんななのはに、再度デコピン。

「痛っ!?!」

「このアホ娘!!そんなボロボロなのに、何してるか!?!」

「ええ!?!」

「レイジングハートもレイジングハートだ!!何故止めない!?!」

「え!?!いや、あの」

「まったく」

フード付きのバリアジャケットを解除。アルハに頼み、いつものバリアジャケット - 半袖で、首までフィットするタイトのような黒のシャツ。白で袖が無く、黒く縁取りされたジャケット。そして、黒いズボンと靴 - に着替えた。

さらに髪型はいつものポニーテールから、ワンサイドトップに変

わった。

「視界も明るくなったし。さて……」

「ユーノ。フェイト。アルフ」

念話で三人に呼びかけた。三人は何かしらの反応を見せたが、それらはすべて無視して、用件だけ伝える。

「現状。数の利はこっちにあるけど、状況が不利だという自覚は？」

「……そうだね。相手の人数がこれで全員かも分かってないし、一人一人の魔導師ランクも高い」

答えたのはフェイト。他の二人（二匹？）も何も言わない所を見ると、同じ意見らしい。

「なら、こっちの勝利条件は一人も欠けない事だ。一人でも欠ければそのまま、負けに繋がる」

「ああ、そうだけどもさ」

「外との連絡は？」

「さつきから試してるんだけど、全然繋がらない」

「俺もだ。……ユーノ。お前はなのはの治療と結界の突破に専念してくれ。アルフはそのまま、その青服犬耳と。結界の破壊はユーノに任せて、戦闘に集中して貰えるか？」

「うん」

「ああ。私としてもそれがありがたいよ」

恐らくアースラと。そしてアリシアも動いているだろうと踏んで俺の言葉に、ユーノとアルフが頷いた。更にフェイトにも声をかける。

『フェイトはマッチアップの相手を赤服鉄槌の方に変えて貰えるか？それならギリギリ五分だろう』

『そうだけど……。じゃあ浩樹は？』

『俺はその剣士を相手する。元々そうだったしな。何か質問』

『時々この人達が使っ、弾丸みたいなのって何か浩樹は分かる？』

『カートリッジシステム。ベルカ式つつう術式が良く使う。効果は多分フェイトが感じてる通りだ。弱点らしい弱点は無い……。かな。』

弾丸が有限。それに自身の力量以上に使うと、制御しきれなくなる事ぐらいだ』

『そっか』

『他には？ ……無いならこれでおしまい。各人、健闘を』

念話を切り、いざ飛び立とうとすると、服の裾をなのはに掴まれた。

「なのはは休んでろ。直ぐにユーノが来る」

「そうじゃなくて。えっと……」

なのはが何が言いたいのかは、何となく分かる。この戦闘が終わった時、俺はどうするのか。またあの時みたいに会えなくなってしまうのか。それが聞きたいのだろう。

そして、その問いに対する答えは残念な事に持っていない。

だから悪いと思いつつ、なのはの事を軽く押し飛ばし、裾から手を離させた。

「じゅめん」

短くそう呟いて、此方に来たユーノと入れ替わる様にして真つすぐとゴスロリ鉄槌に向かって飛んだ。

Side out

Side：アリシア

同日 午後08時10分

ギリツと歯ぎしりして、それでも手は止めずに、鍵盤の様な仮想キーボードを叩いて行く。目的は浩樹との通信といざという時の為の境界突破用のプログラムの作成。

その二つを並行して処理している事もあるけれど、それ以上にこの境界が堅い。

「やっぱり魔力無しでプログラムのみの突破はきつい……」

二流三流の境界なら簡単に突破できるのに……。この境界は一流という事なのだが、それは関係ない。突破が出来ない、それが問題なのだ。

「浩樹なら大丈夫だと思うけど……。でも……」

生憎、浩樹みたいに悪寒に自信がある訳じゃないし、今のこれだつて漠然とした不安だ。まあ、でも。

「ひっじょーに、面白くない空気はビンビンに感じてるけどね……」

こっちに来たのだから、浩樹が現地妻とイチャイチャラブラブするのを防ぐためだったのに……！何で戦闘中の筈なのにこんなイライラする空気を感じるのかな……！

苛立ち紛れにキーボードを叩く力を強くする。しかし、当然ながらイライラは解けない。こうなったら……。

「さっさとこの結界突破して、浩樹に私の匂いを才おおおおおおお
おおおおお……………!!!!!!」

そう吠えて、キーボードを叩く速度を上げた。

「いやあ、鬼気迫る物があるぞな」

「結界とか私にはよく分らないんだけど……………」

「しかし、アリシアの発想があれぞな」

「マーキング？」

第六十話 A・S第六話 〽再会と最近短いなっ b y作者〽(後書き)

スランプ通り越してスクラップに。ごまだれです。……生きてるよ？

Goldchild様、感想ありがとうございます。

自覚はあるんですけど、だいぶグダグダになってきましたね。どうやって收拾つけるのかは決まってるんですけど、どうやってそこまで持っていくか……。いざとなればあれか。

作中ではとうとう浩樹となのはが再会。その他、PT事件の主要人物たちともぼちぼち再会しました。

……予定より早くて、ごまだれ困っちゃったなあというのは秘密です。

今回はここまでです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

では次回。ごまだれでした。

どうでもいい事ですけど、右手の小指より、左手の小指の方がちゃんと曲がって働いてる気がする。右利きなのに。

第六十一話 A・S第七話 く想い。そして決着く

* * *

12月02日 午後08時10分

言いたい事がたくさんあった。聞きたい事が色々あった。したい事もしてほしい事も。

だから、こんな状況で。空ではフェイトちゃんやアルフさんが戦っているのに、私の手は浩樹君の事を引き止めていた。

「なのはは休んでろ。直ぐにユーノが来る」

「そうじゃなくて。えっと……」

言葉が出てこない。言いたい事があり過ぎて、言葉に詰まった。そして浩樹君は、軽く私を押し飛ばした。既に限界だった体は、軽くとはいえ浩樹君の力に耐えきれず、そのままよろけるようになって後ろに下がった。彼の服から手が離れ、浩樹君がまたいなくなってしまう恐怖に駆られ、慌てて体勢を整えると再び手を伸ばした。

「ごめん」

しかし、浩樹君は私が再び浩樹君を捕まえるより早く、空に舞い上がった。

「浩樹君！！」

悲鳴のような叫び声。しかし、浩樹君はそんな私の声を無視して飛んで行ってしまった。

「なのは!」

「……あ、ユーノ君」

いつの間にかユーノ君がそばに来ていた。私の反応にユーノ君はため息をつくくと、呪文を唱え印を結んだ。すると、私の周りに結界が出来る。

「防御と回復の結界魔法。今度は勝手に出て行ったりしないでね」「にははは……」

つい先程、ユーノ君の制止を振り切ってしまった私に対する嫌みも込められたその言葉に、私は苦笑いする事しか出来なかった。そして、そんな私の反応に、ユーノ君は再びため息をついた。

「なのは」

「はい……」

「浩樹もフェイトも。アルフだって今、なのはの為に戦ってるんだ」「……」

「だから今のなのはがするべき事は、此处で安静にして、他の皆に迷惑をかけないこと。いいね?」

「はい……」

「なのはがちゃんと此处にいないと……」

ドンツと鈍い音が響いた。辺りを見渡すと、あるビルの中程から、砂埃が舞い上がっていた。

「ね?」

「ね?じゃないよ!?!今、浩樹君が!?!」

「落ちていてなのは。だって浩樹だよ?」

根拠もなにもないのに。ユーノ君の言葉は何故か自信に満ちあふれていた。

* * *

同日 午後08時13分

見事にシグナムにぶっ飛ばされ、三度ビルに突撃した俺は、ビルの中で大の字になりながら、明日から大変だろうなあ此処で働いてる人達と、現実逃避していた。

「いや。だつてなあ」

この結界が解けたとき、ちゃんと直ってるだろうか、この穴。直らなかつたら、迷宮入り確実の器物損壊(？)事件じゃないか。少なくとも不法侵入は適応されるに違いない。誰が進入したのか分からんだろうが。

「まあ、そんな事よりも現状となのはか」

ユーノはちゃんと説得できたか？もし何かあったら連絡するようには言っているし、多分大丈夫だと思うけど……。信じる以外何もできないのだ。だったら信じて、現状打破の為に作戦を練る。

(状況は五分。でも、不利なのはこっちだ)

それに五分と言っても、ほんの少しの刺激であつという間に崩れ去るほど、危ういバランス。時間がかかればかかるほど、そのバランスはどんどん崩れて行く。

だからこそ、一刻も早くこの戦闘を終わらせる必要があつた。口惜しいが、現状じゃ説得は不可能だ。ここは一旦引いて、体勢を整えるのが得策。それに、時間があけばシグナムや他の守護騎士達もこつちの話に耳を傾けてくれる程度には、頭を冷やしてくれるかもしれない。

(どつちにしろ、時間が必要だ)

その時間を掴み取る為にも、今はこの結界を抜くことが先決。とはいえ、俺とフェイト、アルフの戦闘組は解析の暇なんてないのだが。

なのはの事を尋ねる意味をかねて、シグナムに視線を向けたまま、俺はユーノに念話を繋げた。

『ユーノ』

『ごめん。まだかかりそう。この結界、かなり硬いよ』

『そうか……』

並みの結界だったら、とっくにアリシアが抜いているだろうし。

そのアリシアが俺と連絡を未だに取れていない。それだけでも、この結界の硬さは証明されている。

『いつそ、力尽くで抜くか。なのはのSLBクラスの魔法なら、多分抜けるだろう』

『僕は反対。SLBなんて、今のなのはにもレイジングハートにも負荷が大き過ぎる』

『分かってる。だから、この念話はなのはに繋げてねえんだ。フェ

イト。そつちはいけそう？』

『難しい、かな。この赤い服の子。そんな余裕、くねなさそうだし』
『だろうな……。しゃあない。ユーノ。俺が結界を抜くから、転送の準備を』

『え？ ちよつ、ひろ』

念話を切り、空を見上げた。いつまでもビルの中で寝ている訳にはいかないらしい。

自身がこのビルに突っ込む事で出来た大穴からは、シグナムがこっちを見ていた。直ぐに動かず、しかし俺から視線を外す事が無いのは、警戒しているからだろう。突っ込んで来ても他の仲間の所に行こうとしても、ほぼコンマゼロ秒で撃てる俺の砲撃を撃たれでもすれば、攻めるに攻めきれないだろうからな。

だからこそ、攻めるにも回避にも適当な距離を取り、此方を睨みつけている。

(お陰でいくらか回復出来た。さて)

勢いをつけて、一気に立ち上がり、魔法陣を展開する。新しいスターライトシフトを撃つのは三度目。魔法を組み替えてからのテストの一回と実戦での一回のみ。撃つのに時間もかかるし、一对一のクロスレンジメインの高速線で撃てるようなもんでもないけど。

「さっきまでの話だな」

魔法陣発動後、即座に切りかかってきたシグナムの攻撃を、転移魔法で回避。適度に離れた中空にマテリアル・ハイの足場を作つて其処に着地する。

改めて別の魔法陣を展開し、拳を振りかぶり魔力球を五つ生成。

「なのはみたくない質は無い。だから、なのはの術式をコピーしたみたいなの、前のスターライトシフトは俺にあわない」

俺の戦い方。レイズシュートの利点。それを考えれば、俺にあった収束砲撃は

「複数同時収束による質より量での砲撃魔法」

収束を同時に複数行うのは辛いけど、それでもなのはのSLBよりは早く溜まる分、早く撃てる。

「レイズシュート、スターライトシフト改」

魔力球がどんどん大きくなっていく。

俺の居場所はばれているだろうけど、それでも刃が向かって来ないのは、フェイト達が時間を稼いで居てくれるからだろうか。

(なら、失敗は出来ないな)

意識を集中し、魔法を制御。もうすぐ撃てる所まで来て、視線を感じ、悪寒を感じた。そして違和感を覚えた直後、胸を貫かれた。少し前に見たSFホラーを彷彿させる、現実離れた光景が眼下に広がる。

痛みはあったが、血などは一滴も出ておらず、その代わりに、生えた手の先に、リンカーコアがあった。

「蒐集かつ!？」

なにが行われそうになっているのかは反射的にわかった。しかし、収束砲撃の為の収束中に急には動けない。そして痛みと共に、体か

「本当に良かったのかい？フェイト。結構思いつき殴っちゃったけどさ」

「うん。これくらいやらないと、きつと体を引きずってでもまた何処かに行っちゃうかもしれないし」

不安そうなアルフに私はそう答えた。私としても、ほんの少し前まではどうしようかなとは思ってたけど、浩樹の目を見たら、直ぐに決断出来た。

「普段の浩樹なら多分だけど、不意打ちとはいえ、」アルフの攻撃に何の反応もしないのはおかしいと思うし」

「その発言は地味に私を傷つけていることを自覚してるかい？フェイト」

「う、ごめん！そんなつもりじゃなくて！」

「冗談だよ。フェイトの言うとおりでと思うしね。……お。なのはとユーノ。来たみたいだよ」

アルフの指差した先から、なのはとユーノが此方に向かってきていた。

そのまま浩樹が作っただけらしい足場（材質は分からない。魔力じゃないみたいだ。浩樹の意識が途切れても消えないし）に着地するとなのはそのまま、私の方を見た。

「フェイトちゃん、アルフさん！大丈夫？」

「あ……。うん、大丈夫だよ。なのは」

「あたしもだ」

「そっか。良かった」

「ところでフェイト、アルフ。浩樹は？」

「浩樹かい？それだったらそこに……」

そう言ってアルフが指さした先には

「って誰もいない!？」

「嘘!？」

慌ててそちらを向くと、確かに浩樹の姿が無かった。周囲を見渡すと、浩樹が作った足場のギリギリの場所で、首筋を抑えながら私たちの、というよりアルフの方に恨めし気な目を向けていた。

「思い切り殴りやがって……。いてえだろ、アルフ」

「いやあ、ごめんごめんってなんで動けるんだい？浩樹」

「鍛えてる。他にも色々ね。俺を気絶させたいんなら一発じゃなくて二発三発打ち込まなきゃ」

そう言って、自身の首筋を軽く叩く。

そうは言うけどね浩樹？明らかに大ダメージを喰らった後に、アルフの当て身が当たったにもかかわらず、意識失うどころか、私たちのだれにも気がつかれずにそこまで移動するのって鍛えてるってだけじゃ説明できないよ？その他色々に何が隠されてるの？

「……アルフさん。浩樹君の事殴ったってどういう事？」

「ええ!？いや、なのは!!今はその話は置いておくべきじゃ!？」

いくらか回復したとはいえ、浩樹同様満身創痕のはずなのに、なのはが出す威圧感アルフの事を圧倒した。

そして浩樹の足もとには魔法陣。

「俺的にはもうこの事件に首を突っ込んでほしくないんだけど……。まあ、言うだけ無駄なんだろうな」

諦めたように溜息をつき、少し乱暴に頭を搔いた。

「さて、それじゃあ、俺も帰るよ。じゃな」

パタパタと手を振り、魔法陣がひときわ強く輝いた。そして、その姿が消えた。

「うそ、転送魔法！？あんな体で!？」

「クロノツ!!」

ユーノが虚空に叫んだ。するとウィンドウが出て、そこにクロノの姿が現れる。

「すまない。謎の妨害を受けて……」

追えなかったと、言外に語っていた。

『とりあえず、全員一度アースラに戻ってきてくれ。なのは、君もアースラに来てくれると』

「アルフさん!!どういう事ですか!!」

「いや、それはだねえ……。フェイト!助けておくれよ!!」

「えーと……ごめんね?アルフ」

「そんな!?元はと言えばフェイトが!!」

「アルフさん!!」

『あー、終わってから戻ってきてくれ。くれぐれも喧嘩中に戻ってこないように』

その言葉を最後に、クロノとの連絡が切れた。

結局、私たちがアースラに戻れたのは、そこから一時間も後のこ

とだった。

* * *

同日 午後08時35分

浩樹からの連絡を受け、アースラと呼ばれる次元船にクラッキングを仕掛け、浩樹の転送先を追えないようにしたのが十分ほど前。それから帰って来た浩樹はバリアジャケットを維持する事も出来ないのか、私服のままだった。

「浩樹、大丈夫？」

「ああ、アリシア。安心しろ。少し寝れば元に戻る」

軽く頭をなでられ、浩樹はソファアに近づきそのまま倒れこんだ。少しして規則正しい寝息が聞こえ始めた。こうやって死んだように眠る浩樹は何度か見たけど、それでも慣れるものじゃない。

近づき寝顔を眺めていると、デイビットが毛布を持ってきた。それが浩樹にかけられる。

「アリシアももう寝た方がいいぞな」

「……浩樹と一緒に寝る」

「なら吾輩は同志浩樹の事を部屋まで運ぶぞな？」

「……」

おとなしく立ち上がる。毛布ごと浩樹がデイビットによって抱え上げられ、そのまま部屋まで運ばれた。浩樹がベッドに寝かされ、その隣に私も潜り込んだ。

「それじゃあ、御休みぞな」

「うん。おやすみ、デイビット」

電気が消される。私は眠る浩樹に近づいて、浩樹の腕を抱き締めると、そのまま目を閉じた。

第六十一話 A・S第七話 〈想い。そして決着〉（後書き）

だって浩樹だもんが異常な説得力を誇る気がする。どうも、ごまだれです。

空牙刹那様、感想、ありがとうございました。

今回は試みとして作中のSide：誰誰の表記を無くしてみました。個人的にはこれは落ち着くなあとか思ったり。今後もうこうしようかな。

これからも実験的に色々変わるだろうとある封魔をよろしく願います。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

では次回、ごまだれでした。

閑話　く例えばあった、こんな未来く（前書き）

注意書き

今回はサブタイこそマシな方ですが、蓋を開けてみれば、作品の展開上、お蔵入りとなったストーリーを晒すだけです。なので加筆などもせず、終わってる所まで晒します。

ですのでふさげんなこの野郎などと思う方は戻るを押すか、バツを押せばいいか。

……いいですか？いいですね？

閑話　く例えばあった、こんな未来く

いつも通り電子音が鳴り響くより少し早く目が覚め、軽く体をほぐす。動きやすい服に着替えた後、階下に向かう。

「さて、今日はっ」と

冷蔵庫に貼られた手製の献立を見て、それに合わせた食材を取り出して、さっさと作り始める。

生憎家主と食事の好みが違い、作っているのが俺である以上、いつそのこと、完全純和風の食事にしてもいいけど、それをやると家主の機嫌が少しだけ悪くなるから、朝食は和食と洋食がごちゃごちゃに入り乱れる。

「いや。まあ、パンでもいいんだけどさ」

あれだと力が出ないって言うか。食べた気がしないって言うか。朝からしっかりと食べるタイプだし。

そんな事を考えながら、お弁当と並列して朝食を作っていると、リビングと廊下を繋ぐ扉が開いた。

「あ、おはようございます」

現れたのは、家主殿。そんな俺に「おはよ」と挨拶をしてきた家主殿は、やはりまだ眠いらしい。低血圧に加え、昨晚も遅くまで仕事していたらしいからしようがないけど。個人的に寝巻が着崩れたままで起きて来ないで欲しい。目のやり場に困る。

若干顔が赤くなるのを自覚しつつ、さっさと顔を反らして、コーヒ―を淹れた。何時の間にか近づいていた家主殿にカウンター越し

にコーヒーを渡した。

ズズと飲み始めた家主殿のいるカウンター側にコンロなどはあるから、自然と顔が向きあう状態になる。暫く炒める音とコーヒーをすすする音が響き、コトリとカップがカウンターに置かれた。

「ふう、おはよう、浩樹」

「おはようございます、家主殿。目は覚めましたか？」

「ええ。ところで、その家主殿って言うのやめない？肩凝っちゃいそう」

「その時はマッサージでもしてあげますよ。さっさと準備しないと食事の時間無くなりますよ」

「はい」

パタパタと洗面所に向かうその背中へは、相変わらず時空管理局の准陸尉で陸戦AAランクには見えない。大切なデバイスがカウンターの上に置きっぱなしだし。

「おはよう、アスケレピオス」

『おはようございます、ヒロキ』

「家主殿は昨日も遅かったみたいだけど、何か緊急の用件でもあったのか？」

『いえ、そう言う訳では』

「え？違うのか？」

作っていたオムレツが宙を舞い、事前に盛り付けておいたチキンライスの山の上に落ちた。それを確認してすぐにオムレツの上部に切れ込みを入れて広げる。これで完成。

『相変わらずの手際ですね』

「ありがと。それで？家主殿の夜ふかしの原因は？」

『大変申し上げにくいのですが』

同じようにさっさとオムライスを作り上げ、弁当の制作も行う。盛り付けと栄養バランスに気をつけつつ、弁当箱に詰めていく。こつちに来てからと言うもの、暇さえあれば勉強していたから、スキルが上昇してる。

「何？」

『貴方に名前を呼ばせる方法を画策していたようで。色々不味い作戦も考えていたようですから、特にこだわりが無ければ早急にマスターの名前を読んで頂けると』

「因みにどんな作戦が？」

『最後の頃には、いっそ既成事実をなどと呟いておりました』

「よし分かった。比較的速やかに家主殿の名前を呼ぶ事にしよう」

『そうして頂ければ』

俺の為にもあの人の為にも。

かと言っても、一度定着した呼び方を変えることと言つのは難しい。初めて会って、ここで暮らし始めるまでは、家主殿を何かしらの呼び方をしたことなんてないし、此処に住むようになってからは、あの人が言った通り、最初の頃は住み込みの家事手伝いのつもりだった。

だからこそ、公私混同しない為に家主殿って呼んでいたのだけど。それが仇になるとは。

先程のアルクレピオスとの会話を思い出す。本当に俺の呼び方を気にしているらしく、まさかここに居るのが嫌なんじゃとか、色々考えているらしい。

「そうは言ってもなあ」

「何がそうは言ってもなの？」

「何でもないです。家主殿」
「そう？ならいいけど」

アルクレピオスのあり得る筈のない視線が痛い。きっとセンサーをフルで使って、俺を睨みつけているに違いない。

「じゃあ、そろそろ行くわね」

「え？まだ早いんじゃない」

「今日は用事があるから。少し早く出るわ」

「はあ。分かりました」

カウンターの上に置いてあったお弁当を渡し、玄関まで見送る。

「じゃあ、いつてらっしゃい」

「ええ。今日もお願いね」

「はい」

戸から出ていく家主殿を見送って、俺は再び溜息をついた。どうすればいいんだろ。

家主殿が出かけてから暫くして起きた、家主殿の愛娘の相手をしながら、彼女に相談していた。と言っても、まだろくに言葉が話せない彼女に何を言っても無駄で、今も自分が持っている人形にご執心だ。

「おーい、どう思う？」

顔から少し離れた所で、くるくると指を回しながら尋ねてみる。その指に何とか触ろうと手を伸ばしてくるのが可愛くて、それに合わせて離したり近づけたりしているうちに、怒って近くにあった人形を投げつけられた。

見事に俺の額に当たって飛んで行った人形を回収して返しつつ、損ねてしまったお姫様の機嫌を元に戻す為に、さっきまで回していた指を差し出した。まるで虫を捕まえる用に速効で掴まれて銜えられた。

こうなったら長い。とりあえずお姫様の機嫌が直り、お昼寝の間になるまで、どうやったら家主殿の事を名前で呼べるか考えよう。まあ、本人がいない今でも家主殿って呼んでいる時点で、前途多難な気がするが。

「本当に、どうすりゃいいんだろ」

また溜息をついた。家主殿はあんまり溜息をつくと、幸せが逃げていくわよと言っていたけど、悩みごとがある時点で幸せを享受出来ないと思うから、逃げようか逃げまいが関係ないというのが持論だから、気にしない。

不意に手持ちの通信端末が鳴った。普段なら『Sound Only』の文字が表示されるが、今日に限ってそうではなく、表示されているのは相手の顔。着信の時点で名前の表記はあったから相手が誰かは分かっていたけど。

「お仕事中では？」

『今は休憩中よ』

「さいですか。なら存分にお休み下さい。お邪魔にならない為に端末は切らせてもら……いえ、何でもありません、ごめんなさい」

画面越しに目だけ笑っていない満面の笑みを向けられた。思わず付きそうになった溜息を抑え、何ですかと尋ねると、画面の隅に別の新しいメールが表示された。文字が小さくて若干読みづらいが、そこに書いてあったのは。

「出向令状、ですか？」

『ええ。ちよつと手伝ってほしい事があるのよ。だから囑託魔導師である君に出向命令ね。まあ命令と言っても、何かほかに用事があるなら、断つても大丈夫よ』

「いや、それは流石に。きちんと向かいますよ。今からですか？」

『今日中ね。早ければそれだけいいけど』

「了解です。お姫様を連れて、すぐに向かいます」

『ええ、お願い。詳しい事は令状に書いてあるから、それを見てね』

通話が切れる。端末を操作して、令状を表示する。内容を確認してから、何時の間にか眠っていたお姫様から指を引き抜いて、着替えと荷物の整理の為に自室に戻った。

この時点で、ある程度予測しておくべきだったんだ。何で一介の囑託魔導師でしかない俺が、わざわざ時空管理局地上本部のある部隊の隊舎に直接呼ばれることなんてない。

何でまた。思わずそうぼやきそうになったのを、堪える。きつと何か意味があるに違いない。

そう。到着していきなり着替えさせられて、地上本部でも有数の広さを誇る訓練所に連れ込まれて、何故か家主殿と模擬戦をする事

になったとしても、何か意味があるに違いない。

「それに衆人観衆に晒されて……」

部屋の一角でこちらを見ているこの部隊の部隊長と俺をこの場に呼んだ張本人でもあり副隊長。ともに俺なんかとは魔導師ランクからして大違いだ。他にもカメラとかがあるけど、その二人の視線が一番痛い。何かを見定めるような、そんな視線。

「悪い事をした記憶は皆無なのだけど」

二人の方を見ていた視線を戻す。家主殿は既にデバイスも起動させ、やる気満々だ。

生憎とデバイスは持ってないし、無い方が戦いやすいから特別持ちたいとも思わない。

「えっと、始めますか？」

「こつちはいつでも大丈夫よ。でもそうね。一応、合図はかけましようか」

空中にカウンターが現れた。音を立てながらその中のケージが一つずつ埋まって行き、最後に赤く輝いていた所が緑に変わった。

その瞬間、魔力強化&歩法^{ステップ}で一気に距離を詰める。

ごま「ここまで」

浩樹「色々中途半端な」

アリシア「私がいないつ!!」

アルハ「私もいないつ!!」

ごま「最終更新日が去年9/20だったから、ちょうど一期の後日談編の頃に書いてたやつだな。でも実際は後日談編直前位から書いてたやつだったから、アリシアとアルハの存在どうするかなあって右往左往してた頃」

浩樹「へえ」

ごま「ちなみに当時はいつそ浩樹記憶喪失にした方が、海鳴帰る理由なくていいんじゃないかね?とか考えてた」

浩樹「うおい!?!」

ごま「追記しておくよ、一応浩樹の滞在先がメガー又さん宅になってます。後アルハとアリシアがおらず、浩樹が囑託魔導師です。ルーテシアの面倒みる的な意味で、ある程度自由な方が良かったからですね」

浩樹「あゝ……落ち着けお前ら」

アリシア「断固！断固として抗議する！」

アルハ「そつだそつだー!!」

ごま「結局出たんだからいいでしょうが」

浩樹「まったく……。」「

アリシア「うっ……。」「

アルハ「むう……。」「

ごま「えっと。これからもある封魔の歯車破壊をよろしくお願
いします。以上、ごまだれでした。」「

第六十二話 A・S第八話 〈乙女の苦悩と上下関係〉

* * *

12月04日 午前07時00分

頭に触れる優しいな感触で目が覚めた。少し怖くて、それでも確認しないわけにはいかないから、少しずつ目を開いていく。

そして、完全に目が開ききった時、一番に目に入ったのは、私の頭を撫でるときの、いつもの浩樹の表情だった。

「浩樹？」

「おはようアリシア。少しお寝坊さんだな、今日は」

浩樹が私の頭を撫でていた方の手で部屋の一角を指差した。つられてそちらを見ると、確かに普段起きるよりは幾分遅い時間だった。まあ、世間一般の五歳の子どもが起きる時間としてはちょうどいいんだけど。

「朝食も作りたいし、そろそろ離してくれるか？」

そう言う浩樹は普段通りの浩樹だった。びつくりするくらい。少なくとも、一昨日の晩にふらつきながら帰って来て、そのまま死んだように眠り始めたとは思えない。

「……やだ」

年相応の子どものような我が侷。浩樹の事を困らせる事は自覚しつつ、それでも浩樹の為に離れない。

(こうしてれば、絶対浩樹は無理はしない)

ずっと一緒に居るのだから、浩樹が本調子じゃないことは見れば分かる。

浩樹的には恐らく私に心配をかけまいとして無理しているのだからうけど、逆にそれが私に心配をかけている事にどうして気がつかないのか。

(恋する乙女的には、辛い時には甘えてくれると嬉しいなあ)

叶わぬ夢な気がするけど。浩樹にとっては私はきつと妹とかそんなポジションだろうし。きつと私じゃ逆立ちしたって、浩樹の幼なじみズには勝てない。

(あんな寝顔、見ちゃったらなあ)

眠りに落ちる前に見た、あの寝顔。魔力の消費過多による痛みと心身の極度の疲労下にあった筈なのに、満ち足りたようなあの表情きつと守り切れたのだろう。大切な幼なじみを。

(辛い……)

見せつけられた訳じゃないが、改めて浩樹にとっての幼なじみの存在の大きさを思い知らされた。

こんな事なら着いてこなければ良かったかとも思ってしまった。ため息をつく。そんな私に浩樹が反応した。

「どうした？」

「ううん。何でもない」

「何でもないはないだろう。どうした？」
「……何でもないもん」

不思議そうに首を傾げる浩樹の視線から逃れるように、さらに強く抱きつく。

そんな私の顔を覗こうとしているのだろう。浩樹も動き、後少しで顔を、色々な負の感情が入り混じり、ぐちゃぐちゃになっている顔を見られそうになった。

しかし。

「む？」

何かに反応した浩樹。私も何か分からないかと、耳を澄ましてみると、小さいが確かな電子音が室内に響いていた。

「っと。アリシア。今回は本当に離してくれ」
「……」

渋々浩樹の腕を解放する。そのまま浩樹は跳ねるようにして体を起こし、私を越えて床に降りた。

間接をほぐしながら、軽く身支度を整えて、浩樹は通信に出た。

* * *

同日 同刻

いつもと様子が違うアリシアの事が気になりながらも、流石にこの通信を無視するわけにいかず、俺は通信に出た。

「何でしょうか、クイントさん？」

『どう？お休み、楽しんでる？』

「……ええまあ。ぼちぼち」

態々そんな事を聞きに連絡したのだろうかと少し考え、そのまま自身の考えを否定した。時間が時間なら、有給でもとっていない限り、今は仕事の筈だし。

となると他に理由があるのだろうか……。心当たりは無かった。

『そう。ちゃんと休んでるならいいんだけど』

「万事。問題ありませんが」

『嘘ね』

……。

『何か大変な事に首を突っ込んでいるでしょう？さっさと話さない、高坂浩樹二等陸士』

「えーと……」

なんで知ってるんだろう？個人的には俺の知らないところで俺の情報を勝手に知ったり教えたりしないしてほしいんだけど。

まあ、考えるだけ無駄か。

思い切りため息が付きたくなっただが、流石に上司の手前、それは堪えた。

『それで？何に首を突っ込んでいるの？』

「その言い方だと、既に何に首を突っ込んでいるか知っているようですが？」

『ええ。事前情報は貰ってるわ。それでも、貴方の口から聞きたい』

のよ
『よ』

それは嫌がらせ以外の何物でもないのですが……。アリシアにはああ言っただけど、まだまだ本調子じゃないし。正直まだ眠っていたい。

しかし事前情報か。まさかとは思うが。

「もしかして俺の体がどんな事になってるのかも知ってませんか？」
『貴方が魔力蒐集されたのに転移魔法を使った事は聞いたわ。だから、今の貴方がどんな状態なのかも何となく予測はついてるわね』

ああ、まさかとは思っただけど、本当に事前情報の出所はあそこらしい。

「だったら許して下さい。一応かなり無理してます」

『転移魔法を使った位なんだから、少しくらい我慢しなさい。本格的な事情聴取をしてもいいのよ？』

「捜査権無いのにどうして事情聴取できるんですか……。って言うと本当にやりそうなので勘弁してください、クイント・ナガジマ准陸尉。話しますから」

とりあえずクイントさんの許可を取り、椅子の一つに腰を下ろす。少しは体が休まり、思わず重い息を吐いた。

『本当にボロボロみたいね。大丈夫？』

「ええまあ。ただ体が体ですから。魔力の回復が遅いので」

『魔力量は段違いだから普段は気にならないはずだけど』

「そうなんですけどね。今回みたいにぎりぎりまで行くとさすがに」

回復の遅さが目立つ。覚醒する事は出来たが、戦闘できるように

なるのは一両日中には難しい、というのが自己判断だ。

「さて、俺が巻き込まれてる事でしたっけ？」

『貴方が首を突っ込んだ事よ』

「いえいえ。巻き込まれたんですよ。巻き込まれる形で、首を突っ込みました」

俺の言葉にクイントさんが首をかしげた。話すと言ったので、デイベットの事をぼかしながら簡単に説明した。

俺の話聞き、クイントさんが何かを考えるように顎に手をあてた。

「俺の話はこんなところですが」

『興味深い、と言えば確かに興味深いわね』

「興味深い、ですか？」

『貴方が何故闇の書に改編があつた事を知っているのか。そしてそこまでボロボロになつても、事件への介入を諦めていない事。今回は何を話していないのかしら？』

「ノーコメントで」

話していない事は二つ。デイベットの事はもちろんとして、もう一つ。俺の友人である八神はやてが事件に巻き込まれている事。下手したら最悪の形で。

だからこそ、今やるべきははやてと事件の関係を一刻も早く確かめる事。確かめてからの事も、考えてある。

(どつちにしろ、寝てる訳にはいかない)

今日だって、これからはやての家の近くまで行って、張り込みをしているつもりだったのだ。

『……………浩樹？』

「何でしょうか、クイントさん」

『貴方はこれからもかわるつもりかしら？』

「はい。当然です」

それは絶対に揺るがない。

俺の目を見たクイントさんがため息をついた。そして、俺に向けてもなく、「だ、そうよ」と誰かに言った。

「誰かいるんですか？」

『いる訳ではないわね。通信は繋がってるけど』

「……………事前情報提供者ですか？」

『ええ。どうする？』

「当然。話します」

そう答えながら、アリシアに指示して隠れるように言った。今、アリシアをあの人達に合わせる訳にはいかない。

アリシアは俺の指示に頷くと、こそこそと移動して画面から写らない所に行き、そしてクイントさんの映っている隣に、俺が知っている男の姿が映った。

「……………久しいじゃないかクロノ」

『ああ、そうだな。浩樹』

「……………」

『……………』

分かってるさ。そんな風に睨まなくなっただって。お前が言いたい事だってやりたい事だっただけ分かってる。

「……直接会って話そう。場所は連絡する。お前的にも直接会いた
いだよ？」

『そうだな』

「じゃあ、後で」

* * *

同日 午前07時10分

「それじゃあ、エイミィ。少し行ってくる」

「それはいいけど。本当に一人で行くの？」

「ああ」

僕はエイミィの言葉にうなづいた。デバイスを仕舞い、制服の上
着を着る。

「あいつの事だ。どうせ一人で行かないと会わないだろうしな」

「そうだね……。それにしても、ミユちゃんがいつまで
会わないはずだったんだけどねえ」

「事態が事態だ。そう言っている訳にもいかないだろう」

僕は既に諦めたとエイミィに告げ、ため息をつく。

「しかし、黙ってあいつに会ったとばれれば、後で怖いな」

「まあ、そこら辺は私の方でもどうにかしておくよ」

「すまないな。それじゃあ、行ってくる」

「うん。行ってらっしゃい」

* * *

同日 同刻

通信を切るとため息をつき、クイントさんの方を睨んだ。

「入局一年も経っていませんが、地上本部と本局の隔たりは知っているつもりです。それなのに随分と情報が早いじゃないですか。なんでですか？」

少なくとも事件発生から一日も経ってないのに、全く関係ない地上本部に情報が行くとは思えない。一番可能性が高いのは、正直な所、クイントさん達地上本部側からアースラメンバーに情報を流したという事だけだ。

「貴方はどう思ってるの？」

「正直、貴方達が俺に黙って昔からアースラと連絡を取っていたように思います。可能性として一番それが高いので」

「ふむ。貴方はぶれないわねえ。疑う時は誰でも疑うか」

当然だ。俺が無条件で信じる相手なんて本当に限られてる。

「あの本局の人が貴方の事を知っていたのは、隊単位では関係無いわ」

「それは？」

「ミユよ。あの子、士官学校時代にあの執務官と同期だったみたい。以前から連絡取ってたらしくて。今回、貴方が被害を受けたって事で、こっちの保護者兼所属する隊の上司である私に連絡が来たってわけ」

「ミイユさん……。あの人、士官学校の出だったんですか……」
『そつち？まあ、気持ちは分かるけど』

しかしミイユさん。ミイユさんか。正直予想外。連絡し合ってる事なんて聞いたこと無かったし。

「了解しました。疑ってしまってすみません」

『さあて、どうしようかしら？何か埋め合わせして貰うのもいいかもね』

「そちらに戻ってからにしてください。俺は今から執務官に会いに行きますので。それともう一つ。ミイユさんへの言伝を」

『何？』

恨み事を伝えてもらおうと思い、戸惑う。

そして、少し悩んでからこう告げた。

「ありがとうございます」と

ずっと前から連絡を取っていたのなら、今までクロノ達が会いに来ようとしなかったのはミイユさんが理由だと思っから。

『了解。確かに伝えとくわね』

通信が切れた。

着替えようとし、面倒になってバリアジャケットを起動。それに身を包み、軽くストレッチして体をほぐす。それから、アリシアの方に向き直った。

「じゃあ、アリシア。ちょっと行ってくるな」

「無理しないでね？」

「分かってるよ」

ひらひらと手を振り、クロノに会う場所の座標を送りながら、俺は部屋を出た。

第六十二話 A・S第八話 く乙女の苦悩と上下関係く（後書き）

Gold-Child様、感想、ありがとうございました。ごまだれです。

もうすぐ学校が始まるので、ただでさえ遅い筆がさらに遅くなると思われますが、これからもよろしくお願いします。

今回はここまでです。ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

では次回。以上、ごまだれでした。

閑話 くなぜなに作者 その3

ごま「新しい期？に入るたびに行われるなぜなに作者も早くも三回目。司会はお馴染み。最近鼻水と目が痒い事に以上に悩まされてるんだが、花粉症かな？ごまだれと」

アル「一日千秋の想いつて重いなあ……ダジャレじゃないよ？アルハザードの提供でお送りします」

ごま「今回はぶっちゃけ、設定が長い事。それに報告と言いますか、伝える事があるので、ゲストは無しです。ちゃっちゃんか行きます。そんな訳で、まず現在のPVとユニーク公開」

PV 321, 364 ユニーク 28, 958

ごま「あんまり伸びてないねえ」

アル「かなり不定期更新だからね」

ごま「続いてキャラ設定です」

アル「ぶっちゃけプロットと一緒に書かれているネタバレ大量のキヤラ設定だったので、だいぶ削られました」

オリキャラ二期設定

名前：高坂 浩樹

ふりがな：こうさか ひろき

年齢：9歳

誕生日：5月10日

身長：130.5cm

体重：29.0kg

髪型：黒髪・後ろ髪は長めで、後ろ髪を若干残す形で、リボンで結つてある。

一期の頃よりも伸びた。

後、特徴的なのは殆どのリリなのキャラ全員に言える、特徴的な前髪。

好きな事・物：動物（特に猫）と戯れる事。鍛練

手袋とリボン（手袋はじいちゃんから。リボンはなのはから貰った）

チョーカー（アリシアから。第五十四話参照）

嫌いな事・物：なのは達や家の事で色々言われる事。今までの鍛練の否定

しつこい人。

趣味：読書

備考：体温高め。

能力値（三期段階）

筋力：AA（AAA） 同年代と比べて。

（S）オフエンスアーマー 室素装甲使用時

魔力：AA 100%の時。なのは達と比べれば見劣りはするけど、十分。

ただし、蒐集された為、現在はB〜Aランク

技術：S（体術） 実践が多い為

AA（魔法） レイズシュートの魔力砲撃、時空転送などの転送魔法など

耐久：B（A） 基本的にカウンターより、避ける専門の為、耐

久力は低い

（AA）ハッキング使用、オフエンスアーマー 室素装甲使用時

速度：AA+（S） 魔力の操作性の向上による、最適化が理由

スキル：A A（封魔） 使用能力。アルハのサポートがあれば。無い場合でもA

ハッキング
A データの変更。主に自身の情報変更による窒素の操作。相手の脳へのハッキングによる魔法や戦闘技術の記憶封印（そらおとニンフ嬢がイメージ）

名前：アリシア・テストロッサ

ふりがな：ありしあ・てすたろっさ

年齢：6

身長：107.5cm

体重：17.0kg

髪型：フェイトと同じ色の髪。腰まで伸びる。髪の毛は結っていない後、特徴的なのは殆どのリリなのキャラ全員に言える、特徴的な前髪。

好きな事・物：浩樹 アルハ 浩樹の手料理

浩樹から貰った指輪 アルハから貰ったデバイス

嫌いな事・物：浩樹からのけものにされる事 一部野菜

趣味：プログラミング

技術：A -（バックアップ）

備考：プレシア・テストロッサの娘。フェイト・テストロッサ・ハラウンのオリジナル。

5歳の時に一度は死んだ身だが、アルハの手によって蘇る。

アルハザードであった時から数カ月。いつも一緒に居る浩樹は家族であり片思いの相手。浩樹は私の嫁宣言は伊達じゃない。

分かっているつもりだったけど、最近浩樹関係のライバルが多くて困る。本人はそれが原因で口が悪くなっていると思っっているが、事実はどうだか分からない。

名前：ミィユ・クライツ

ふりがな：みいゆ・くらいつ

年齢：15

誕生日：8月17日

身長：150.5cm

体重：50.5kg

髪型：肩までの長さ。天然パーマでふわふわしている。後、特徴的なのは殆どのリリなのキャラ全員に言える、特徴的な前髪。

好きな事・物：今まで集めた人形など

最近は浩樹に抱きつく事

嫌いな事・物：特になし

趣味：可愛い物集め

技術：B+（バックアップ）

????（デバイサー）ステイコール（浩樹所持）はミユの初めての作品

備考：ゼスト隊では浩樹入隊前は一番若かった。

立ってでも寝れる事が特技で、時折立つたまま寝て、傍に浩樹がいれば抱きしめることもしばしば。

天然で浩樹のボケに普通に返してきたりするため、浩樹が少し苦手なタイプ

何だかんだで、浩樹の事を結構に気にかけていて、浩樹が信頼している人。

名前：高坂 佳奈

ふりがな：こうさか かな

年齢：9

誕生日：11月20日

身長：125.0cm

体重：24.0kg

髪型：なのはより濃い色の茶髪。髪の長さは肩甲骨辺りまで。アリスやずすかの半分くらいの長さ。気分によって結んだり、そのまま

だつたり

好きな事・物：聖祥大付属小の友達 家族写真 浩樹の部屋

嫌いな事・物：虫類

趣味：読書 主にファンタジー小説

備考：浩樹がじいちゃんと呼ぶ人の直系の孫。一人っ子

お気に入りの場所である浩樹の部屋に結構な時間入り浸っている。小説多いし。

両親は事故で死亡。天涯孤独の身の上だったが、葬式に来たじいちゃんに引き取られる。

三カ月ほど前から、じいちゃんに教わり武術を始めた。

ごま「それでも地味にネタバレが〜」

アル「まあ、これくらいなら……。いいのかなあ？」

ごま「ここに書いてあっても、本編でもう一度触れたりするでしょうがあしからず。そして最後に連絡です」

アル「浩樹が普通の男の子に戻ります」

ごま「違うよ!？」

アル「ええ!？」

ごま「何その反応!？そうじゃなくて、この『とある封魔』ですが、今まで体当たり掲載でしたが、流石に限界が来たので、此処は何度目かになるプロットを書き貯めようという事で、少なくともA・S編終わりまではプロットを書き貯めるつもりですから、当分作品の更新がありません」

アル「今の所、第十二話途中までしかプロットが書けてなくて、おまけに原作第三話くらいだからね。まだまだ終わらないよ」

ごま「何とか四月中にはプロットを書き貯めて、五月からは平常運転したいなあと思つてます。待つていて下さるかもしれない方。申し訳ないです」

アル「もしかしたら繋ぎに四月中に閑話を載せるかもしれませんが。まあ、予定は未定なのですが」

ごま「本当にごめんなさい。えーと、此処まで読んで下さった方。ありがとうございます」

アル「そして、とある封魔を読んで下さっている皆様に大いなる感謝を」

ごま・アル「では次回」

第六十三話 A・S第九話 〽公私〽 (前書き)

お久しぶりです

第六十三話 A・S第九話 〈公私〉

12月04日 午前10時00分

海鳴にある海浜公園。恐らくこの町に住む人達なら一度は来た事があるだろう。そして俺も例にもれず、此処には何度も来た。一人の思い出もなのはとの思い出も、アリサやすすか達皆との思い出もたくさんある。

……そう言えば正否は分からないけど、なのはとフェイトの最初で最後のガチバトルのステージでもあった気がする。

「実際どうなんだ？」

「何がだ」

「なのはとフェイトの最初で最後のガチバトルが此処であつたつて夢で見たんだけど」

「君の勘がどうなっているのか気になるが……。まあ、事実だ」

そう言いながら俺の隣に誰か座つた。それでも手元の本から顔を上げないでいると、横から本を取られた。少しの間、開かれていたページを見つめてから本は閉じられ、クロノは俺から手が届かない場所に置いてしまった。

「返してくれ」

「呼び出したのは君だろう。まったく」

溜息をつかれた。

相変わらず変わらないそいつに、少しだけ笑いながら、ベンチから立ち上がる。そのまま、海に落ちないようにと張られている柵に寄り掛かり、そいつの方を見た。

「久しぶり、クロノ」

「ああ、そうだな、浩樹」

珍しく俺が挨拶したにもかかわらず、クロノは驚きもせず、普通に反応を返してきた。その反応に物足りなさを感じたが、それでもクロノはクロノのままらしく、少し安心した。

「さて、じゃあどうする？お茶でも行く？」

「ふざけているのか？」

長くなるかもしれないし、結構本気だったのだが。下手に外で話をしていて、あの警官に邪魔をされて話の腰を折られるのも嫌だしな。

クロノがいいならいいけど、俺は嫌だなあ。……まあいいか。さつさと終わらせればいい。

「さて、クロノ。何かから話をしたい？」

「闇の書についてだ。知っている事を話して貰おうか」

「断る」

「なっ!？」

クロノに驚かれた。それが不思議で、俺は首を傾げた。

「当然だろう？俺は地上の。クロノは本局の人間なんだから。直接の上司でもないお前の命令に従う義務はないぞ」

「そんな事を言っている場合か？闇の書は」

「危険な物だつて言いたいんだろ。ジュエルシードと同じ、A級口ストロギアだからな」

この事件に関わっていると云うのに、調べていないと思われたのか？ ジュエルシードの時ならいざ知らず、管理局員になってまであの頃みたいな無茶は……してるな。成長してないじゃん。

「どうした？ 急に落ち込んで」

「いや、何でもない」

指摘され、思わずつきそうになった溜息を慌てて飲み込む。

（とりあえず、俺の成長具合については置いておこう。今は今後についてだ）

気を取り直す事を含めて、クロノに悪いと思いつつ、目を閉じて自身に潜った。暫くその中で今後の方針についてや闇の書の情報について、話してはいけない事、話してもいい事、その中で言うべき事などで三段階で纏めていく。

完全に纏めてから目を開くと、クロノが訝しげな目を向けていた。その目を見て、ああやっぱりと思わずにいらなかった。

（使い勝手、悪いなあ）

仕事で物事を纏めたり考え事したりするのに乱用してるうちに、早く深く潜れるようにはなった。それが原因で潜っている間に話しかけられたりしても、リアクションをとれなくなるのはやっぱり考え物。

リアクションしなくてクイントさんに滅茶苦茶怒られたり、ミイユさんに半泣きになられたりしたしな。

「おい、浩樹！」

「ん？ ああ、悪い。考え事をしていた。何の話だ？」

「闇の書の情報を」

「それは断つただろう。もう忘れたのか？俺には目的もあるしな」

「ならせめてお前の目的だけでも」だが断る「いい加減殴るぞ浩樹

」！

「すぐ怒る。良くない」

「……」

すげえ、プルプルしてる。顔も赤いし。クロノが本気で怒っているらしい事はよく分かった。

流石にやりすぎた事は自覚した。俺だって、実際の捜査中にあんなこと言われたらキレるだろう。

「落ち着けクロノ。な？」

「誰のせいだ……」

「全面的に俺が悪い。流石にな。話せることは話すよ」

とは言えさつき纏めてみたら、殆どの内容は話しても問題ないという結論に達したのだが。

その中で言うべき内容を言うと、その情報を整理してから更にクロノに質問され、結局絶対に話さないと決めた内容、八神はやてが何らかの形で事件に関わっている事を除き、全て説明する羽目になった。

『……てか、アル八に纏めて置いたファイル渡せば良かっただけじゃねえか』

『……そういえばそうだね』

一応こういう時の事も考えて纏めて置いたのに。まあいいかと考えてさっさと意識を切り替える。

クロノもそうなのだろう。周囲を確認してからS2Uを取り出し、

俺が渡した情報を纏めると、それを仕舞って顔を上げた。

「なぜ帰ろうとしている浩樹」

「話し終わったからもういいかなあって」

「終わっていない」

「だよな」

柵に寄りかかるのをやめる。その代わりに、ポケットに手を入れてクロノを見据える。

クロノも立ち上がった。俺に鋭い視線を向けてくる。

「あれからの事を教える。拒否は許さないぞ」

「俺がこんな事を言うのもどうかと思うけどさ。ミイユさんと約束したんじゃないのか？」

「ミイユと約束したのはあくまで連絡を取らないことだ」

「こうやって面と向かって会ったときに話を聞くのは約束を破った事にはならないと。屁理屈もいいところじゃねえか」

最も聞かれることは予測していたし、その答えも既に決めているのだが。

「話す気は無い。絶対に。なのは達にも言うつもりが無い事を、わざわざ言うかよ。夜天の魔導書とも無関係だしな」

言っても信じないだろうしなと続けようとして、その言葉は飲み込んだ。此処で挑発するような言動は避けるべきだったし、信じるか信じないか関係無しにアルハザードやアリシア蘇生の事なんて絶対に言えない。言える筈がない。

そんな事は十分理解していたからこそ俺はそう言ったのだが、俺の事情など知らないクロノからしてみれば、先程までの事も含めて

再び挑発されたように感じたらしい。鋭い視線ではなく、睨まれ始めた。そんなクロノに、さらなる意志を込めて睨み返す。

「どういつつもりだ？」

「どうもこうもない。話さないってそう決めたんだ。誰にも、絶対に」

大切な子の為に、大切な人達に嘘をつくことに決めたのだ。俺のエゴでしかない復讐に付き合ってくれと言ってくれた日から。あの子も俺が守ると。

クロノは暫く黙り込むと、諦めたように溜息をついた。そして数度右手を開閉すると、此方に向かって歩いてきた。

そして。

「っ！！」

「ふっ！！」

クロノは腰を入れて。俺は無造作に。それぞれ頬を狙って拳を振るった。お互いに手加減も俺達の体が逆方向に飛んだ。即座に立ち上がる。

「てめえ！クロノ！魔力強化とか反則だろう！！」

「そつちだつてやってるだろう！！」

怒鳴りながら駆け寄り、俺が上段を狙った回し蹴りを放つ。それを避けられ、慌てて片足で取れるだけ距離を取ろうと足に力を込めるが、それより先にクロノの足払いが決まった。

体勢が致命的に崩れながら、迷わずデバイスを起動した。待機状態だったそれが、腕輪に変わる。

「なっ」

追撃をかけようとしたクロノにレイズシュートを早撃ちして、距離を開けさせる。その隙をついて体勢を立て直し、クロノもS2Uを起動し、バリアジャケットBJを身に纏う。それを見て、同じくBJを纏った。

「先にデバイスと魔法を使ったのはそっちだぞ」

「く……。でも魔力強化していたとは言え、お前の方が吹っ飛んだぞ。一勝一敗だろ」

「そんな事はない」

「断言しやがった……。なら」

封鎖領域展開。対象は指定値以上の魔力保持者。

町の方まで覆ってなのはや守護騎士達を巻き込まないように注意して。世界を結界が覆った。

「これをする為にデバイスを起動する必要があった。だからまだ五分。本に書いておいたガン見してるストーカー君を捕まえた方の勝ちにしようぜ」

ベンチから少し離れた木の陰。そちらにクロノと共に視線を向けた。すると其処が発光して仮面の男が現れた。

（さっきの光……。変身魔法？デバイスの起動か？）

『クロノ。こいつがさっき話した変な奴。お仲間かい？』

『違うな』

『そうか。まあ、とりあえず話を聞かせて貰おうぜ』

仮面の男は、姿こそ見せたものの、そこから動くことしない。だからこそクロノも動かず、俺もいつでも動かない。

「町からずっと着いてきてたよな。だから町外れの此処にしたんだが」

「……」

「あの時の言葉はどういう意味だ。何が目的だ」

「……」

「答えろよ。喋れないわけじゃないだろう？」

俺の言葉を完全に無視をして、仮面の男は黙り続ける。苛立ちから、歯軋りをして一撃で沈めようと足に力を込める。分かり易く、だ。

そして状況が動き始めた。あの時と同じように、いきなりバインドが発動し、俺とクロノを拘束した。その直後、パンツと何かが破裂する音が辺りに響く。

「どこ向いてるんだ？」

「っ！？」

俺に背中を向けている仮面の男に声をかけながら、マテリアル・ハイを足場に、無防備な背中に思い切り蹴りを入れた。男はそのまま、俺とクロノが話をしていた場所まで飛ぶ。

再びパンツと音が鳴り、俺とバインドを破壊したクロノとで、男を挟み撃ちにするように立ち、拳を構える。

「あの時の借りは返させてもらおう！」

距離を詰めると同時に拳を振るう。その拳はプロテクションで防がれるが、それでも強引に振り切り、クロノの方へ飛ばす。その大体の着地地点でクロノが構えているが、それより早く、魔法が発動した。

「「なっ!?!」」

男の姿が消える。慌てて結界内の魔力反応を探すが、俺とクロノの物以外消えていた。

(結界は抜かれてない……。結界はちゃんと機能してるのに逃げられた?ありえないけど……。結界内なら侵入されれば反応できるし、結界内だけならどこに転送しようと捕まえられる。それが出来ないってことは……。中にいない)

ある裏ワザを使えば、勿論結界を突破することなく外に出ることは可能だ。でも、そのある裏ワザを使えるとなると、必然的にあの男が自分の良く知る組織の関係者だという事になってしまう。

訳が分からなくなり、とりあえず結界とBJを解除して溜息をついた。クロノの方を見ると、同じように武装を解いている。

「……クロノ」

「何だ?」

「俺の予感が正しければ、相手は非常に面倒な相手だ。捜査協力はしないが、有事の時に手を貸す位なら構わないぞ」

「ああ。それでも構わない。なのはやフェイト達に任せるには少々不安な相手だが、浩樹だったらなんら気にする必要はないからな」

「言ってる……。てか。なのはの事、事件に巻き込むな」

「彼女の意志だ」

思わず舌打ちして、さっさと本を回収する。クロノは何も言わない所を見ると、もう帰ってもいいのだからと判断し、歩き始める。

帰り際、一度だけクロノの方を向いた。

「なあ、クロノ」

「ああ」

「……元氣？」

「ああ、問題ない。そっちはどうだ？」

「元氣だ、大丈夫」

ひらひらと手を振り、改めて歩き始めた。脳裏にあるのは先ほどの違和感。

（なんでさっきの仮面の男。俺の拳を避けなくて防御したんだ？）

避けられる前提の拳だった。だからこそ、防いだ理由が分からない。あの程度の拳なら、あの晩に会った仮面の男なら余裕で避けられると思ったのだが。

（もしくは、違う奴か）

素顔を見た訳じゃないから何とも言えないが。でもアリシアの解析の結果などから考えても、その考えが最もしっくりくる。

だからこそ、問題は中身なのだ。

（あー、厄介な事を自分から引き起こそうとしてるのに、そこに厄介な事をかぶせないでほしいな）

半ば自業自得の為、諦めたように溜息をついてから、念話を繋げた。

『はいはい。こちらゼスト隊です』

『ミイユさん。ゼスト隊じゃないです。ちゃんと正式名称あるでしょう。忘れましたが』

『忘れちゃ駄目だと思つよ？それよりひー君。何で電話出てくれないの？心配したよ』

『すいません。ミイユさん。それより、クイントさんに繋げてもらえませんか？』

『もお。今繋げるから、ちょっと待ってね』

はい、と答えると、しばしの無言が続き、それからクイントさんの声が聞こえた。

『とりあえず、俺は何かあったら手を貸すが、アースラと合同捜査はしない、と言ってしまいました。構わなかったですか？』

『ええ。貴方に任せるつもりだったし。気にしなくていいわ』

『すいません。クイントさん。……もう一つよろしいですか？』

『何かしら？』

『デバイスを。出来れば、カートリッジシステムが付いているものをお借りできないかなと』

『ふむ……。ミイユ！』

何故か通信の向こう側でクイントさんがミイユさんの名前を呼んだ。聞き耳を立てていたのだろう。全く間を置くことなく『なんですか？』とミイユさんの声が聞こえてきた。

『貴女が作っていたあのデバイス。完成度は？』

『な、何で言うんですか、クイントさん！？あれは、浩樹君の誕生日にですね！』

『完成度は？』

『うう、待機を含めて四つフォームがありますが、待機とガントレットはほぼ完成。ナツクルは6か7割ですね。最後の一つはまだ全然ですから、使えません。後はインテリジェンスにしたいんですけど、その為のAIのプログラムも組めてませんし』

『そう。そう言う事らしいわ、浩樹』

いや、そんなこと言われても困るのだが。てかミイユさん。メカニクスの資格持っていたのか。ちょっと意外。はんだごてを使って火傷してそうなイメージなんだけど。

……不安になってきたよ。

『ミイユさん。あの、そのデバイス、お借りできませんか？』

『ええ！？ で、でも、まだ未完成だし。ひー君の持つてるアル八さんの兼ね合いとかもあるから』

『アル八はストレージですよ。アル八の意思を表明する為の通信機の仕事もしてるので、インテリジェンスに見えるかもしれないがそれに、インテリジェンスじゃなくても大丈夫です。未完成でもいいですから。お願いします』

『……うう、驚かせようと思ってたのに。えーと、じゃあひー君。こっちに来れる？色々調整もしたいし』

『了解です。じゃあ、そっちに向かいます』

『うん。待ってるよ』

通信を切り、一度大きく伸びをする。そして前を見据え、俺は走り始めた。一つ目はミイユさんの事をあまり待たせないため。そしてもう一つは。

「待ちなさい、そこの子供！」

「ええい、やっぱりあんたか！」

見つかってしまった相も変わらず仕事熱心なお巡りさんから逃走する為である。

第六十三話 A・S第九話 〈公私〉（後書き）

もうちょっとで一月放置するところだった……ごまだれです。

かなり久し振りに封魔を書きましたが、こんな作品だったっけ？と思わず首を傾げながら書いていたり。一人称、分かりづらい。

おまけに書いてる最中にあることに気がつき、プロットが仕事をしなくなり始めた……。止めて、もう止めてよ！！

ここまで呼んでくださりありがとうございました。

では次回。ごまだれでした。

PS：初めて携帯での投稿なので、何かあったら言ってください。
直します

第六十四話 A・S第十話 新たな力と乙女の危機 (前書き)

プロットの予定通りに進まない……

第六十四話 A・S第十話 〈新たな力と乙女の危機〉

12月04日 午前11時20分

クロノとの再会後、警察から暫く逃げ続けてようやく俺はデイビツトの家に辿り着いた。そこで、一応持って来た制服に着替えていると、同じく部屋の中で背もたれを此方に向けた椅子に座っているアリシアが、首をかしげた。

「なんで浩樹はお休み中なのに、制服に着替えているの？」

「なんで俺が着替え中なのに部屋にいるんだ、アリシア。もう慣れたがいい加減にしてくれ」

「気にしない気にしない。それで、なんで？」

「ちよつと管理局に用事。直ぐには戻れないと思うが……。まあ、夜には帰るよ」

最後にネクタイを締め上着を着て、姿見で自分の格好を確認した。
うん。まあ、相変わらず

「似合わねえ」「似合わないね」

アリシアと声が被る。アリシアに言われる度にグサリとくるのはいつものことだ。溜息をつき、転送用の魔法陣を準備する。

「んじゃ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

パタパタと手を振るアリシアに手を振り返し、魔法陣内に入る。既に慣れた不思議な感覚を感じた後、目を開けると、見慣れた場

所。そして此方に飛びかかってくる人影を見た。

「ひーくーん!!!!!!」

いつも通りの捨て身ですかと内心でツツコミを入れつつ、珍しく白衣を着ているミィユさんを受け止めた。思わずよろけたが、何とか耐える。

「……離れて下さい」

「いきなり連絡取れなくなって心配したので、離れません!」「それについては謝罪しますが……。時間が無いですし」

「どの道、デバイスにデータ入れてるけどまだ時間かかるよ。だから気にしない」

激しく気になるが。しかし残念な事に俺にはデバイスに関する知識は皆無だ。ミィユさんの言葉の正誤を判断する事は、俺には出来ない。

諦めて一つ溜息をつく。それから、ふと気になっていた事を思い出し、ミィユさんに声をかけた。

「何かな?」

「ミィユさんってデバイサーの資格、持ってましたっけ?無くても組める人は組めますけど」

「うん。自慢じゃ無いけど、通信士の他にバックヤード系の仕事の資格は殆ど持ってるし、ヘリの操縦も出来るもん。ほら」

そう言ってミィユさんは色々な資格の証明書を取り出した。一つ一つ受け取って確認していく。

「ミィユさん、万能なんですな」

正直以外だ。

「なんか失礼な事を考えてるでしょ」

「ノーコメントで」

「もう。私は戦えないから、後ろで出来るは全部出来るようにしたいだけ」

いや、専門職を持っていればいいんじゃないかと思うのは、俺が駄目な子だからでしょうか？そんな事を俺が考えていると、ミイユさんの端末が鳴った。ミイユさんが時間を確認すると、俺から離れた。そのまま何歩か先行すると、此方を向く。

「準備できたみたい。行こう、ひー君」

「……はい。そうですね」

「ん？どうかしたひー君？」

「いえ、別に。最近殺伐としていて、魔力蒐集やら戦闘やらで身体疲労がかなりギリギリなのに、おまけにアリシアとも原因が分かりませんが、どこかぎくしゃくしているので精神疲労も大分でしたので、久し振りにミイユさんに抱きつかれて癒されていたとか断じてそんな事は無いです」

「そうなの？」

「そうですね」

「そっか」

呟き、ミイユさんが俺にニコリと微笑んだ。そんなミイユさんに對して、俺はそっぽを向き、先に歩き始める。ミイユさんが少し慌てて歩き始めて、俺の隣に並んだ。

少し速めに歩く俺の隣を普通に着いてきながら、ミイユさんは思い出したように手を打った。怪訝そうに自身を見る俺に、再びミイ

ユさんがニコリと笑う。

「ちょうどいいし、デバイスの説明をしておくね。詳しくは後でデバイスの調整時に説明するけど、まあ簡単に」

「あ、はい。お願いします」

それについては聞かないとまずいから、素直に頭を下げる。ミィユさんが指を四本立てて俺に向けた。

「通信でも言ったけど、フォームは4つの予定だったけど、間に合わないから、3つね。4つ目は後で絶対に完成させてあげる」

指を一本曲げた。

「まずは待機。これは特に言う事は無いね。次に、ガントレットフォーム。これが基本形態。肘まで覆う装甲とグローブ。それと待機を除いた全フォーム共通のベルト。これには、カートリッジシステム用のシリンドラーとカートリッジ収納用のポーチが着いている。」

「デバイスではなく、カートリッジシステムが別で存在してるんですか？」

「うん。ひー君の魔力量は並以上だからね。若干の魔力伝達の悪さは目を瞑って、ひー君はデバイスをもう一つ持つてるから、その子の為にもカートリッジを使えるようにって」

なるほど。カートリッジシステムを共有出来るようにしたと、そう言う意味か。アルハは自分の判断で魔法使う時もあるし、それは確かにありがたい。

『どうしよう。私の中でミィユ・クライツの株が上がり始めてるよ』
『早いな、おい。てか、別にいいだろう』

何故か戸惑い始めたアルハにツッコミを入れる。ミユコさんは更に説明を続けた。

「ガントレットを選択したのは、ひー君がマテリアル・ハイで作った武器も使えるようにしたかったから」

「重さは？」

「ガントレットならそこまで重くないよ。両方合わせてもリボルバーナックル一つにも満たないから」

「助かります」

あれはさすがに重すぎるからな。あれを腕に着けて戦えるようになるのは……五年位？

「次はナックルなんだけど……」

説明している内に準備のある部屋にたどり着いたらしく、説明が中断した。

扉が開き、そこにガントレットとベルトが置かれていた。

「ナックルについての説明は後で。まずはこの子の名前を呼んであげて」

「もう決まってるんですか？」

「うん。どんな。『ステイコール』だよ」

「ステイコール……」

ガントレットを手に取り装着し、ベルトも同じく装着する。暫く具合を確かめるように、手を握ったり開いたりを繰り返す。

感触は割と良かった。シャドーボクシングをしたりと動き易さも確かめ、一つ頷く。

「いい感じですよ。ミイユさん」
「そっか。なら良かった。でも調整とか色々したいから、最低でも今日1日位は時間が欲しいんだけど」
「大丈夫です」

ミイユさんの言葉に一も二もなく頷いた。
夜天の魔導書の関係者が本格的に動き出すのは深夜だろうから、それまでは基本的に家事以外やる事もないし。俺としても、本格的に使用可能になったステイコールに興味があった。

「じゃあ、始めよっか。クイントさんの許可もあるから、付きっ切りで完成させてあげる」

「そうなんですか？」

「うん。ゼスト隊の殆どの人達が出払ってるから、お留守番って意味合いもあるけどね。でもクイントさんからお願いもされたから、頑張るよ」

「ミイユさんは頑張ったら空回りする時もありますから、程々にお願います」

「……はい」

自覚があつたからか、半泣きになりながらも、ミイユさんは俺の言葉に頷いた。

(そつえばステイコールってどういう意味なんだ?)

ふと疑問に思い、俺は内心で首を傾げた。

まあ、後で調べてみよう。

* * *

同日 午後01時20分

数時間前に浩樹の事を送り出した私は正直退屈していた。洗濯や掃除は済ませたし、ネットサーフィンも飽きた。持ってきたゲームは既にクリア済み。

ハッキングでもして色々覗こうかななんて考えても、正直興味がなく組織や機関が無い。だから結果として、何もやらない。ただベッドで横になっているだけ。……あれ？

「私、マツハで駄目人間街道まっしぐら？」

此処に来てから浩樹が家にいるから、基本的に家事をやる必要が殆ど無くなった。手伝う時は手伝うけど、浩樹は家事が好きだから結構さつさと片づけちゃって手伝う暇が無かったり。

……由々しき事態じゃないかな？女の子、それも恋する乙女的な意味で。

「こんな事してる場合じゃないよ！」

慌てて寝転がっていたベットから起き上がり、部屋を飛び出した。それから、部屋中を見渡したり洗面所などを見て、絶望に打ちひしがれた。

「なんでかな!？」

誰もいない事をいい事に、立ち上がって思わず吠えた。

「なんで掃除も洗濯も普通に終わってるのかな!? 昨日、あれだけボロボロで帰ってきて、そのまま寝て、今朝起きたら直ぐに出かけて、帰って来たと思ったら制服に着替えてまた出かけて行ったの! 訳分からないよ! あれなの!? 浩樹は時間でも操れるの!？」

正確に言えば、普段から掃除をしているから別段汚くなくて、洗濯だって出掛けに洗濯機を回して、帰って来てから干しただけなんだけど。

洗濯物はまだ乾いておらず、後で取り込むとして、これくらいしかやること無いかなあと思しながら諦め混じりに冷蔵庫の戸をあけると、冷蔵庫の中が殆ど空だった。浩樹にしては珍しいなと思った物の、浩樹の手伝いが出るチャンスだと思つて、私は大慌てで部屋に戻った。

「えっと、外出用の服は……」

持ってきた旅行鞆の中から一応持ってきた洋服を数着取り出した。その中から適当に選んだ服に身を包む。その姿を姿見で眺める。悪くはない……と思う。出かける用の服は気にした事がないから、よく分からない。

「浩樹なら同じ時間でももう少しマシなコーディネイトをするよねえ」

曰わく、日曜に出かける時などに適当な服を着ていくと、すごく怒る親友が居たらしい。名前は確かアリサ・バニングス。まあ、気持ちは分からないでもないけど。わざわざ追いつ返して着替えさせるのはやりすぎじゃないかな?

心の中で問いかけてはみる物の、当然の如く返答は無い。もう一度、姿見で確認をして、問題らしい問題も見つからないから、その

まま出かける事にした。

第六十四話 A・S第十話 〈新たな力と乙女の危機〉（後書き）

そういえば、デバイスを複数所持してる人ってあんまりいないよね。ごまだれです。

実はそのうち、デバイスを10個位持った人が主人公の小説が書きたいなあなんて思ってるなんて、口には出さないっ。言葉にはしたけどなっ！

今回は此処までです。

此処まで呼んで下さり、ありがとうございました。

では次回。ごまだれでした。

第六十五話 A・S第十一話 加速する今と始めまして 前編 (前書き)

前書き劇場

浩樹「第何回だ？」

アリシア「久々だから覚えてないね」

浩樹「てっきり打ち切りになったと思ったのにな」

アリシア「所詮ゴマだからね」

第六十五話 A・S第十一話 く加速する今と始めまして 前編く

12月04日 午後04時05分

落ち着いて考えてみれば怖かったんだと思う。浩樹から不要扱いされるのが。アルハザードの二人で住んでいた頃からそうだったけど、今はあの頃よりもそれが怖い。あの頃よりも、私は浩樹の事を強く思ってるから。

だから浩樹と勝手に外出をしないと約束した事。冷蔵庫の中に何も無いから、買い物に行くように浩樹がデイビットに買い物リストを渡していた事。そして、財布を持って出る事をこのタイミングまで忘れていた。

「あのー、お嬢ちゃん？どうしたの？」

それもこれも、全部浩樹の幼馴染ズのせいだ。いや、責めるのはお門違いだと思うけど。ちよつと魔法が出来る民間人がA級ロストロギアの事件に首を突っ込むとか、正気を疑う。それともPT事件を解決に導いたから、天狗にでもなっていたのだろうか。

……なあんで。落ちつけ私。いくら現実逃避したいからって浩樹の大切な人を侮辱したりしちゃいけない。多分浩樹の魔力反応に気がついて、事件に巻き込まれただけだろうし。そんな事よりも現状をどうにかする事を考えよう。

「お嬢ちゃん？どうかしたの？一人？」

「え、えーと……」

まずは現状を整理しよう。冷蔵庫に何も無い事に気がついて、買い物に出かけたのが実は三時間くらい前。でも知識皆無で出かけた

のが原因で、道に迷ってあっちこっち彷徨い続けて、ようやくスーパーに辿り着いたのに、私くらいの背だとカートが押しづらくてしようがないから、籠だけを手に取った。

そして今までの浩樹の買い物傾向から、欲しい物を当てながら（的中率八割強だ）の買い物をしていたら、籠が大分重くなっただけで、それでも頑張って買い物をして籠をレジまで持って行き……財布を忘れた事に気がついた。

その為、ポケットに手を入れたまま硬直をした私に、店員さんが優しく尋ねてきている。そういう状況だ。

「お嬢ちゃん？もしかしてお財布を忘れちゃったのかな？」

「……えーと。はい……」

「それなら、親御さんに連絡を「それは駄目！絶対！」

「え？駄目なの？」

そんな事したら、浩樹に連絡が行って、勝手に出かけたことがばれちゃう。二度手間に……というより、デビットがそもそも買い物に行ってるんだから、私がここで買い物をする必要もない訳でならいいかなと思っていると、「おいくらですか？」と女の子の声が聞こえてきた。

私と店員さんがそちらを見ると、車椅子に乗った女の子と私より色の薄い金髪の女性が立っていた。先ほどの声からして、恐らく話しかけてきたのは車椅子の女の子の方だろう。

「えーと……あの？」

「2374円ですが……？」

「2374円……っと」

車椅子の女の子が財布を取り出し、3000円を店員に渡した。状況についていけない私を置いて、恐らく仕事を続けてきた上

での条件反射なのだろう。店員さんがさっさと会計を済ませて、女の子におつりを手渡した。

かわりに彼女たちの買い物籠が置かれ私の籠は、車椅子を押していた金髪の女性が、持って行ってしまった。さらには袋に入れ始める。入れづらかっただろうから助かるけど、ここまでやってくれるのは何故？

首をかしげている私を置いて、袋には私が買った物が詰められ、会計が終わったらしい女の子も、やはり袋に詰め終わった。てか早っ。浩樹並みの手際じゃない？

「はいこれ」

「え！？あ、ありがとう……」

手渡された袋を素直に受け取る。……重かった。同じくらいの量をデイビットが買ったのかと考えると、冷蔵庫に収まりきるか不安になる。

「お嬢ちゃん、一人なん？」

「あ、うん。まあ」

「一人でお使いなんて偉いなあ」

「お使いと言うより、私が個人的に買ったただけだけど……。わ、私もう帰らなきゃいけないので！えっと、お金はいつお返しすれば」

「ん〜、出来るんやったら、早い方がええんやけど」

「じゃあ、今日中にお返しします。家の住所を教えてくださいませんか？」

「無理せんでもええよ？別に今日じゃなくても」

「でもいつまでこの町にいるかも分かりませんから。やっぱり今日中に」

「頑固やなあ。浩樹君みたいや」

「っ！？」

彼女の言った名前に、思わず肩が跳ねた。なんで知ってるのという疑問がわき、その直後に女の子の向こう側から別の女性が女の子に話しかけた。視界に写った桃色の髪に鋭い目。私は彼女の名前を知っている。

(ヴォルケンリッター、烈火の将……シグナム)

どうして此処にという新たな疑問が浮かび、そして二つの疑問は即座に解決した。関西弁で車椅子に乗っている栗毛色の浩樹と同一年くらいの女の子。そんな子がこの海鳴に二人と居るとは思えない。

「あ、シグナム……。どないしたん？」

(つまり、この人が)

「近くまで来たので、立ち寄ったまでです」

「八神……はやて……？」

「……？何でうちの名前知ってるんや？」

「……」

ヤバい。どうしようもないくらいにピンチだ、この状況。九割九分八神はやては事件の関係者で、しかも浩樹の想像した最悪なケースなのだろう。正直今すぐにでもこの袋の中身をすべて返品して、そのお金をお返しして縁を切りたいくらいだ。

でもそんなこと出来ないしと悩んでいると、地味な痛みが後頭部を襲った。その地味な痛みには私は思わず涙目になっていると、聞きなれた溜息が聞こえてくる。恐る恐る振り返ると、浩樹の姿。そして今度は傘が振り下ろされ、額に当たった。

「痛っ」

「この程度が痛い訳ないだろう」

鍛えてる人と一緒にしないでほしい。ちらりと後ろを見ると、はやては驚いた顔をして、シグナムと恐らくヴォルケンリッターの一人だと思われる女性は、鋭い視線を此方に向けていた。溜息をつき、私に顔を寄せるように肩を組んだ。

「……………てか、随分と面倒な状況に陥れたな、おい」

「わざとじゃないよ？」

「当たり前だ」

小声で会話をして、浩樹が再び溜息。そして私から離れると、くるくると傘をバトンのように回して、浩樹はそれを肩に担いだ。何かを考えるように乱暴に頭を？き、私が持っている袋に目が行った。

「アリシア。それ、どうした？財布、忘れてたよな？」

「はやて……………さんに貸して貰って」

「……………いくら？」

「2374円」

「地味に出費でかいな……………。まあ、今晚は四人分の食事を作る予定だったから別にいいけどな。今度から気をつけてくれ」

「はい」

さて、と呟き、私の方から私の後ろ。はやて達の方を見た。つられてそちらを見ると、先ほどまでとあまり変わらない表情で、八神家がこちらを見ている。

「ふむ」

ポケットを漁り財布を取り出しながら、浩樹がはやてに近づいた。暫く財布を漁り、面倒になったのか3000円取り出して、はやて

に渡す。

「じゃ」

「……いやいやいや！」

片手をあげて颯爽と去ろうとする浩樹をはやてが慌てて止めた。

「此処は見送るところだろう？」

「いや、有り得へんやろ」

「な、なんだってー」

「白々しい！」

……始めて見る気がする。天然じゃなくて、わざとぼけてる浩樹は。

ヴォルケンリッターの人達もあんなはやてを初めて見たのか、驚いているらしい。とりあえず、固有結界張ってるみたいで気に入らない。

(どうにかして邪魔してやるうか)

そんな事を考えていると、押し問答というか夫婦漫才のようなやりとりが終わり、浩樹が困ったように頭を掻いた。

「悪い、はやて。今日は本当に見逃してくれ。今日は客人もいるから、早く帰って夕食の準備がしたいんだ」

「……半年振りに会った友達より、客人優先なんか？」

「正確には7ヶ月振りだな。まあ、大差ないが。今回は本当に大切なお客様なんだ。すまん」

「ふむ……そこまで言うなら、本当に大事なお客様みたいやね」

「本当に疑ってたのかよ」

浩樹が溜息をついた。

「次いつ会えるのか、確約したら信じてあげてもええで？」

「厳しいな。……まあ、明日でも明後日でも問題無いが。明後日の方がいいな」

「そうなん？なら明後日。絶対やで？」

「ああ。それはそうと、悪いが一つだけ条件。他言無用だ。すずかにもな。来てるようだったら、俺は帰るぞ」

既に会わないと決めていた人達の大半と会っているのに、それでも会わないを貫こうとしているらしい。変なところで意固地なのは相変わらずだ。

そしてはやてからしてみれば浩樹の言葉の意味が分からず、首を傾げていた。ヴォルケンリッターは……凄く睨んでる。

「よう分からんけど、すずかちゃん達には内緒なんやね？」

「ああ」

「了解や。ほんなら明後日。ええと、午後からでええ？」

「それでいい。じゃあ、はやて。急ぐから。またな」

「うん。浩樹君もアリシアちゃんもほなな」

手を振るはやてに見送られ、私と浩樹は二人で歩き始めた。

しかし浩樹は店を出て暫く歩いた路地裏に入ってしまった。理由は分からなかったが、大人しくついて行く。その中程で立ち止まると、そこで誰かを待ち始めた。

十分ほど待ち、路地裏の入口にある人物が現れる。

「話を聞いてくれるのなら大歓迎だが」

「黙れ」

シグナムの手に、デバイスが握られた。すると浩樹は、私に買い物に入ったビニールを渡しつつ、庇うようにして前に立つ。さらに袖をめくり、既に起動していて腕輪にしていたアルハの端末を晒した。しかし何故だか、その腕輪には黒猫のキーホルダーがついている。

「今日は急いでるんだ。見逃してもらえないか？」

「主はやてのことを知られた以上、帰すわけにはいかない」

「俺はスタンドプレーだから、特別誰かに話すってこともないんだけどな」

そう言いながら浩樹が私の頭を触る。

「こいつだけでも見逃してくれない？」

「アリシア。よく聞け。どうにも妨害が働いてて、念話が使えん。

こうやって接触していれば、アルハの端末を持つ者同士で、連絡は取れるんだが……」

「アリシアは管理局員じゃないんだし、構わないだろ？」

「交渉が決裂したら、お前を転送する。そしたら家に戻れ。俺は帰るのが遅くなるだろうから、食事を作れなくてごめんなさいってミイユさんに……。後、部屋を借りますって」

「何で部屋？」

「まあ、色々な。考えがある」

「むう……。分かったよ」

「ありがとう、アリシア」

少し撫でてから、浩樹が私から手を離した。そして、シグナムの方を向く。「返事は？まさかNOじゃないよな？非戦闘員に手を出すような騎士じゃないって信じてるぞ？」

私を安全に逃がすためなのか、挑発をするような言葉を使う浩樹。悔しそうに呻いたものの、騎士としての誇りなのか、浩樹の言葉に頷いて返した。

「その少女は帰すといい。だが」
「分かってるよ。アリシア、先に帰れ」

浩樹が私にそう告げ、数歩前に出る。そんな浩樹の背中を少し見つめてから、私は踵を返した。

第六十五話 A・S第十一話 く加速する今と始めまして 前編く(後書き)

はやてに漸く出番が、ごまだれです。

なにやら筆が遅く、なかなか書けなかった……。てか、はやて喋らせづらいよ！だから出番減るんだよ！……ごめんなさい、何でもないです。

今回は此処までです。

読んで下さりありがとうございます。

では次回。ごまだれでした。

ほなな

第六十六話 A・S第十二話 加速する今と始めまして 後編（前書き）

作者ことごまだれがとある封魔を五つの事柄で表したら。

一つ、思い入れがある何作目かになるオリ主のなのは二次創作

二つ、シリアスはどこかに置いてきた

三つ、キャラが瞑想する人外になり始めた主人公『高坂浩樹』

四つ、普通をどこかに忘れてきた、カオスの鱗片を見せる主人公至上主義ヒロイン『アリシア・テストロツサ』

五つ、（作者にとって）癒やしの天使『ミィユ・クライツ』

意外と楽しいから、バトンにしようかな、これ

第六十六話 A・S第十二話 加速する今と始めまして 後編

S i d e : 浩樹

12月04日 午後04時20分

アリシアを帰らせ、俺とシグナムはようやくお互いに向き合った。つい数日前に戦闘をしたばかりに関わらず、久しぶりにあった気がするのは、何故だろうか。

(何か一月近く立ちっぱなしだった気がする)

何でこんな気になるのかは分からんが。これについては後で考えるとして、今はシグナムだ。

前を見るとシグナムがこちらを睨んでいる。……それにしてもだ。

「なあ、シグナム」

「……なんだ？」

「何だつて其処まで俺を目の敵にするんだ？確かに管理局員という事を黙っていた非はあるが、しょうがないと言うことはお前も理解出来るだろう？」これは今日ふと疑問に思った事だ。

「それとも俺が管理局員だからって理由以外にもあるのか？」

「貴様には関係無い」

「目の敵にする対象が俺じゃなければな。でもお前のその目線の先には居るのは俺だろうが。……でもその目、どっかで見た事あるな」

ふとそんな事を思い、俺は首を傾げた。見たのは最近ではなく、もっと前。まだ学校に通っていた頃に向けられていた視線だ。えーと

……ああ、そつだ。

「嫉妬？」

「っ！？」

「凶星か。ああ、なる程。それなら納得だ」

誰かの視線に似てると思ったらなのはとかのファンクラブの連中の視線にそっくりなんだ。

「大方、今まで居なかった癖に、いきなり現れてはやてとの関係を脅かしそうなのに、あるうことが管理局員だとふざけるなつてとこるつて危ねえ！？ふざけるなよ！？」

「ちよつと黙れ貴様！！」

上段から振り下ろされたレヴァンティンを白刃取りして、ギリギリで止めた。反射的と言っても普段の危機に対してのものではなく、殺気に対しての恐怖心からの防衛反応だったのが地味に悔しい。

「いくら歳不相応の耐久力に定評のある高坂君でも、こんなんくらつたら死ぬからな！？」

「安心しろ！峰打ちだ！」

「峰じゃねえし！刃が普通に下向いてるじゃねえか！！」

「古代ベルカでは、こちらを峰と言つんだ！」

「マジで嘘自重しやがれ！！」

レヴァンティン越しに睨み合いながら、お互いに我慢比べのようになってきた。俺なんかは少しでも気を緩めればそのまま地獄への片道切符だから尚更だ。

「いい加減に刃、引きやがれ！！」

「貴様が力を込めているから、引けんのだろうが!!」
「お前が力込めてるから、抜けねえんだよ!!」

とは言えいい加減に不毛に思えてきたのも事実だ。それはシグナムも同じなのか、少しだけレヴァンティンを押す力が緩んだ。その隙をついて、バックステップで距離を取る。シグナムも追ってくる事はせず、レヴァンティンを待機フォームに戻した。俺も手首を解しながら、シグナムに視線を向けた。

「安心してくれ。俺としても、長居したい訳じゃない。そもそも此処みたいな管理外世界は本局の担当だ。地上の俺達の仕事はミッドの平和を護ることだからな」

「ならばどうして此処にいる」

「言っただろう。俺の目的は夜天の魔導書を救うことだ。それ以上でもそれ以下でもない」

ぶれてはいない。俺の目的。人によって歪んだ魔導書の救済。歪むのは俺だけがいい。

「はやての足の原因は知ってるか？」

「……」

「知ってる見てえだな。だったら話は早い。俺には作戦がある。かなりの高確率で成功もする」

我ながら無茶なプランではあるが。これ以外のプランも幾つかあることにはあるが。一から十まで一人でやりきれそうなプランはこれしかなかった。

「良かったら聞くか？」

俺の完全無欠の最高のプランを！！

『嘘乙。私の企画立案だし』

『……そうだったな。すまんアルハ』

Side out

Side：アリシア

デイビットの家に帰ると、会った事が無い女がいた。浩樹の周りにいる女にしては、珍しく年上（所属部隊副隊長陣は除く）らしく大凡15歳位だろうか。童顔だし、若干若く見えるけど、恋敵（もしくは恋敵予備軍）の情報を集めているうちに目は養えたから、私の女を見る目に間違えはない。

「ただいま。デイビット」

「おお、お帰りぞな。同志浩樹はどうしたぞな？迎えに行ったはずぞな」

デイビットの言葉を聞きながら買ってきた物を冷蔵庫に入れていく。開けたときの中身から、自分の買い物がどの程度あっていたのか確かめ（相変わらず8割キープだった）、取りあえず外に出しておいても問題無い物を冷蔵庫から出してしまい、自分の買ってきた野菜とかを仕舞っていく。

「おーい、無視されるのは地味にきついぞな」

「え？ああ、ゴメンゴメン。浩樹は用事があるみたいで、今日は遅くなるって。それから……」

テーブルの方を向き直る。名前は知らないけど、多分……。

「ミイユさん？」

「ん？……君は、もしかしてアリシアちゃん？」

「もしかしなくても私がアリシア・テスタロッサですけど」

「やっぱり！ひー君から色々聞いてるよ、アリシアちゃんの事」

「……」

ひー君って言うのはもしかして……否。もしかしなくても浩樹の事だろう。この女、あろうことが浩樹の事をあだ名で呼ぶだと！？なんて羨ま……羨ましいよ！！悪いか！！

「どうしたの？」

「何でもありません。ちょっと地球の真実について考えてました」

「あの一瞬でそんなに難しい事、考えてたの！？」

「まあ、浩樹の事ですけど」

「地球〓ひー君！？」

地球 浩樹です。まだぎりぎり地球が粘ってるからね。

「そんな事より浩樹から伝言が。今日は帰るの遅くなりそうだから、夕飯はまた後日だそうですね」

「そっか。残念。ひー君のご飯、美味しいから楽しみにしてたのに」
「気持ちは分かりますけど、今回は諦めて下さい。それから良く分らないですけど、部屋を借ります、だそうですね」

こっちの伝言の意味は私には分からない。ミイユさんなら何か知ってるかなとも思ったけど、知らないらしい。なんか安心。

「まあ、ひー君は掃除もしてくれるだろうし、部屋を借りられることにはあんまり抵抗無いけど。でも何でだろ?」
「さあ?」

顔を見合わせ、私とミィユさんは首を傾げた。

「……同志浩樹が帰って来ないなら、今晚の夕飯はどうするぞな?」

Side out

Side : 浩樹

「と、まあこんな所だ」

アルハの力を借りるとは言え、基本的に一人でやれるプランだから、説明する必要は殆ど無い。それでも説明したのは、信用を得るためだ。

「どうだ?」

「……本気、で言っているようだな」
「当然」

このプランをアルハが考えた時、即決するほどだったのだ。それだけこのプランには自信がある。

とは言えアリシアに言えば全否定間違いなしだろうから、このプランは俺とアルハ以外、さっき説明したばかりのシグナムしか知らな

い。

「正気の沙汰とは思えんな」

「なんかひどいこと言われてる」

「本当にその計画をやれるとしても、ハイリスク、ローリターンだ。個人で動いていたとしても組織で動いていたとしても、得る物は少なすぎるだろう」

「別に何か得たい訳じゃない。闇の書の救済。それが出来るならハイリターンだよ」

そもそも昔からリスクに対してのリターンなんて考えた事がないのだ。やるべき事をやれるやり方で行う。行えればそれは自分にとってのリターンになりえるのだから。

「他にもあるぞ。本当にやれるのか、という話だ」

「それについても問題ない。俺の相棒は恐らく全次元世界中、これ以上無いほどに最高の相棒だからな。その相棒に鍛えられたんだ。自分の実力は分かってるつもり。だから言える。不可能じゃない。可能だ」

「……」

はあ、とシグナムが溜息をついた。

「次に家に来た時。その時失敗すれば、今度こそ私はお前を斬るぞ」
「オーライ、シグナム」

再び殺気に当てられ、少し震えた事もあり軽く返すことで誤魔化す。シグナムはその場で回転し、そのまま路地裏を去っていく。姿が完全に見えなくなってから、近くの壁に寄り掛かった。

「はあ、怖かった」

『みたいだね。脈拍も発汗量も上がってるよ』

「分かってるよ。明後日もあんな視線の中で作業しなきゃいけないって思うと、気が滅入るな」

『本当にねえ』

再度溜息。そして壁に寄り掛かるのを止めると、俺も同じく歩き出した。

アルハと会話する為に、念話に切り替える。

『でも、ようやく一段階だ』

『前までなら家に行つた途端に潰されたり斬られたりしたかもね』

『言わないでくれ。俺も地味に覚悟してたんだから』

行く前にシグナムと話す機会が出来て本当に良かったと思う。そうじゃなければありとあらゆる予防線を張ったうえで行く羽目になってたし。まあ、予防線は張るにこしたことはないから、今度はやての家に行く時も予防線は張るのだが。

予防線の内容を色々考えつつ、それに加えて当初予定していたタイムスケジュールも変更していく。

『にしてもアリシアは。時々かなり大きな問題を招き寄せるな』

『そうだねえ。アリシアがいたから、浩樹はクイント・ナカジマと闘うはめになったり、今回だってそうだし』

『ある意味天賦の才だな。俺はいらんが』

『浩樹はイレギュラーに弱いもんね』

『どうにかしないととは思っけどな』

少なくとも戦闘中にイレギュラーのせいで体が硬直する、なんて事はあってほしくない。シグナムとの戦闘の時だって、それがあつた

から結果的にシグナムやヴォルケンリッター達の敵対姿勢が強くなつたような気もするし。まあやるべき事は決まっているのだ。タイムスケジュールの前倒しはそこまで問題でもない。

イレギュラーがなければ、大凡のプラン終了の目安は12月の中旬。大体12月20日位だろうか。

……そう、イレギュラーがなければ。

『人はそれをフラグというね』

『黙れアルハ。とりあえず、そのフラグを折るのに、目下最もイレギュラー的存在であるあの仮面の男をどうにかするのが、可及的速やかに解決すべき問題だ』

『そうだねえ。顔が割れてれば、そこから身元なり何なり見つけ出して、大人しくしてろって脅しはかけられるけど……、何も分かってないからね』

『分かっているのは、最低二人って事だな。これはまず間違いない。クロスレンジの肉弾戦専門とミドルとアウト担当の魔法専門。その二人が全く同じ見た目で存在してる』

仮面の男と数度戦い、その戦闘データを元に研究した結果だ。これについてはまず間違いないと言える。

『問題はこいつらが組織だっているのか、それとも個人で動いているのか、だ』

『前者だとこの仮面の男を倒したとしても、トカゲのしっぽ切りみたいに切られて、新しい奴らが来るかもしれないしね』

『何も分からない以上、今は目先の敵をどうにかするべきだな。ヴ

オルケンリッターについては、完全敵対という形はとらなくて済むはずだし、敵はあいつらだけだ』

仮面の男の姿を思い出し、わずかな苛立ちと共に、拳を手のひらに叩きつけた。黒猫のキーホルダーについていた鈴がチリンを似合わない音を鳴らす。

『……そういえば、結局ミイユさんの部屋、借りなかったな』

ゆっくり話が出来るところが必要になるかと思っただが、そんな事もなかったからな。

『それに思いのほか時間もかからなかったし、こんな事なら夕飯作ればよかったな。まだいるかな、ミイユさん』

『どうだろ？ 気になるなら急いで帰れば？』

『そうだな』

アルハにそう返し、両足に力を込め、一気に走り始めた。

第六十六話 A・S第十二話 く加速する今と始めまして 後編く(後書き)

一月ぶりです。ごまだれです。

シリアスはどこかに置いてきたので、何故かコメディチックなシグナムとの会話でした。どうしてこうなった……毎回言ってる気がする。

7月はテストがあるので、なかなか書けません、頑張ります

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

では次回。ごまだれでした

第六十七話 A・S第十三話 く決断と黒化加速の主人公く（前書き）

二作品同時にしか書き進められないらしい

第六十七話 A・S第十三話 〈決断と黒化加速の主人公〉

Side：浩樹

12月04日 午後07時23分

カチャカチャと洗い物をする音が響いている。珍しい事に音源は現在部屋に籠もっている俺でなければアリシアでもない。ミユさんだ。

シグナムとの話が終わった後、デイビット宅に戻るとミユさんがまだ居た（そもそも俺がいないと転移的な意味で帰れなかった事をすっかり忘れていた）から予定通り夕飯を食べ、洗い物位はするよゝとのことだったのでミユさんに丸投げして、俺は部屋に引きこもった。

足下にミッド式の魔法陣。周りには鍵盤型の仮想キーボードが展開されている。ディスプレイが無いのは必要無いからだ。

「……っし。アルハ、一段レベル上げてくれ」

『正気？つて、聞くだけ無駄か。相手が相手だし、今回はやれるだけ準備はしたいからね』

「正直この街以外の戦闘行為も全部無視して準備して、万全の状態で挑むつもりだったからな」

『でもまあ、予定外とは言え第一段階はクリア出来たんだし。これについてはアリシアに感謝じゃない？』

「当たり前だ。ある意味一番やつかない第一段階をクリアした以上、後は俺がどう出来るか。それだけだ」

寧ろ失敗すれば、アリシアは自分のせいだっと思うかもしれない。それは嫌だった。

「『成功させなきゃいけない』が『絶対成功させる』に変わっただけだ」

『分かり易いね浩樹』

「ああ。だからアルハ。続きを頼む」

『うん。ちよつと待って』

そう言ったアルハが夜天の書ハッキング練習用の新たなプログラムを発動させようとして、それを妨害するように電子音が流れた。続いて開いていないにもかかわらず、スクリーンが自動的に開く。映った顔を見て、「うわあ」とあからさまに嫌そうな顔を見ると、スクリーンに映った顔の主は溜め息をついた。

「……何か用？」

『所属が違うとは言え、仮にも上官に対する言葉思えないな』

「上官ではないだろう。先輩ではあるが。そして本局の先輩を敬うつもりはないぞ」

『君の歳でそこまで本局を毛嫌いしている人間も珍しいな』

「しよつちゆう、本局についての愚痴を聞かされてる身だからな」

主にレジアスさんから。何を考えているのか、ゼストさんにちよくちよくレジアスさんとの夕食とかを相席させられて、もとい、相席させて頂いている。その度に酔ったレジアスさんが本局の愚痴を俺に延々と語った挙句、怒られるのだ。最近の若い局員は、と。堪ったもんじゃない。俺は何もしてないのに。

「で、執務官。何か用か？」

『ああ。今、海鳴市街の方で闇の書の守護騎士二名を捕縛結界で閉じ込めている』

「捕縛結界？」

サーチをかけてみると、確かに局の捕縛結界が張られていた。厄介な状況なのだろうか。

「行った方がいいのか？武装局員動員してお前が出れば、問題無いだろう」

『本気で言っているのか？』

「俺が言うのもなんだが、武装局員の質にもよるな。本局は人数多いせいで、武装局員の質にムラがあり過ぎるんだ。地上本部から持つて行くだけ持つて行って、腐らせやがって」

『……………』

画面の向こうでクロノが難しい顔になった。そんな事は関係ないの
で、ここぞとばかりに普段レジアスさんから言われている愚痴とか
愚痴とかを吐いて行く。

「大体」

『待て。ストップだ、浩樹。その話は後でゆっくり聞くから、とりあえず今は……………』

「ふむ、だがまあ、断る」

『なっ！？』とクロノが驚いた様子だったが、此処でヴォルケンリ
ッターと敵対する立場に立ちたくない、というのが一点。それに加
え。

「捕縛結界の外に、この前の仮面の男の魔力反応がある。俺はそっ
ちに行く」

やはり気がつかなかったが、街中にしかけて置いたサーチャーの一
つから反応があった。

『……分かった。浩樹。それに加えてもう一つ頼みたい事がある』
「なんだ？」

『外に闇の書を所持している者がいるかもしれない。探してくれ』
「ああ、了解だ」

通信を切る。素早くB J（バリアジャケット）（正体を隠すようではなく、普段使っている機動型だ）を起動させ、その身を包む。そして少し悩んでからアルハを外し、待機状態のステイコールのみをその手に持った。

『もしかしなくても置いて行く気？』

「ステイコールのデータ收拾もしたいからな。アルハには練習用プログラム組んどいて欲しいんだけど」

『……はあ、了解了解。行ってらっしゃい、浩樹』
「ああ、行ってきます」

部屋から飛び出し、そのままキッチンへ向かうと、ちょうど洗い物を終えたらしいミイユさんに声をかけた。

「どうしたの？ひー君」

「今から実戦してくるので、データ収集の方、よろしくです」
「へ？あ、ちよつと！」

ミイユさんの制止は聞かず、家から飛び出すようにして外に出ると、そのまま飛行魔法を発動する。

まずは反応のあったサーチャーの元へ。そこで一旦止まり、辺りを見渡す。

「此処か……。捕縛結界はあそこ」

結界内をサーチすると、魔力反応が複数。良く知るものは多く居た。

「なのはとフェイト。ユーノにアルフもいる。クロノは……結界の外に居るのか。ヴォルケンリッターはヴィータとザフィーラ。シグナムもいるが、シャルルはいない。夜天の書はシャルルが持つてる。って考えて正解かな。なら、シャルルを見つければいいだけ……」

シャルルとは直接会った事がないから、魔力反応による逆探知が効かない。でも。

「仮面の男の魔力反応は微弱だけど見つけた。数は2。予想通りかならシャルルの方はクロノに任せるのもありだけど……」

此処で仮にシャルルが拘束されたとすると、今後に影響が出る可能性が大きいのも事実。とは言えあからさまにシャルルを庇う訳にもいかないか……。

さて、どうしたものかと首をかしげていると、動きがあった。仮面の男の魔力反応二つの内、一つが今まで隠匿していたにもかかわらず、急に隠れるのを止めたのだ。

(……解せないな。俺とクロノを釣る気か?)

先ほどまでと違い、此処まで分かりやすい魔力反応になれば、現れたのが白兵戦担当の俺を以前蹴り飛ばした方、という事はすぐに分かった。それならば俺とクロノの二人を相手しても、自身を囮にして逃げ切れると踏んだのだろうか。

(それでもわからん。此処で俺達を相手取るメリットが思いつかない)

男の目的を知らないからではあるが。……そういえば。

「俺、あいつらの目的について考えたこと無かったな」

一旦飛行魔法を止め、適当なビルの屋上に降り立った。それからB
Jを黒のロングコートに変え、フードを被る。そしてビルの屋上を
蹴ると、なるべく魔法を使わないようにするためにマテリアル・ハ
イで足場を作りながら、移動を再開した。

(とりあえず、これで向こうから俺の居場所が割れるってことはな
い筈)

この黒のロングコート型BJはアリシアの傑作の一つだ。魔力波長、
温度分布、その他諸々のサーチ手段を全て無力化するという、使わ
れたら厄介きわまりない代物だ。とは言えやっている事と言えば、
アリシアのプログラムが外部に出る俺のデータをとことん打ち消し
ているに他ならない。

だからこそ、直接目視されればどうしようもない訳だし、戦闘中と
かにもそこまでの性能は期待できないのだが。今みたいに純粋な隠
密機動で時間を稼いだりしたい時は便利な事この上ない。

(アリシアには後で改めて礼を言う事にしよう)

そんな事を思いながら、足場を蹴りビルに着地。助走をつけてから
再び宙に跳ぶ。

(さて、向こうは無事に俺の事を見失ったかな。追ってくる気配も
ないし)

魔力反応はクロノの方に向かっていった。クロノとは結界を中心に反時計に走っていたから、その内鉢合わせるだろう。

（それまでは男の目的、だな）

男の言った事、行った事。全てを思い返しながら走る。

「……案外覚えていないが」

初めて会った時の事を思い出す。俺への不意打ち。結界の突破。そして。

「来るべき時、か」

言葉の意味を闇の書の完成と見るなら、理由は分からないが、夜天の書の完成が目的のようにも見える。だから妨害をする俺を攻撃した。

でもそれだと理由が分からない。夜天の書が闇の書と呼ばれるようになってからの機能などは一応調べたが、完成したところで制御出来るような物じゃない。それは正式な所有者にも言える事。

「後で考えるか」

情報が少なすぎた。なら下手に考えて思考の幅を減らすくらいなら、今は目の前の事が大事だ。

「見つけた」

ビルに着地し、姿を隠しながら別のビルの屋上を見た。

「あの人がシャマル、かな」

手に夜天の書を持ち、結界の方を見つめている。

（結界が抜けなくて困ってるってところか）

夜天の書を使えば恐らく抜けるだろうが、出し渋っているのだろう。気持ちは分かるが、あまり悠長なことをしているとクロノが来ると思うんだが……既に手遅れか。シャマルに気がつかれないように着地したクロノがシャマルにデバイスを向けた。

「搜索指定ロストロギアの所持。および使用の疑いで、貴女を逮捕します。抵抗しなければ弁護の機会が貴女にはある。同意するならば武装の解除を」

管理局員のテンプレ的な言葉をシャマルに放つクロノ。

とは言えクロノに手出しを出来ない以上、やる事は決まった。

（結界の破砕突破。少しきついが、やってやる）

固さはともかく、プログラム自体は良く知ったものなのだ。少しきついが抜ける。そう判断して結界にハッキングを仕掛けようとして、サーチャーに反応があった。

その直後、クロノが仮面の男に蹴り飛ばされて別のビルに叩きつけられる。驚いた顔をしているシャマル。そこからやはり仲間じゃない事ははっきりした。

「貴様……。やはり仲間だったのか」

クロノの言葉。その言葉は無視し、仮面の男はシャマルに「使え」

と声をかけた。

「え？」

「闇の書の力を使い、結界を破壊しろ」

「でも、あれは！」

「使用して失ったページはまた増やせばいい。仲間がやられてからでは遅かるう」

その意見は確かにごもつとも。だがしかし。

「なにっ!？」

仮面の男を取り囲むように魔力球を生成して配置する。

「使わせるかよ。俺の計画には夜天の書の完成も重要なファクターなんだからな。悪いが今ここで魔力を消費させる訳にはいかない。それにページの蒐集に時間をかけさせる訳にもな」

声をかけながら、シャマルと男のそばに姿を現した。B Jを機動用の物に変えてから、パチンっと指を鳴らす。その直後、男を取り囲んでいた魔力球が一斉に炸裂した。

「レイズシユート、ブラストシフト。設置型のトラップにも使えるし、目くらましにも使える。レイズシユートの新シフトだ。便利だろっ?」

そんな軽口を叩きながら、ヴォルケンリッター全員に念話を繋げた。

「聞こえる?」

「な!?! てめえ、ススワタリ!」

『黙れゴスロリ鉄槌』

『誰がゴスロリ鉄槌だ!!』

『単刀直入に言うぞ。今から結界を抜く。それに合わせて撤退しろ。追えないようにジャミングは俺が担当する。安心してくれ。じゃあ、抜くぞ。三』

『ちよ、ちよっと待って!』

カウントダウンをシャマルに止められた。

『なんだ?』

『貴方、管理局員なんでしょう?なら、なんで私たちの味方をするの?』

『畏とでも思ってるのか?詳しく説明している暇はないし、俺の目的とかについてはシグナムに聞いてくれ。今日話したから』

『そうなのか、シグナム?』

『ああ、まあ、な』

『もういいか?じゃあ抜くぞ。三、二、一』

カウントは三つ。その直後に結界が脈絡もなく破壊された。プログラムの内容を十割十全理解してればこれくらいはちよるいな。

一瞥した後、シャマルが。そして戦闘中だったヴォルケンリッター全員が飛び去り、それに合わせてジャミング用のプログラムをバラまく。アースラのシステムにハッキングしたアリシアの用意したプログラムだし、まず成功したと考えていいだろう。

さてと、と一息ついた直後、右から振られた回し蹴りをステイコールで防いだ。

『どういつつもりだ、貴様』

『そっくりそのまま言葉を返すぞ。お前、どういつつもりだ』

男の足をはじき、距離を取る。

「貴様の目的は何だ」

「初めて会った時に言ったはずだぞ？もう忘れたのか？それよりも俺は」

仮面の男に殴りかかる。両の拳に蹴りを交えながら、次々に攻撃を放つが、全てぎりぎりです防がれたり紙一重で避けられていく。

(……やっぱり、純粋な格闘戦技じゃ勝ち目は薄いか)

まあ、別段捕まえる必要もない。顔が分かればいいのだから、此処でやるのは。

「っ！？」

「チエックだ」

ブラストシフトの魔力球。それを仮面の男の顔の直ぐ前に生成した。威力は抑えてはいるが、仮面を破壊するくらいはたやすい筈。指を鳴らす。その直後に爆発が起きた。

「ガッ」

カウンターのよ様な男の蹴りが腹部に突き刺さり、クロノ同様に蹴り飛ばされる。

「痛あ……」

数メートルほど蹴り飛ばされるが、何とか着地をして男の方を見る。壊れた仮面はあったが、本人らしき姿は見えない。

「逃がした……。しくじったな」

手の内を一つ晒しただけだ。戦闘データもほとんど取れてないし。

「まあ、いいか。結果オーライだろ」

ヴォルケンリッターは無事に逃げたみたいだし、今回はそれで良しとしよう。

そう判断して、俺は慌てて転送魔法を発動した。

「あつ、また逃げようとしてる！アルフさん、捕まえて！」

「まだ怒ってたのかい！？でも私が浩樹の所に着くより、転送のが早い気がするんだけど……」

「ちよつと待ってよ、浩樹！」

「フェイトがスクール水着を着てたら考えない事もないぞ？」

「ええ！？」

「冗談だよ」

アホな事を言っつて一番早いフェイトの足を止めて、俺は悠々と転移してその場から逃げだした。

うーむ、やっぱり関わるの止そうかな。

ちなみに帰宅から数十分して、すっかり存在を忘れ去られていたクロノからお叱りのメールが届くんだが、俺には関係ないよね？だって、結界突破以外で悪いことしてないし。

第六十七話 A・S第十三話 く決断と黒化加速の主人公く（後書き）

浩樹は黒樹にジヨブチエンするのか？ごまだれです。

一度シャマル視点を書きまして、それが見事に消えたので一貫しての浩樹視点。

バトルに関わらないこともあって、4話から5話Aパートまで一気にやりました。だから黒化も加速したのだろうか。

後書きののだが『黒樹爆誕。ごまだれです』になる日も近いですね。

此処まで読んで下さり、ありがとうございました。

では次回。ごまだれでした

第六十八話 A・S第十四話 く来訪と自己犠牲のエゴイズム（前書き）

自己解釈というか屁理屈というか。そういうのがあるので注意です

第六十八話 A・S第十四話 来訪と自己犠牲のエゴイズム

Side: 浩樹

12月06日 午後01時48分

ヴォルケンリッターとアースラクルーとの二度目となる総力戦のよ
うな戦いから数日。昨日付けで休暇を満喫する事無くさっさと管理
局として復帰してしまいました。

まあ、関係無いと言えば無いのだが、地味に自由に動きづらくなっ
たなあと思う今日この頃。結界突破についてもクロナから睨まれて
いるっぽいし。何とかして、あの仮面の男に罪を擦り付けるか、無
かったことにしないと。本当に動けなくなっちまう。

「ねえ、浩樹。なんか凄く黒い事考えてない？」

「私も同感だよひー君。悪いことはしちゃ駄目だよ？」

「良く分からないけど、悪いことは駄目だよ」

「……」

俺ははやて宅に出掛けるための下準備などをすませ、デイビットの
家に居た。其処で久し振りにアリシアと二人でのんびりしていると、
一々繋げるのが面倒になり、繋げたままの転送ポートからミユウさ
ん（休暇らしい。ゼスト隊の留守番はいいのだろうか）が。勝手口
（デイビット曰わく、やはり井戸から来るルートが玄関らしい）か
ら久方振りに佳奈がやって来た。

そして現在。アリシアとミユウさんと佳奈は思いの外仲良くなった
らしく歓談しており、俺は手持ち無沙汰になった事もあり、ぼんや
りと今後どうしようかなあと考えていただけなのだが。

「別に悪い事なんて考えていないぞ？」

「嘘だね」

「アリシアちゃんに同意」

「同じく」

「……」

アリシアとミユさんはともかく、殆ど会ったばかりに等しい佳奈にまでそう言われるとは……。諦め混じりに溜息をつき、時計を見上げてから俺は荷物を手に立ち上がった。

「出かけるの？」

「ああ。佳奈、ミユさん。ゆっくりして行ってくれ。俺の家ではないが」

そう言えば最近デイベットを見かけないなあと思いながら、俺はやはり勝手口から外に出て行った。

1148

S i d e o u t

S i d e : はやて

12月06日 午後02時36分

久しぶりに浩樹君が家に来るからって、少し張り切り過ぎたやろか……。
思わずそんな事を思ってしまうくらい、ダイニングのテーブルの上は豪勢やった。お菓子なんて作るのも久しぶりやったとはいえ、此処までとは……。

「まあ、浩樹君が食べきらなくても、みんながおるしね」

此処にいない私の家族の顔を思い出しながらそんな事を呟くと、玄関のチャイムが鳴った。

「はいはい。今開けますよー」

時間的に恐らく浩樹君やろうと予想を立て、聞こえていないとは思いつつもとりあえずの返答をして、私は玄関に向かいドアを開けた。

「よお、はやて。約束通り、遊びに来たぞ」

「いらっしやい、浩樹君。さ、上がって？」

来た人は予想通り浩樹君だった。私は浩樹を家に入れてコートを預かると、車椅子を動かして浩樹君の前に後ろ向きに止めた。「その心は？」と尋ねられ、「ゴーや！」とリビングの方を指さす。

「全く。電動車椅子が泣くぞ」

そんな事を言いながらも、浩樹君は車椅子を押し始めた。とてもゆっくり。牛歩並みの速度で。

「遅っ！？めっちゃ遅いやん!？」

「これが俺の全力だな」

「声聞く限り、全然余裕そっなんやけど」

「……ゼーハー」

「白々しい!?!」

「ヒッヒッフー」

「ラマーズ法!？」

そんなアホなやりとりをしているうちに、廊下を通り過ぎダイニングへと戻って来た。

「あれ? シグナムとかヴィータはいないのか？」

「みんな、お出掛してるで」

正確には私がお願いして浩樹君と二人きりにして貰った。最初はみんな渋ってたんやけど、魔法の言葉「シャルルの料理」を私が口にした途端、我先にと家を飛び出して行った。
シャルルは凄く複雑そうな顔をしてたんやけどね。

「なるほど……。やけに念を入れた結界だと思っただらそう言う事だったのか」

「ん? なんかつたか、浩樹君？」

「いや、なんでもない」

私をいつもの位置に座らせ、浩樹君も何時もの私の前に腰を下ろす。

「しかし随分な量だな」

手作りのお菓子が大量に並べられたテーブルを見て、茫然とつぶやく浩樹君。

「……やっぱり?」

「まあ、はやての菓子は俺の知る中では二番目に美味しいからいいのだが」

「翠屋と比べるのは勘弁してくれへん?」

「料理にプロもアマもないだろ。上手い人は美味い。下手な人は不

味い。それ以上でもそれ以下でもない。これ、最近思ってた持論だ」
「厳しい言葉やねえ。でも、なんでそんなこと思ってたんや？」
「……まあ、色々な」

私から視線を外し、溜息をつく浩樹君。それから何かを思い出したのか携帯電話を取り出して、電源を切った。

「あれ？浩樹君、まだ携帯電話持ってるん？全然繋がらへんかったんやけど」

「え？ああ、これは見た目だけこっちで使ってたのと同じ携帯電話つてだけで、中身は全然違う通信用デバ……じゃなくて通信機器だから」

「よう分からんけど……ほんなら、新しい電話番号」すまんが無理だ」「ん、ほうか」

クッキーを一つつまみ上げて齧る。そのまま一枚食べきり、紅茶を飲んで顔をあげると、浩樹君が不思議そうな顔をしていた。

「どうしたん？」

「ああ、いや。もつと食い下がってくるもんだと思ったから」

「すずかちゃんとかならそうするかもしれないけど……。あれや、私は策士なんや」

「策士？」

「こうした方が浩樹君の好感度が稼げるんやないかなあって」

「言わなければ稼げたかもな」

そう言つて、クッキーを齧る浩樹君を見ながら、私は少しだけ苦笑した。

本音を言ってしまうば、私は浩樹君の好感度を稼ごうなんて気は毛

頭もなかった。無駄って分かっているから聞かへんだけ。すずかちゃんとかなら、無駄やって分かってても食い下がるのかもしれないけど。そこら辺は私とすずかちゃん達の浩樹君に対しての想いの差やと思う。私は確かに浩樹君の事は好きやけど、それは友達とか親友とかの想いの方が強くて、恋愛感情が皆無かと聞かれたら怪しいけど、でも私にとっての浩樹君は今は親友としての想いの方が強い。それが分かったことから、浩樹君はもしかしたら私にだけ会いに来てくれたのかもしれないと思う。

でも、だからと言って。これだけは私は聞かすにはいられへん。

「で、浩樹君」

「何だ、はやて」

「今まで何処に行ってたんや」

いきなりいなくなってもた、親友の今までを。

S i d e o u t

S i d e : 浩樹

「……………まあ、そうだろうな」

はやての言葉を聞いて、俺が言ったのはそれだけだった。質問の内容は予測はついてたし、予測していたからこそ、俺の言葉も決まっている。

「答えないよはやて。それについてもノーコメントだ」

「ほんなら誰にならはなすん？」

「佳奈には話したかな」

「佳奈ちゃん……。浩樹君の義理の妹さん」

「そうなってるのか？でも、佳奈との関係は正確には叔父と姪だな。俺はじいちゃんの養子だから、佳奈のお母さんと姉弟だからな」

最も、じいちゃんが佳奈を養子にしたのなら、俺達の関係は兄妹で間違いないのだろうが。

「佳奈にだつて話したくて話した訳じゃない。佳奈は俺の独り言を聞いてただけだからな」

「なら私にも独り言聞かせてくれへん？」

「誰かに聞かせる意図を持って話したら、それはも独り言とは言わないだろう」

「なら私にも教えて」

「堂々巡りだな。答えはノーだ」

二枚目になるクツキーを齧る。はやてがこちらに地味にきつい視線を向けている事は、はやての方を見なくても分かった。

「それよりも俺もはやてに話があるんだけど」

「その話聞いたら、浩樹君も話してくれるんか？」

「……はやて。夜天の書って知ってる？それが闇の書」

「……知ってるで。家にある」

はやては驚いた様子はなかった。それどころか隠すつもりもないらしい。

「なんで浩樹君は知ってるん？」

「詳しくは言えない。でも今、夜天の書って言うかそういう関係の

代物について色々調べる仕事をしてな」

「調べるって。なら、浩樹君ってシグナム達と同じ騎士なん？」

「騎士って言うか魔導師だな。魔法使えるよ」

今度は、へえ〜と感心した様子のはやて。

「なあ、はやて。魔法見せてやるうか？」

「どんな？」

「はやての足。治す魔法。って言っても治療だから時間はかかるが……。でも今月中には麻痺は治る。治して見せる」

「……また急やね」

「自覚はあるよ」

困ったように笑いながら、はやてが紅茶を飲んだ。俺も同じく紅茶を飲む。

暫く無言の時間が続いた。そんな中、はやてが口火を切る。

「浩樹君が話をしてくれるなら、治療を受けてもええよ」

「そう言つと思つた。快気祝いに話すよ」

「ふーん……。自信あるん？」

「確信はあるな」

「……はあ」

溜息をつかれた。

「どうした？」

「私も甘いつて思ったんや。ええか浩樹君。絶対に話して貰うで？」

「え？……ああ、努力しよう……？」

「話さへん気や！絶対話さへん気や！」

「じゃあ前向きに検討しよう」

「やらへんことの代名詞！」

どこか既視感デジャヴを感じるツツコミ。はて、どこで言われたんだったか？

「それで、浩樹君。具体的にどうするん？」

「言っただろ？魔法だ」

そう言っただけは椅子から立ち上がり、はやての後ろに立った。はやてが車椅子を操作し、器用に180°振り向いてこちらを見る。相変わらず器用だなあと思いながら、俺ははやてから数メートル離れた場所に立つ。

それから魔法陣を展開し、鍵盤型のキーボードを展開した。

「おお、なんか凄いね」

「まあな。それより始めるぞ。具体的にどうするとかは説明しにくいから省く。はやてはそこにいるだけでいい。多少は移動してもいいが、魔法陣からだけは出ないでくれ」

「了解や」

そう言っただけ、俺は久方ぶりに人の前で自身に潜った。

(さてと。行くか)

潜った先で、俺の格好は管理局のBJになっていた。それはあくまでイメージなので、ここでの格好には大した意味はなさないのだが、俺は今いる場所からさらに深く潜っていく。

これもあくまでイメージだ。現実では俺は現在、淀みなくキーを叩いている所だろう。あくまで分かりやすくするための俺の手段の一

つだ。

潜って潜って。潜った先に扉が見えた。そこまで行き、扉に手を当てる。まだ開く気配はなかったが、扉の向こうからの気配で此処から先がはやての中だという事は分かった。

……そういう意味じゃないからな！！

『何言ってるの浩樹？』

(何でもないよ、アルハ)

突如俺に装着されたヘッドセットから、アルハの声が聞こえてきた。

『そう？』

(ああ、そうだ。それより外の様子は？)

『猛烈に動く浩樹の手に八神はやてが……何言わせようとして(そ
おいー)ニヤー!?!』

ヘッドセットを投げ捨てる。なんか作業が遅くなったり無駄な時間を使った気がするが、それは置いておいて再び扉に触れた。目をつぶって調べ、解析し、仮の扉の鍵を作ると、扉にあった鍵穴に入れた。軽く捻るとカチリと音がして、扉が開く。

扉の中に入れば、その先にいたのは鎖に巻かれたはやて。鎖は主に下半身を集中して縛っている。

(はやてのリンカーコアと夜天の書の浸食か)

早い話、あの鎖をどうにかしてしまえばそれが一番手っ取り早いのだが、そもいかない。真の持ち主以外がプログラムに介入しようとする、現所有者を取りこんで転生してしまうという夜天の書のシステムが原因だ。俺があ鎖に触れれば、まず間違いなく夜天

の書ははやてを取り込み転生する。

（まあでも。それはあくまで俺が『俺のまま』で触れば、の話なんだがな）

ある種のコンピュータウイルスと同じ要領。つまり夜天の書に俺が異物だと思わせなければいいだけの話だ。

夜天の書の持ち主の選択基準は、魔導師の魔力資質による。つまりだ。

（はやての魔力資質のデータをそのまんまコピーして、俺の魔力資質を書き換える）

流石に生まれついで物の物を取り取る事は出来ないが、鍛えれば雷や炎熱などの魔力資質がある程度使えるようになるのだ。言ってしまうえば自分の魔力資質はいくらか弄る事は可能である。元のデータがあり、それに合わせて書き換える事は、プログラムを弄る身としてはまさに朝飯前だ。自分の魔力資質やらその辺のデータは事前にバックアップは取っているから、安心してやれるし。

（さて、それじゃあ、さっさとやるかな）

足元に魔法陣。そして俺の姿が徐々にはやての物に変わっていく。普段の変身魔法と違って何か妙な感じはするがそれでもやめることなく書き換えを続け、ついに俺の姿がはやての姿と全く同じに変わった。

そして此処からが正念場である。一度深呼吸をしてから、少しずつはやての方に近づいて行く。やがて鎖が一本、こちらに向かって伸びてきた。反射的に避けそうになる体をなんとかその場に押しとど

める。鎖は俺を確認するようにその場で暫くゆらゆらと揺れた後、おもむろに俺の左腕に巻き付いた。
一本が巻き付くと早い物で、はやてに巻かれていた鎖が二本目、三本目とどんどん左腕に巻き付いて行き、暫くすると左腕が完全に見えなくなるくらいに鎖に巻かれた。

(……はあ、第二段階第一フェーズ、クリア、かな)

とりあえずの目的は達した。俺の事を八神はやてと誤解させ、浸食の矛先を此方にも向けさせて夜天の書とのつながりを作り、後はそのつながりを強化しつつ夜天の書にコンタクトを仕掛ければいい。

(とりあえず出るか)

腕に鎖を巻いたまままずは扉をくぐった。幸い扉をくぐっても鎖は俺に巻かれたままだった。まあ、鎖のせいではやてにつながる扉は閉められないのだが。

そのままどんどんと浮上して行き、俺の意識は現実へと戻って来た。

「ッ、ハア、ハア、ハア！」

息を整えるように数度深呼吸をする。はやての方を見ると、何故かぐっすりと眠っていた。不思議に思ったが、時計を見て納得。既に3時間近く経っていて午後6時だった。

「悪いことしたなあ……」

とは言え起こすのも憚られる。しょうがなく俺ははやての自室から毛布を一枚持ってきて、はやてにかけた。若干身じろぎしたが起きる事はなく、車椅子にロックをかけてポンポンと軽くはやての頭を

撫でると、置手紙をしてからダイニングから出た。途中で無断でお手洗いを借りてから、廊下を通り玄関へ。そこで靴を履いて、外に出てからいざという時の為にはやてが隠しているらしい鍵を使って鍵をかけて元の位置に戻す。

「はあ、さてと。これからどうするかなあ」

はやての家から出て、既に日が暮れた街を歩きながら、俺はそうぼやいた。残念な事にデイビットの家には戻れそうもない。かと言って他の場所に行き先があるか、と聞かれれば答えは否だ。

「でも帰るのはいただけじゃないよなあ。アリシアがいるし」

今の自分の姿はアリシアには見られたくない。いや、ぱつと見は俺のままなだけだな。こういう時、中性な顔立ちは便利だよね。

「はあ、クロノ。今はお前の気持ちがよく分かる」

世界はこんなはずじゃなかったことばかりだ。

「なんで左腕の麻痺だけじゃないんだよあ……」

夜天の書の浸食の矛先を自分にも向けると考えた時点で、体の一部分の麻痺は覚悟していた。だから左腕の麻痺は今に気にしない。地味な鈍痛とか本当に全く動かない事とか、気になる事は多々あるけど、今は置いておいて。

「なんで体が女性になっているんですかねえ!？」

はやての家のトイレで気がついたけど、はやての事もあり今まで我慢していた大声のツッコミをようやくして、俺は再び溜息をついた。

「これから、どうしようかなあ………」

第六十八話 A・S第十四話 く来訪と自己犠牲のエゴイズムく（後書き）

思うんだが、何でアニメはわざわざ最初の数話だけ日付を入れて、他は全然入れてくれないのだろう。ごまだれです。

おかげで、時系列的に今何話くらいなのか分からんよ。個人設定的には第七話位です。なのはが私服で、朝からハラウン家にいたので日曜かなと妄想して、だから佳奈も朝からデイビット宅に居ます。

此処からは時間が一気に飛んだりしたりするかもです。まだ何とも。後この前気がついたんですけど、五十六話後半から六十一話まで、ずっと12月02日やってたんですよ。同じ日を最長でやっていたのはとある皇女編だと思えますけど。

ここまで読んで下さりありがとうございますございました

では次回。ごまだれでした

ふつらじ！ 第00回

【ふつらじー！】

アリシア・テスタロッサ「アリシア・テスタロッサと！」

高坂浩樹「高坂浩樹の」

二人「とある封魔の齒車破壊ラジオ、略してふつらじー！」
ビスマスレィカー

『ふつらじー！』

ア「みなさーん！暑い夏をいかがお過ごしですか？アリシア・テスタロッサです！」

浩「本編はバリバリ真冬だけだな。高坂浩樹だ」

ア「このラジオは『魔法少女リリカルなのは』とある封魔の齒車破壊の番外編のようなものです。毎回ゲストを呼ばなかったり呼ばなかったり呼ばなかったり」

浩「其処は呼ぼうぜ？」

ア「だってメインパーソナリティーは私と浩樹の二人だよ！？呼ぶ必要無いじゃん！！」

浩「俺とお前だけだとただグダグダ話してるだけになるだろうが！」

ア「それでいいじゃん！寧ろそれがいい！」

浩「良くない！」

ア「なんで〜、浩樹のイケズ」

浩「黙りなさいアリシア」

ア「ラジオで黙れって、存在否定も等しいと思わない!?!」

浩「第00回の今回はコーナー紹介だ」

ア「流された!?!」

【とある読者の普通のお便りノーマルメッセージ】

浩「難しい事は何も無く。普通のお便り、ふつおたのコーナーだ」

ア「ここでは、ふうらじ！に寄せられたコメントとか、作者に送られたメッセージをピックアップして、それについてお話したり、作者が妄想したお便りを元にやっぱりお話したりするコーナーです」

浩「ふつおたの際にはコメントの場合、【ふつおた】と入れた後、メッセージをお願いします。メッセージの後に、通常のコメントを入れた場合は米印とかで文章を区切って下さい。作者へのメッセ

ージで送信の場合は、タイトルに【ふつおた】と入れてください。
以上だ」

【とある作者の裏話】
ブラックヒストリー

ア「どやっ」

浩「……まあいいや。このコーナーではとある封魔本編の中から一話だけピックアップ」

ア「その一話の裏話やら黒歴史を作者が暴露して行きます」

浩「このコーナーに関しては、『何話をピックアップしてほしい』みたいな要望があればその話を優先的にピックアップする予定だ。要望があるならよろしく頼む」

【とある主人公の体当たり取材】
リミットブレイク

浩「なにこれ」

ア「浩樹が色々な事に挑戦します」

浩「例えば？」

ア「高町なのはの入浴中に突撃したり、私と一晩中甘い一時を過ごしたり」

浩「これに関しても『何何をしてほしい』といった要望を聞く。頼むから俺を助けてくれ」

【とあるラジオの白紙企画】
ブランドクシナリオ

浩「なにこれ、二回目」

ア「ぶつちやけ、その時その時で思いついた事とか、リスナーさんが提案してくれた事とか色々しようかなってだけのコーナーです」

浩「え〜」

ア「私と浩樹がずっとイチヤイチャしてるだけってのもありだよ？」

浩「なしだよ」

『ぶつちやけ〜』

浩「さて、このラジオのコンセプトは『本編で出来ない事をやろう！』という所にある」

ア「ようは何でもアリ、なんだねえ」

浩「作者の他の作品『そして使用者は仮面をつける』とかから、主人公が引つ張りだされる事もあるし、他の事もありえる」

ア「しつちやかめつちやかでカオス以外の何ものでもないけど、これだけは言えるよ」

ア「シリアルはあり得ない!!!」

浩「シリアスな」

ア「……シリアスはあり得ない!!」

浩「言い直さなくてもいいだろうに。まあ、そんな訳だ。基本的に週一。毎週金曜日を予定してる」

ア「今回は第00回だったからね。次回はいよいよ、記念すべき第01回だよ!!」

浩「ああ、まあ。次回、ふうらじ!第01回。7月22日を予定している」

ア「今から楽しみだね!」

浩「そうかい」

『…』

浩「さて、終了の時間だ」

ア「時が経つのは早いねえ」

浩「こんなもんだろ」

ア「そういう事は言うもんじゃないよ、浩樹。まったく」

浩「はいはい」

ア「むう。では、今回は此处まで！お相手はアリシア・テストアロツサとー！」

浩「高坂浩樹だ」

ア「バイバイー！！」

第六十九話 A・S第十五話 〈現状と利他主義のサクリファイス〉

Side：浩樹

12月07日 午前10時15分

毎度お馴染みの海鳴海浜公園。他に行く先がない事もないのだが、大抵なのはやアリサ、すずか関係の場所だから行くに行けない事もあり、必然的に此処になる訳だ。まあ、隠れる場所も多いからな。結局昨日の晩は此処で過ごした。賢明な方なら「変身魔法でも使って、男の姿に変身すればよかつたんじゃない？」と思う人もいるかもしれない。実は俺もそう思ったんだがアル八曰く「魔力資質変わつてるのに、下手に変身みたいな体に作用する魔法使つて何かあつても知らないよ？」とのありがたい忠告（善し）を受けた為、諦めた。

「さて、とりあえず俺の体とかの現状を確認するか」

『それはいいけど……。人来るよ？』

「小規模の結界は張った。始めるぞ」

言葉とほぼ同時に俺の周囲に複数のディスプレイが表示され、そこに様々な図や文字が表示された。

『まずは浩樹の今の体の事だね』

ディスプレイのうちの一つが俺の前に移動して、数倍の大きさになる。

『今後の戦闘にも支障をきたす事は間違いないから、先に取り上げると左腕の麻痺。麻痺って言っても、八神はやて程酷い麻痺ではな

いけど……。これからも八神はやての麻痺の原因たる闇の書の浸食を肩代わりするって言うなら、悪化することは間違いない。おまけに八神はやてより心臓に近いから、下手をすれば完全に肩代わりする前に心臓が麻痺して死ぬよ』

「まあ、何となく予測はついてたから別にいいよ。次は？」

「……リンカーコアの浸食で魔力資質が奪われて行ってるから、魔法は使えないって考えていい。ハッキングは使えるから、オフエンスアーマー窒素装甲とマテリアル・ハイは問題なく使えるから、戦闘は暫くそっちがメインになる』

「了解。気をつける」

前面に表示されていたディスプレイが消え、別のディスプレイが俺の前に移動。拡大された。

「女性化についての理由は調査中。浩樹が寝てる時に色々スキャンして調べてるんだけど、原因として一番大きいのはやっぱり八神はやての魔力資質をそのまま乗せした事だと思う』

「だが資質の変化は大なり小なり使えるやつは使えるはずだろう。フェイトの電撃、シグナムの炎熱は先天性の物だが、管理局の知り合いには後天的に資質の変化を可能にした人もいるぞ？」

「その人たちは資質の変化をしたとは言え、根本的な所では自分の魔力資質のままなんだから。でも浩樹の魔力資質の変化は根本的な資質をそのまま他人の物に書き換えてる。それはもう資質の変更だよ。一般の魔導師どころか、恐らく浩樹以外の魔導師全員が出来ないであろう、リンカーコアの変更。だから浩樹の体に何が起きているのか、私にはわからない。前例がないからね』

「む……」

『そもそも浩樹は前例がなさすぎるの。まったく、アルハザードの私にすら分からないって』

「その前例のなさの原因の大半がお前だけだな!!」

ハッキングとか調べてみたらどの魔法にも分類されていないおかげで、態々固有技能で登録しなきゃいけなかったんだぞ!

「……まあ、俺の体についてはおいおいだな」

『考えなくて現状維持って意味ですね、分かります』

アルハの言葉は軽く無視をして、新しいウィンドウを移動、拡大させる。

夜天の書と俺のリンクの具合を表したもので、大凡のパーセンテージも書かれている。そのパーセンテージを90以上にするのが現在の俺の計画の第二段階。

「一晩様子見て、数値に変化なし。こういうのもなんだが、無事に浸食の矛先をこっちにも向けられたらしいな」

『無事ではないけどね。分かっているとと思うけど、時間は足りないよ』
「分かっている。アルカンシエルが動きそうだからな」

アリシアに昨晩頼んで、本局の闇の書事件関係の情報を調べて貰った結果だ。アルカンシエルが動く可能性がある。……否。十中八九動くだろう。搭載先はアースラ。

個人的にリンディさんやエイミィさん、クロノも含めて平和主義というか甘いというか。そう言う所があると思っただけに、あの大量破壊兵器の搭載は少しばかり予想外ではあった。

「いざとなったら、撃たせなければいいだけだが……」

『困った時のアリシア頼み？』
「……」

* * *

12月08日 午後02時47分

アリシア曰く、ハッキングがクラッキングをした時には大抵の場合、『バックドア』という物を残しておくらしい。

『バックドア』とはハッキング、もしくはクラッキングをした聖、管理者に気付かれないように作られたサーバーへの不法侵入経路のことだ。アリシアは管理局の本局や地上本部を含め、ミッド全域の名高い企業やら水面下組織など、様々なサーバーにバックドアを設置してあるらしい。……それらすべてに一度でもハッキングしたりクラッキングしたのかと思うと頭が痛い。

閑話休題。そんな訳で、俺も一度ハッキングした所には『バックドア』を設置するようにしている。それはネット然り、人間然り。まあはやての場合、夜天の書の浸食を阻まない為に、ハッキングした時に繋げた扉は開けっ放しだから、別段バックドアを設置しておく必要もないのだけれど。念のためね。

『どうしたの急に？』

「いや、暇だから」

『あー、前みたいに凄くやる事がある訳でもないもんね』

一昨日に置手紙だけとはいえ、はやてと約束した事もあって、俺は

今、はやての家にいる。幸い特別な用事もなかったようで、家に行った俺を普通に迎え入れてくれたはやては、一昨日と同じように治療を受けていた。

かく言う俺も一昨日同様に治療中なわけで、違うのはヴォルケンズの威圧する視線の中に晒されている事だろうか。少しでも変なまねにしたら、頑固な染みやら錆にされる事は間違いないらしい。

「しかし、こつとも景気良く鎖が巻き付いて行くのも、気味が悪いな」
『八神はやての魔力資質は殆ど夜天の書に奪われていたからね。新しい搾取先が来れば、そつちに走ってもおかしくはないんじゃない？夜天の書からすれば、八神はやてが増えたか、魔力資質が回復したように見えるんだろうけど』

「ふむ……。ある程度の計画の前倒しは……難しいな。作業効率は落ちてるし」

はやてに巻かれていた鎖が、自分の左腕を完全に覆い、そこから胴体の方に浸食して行くのを眺めながらそんなことをぼんやりと呟く。

「もう体の方は左腕は完全に麻痺してて動かないか」

『そうだね。今は右手だけでタイプしてるようなもんだし』

「そつか……。はやての様子は？」

『寝てる』

「なら上がるか。はやてに会う前に帰りたい」

巻き付こうとしている鎖を引き連れるように扉から出て、そのまま浮上する。

意識が表層の、自身の体に戻ると、感覚が戻ってきた。

(…………痛むな。やっぱり)

全く動かない左腕をチラリと見下ろし、小さく溜息をついた。元々覚悟の上だったとは言え、そう簡単に割り切れるものでもない。つい先日まで普通に動いていたから尚更だ。

「終わったのか？」

「ん？シグナムか。今日のノルマは無事に達成。俺はもう帰るから、はやてには日曜日にまた来るって伝えておいてくれ」

「ああ。分かった」

「……？やけに素直じゃないか。何か企んでるのか？」

「お前……素で言っているのか……」

シグナムに溜息をつかれる。

「先日の結界突破に加えて、主はやての治療の事もあるからな。一応、我々ヴォルケンリッターは高坂の事を信用することにした。それだけの話だ」

「それはありがたいな。……なあ、シグナム。夜天の書のページはどんな具合だ？」

「……300ページ弱と言ったところか。高坂で大分溜まった」

「なるほど……。よし。俺も手伝う」

「はあ！？」

何事かと俺とシグナムがそちらを向く。

俺とシグナムの会話に割り込むように声をあげたのはヴィータ……ではなくゴスロリ鉄槌だった。

「なんでわざわざ言いなおしやがった、ススワタリ！！」

「ナチュラルに人の心を読むな、ゴスロリ鉄槌。それで？はあ！？つてなんだ？」

「お前、管理局だろ。それなのに闇の書の蒐集を手伝うって言うの

「かよ」

「ああ。訳あって在籍しているだけだしな。それに俺の計画を知っているなら、分かるだろう？俺としても、夜天の書の完成は必須事項だ。早いに越したことはない」

それに片腕の戦闘にもなれる必要もあるしな。

「とりあえず明日の金曜日と明後日の土曜日は俺も手伝いたい。構わないか？」

「……ああ」

「シグナムー!!」

「落ちて着けヴィータ。私たちは高坂を信じるという結論になった筈だ」

「うぐつ……。でもよー……」

「だったらこうしようぜ？俺、ヴィータについて行くよ。妙な事すれば、アイゼンの頑固な汚れにするよといい」

俺の言葉に、ヴォルケンリッター全員がギョツとした。その理由が分からず首をかしげる。

「んっ……」

ふと人が動く気配がしてそちらを向くと、はやてが目を覚ましていた。寝ぼけ眼で辺りを見渡し、俺を見つけると指をさして、「アーッ！」と大声を出した。

電動車いすを器用に動かし、俺の前まで来て、俺の顔を見上げる。

「また勝手に帰る気やったやろ」

「ああ。もう帰るよ。次は日曜日に来るな」

「なんや。夕飯くらい食べて行けばええやん。浩樹君の治療のおか

げで、足が最近、少し調子ええねん。だからそのお礼」
「治ってからでいいよ」

軽くはやての頭を撫でてから、その脇を抜けて玄関に向かう。
はやても玄関まで来たが、引き留めない所を見る辺り、無理強いを
するつもりはないらしい。少し安心した。

「ほな、浩樹君。日曜日、楽しみにしてるね」
「ああ。はやて。じゃあ、日曜日に」

手を振るはやてに手を振り返し、俺は外に出た。
暫く道を歩いて当たりに誰もいない事を確認してから、左胸のあた
りを抑えて、歯を食いしばりながら痛みをこらえる。口元がゆがみ、
苦笑いのようになった。

『大丈夫、浩樹!?!』

『ああ。安心しろ、アルハ。少し痛むだけだ』

『嘘だよ。だって、八神はやてに潜っていないにもかかわらず、闇
の書の浸食が続いているんだよ?!』

『みたいだな。なんかおぞましい感じが這い上がってきてる気分だ』
寄り掛かっていた塀から身を離し、昨日同様に海浜公園に向かって
歩き始める。胸は抑えたまま、体がふらついて微妙に真つすぐ歩け
ない。

息が荒くなる。冷や汗が流れ、背筋が寒くなる。それでも、何とか
痛み慣れようと、静かに深呼吸を数度繰り返した。そして胸から
手を離す。

『はやては凄いな。こんな痛み耐えてたのか』
『今の八神はやては以前よりは全然楽なはずだよ』

『ならいいか』

少し肩を震わせながら笑いつつ、先ほどまでと違いいつも通りの足取りで道を進む。

『おい、ススワタリ』

『……！？ゴスロリ鉄槌か！？』

『その名前で呼ぶんじゃねえー！』

ゴスロリ鉄槌から念話が届く。なにかあったのだろうか？

『どうした？』

『……明日。家に朝の6時に集合だからな。一秒でも遅れたら、アイゼンの染みにしてやる』

一方的に告げられ、念話が切られた。再度つなげようにも、向こうが応答する事はない。

『デートのお誘いみたいだね』

『随分と殺伐としてるがな。……絶対アリシアにそんな風に言っ

た

『分かってるよ』

こういう時に、相方の言葉が信用できないのって嫌だなあ。

『はあ、信じるからな』

諦め混じりに告げた俺の言葉に、アルハが自信満々に答えた。

『泥で出来た宝船に乗ったつもりでいいよ！』

『不安以外の何者も生んでないからな!？』

激しく不安だ。

第六十九話 A・S第十五話 〈現状と利他主義のサクリファイス〉（後書き）

***ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

この後書きは、アリシアのクラッキングによって消去されてしまいました。現在データを復元させていますので、しばらくお待ちください***

ふつらじ！第01回

【ふつらじー！】

アリシア・テスタロッサ「アリシア・テスタロッサと！」

高坂浩樹「高坂浩樹の」

二人「ビーストレイカーとある封魔の歯車破壊ラジオ、略してふつらじー！」「」

『今回のジングルは俺こと高坂浩樹の担当らしい。ふつらじ』

ア「やつほー。とある封魔のメインヒロインにして、現在最年少。
アリシア・テスタロッサです！」

浩「まあ、まだ6歳だしな。高坂浩樹だ」

ア「いよいよ、第01回！楽しみだね、浩樹！」

浩「話すだけなら普段からやってるがな」

ア「でもあれだよ？このラジオが公開してる7月22日といえば」

浩「いえは？」

ア「とある封魔の歯車破壊ビーストレイカーの連載が始まった日なのです！はい拍手
！！」

ワーワーワー、パチパチパチパチ

浩「なんだ今の！？」

ア「でも早いもんだね。もう一年だよ？」

浩「ん？ああ、まあ、そうだな」

ア「最初の頃こそ、定期的に二日おきだったのに、それも第七話までしか続かなかったからね」

浩「初めてのキャラ説明以外の閑話だった事もあるから、許してやれよ」

ア「でも。私は許せない事があります」

浩「うん？」

ア「何で私の初登場が11月なのさ！」

『そんな事言ったって、無印にアリシア出てきたら面倒な事この上ないだろう。 ふうらじ』

【とある読者の普通のお便りノーマルメッセージ】

浩「ふつおたのコーナーだ。コーナーなのだが……」

ア「ふつおたは一通も届いて無いね!」

浩「いきなり出鼻くじかれてんじゃねえか」

ア「でも、前回ふつおたについての説明もつとしかないと駄目だった気もするけど」

浩「……えーと、ふつおたの際にはコメントの場合、【ふつおた】と入れた後、メッセージをお願いします。メッセージの後に、通常のコメントを入れたい場合は米印とかで文章を区切って下さい。作者へのメッセージで送信の場合は、タイトルに【ふつおた】と入れて下さい」

ア「第00回に言うべきだね」

浩「一応、第00回にも追加しておくからいいの!」

『作者が無計画なのが悪いんだ。 ふうらじ』

【とある作者の裏話】
フリックヒストリー

浩「これについては空牙刹那さんからお便りを貰ってるな」

全話ピックアップしてください（キリッ

もちろん冗談です

ア「冗談で良かったね」

浩「流石に全話は無理だしな。というか、全話やったら、このコーナー潰れるぞ」

ア「とりあえず、今回は連載開始記念もあるから、無難に『第一話』紙一重の日常と非日常』をピックアップします。という訳で、作者召喚！」

ボンッ

浩「ゴホッ、ゴホッ。無駄に煙幕をたくな！」

ごまだれ「それっぽい演出をしようってアリシアが」

ア「これは酷いね」

煙幕除去中……。

浩「さて、気を取り直して第一話だ」

ご「原作的にも第一話。この頃は手探りだった事もあって、繋ぎは入れてたけど、基本的にはアニメ本編に流れたシーンに浩樹がいたら、みたいな書き方だったな」

ア「結構シーンが飛び飛びだったね。朝の登校シーンの次、いきなり昼食だよ」

ご「改めて読むと大分酷いなあと思う。その内書きなおそうかな

あとも思つが、たぶんやらないな」

浩「やんねえのかよ」

ご「さて、裏話的な事をすると、実はこの時点では浩樹以外のオリキャラは浩樹の身内のじいちゃん以外は出さないつもりだったんだよねえ。アリシアしかり。アルハしかり」

ア「いきなり明かされた衝撃の真実!？」

ご「あんまりキャラが増えても動かす自信が無かつたし。元々の予定はアルハザードに行くつもりもなくて、普通に原作順守で行くつもりだった。使用デバイスもF4Uだけのつもりだったし」

浩「現在の状況と大分違うな、おい」

ご「ハッキングの技能を入れるつもりも無く。浩樹の封魔を使って相手のデバイスを無力化して、みたいな感じに戦うつもりだった。最も使用のデバイスがデバイスだから、噛みあわないだけだな」

ア「あ、反則気味の戦闘手段は変わってないんだ」

ご「タイトル的に予想がつく人もいると思うけど、ごまだれは結構禁書が好きだったからな。正直浩樹に関しても結構上さん風に行くつもりで、AMF的な力にするつもりだった。だけどAMFだと空戦とかできなくね。それじゃあ面白くないしどうするか。だったらデバイスでいいじゃん。デバイス無力化しようぜ。そっいやSTSでなのはがディエチの固有武装を封印してたし、封印しちゃおうなら名前は封魔だな、という思考展開でこうなった。現状じゃ、封魔の設定が空気なのだが」

浩「思いのほか役に立たないからな」

ア「ハッキングが有能過ぎるんだよ」

ご「反省してる。後悔はしてない。実は後付け設定は結構多くて、浩樹の初期設定なんて、じいちゃんに武術を習ってる。なのアリすずが大好き、封魔所持って基盤以外は殆ど無しに等しかったぞ」

ア「それは大体分かるよ」

浩「ああ」

ご「ですよね〜」

『これからも俺の活躍に期待してくれ。……なんて、キャラじゃないな。ふつらじ』

【とある主人公の体当たり取材^{リミットブレイク}】

浩「おい。アリシアと作者が帰って、俺一人になったんだが。その上でこのコーナーって不安以外無いぞ」

ごうぞ

浩「ああ、どうも。……よし。やるか。今回の体当たり取材^{リミットブレイク}は再び登場の空我刹那さんから頂きました」

なのはとアリシアが浩樹と佳奈の家に遊びに来たときに佳奈となのはとアリシアが三人で一緒に入浴中に浩樹も混ざって4人一緒に入って修羅場ってほしいです（笑）

浩「（笑）じゃねえよ！死ぬぞ！俺が！主に胃痛で！……はあ。とりあえず移動しよう」

少年移動中。

浩「はい。という訳で、高坂家自宅、風呂場前までやって来ました。脇の洗濯籠と風呂場からの声を聞く限り、やっぱり三人とも一緒にいるみたいです。ラジオなのでアリシア達の体が見えたり、洗濯籠の中身が見える事が無い事が救いというか何と言うか。……とりあえず逝ってきます」

ガラガラ。

佳奈「うん？……って高坂君！？何で入って来てるの！？」

なのは「え、ええええ！！！？？」

浩「いや、まあ、うん。ちょっと訳ありだな」

ア「もしかして私と一緒に風呂に入りたくなっただか？」

浩「アリシア……。お前とは普段一緒に入ってるから今更「浩樹君？」……何でございましょうか、なのは様」

な「アリシアちゃんと一緒に入ってるって、どういふことかなあ？」

浩「いや。お世話になっている家に迷惑かけられないか「愛し合ってるからだよ！」アリシア、少し黙ろうか!!」

ア「一緒にお風呂に入って、お互いの体に手を這わせてあんなことやこんな事してるんだよ！」

浩「何言ってやがるの!? お前の「不潔です！」ああもう、何で俺の言葉遮るかな!？」

佳「アリシアちゃん、まだ6歳なのに、手を出すなんて……。高坂君不潔です！」

な「そうだよ！ロリコンなの!？」

浩「アリシアの髪洗ったり、背中磨いたりしてるだけ「嘘だよ！素手で泡立てて、私の体まさぐって来るのに！」それ、毎回お前が俺にしようとしてる事だからな!？髪を洗う時はともかく、背中を磨く時はタオル使ってるだろう!あと、いい加減俺の言葉に被せるの「浩樹君！」ああもう、何でしようかなのは様!？」

な「私にもさつきアリシアちゃんが言った事、してほしいの!」

浩「しねえよ!てか、してない「嘘つき!」妄想も大概にしるよ、アリシア!」

な「……ここはあれだね。決着をつけた方がよさそうだね」

浩「は?」

ア「奇遇だね、高町なのは。私も同じことを思ってたところだよ」

浩「ハロウインの悪夢再び！？ってはい？」

『この企画は一周年記念閑話で別に書きます』 カンペ

浩「やらない訳ではないのか……。まあ、そういう事ですので、空牙刹那さん。そちらをご覧ください。因みに、次回からの白紙企画は、ラジオで三回ほどかけてストーリーを進めていくつもりです。そうしないと体当たり取材とぱっと見被るからな。それから、体当たり取材と白紙企画に当たって、空牙刹那さんから、俺当てにコメントが届いているらしい。何何？」

コメント：リア充の癖に『あれ（あえて言わない）』なので胃を痛くして貰おうかとWWW

浩「狙い通り、胃痛がマツハだ！どうしてくれる！っていうか、アレってなんだ！」

『もうやめて！俺のMPは零よ！（シールド的な意味で） ふうら
じ』

浩「あー、疲れたぞ」

ア「お疲れ様」

浩「ハア……。俺、来週からラジオ出無くていいよね？」

ア「駄目だよ？」

浩「じゃあ、あれだ！生贄ゲストを呼ぼう！という訳で、生贄募集！このキャラを出してほしい等の要望があれば、どんどん言ってくれ！」

ア「絶対違う字へのルビだよね！？」

浩「そんなことはどうでもいいの精神だ！」

ア「良くないよ！後、ラジオ第一回でいきなりキャラ変わるの止めよう！？」

浩「俺は昔から、テンションが上がるところなるんだ！」

ア「そんな事無いからね！？」

浩「今だったら何でもできそうなくらいテンションハイだぜ、ヒヤッハー！！！」

ア「じゃあ、一線越えちゃおう！」

浩「よし落ち着いた」

ア「酷い！！！」

浩「さて、今回は第02回。7月29日を予定している」

ア「そして何事も無かったかのように終了に向かっている！？」

『俺がキャラ崩壊？何の事だ？ ふうらじ』

浩「さて、今回も終了のお時間だな」

ア「そうだねえ。本当に時が経つのは早いよ」

浩「俺はフル出演だったけど、お前は後半二つのコーナーどっちもいなかっただろ」

ア「お風呂入って、修羅場って、アイス食べてたね」

浩「なんかおかしいが、見た手前何も言えんな……」

ア「アハハ。では。お相手はアリシア・テストロッサと」

浩「高坂浩樹だ」

ア「ばいばいー!!」

一周年特別企画 く追跡中 その1く

Side:クロノ

世界はいつだって、こんなはずじゃない事ばかりだ。
以前PT事件の際に自分で言ったこの言葉。その言葉を今、一番言いたいのには僕ではなくてあいつだろうけど、僕ももう一度言いたい。世界はいつだって、こんなはずじゃない事ばかりだ。

『離せー！！何だこの状況！！どうなってる！！』

画面の向こうには、屋外にも拘らず後ろ手に椅子に縛り付けられて、其処から何とか脱出しようともがく男が一人。

仕事で数日ほど貫徹の張り込みをしていたらしく、ようやく事件も解決して数日ぶりに帰宅。

安心してきつて床につき、目が覚めたらあの状態になっていた哀れな男は当然の如く浩樹だ。

脱出しようにもデバイスを没収され、とある会場に張られたAMFによつて魔法も使えず、どうする事も出来ずにいる。

『てか、なんなんだよ本当に！？何でミッドの部屋で眠った筈なのに、朝起きたら海鳴の海浜公園で縛られてるんだよ！！』

浩樹が言った通り、とある会場とは海鳴市内だ。因みに、浩樹を拘束。転移して此処まで運んで来たのは僕だったりする。そうしないといけなかったんだ。すまない浩樹。

まあ、いい加減一人に決めると言う意味でも、これはいいイベント

だろう。

そんな事を考えているうちに、刻々と時間が過ぎて、ついに予定の時間になった。

「レディース！アード、ジェントルメン！」

いきなりマイク片手に立ち上がり、そう叫んだのは僕と同じく士官学校出身であるミィユ。

その声が届いたのが、浩樹が反応して顔を上げた。

『その声、ミィユさん！どういう状況ですか、これ！！』

「ふっふっふ。ひー君！これはね、娯楽なんだよ！」

『娯楽？』

「うん。管理局の、主に地上本部の人達とか、その他色々な人達がひー君が苦勞して右往左往してる様を見て楽しむの」

『俺何かしました！？』

「この企画は、地上本部人事部プレゼンツ、タイトルは『追跡中』です！！」

浩樹の言葉を無視して、そう高らかに宣言するミィユを見て僕は思った。

管理局はもう駄目なのかもしれない。

昨日、数日ぶりに帰宅して寝ていて。朝起きたら縛られて外に放置。全く状況についていけない中、ミユさんの声が響いた。

「追跡中って……。なんすかそれ？」

『ひー君、逃走中って番組は知ってる？』

「え？ええ。バラエティ番組ですよ？簡単に言っちゃえばは盛大な鬼ごっこ……。まさか」

『はい。鬼ごっこです』

身も蓋も無いなあ、と思っていると、ミユさんが言葉を続けた。

『ひー君には、今から鬼ごっこをして貰います』

「人数的に、俺が追いかける側ですよ？」

『ううん。逃げる側』

「……他にも俺と同じく、不幸な境遇の方がいるとか」

『ひー君一人が狩られる側です』

ああ、なるほど。

「ハロウインの悪夢再びか！！」

『そして追いかけるのはこの子たちです！！』

そうやって、俺の眼前に現れた画面には、戸惑った様子の佳奈、やる気満々のなのは以下、アリシア、すずか、ギンガ。そして比較的普通なアリサの計六名。佳奈とアリサ、そして他四名の温度差がやばい。

「って、1VS6ですか！？」

ギンガ。

『同じく地上本部所属！陸士108部隊所属のホープ！母親譲りのストライクアーツで立ちふさがる敵を粉碎します！ギンガ・ナガジマちゃんです！！』

『はい！よろしくおねがいます！』

『さて、アリシアちゃんの時と同じ位会場を賑わせていますが、ギンガちゃん。一言どうぞ！』

『頑張りますので、兄さん。応援お願いします』

ごめんギンガ。追われる側は、普通追う側を応援しないよ。次に現れたのはさすがだった。

『此処からはひー君の幼馴染ズです。先ずは一人目。趣味は読書。物静かで大和撫子を体現したような少女。ひー君との関係の長さはなのはちゃん、はやてちゃんに次いで三番目。月村すずかちゃんです！』

『お願いしますね』

『特設ステージの方でも、すずかちゃんを知らないにも拘らず、すずかコールが起きています。大和撫子、恐るべし。すずかちゃん。』

一言お願いします』

『絶対に浩樹君の事を捕まえて見せます！』

『頑張つて下さい、すずかちゃん』

魔法無しルールなら、間違いなくすずかが一番の強敵だな……。

次はアリサ。

『次はこの子。ひー君との関係の長さはすずかちゃんと大差はあり』

ませんが四番目。ツンデレでなかなか素直になれないけれど、ひー君への想いは変わりません！アリサ・バニングスちゃん！』

『あなた、何言ってるのよ！』

『特設ステージからもアリサちゃん、がんばれーの声を頂いてます。アリサちゃん、一言どうぞ』

『ああ、もう……。浩樹！覚悟しなさい！！』

何をだよ！

そして最後。

『ラストはこの子！趣味はすぐかちゃん同様に読書。好きな場所はひー君の部屋という、アリシアちゃんに次いでアレな子になってしまつかもしれない可能性を秘めた女の子！高坂佳奈ちゃんです！』
『ええ！？いやですね！！浩樹君の部屋が好きなのは小説がたくさんあるからで決して落ち着くとか、ほんわかするとかそういう訳では！！』

『そんな事言いつつ、週に5日のペースでひー君の布団で寝ている佳奈ちゃん。一言をお願いします』

『そんなに寝てないです！せいぜい三日ですよ！って、ああ！？』
『はい、ありがとうございました』

佳奈……。お前な……。

『それじゃあ、ルール説明です』

そう言つと、新たな画面が出て来た。

海鳴市全域を表した地図の一角が、赤い丸で染められている。

『この地図上の赤丸が今回の追跡中のステージです。此処から出た

りしたら駄目だよ。ひー君は出ようとしたら高圧電流が流れるから覚悟してね」

「何で俺だけ!?!」

『さて細かいルールです』

・制限時間は90分。ひー君が捕まった場合、其処で終了。延長戦は無いよ

・基本的に個人戦。鬼の子は組むのはありだけど、最終的な景品は捕まえた一人のみ

・AMFを張ってるから分かるだろうけど、原則魔法は厳禁

・ゲームの最中にミッションがあつて、そのミッションにクリアすれば、鬼の子達は何かしらのアイテムを貰えます

こんなところだね。何か質問は?」

「はい」

『ひー君』

「ルールに不満しかありませんが、一応聞きます。景品ってなんですか?」

『ひー君を一日自由にできるのと既成事実が作れます』

「予想の斜め上だった!!そしてそれを聞いた鬼の子達が全力でアップしてやがる!?!」

『他には?』

「俺には何かミッションとかアイテムは無いんですか?」

『無いよ』

即答だった。ハロウインの時もそうだったが、どうにもこの手のゲームは俺に不利なようなルールが多い。

既に諦めの境地とはいえ、思わず溜息をついた。すると、体の拘束がいきなり外れた。何も無い事を確認してから、立ち上がる。

「ミイユさん？」

『それじゃあひー君。今からゲームが始まります』

「……………へ？」

『鬼の子達は所定の位置についてて、ひー君もまた同じ。ゲームが始まらない道理が無いよね？』

「え、いや……………え？」

『それじゃあいくよ……………。レディー……………』

ああ、マジだ。この人はマジなんだ。

それに気が付き、足に力を入れ。

『スタート……！』

ミイユさんの宣言と同時に全力で走り始めた。

一周年特別企画 く追跡中 その1く（後書き）

空牙刹那さんのそのままというのも芸がなかったので、この形にしましたが、

ぶっちゃけ何も考えてないので、

ゲーム中のミッションの内容募集です。

一周年特別企画 〈追跡中 その2〉

追跡中基本ルール

- ・制限時間は90分。浩樹が捕まった場合、其処で終了。延長戦は無し
- ・基本的に個人戦。鬼の子は組むのはありますが、最終的な景品は捕まえた一人のみ
- ・原則魔法は厳禁
- ・ゲームの最中にミッションがあつて、そのミッションにクリアすれば、鬼側は何かしらのアイテムがあり。

支給品（参加者全員）

- ・デバイス（地図。意志疎通用。受信した場合の応答は自由）

Side：佳奈

どうしようかなあ……。

首を傾げながら、まず私は支給されているデバイスを取り出した。iPhoneのような形をしたその画面には、地図と通話。メールと書かれたアプリが一つずつあるのみ。とりあえず地図を選んで表示すると、浩樹君が逃走可能範囲の地図が表示された。でもそれ以外には何も無い。

（結構広いかも……。無鉄砲に走りまわったら、直ぐに体力切れそう）

一応ダイエットも込みでそれなりに鍛えてはいるから体力はある方

ただ。相手は魔法禁止とはいえ浩樹君だ。まともに追い駆けつこ
をすれば、鬼側で勝ち目があるのは恐らくすずかちゃんだけ。

(狙いとしては待ち伏せか不意をつくかのどっちか。でも浩樹君の
場所が分からない事にはどうしようもない)

地図を消して、通話を選んで表示する。通話先の選択肢として現れ
たのは、私以外の鬼ごっこの参加者全員だった。

(浩樹君にも連絡できるんだ……。うーん、連絡してみるのもあり
かもしれないけど……)

悩む。もしかしたら着信音で浩樹君の場所が分かるかもしれないけ
ど……。

他の子に連絡して、上手く連携を取れないかなとも思う。どっちの
方がいいかな？

「……………うん」

名前を選んで、電話する。数コールの後、電話が繋がった。

『もしもし？佳奈か？』

「浩樹君。……意外かも。電話に出るとは思わなかったよ」

『俺だって悩んだけどな。今は情報が欲しい』

「情報？」

何のことだろうか。今の私が有益な情報を持つてるとも思えないし、
かといって居場所を聞かれても、私は答えない。不利になるのは私
だから。

『……なるほど。大体分かった』

「え？」

『佳奈の今居る場所。線路沿いか。地図の範囲で線路は一本しか通っていないからな。範囲は広いが、俺が気にするべき場所にはいないらしい。じゃな』

電話が切られた。

……ああ、なるほど。そういうことね。

「電話の向こうから聞こえる音で場所を大まかでも特定するって……。これじゃ下手に連絡できないじゃん」

おまけに私の居場所を教えただけで、こっちは何の情報も得られなかった。完璧に利用されて、損をしたのは私の方。

「むう……。でもまだ始まったばかりだし。頑張ろう」

作戦を立てつつ、私も移動を始めた。

残り時間 87分23秒

Side out

Side:すずか

支給されたデバイスを確認した私は、ウォーミングアップを兼ねてランニング程度の速度で走りながら、浩樹君を探していた。でもやっぱり浩樹君の初期の位置が分からないのは少し辛い。

今の浩樹君はどのあたりに居るんだろう？なのはちゃんなら何とな

くで分かるのかもしれないけど。

足を止めて左に行くか右に行くか、真つすぐ行くか悩んでいるとデバイスが鳴った。取り出して確認すると、少し意外な人物からだった。……まあ、出ない理由も無いしね。

「もしもし？アリシアちゃん？」

『すずかさんですか？ちゃんと話すのは初めてですね』

「そうだね。……私にも浩樹君の時みたいに話してもいいよ？私もそっちの方がいいから」

『……うん。分かったよすずか』

フエイトちゃんのご家族の子つて言うのは聞いてたけど、こうやって電話越しだと本当にフエイトちゃんそっくり。

そんな事を考えていると『すずか』とアリシアちゃんに声をかけられた。

「何？」

『良かったら組まない？私達が組めば、きっと浩樹を捕まえられるよ？』

「……へえ」

少し意外な気がする。アリシアちゃんは私に似てる気がするから、てつきり自力で捕まえて嬉々として既成事実を作ると思っただけど。

「どうして？」

『そのどうしての意味はどういう意味でのどうして？』

「組む理由と、捕まえられる自信の根拠の二つかな」

『組む理由は自信が無いから』

やっぱり意外だ。

「自信が無いから組むなんて子でもないでしょ？アリスアちゃんは浩樹君のことを一人占めしたい筈だし」

『それはすずかもでしょ？』

ご尤もだ。このゲームに参加しているのはちゃんやアリスアちゃん。佳奈ちゃんとはこれからもずっと仲良くしていきたい。だけど浩樹君に関しては、少しでもいいから一人占めしたいと言っるのは本音だ。私よりも皆の方が、浩樹君の近くにいるから、こういうチャンスは逃したくない。だからこそこのゲームは勝ちにいく。全力で。

「そうだね。アリスアちゃんの言う通りだよ」

『私達は今回のこのゲーム。絶対に勝ちたい。その思いは同じの筈』
「うん」

『でも私は身体能力に自信が無いし、すずかは浩樹の行動パターンを掴めていない』

それについては否定できない。私と浩樹君は読書友達から始まったからか、外出をするよりも図書館とかで、二人でのんびり読書という事が多かったから。

『でも私は浩樹との時間の密度はまず間違いない今回の参加者の中でダントツ。だからこそ私は浩樹のこういう時の行動パターンは九割九分読める。なら私達はお互いの足りない部分をお互いに補える』
「……でも最後に景品を貰えるのは一人だけ。此処で組んでも私が裏切るかもしれないよ？」

アリスアちゃんと組むと言う事は私が浩樹君を捕まえる役の筈だ。それなら景品は私が貰える。

『寧ろ私がすずかを利用して浩樹を誘導。いいところ取りしちゃうか
もしれないよ?』

「……なるほど。それは確かにあり得るね」

『条件はお互い様。どっちが勝っても恨みっこなし。私としては山
分けの方が嬉しいけど』

「まあ、それは捕まえてからだね」

『それじゃあ組んでくれるの?』

「いいよアリシアちゃん。二人で浩樹君の事を捕まえよう?」

残り時間 85分41秒

Side out

Side: 浩樹

唐突な悪寒に肩が跳ねた。なんかこう、俺にとって一番望まない状
況になった気がする。

「……落ち着け。このゲーム、条件こそ俺に不利だけど、ゲーム的
には俺の方が有利だ」

ゲームの俺が逃げられる範囲の広さ。それだけは俺の味方だった。
これだけ広ければ純粹に体力勝負に持ち込む事も出来る。そうなれ
ば俺が警戒するべきはずかだけだ。

(アリシアは論外だし、なのはと佳奈とアリサは同じ位。ギンガも
若干懸念要素だけど、体力も瞬発力もまだ俺の方が上だ。まあ、あ
くまで体力だけ見るならだけだ)

アリシアには行動読まれるし、なのは何か俺のいる場所が何となく分かるらしい。

(最悪な状況はアリシアかなのはがすずかと組む事だよなあ……)

三人で組まれたらあれだ。もう勝ち目は薄い。というか無いに等しい。

(二人だったらまだ何とかなる……。アリシアは俺の初期位置が分からなければ、俺の行動は読めない。なのはは分かると言ってもアウト。それに説明下手。すずかは俺のパターンを読めない)

アリシアとすずかが組んだ場合が一番厄介。でもそれは俺の居場所が一度でもばれてしまった場合だ。ばれなければまだ何とかなる。なのはとすずかも厄介と言えば厄介だけど、なのはが上手く伝えられない。うん、これは断定できる。

アリシアとなのはは……。相手にならないかな。待ち伏せされるのは厄介だけど、あの二人の運動神経なら気にする必要無いし、アリシアからは邪念が出てるから、待ち伏せにならない。

(うーむ……。アリシアとすずかが組んだと仮定して、アリシアにもすずかにも位置が知られない事が第一かな。不安要素はミッションクリアで貰えるらしいアイテム。地図が地図としての仕事しか発揮していない以上、GPS的な働きをさせる為のアイテムとかもある可能性があるし……。そもそもミッションって何回あるんだろう?)

やっぱり情報が少ない。分かっているのは数分前の佳奈のいた位置だけ。こっちから連絡しようとは思えない。

溜息をついた。どうにもマイナス要素が多い。こんな状態で後80分逃げ切れるのだろうか。

「まあ、逃げ切らないといけないんだけどさ」

一日自由はまあ、ともかくとして既成事実って何ぞ。

残り時間84分08秒

Side out

Side：アリシア

「とりあえず情報が少ない現状、浩樹は色々予測を立てて行動しようとする」

すずかに電話をしてから、私は歩いて移動しながら、ずっとすずかと話をしていた。

「今回みたいに絶対に勝ちにいきたい時は尚更。戦闘時はともかく、非戦闘時なら浩樹は色々考える。まあ、最後には情報の少なさを嘆くだらうけど」

『うん』

「多分浩樹にとって一番厄介な状況は、浩樹の行動を読める私、身体能力が五分のすずか。何となくでも居場所を特定してくる高町なのはの三人が組むこと。場所が分かれば私は浩樹の行動を読めるし、行動が読めればすずかなら捕まえられるからね」

『あんまり期待しないでね？』

謙虚なのか冗談なのか。私には少し分からない。

「すずかには勝てないって言ってたの浩樹本人だもん。まあ、それは置いておいて、現状で浩樹がやる事は、とりあえず私には居場所がばれないようにすること。ばれれば浩樹の負けは九割九分確定」

『残りの一分は？』

「言葉のあやだよ」

『……なんかアリシアちゃんとは仲良くなれそうな気がするよ』

「ありがと、すずか。とにかく、今の私達に必要な事は浩樹を見つめる事。それが私達の勝利条件。一度でも見つければ……、私たちがなら勝てる」

そう私がすずかに言った直後、『聞こえますか？』とミユの声がか聞こえて来た。

『最初のミッションが始まるよ。参加するしないは自由。ミッションの開始時間は残り75分の時点から。ミッションのステージはひー君の実家。たった一秒でも遅れたらミッションには参加できないから気をつけてね？』

そう言われて、私はデバイスを見下ろした。83分を切った所。今私がいる場所からだと言直ギリギリ。

「すずか。向かえそう？」

『私は余裕だよ。今から行けば、80分には着けると思う』

「私も向かうけど、間に合わないかもしれない。その時は私は浩樹を探すから、すずかは何とかアイテムをゲットして」

『了解。それじゃあ、後でね』

通話を切る。そして私は走り始めた。

残り時間 8分32秒

一周年特別企画 く追跡中 その2 (後書き)

ミッションは懲りずに募集。

ふつらじー入のふつおたなどもお待ちしています。

第七十話 A・S第十六話 〈侵食と困惑のヴォルケンリッター 前編〉

Side: 浩樹

??月??日 ??時??分

暗い。 凄く暗い。

沈んで行きそうなほど。 溺れてしまいそうなほど。 この感覚は……
一度だけあつた気がする。

(カヅキさんに体中を刺された時か)

何も無い虚無感と無いにもかかわらず、何かが失われて行く喪失感。
あの時はアルハがいた。 アルハがいて引き戻してくれたから、戻つてこれた。

(アルハ……。 アルハ?)

声は返ってこない。 届いていないのか。 そう思って、さらに大きな
声で呼びかけ、だけど声が返ってくる事はなかった。

(……ん?)

ふと存在していなかった体の感覚の一部が戻って来た。

(左腕?)

動かないはずの左腕。 その左腕が確かにあつた。 拳を開閉するとそ

の感覚があつて、肘を曲げると、やはりその感覚があつた。

それはまるで、俺の意識だけしかないこの空間の中で左腕から俺の体が構成されて行くようだった。

(ここは……)

何処だろうかと考察しようとする前に、俺の意識はその空間の中から消えて行った。

* * *

12月11日 午後03時36分

「はい。今日の分は終わり」

「今日は随分早いんやね。あつという間や」

「そこまで早くはないだろう。まあ、確かに早くはあるが」

日曜日。俺は約束通り八神家に来て治療をしていた。

そう。していた。過去形である。もう終わってしまったのだ。普段なら三時間以上かかるにもかかわらず、今日は一時間弱で済んでしまった。

(なんか不気味だな)

いい感じはしない。侵食に関しては望むところではあるが、まるで俺を取り込もうとするかの如く、俺がはやてに潜った直後に俺に向かつて伸びてきた鎖は、潜るのを止める為に扉からでて、わざわざ

ざ扉を跨いで俺を侵食せんと新たな鎖を巻き付けていた。

(……………解せない)

新たな侵食先として認識された。だが、それにしたってアクティブ過ぎる。これではまるで……………。

「俺のことを、取り込もうとしているみたいだ」

「ん？浩樹君、なんか言った？」

「……………いや。何でもない」

仮にそうだったとしても、他にやり方のない現状は、それすらも利用する気持ちでいかないといけない。

逃げるという選択肢はない。向こうから近付いてくるなら好都合。

そう考える。

「そう言えば浩樹君。ちゃんとご飯食べてる？」

「食べてるけど」

「嘘やね」

「……………」

何故ばれたし。

「浩樹君、少し頬がこけてるで？」

「マジ？」

頬を隠すように手で覆った。さらにはやては何かに気がついたのか、少し俺に近づぐ。

そして、スンスンと匂いをかいだ。ああ……………うん。分かっているけど、止めてほしい。

「少し臭うぞ？お風呂ちゃんと入ってる？」

「ああ……水浴びならしてる」

噴水で。正直この時期に外で水浴びとか自殺行為な気がしてるけど、他に浴びようがないからしょうがない。

「なんで、浩樹君がごはん食べてなかったり、お風呂に入ってたなかったりしてるん？」

「まあ、色々あるんだ。俺にも」

「……聞いても答えてくれへんのやる？」

「当然」

「……ハア。じゃあ聞かへんけど、せめてお風呂と夕飯位は食べてってや。服も洗濯せんとあかんし」

他には、と指を折って何かを数えて行くはやて。いや。えーとだな。

「はやてさん？」

「何や？」

「別に俺は入浴も食事も洗濯もどうでもいいんだが……」

「……あれや。治療費ってことにしといて？」

そう言って、はやてはニコリと笑った。

「お世話になりっぱなしってのも嫌やし。それぐらいならすぐや」

「すぐって……。面倒だろう」

「面倒やない。言ったやろ？お世話になりっぱなしなのは嫌なんや」

でも、と俺が食い下がろうとすると、言葉を遮る様に端末が鳴った。端末を取り出して画面を確認すると、『アースラ』の文字。

思考を切り替える。はやてに「ちよつと電話」と告げ、席を立ち外に出ると、端末を耳に当てた。

「もしもし?」

『あ、浩樹君!??』

「エイミーさん?どうかしましたか?」

『今、フェイトちゃんとヴォルケンリッターのシグナムが戦ってるんだけど、急いで援軍に向かってほしいんだ!』

「フェイトとシグナムが?」

『そうなんだよ!すぐに行けそう!??』

「……分かりました。今から向かいますんで、転送ポートの準備をお願いします」

『了解!』

端末を切り、ドアから家の中を覗き込んだ。

「悪いはやて!用事が出来たから、今日は帰る!」

「え!?ちよつ、浩樹君!??」

「また明日来るから、それで勘弁!それじゃあな!」

一方的にそう告げ、俺は海鳴の作戦本部になっているマンション目指して走り始めた。

S i d e o u t

S i d e : シグナム

何度目かになるデバイス同士の打ち合い。その直後、お互いに距離を開けた。

(此処に来て目に終えない攻撃が出てきた)

全くテストロッサといい高坂といい。若いにもかかわらず、強い魔導師が多い。未来のある彼らとこの先も切磋琢磨し、腕を磨ければと、最近思うときがある。

だかそれは、叶わぬ願いだ。主はやての為、この身にはなすべき事が……。

(ある……のか?)

以前なら違った。主はやてを闇の書の真の主にする。そうする事で主はやてを闇の書の侵食から救う。その目的の元で闇の書の蒐集を行っていた。

だが今は違う。高坂が居る。高坂が以前語った計画の一部とはいえ、確かに主はやての体は回復に向かっている。

高坂は計画を十割十全語ったわけではないから、全て理解している訳ではない。だからこそ本当に闇の書を蒐集する必要があるのかとも思ってしまう。

(闇の書完成後の大いなる力を狙って?)

本来なら有り得ないと一蹴出来る内容だが、高坂だったらもしかしたらとも思えてしまう。

(……結局結論は出ないか)

ならば今は高坂の言葉を信じて、闇の書の蒐集を。

そう考え、テストロッサに向かって突撃し、同じようにテストロッ

サも突撃しようとした直後、テストロッサの体を仮面の男の腕が貫いた。

足が止まる。テストロッサが微かな悲鳴を上げ、正気に叩き戻された。

「貴様！」

「……」

男は何も言わない。先程助けられた恩もあり、男に斬りかかろうと足に力を入れる。

そして斬る為に動こうとする私より早く、テストロッサが一際大きな悲鳴を上げ、男の手の内にテストロッサのリンカーコアが現れた。

「さあ、奪え」

Side out

Side: 浩樹

海鳴に存在するそこそこ高級マンションの一室。

現在ハラオウンの名義で借りられているその部屋は、ロストログリアである闇の書の捜査本部となっている。故に設備も一級品が揃っているし、バックヤード陣営もエイミーさんを筆頭に優秀の一言だからこそ。

「何で?どつして?」

全てのファイアウォールを突破。警報を鳴らす事無く端末を乗っ取り、無力化するなんて、本来なら不可能の筈だ。あいつを除けばではあるが。

(でもアリシアはあり得ない。こんな事するような奴じゃない)

だったら誰がと思考しそうになるのを無理矢理中断し、エイミーさんの横からコンソールに手を伸ばした。そして侵入者に対して、思いつく限りの排除方法を試していく。

(……駄目か)

かなりの実力の持ち主らしく、どんどん制圧されていく。完全に乗っ取られて、無力化されるのも時間の問題と言ったところだろうか。

(こうなったら自力で転移して行くしかないか)

『浩樹。今、魔法使おうと思ったでしょ』

『……まあ、お前に隠し事が出来るとも思っていないけどさ』

『ちよつと待つて。三、二、一』

「え？あれ？何で？」

アルハの言葉に合わせるように、エイミーさんが戸惑った声を上げる。どうしたのかと視線を送ると、無力化させられかけていた設備が復旧していた。

『アリシアか……』

『先手を打たせて貰っちゃいました』

『速攻で取り戻したのかよ。相変わらず未恐ろしいな』

『あ、因みにアリシアが早く帰って来ないと、後が怖いよって言うてたけど』

『俺の末の方が恐ろしいな』

「と、取りあえず浩樹君！いつでもいけるよ！」

「あ、はい！」

エイミイさんの言葉に応え、転送ポートに向けて歩き始めた。

正直片腕、魔法無しはかなり辛いけど、まあやるしかないよな。

Side out

Side: シグナム

この男……。

「どうした。早くしろ」

何時の間に現れた。それどころか、一瞬でテストロッサの背後にまでとって見せた。

「何者だ、貴様」

「私の正体は今関係無い筈だ」

確かに高坂と会う前なら迷わずテストロッサの魔力を蒐集しただろうが、今の私は主はやての回復の目処がたち、いくらか視界が開けていた。

「貴様の今までの行動は全て闇の書の完成を望むようだった。何故闇の書の完成を望む？」

「……」

「答えられないのか？なら、私はテストロッサの魔力は蒐集しない」
「いいのか？時間が無くなるぞ」

「主は確かに回復に向かつて、そうではない。高坂浩樹の方だ」何？」

「気づいていないのか？あいつは闇の書の主が変わって、闇の書の侵食を受けている。既に左腕は完全に動いていない。加えてお前達に蒐集された魔力量から見ても、今の高坂浩樹は意識を保って日常生活をおくるのがやっとの筈」

「な………に………？」

「分からないのか？お前達は高坂浩樹を闇の書の主の生け贄羊スケープゴートにしているんだ」

ガツンと頭を殴られた気がした。

高坂の作戦を聞いたとき、治療をするとは言っていたが、治療の具体的な方法を聞いていた訳ではなかった。聞いても答えなかったと言うのが正しいのだが、そんな捨て身の方法をとっているとは思っていないかった。

「あのままなら、間違いなく死ぬ。もし仮に高坂浩樹が死んだとすれば、闇の書の主はどう思うだろうか」

「………」

そうだ。高坂が死ねば主はやてが悲しむ。もしかしたら自分のせいだと、己を責めるかもしれない。

もし主はやてが悲しむ可能性があるのなら……高坂の言葉に関係無く、闇の書を完成させて、主はやてを真の主として侵食を止め、高坂が治療する必要が無いようにするべきでは？やることは変わらない。ただ以前のように積極的に集めるだけ。

気がつけば私の体は、テストロッサと仮面の男に近づき、闇の書を

掲げていた。

『蒐集』

闇の書の言葉と共にテストロッサから蒐集が始まり、テストロッサが苦悶の声を上げる。

暫く経ってギリギリ死なないレベルまで魔力を蒐集すると、闇の書を閉じた。仮面の男がテストロッサから手を引き抜き、崩れ落ちたテストロッサの体を慌てて支えた。

「それでいい」

視線をあげると、そんな言葉を残し、この場から立ち去ろうとした仮面の男。そしてそんな男を目掛けて、真上から奇襲を仕掛ける高坂の姿が見えた。

T o b e c o n t i n u e d

いよいよA・Sも後半戦。ごまだれです。

ようやくとA・S編に終わりが見えてきました。……まあ日付をつ
けなければもつと楽だったのに。

29日のふつらじはめでたく延期に。いや、だって、ねえ？

一周年の方は半年ぐらいかけてのんびり書くんた

此処まで読んで下さりありがとうございます。

では次回。ごまだれでした

(手応えとしては正直微妙……。でも確実にヒットはした)

ノーダメージという事はない筈。ここでのダメージの量で今後の戦い方が決まるから、なるべく多くダメージが入っていて欲しいなあと思いつながら、右手にマテリアル・ハイで投槍ランスを作っていく。しかし完成を待たず、粉塵の向こうから仮面の男がこちらに向かって飛び出してきた。

「ちっ!」

舌打ちをして、出来上がる前の投槍ランスを投げつける。牽制として投げたそれを、仮面の男は当然のように弾く。

その隙をついて距離を詰めながら、アルハの端末である腕輪についた黒猫のキーホルダーを握り締めて叫んだ。

「ステイコール!」

『Stand by ready・Setup』

ステイコールの起動音声と共に、黒猫のキーホルダーが銀のガントレットに代わり、腰にカートリッジシステムの着いたベルトが現れた。

「はああっ!」

飛びかかるように殴りかかった。それは止められるが、次手の左足は仮面を跳ね上げんと鞭のようにして動く。

「くっ!?!」

それすらも爪先が男の顎に突き刺さり、仮面を跳ね上げる寸前で防

がれる。

「まだまだあ！」

最後の一撃。残った右足の裏を顔面に叩きつけ、今度は仮面を粉碎せんとする。

「貰った！」

「この程度で！」

首だけを動かし、ギリギリで右足の蹴りすらも避けられ、そのまま大きく投げ飛ばされ、思い切り背中を叩きつけた。痛みに耐えながら慌てて体を起こしながら、息を整えつつ粉塵が晴れるのを待つ。

（らしくないな。全然らしくねえ）

普段なら粉塵に乗じて奇襲なりを仕掛けるだろう。そうでなくとも、ただ投げられず、レイズシュートの発射用の魔力球を設置するなり何かしら出来たはずだ。

それだけじゃない。さっきの仮面を狙った攻撃だって、三撃で止まらず、四撃、五撃とまだ攻撃できた。否。三撃であそこまで追いつめたのだ。五撃までいければ、間違い無く仮面を破壊できた。

（思ったより腕の影響も魔法の影響も大きい。色々考えを改める必要があるな）

万全時の六割程度だと思っていたが、四割にも満たないかもしれない。

（現状。連撃出来る回数の最多数は3〜4。手数で責めるのは明らか。

かに不利。なら、多少無茶でも)

柏手を打ち、パンツと乾いた音が鳴る。その直後、左腕のガントレットが消え、右腕のガントレットが腕全体を覆うように、巨大化し拘束具とも見える機械仕掛けの装甲のように変化した。装甲には三発のみの大型カートリッジ使用の為のシリンダーまで存在する。

『一撃必倒。その為に全てを捨てて、ただの一撃にのみ特化させた。この子の名前であるステイコールを体現しているフォーム』

ステイコール、ナックルフォーム。ミイクさんはそう言った。

(……よし)

具合を確かめてから頷き、粉塵が晴れるよりも早く動き始めた。一気に距離を詰め、飛びかかるように拳で一撃。

「いい感じ!」

何の工夫もない純粹な一撃。にもかかわらず、不完全な体で放つこととの出来た十分すぎる一撃に、思わずそう叫んだ。次いで、男の体を蹴り、自分から距離を開けた。

『アルハ。簡単な魔力強化ならいける?』

『え?うーん……一応調整はしたから、簡単なのなら何とかって感じかな。勝ちにいく気?』

『今まで負けるつもりで戦っていた事なんて一度もないぞ』
『だったね』

体に力が漲る。普段と違い作戦は必要無く、究極的に言えば理性も

必要無い。ただ本能の赴くままに動き、攻撃するだけである。

「行くぞ」

S i d e o u t

S i d e : ? ? ? ?

タタカッテイル。アノオトコガ。

スバラシイ。

ヨワツタカラダデ、ソレデモハカイヲノゾンデイル。

ショウタイフメイノイレギュラー。ソノコントンモハタシテセカイ
ヲオオワントシテイル。

ウツワ。アラタナウツワニシタイ。

ホシイ。ホシイホシイホシイホシイホシイホシイホシイホシイホシ
イホシイ。

カラダ。アタラシイカラダ。

ワレラヲトメヨウトスルカンセイモ。

タツタイチドデコワレテシマウゼイジャクナニクタイモ。

スベテヒツヨウナイ。

ヒツヨウナノハコワレナイカラダ。

ソノタメニ。

アノオトコノカラダヲ。ハカイトコントンヲナイハウスルカラダヲ。
ナントカ、テニイレタイ。

Side out

Side：浩樹

「又ウアアアア！」

『Load cartridge』

腰のシリンダーが動き、体に更なる力が漲る。そのまま、思い切り拳を地面に叩きつけた。

その衝撃で大量の砂が宙を舞い、この場にいる全員の視界を奪う。しかしそんな事お構いなしに、俺は動き始めた。

『Load EX cartridge』

ステイコール、ナックルフォームに着いている大型カートリッジの一発がロード。それにより、体を凶悪なほどの魔力の奔流が通るのを感じた。

その奔流を操作し、右腕の内にとどめる。より強く地面を蹴った。

自身の居場所がばれているのか否かは分からないが、お構いなしに地面すれすれを這うようにして走って行く。

頃あいを見て、舞い散る砂の中を、事前にアル八が見つけた仮面の男に真つ直ぐ突っ込んだ。向こうが俺を見つけているかは分からないから極力気配を隠すように。そして。

砂の中から飛び出した俺の拳と、砂の中で待ち構えていた男の拳が、お互いの顔に向かって振られたのは同時だった。

「っ!？」

同時に振ったにも拘らず。……否。同時に振ったからこそ、俺と仮面の男の間にあった、リーチの差という絶対的な差が俺の前に立ちはだかった。

結果的に男の拳の方が俺の眼前に早く迫り、舌打ちと共に拳の矛先を男の顔から腕へと変えた。拳を紙一重で回避しながら、その伸びきった腕に右の拳を叩きこむ。嫌な感触がデバイスを通し拳に響き、男の腕を叩き折った事が分かった。

「ッ!！」

痛みに慣れていないのか、声にならない悲鳴を上げて仮面の男が後退する。それを少し妙に思いながらも、追撃しようと地面を蹴ろうとして

ドサッ

衝撃が俺を襲った。ダメージらしいダメージは無い。にも拘らず、今、俺の眼前には何故か地面があった。

(……転んだ?)

ようやく衝撃の正体に合点がいった。どうやら地面を蹴ろうとしたら、足がもつれて転んだらしい。そのまま受け身を取ること無く、顔から地面に倒れたようだった。

冗談じゃない。慌てて立ち上がるのと両足と右腕に力を込めようとして、今度は別の痛みに襲われた。現在進行形で左腕を蝕んでいる侵食による麻痺の痛み。その痛みが左腕どころか左半身全体を覆わんとしている。

(な……が、はあっ……)

歯ぎしりをして、痛みを耐えながら立とうとするが、上手く体が動かない。頭の冷静な部分が勝手に解析を始め、転んだ原因や現状を勝手に把握していた。

(転んだ原因は左足の付け根から膝のあたりまで麻痺して動かなくなっただけから。)

そして現状。戦闘を始めてから急激に侵食が進行してやがる。まだぎりぎり心臓にはとどいてないが……。一両日中には左半身が完全に動かなくなってもおかしくないか。くそっ、なんでこんな時に)

心中で悪態をつきながら、まだ何とか動く右足と右腕。そして左足の膝から先を上手く使って立ち上がる。足場が砂地な事がこれほど不安だった事はない。安定せず、立っている事で精いっぱいだった。動けない俺をよそに、仮面の男が俺に向かってくる。避けようとしたが上手く踏ん張る事が出来ず、砂で若干滑り、接近している事に気が付いていたのに反撃も回避も防衛も出来ないまま、無防備だっ

た腹部に男のつま先が突き刺さり、そのままシグナムとフェイトがいる辺りまで蹴り飛ばされた。

片腕で何とか受け身を取ろうとするも上手くいかず、砂地を滑るようにしてシグナムと傍らまで移動させられた。

「高坂!?!」

「いつう……」。思いつきり蹴りやがって。 オフエンスアーマー 室素装甲が無ければ、確実に意識も持たせてかれてたな」

『シグナム。悪いんだが頼みがある』

口頭ではシグナムの声を無視し、しかし念話でシグナムに呼びかけた。

『この後逃げる時に、良かったら俺も連れて行ってくれないかな。なんだったら、海鳴市の適当な場所に捨てて行ってくても構わないからさ』

『……本気か？私に助けを求めなくても、今のお前の立場なら、管理局が』

『俺の体の状況は分かっているだろ？今、管理局について行ったら、はやての治療もままならん。あ、出来れば捨てて行く場所は海鳴海浜公園がいいなあ』

シグナムにそんな軽口を叩きながら、何とか立ち上がろうとする。ただやはりうまくいかず、数度失敗してから、マテリアル・ハイで適当に作った杖を使い、ようやく立ち上がった。

それから、さて、どうしたもんかなあと悩んでいると、「フェイトー!!!」と聞きなれた訳ではない、良く知った声が聞こえてきた。その言葉にシグナムと仮面の男もそれぞれ反応し、仮面の男が何処かへと飛び去っていく。

シグナムは声の主であるアルフを待つ。仮面の男と入れ違いに、地

面に降りたアルフはフェイトと俺。そしてシグナムを見つけた。

「フェイト！浩樹！」

「よう、アルフ。久し振り。あの時殴ってくれた恨みは未だに覚えているぞ」

「や、止めておくれよ。あの後、なのはが凄く怒って大変だったんだから」

何かを思い出し、ガクブルと震えるアルフを見て少し悪い事をしたかなあ、と罪悪感。

「それより、浩樹。フェイトはどうしたんだい？それに、なんでその女と一緒に」

「まあ、訳ありさね」

「テストロツサの使い魔か。すまない。私にはこれくらいしか出来なかった」

そう言えば、フェイトの魔力が少しだけ回復している事に気がついた。大方、俺と仮面の男が戦っている時に、いくらか自身の魔力を分け与えたのだろう。

シグナムはフェイトを地面に下ろすと、自分と俺の足もとに魔法陣を展開した。それを見て、アルフが驚く。

「お前！浩樹をどうするきだい！」

「どうもしないさ。少しこの男に用事があるだけだ」

「うーわー、アルフ助けてー」

文末に（棒）とつきそうなほど、大変棒読みの演技。演技というのもおこがましい感じた。現にシグナムは、「何をやっているんだこいつは」と残念な子を見るような眼になっている。俺も自覚してい

る。だがしかし。

「浩樹!？」

信じたらしく、大変慌てた様子のアルフ。再び凄い罪悪感。

「この、浩樹を返せ!」

「……いや、そもそも拘束をしている訳でもないのだが」
「……どうする浩樹?」

『自分でやっておいて何だが、正直面倒になつたな』

ガールと今にも嘔みつかんばかりのアルフを見て、俺は小さくため息をついた。

後々、ヴォルケンリッターと何かしらの繋がりがあつたと思われて、面倒な事態になるのが嫌だつたから、なんとなくやってしまったのは失敗だつたらしい。

『さつさと移動した方がいいな。下手をすればアルフ以外の人員も来るだろうし』

『そうだな。此処でお前が管理局に保護されれば、主はやての治療も出来ないだろうし』

『そついうこつたな』

実際の所、既にはやてにつながる扉は開けっ放しだから、どこだろうと基本的に関係なく治療が出来たりする訳だが。まあ、それにっいてはいざという時まで黙っている事にしている。

言う必要がある事でもないし、ある意味で俺の保険でもあるからだ。

『それじゃあ行くぞ。浩樹』

『ああ。悪いな』

シグナムとのそんなやりとりを最後に、俺は先ほどまで戦場と化していた無人世界から抜け出した。

* * *

12月12日 午後08時41分

「はあ〜」

久々の風呂だ。ここ暫く噴水で行水してただけだから、凄く癒される。……男の時はここまでじゃなかったんだがな。体が女になった影響も出ているんだろうか？

『浩樹君？私ので悪いんやけど、一応着替え置いておくで』

「ああ。悪い、はやて」

『別にええよ。それにしても以外やったわ。浩樹君がちゃんと帰って来た事もそうやけど、まさかシグナムと一緒にやったなんて』

「外で偶然鉢合わせてな。そのまま一緒に来ただけだよ」

俺は今、はやての家にいた。どうやら転送の途中で気を失ったらしく、そのままにしておくのも憚られたらしいシグナムが、此処まで運んでくれたようだ。目が覚めたら八神家にいた。

そしていつも通り（？）丸一日ぐっすり眠り続けて、ようやく目が覚めた俺は髪の毛まで砂で酷い事になっていた事もあって、はやてに風呂に入る様にと怒られて現状に至る訳だ。

風呂入るのなんて実に一週間ぶり位な気がする……。

『浩樹君、湯加減はどおや？』

「いい感じだ」

『ほんなら良かったわ。それじゃ、ごゆっくり、浩樹ちゃん』

「ちゃんはやめい！！」

どうやら眠っている時に服を脱がされたく、俺が女性の体になっ
ている事は既にはやてにばれていた。理由を聞かれ、とりあえず
魔法のせいだと誤魔化したのは記憶に新しい。

くすくすといった笑い声と共にはやてが去っていく気配を感じ、完
全に気配が消えてから、右腕で左腕から、胴体を通る様にして左足
までゆっくりと撫でる。

「麻痺が進行してる」

眠っている間にも侵食は続いていたらしい。左腕の痛みだけでなく、
左足の痛みや脇腹の辺りの痛み、そして心臓のあたりがズキズキと
痛む。

「痛みには慣れてるからいいが……。上手く動けない事は地味に辛
いな」

風呂に入るところか、服を脱ぐのも一苦労だった。歩くことすらま
まならず、それでも何とか誤魔化せたい。はやてにいらん
心配はかけたくない。

「……………」

目を閉じ、自身の中に潜って行く。

其処で見た体は、はやてにつながる扉から伸びた鎖が、左腕を起点

として左半身を覆い尽くそうとしていた。予想通りの光景とはいえ、見ていて気分のいい物でもない。

「なんか、違和感があるな？」

ぼそりと呟き、鎖の群れに対し、ハッキングを開始する。

「色の仕分け。仕分ける内容は鎖の仕事。今まで同様侵食している鎖は紫のまま。それ以外の鎖は一旦黒へ色を変更」

そうつぶやくと、鎖の一部の色が黒に変色して行った。思いのほか多い黒に変わる鎖の量を見て、啞然としてしまう。

「こんなに多いのかよ」

最終的に紫の鎖と半々程になった。どうやら夜天の書は侵食先以外で、俺に何かしらの意味を見つけたらしい。もしかしたら加速した侵食もそれが原因かもしれない。

「調べようにも調べられないが、まあ、何とかやってみよう」

ぼそりと呟き、俺は解析を始めた。

後から聞いた話だが、この一時間後。いくら待っても上がらない俺を心配して、はやてが風呂場を確認しに来たら、俺がゆでだこになっ
ていたらしい。

そしてそのさい、自分よりもわずかながらに胸が大きいらしかった俺の裸を見て、はやてが絶望に打ちひしがれたそうだ。

Q・彼は魔導師ですか？ A・いいえ、無謀系リアリストです。ごま
だれです。

最近ブンブンに連載している(していた?) 『ふしぎ通信 トイレ
の花子さん』にはまっています。これが意外と面白い。

元々ブンブンはライブオンというカードゲームの付録カードのみを
目的で買っていました。花子さんは単行本も買いました。三巻ま
でしか持っていない、というが、二巻が見つからないので、実質一
巻と三巻しか持っていないんですけどね！今日、書き終わったから、
今日買いに行くんだ。

とまあ、こんな感じに無駄話で時間を稼いでいますが、少しくらい
本編についてもふれましょう。

浩樹がまともに動けなくなったり、仮面の男の腕をブチ折ったり。
これからどうなるのか。作者ですら分からない。

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

では次回。ごまだれでした。

第七十二話 A・S第十八話 く片鱗と最愛のバックアップく(前書き)

一月以上放置。申し訳ない

第七十二話 A・S第十八話 〈片鱗と最愛のバックアップ〉

??月??日 ??時??分

また此処にいた。

(凄く、変な感じだ)

何も無いこの場所で、相も変わらず体の構築は止まらない。

当初左腕しか無かったにも関わらず、気がつけばぽっかりと心臓程の大きさの穴が開いた左半身がこの世界で構築され、残りは首と右半身になっていた。

(……どうなる?)

全て構築されてしまったら、俺はどうなる?

俺は俺のままなのか?それとも俺は俺でなくなるのか?

答えは出ない。

答えが出ない。

そうして、俺の意識はこの場所から消えていく。

* * *

12月18日 17時38分

「だあ……はあ……はあ……」

ベンチの一つに倒れ込むと、そのまま暫く横になっていた。息を何とか整え、うつぶせから仰向けになるも、やはり体は起こさない。

「クソツタレ……」

無意識の内にそんな悪態をついてしまう程に、俺は追い込まれていた。それだけ、思ったように体が動かないというのは辛かった。

「自分で決めたことだろう。何考えているんだ全く」

言い聞かせるようにそう呟き、溜め息を一つつく。少なくとも全く歩けない訳ではない。普段の倍なんてレベルではないほどの時間はかかったが自力で海鳴公園までは来れた。その過程で転びまくったせいでボロボロではあるけれど。

「とりあえず、拠点はそのままここだな。もうすぐ終わるし数食程度なら抜いても問題無い」

状況確認の意味を兼ねて、そんな事を呟きながら、俺は体を起こした。中途半端な姿勢だったことが災いし、そのままベンチから落ちる。まともに受け身を取れず、背中から地面に叩き付けられた。大した痛みは無いが、あまり見上げないようにしていた空を結果的に見上げる事になった。

久しぶりに空を見て、首を傾げてしまう。そして思わず唯一まともに動く右腕を、空へとかざした。当然の如く届く事のないその手は、

何を掴む事無く空を切った。

「……あれ？空ってこんなに高かったっけ？」

思わずそんな事を呟いていた。更に手を伸ばそうと立ち上がろうとして、足に力が入らず今度は前のめりに倒れた。

「くそっ」

その体勢のまま、出来得る限りの力を込め、地面を殴りつけた。何度も立ち上がるうとしては失敗し、その度に空が遠くなっていく気がする。心のどこかで、そんな自分をらしくないと感じながらも再び立ち上がるうとして失敗し、今度は後頭部を後ろにあったベンチに思い切りぶつける羽目になった。

「ぐおお……」

痛い。かなり痛い。肉体的には勿論のこと、精神的にもかなり来るものがあった。そして更に遠くなった気がする空を再び見上げる事になり、舌打ちを一つ。

「何でこんな目にあってる」

……あれ？

「どうして俺がこんな風に、地べたに這いつくばらないといけない
待て。誰だ？誰がしゃべっている？」

「何故俺が。何故俺なんだ。何故何故何故」

そう言いながらアリシアは俺の前に腰を下ろすと、俺の体を抱えるようにして起こし、そのまま地面へと座らせた。そして俺の右手を取ると、先程地面を殴りつけて幾らか付いた傷を見て今度は少し悲しそうな表情を浮かべ、その手に自身のハンカチを丁寧に巻き始めた。

「お前、どうして？」

「ミイユ・クライツにデバイスの位置情報を確認するプログラムを貰って。いつもなら確認してるだけなんだけど、今日は何か胸騒ぎがしたから。ごめんね、浩樹」

「何で謝るんだよ」

「浩樹の言いつけ破って、外に出ちゃったし、追いかけて来ちゃったから」

そう言いながらアリシアは俺の手にハンカチを巻き終わると、俺の頭に手を回しそのまま自分の方へと抱き寄せた。突然の事に唯一動く右手が少し反応したが、俺は特に抵抗する事無くそのままアリシアに抱きしめられた。

アリシアはとくに何も言わず。俺はアリシアへかける言葉が見つからず。無言の時間が過ぎてからようやく俺はアリシアへかけるべき言葉が見つかり、口を開いた。

「アリシア」

「……………」

アリシアは何も言わない。俺は気にせずそのまま言葉を続けた。

「骨が当たって痛い」

「……………」

ギューッ！！

「痛い、痛い、痛い！すいませんごめんなさい、照れ隠しだったんです！」

* * *

12月20日 12時26分

酷い体だ。自分に潜った先で、思わずそんな事を思った。

「殆ど動いてないな。もう」

見下ろす自分の体には、相変わらず二色の鎖が巻き付いていた。紫の鎖は左腕全体と左半身にも多少はと言った程度。対して黒の鎖は今や俺の体を全て覆わんとばかりに、俺の体を巻き取っていた。

「こうして見ると、あくまで魔力資質の蒐集はおまけに見えてくるな」

『確かに。最初はそうでもなかったようだけど。今は違う』

そう答えたのはアルハ。最近はアリシアや他の人に聞かれたくない話は、此処でするのが当たり前になった。

「鎖の仕事の解析は？」

『まだちょっと。ただ、浩樹のハッキングと似てる気がする』

「……悪い。引き続き、解析頼む」

『うん。了解』

アルハとの会話を打ち切り、はやてとの間にある門を通して彼女の方を見た。

体に巻き付いていた鎖はすっかり減り、夜天の書とのリンクの為の物だけになっていた。即ち、侵食はすっかり無くなり、後はリハビリさえすれば歩ける状態と言うことだ。

「第二段階は突破。此処まで大きな問題はない」

そう呟き、俺は浮上していった。

『……このままならまず間違いなく死ぬ。その状況が問題ないなんて良く言えるね、浩樹』

* * *

意識が表に戻ってきた。その瞬間、麻痺の痛みが体を襲った。

ほんの一瞬顔をしかめ、その後、何事もなかったように普段通りの顔に戻す。

「やっぱり動かない」

溜め息を一つつく。まさかこの歳で寝たきり生活になるとは思わなんだ。

ついでに言ひと。

「浩樹！ごはんだよー！」

アリシアに介護の様な物を受ける羽目になるとも思わなかった。まあ、食事を抜かなくて済むのは助かるけど。

「ん？……ああ」

「よいしょつと」

食事の乗ったトレイを手に部屋の中に入ってきたアリシアは、ベッド脇に置かれたテーブルにそれを置いた。その時点で考えが読め、再び溜め息を一つ。

「はい、あーん」

「自分で食べれる」

「前にそう言っただけだよな？」

「人間、一度の失敗でくじけちゃいけない！」

「その一度の失敗のせいでシーツ洗ったり色々大変だったから駄目。

はい、あーん」

「……あーん」

少し味が濃かった。

結局二日前のあの日。アリシアに見つかった俺は、アリシアと共にデイビット宅まで戻ってくる事になった。家に着いた時、デイビットは驚いた様子だったが、そのまま特に何も言う事無く部屋をまた使わせてくれている。

体調は相変わらず最悪だが、生活環境はいい事もあり、闇の書の浸食を俺の方へ向けるといふ作業ははかどって、無事に完了。第三段階へのシフトは明日からと言っ事になっている。

「ねえ、浩樹」

「ん？何だアリシア？」

食事を終え、特に何もすることのない気だるい時間。普段ならばや
ての治療をしている時間なのだが、小休止をしている現在、俺が帰
って来てから基本的に部屋に入り浸っているアリシアが、自身の端
末から俺の方へと視線を向けて来た。

「また歩けるようにはなるんだよね？」

「ああ」

何度目かになる質問。それに今まで同様の返事を返し、アリシアの
事を手招きした。それを見たアリシアが嬉しそうに此方に近づき、
ベッドに飛び乗ると、俺の膝のあたりに寝ころんだ。そんなアリシ
アの頭をゆっくりと丁寧に撫でる。
その様子はさながら犬や猫の様だった。

「心配するな。アリシア」

「うん。……ねえ、浩樹」

「今度はなんだ？」

「動けるようになったら、何がしたい？」

これは初めての質問だった。でもその質問にも間髪いれずに答える。

「空が飛びたい。思いつきり」

「私も一緒に行きたいよ」

「抱えて飛んでやるよ」

「うん」

そう言うと、疲れていたのか、アリシアはそのまま俺の膝の上で寝息をたてはじめた。慣れない家事で疲れているのだろうとそう思った俺は、自分のかけていた毛布を何とか頑張つてアリシアに掛け、静かにアリシアの頭を撫で続ける。寝息をたてるアリシアを見て、申し訳ないとは思いながらも俺は決意を固めた。

「アルハ」

「何？浩樹」

アリシアを起こさないように念話でアルハに声をかけると、直ぐにアルハからの返事があった。

「正直、アリシアを巻き込むのは気が引けるが、仕方が無い。バツクアップの大切さを俺に教えてのはアリシアだしな」

「それじゃあ？」

「アリシアには万が一の時の為の指示を残しておく。俺の体、麻痺だけじゃなくどうにも様子がおかしいからな」

「そうだね。それがいい。二日前のあれの原因もまだ分かって無い位だから」

「ああ。……音声入力。録音を。ついでにロックも掛けておこう。」

パスワードのヒントはアリシアになら分かる内容の物を」
「うん」

アルハの返答の後、自分の前に録音用のディスプレイが現れた。そこに自分の行っていた作戦を簡単な説明と、段階ごとの手段。そして自身に起こりうる最悪の可能性を何パターンか示したうえで、その際の指示を録音していく。

「……辛いな」

意外と体力が減っているらしく所々で休みを入れながら暫く経ち、漸く総てを終えたうえで、最後にアリシア宛のメッセージを入れ、最後にパスワードをセット。その為のヒントを考えてから、それも音声で入力した。

「頼むよ、アリシア」

眠るアリシアにそう声をかけ、最後に一撫でしてから俺も体を倒し、そのまま眠りについた。

第七十二話 A・S第十八話 〈片鱗と最愛のバックアップ〉（後書き）

アリシアがいると自然と筆が進む不思議。どうも、ごまだれです。

浩樹が妙なフラグを立てた気がしないでもないですが、きっと気のせいですよね。

しかしギャグもシリアスも何でもやれるアリシアさんは本当にハイスペックですね。そしてA・S編でも原作キャラが基本的に空気と
言う。どうしよう……。。

……実は他に書く物があるので、再び一月ほど放置する事になると
思います。合間合間で少しずつ書き進めては行きますが、そろそろ
最終決戦と言う事もあり、個人的には一気に書きたい……。まあ、
おいおいですね。いつも通り。

此処まで読んで下さりありがとうございました。

では次回。ごまだれでした。

第七十三話 A・S第十九話 く居場所と二つのワームス（前書き）

ワームスはwarmth。『ぬくもり』って意味です

第七十三話 A・S第十九話 く居場所と二つのワームスく

Side: 浩樹

??月??日 ??時??分

もうすぐ。

もうすぐ終わる。

この場所で始まった体の構成も、もはや右手と心臓と首から上を残すのみとなった。

最初は戸惑ってはいた物の、慣れてしまえば此処ほど居心地のいい場所も無いだろう。此処なら何も気にする必要も無く。ただこの闇の中に微睡み続けられる。何も無い、この場所で。私

(此処に居続けられたら……)

幸せかなと、らしくないことを思ってしまう。

なら願え。

どこからともなく、音が聞こえた。この場所ではそんなことは初めてであり、それが何者かの声だと気がつくのに、暫くかかってしまった。

願え。

再び声。誰も居ない静かなこの場所に、語りかけるようなその言葉は煩わしくもあった。

しかし声の主はそんな俺の心情など知らぬが如く、『願え』と命令口調の言葉を再び俺に投げかけた。

この場所を。お前が望めば、世界を此処と同じに。この闇に染めることが出来る。

……闇に？

かけられる言葉に少しだけ食いついた俺がいた。そんな俺に更なる言葉が投げかけられる。

そう。この暖かな闇に。

……それは……凄く魅力的かもな。

心から、そう思った。

12月21日 12時25分

「き！浩樹！」

「ん？」

誰かに呼ばれる声が聞こえ、それに伴い、意識が覚醒してきた。ぼやけていた視界がクリアになったとき、視界いっぱいにはアリシアの顔が広がっていた。

「近い」

「寝起きの挨拶はそうじゃないよ？」

「おはようアリシア」

「時間帯的にはこんにちわだけどね」

「え？」

アリシアの言葉に耳を疑い、首のみを動かして部屋にある時計を見た。時計の針は12時25分と俺が本来起きるなら有り得ないような時間を示している。

少しだけ持ち上げた首を枕の上に落とし、溜息をついた。特にやれる事もないから寝坊したという印象は無いが、それでもこの時間に起きたのは自分でも少し問題に思える。

それだけ、あの場所の居心地が良かったと言うことだろうか。

(……あの場所?)

自分が無意識に思った事に、内心で首を傾げた。「あの場所」とは果たしてどこだろうか。眠っていたし、そもそも動けないのだから別の場所に行くと言うことは当然無い。なら夢しかないのだが、此処暫くの夢同様、全くと言っていい程、夢の内容を覚えていない。なら今思った『あの場所』とは何処なのか。いくら考えても答えは出ない。

「浩樹にしては随分お寝坊さんだね？」

「まあ、休みだからな」

「そんなキャラでも無いのに。……辛い？」

「平気だ」

嘘をつく。麻痺の痛みとしてはもう慣れはしたが、決して平気という痛みではない。自由に動けないという精神的な辛さも苛立ちも。肉体的にも精神的にも平気と言うには程遠い。しかしアリシアにそれを言った所で、何も解決しない以上はアリシアの顔を伺いなが

ら、平然と嘘をつく。

(なんか、面倒だな)

嘘をつく事も、アリシアの顔を伺う事も。一人になりたかった。
あの場所ならそれが叶うのに。

「……アリシア」

「何？」

「悪いんだが、ちょっと体を起こすのを手伝ってくれ」

「え？うん。いいけど」

流石に首から上と右手首から先しか動かなくなった体では自由に動
けず、アリシアに支えられながら俺は体を起こした。

「次に俺の頭を持って」

「うん」

アリシアが俺の頭を掴む。

「思いつきり壁に叩きつける」

「うんってええ！？流石に無理だよ！？」

「やれ！一発でいい！」

「いくら浩樹の頼みでも、浩樹を傷つけるのは絶対に嫌！！」

そして俺の頭を庇うようにして胸に抱きしめた。

「そうじゃないと目が覚めない」

「覚めてるじゃん！必要なら、私が顔拭いてあげるし、他にも色々
するから！」

「顔を拭いて、髪を梳いてくれればそれでいい。後は食事を手伝ってもらえると助かる」

「言外にそれ以外するなって言われた気がする!?!」

「するな」

「普通に言われた!?!」

そんなやりとりをしながら、いつものようにアリシアから離れ軽く頭を撫でようとし、しかし何も出来ずただアリシアに抱きしめられているままだった。物足りなさを感じるのは、基本的に甘える側より甘えられる側だからだろうか。

(……たまにならいいかもな)

そんな事をちらつと考え、即座にその考えを自分の頭から追い出して、俺は目を閉じた。

少しだけ、この温もりを感じていたいと、そう思ったから。

同日 15時47分

起床から三時間。体の動く部分はやはり変わらず、俺は自分の体の筋肉がどの程度衰えているのか、調べてみた。

その散々な結果に溜息を一つつく。かれこれ三日はベッドに寝たきりだし、麻痺が始まって一週間以上経つだから仕方がないのだが。

「筋トレし直さないとな」

『元々同年代では無駄に筋肉ついてたんだし、いいんじゃない?』

「良くないからな」

何となく呟いた独り言に入ったアルハの言葉にツツコミをいれ、再び溜息。

「さて、準備はいいか？」

『私はいつでもいけるよ。後は浩樹の覚悟だけ』

「だったら問題無いな」

意識を切り替えアルハにそう尋ねると、アルハからは頼もしい返事が返ってくる。その言葉を聞き少しだけ笑い、自信の中に潜った。潜った先で自身の体を見下ろす。相も変わらず鎖の巻きついているその体は、鎖の巻きついている量以外、変化は無い。まあ、あくまでこの場所は俺のイメージの世界というか、俺の精神面や魔力関係を擬似的に視覚化した世界であるだけだから、当然と言えば当然なのだけだ。

「第三段階の確認だ。やる事は」

『夜天の魔導書の管制人格への接触』

「そして協力の要請。断られたら無理矢理だな」

『説得と言う選択肢は！？』

「え？」

『え！？』

素で首を傾げた俺にアルハが戸惑った声を上げる。そんなのんびりしている暇も無いから、それしかないと思っていたのだが。……説得。そうか、説得かあ。

「思いつかなかった」

『大分テンパってるね浩樹』

「ほっとけ」

一旦言葉を打ち切り、深呼吸を一つ。流石に緊張しているらしい。自分の唇を少し舐めてから、改めて覚悟を決める。

「行くな、アルハ」

『うん』

その身にBJを模した服を身につけ、頭部にヘッドセットをつける。そして鎖の一本に手を伸ばしてそれを掴むと、その鎖に沿って闇の書の方へと向かった。

Side out

Side:アリシア

(大丈夫かな、浩樹……)

不安にかられながらも、私はある場所を目指して、道を歩いていた。本当は外に出たら拙いんだけど、そこはデイビットに協力して貰って、今の私の姿は黒髪短髪に翡翠のような色の瞳で、『闇髪翠眼の電腦天使』……って、デイビットが言ってた！本当だよ！？

「……誰にいい訳してるんだろ？」

はあ、と溜息を一つつく。正直今から行かなければならない場所を考えると、行った事が無いにも拘らず、憂鬱な気分になる。やっぱり出かけないで浩樹の傍に居ればよかったと思いつつながら、私は冬の街を歩いて行く。普段はいくら街中と言っても其処まで明るく無い

筈なのに、何故か今日は光に溢れていた。少しだけ首をかしげてその理由を考えてから、ふと見たショーウィンドウの中に答えを見つけた。

「そっか。もうすぐクリスマスだ」

浩樹から以前聞いたこともあった。生憎ミッドにはクリスマスもどきはあってもクリスマス自体は無いから、私が体験する初めてのクリスマスなのだ。それがもうすぐそこまで迫っている。

浩樹からしてみればそれどころではないと一蹴する所なのかもしれないが、それでも少しくらいは息抜きの意を込めて、簡単なパーティー位していいと思う。個人的にはその頃には全部終わって、浩樹がいつもの浩樹に戻っていてくれればなお良し。

「帰ったら浩樹に相談してみようかな」

そう考えると、憂鬱な気分も少しは無くなり、楽になった。足取り軽くという訳ではないが、それでもさっきまでよりは速く、道を急ぐ。

「さてと。早く行こうかな」

浩樹の実家。高坂家へ。

S i d e o u t

S i d e . . 浩樹

鎖を伝い移動してしばらく。

「此処か？」

『みたいだね』

はやての中へ入った俺は更にその中を突き進み、新たな扉へぶち当たった。その扉に書かれているのは、以前資料として見た、闇の書に描かれた十字の装飾と同じ物。鎖もこの扉の向こうから伸びているようだった。

「……………」

『……………浩樹？どうかしたの？』

「ん？ああ……………」

その扉に近づいて、手で触れた。……………特に何かしらの反応は得られない。押しても引いても無駄で、それならばはやての中に侵入した時同様に、扉の鍵を作り始める。

「……………アルハ」

『何？』

「動くなよ」

一方的にそう告げ、鍵の生成に力を注ぐ。アルハは釈然としないような雰囲気醸し出しながらも、それを無視して鍵を生成して行く。やがて、はやての時の倍以上の時間をかけて、その手のうちに南京錠の鍵程度の大きさの鍵を作りあげた。

『浩樹？なんで動くななんて言ったの？』

ヘッドセットからアルハの声が聞こえる。鍵が出来上がったことを

確認すると、アルハがヘッドセット越しに話しかけてきた。アルハとしては別段そばにいる訳ではなく、寧ろこの世界自体にヘッドセットで話しかける以外に干渉できる訳でもないから、俺の言葉に疑問をもつたらしい。

俺としても普段ならそんなこと言つつもりはなく、今回そんな事を行ったのは理由があったからだ。

「嫌な予感がするから。危ないから巻き込まれるなよ」

『……ちよつと待った浩樹開けちゃ駄目開けないで開けるなあッ！
！……！』

アルハの言葉をすべて無視して、ガチャツと重い音を立てて鍵を開けた。

その直後……扉の向こうかあら大量の闇と鎖が飛びだし、俺の意識はそこで消えた。

Side out

Side:アルハ

『浩樹！ちよつと浩樹！！』

浩樹に呼びかける。自身の中に潜った浩樹には私は何もできないから、一方的に傍観し、彼の付けたヘッドセット越しにひたすら声をかけるしかない。

しかし、幾度呼びかけても答えは得られず、そして異変が始まった。

『……ッ!?なに……これ……?』

麻痺が一気に加速した。扉から溢れ出した鎖がただでさえ鎖で雁字搦めになっていている浩樹の体を覆って行く。覆っていないかった首から上、右手、そしてぽっかりと空いた心臓の上あたりの穴さえも覆ってしまい、その鎖は巨大な繭の様になって浩樹の体を覆い尽くした。

『待って……待ってよ……』

何がどうなっているんだろうか。私が最初に考えた計画ではこんな事は起こり得ないはずだ。

頭がついて行かず、茫然とする中、私自身の中に警報が鳴り響いた。その警報が意味する事は一つしかない。

『浩樹!?!』

慌てて今の浩樹の肉体を調べ、ある事に気がつく。

『……嘘?嘘だよ……浩樹?浩樹!?!』

心臓が、止まっていた。

S i d e o u t

N e x t S i d e : アリシア・テストロツサ

第七十三話 A・S第十九話 く居場所と二つのワームスく（後書き）

今回は後書き無し。

此処まで読んで下さりありがとうございます。ございました。

では次回。ごまだれでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7092m/>

魔法少女リリカルなのは ~とある封魔の歯車破壊~

2011年10月4日19時37分発行